

常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

——元割・聖人塚・中山新田Ⅰ——

1986

日本道路公団東京第一建設局

財団法人 千葉県文化財センター

常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

——^{もとわり}元割・^{しょうにんづか}聖人塚・^{なかやましんでん}中山新田Ⅰ——

1986

日本道路公団東京第一建設局

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県北部を横断する常磐自動車道は、首都圏と常総地域及び東北南部地域を結ぶ高速道路として建設され、既に、その機能を果すとともに国道6号線の飽和状態の緩和にも役立っています。

しかしながら、常磐自動車道の建設に伴い数多くの歴史遺産が消え去ることになるため、千葉県教育委員会は日本道路公団と度重なる協議を行い、やむなく事前に発掘調査を実施し記録保存の措置を講ずることになりました。

これにより、昭和52年10月から昭和57年9月までの期間に亘って、柏地区・流山地区の諸遺跡が発掘調査され、その後、調査成果の整理作業が続けられ、既に「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとして刊行されています。

此度、「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」として、柏市元割・中山新田Ⅰ・聖人塚遺跡の調査報告書が刊行される運びとなりました。これらの諸遺跡は、先土器時代・縄文時代・奈良、平安時代・江戸時代など様々な時代に生きた人々の家の跡や狩猟の跡、野馬囲いの土手や溝が発見されました。

この報告書が、学術研究やこの地域の歴史研究に役立ち、かつ、文化財保護思想の普及と涵養に役立つこと願ってやみません。

なお、発掘調査において厳しい状況のもとで作業していただいた柏市・流山市の地元の皆様、さらに整理作業に携わっていただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

また、本事業遂行に関して御協力・御指導をいただいた千葉県教育庁文化課・日本道路公団東京第一建設局・柏市教育委員会の皆様に御礼申し上げます。

昭和60年9月30日

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 山 本 孝 也

例 言

1. 本報告書は、日本道路公団による、常磐自動車建設工事に伴う、千葉県柏市元割（センターコード217-010）、^{しょうにんづか}聖人塚（217-009）、^{なかやましんでん}中山新田Ⅰ遺跡（217-005）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から、本報告書作成に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、千葉県教育庁文化課の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 発掘調査及び基礎整理は下記のとおり実施された。

昭和52年度 中山新田Ⅰ遺跡（500㎡）

調査部長 西野 元
班 長 岡川宏道
調査研究員 折原 繁

昭和54年度 聖人塚遺跡（43.600㎡）元割遺跡（11.300㎡）

調査部長 白石竹雄
部長補佐 山田友治
班 長 天野 努
調査研究員 田坂浩、佐久間豊（4月30日まで）、杉崎茂樹、岡田誠造、川島利道、田中豪、木川邦夫（5月1日より）

昭和55年度 中山新田Ⅰ遺跡（22.000㎡）

調査部長 白石竹雄
部長補佐 栗本佳弘
班 長 天野 努
調査研究員 石倉亮治、田中豪、郷堀英司

4. 報告書の作成は、調査部長 鈴木道之助、部長補佐 根本弘（昭和59年度）、同 岡川宏道（昭和60年度）の指導のもとに、班長 鈴木定明（昭和59年度）、主任調査研究員 橋本勝雄（同）、調査研究員 郷堀英司（同）、班長 矢戸三男（昭和60年度）、主任調査研究員 田村隆（同）、調査研究員 原田昌幸（同）が行ったが、田村、原田が専従した。
5. 本書の編集は田村隆が担当した。
6. 原稿執筆は矢戸三男、田村隆、郷堀英司、原田昌幸が共同して行った。最終的な文責は各文末に示した。
7. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関、諸氏の御指導、御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

日本道路公団東京第一建設局及び同柏工事事務所、千葉県教育庁文化課、柏市教育委員会、麻生敏隆、安齋正人、新井和之、石守晃、大竹憲昭、大塚達朗、小川静夫、織笠明子、織笠昭、加藤晋平、金山喜昭、栗島義明、斎藤幸恵、佐藤宏之、設楽博巳、柴田徹、志村哲、須藤隆司、大工原豊、高尾好之、建部純子、中野修秀、中山真治、西井幸雄、武藤康弘、村井実、山崎和巳（敬称略）

8. 第1図地形図には、国土地理院著作発行、2万5千分の1「流山」を使用している。
9. 本書に掲載した図面の方位は座標北とした。
10. 各遺跡の遺構番号は、発掘調査時に付された番号を踏襲したが、先土器時代の地点ブロック番号に関しては、全て新規にふり直した。
11. 第4部自然科学の項は、パリノ・サーヴェイ株式会社の委託研究である。
12. インスタントレタリング及びスクリーントンの用例は、下記に従うものとする。



焼土・繊維土器



カマド袖



ナイフ・ポイント



削器



影器



楔形石器



石斧



打割器



剝片・削片



石核



台石



ハンマーストーン



礫

本文目次

序 文	
例 言	
序 説	1
第1章 調査に至る経緯と調査方法	3
第2章 遺跡とその環境	4
A 自然的環境	4
B 考古学的環境	6
C 層序と文化層	9
第1部 先土器時代	11
第1章 元割遺跡	13
第2章 聖人塚遺跡	49
第3章 中山新田 I 遺跡	112
第2部 縄文時代	183
第1章 元割遺跡	185
A 縄文土器	185
B 縄文時代の石器	185
第2章 聖人塚遺跡	186
第1節 遺構・遺物の概要	186
A 遺構	195
(1) 炉穴	195
(2) 竪穴住居跡・竪穴状遺構	197
(3) 土坑	200
(4) 埋甕土坑	203
B 出土遺物：土器	227
(1) 炉穴出土土器	227
(2) 竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土器	228
(3) 土坑出土土器	229
(4) 埋甕土坑出土土器	229
(5) 遺構外出土の土器	249
(6) 特殊な土器及び土製品	264
C 出土遺物：石器	270

第2節 聖人塚遺跡の動態	291
第3章 中山新田I遺跡	292
第1節 遺構・遺物の概要	292
A 遺構	299
(1) 炉穴、焼土	299
(2) 竪穴住居跡・竪穴状遺構	301
(3) 土坑	303
B 出土遺物：土器	324
(1) 炉穴出土土器	324
(2) 竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土器	324
(3) 土坑出土土器	327
(4) 遺構外出土の土器	360
(5) 特殊な土器及び土製品	375
C 出土遺物：石器	390
第2節 中山新田I遺跡の動態	392
第3部 歴史時代	417
第4部 自然科学	427
第1章 中山新田I遺跡の花粉分析	429
A 試料	429
B 分析方法	429
C 分析結果及び考察	429
第2章 中山新田I遺跡の鉱物分析	434
A 試料	434
B 分析方法	434
C 分析結果	434
D 考察	436
まとめ	439
A 先土器時代	441
(1) 編年	441
(2) 諸遺跡の動態	444
B 縄文時代	445
(1) 中期集落の構造と動態	445

(2) 阿玉台式前半期の「有段式竪穴」と、覆土に多量の焼土層を有する住居跡……	445
(3) 中期前半の土器群……	446

目 次

1. 緒言	1	1. 緒言	1
2. 調査の経緯	2	2. 調査の経緯	2
3. 調査地概況	3	3. 調査地概況	3
4. 調査の目的	4	4. 調査の目的	4
5. 調査の方法	5	5. 調査の方法	5
6. 調査の結果	6	6. 調査の結果	6
7. 調査の結論	7	7. 調査の結論	7
8. 参考文献	8	8. 参考文献	8
9. 謝辞	9	9. 謝辞	9
10. 索引	10	10. 索引	10
11. 図表目録	11	11. 図表目録	11
12. 補遺	12	12. 補遺	12
13. 附録	13	13. 附録	13
14. 参考文献	14	14. 参考文献	14
15. 謝辞	15	15. 謝辞	15
16. 索引	16	16. 索引	16
17. 図表目録	17	17. 図表目録	17
18. 補遺	18	18. 補遺	18
19. 附録	19	19. 附録	19
20. 参考文献	20	20. 参考文献	20
21. 謝辞	21	21. 謝辞	21
22. 索引	22	22. 索引	22
23. 図表目録	23	23. 図表目録	23
24. 補遺	24	24. 補遺	24
25. 附録	25	25. 附録	25
26. 参考文献	26	26. 参考文献	26
27. 謝辞	27	27. 謝辞	27
28. 索引	28	28. 索引	28
29. 図表目録	29	29. 図表目録	29
30. 補遺	30	30. 補遺	30
31. 附録	31	31. 附録	31
32. 参考文献	32	32. 参考文献	32
33. 謝辞	33	33. 謝辞	33
34. 索引	34	34. 索引	34
35. 図表目録	35	35. 図表目録	35
36. 補遺	36	36. 補遺	36
37. 附録	37	37. 附録	37
38. 参考文献	38	38. 参考文献	38
39. 謝辞	39	39. 謝辞	39
40. 索引	40	40. 索引	40
41. 図表目録	41	41. 図表目録	41
42. 補遺	42	42. 補遺	42
43. 附録	43	43. 附録	43
44. 参考文献	44	44. 参考文献	44
45. 謝辞	45	45. 謝辞	45
46. 索引	46	46. 索引	46
47. 図表目録	47	47. 図表目録	47
48. 補遺	48	48. 補遺	48
49. 附録	49	49. 附録	49
50. 参考文献	50	50. 参考文献	50
51. 謝辞	51	51. 謝辞	51
52. 索引	52	52. 索引	52
53. 図表目録	53	53. 図表目録	53
54. 補遺	54	54. 補遺	54
55. 附録	55	55. 附録	55
56. 参考文献	56	56. 参考文献	56
57. 謝辞	57	57. 謝辞	57
58. 索引	58	58. 索引	58
59. 図表目録	59	59. 図表目録	59
60. 補遺	60	60. 補遺	60
61. 附録	61	61. 附録	61
62. 参考文献	62	62. 参考文献	62
63. 謝辞	63	63. 謝辞	63
64. 索引	64	64. 索引	64
65. 図表目録	65	65. 図表目録	65
66. 補遺	66	66. 補遺	66
67. 附録	67	67. 附録	67
68. 参考文献	68	68. 参考文献	68
69. 謝辞	69	69. 謝辞	69
70. 索引	70	70. 索引	70
71. 図表目録	71	71. 図表目録	71
72. 補遺	72	72. 補遺	72
73. 附録	73	73. 附録	73
74. 参考文献	74	74. 参考文献	74
75. 謝辞	75	75. 謝辞	75
76. 索引	76	76. 索引	76
77. 図表目録	77	77. 図表目録	77
78. 補遺	78	78. 補遺	78
79. 附録	79	79. 附録	79
80. 参考文献	80	80. 参考文献	80
81. 謝辞	81	81. 謝辞	81
82. 索引	82	82. 索引	82
83. 図表目録	83	83. 図表目録	83
84. 補遺	84	84. 補遺	84
85. 附録	85	85. 附録	85
86. 参考文献	86	86. 参考文献	86
87. 謝辞	87	87. 謝辞	87
88. 索引	88	88. 索引	88
89. 図表目録	89	89. 図表目録	89
90. 補遺	90	90. 補遺	90
91. 附録	91	91. 附録	91
92. 参考文献	92	92. 参考文献	92
93. 謝辞	93	93. 謝辞	93
94. 索引	94	94. 索引	94
95. 図表目録	95	95. 図表目録	95
96. 補遺	96	96. 補遺	96
97. 附録	97	97. 附録	97
98. 参考文献	98	98. 参考文献	98
99. 謝辞	99	99. 謝辞	99
100. 索引	100	100. 索引	100

挿 図 目 次

序説

- 第1図 遺跡の位置
- 第2図 報告書所収3遺跡の立地と調査範囲

第1部

元割遺跡

- 第3図 元割遺跡先土器全体図
- 第4図 No.1地点遺物出土状況
- 第5図 No.1地点石器(1)
- 第6図 No.1地点石器(2)
- 第7図 No.1地点石器(3)
- 第8図 No.1地点石器(4)
- 第9図 No.2地点遺物出土状況
- 第10図 No.2地点母岩別分布・接合関係(1)
- 第11図 No.2地点母岩別分布・接合関係(2)
- 第12図 No.2地点母岩別分布・接合関係(3)
- 第13図 No.2地点母岩別分布・接合関係(4)
- 第14図 No.2地点石器(1)
- 第15図 No.2地点石器(2)
- 第16図 No.2地点石器(3)
- 第17図 No.2地点石器(4)
- 第18図 No.2地点石器(5)
- 第19図 No.2地点接合資料(1)
- 第20図 No.2地点接合資料(2)
- 第21図 No.2地点接合資料(3)
- 第22図 No.2地点接合資料(4)
- 第23図 No.2地点接合資料(5)
- 第24図 No.2地点接合資料(6)
- 第25図 No.2地点接合資料(7)
- 第26図 No.2地点接合資料(8)
- 第27図 No.2地点接合資料(9)
- 第28図 No.2地点接合資料(10)
- 第29図 No.2地点接合資料(11)
- 第30図 No.2地点接合資料(12)
- 第31図 No.3地点遺物出土状況
- 第32図 No.4地点遺物出土状況
- 第33図 No.5地点遺物出土状況
- 第34図 No.3・No.4・No.5地点出土石器
- 第35図 No.4地点接合資料

聖人塚遺跡

- 第36図 聖人塚遺跡先土器全体図
- 第37図 表面採集の石器(1)
- 第38図 表面採集の石器(2)
- 第39図 E12グリッド採集の石器
- 第40図 第2ブロック遺物出土状況
- 第41図 第2ブロック母岩別分布・接合関係(1)
- 第42図 第2ブロック母岩別分布・接合関係(2)
- 第43図 第2ブロック石器(1)

- 第44図 第2ブロック石器(2)
- 第45図 第2ブロック石器(3)
- 第46図 第3・第4ブロック遺物出土状況
- 第47図 第4ブロック石器
- 第48図 第5ブロック遺物出土状況
- 第49図 第5ブロック(L)・第6ブロック(F)石器
- 第50図 第6・第7ブロック遺物出土状況
- 第51図 第8ブロック
- 第52図 第11ブロック遺物出土状況(L)母岩別分布・接合関係(1)(F)
- 第53図 第11ブロック母岩別分布・接合関係(2)
- 第54図 第11ブロック石器(1)
- 第55図 第11ブロック石器(2)
- 第56図 第10・第11・第14ブロック石器
- 第57図 第12・第13ブロック遺物出土状況
- 第58図 第12・第13ブロック母岩別分布・接合関係
- 第59図 第12・第13ブロック石器
- 第60図 第12ブロック接合資料(1)
- 第61図 第12ブロック接合資料(2)
- 第62図 第12ブロック接合資料(3)
- 第63図 第12ブロック接合資料(4)
- 第64図 第14ブロック遺物出土状況(L)・母岩別分布・接合関係(1)(F)
- 第65図 第14ブロック母岩別分布・接合関係(2)
- 第66図 第6・第15ブロック遺物出土状況
- 第67図 第15ブロック石器
- 第68図 第16ブロック遺物出土状況(L)・石器(F)
- 第69図 第17ブロック遺物出土状況
- 第70図 第17ブロック母岩別分布・接合関係
- 第71図 第17ブロック石器(1)
- 第72図 第17ブロック石器(2)
- 第73図 第17ブロック石器(3)
- 第74図 第17ブロック石器(4)
- 第75図 第17ブロック接合資料(1)
- 第76図 第17ブロック接合資料(2)
- 第77図 第17ブロック接合資料(3)
- 第78図 第18ブロック遺物出土状況
- 第79図 第19・第20ブロック遺物出土状況
- 第80図 第9・第21ブロック遺物出土状況
- 第81図 第18(1)・第19(2~5)ブロック石器
- 第82図 第20(1~5)・第21(6,7)ブロック石器
- 第83図 第21ブロック石器
- 第84図 第22ブロック遺物出土状況(L)・石器(F)

中山新田I遺跡

- 第85図 中山新田I遺跡先土器全体図
- 第86図 No.1地点遺物出土状況

第186図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(0)
 第187図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(1)
 第188図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(2)
 第189図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(3)
 第190図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(4)
 第191図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(5)土坑出土土器(1)
 第192図 土坑出土土器(2)
 第193図 早期前半の土器(1)
 第194図 早期前半の土器(2)早期後半の土器(1)
 第195図 早期後半の土器(2)
 第196図 早期後半の土器(3)前期前半の土器
 第197図 前期後半の土器(1)
 第198図 前期後半の土器(2)
 第199図 中期前半の土器(1)
 第200図 中期前半の土器(2)
 第201図 中期前半の土器(3)
 第202図 中期前半の土器(4)
 第203図 中期前半の土器(5)・中期後半の土器
 第204図 中期後半の土器～晩期の土器
 第205図 特殊な土器・土製品
 第206図 土錘(1)遺構出土
 第207図 土錘(2)
 第208図 土錘(3)
 第209図 土錘(4)
 第210図 土製円板・有孔円板
 第211図 縄文時代石器分布(1)
 第212図 縄文時代石器分布(2)
 第213図 石器(1)
 第214図 石器(2)
 第215図 石器(3)
 第216図 石器(4)
 第217図 石器(5)
 第218図 石器(6)
 第219図 石器(7)
 第220図 石器(8)
 第221図 石器(9)
 第222図 石器(10)
 第223図 石器(11)
 第224図 石器(12)
 第225図 石器(13)
 第226図 石器(14)
 第227図 石器(15)
 第228図 石器(16)
 第229図 石器(17)

中山新田 I 遺跡

第230図 中山新田 I 遺跡出土縄文土器時期別数量比
 第231図 中山新田 I 遺跡全体図(縄文以降)
 第232図 中山新田 I 遺跡遺構時期別布図
 第233図 中山新田 I 遺跡グリッド別出土遺物分布図(1)

第234図 中山新田 I 遺跡グリッド別出土遺物分布図(2)
 第235図 中山新田 I 遺跡グリッド別出土遺物分布図(3)
 第236図 中山新田 I 遺跡グリッド別出土遺物分布図(4)
 第237図 016・018・019・炉穴
 第238図 021・022・024・025炉穴
 第239図 028・038・043・047・051炉穴
 第240図 053・054・062炉穴
 第241図 076・078～080炉穴・042焼土
 第242図 005竪穴状遺構・012住居跡
 第243図 029・030竪穴状遺構
 第244図 035・037竪穴状遺構・036土坑
 第245図 039・040竪穴状遺構
 第246図 041竪穴状遺構・052住居跡
 第247図 068竪穴住居跡・087竪穴状遺構
 第248図 081住居跡
 第249図 090・091住居跡
 第250図 096・097住居跡
 第251図 004・015・034・046・050土坑
 第252図 056・058・059・061・064・069・070土坑
 第253図 074・082・084・086土坑
 第254図 092・094・095土坑
 第255図 炉穴出土土器(1)
 第256図 炉穴出土土器(2)
 第257図 炉穴出土土器(3)
 第258図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(1)
 第259図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(2)
 第260図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(3)
 第261図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(4)
 第262図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(5)
 第263図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(6)
 第264図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(7)
 第265図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(8)
 第266図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(9)
 第267図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(10)
 第268図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(11)
 第269図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(12)
 第270図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(13)
 第271図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(14)
 第272図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(15)
 第273図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(16)
 第274図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(17)
 第275図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(18)
 第276図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(19)
 第277図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(20)
 第278図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(21)
 第279図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(22)
 第280図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(23)
 第281図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(24)

第282図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(5)
第283図 土坑出土土器(1)
第284図 土坑出土土器(2)
第285図 土坑出土土器(3)
第286図 土坑出土土器(4)
第287図 土坑出土土器(5)
第288図 早期前半の土器(1)
第289図 早期前半の土器(2)
第290図 早期前半の土器(3)
第291図 早期前半の土器(4)早期後半の土器(1)
第292図 早期後半の土器(2)
第293図 早期後半の土器(3)
第294図 前期前半の土器(1)
第295図 前期前半の土器(2)前期後半の土器(1)
第296図 前期後半の土器(2)
第297図 中期前半の土器
第298図 中期後半の土器～晩期の土器
第299図 特殊な土器・土製品
第300図 土鍾(1)遺構出土
第301図 土鍾(2)
第302図 土鍾(3)
第303図 土鍾(4)
第304図 土鍾(5)
第305図 土鍾(6)
第306図 土鍾(7)
第307図 土鍾(8)
第308図 土鍾(9)
第309図 土鍾(10)
第310図 土製円板(1)遺構出土
第311図 土製円板(2)
第312図 土製円板(3)
第313図 土製円板(4)有孔円板
第314図 縄文時代石器分布(1)
第315図 縄文時代石器分布(2)
第316図 石器(1)
第317図 石器(2)
第318図 石器(3)
第319図 石器(4)
第320図 石器(5)
第321図 石器(6)
第322図 石器(7)
第323図 石器(8)
第324図 石器(9)
第325図 石器(10)
第326図 石器(11)
第327図 石器(12)
第328図 石器(13)
第329図 石器(14)
第330図 石器(15)
第331図 石器(16)
第332図 石器(17)
第333図 石器(18)

第334図 石器(19)
第335図 石器(20)
第336図 石器(21)
第337図 石器(22)

第3部

元割遺跡

第338図 元割遺跡の馬土手
第339図 元割遺跡馬土手土層断面

聖人塚遺跡

第340図 001・002住居跡
第341図 002住居跡出土土器
第342図 003・004住居跡
第343図 003・004住居跡出土土器

中山新田I遺跡

第344図 093住居跡

第4部

第345図 花粉分析の工程
第346図 中山新田I遺跡・重鉍物・花粉分析結果

図 版 目 次

元割遺跡

- PL. 1 先土器No 1 地点
PL. 2 先土器No 2 地点、先土器No 5 地点
PL. 3 馬土手
PL. 4 馬土手
PL. 5 馬土手
PL. 6 先土器時代石器
PL. 7 先土器時代石器
PL. 8 先土器時代石器
PL. 9 先土器時代石器
PL. 10 先土器時代石器
PL. 11 先土器時代石器
PL. 12 先土器時代石器
PL. 13 先土器時代石器
PL. 14 先土器時代石器
PL. 15 先土器時代石器
PL. 16 先土器時代石器

聖人塚遺跡

- PL. 17 遺跡
PL. 18 先土器試堀 先土器No 2 ブロック
PL. 19 先土器No12、No13ブロック 先土器No17
ブロック
PL. 20 先土器No17ブロック調査状況 先土器
No18ブロック
PL. 21 018、023
PL. 22 121、125
PL. 23 126、135
PL. 24 136、005
PL. 25 006、007
PL. 26 008、009
PL. 27 010、011
PL. 28 012、013
PL. 29 013、014
PL. 30 013、014、041
PL. 31 045、049
PL. 32 061、084
PL. 33 124、130
PL. 34 144、150
PL. 35 162、040
PL. 36 042、063、091、092
PL. 37 076、077
PL. 38 085、118
PL. 39 119、145
PL. 40 151、152
PL. 41 153、154
PL. 42 155、156
PL. 43 調査風景
PL. 44 先土器時代石器
PL. 45 先土器時代石器

- PL. 46 先土器時代石器
PL. 47 先土器時代石器
PL. 48 先土器時代石器
PL. 49 先土器時代石器
PL. 50 先土器時代石器
PL. 51 先土器時代石器
PL. 52 縄文土器
PL. 53 縄文土器
PL. 54 縄文土器
PL. 55 縄文土器
PL. 56 縄文土器
PL. 57 縄文土器
PL. 58 縄文土器
PL. 59 縄文土器
PL. 60 縄文土器
PL. 61 001、002
PL. 62 003、004

中山新田 I 遺跡

- PL. 63 遺跡、土層
PL. 64 先土器No 1 地点 先土器No 2 地点
PL. 65 先土器No 3 地点 先土器No 8 地点
PL. 66 016、022
PL. 67 025、027
PL. 68 028、038
PL. 69 053、062
PL. 70 076、078
PL. 71 005、012
PL. 72 029、030
PL. 73 035、037
PL. 74 639、040
PL. 75 041、052
PL. 76 081
PL. 77 081、087
PL. 78 090、091
PL. 79 096
PL. 80 097
PL. 81 004、015、050
PL. 82 054、056
PL. 83 058、064
PL. 84 064、069
PL. 85 059、070、084
PL. 86 086、092
PL. 87 094、095
PL. 88 093、馬土手
PL. 89 先土器時代石器
PL. 90 先土器時代石器
PL. 91 先土器時代石器
PL. 92 先土器時代石器
PL. 93 先土器時代石器

P L. 94	先土器時代石器
P L. 95	先土器時代石器
P L. 96	先土器時代石器
P L. 97	先土器時代石器
P L. 98	先土器時代石器
P L. 99	先土器時代石器
P L. 100	先土器時代石器
P L. 101	先土器時代石器
P L. 102	先土器時代石器
P L. 103	先土器時代石器
P L. 104	縄文土器
P L. 105	縄文土器
P L. 106	縄文土器

P L. 107	縄文土器
P L. 108	縄文土器
P L. 109	縄文土器
P L. 110	縄文土器
P L. 111	縄文土器
P L. 112	縄文土器
P L. 113	縄文土器
P L. 114	縄文土器
P L. 115	縄文土器
P L. 116	縄文土器
P L. 117	遺物包含層 調査風景
P L. 118	花粉化石

表 目 次

第1表	元割遺跡石器集計表
第2表	聖人塚遺跡石器集計表
第3表	聖人塚遺跡遺構別石器組成
第4表	中山新田 I 遺跡遺構別石器組成
第5表	中山新田 I 遺跡分析試料一覽

序

說

第1章 調査に至る経緯と調査方法

今回報告する中山新田 I・元割・聖人塚遺跡は、昭和52年度～昭和55年度に亘って発掘調査を実施したものである。

常磐自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に至る経緯は、既に刊行されている I～IIIの報告書において詳述されているので本報告書では触れないが、柏インターチェンジ部分に位置する聖人塚遺跡等は、常磐道柏地区の調査開始時点では調査対象に入っておらず工事に伴って遺構・遺物が発見され、遺跡の所在が明らかになったものである。その後、紆余曲折はあったものの関係機関の努力のもとに調査が実施された。

各遺跡の調査年月日・面積は、以下のとおりである。

中山新田 I 遺跡 柏市十余二572他

昭和53年 1月9日～昭和53年 1月27日

500m²

昭和55年 4月1日～昭和56年 1月12日

22000m²及び馬土手1000m²

元割遺跡 柏市青田新田飛地字元割212他

昭和54年 4月2日～昭和55年 2月29日

11300m²

聖人塚遺跡 柏市大青田字聖人塚694他

昭和54年 4月14日～昭和55年 3月31日

43600m²

これら諸遺跡の調査方法は、公共座標（第IX系）に沿ってグリッドを設定し（大グリッド、小グリッド）、一定の密度で確認調査を実施し遺構・遺物の有無・分布・密度等を把握するとともに、一部を深く掘り下げ先土器時代文化層の有無について確認を実施した。その後、遺構あるいは遺物の所在する範囲を掘り下げてゆく方法を用いた。 (矢戸)

第2章 遺跡とその環境

A. 自然的環境

成田層群と呼称される最終氷期における内湾性堆積層を基盤とする下総台地は、千葉県柏市付近で、東を利根川に、西を江戸川によって浸食され、急激にその幅員を狭めるようになる。このために、台地中央部より西北に長く鳥嘴状の半島部を形成することになるが、これから報告しようとする3つの遺跡は、この半島状の部分のつけねに近く、そのほぼ中央に位置している。因みに、遺跡周辺より利根川までの距離は約2.5km、江戸川へは約3kmとなっている（第1図）。

ここで第2図を参照すると、鹿角状の枝分れを見せる中央の谷沿いに、元割、聖人塚、中山新田Ⅰの3遺跡が東西に連続している。聖人塚遺跡の対岸は、既に報告をはたした中山新田Ⅱ、同Ⅲ遺跡がひろがっているから、支谷に沿った濃密な遺跡の分布を読みとることができる。この支谷を、仮に、大青田支谷と呼ぶことにする。

この大青田支谷は、その谷底部の標高は、遺跡近傍において12～13mであり、台地と平坦面上のそれがほぼ17m前後であるから、台地と支谷との比高は最大でも5mであり、緩やかな斜面によって区分されている。大青田支谷には、さらに細い沢が幾筋か認められるが、それらの沢を形成する湧水点のうち2箇所が遺跡内に含まれている。換言すれば、元割、聖人塚、中山新田Ⅰ3遺跡を視覚的に分つものとして、湧泉より北流する2本の沢筋が存在すると言ってもよいだろう。

一方、この大青田支谷は、遺跡付近よりやや北に流路を転じ、流山市東深井周辺で、船戸支谷に合流して利根川に注ぐことになる。これは、現在の利根運河の流路に相当している。

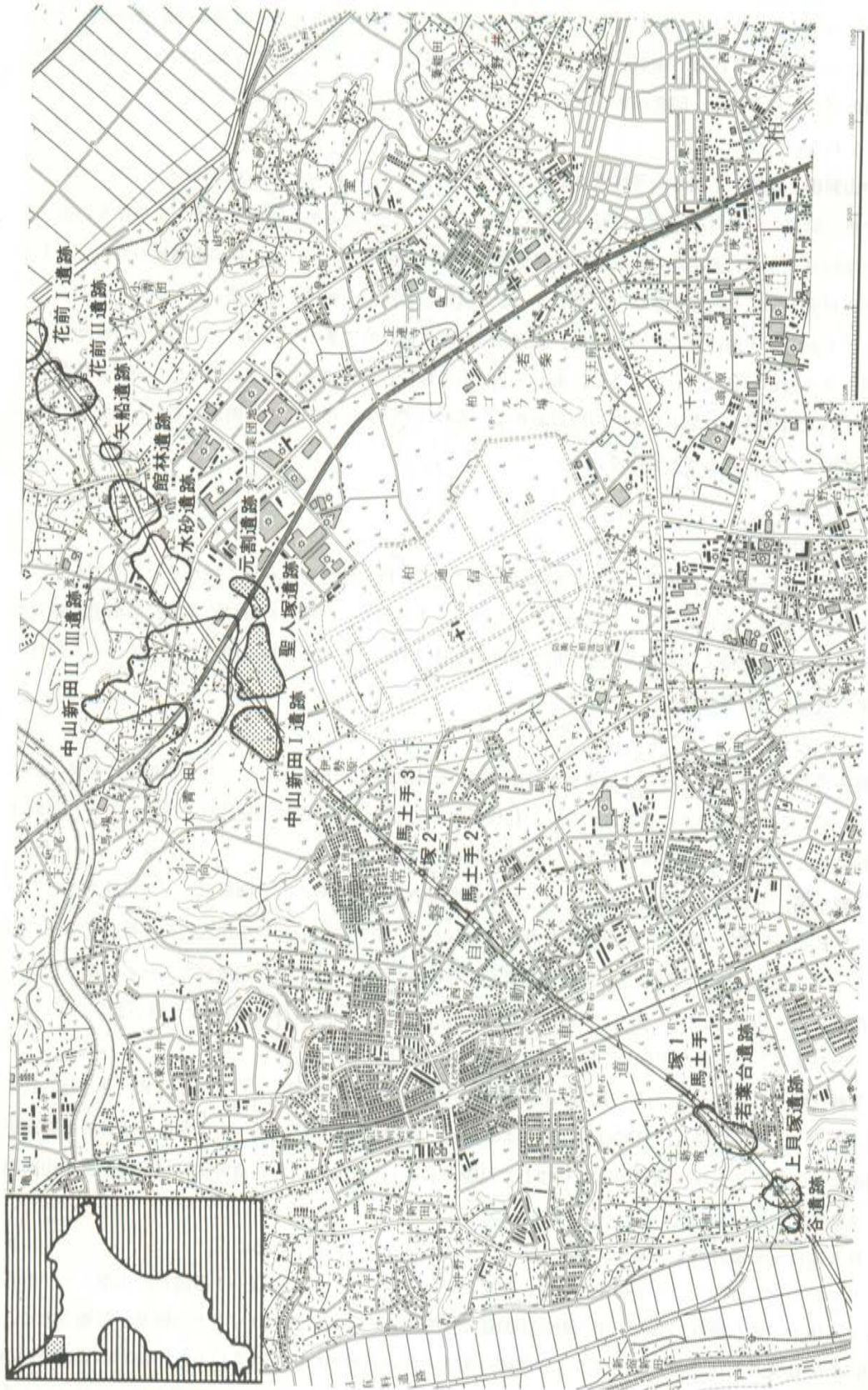
このように、遺跡の周辺を巨視的に見ると、本報告書所収の3遺跡は、大青田支谷に北面する台地上に、沢筋を距てて相接するという様相を呈しているが、個々の遺跡にもう少し接近して、地形の状況を観察しておこう。

元割遺跡 近世馬土手の調査が主眼であったため、遺跡の面的なひろがりに関しては、必らずしも十分な情報が得られていない。一般的に縄文時代の遺構、遺物は稀薄であるが、支谷最奥部の谷頭を取り囲むように先土器時代のブロックが散在している。現在、国道16号線が遺跡を分断し、支谷北側を谷沿いに走っているが、おそらく遺跡もこれに従うような状態で中山新田Ⅱ、同Ⅲ遺跡に陸続するものと推定される。

聖人塚遺跡 元割遺跡と中山新田Ⅰ遺跡の中間に位置し、両遺跡とは共に肢谷によって分離され、谷頭部で連続している。遺跡の範囲は東西400m南北150mに及ぶと見られるが、今回の調査と引き続き造成工事により主要部分は消滅したと推定される。

遺跡をのせていた台地は、東西に長いが、台地西側に、幅30m、長さ150mに及ぶ埋没谷が南北方向に一条あり、地形的に変化をみせるとともに、人類活動にも何らかの影響を与えたものと考えられる。縄文期の遺構の大半は、この埋没谷の周辺に位置しているが、谷の東側平坦面上の分布は稀薄である。しかし、遺物包含層はこの稀薄な領域にも確実に形成されており、占地集団による空間利用の多面性を示唆している。

一方、先土器時代の遺物集中域は、ほぼ2つの地点に群在する傾向が認められる。ひとつは埋没谷東



第1図 遺跡の位置

側の緩斜面部が支谷に張り出す地点で、III層を主体とするブロック群があり、他は元割遺跡寄りの支谷西側の平坦面にありIV層～VIII層にかけてのブロックが集中している。一般的な傾向として、後者に古い段階のブロックが多く、前者が新しいが、谷の形成と、それに伴う植生変化がその背景となっているのかもしれない。

中山新田 I 遺跡 本遺跡の発掘調査範囲は、インターチェンジ進入部を含めた本線部分であったため、遺跡推定範囲の約半分を南北に細長く掘削したことになり、元割遺跡と同様、遺跡の全体像を把握するには制約が大きい。遺跡は東西を支谷に開析された舌状の台地であり、縄文期の遺構は谷沿いに、あるいは平坦面上に広く散在する状況を呈している。遺物包含層も全域に密度が濃い。

ところが、先土器時代のブロックは、調査区南西部に偏在的に集中していた。この部分は現地形のコンターラインから判読されるように、南から北に入る埋没谷の東側緩斜面部に相当している。両側を谷に刻まれた馬背状の台地上を生活の拠点としているわけで、先に指摘した谷頭部立地型とは、また異った形態の立地類型であると評価される。

B. 考古学的環境

大青田支谷をめぐる諸遺跡の考古学的環境に関しては、既に報告書 I～IIIで触れたところであり、ここで改めて概説する必要はないと思われる。しかし、本報告が、柏地区における常磐自動車道関連の最終報告書となる性格上、本報告でとり扱う遺跡の主体である、先土器、縄文時代に関してのみ、調査の成果を概括しておきたい。

(1) 先土器時代

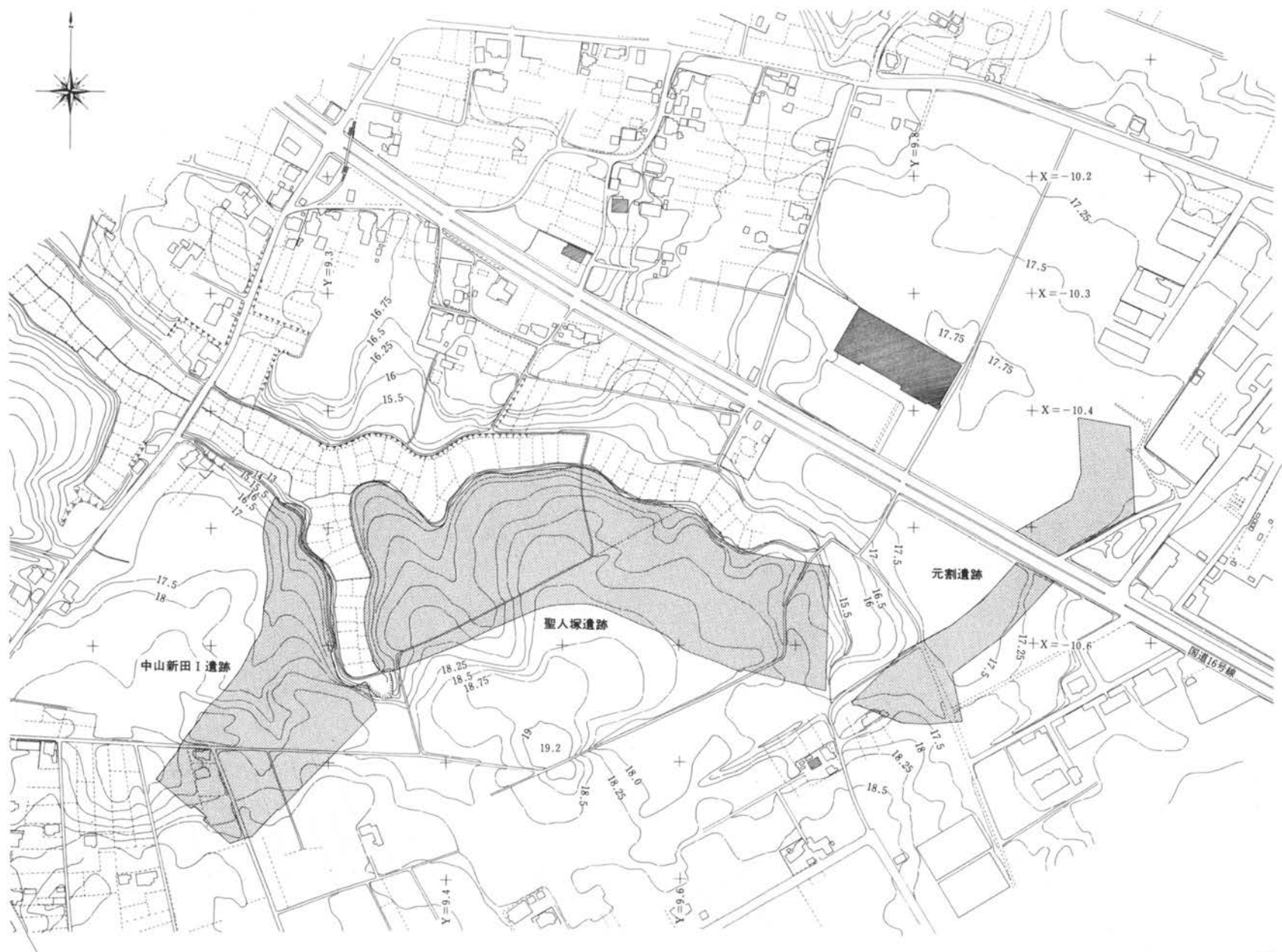
既報告の9遺跡のほとんどから資料が検出され、従来比較的知見の乏しかった東葛地区の基準的資料となっている。時期的にも多岐にわたり、10枚以上の文化層に細分される見通しを得ているが、詳細は別稿に譲り、本書では時期区分に則して概要を記しておく。

下総 I 期 中山新田 II 遺跡第11ユニットが本期唯一の調査例であろう。VIII層上半を産出層準としている。玄武岩の円礫を分断した部厚い素材剥片の一端から、やや幅広の剥片を連続的に剝離している。石器としては、剥片尾部に交叉した刻面を有する類彫器(報文66-2)、剥片側縁に鋸歯状の刃部を作出した削器(62-10)、剥片の一端を尖らせた石錐(66)など、本期における典型的な石器が含まれている。石刃及びナイフ形石器が欠如していることも通例のとおりである。

下総 II 期 II a 期としては、中山新田 II 遺跡 1A、1B、1C、2、3、4、7、8、9、18、20の諸ユニット、水砂遺跡 A、B ブロックよりまとまった資料が得られている。中山新田 II 遺跡の石器産出層準には問題があるが、VII層中位よりは上でVI層よりは下となろう。水砂遺跡はVI層であり、中山新田 II 遺跡第6ユニットに近い。

II b 期は矢船遺跡第1～第4、第6、第7、第10ブロックに代表される。

II c 期の内容は例によって複雑であり、簡単に分りそうもない。花前 II-I 遺跡には小型ナイフ形石器を主体とする石器群があり、東内野型尖頭器を保有する水砂遺跡 D ブロックとの関連が問題である。中山新田 II 遺跡第16ユニットからも水砂遺跡と関連の深い石器が検出されている。中山新田 II 遺跡第16ユニットは、ナイフ形石器を含まず、側削器を主体的に含む石器群であるが、所謂大平山元技法による



第2図 報告書所収3遺跡の立地と調査範囲

石槍削片が含まれている。産出層準はIV、V層上面付近とされ、水砂例に近く、花前II-i遺跡よりは下層に位置するばかりか、東内野型尖頭器の層位としても深く、IIb期へ遡及する可能性さへ示唆している。

下総III期 今までのところ、本期に帰属する資料は断片的にしか得られていない。III a期の資料は特に乏しく、今回の調査においても該期のブロックは未検出のまま終わったが、聖人塚遺跡からは頁岩製の荒屋型彫器が1点採取されている(第37図13)。県内においては、佐倉市木戸場遺跡に次いで2番目の発見例となる。なお、木戸場例は札滑型細石核と共に、多数の彫器、削器を伴っている。

(2) 縄文時代

先土器時代と同様に、やはりほとんどの遺跡から遺物が採集されている。時期的には草創期後半井草1式から晩期荒海式に及ぶが、集落形成の開始されるのは、黒浜式の段階である。

花前I遺跡では、黒浜期の住居址が9基検出された。大半の住居内にはアサリ、ハマグリ、マガキ、シオフキ等を主体とする貝殻の廃棄が行なわれているが、魚類遺体がほとんど皆無であり、貝類採集に偏重した採集活動が窺われる。同遺跡では後続する浮島期の住居址も2基あるが、貝層を形成せず、その間に自然環境に何らかの変動が生じた可能性が考えられている。前期後半の集落としては、**花前II-2遺跡**も挙げられる。住居址1基、小竪穴3基が調査をされているが、住居址は諸磯a期のものと言われている。

中期初頭に至ると、**水砂遺跡**が重要な位置を占めている。東関東で待望されていた五領ヶ台式がまともな検出され、編年のヒアタスを埋めるとともに、阿玉台I b式を出す住居址3基の検出は重要であり、貉沢式と阿玉台式との関連に就いても若干の知見を加えるところとなった。後続する**中山新田II遺跡**からも阿玉台期の住居址9基、竪穴状遺構1基、土壇10基が調査され、阿玉台期における住居形態の変化が跡づけられている。これから報告する聖人塚遺跡や中山新田I遺跡は、大青田支谷における中期前半の集落としては、前記の水砂遺跡や中山新田II遺跡とも密接な関連をもつものであり、総合的な理解を目指さねばならないだろう。

中期後半以降は、堀之内期の住居址が**花前I遺跡**で2基、**花前II-2遺跡**で1基検出されているが、一般的に遺跡数、遺物量共に減少傾向をたどるようになる。

C. 層序と文化層

遺跡周辺の関東ローム層を中心とする土層の概要は、北総地域における層相変化と良く対応し、また、既に報告書I~IIIで詳述されているので、本書を理解する上で必要最少限度に就き解説しておきたい。なお、関東ローム層に関する自然科学的研究も実施されており、その成果を第4部に収録したので、是非とも参照されたい。

(1) 表土層

I層とII層である。I層は現在の表土層であり、場所によっては耕作土層ともなっている。II層はローム層との漸移層と言われている。暗褐色を呈しているが、色調によってa~c3枚に分離されている場合もある。この場合はI層を2枚に分けて、上部をI層(表土攪乱層)、下部をII a層(暗褐色土層)とし、II層も2分して、上部をII b層(新期テフラ)、下部をII c層(暗褐色土層)とするが、必ずしも

統一的に用いられているわけではないし、統一することも不可能である。

新期テフラに関しては、弥生中期以降のテフラであると理解していたが、最近、当センター調査研究員渡辺修一の教示によって、縄文後期以前にもう1枚テフラの存在を知った。この点に就いては、同小高春雄からも指摘を受けており、現在検討中である。

(2) 関東ローム層

橋本による矢船遺跡の土層解説が、本地域における一般的なテフラ記載の方法であるので、それを準用した。以下の記載は全くそれに一致する。

III層はソフトローム。IV層以下がハードローム層にあたる。V層第1黒色帯の存在が不明瞭であり、IV層とV層とは分離しない場合がある。VI層はATを含む黄褐色硬質ローム、VII層は第2黒色帯、VIII層は立川ローム層最下層ととらえられる層である。

各遺跡とも上記の分層に従っているが、聖人塚遺跡ではV層が確認されており、中山新田I遺跡の場合、IV、V、VI層は一括して把握されるなど、近接した遺跡間でも較差が大きい。遺物はこれらの各層から発見されているが、特にIV層とVII層とからはまとまった資料が得られている。各遺跡の石器産出層準は以下のとおりである。

元割遺跡	II層、IV層、VII層	
聖人塚遺跡	III層、IV層、VI層、VII層、VIII層	
中山新田I遺跡	VII層	(田村)

第1部 先土器時代

第1章 元割遺跡

元割遺跡には石器の集中する地点が5箇所ある。第1表に各地点の石器組成を示した。これらの地点は、遺物の産出層準をもとにして、大別3文化層に分離される。

第1文化層 No.1地点 (III b期)

第2文化層 No.2、No.3地点 (II b期)

第3文化層 No.4、No.5地点 (II a期)

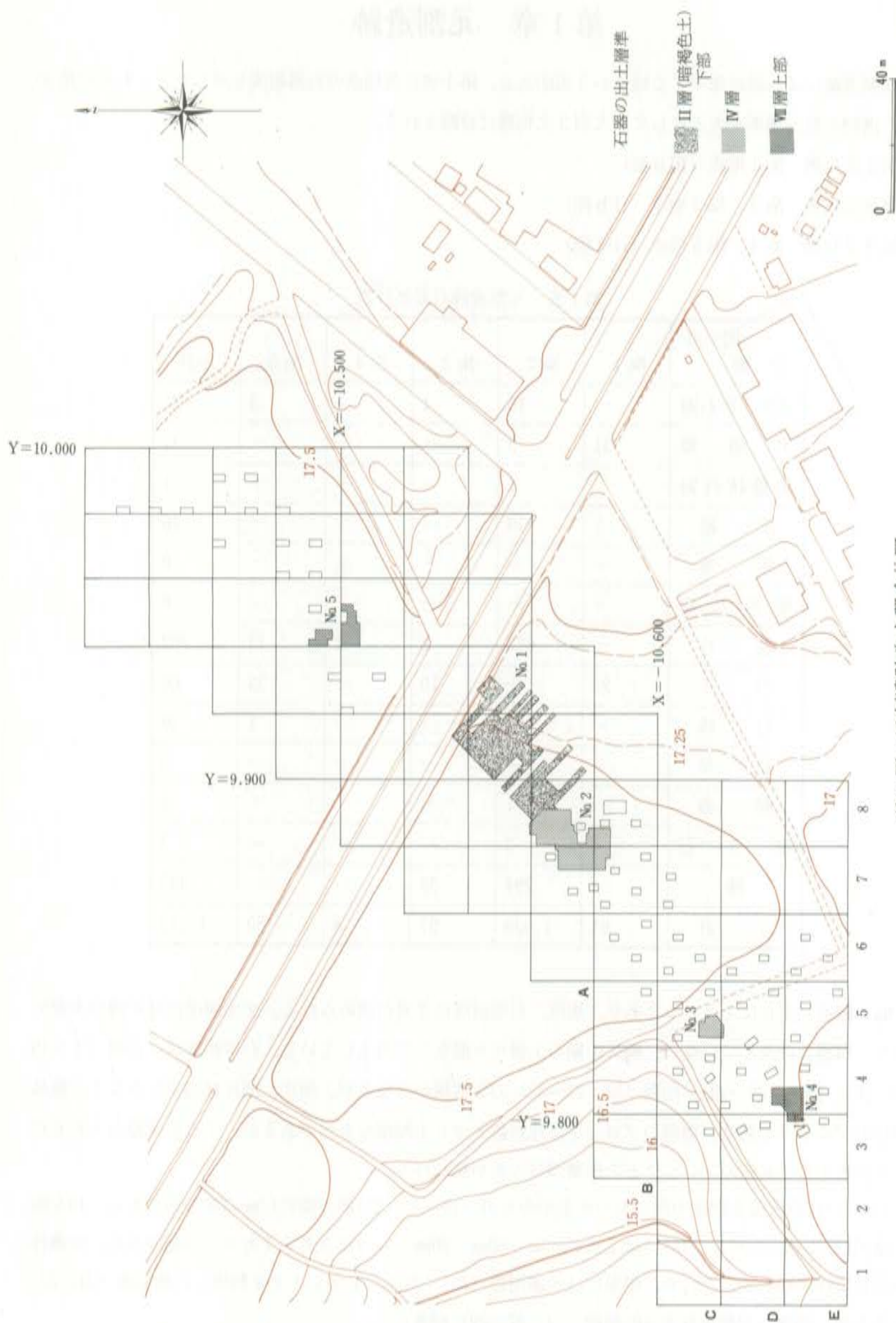
第1表 元割遺跡石器集計表

地点 分類	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	小計
ナイフ形石器	—	16	1	1	3	21
尖頭器	31	3	—	—	—	34
角錐状石器	—	1	—	—	—	1
削器	7	19	—	—	—	26
彫器	—	—	—	—	—	0
楔形石器	—	—	—	—	—	0
剥片	—	674	8	7	13	702
削片	23	—	10	—	33	66
石核	—	28	—	—	1	29
石斧	—	—	—	—	—	0
礫器	—	1	—	—	—	1
敲き石	—	3	—	—	—	3
礫	—	294	38	—	—	332
小計	61	1,039	57	8	50	1,215

No.1地点 南北に2ブロックあり、規模、石器組成に差異が認められる。産出層準はII c層の下部であり、III層には及んでいない。縄文中期の土器片と混在して出土している。石器組成は、石槍（1～19、25、26）、植刃（20～23）、削器（24、27～32）の3器種からなるが、剥片、削片は23点しかなく、製品優位のブロックである。南側のブロックは総点数8点と小規模なものであるが、7点の削器のうち6点までが集中し、北側のブロックとの作業内容の差が窺われる。

石槍は(1)最大幅を胴部中央にもつ木葉形のもの（19）と、(2)最大幅約15mmの柳葉形のもの（19を除く諸例）とに2分される。(2)には全長が50mm、60mm、70mmといった3者のまとまりが認められ、企画性の強い製作過程が予測される。削器には尖頭削器（30）、ポイントフレイクを利用した側削器（31、32）もあるが、部厚い刃部を有する凹削器（24、27～29）が著しい。

石材には、石槍、植刃と削器との間に歴然とした差異があり、機能と石質との相関があるのかもしれない。



第3図 元割遺跡先土器全体図

・石槍・植刃

粘板岩14個体 (2、10、11、12、13、14、15、16、19、20、21、22、23、25)

チャート4個体 (3、4、5、18)

玄武岩3個体 (6、17、26)

砂岩3個体 (1、8、9)

頁岩1個体 (7)

・削器

頁岩5個体 (24、27、28、29、31)

チャート2個体 (30、32)

No.2地点 石器の集中ブロック5、礫の集中ブロック3、合計8ブロックから構成されている。III層からIV層にかけて出土している例が多いが、本来的にはIV層に含まれよう。ブロックの分布は、第9図に示したが、第1ブロックの密度は特に稠密であり、第2～第4ブロックは疎となる。第1ブロックにはさらに2箇所の分布核があり、1a、1bの2ブロックに細分される。3つの礫群は、第1ブロックに重複する礫群1、第3ブロックに重複する礫群2、第4ブロックに重複する礫群3に分けて考えることができるが、礫群2の集中度が特に高い。

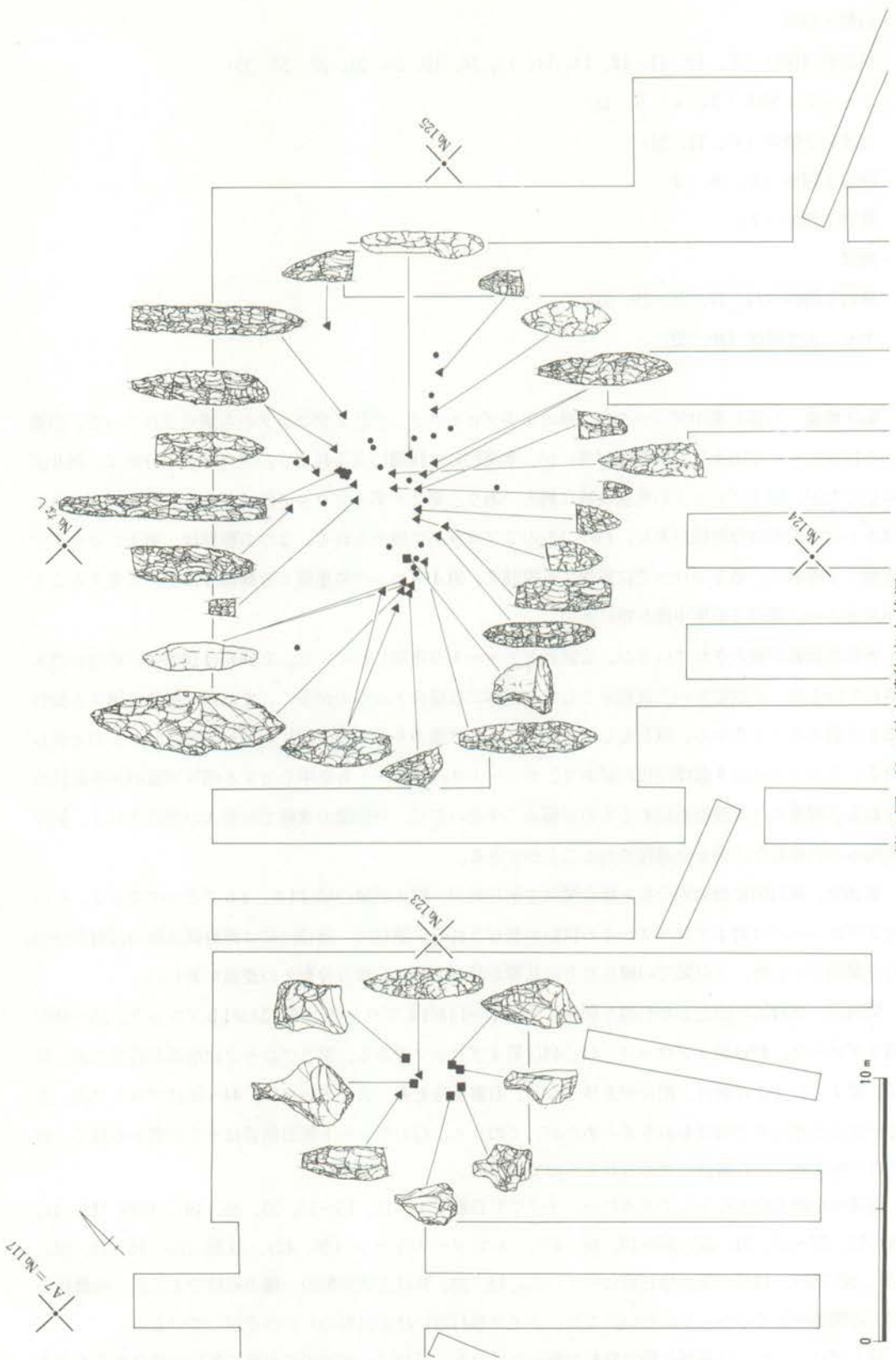
多数の母岩が搬入されているが、玄武岩とチャートが多用されている。玄武岩は16個体の母岩が搬入されているが、玄武岩a～玄武岩eとした5個体には接合するものが多く、また同一個体に属する資料数も多数あるところから、原石もしくは原石に近い状態からの一連の剥片剥離が実施されたものと見られる。チャートには8個体の母岩があり、チャートa、チャートbを中心とする個体別資料が多数認められる。両者には原礫面を留めるものが極めて少ないので、分割礫の状態での搬入が想定される。剥片剥離から石器製作に至る全過程を辿ることができる。

第10図、第11図に母岩別分布と接合関係を示したが、剥片剥離の場合は1a、1bブロックであり、その他3ブロックには第1ブロックからの供給が想定される。第12図、第13図には礫群構成礫の母岩別分布、接合関係を示した。3群間での礫片共有の状態が読みとれ、石器の分布との差異が著しい。

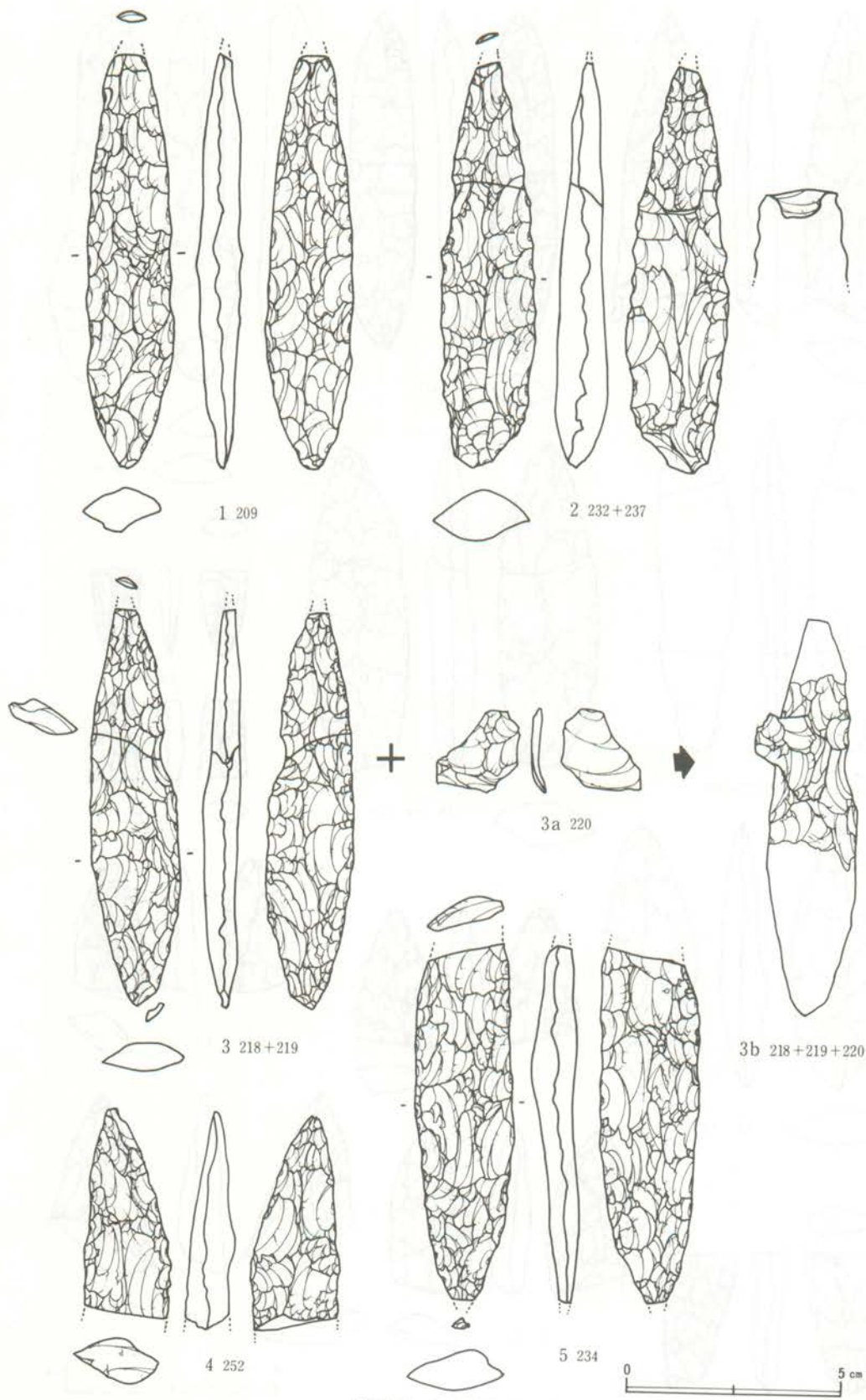
第14図～第17図に出土した石器を図示した。1～14が1aブロック、15～34が1bブロック、35～40が第2ブロック、42は第3ブロック、41、43は第4ブロックである。第2ブロックに削器が目立つが、第3、第4ブロックは剥片、削片が主体となり、石器をほとんど含んでいない。44～50はブロック外、あるいは出土地点の不明なものをまとめたが、このうち、47のチャート製凹削器はその形態から見て、おそらくNo.1地点の石器群に含まれるものであろう。

石器の分類を簡単に示しておきたい。ナイフ形石器 (1～11、15～18、35、45、46)、削器 (13、14、20～22、27～29、31、32、36～40、48、49)、ハンマーストーン (26、42)、石核 (25、31、33、34、43)。錐 (50)。19は尖頭器様石器に似ている。12、23、30は玄武岩製の一種の石核であるが、角錐状石器との関連があるのかもしれない。なお、ナイフ形石器には切出形のもが卓越している。

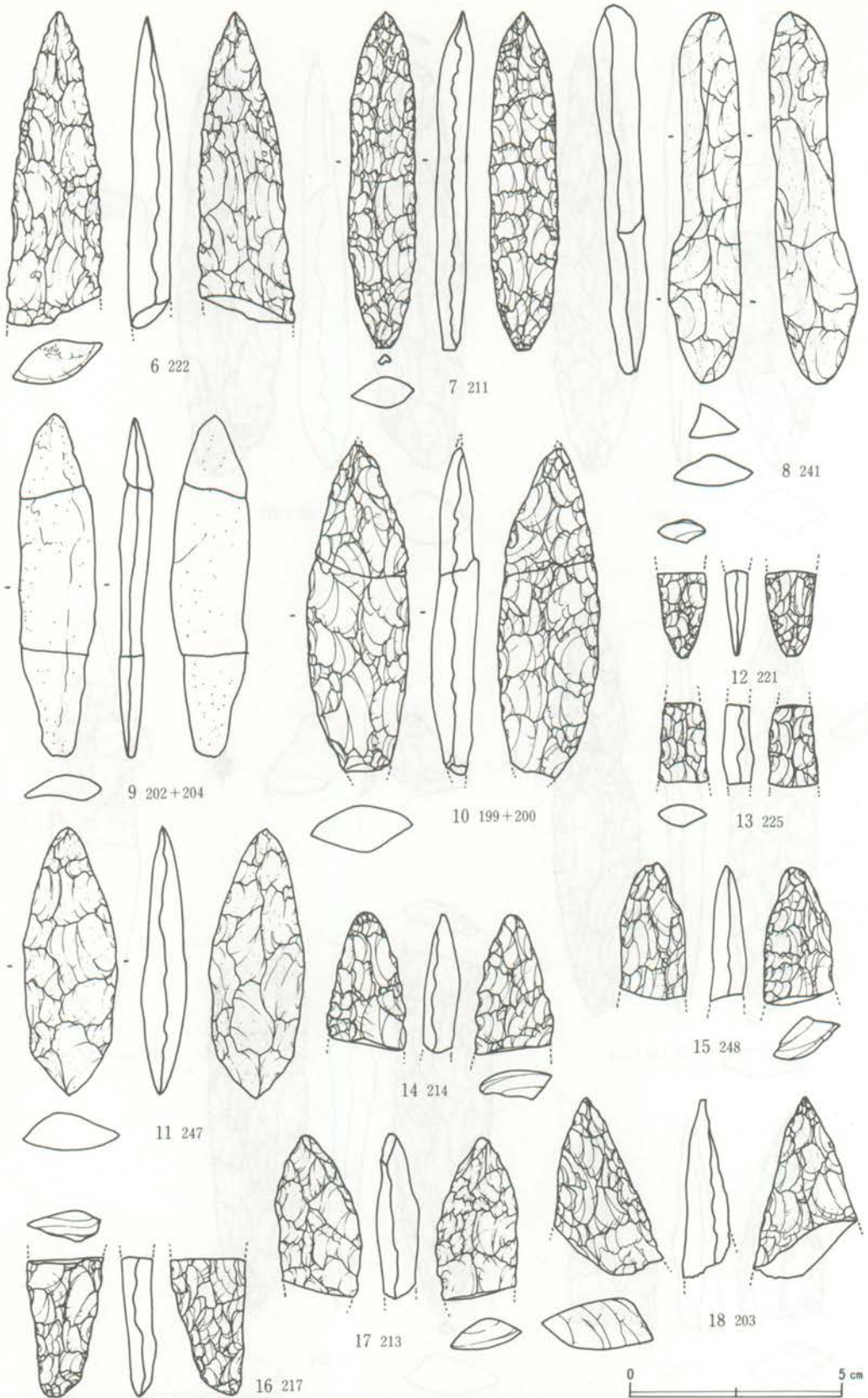
第1ブロックからは良好な接合資料が得られている。第19図～第29図に石核に剥片の接合するものを選んで掲げておいた。



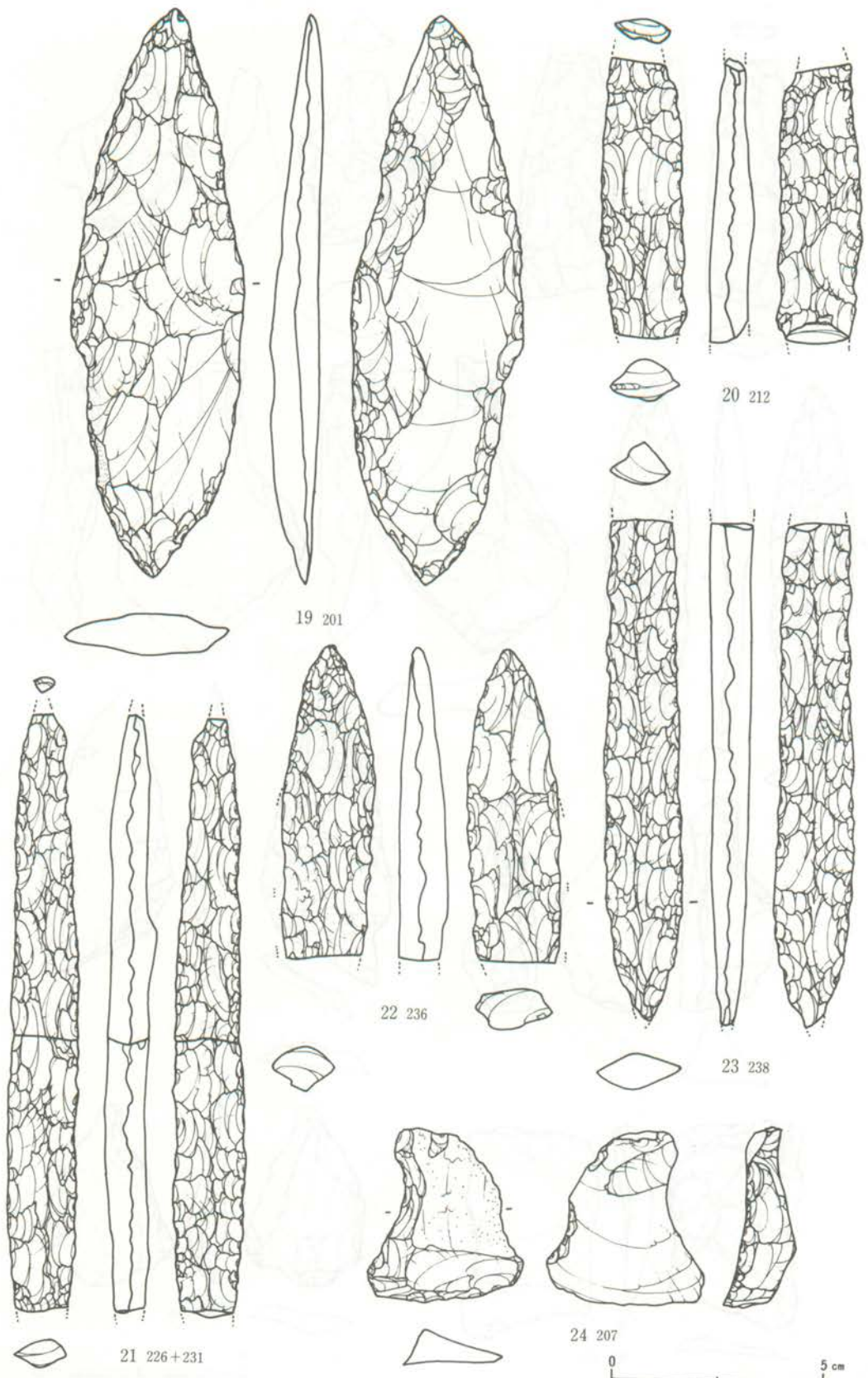
第 4 図 No. 1 地点遺物出土状況



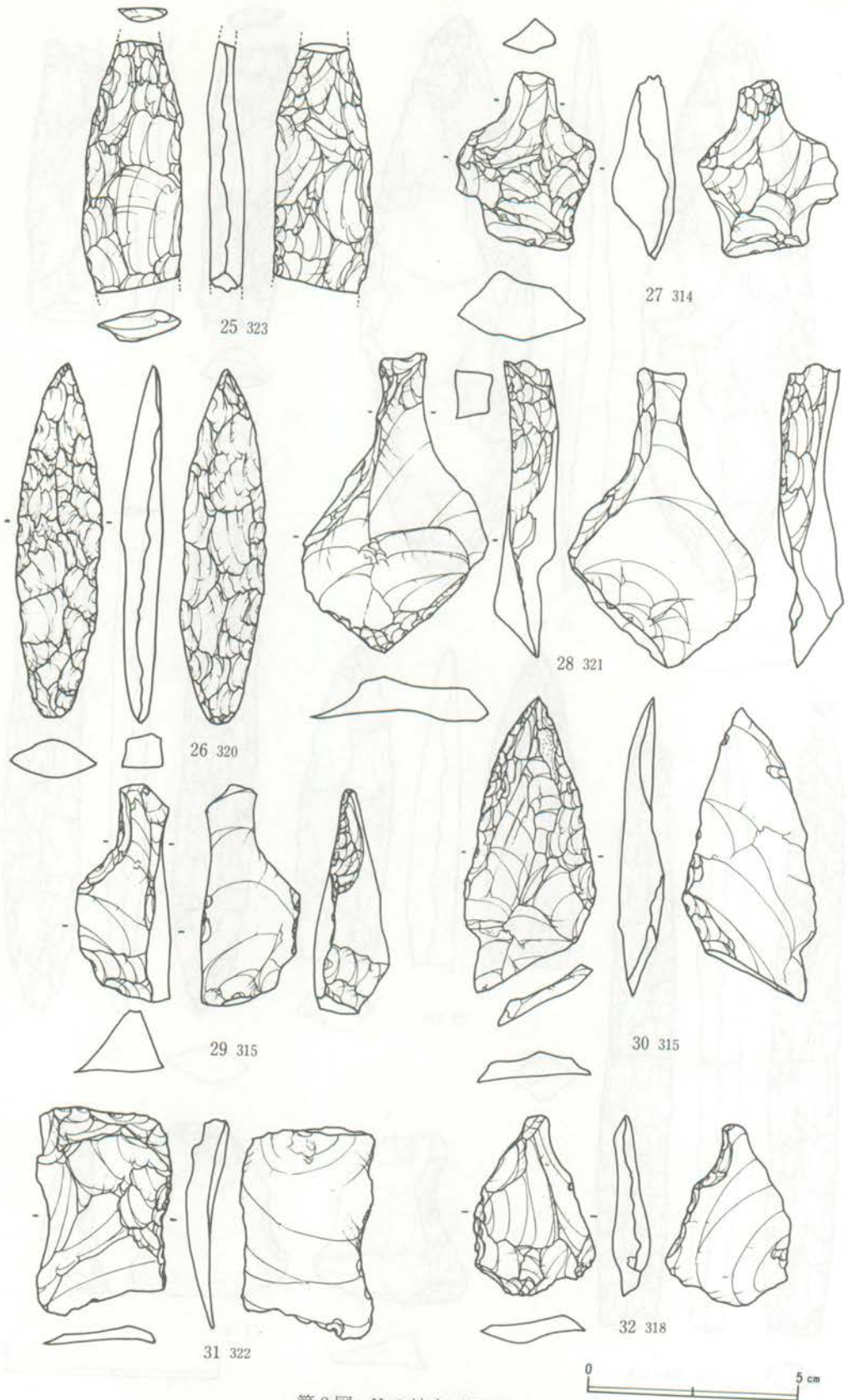
第5图 No.1地点石器(1)



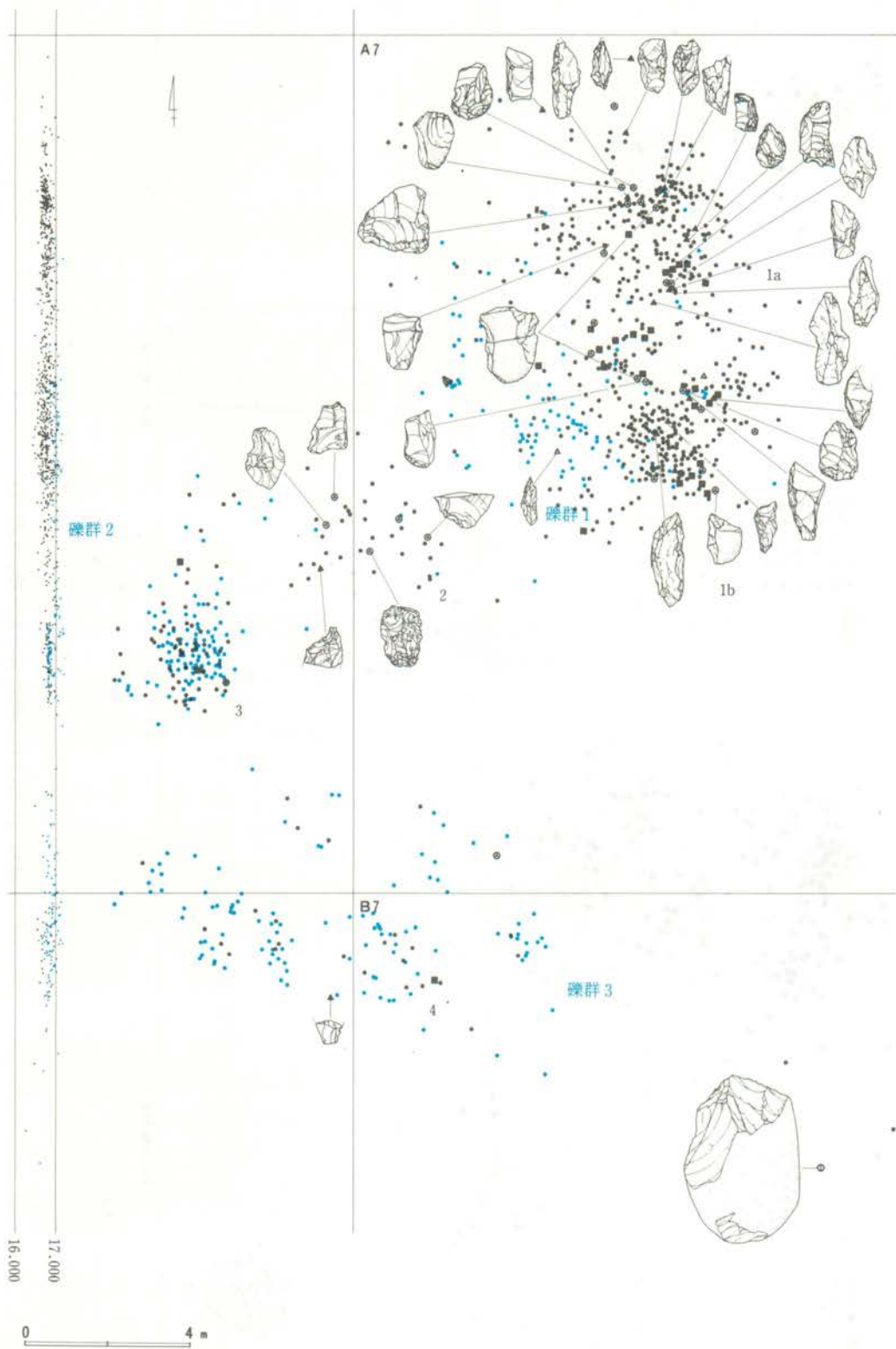
第6图 Na 1 地点石器 (2)



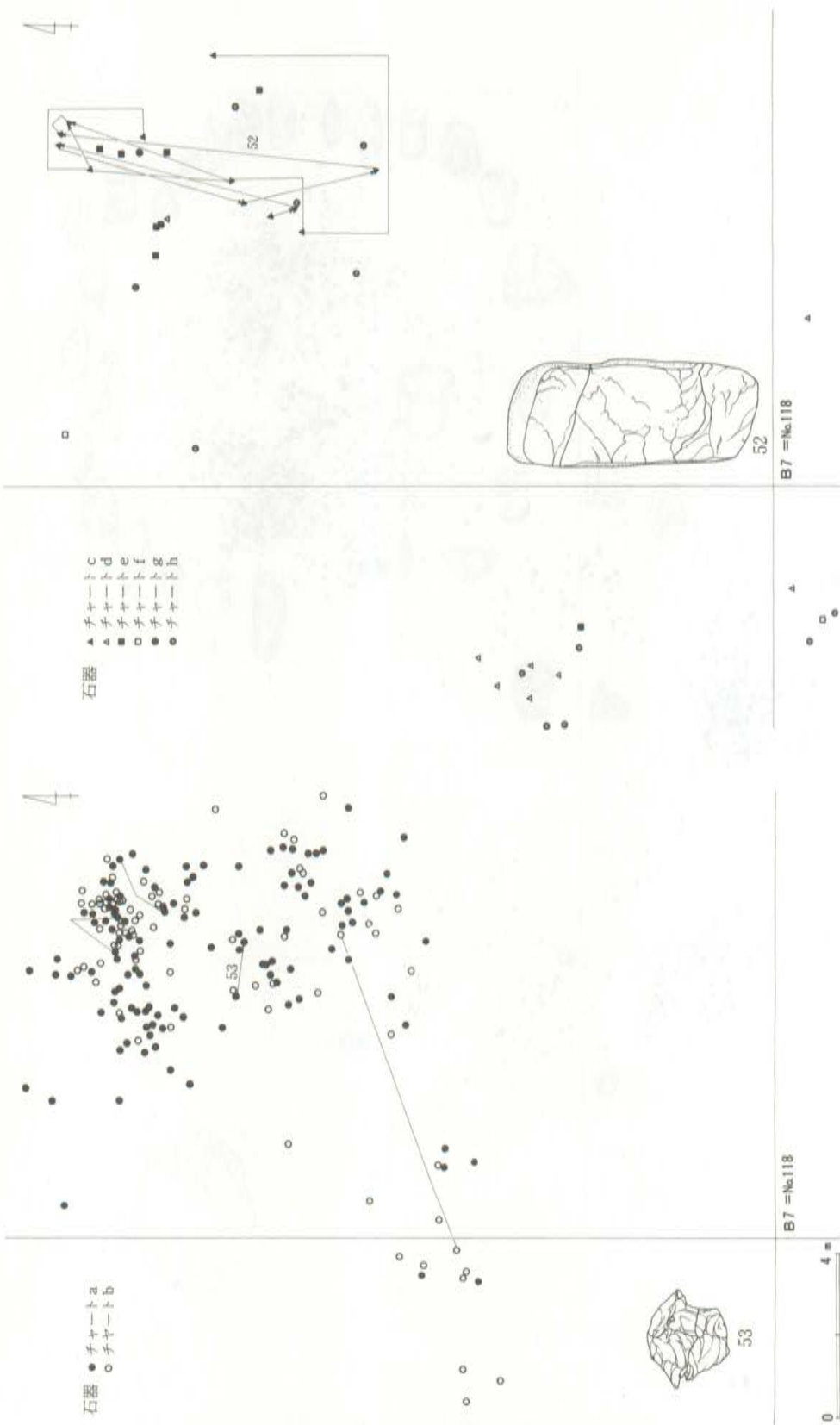
第7图 No.1地点石器(3)



第 8 图 No 1 地点石器 (4)

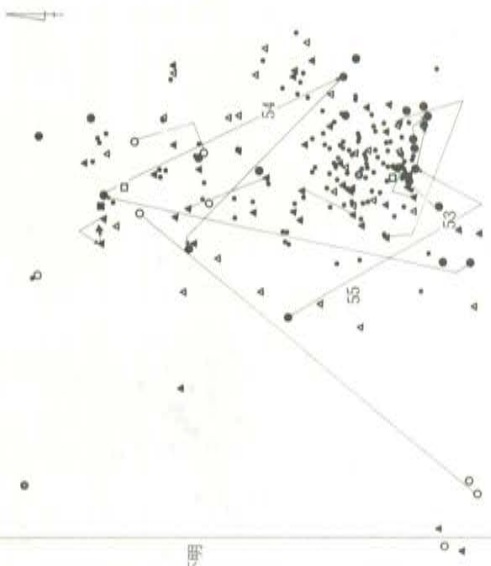


第 9 図 Na 2 地点遺物出土状況 (青は礫)

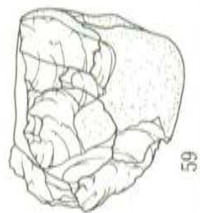
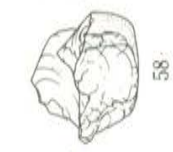
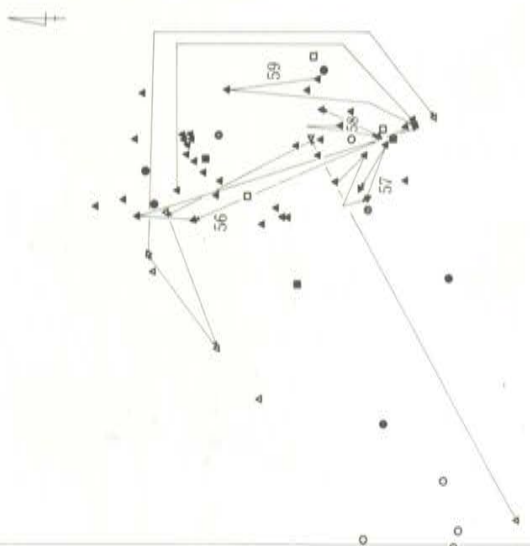


第10図 No.2 地点母岩別分布・接合関係 (1)

- 石器
- ▲ 玄武岩 c
 - ▲ 玄武岩 d
 - 玄武岩 a
 - 玄武岩 e
 - 玄武岩 k
 - 玄武岩 i
 - 玄武岩 h
 - 玄武岩 j
 - その他・不明



- 石器
- ▲ 玄武岩 b
 - ▲ 玄武岩 e
 - 玄武岩 f
 - 玄武岩 m
 - 玄武岩 o
 - 玄武岩 n
 - 玄武岩 r
 - 玄武岩 g



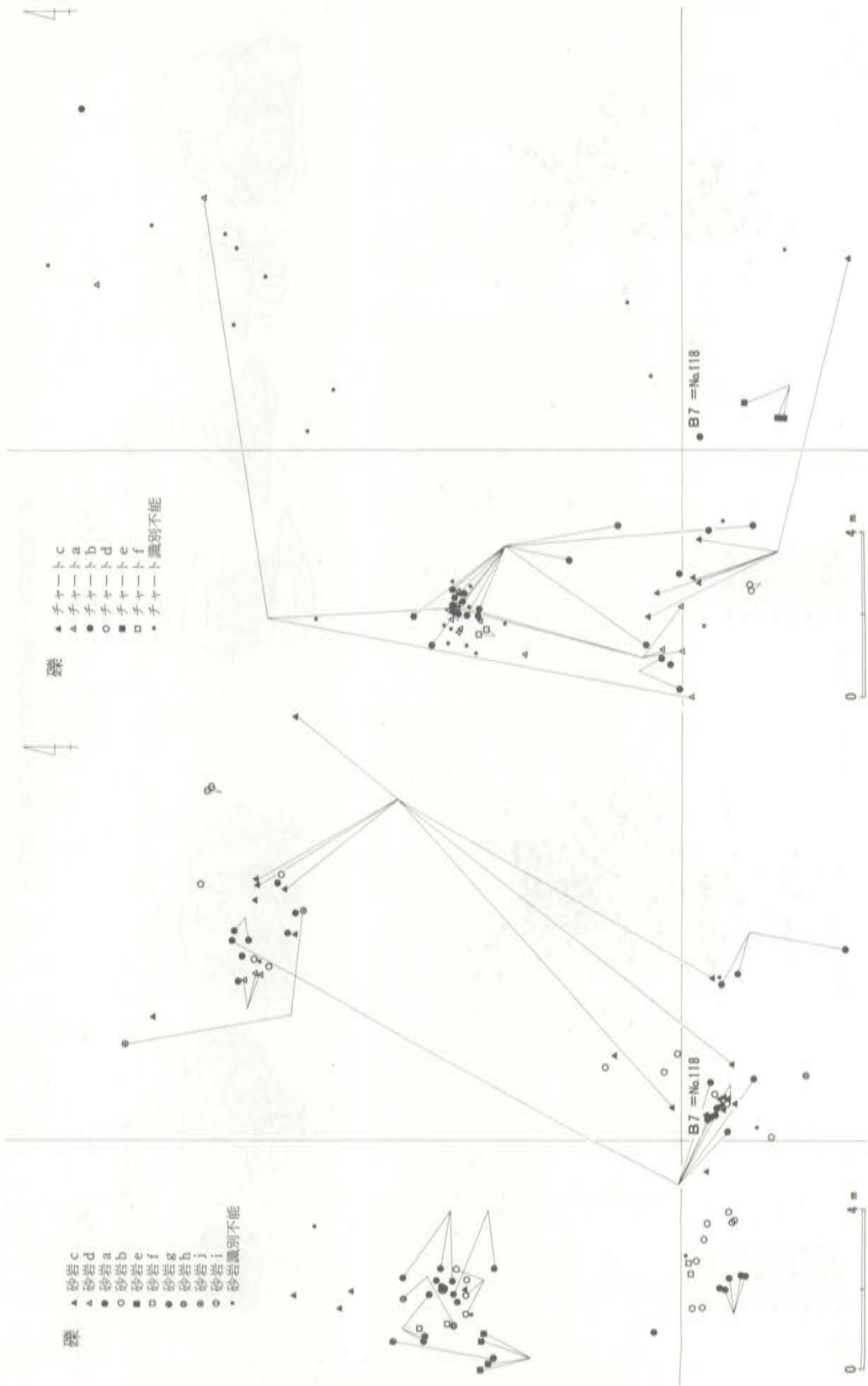
B7 = No.118



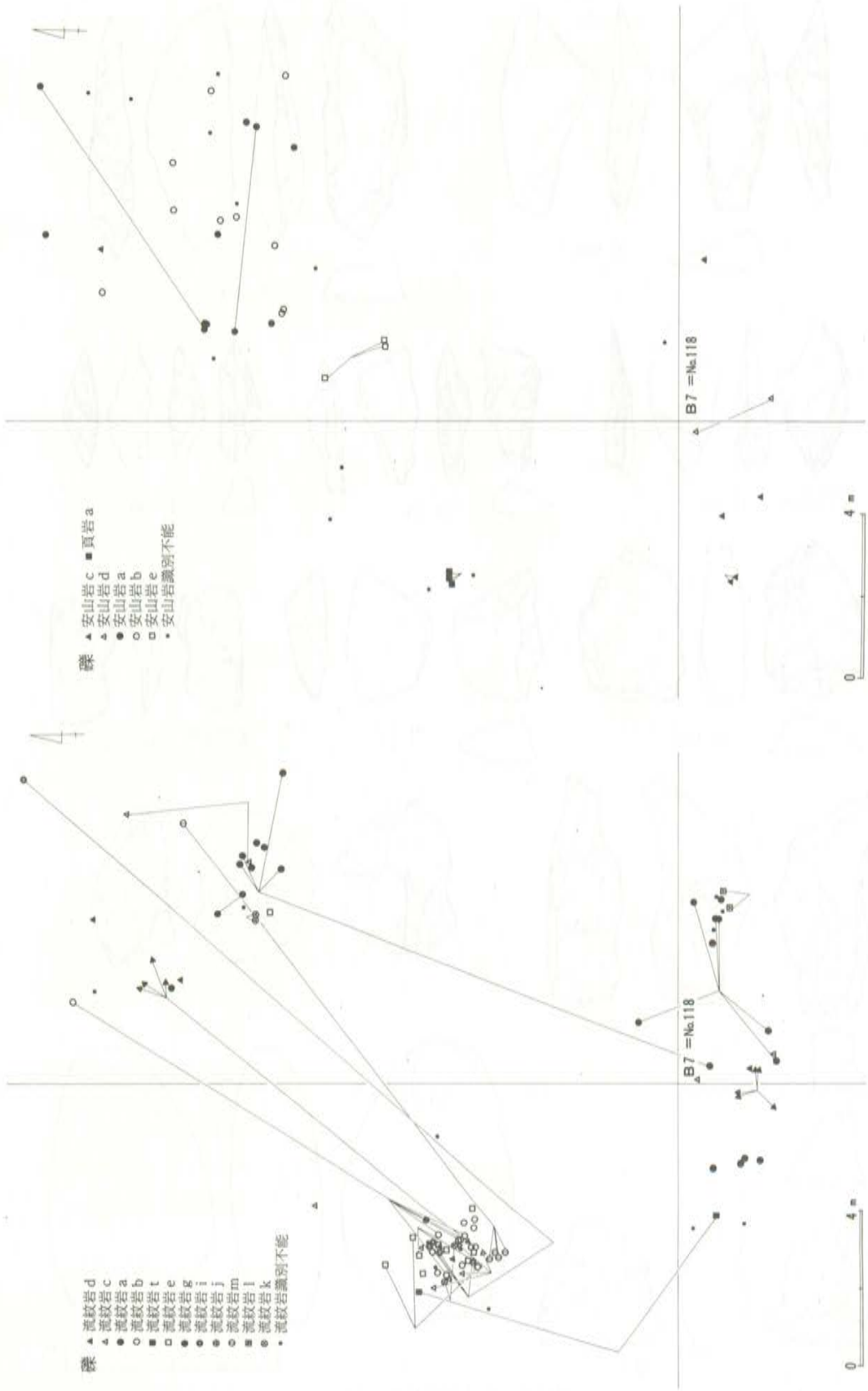
B7 = No.118



第11図 No.2 地点母岩別分布・接合関係 (2)



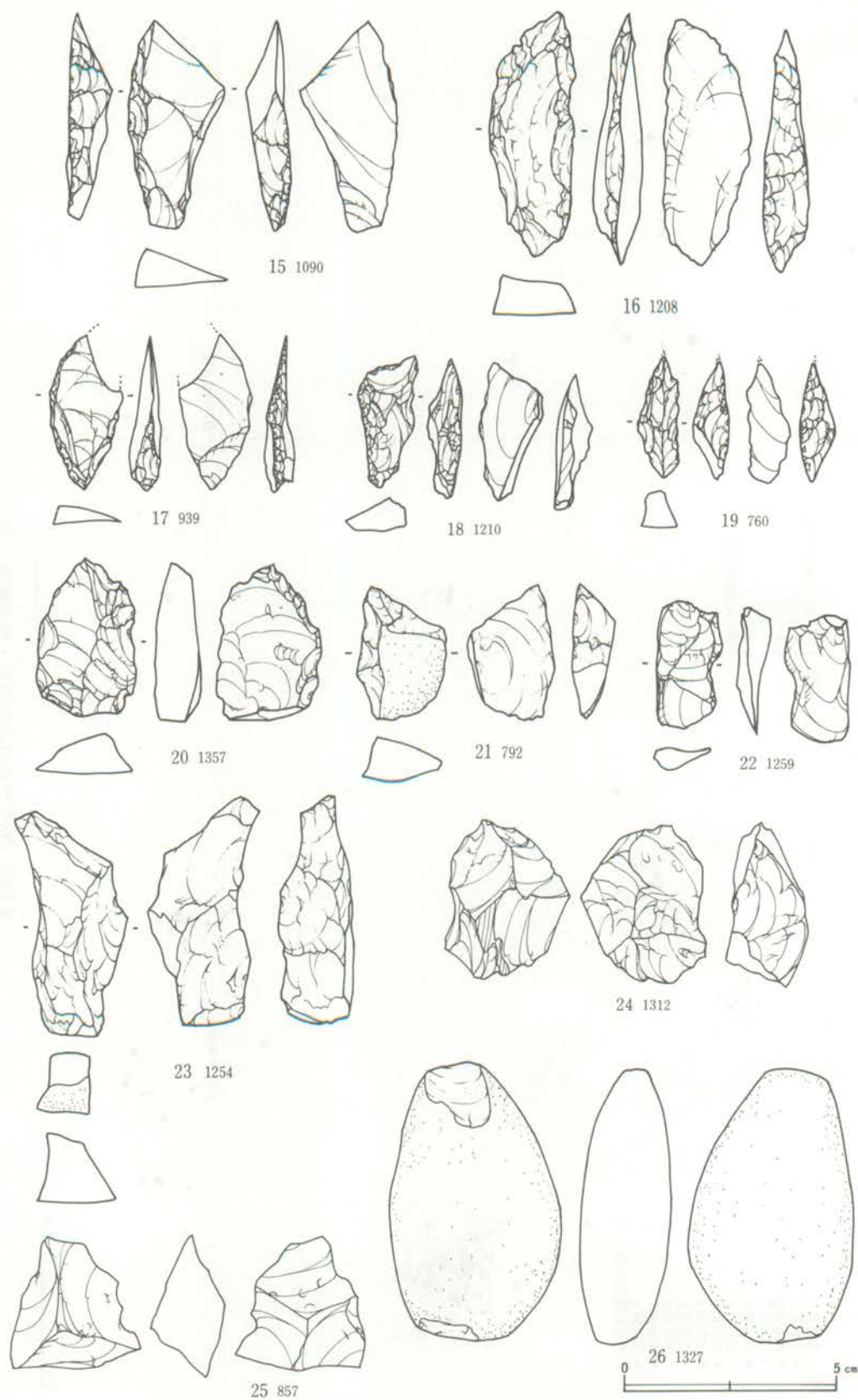
第12図 No. 2 地点母岩別分布・接合関係 (3)



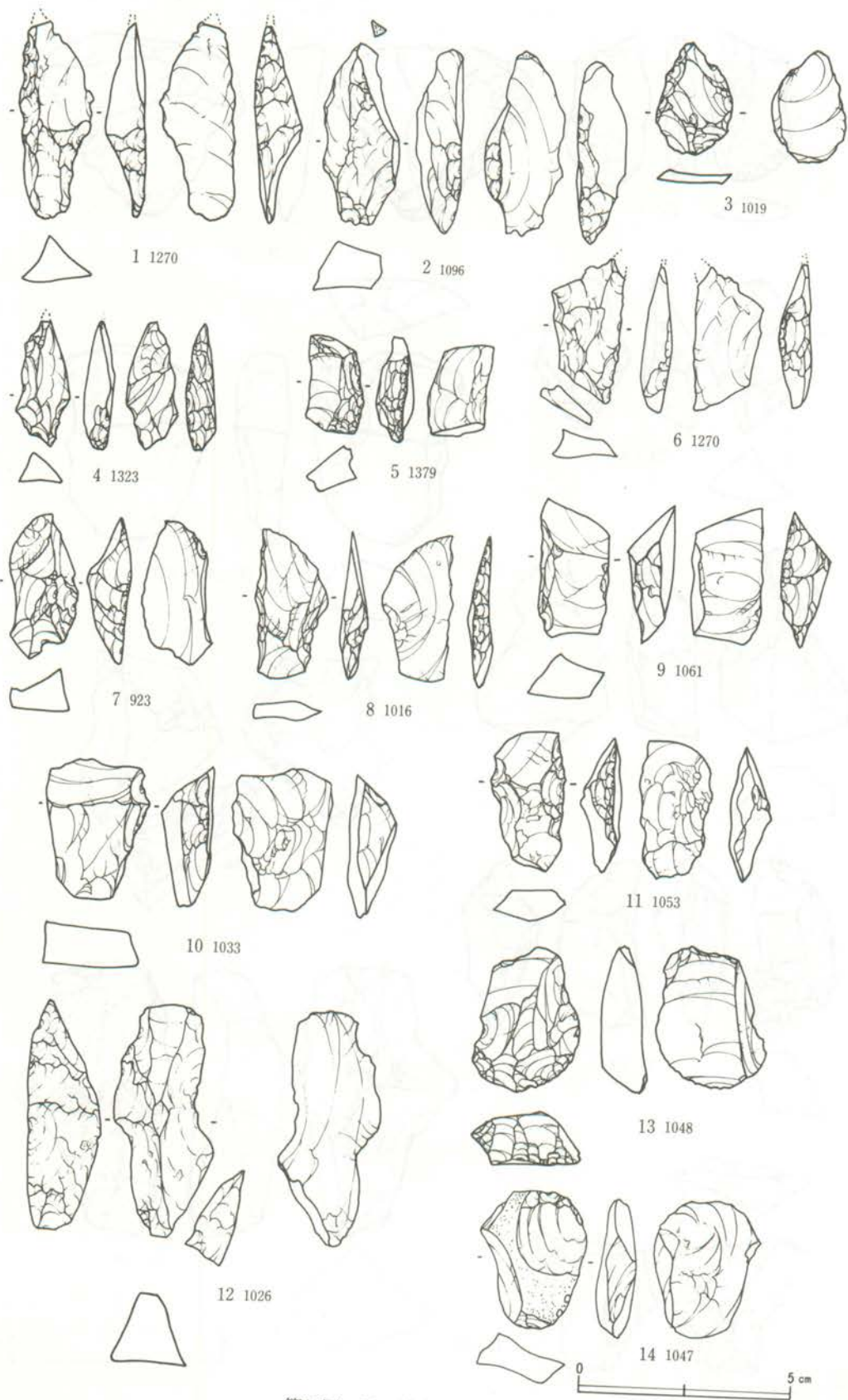
- ▲ 安山岩 c ■ 頁岩 a
 ▲ 安山岩 d
 ● 安山岩 a
 ○ 安山岩 b
 □ 安山岩 e
 • 安山岩識別不能

- ▲ 流紋岩 d
 ▲ 流紋岩 c
 ● 流紋岩 a
 ○ 流紋岩 b
 ■ 流紋岩 t
 □ 流紋岩 e
 ● 流紋岩 f
 ● 流紋岩 i
 ● 流紋岩 j
 ● 流紋岩 m
 ● 流紋岩 l
 ● 流紋岩 k
 • 流紋岩識別不能

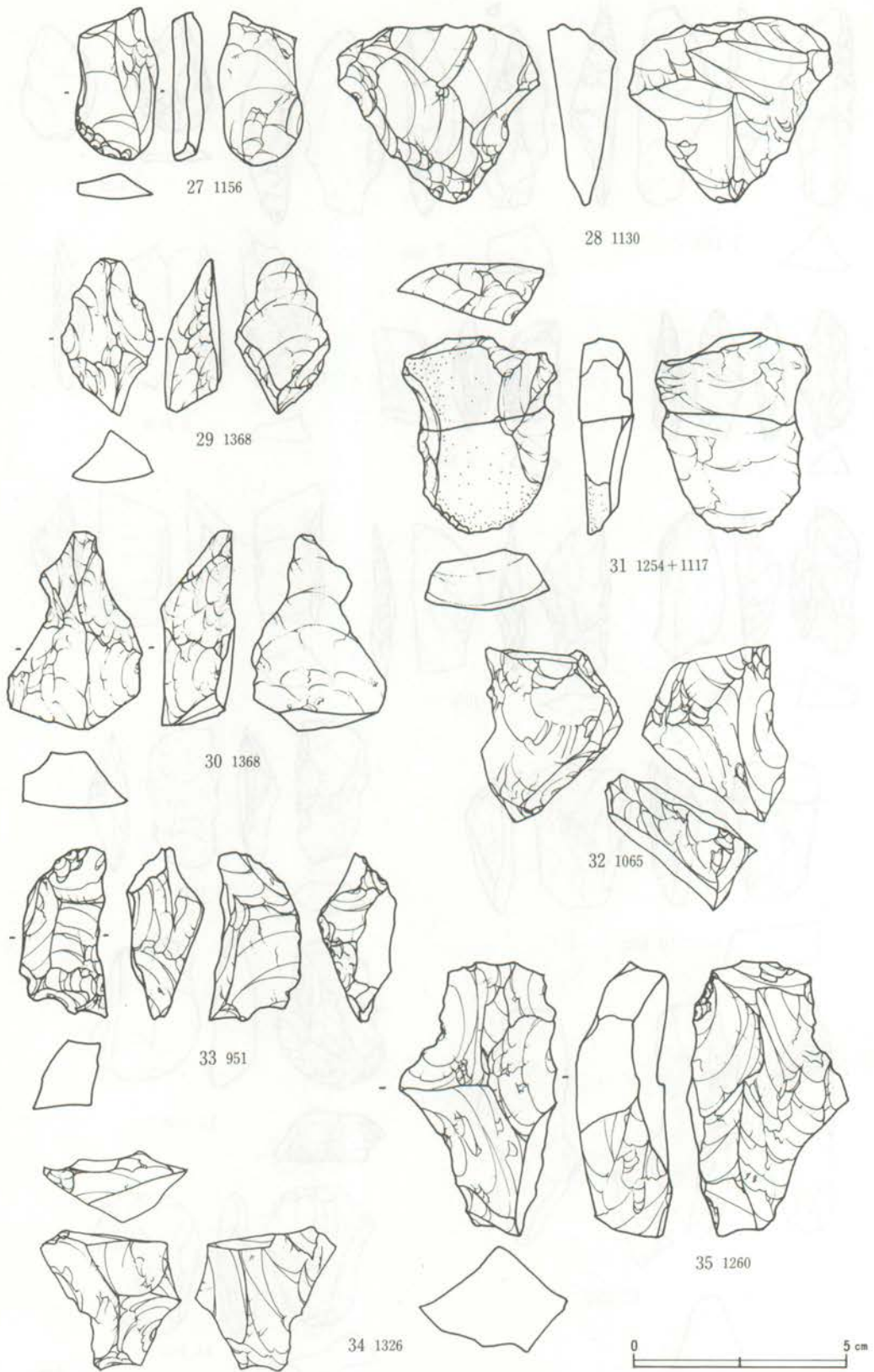
第13図 No.2 地点母岩別分布・接合関係 (4)



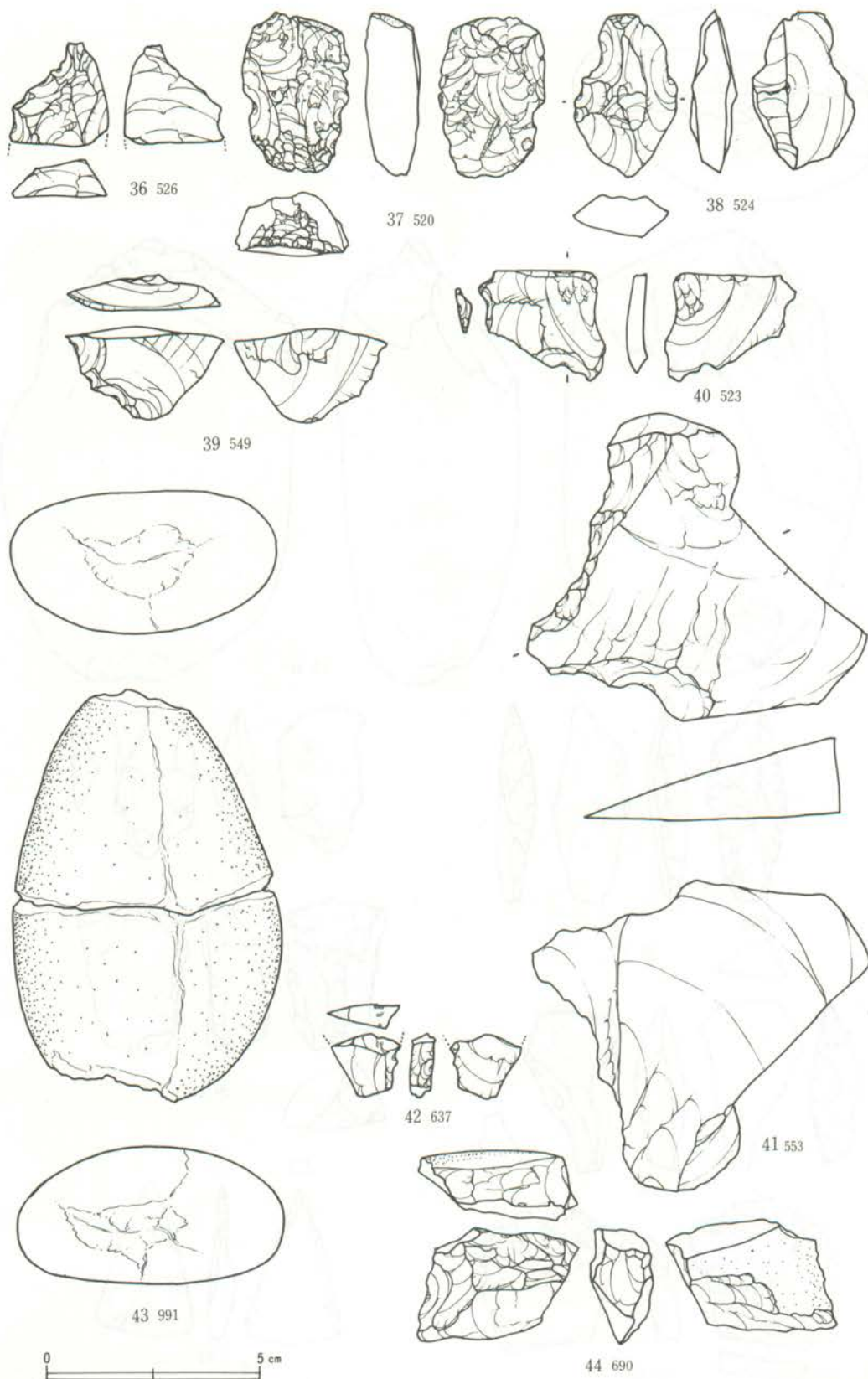
第14图 No. 2 地点石器 (1)



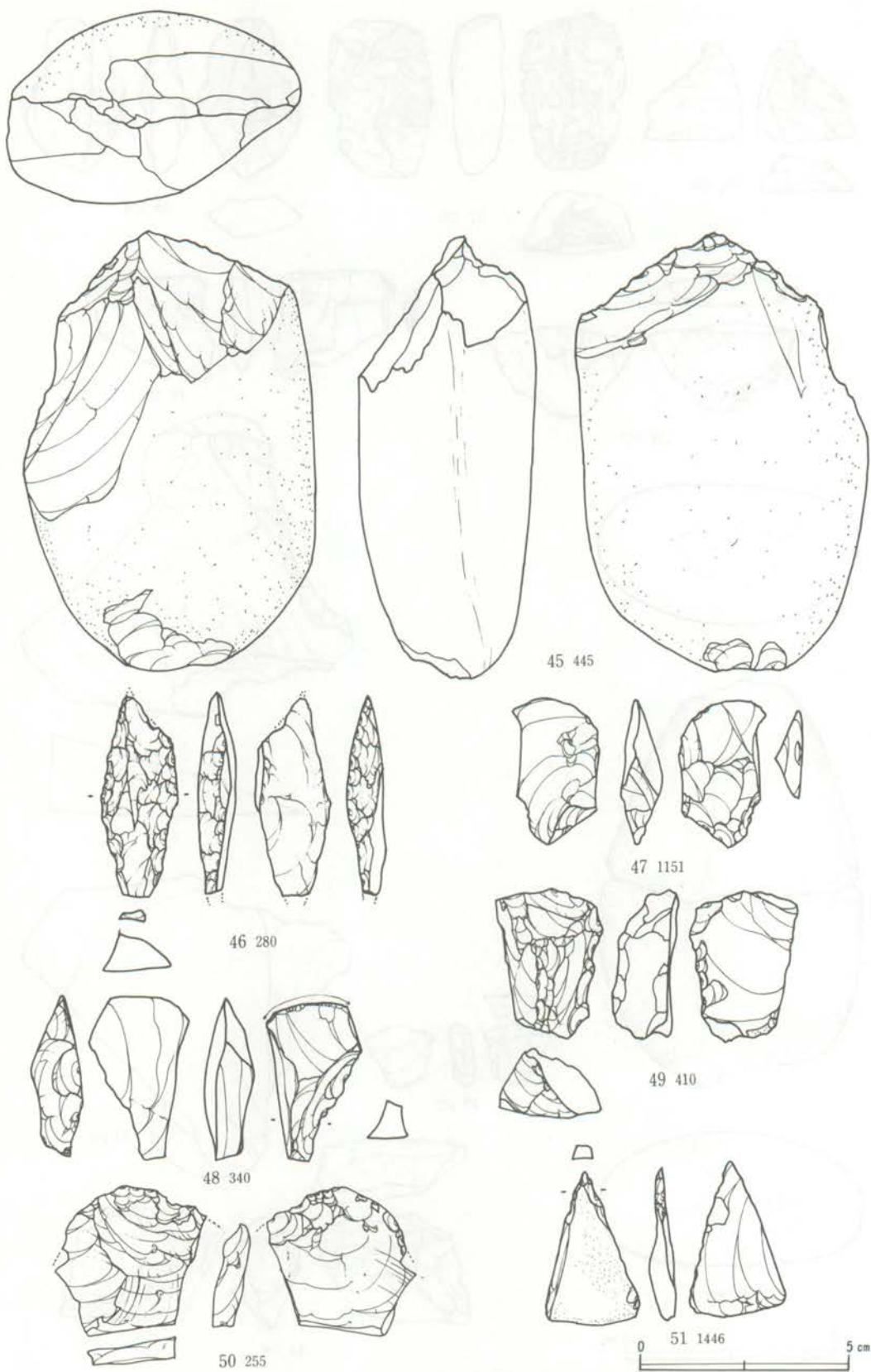
第15图 №2 地点石器 (2)



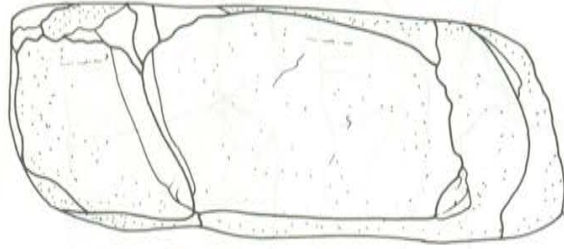
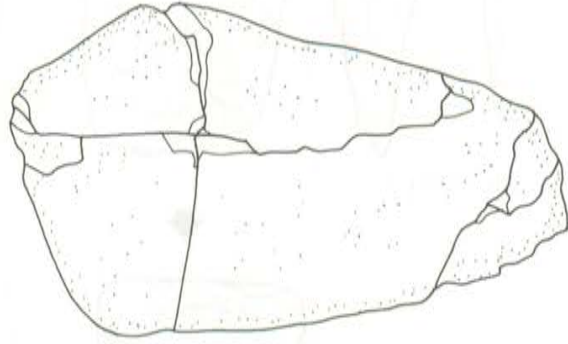
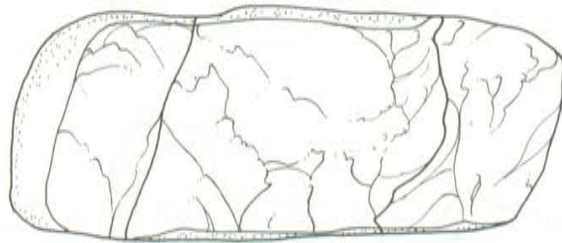
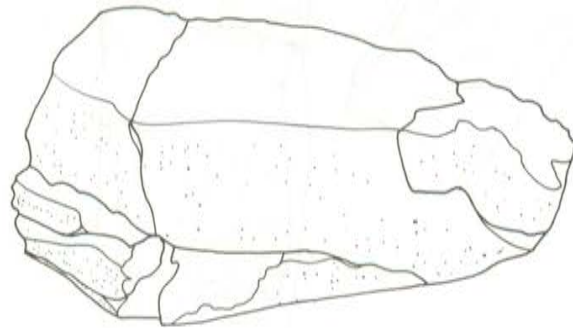
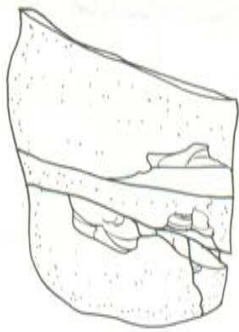
第16图 No 2 地点石器 (3)



第17图 №2 地点石器 (4)



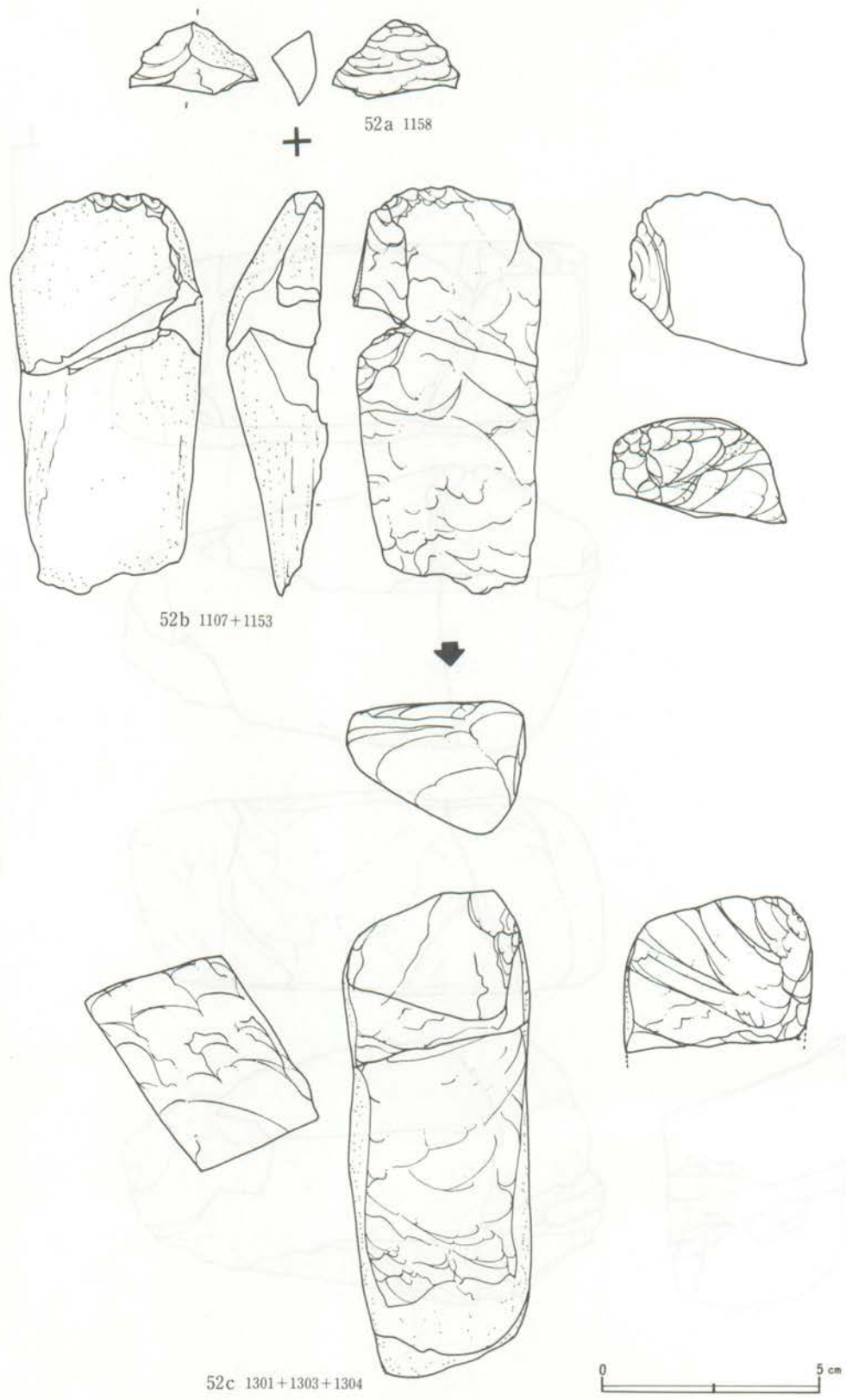
第18图 No.2 地点石器 (5)



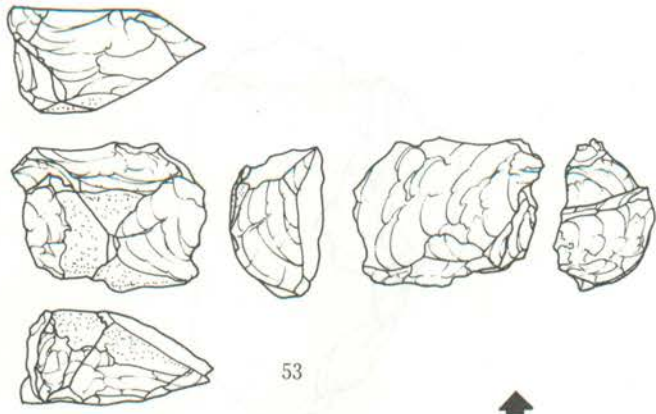
52



第19図 第2地点接合資料(1)



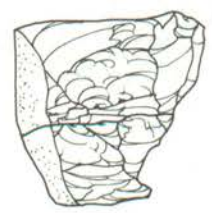
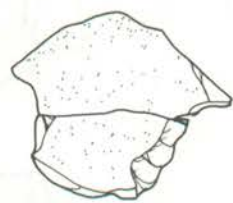
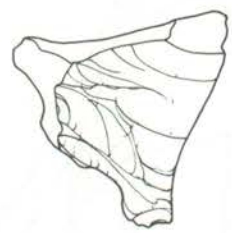
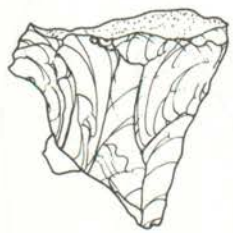
第20図 第2地点接合資料(2)



53a 767



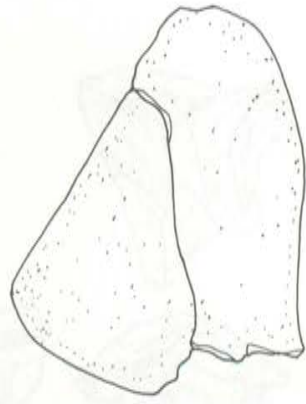
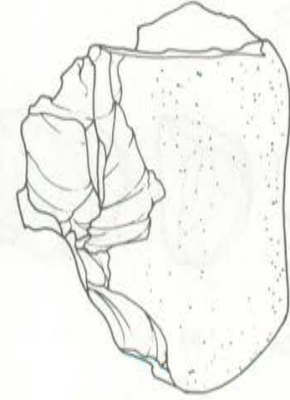
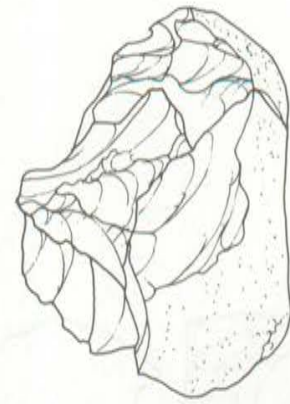
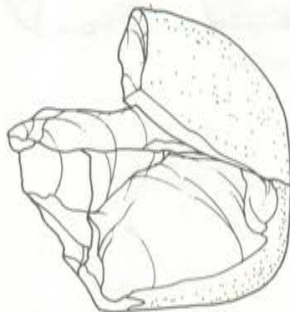
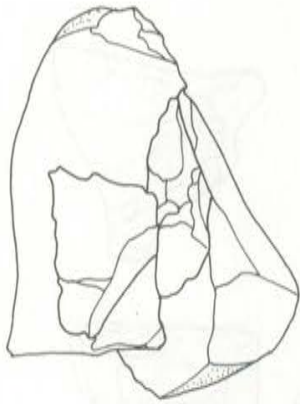
53b 1232



53 835+867



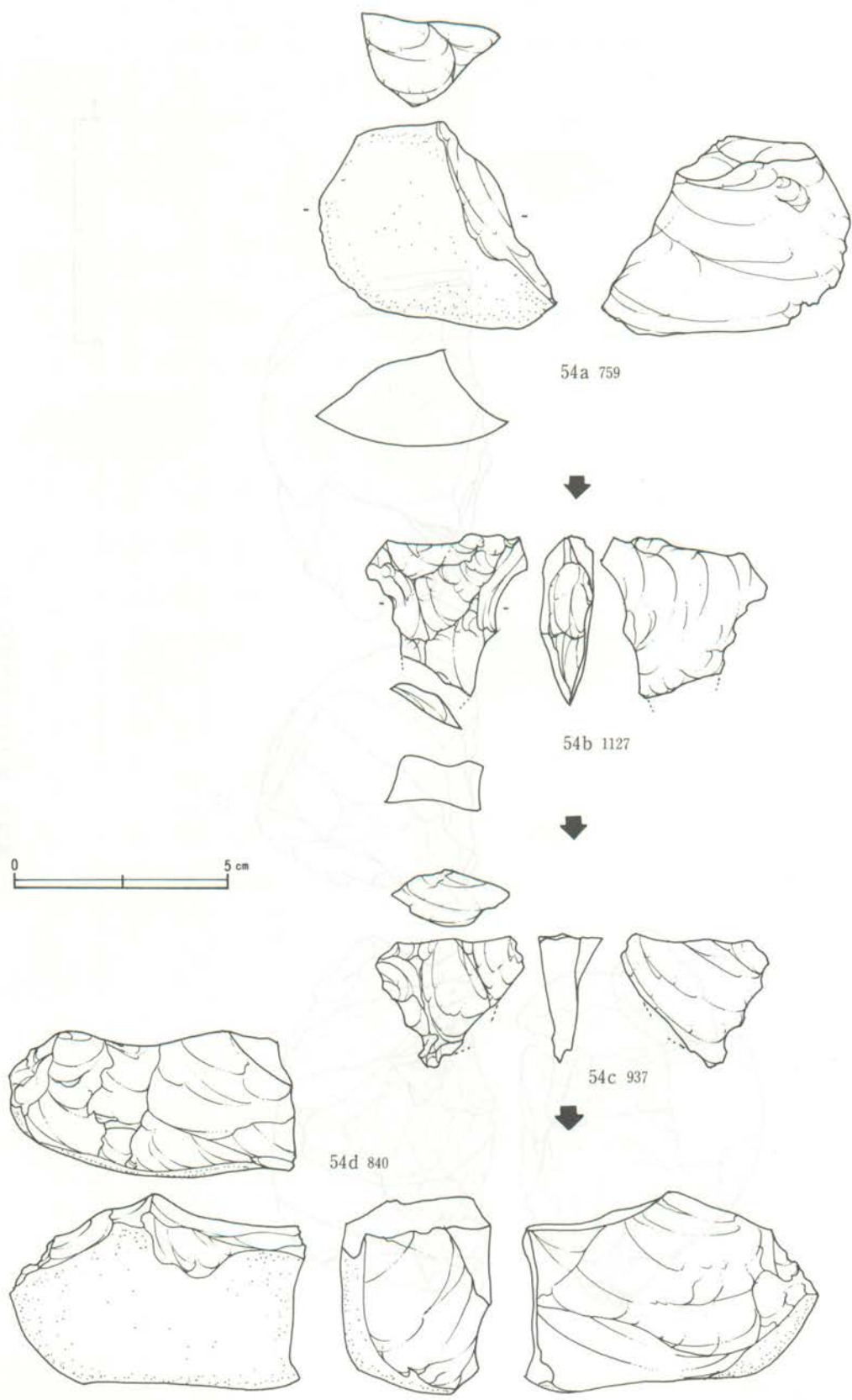
第21図 第2地点接合資料 (3)



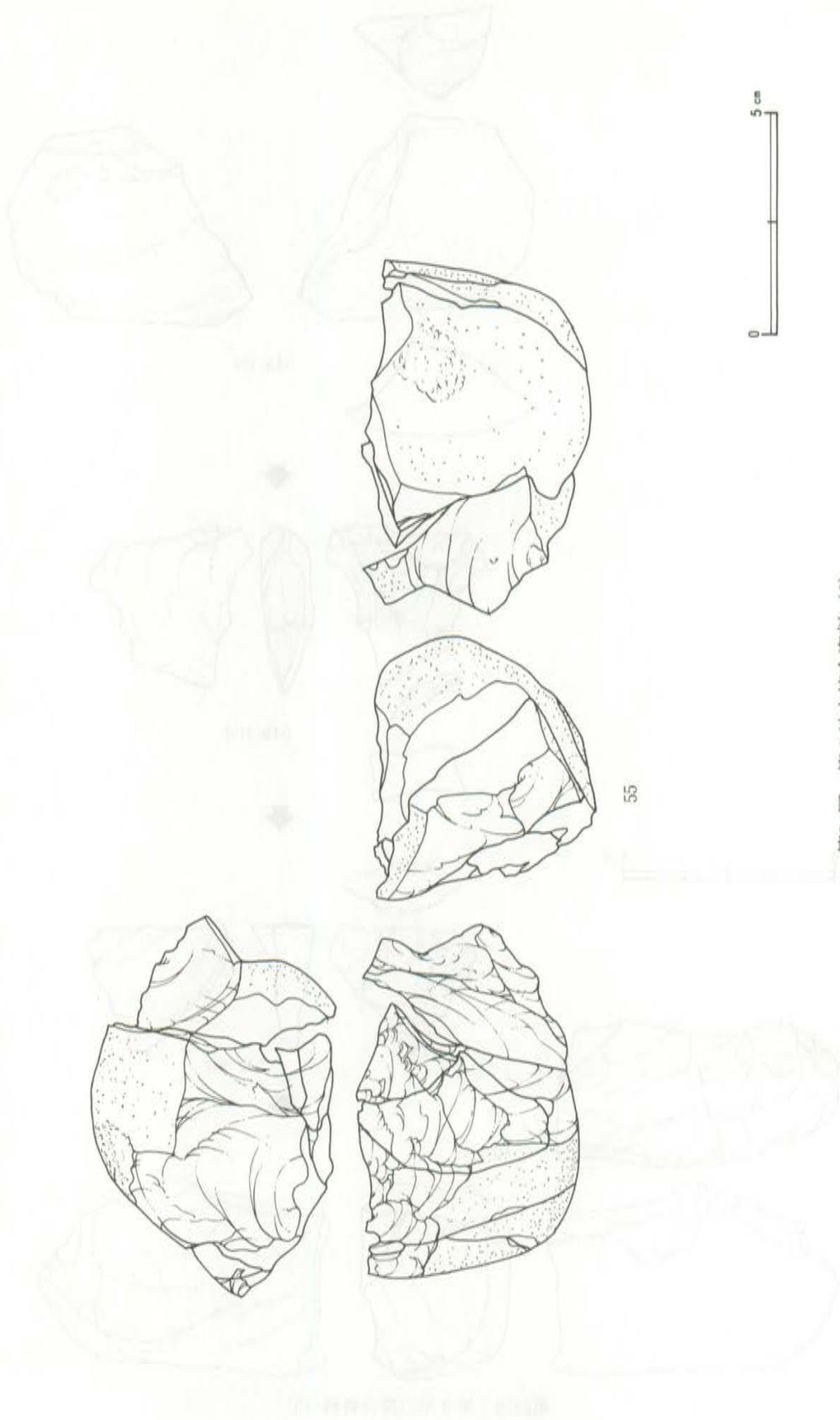
54



第22圖 第2地点接合資料(4)

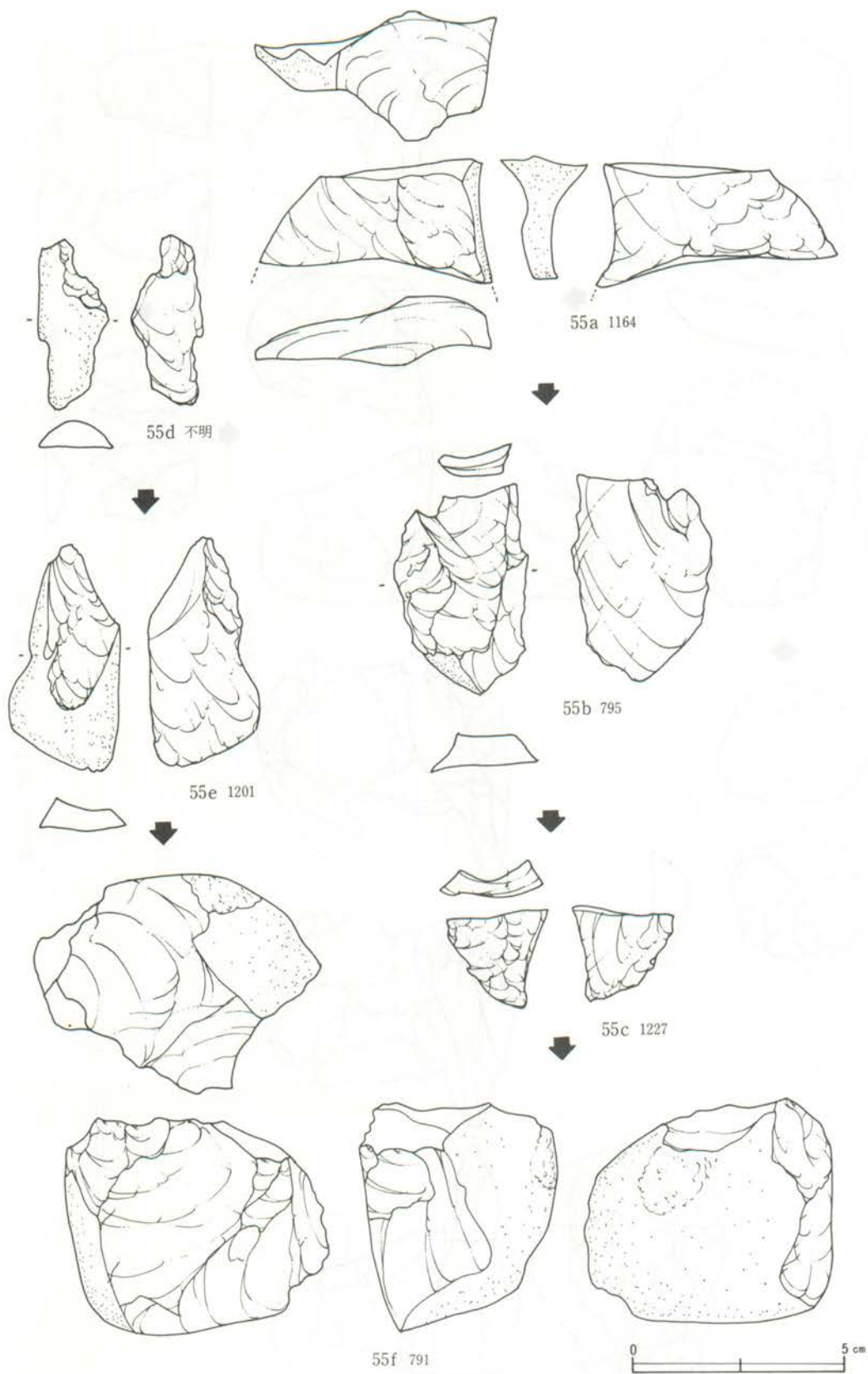


第23図 第2地点接合資料 (5)

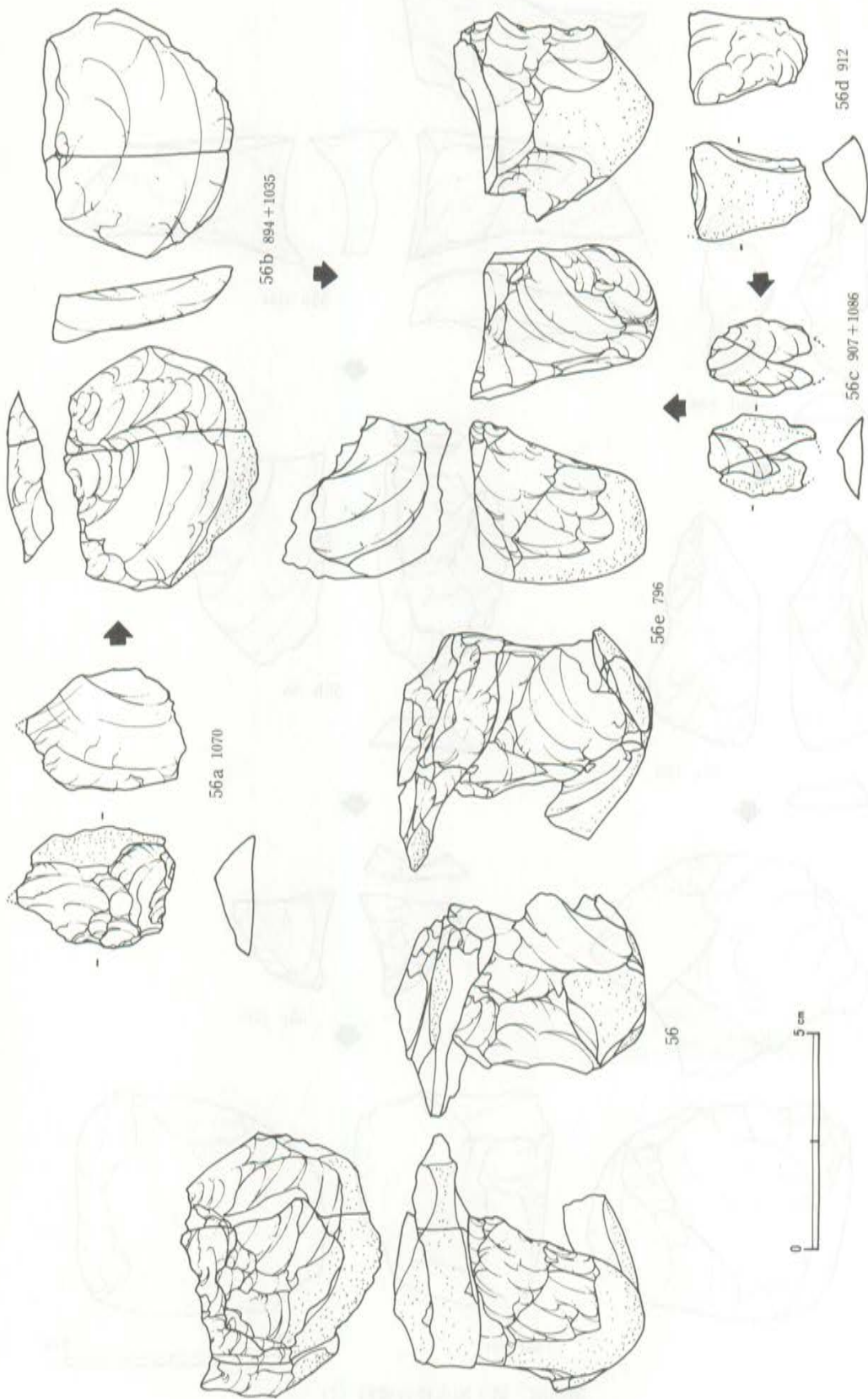


55

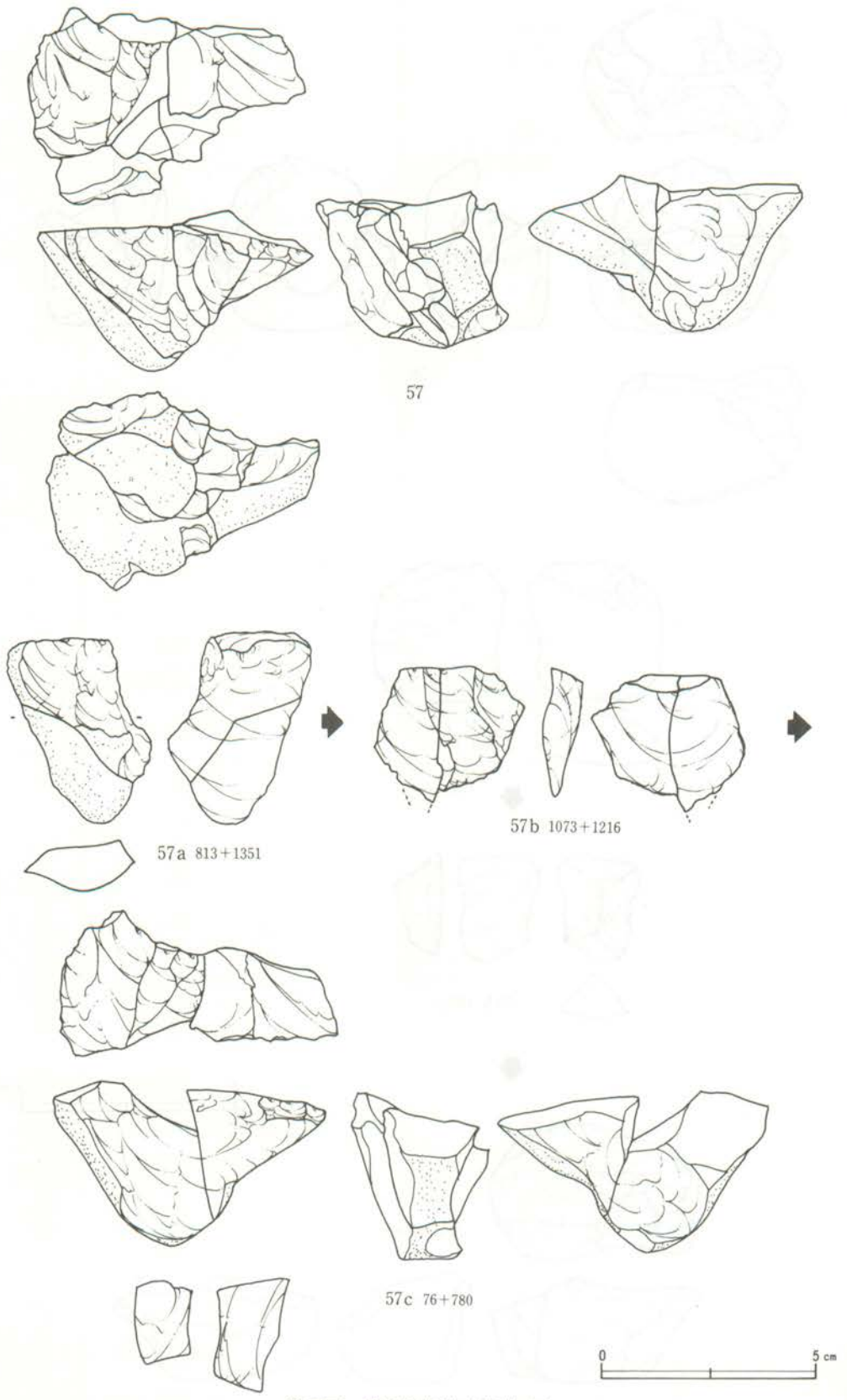
第24図 第2地点接合資料(6)



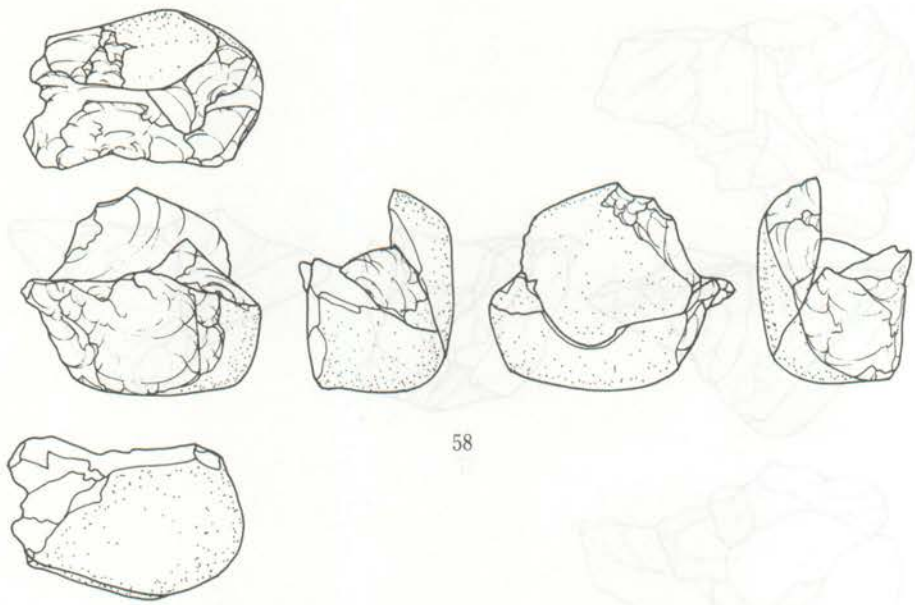
第25図 第2地点接合資料(7)



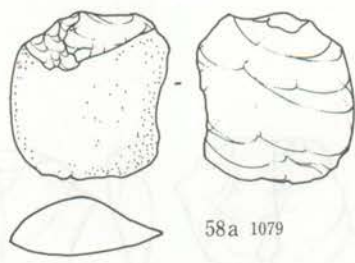
第26図 第2地点接合資料(8)



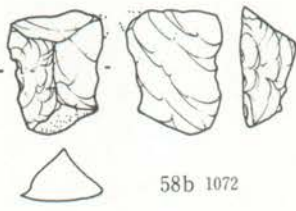
第27図 第2地点接合資料(9)



58



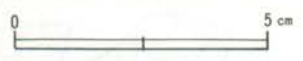
58a 1079



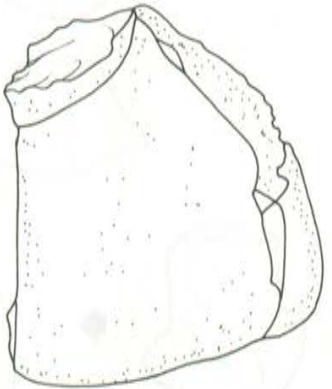
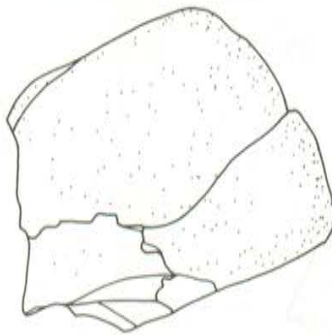
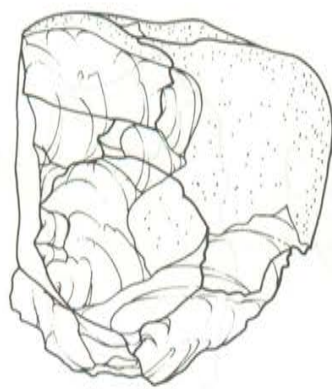
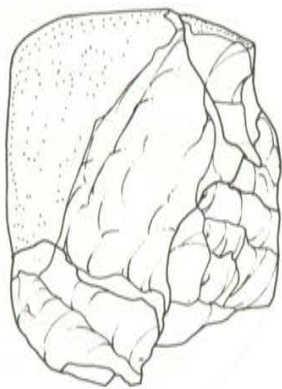
58b 1072



58c 1084



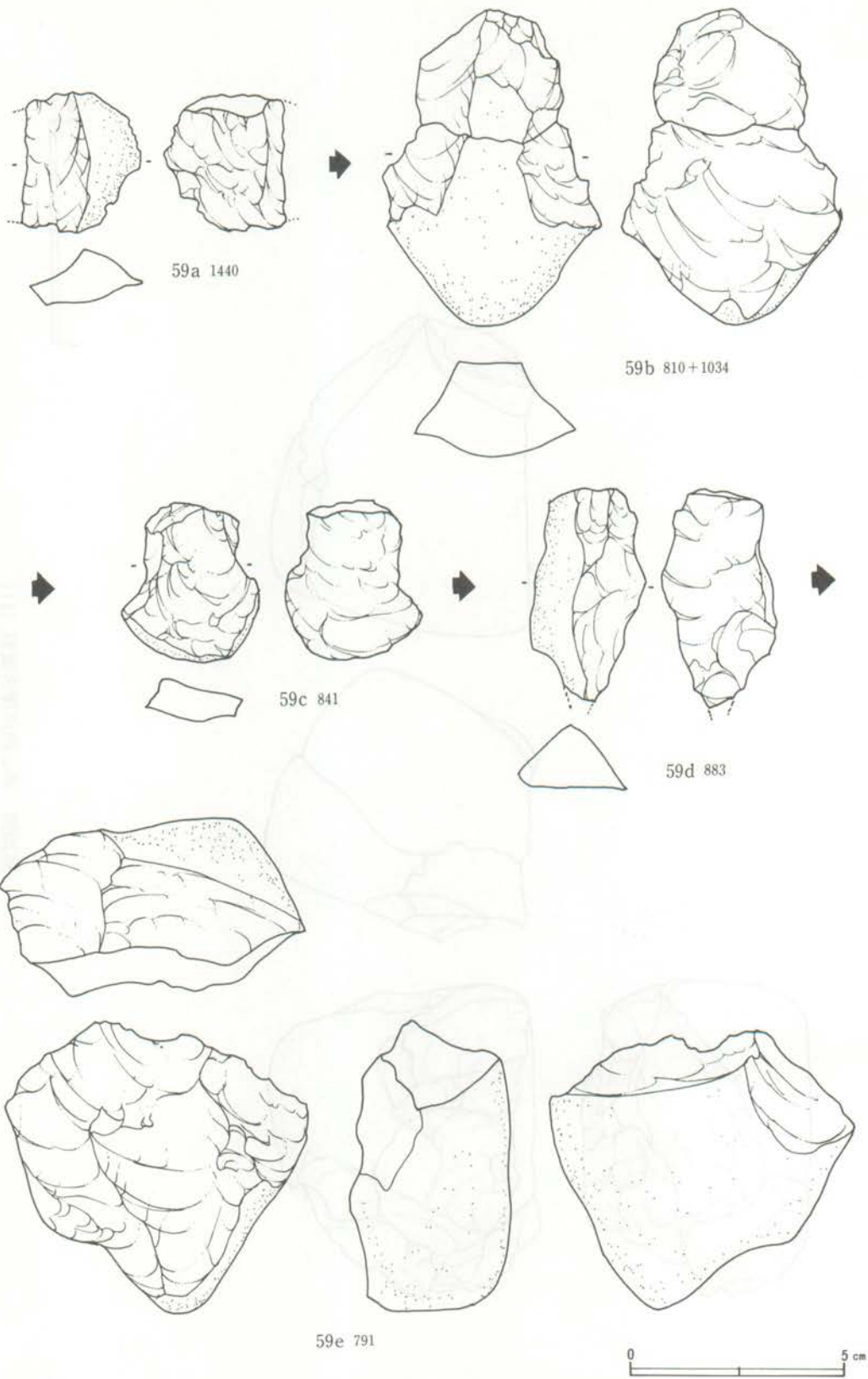
第28図 第2地点接合資料 (10)



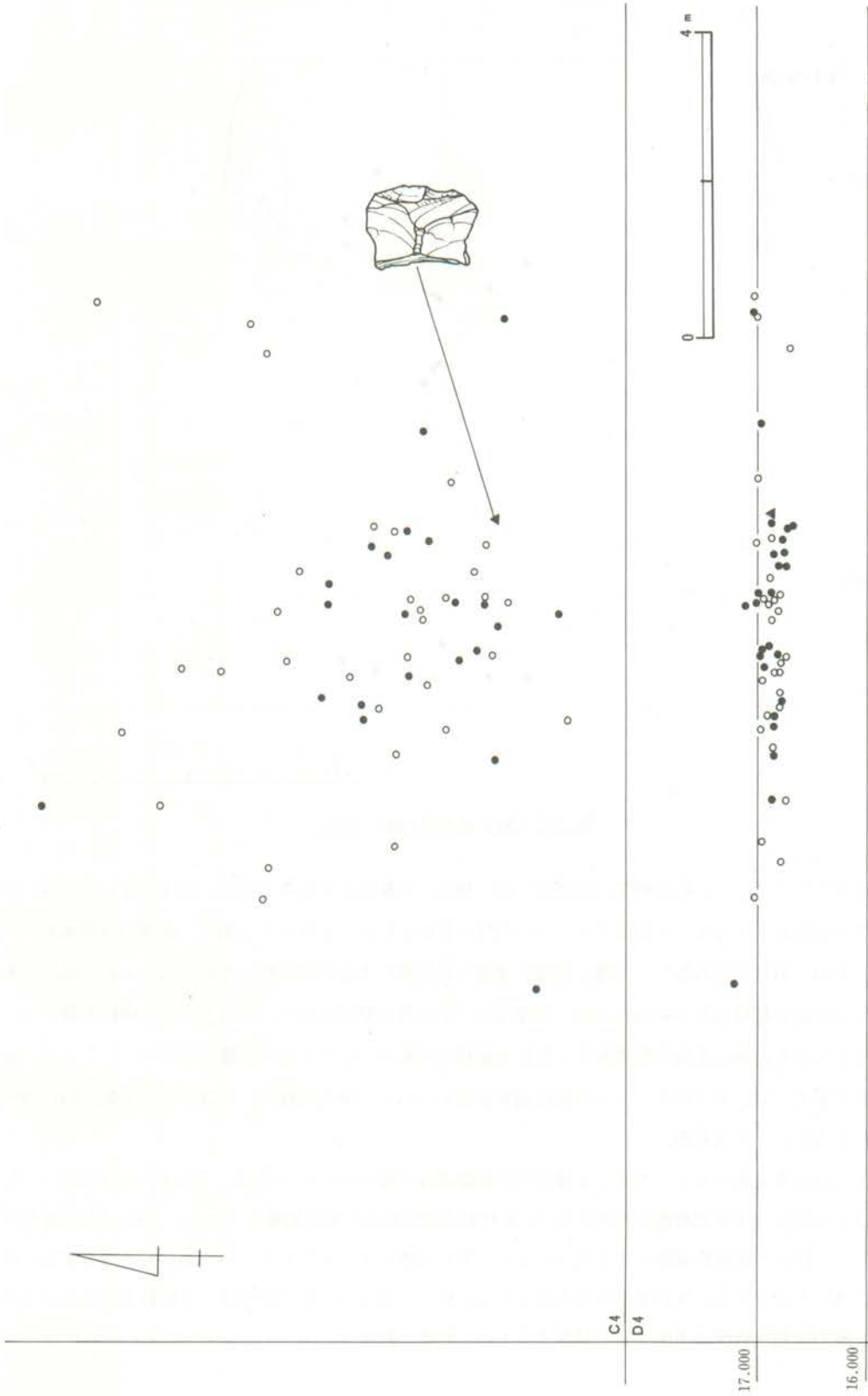
59



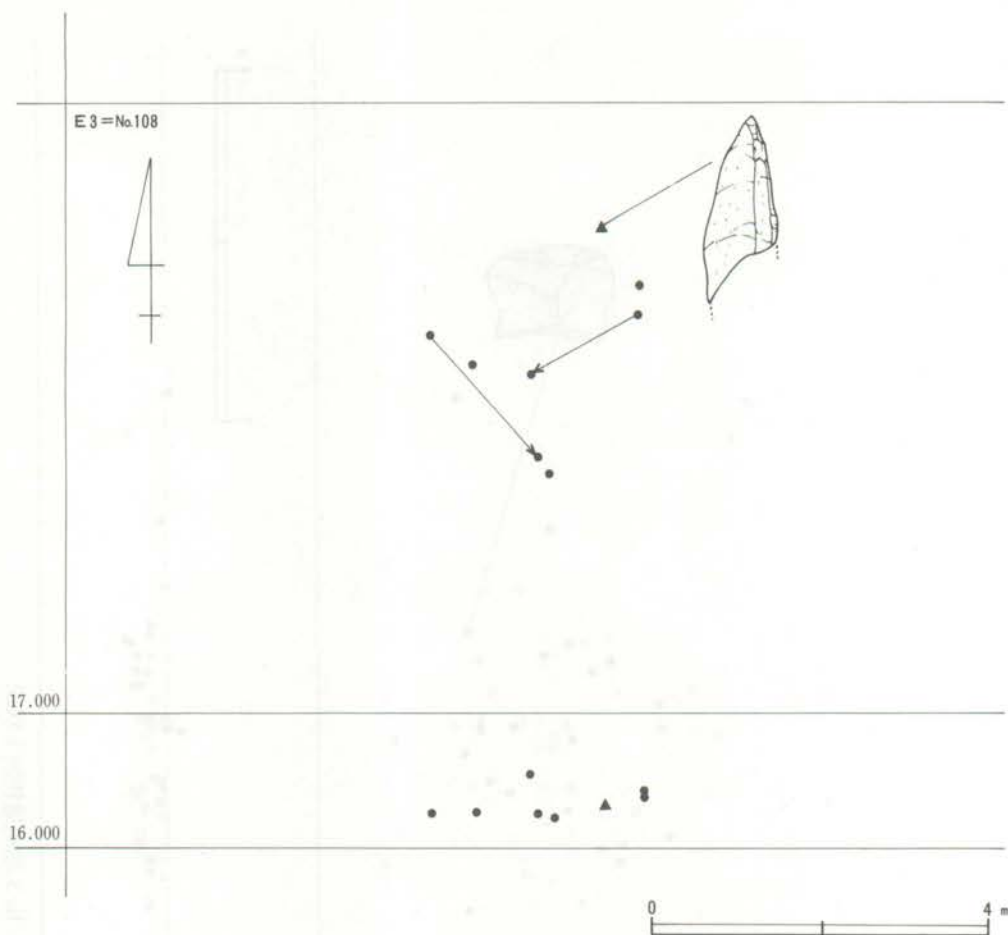
第29圖 第2地点接合資料 (II)



第30圖 第2地点接合資料(12)



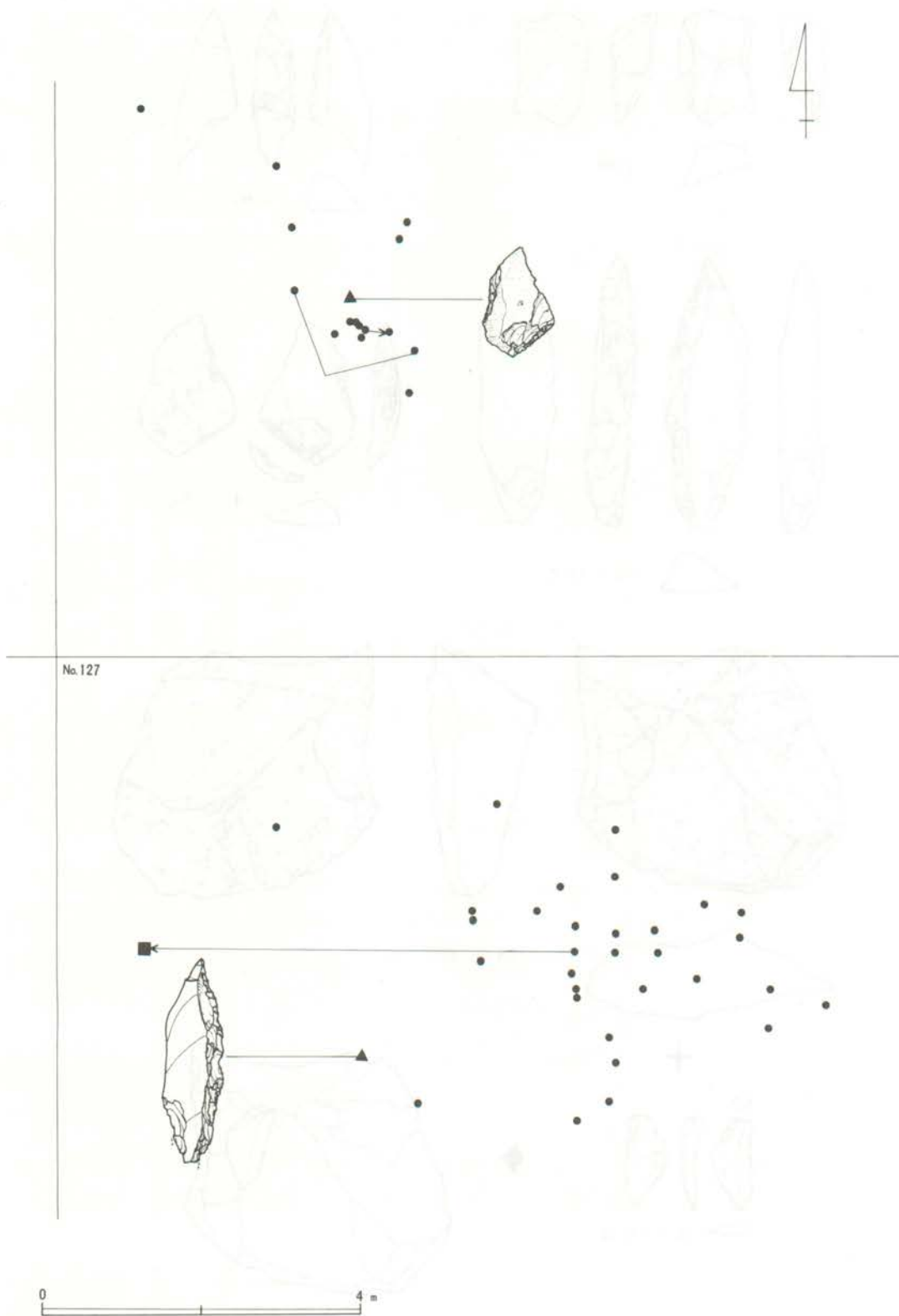
第31图 No.3地点遺物出土状況



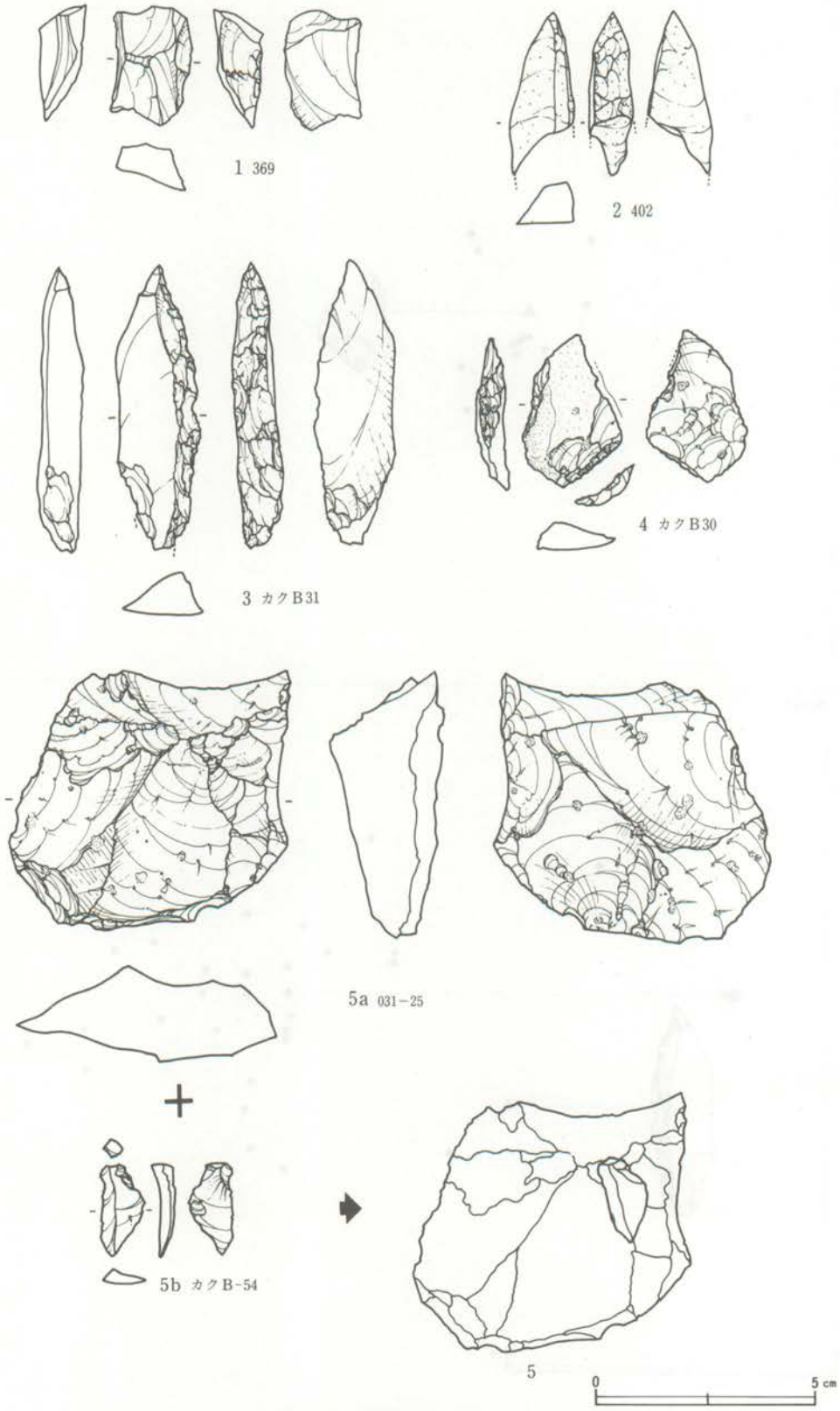
第32図 No 4 地点遺物出土状況

51は黒色のチャートの接合例で、節理面に沿う板状の剝離状況が看取される。52は部厚い玄武岩の剝片の腹面を打面とするもの。53はチャートの石核の打面と打面とが接合する例で、礫塊の分割面を打面に選ぶもの。54は玄武岩製で、打面と剝離作業面との置換による打面転移の看取されるもの。55も玄武岩。54と同趣の転移過程が窺われるが、原礫面の一部に被加撃痕があり、台石としての機能を帯びていたと考えられる。56も玄武岩製であり、石核を縦横に回転させながら剝片剝離がすすめられている。57も玄武岩製で、54、55と軌を一にした転位過程が認められる。58も同様で、やはり玄武岩製。59の特徴もこれに等しい。玄武岩製。

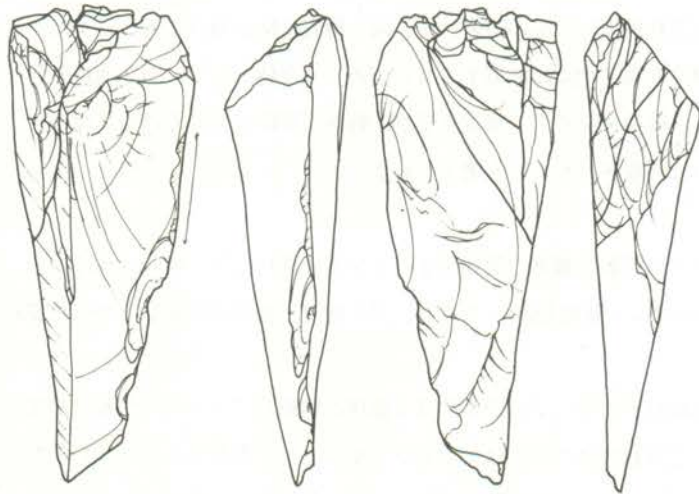
以上の諸例を通観すると、大きく2種の剝片剝離過程が復元される。(1)52、53に代表されるもので、厚味のある剝片の主要剝離面を打面として、素材剝片周縁に沿う剝片剝離をすすめるもの。(2)円礫を素材として、打面と剝離作業面とを交代させながら剝片剝離をすすめるもの。54～55、57～59など最も検出例の多いものである。56はその変異と見られる。以上の(1)及び(2)の過程は、下総II b期において、ごく一般的な剝片剝離の実態をよく具現するものと評価されよう。



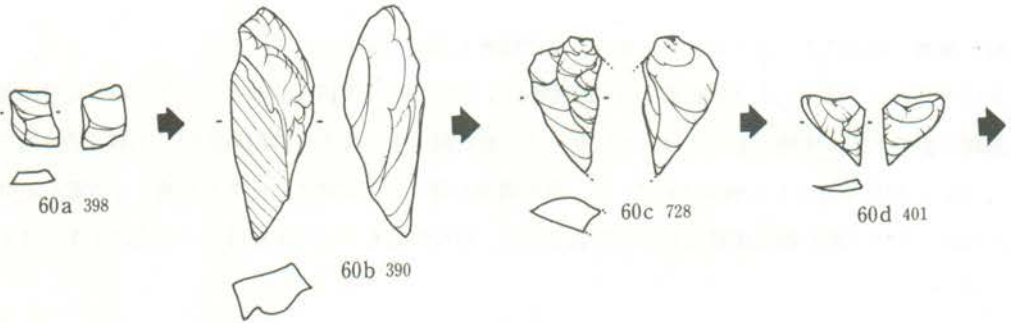
第33図 No 5 地点遺物出土状況



第34図 No 3, No 4, No 5 地点石器



60



60a 398

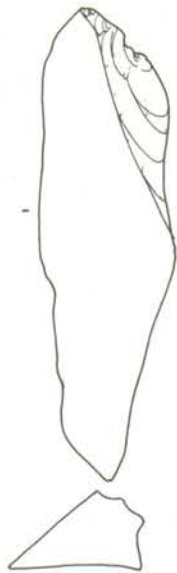
60b 390

60c 728

60d 401



60e 不明



60f 727



第35図 No.4 地点接合資料

No. 3 地点 ナイフ形石器破片(第18図) 1点があるが、残りは剥片、削片と破碎礫とからなる。剥片にはチャート(珪質粘板岩)のものが多く、同一母岩はNo. 2 地点にある。また、直接接合しないが、流紋岩、砂岩の礫片もNo. 2 地点に酷似するものがあり、全体として、No. 2 地点と何らかの関連があったものと推定される。礫片を見ると、焼成を受け、細かく破碎したもののばかりなので、大型礫片はNo. 2 地点に搬出、あるいは回収されたものと考えられよう。

No. 4 地点 ナイフ形石器先端部(第18図2)と少量の剥片とから構成されている。剥片の量は少ないが、接合するものが多い(第30図60)。ただし、出土地点、番号の判明しなかった資料が若干あり、接合線が完結しない。

ナイフ形石器は細粒砂岩製、7点の剥片は2個体の粘板岩で、このうち6点が接合した。残りは1点1個体となるが、この石質についてはホルンフェルスとした方が良いのかもしれない。

遺物産出層準に関しては、土層断面へ投影して再検討することができなかったが、遺物台帳記載の層位はVI層からVII層となっている。

No. 5 地点 南北に2つのブロックがあり、共にVII層上部から検出されている。

北側のブロックは、ナイフ形石器1点(第18図4)、剥片、削片等15点からなり、全て同一母岩に属する黒曜石製である。南側のものには、やはりナイフ形石器が1点含まれ(第18図3)、石核1点(第18図5)、剥片、削片等31点から構成されている。母岩構成を見ると、北側ブロックと共通する黒曜石が他を圧するが、ナイフ形石器は単独母岩の頁岩製であり、剥片中にもやはり単独母岩の玄武岩が1点含まれている。

第2章 聖人塚遺跡

全体で22のブロックを認定し、番号を付したが、その中には、例えばNo.2ブロックやNo.17ブロックのように、ブロック群として把えるのが妥当なものも含まれており、実際上のブロック数は若干これを上まわっている。この他に、上層遺構検出時、あるいは縄文時代の遺物包含層調査段階で200点を超える多量の石器が採集されており（第37・38図）、多くのブロックの存在を見落していた可能性もある。遺物の産出層準をもとにして、大別5文化層を設定した。

第1文化層 第1～第8ブロック（IIc期）

第2文化層 第9～第14ブロック（IIb期）

第3文化層 第15、第16ブロック（IIa期）

第4文化層 第17～第19、第21、第22ブロック（IIa期）

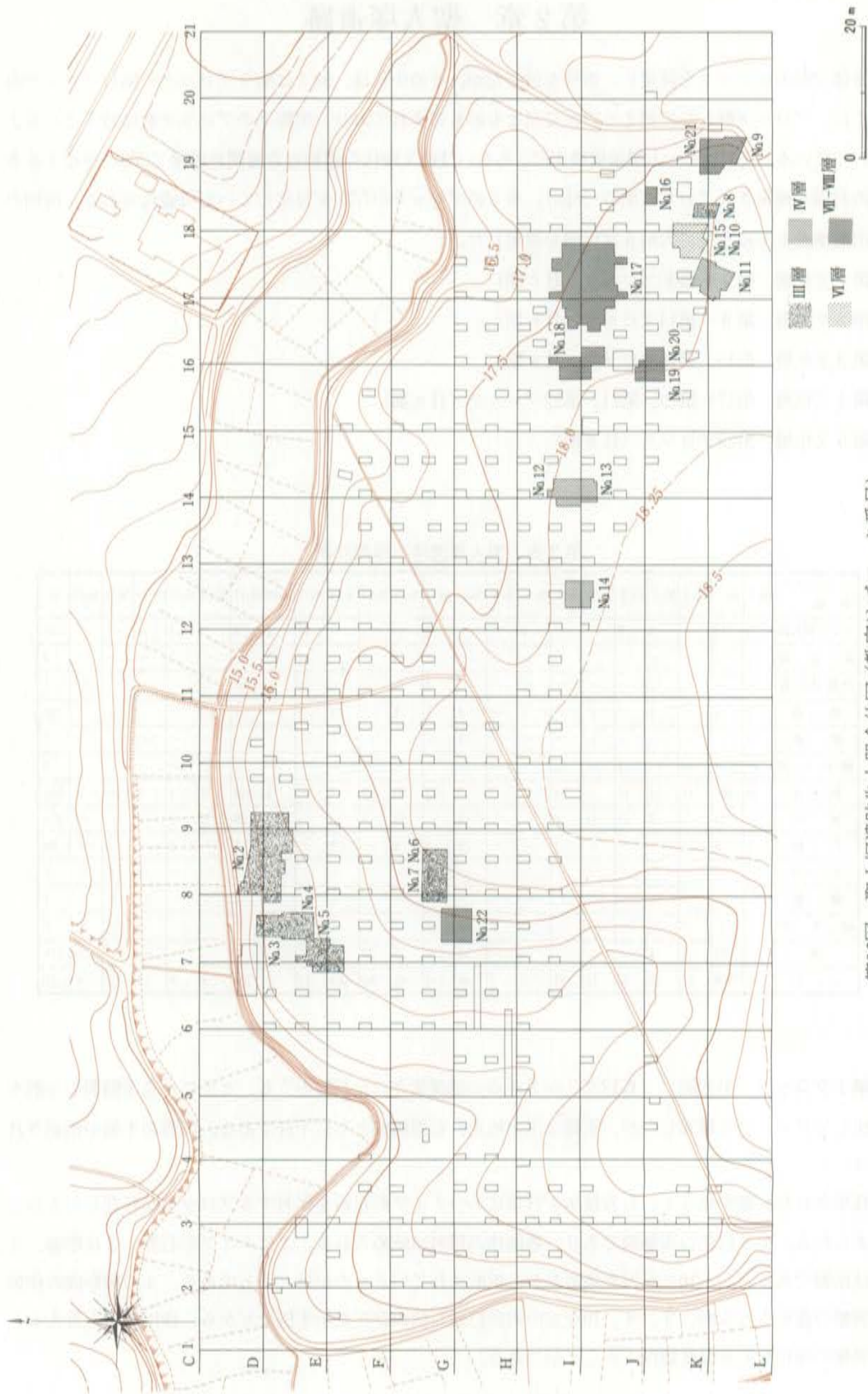
第5文化層 第20ブロック（IIa期）

第2表 聖人塚遺跡石器集計表

ブロック 分類	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20	No.21	No.22	計
ナイフ形石器	1	16	—	3	5	—	—	1	—	—	4	—	1	—	12	1	7	—	1	1	—	—	53
尖頭器	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	3
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
削器	2	6	—	1	—	—	—	1	—	1	5	1	—	2	—	—	2	—	—	—	—	1	22
彫器	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
楔形石器	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3
剥片	25	100	11	14	10	—	14	—	7	6	122	50	23	8	—	1	214	6	4	2	10	8	635
削片	—	144	5	3	21	11	6	—	—	16	—	13	9	3	—	3	29	3	2	8	—	—	276
石核	—	5	—	—	—	—	1	—	—	2	6	4	—	1	—	—	8	—	1	1	—	—	29
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	2
礫器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
敲き石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
礫	—	33	1	4	—	—	—	—	—	22	118	15	33	90	—	—	—	—	—	—	—	—	316
小計	29	306	17	25	37	12	21	2	7	48	256	85	66	104	12	6	263	9	8	12	12	8	1,345

第1ブロック（第39図） E12グリッドから一括採集された石器のうち、とくに白色玉髓製の一群を摘出してブロックを復元したが、正確な出土地点、石器組成ともに不詳である。調査の不備が指摘されよう。

採集された石器を見ると、石刃技法を背景にもつナイフ形石器を保有するブロックが存在したものと考えられる。全て白色の玉髓製であり、数個体の母岩が認められる。1はナイフ形石器、2は彫器、3、4は削器である。5～10に石刃を集めたが、折断されているものがほとんどである。4の稜形成の作業面調整の認められる例、2、4、10などの両設打面石核の存在を示す例などから、砂川のとも言える石刃剥離の様相をある程度類推することができる。



第36図 聖人塚遺跡先土器全体図 (数字はブロック番号)

第2ブロック (第40図～第45図) 第1文化層に帰属するブロックとしては、最も規模が大きく、また、遺物の量も豊富である。ブロック東端部に、0.8m×0.4mの長円形を呈する焼土があり、本ブロックと関連する可能性もあるが、詳細なデータが残されておらず、不分明なところが多い。

遺物の平面分布は、第40図に見るとおり、中央の密集部分と、その東西のやや疎な部分とに3分される。焼土遺構のある東側の部分を2-i、中央密集部を2-ii、西側の部分を2-iiiとしておく。ここで遺物の垂直分布を検討してみると、2-iiブロック部分が鍋底状に落ち込んでいるのが分る。2-i、2-iiiブロックの遺物は大体のところⅢ層上部に位置しているが、2-iiブロックはⅣ層以下に及ぶ状態で、特異と言ってよい。この場合、長径6m、短径3.5m、深さ0.5mぐらいの掘込みの存在を想定すると都合が良いのだが、調査時にそのような掘込みは確認されていない。

なお、この部分に関しては、調査担当者は文化層が2枚重複しているとの見方をとっているが、第41、42図に明らかなように、3ブロック間に同一母岩の分有関係があり、そのような見方の成立しないことを検証している。仮に掘込みが存在したと考えた場合、2-iiブロックを構成する遺物の多くは、その覆土形成期の比較的早い段階に廃棄・集積されたものと推察される。

石器組成は、ナイフ形石器(1～16)、削器(18～22)、楔形石器(23)などからなる。17は片面打製の小型石槍の破片とも見られるが、小破片であり判然としない。ナイフ形石器は何れも縦長剥片を素材としているが、(1)2側縁加工(1～3)、(2)1側縁加工(7、8)、(3)基部加工(9～12)、(4)部分加工(13～15)など加工部位の多様性に応じて形態的变化が大きい。

25～27、29が本ブロックの石核である。26は求心的剥離の認められる円盤形石核、その他は縦長剥片作出用の石核と考えられるが、剥離工程の復元は困難である。目的剥片(24)もあるが、石刃と評価し得るものはない。

石器の使用石材は、黒曜石8個体123点、頁岩8個体104点、玄武岩3個体19点、チャート6個体13点、粘板岩2個体11点、細粒砂岩2点、玉髓1点という構成である。このうち特に黒曜石aは67点、頁岩aは72点と、この2種の母岩によって全体の51%が占められている。礫は少量であるが、流紋岩、安山岩、粘板岩、砂岩などが認められる。なお、礫には被熱の痕跡が乏しく、礫群構成礫とは性格を異にするようである。

第3ブロック (第46図) 第2ブロックの西側に位置している。剥片、削片のみからなる小規模なブロックであるが、第2ブロックと共通する母岩構成を示している。Ⅲ層からの検出。

第4ブロック (第46、47図) やはりⅢ層出土である。北側の第3ブロックと同様に、狭い範囲から少量の遺物が出土しているが、ナイフ形石器(1～3)、削器(5)、調整痕あるいは使用痕のある剥片(4)、石刃(6)などが含まれ、器種的に充実している。ナイフ形石器は、(1)基部を中心に部分的な加工のあるもの(1、2)と、(2)素材剥片を斜断するもの(3)の2者がある。(2)は第2ブロックの(4)に近いが、(1)は第2ブロックにおける基部加工のナイフとは若干異っているように見える。

石材としては、頁岩を主に、チャート、細粒砂岩を従にする構成となっている。頁岩の中に、第2ブロックの頁岩aと同一個体に属するものが2点含まれている。

第5ブロック (第48、49図) 第4ブロックの南西に位置し、やはりⅢ層から遺物が出土している。器種構成としては、ナイフ形石器6点(1~6)、楔形石器1点(7)となり、小ブロックではあるが、ナイフ形石器の点数が多い。ナイフ形石器は破損しているものが多数を占め、全体的特徴も把握し難いが、(1)2側縁加工のピグミーナイフ(1)、(2)部分加工の諸形態(3~6)が含まれている。

石材を見ると、黒曜石が39点と全体の90%を占めている。黒曜石以外には、頁岩が3点、玄武岩が1点あるが、黒曜石のうち3個体、頁岩の1個体が第2ブロックと共通母岩であると認められる。

第6ブロック (第49、50図) 第5ブロックの南25mの地点に位置し、第7ブロックと並存する形となっている。両ブロックともⅢ層からの検出であるが、第50図から窺われるように、Ⅲ層自体の傾斜に従う様相を呈しており、斜面側に位置する第7ブロックの遺物の垂直分布幅が大きい。

本ブロックは総点数11点と小規模なもので、玄武岩4点2個体、細粒砂岩5点(個体数不明)、黒曜石2点2個体という構成を示している。器種構成は、玄武岩製の両面打製の小型石槍が1点あるのみである。

個体識別の不可能な細粒砂岩を別にすれば、玄武岩1個体が第2ブロック玄武岩cに、黒曜石2個体はそれぞれ第2ブロック黒曜石c、黒曜石dと共通母岩と見られる。

第7ブロック (第49、50図) 21点の資料は石核と剥片のみで、2次加工のある石器を含んでいない。資料数は少ないが、9種もの個別別資料が含まれている。さらに、これらの母岩の大半が、第2ブロックと共通していることも重要な特徴であろう。

以上のように、第2ブロックから第7ブロックまでの6ブロックは、それらの母岩構成において、相互に重なりをもつことから、形成過程における有機的関連を有するであろうことが推定される。すなわち、全般的な特徴として、9種32母岩を集中保有する第2ブロックの母岩の一部を、他のブロックが保有するとともに、少量の異種母岩を補完する状況が指摘される。このことと共に、各ブロックの石器組成の差異、すなわち、ナイフ形石器を保有するもの3ブロック、石槍を保有するもの1ブロックというあり方から、6ブロックからなる単一のユニットの形成には、複数の集団が、相互につながりをもちながら関与したであろうことが考えられよう。

第8ブロック (第51図) Ⅲ層内より2点の石器が近接して採集されている。1は黒色を呈する粘板岩製のナイフ形石器。素材は原礫面を留める縦長剥片であり、背面右側縁に急斜なブランディングが施されている。本期としては稀な形態であろう。2は黒曜石の貝殻状剥片に細かな剥離痕が認められる。

第9ブロック (第80図) 産出層準はⅣ層であり、第21ブロックと重複しているが、層位と個体識別に準拠して分離されている。

資料は全てで7点あるにすぎない。全例黒曜石の細かい削片である。第21ブロックは玉髓主体のブロックだから、両者の分離は容易である。なお、本ブロックに関しては別項にて再び触れたい。

第10ブロック（第56、66図） このブロックも重複関係があり、第15ブロックの上層に位置している。IV層からの検出。第15ブロックがVI層であるため、層位的に重なり合うところもあるが、分布範囲が若干ずれるとともに、使用石材にも差があるところから、両ブロックの分別は容易である。

石器としては、不整小型の剥片、削片が多くを占めているが、凹削器（1）、彫器（2）が1点ずつ含まれている。凹削器はチャート製で、折断剥片側縁にノッチが入る。彫器は黒曜石製で、縦長剥片の頭部を折り取り、その面より1条の刻打が加えられている。石材にはチャート、黒曜石、玉髄、頁岩の4種が認められ、このうち、チャート1個体、黒曜石1個体が第11ブロックと共通している。頁岩の個体中にも、第11ブロックと酷似するものが含まれているが、同一母岩と断定することはできなかった。

礫片については、別ブロックとの接合を実施できなかったが、第11ブロックの砂岩、流紋岩と明らかに同一の母岩と見られるものが含まれている。ここで、両ブロックの構成礫を比較してみると、共に被焼成の礫片から構成されているが、第10ブロックの礫片が全体として細かく砕けており、就中、砂岩系の礫に、消耗の顕著な破砕片が目立っており、第10ブロックの礫群→第11ブロックの礫群という前後関係が推定される。従って、両ブロック間の前後もこれに従うのであろう。

第11ブロック（第52図～第56図） IV層からV層上部にかけて遺物が出土している。平面分布を見ると、北側に礫片を主体とする小ブロックが認められるが、中心はその南側にあり、礫片に入りまじるように石器が分布し、密度の濃い集中部分を形成している。

石器には、ナイフ形石器（1、3、7）、角錐状石器（4）、各種削器（2、6、8、9、10）等があり、他に剥片（11、13）、石核（14～18）がある。5は多分、角錐状石器の破片であろう。12には腹面剥離があり、削器とも考えられるが、石核の一種かもしれない。石器素材として横長剥片の使用が著しい。

一方、石器の母岩構成を見ると、3種6個体の石材が認められる。すなわち、黒曜石1個体51点、チャート1個体35点が多く、頁岩には4個体あるが、いずれも少数である。ただし、黒曜石の個別別資料の大半は細かい剥片で占められており、製品もしくは、目的剥片の類は遺存していない。

礫種としては、流紋岩が圧倒的に多用され、10個体分の母岩がある。次いで砂岩が7個体、安山岩が6個体、粘板岩、チャート各1個体の順番となり、本地域におけるIV層の礫群構成礫種としては一般的傾向を示している。なお大半のものに被熱の影響が窺えるが、安山岩の一部には、その形跡が無く、あるいは磨石の破片が混入しているのかもしれない。第10ブロックとの関連性に就いては既に前項に指摘したとおりである。

第12ブロック、第13ブロック（第57図～第63図） 南北にほぼ同規模なブロックが並存している。北側のものを第12ブロック、南側のものを第13ブロックとした。両ブロック共にIV層の検出であり、V層には及んでいない。

石器組成から明らかのように、第12ブロックには石核と剥片が多く、接合関係を有するものも少なくない。一方、第13ブロックは、礫の数が石器のそれを上回っており、礫群の様相が濃い。また、両方のブロック共に、定形的な石器が少ない。第12ブロックでは、削器（10a）がある程度で、細加工痕のある剥片（2～4）を僅かに加え得るにすぎない。第13ブロックには、ナイフ形石器破片が1個体あるの

みで(1)、残余は不定形の剥片、削片によって占められている。

接合資料は3個体分ある。8は玄武岩製の資料で10点が接合する例。図の展開方法が良くないので、剥離工程の理解が難しいが、基本的には、打面とネガティブ剥離面を交代させるものと考えている。しかし、打点が不規則に移動しており特質を把握し難い。9は典型的な打面交代の観察される例で、所謂チョッパー状の石核となっている。玄武岩製。10は剥片素材の単打面石核に剥片が接合するもの。10aは打面作出剥片で、削器に加工されている。頁岩製。

母岩構成は、玄武岩が最も多用されている。2個体48点を数えるが、そのうち1個体は1点のみしかなく、接合資料を含む残りは全て同一母岩と見られる。頁岩も2個体あり、総数で16点ある。黒曜石は1個体12点と少なく、ほとんどが削片である。礫種は流紋岩がほとんどで、6個体が識別される。他には、砂岩と安山岩が1個体ずつある。両ブロック間で若干礫種を異にするようであり、接合するものは1例にすぎない。

第14ブロック (第56図、第64・65図) 遺物総数104点中90点が礫によって占められ、礫群として評価してよい。第12、13ブロックの西方22mの地点に位置し、IV層からの検出である。

石器組成を見ると、削器(3、4)と使用痕あるいは細かい剥離痕のある剥片(5、6)が中心になっている。3は玉髓製で本期に良く見られる盤状端削器。4は黒曜石の小角礫破片の一端に付刃したノミ状の端削器である。石材は、頁岩、黒曜石、玉髓の順に多いが、特に頁岩には3母岩10点が含まれている。

礫群は3種18個体の母岩によって構成されている。最も多いのは流紋岩で13個体、次いで安山岩4個体、砂岩1個体の順で、やはり流紋岩の占める割合が高い。礫は比較的大型の礫片の状態のものが目立つ。大部分のものに被熱による赤変が認められる。黒斑をもつものも若干ある。

以上の第9～第14ブロックがIV層に帰属するブロックであり、仮に第2文化層としておく。第2文化層のブロック群を通観すると、第9ブロックを除く大部分のブロックが、疎密の差はあれ、礫群を中心とする遺物分布を示すという特徴を指摘することができる。個別別資料をもとにしたブロック間のつながりに関しては、第9ブロック-第10ブロック-第11ブロックという関係、もうひとつは、第12ブロック-第13ブロックという関係が抽出されるが、第14ブロックには他に関連する資料が含まれていない。いずれにせよ、各ブロックの規模も小さく、また、関連ブロックの数も少ない。さらに、全般的に貧弱な石器組成を示していることも指摘しておく必要がある。このようなブロックのあり方は、元割遺跡第2地点と対照的である。

第15ブロック (第66・67図) 第6ブロックの下層から検出された。遺物は4.5m×2mの範囲にまばらに分布している。産出層準は、III層下部からVII層に及んでいるが、VI層下位にほぼ同レベルで集中し、大体そのあたりが本来の生活面かと推定される。おそらく、AT直下の層準と考えられよう。従って、先に述べた元割遺跡第4、第5地点に後続することになる。

ブロックの内容を見ると、13点12個体のナイフ形石器から構成され、単一器種の特殊なブロックと評価されるが、遺跡内からはこれに関連するブロックは得られていない。おそらく、猟期にキャンプサイ

トを離れた、射手達によって残されたブロックであろう。

ナイフ形石器は比較的大型のものが多く、素材の形状に従って縦に長いものばかりであるが、ゆるやかに湾曲した背部をもつ半月形、あるいは3角形を呈する例が印象的である。素材は両設打面を持つ石核から落とされた石刃、あるいは縦長剥片であるが、ブランティングにより本来の形状を失っている。ブランティングは、腹面、背面両面から加えられ、素材である石刃のほとんど中軸線近くにてまで及ぶ結果、器体横断面は厚味のある台形、あるいは3角形に近い形状を示している。

石材は、6がチャートである以外は全例粘板岩が選ばれている。母岩の個体識別は難しいが、2と7、3と5は同一個体と考えている。その他の7例に就いては、全て別個体に属する可能性が高く、全般的に多様な個体別母岩構成をしている。

第16ブロック (第68図) 剥片4点、舟底形の三稜尖頭器(角錐状石器)1点、ナイフ形石器1点、合計6点からなる小規模なブロックである。

石器の産出層準を検討すると、2の玉髓製ナイフ形石器のレベルが高く、IV層からの検出であるが、残りの5点はVII層上部の同一水準から検出されている。母岩構成を見ると、下層検出の5点は、1個体3点のチャートと、やはり1個体2点の黒曜石であって、上層の玉髓を含んでいないところからも、2が時期的に分離される可能性を示唆するものと理解されよう。しかし、これには種々の問題が残ろう。

1は黒曜石製の舟底形尖頭器である。半欠している。各面は全て調整剥離痕によって覆われているが、甲板面の剥離が最も旧く、その面を打面として舟腹面が作出されている。稜上加撃は認められない。2は打面を大きく残す縦長剥片素材のナイフ形石器。両側縁に2次加工があるが、それは鋸歯状のブランティングであり、やはりIV層に帰属させておきたい。

第17ブロック (第69図～第77図) 遺物は18m×16mの範囲内に、大きく4箇所のみとまりをもって分布している。これらを、第69図に示したように、17i～17ivの4ブロックに分離して考えたい。各ブロックの分布密度では、17iブロックの密度が際立っている。垂直分布を見るとVII層中位に極大値をもつが、17iブロック周辺ではVIII層に及ぶ分布状況を示している。VII層自体の層厚が薄いこともあり、産出層準の厳密な決定は困難であるため、ここでは一応、VII層下半のいずれかの面ということに留めておきたい。

石器類の大半は剥片によって占められているが、2次加工のあるものとしては、ナイフ形石器(1～5)、削器(6)、楔形石器(7)、打製石斧(8)、片刃打割器(38)などがある。粗製の石刃が多いが、その一部を模式図にて示した(9～37)。39は石斧作出剥片で、この母岩には、これ以外にも同種の剥片がある。40～43は石核、44～47に接合資料を掲げた。

ナイフ形石器は、(1)縦長剥片を素材として、片側の縁辺を中心に2次加工の認められるもの(1、3)。(2)縦長剥片の基部周辺に2次加工の認められるもの(4、5)という2種が中心となる。2、3は破片なので良く分らないが、完存例ではいずれも打面が残されている。6の削器は石刃製端削器の典型例であり、該期の類品は、少なくとも南関東地方に限るならば、極めて稀少であろう。8の打製石斧の刃部付近には、軽微な磨痕が認められる。

石刃は全体に粗製とは言え、直線的な、そして側縁と平行する背稜を有するものが多い。背面構成を

見ると、打面に接する小剥離面（a群）と、背稜に界される大剥離面（b群）という2群の剥離面を有するのが原則である。a群は石刃剥離に先行する石核調整のうち、特に頭部調整に起因するものである。b群については、大半の資料が打面方向からの単一走行の剥離面をもつが、少数の例外がある。この傾向は石核からも読み取れ、両設打面型石核（43、46、47）に対応する。41の側面調整、47に認められる90°の打面転移なども考慮される要があろう。

接合資料で注意されるのは、大型分割礫を石核素材に選ぶ例（44）と、原礫を分割し、分割面であるポジネグ両面がそのまま打面として利用される例（45）である。44と45は同一母岩（玄武岩a）であるから、素材を大きく荒割りすることが石核作出の第1段階であることが知られる。

次に、本ブロックの母岩構成を見ると、玄武岩と頁岩が主体的に存在し、玉髓、細粒砂岩、粘板岩等が少量これに加わる状況を呈している。玄武岩はa～c 3個体が識別され、個体a 55点、個体b 15点、個体c 12点である。頁岩は個体数が多く、全部で5個体あり、個体a 55点、個体b 27点、個体c 15点、個体d 3点、個体e 4点となっている。

各個体の分散状況を70図に示した。17iブロックが玄武岩a、頁岩a両母岩の搬入地点であり、それらを素材とする剥片剥離の場であるのに対し、17ivブロックは頁岩bの消費地点であった。両ブロックの分布密度の差異は、その場で消費された母岩が、1対2であることに対応している。一方17ii、17iiiブロックの母岩構成の特徴は、各種の個別別資料を少量ずつ万遍なく含むことで、前2者とは全く異った様相を呈している。石器組成の上からも、後者にはナイフ形石器以外に、削器、楔形石器が加わり、製作址と対応する生活址に伴う廃棄空間としての色彩を帯びていると考えられよう。

第18ブロック（第78図、第81図） 第9ブロックの下層から検出された。産出層準はVII層基底面であり、VIII層に若干くい込んでいるものがある。9点の資料があり、白色玉髓製の石刃が1点あるが、その他の8点はいずれも黒曜石製で、不整な剥片と削片とからなっている。

石刃は両設打面石核から落とされているが、打面転移の過程で、石核側面に再調整が施されたことがその背稜を切る小剥離面の存在から明らかである。

第19ブロック、第20ブロック（第79図、第81・82図） 相互に一部重複する状態で、かつ若干のレベル差を有するかたちで、2箇所ブロックが近接するため、調査時には同一ブロックとして把握されていたが、整理時に再検討を加えた結果、上下2枚に分離した。

上層のブロックを**第19ブロック**とした。産出層準はVII層の上部である。ナイフ形石器1点（第82図1）、剥片6点（2～5）、礫片1点とから構成されている。剥片のうち図示した4点に就いては石刃とした方が良さだろう。

ナイフ形石器は黒曜石製で、尖頭部を欠損しているが、石刃製2側縁加工となる。石刃2は頁岩製で、背面右側縁にノッチがある。石刃3～5は細粒砂岩製。他の2点は玄武岩と黒曜石が素材である。礫片は砂岩の細片で、ハンマーストーンの破片かもしれない。

下層のブロックは**第20ブロック**とする。第81図2～5に出土資料をまとめたが、このうち、図の4は挿図作成の不手際のため、出土地点不明の資料が混入したものであり、本ブロックには含めないことに

する。石器産出層準はⅧ層であり、本遺跡最古の文化層を形成している。

石器組成は、基部調整のある広義のナイフ形石器（2）、石刃（3、5）を中心としている。残りは石核1点、剥片、削片8点となっている。ナイフ形石器と石刃以外の9点は、全て同一個体に属する黒曜石製であり、残核様の小石核と不整小型の剥片類によって占められている。

2は頁岩製の基部整形石刃である。素材の石刃は、打面を残し入念な頭部調整の施されたもので、背面にはY字形の背稜が認められる。背面の剥離は打面側からのものが主体となっているが、尾部に逆方向からの面が1枚残されているのが印象的である。2次加工は精細で、基部を舌状に整形するかのように、背-腹両面から施されている。

3、4は比較的大柄な石刃。大きめの打面をもち、また、2にも看取された頭部調整痕を留める。2例ともに先細りの形状となる。3は粘板岩、4は凝灰岩と頁岩とが互層状に入り組んだ石材が用いられている。図では分らないが、両例共に微細な刃こぼれが縁辺部にひろく観察される。

第21ブロック（第80図、第83・84図） 第9ブロックの下層にあり、層的にはⅦ層の中位に相当する。既に述べた様に、第9ブロックとはレベル差を有し、構成母岩も全く異なるところから、両者の分離は容易であった。

全てで13点からなる小規模なブロックである。石器組成は、打製石斧1点（第84図）、剥片類12点とからなるが、剥片のうち1点（第83図7）には2次加工があり、粗製の削器と分類される。剥片の大半は不整形なものだが、1点だけ石刃が含まれている（6）。母岩構成は、13点中8点が同一個体に属する玉髄で、7の削器もこの母岩から作られている。次いで頁岩が1個体3点あり、そのうち1点が石刃である。細粒砂岩は1点1個体で、部厚い礫片様のもの。石斧は緑色砂岩製。

石刃は1点しかなく、全般の特徴を把握し難いが、背面2稜の大き目のもので、上下に打面を残し、所謂 *outrépassé* の形態となっている。上下の打面はいずれも複数の剥離面をもち、かつ頭部調整のゆき届いた状態が観察される。これらの特徴から、第19ブロックの石刃より、第20ブロックの石刃、あるいは第17ブロックの石刃と共通した技法の存在が指摘されよう。

石斧は両面打製で、表裏に原礫面を留めている。形態的には縄文時代の撥形石斧に近い。扇形に開く刃部の周辺には磨耗痕が著しく、表裏共に部分的に磨かれたように見えるが、意図的な磨痕とは見られない。

この資料に関して特に興味深い点は、その頭部に剥片の接合することである。剥片自体は、石斧の作出剥片と言うよりも、むしろ石器使用時の破損と考えられるのだが、破損以降の破片の来歴が問題である。それと言うのも、接合剥片が第21ブロックとは遠く離れた第10ブロックから検出されているからである。第10ブロックはⅣ層に属するから、本ブロックと直接的に結びつくはずはない。そこで考え得る可能性は、本ブロック上層の第9ブロックを媒介として、間接的に第10ブロックと関連するのではないか、ということである。すなわち、(1)第9ブロック占地集団による破片の拾得、(2)第9ブロック占地集団の第10ブロックへの移動に伴う破片の移動とその廃棄、という過程が想定されるのだが、さらに詳しく検討してみたい。

先に見てきたように、第9ブロックは礫群を伴わず、細かい削片が少量あるブロックで、礫群を保有

する第10ブロックとは性格を異にし、むしろ、石器の再加工、刃つけなどの一過的行為の場であったと推定される。ここで、仮に石斧が介在することによって、第9ブロックと第10ブロックとが結ばれるのなら、第9ブロックを形成した主体は、おそらく第10ブロックの主体と重なるであろう。さらに、第11ブロックは第10ブロックと時間差をもって形成されたと考えられるから、(1)から(2)への過程は、次のように再構成されよう。

I 第10ブロックの形成

II 第10ブロックの主体による第9ブロック

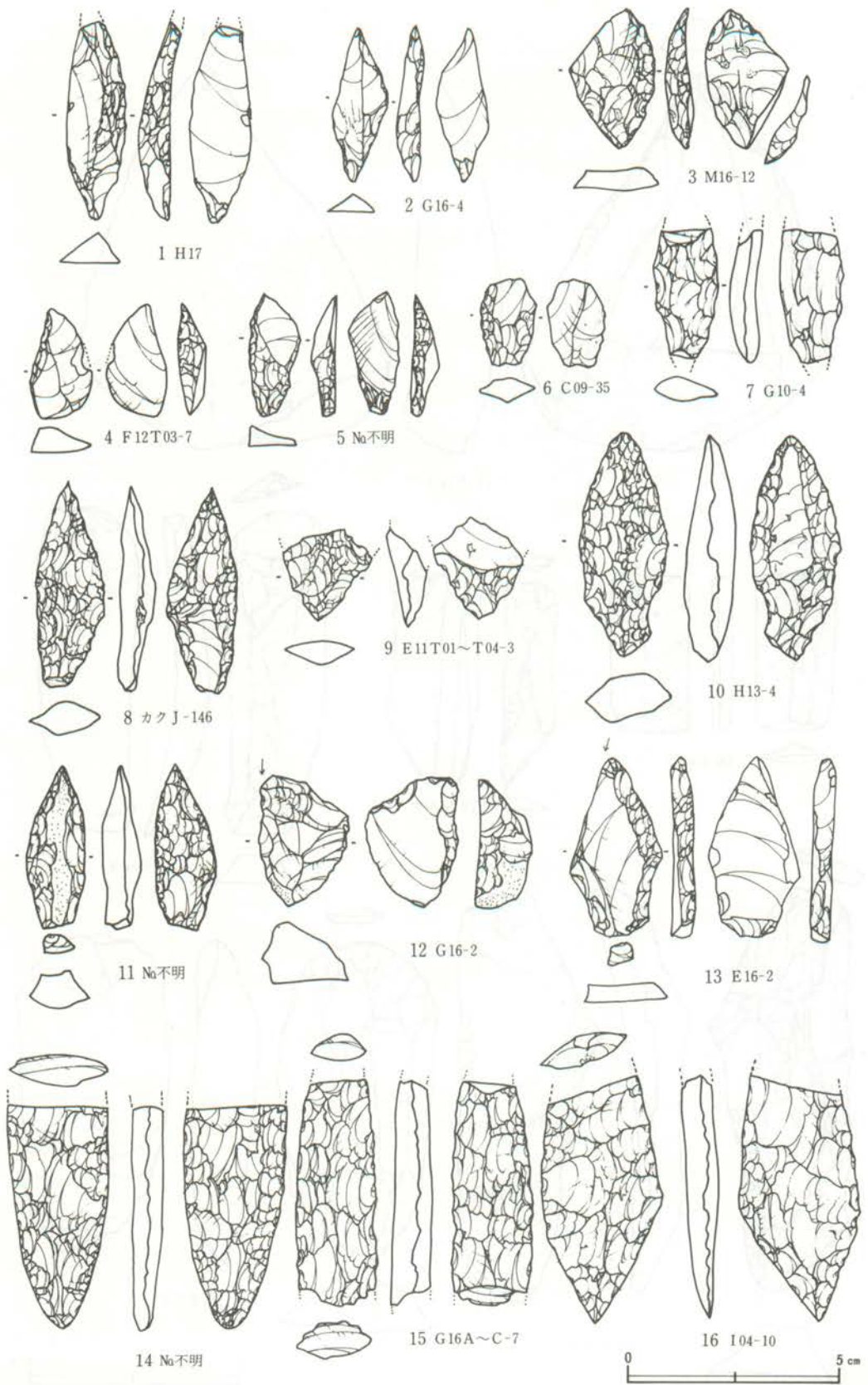
の形成と廃棄（石斧破片の拾得と移動）

III 第10ブロックの廃棄（石斧破片の廃棄）

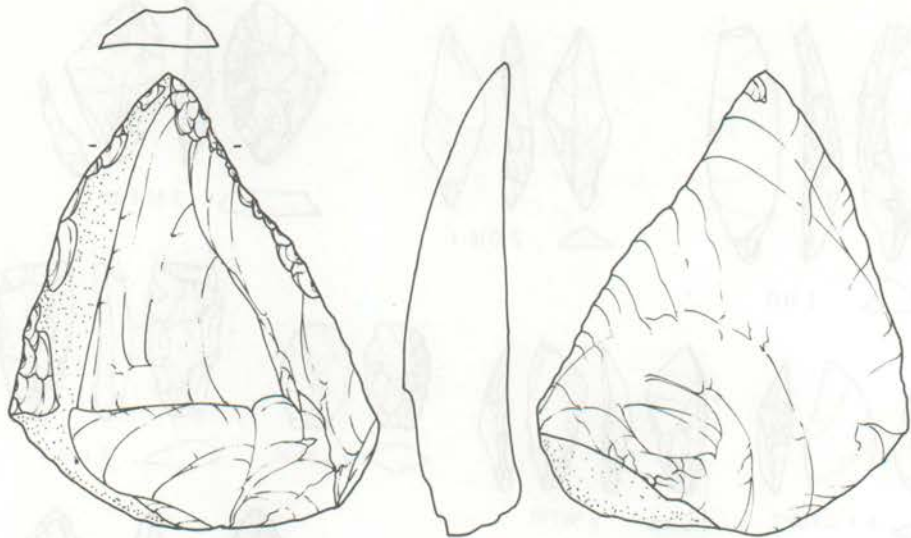
IV 第11ブロックの形成

すなわち、IからIIIの過程は継起的であり、第9ブロックと第10ブロックは同時存在したと考えられる。IIIとIVとは、この順番になることは間違いないが、第11ブロック形成時に若干の石材補充があり、これが遺跡内における別集団との接触によるものとする有力な根拠も無いから、あるいは、ごく短期的ではあれ、時間差をもつものと理解しておきたい。この両ブロック形成期にはさまれた短期的な移動期間内に石材補充が行なわれたのであろう。

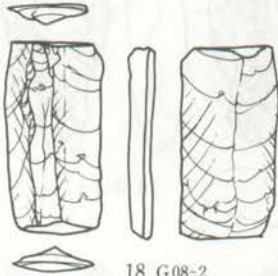
第22ブロック（第84図） 剥片8点が小範囲から出土している。出土層準の詳細は不明だが、VII層中である。石器は全て単一母岩の玄武岩で、石刃を含む。打面を大きく残し、頭部調整を欠くところから、おそらく、VII層でも上半分に編入されるのかもしれない。石器集中部に近接して、炭化粒の集中部分が検出されている。



第37図 表面採集の石器 (1)



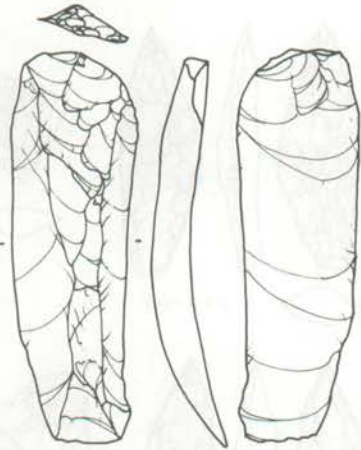
17 F14-9



18 G08-2



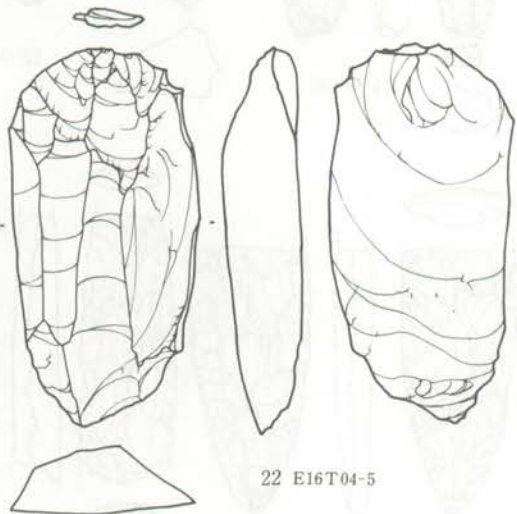
19 No不明



20 E04-5



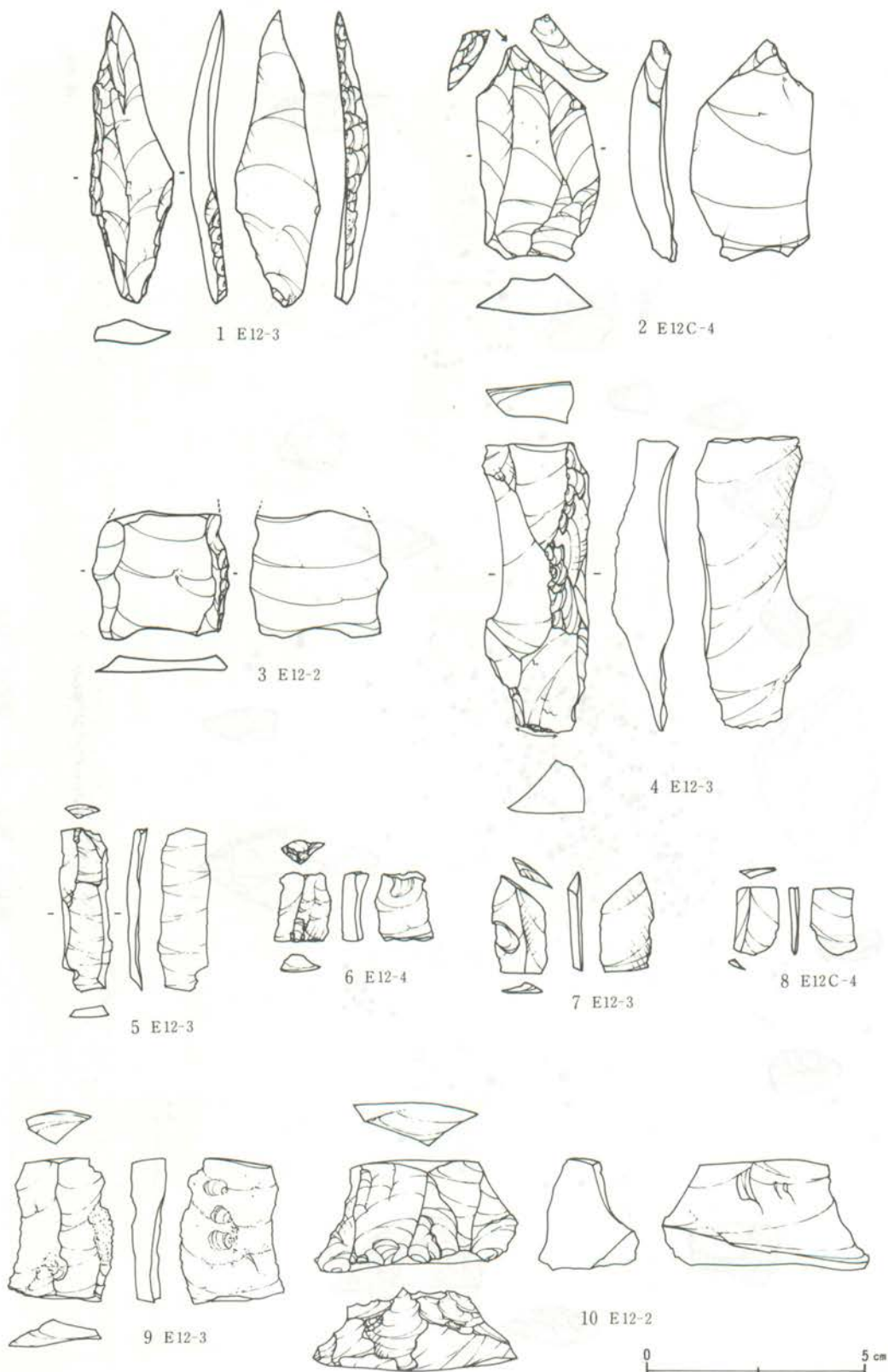
21 C08-1



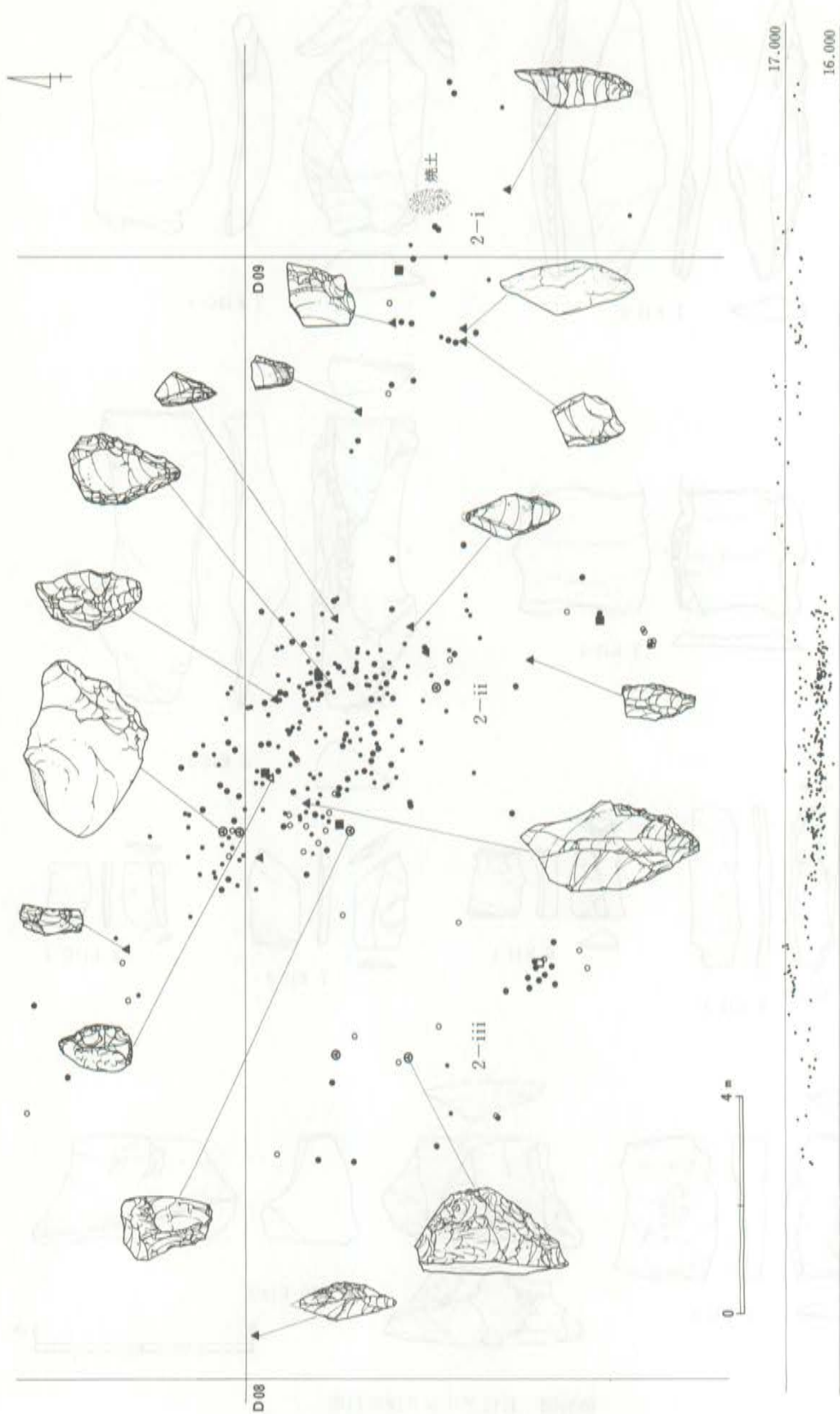
22 E16T04-5



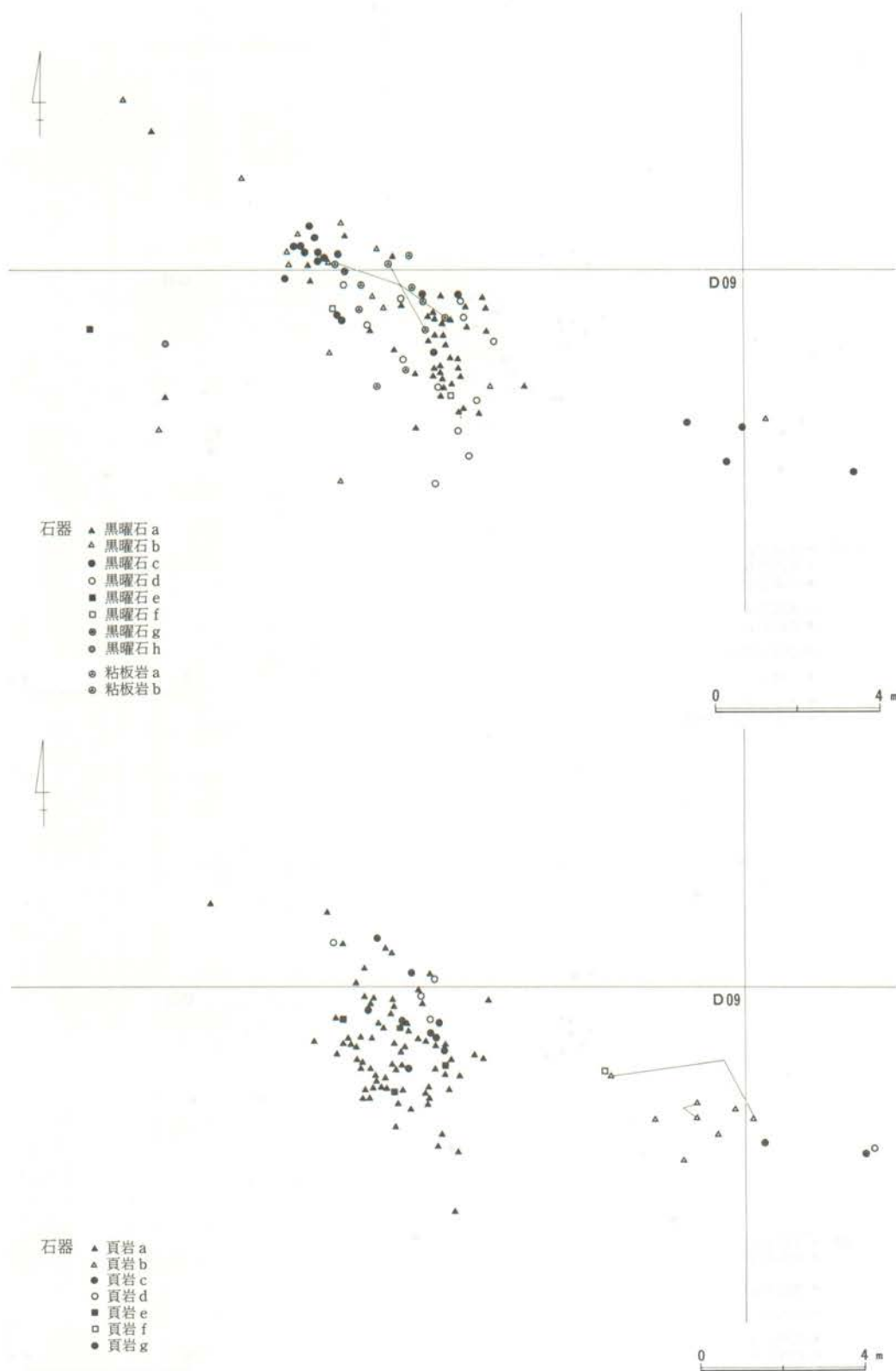
第38図 表面採集の石器 (2)



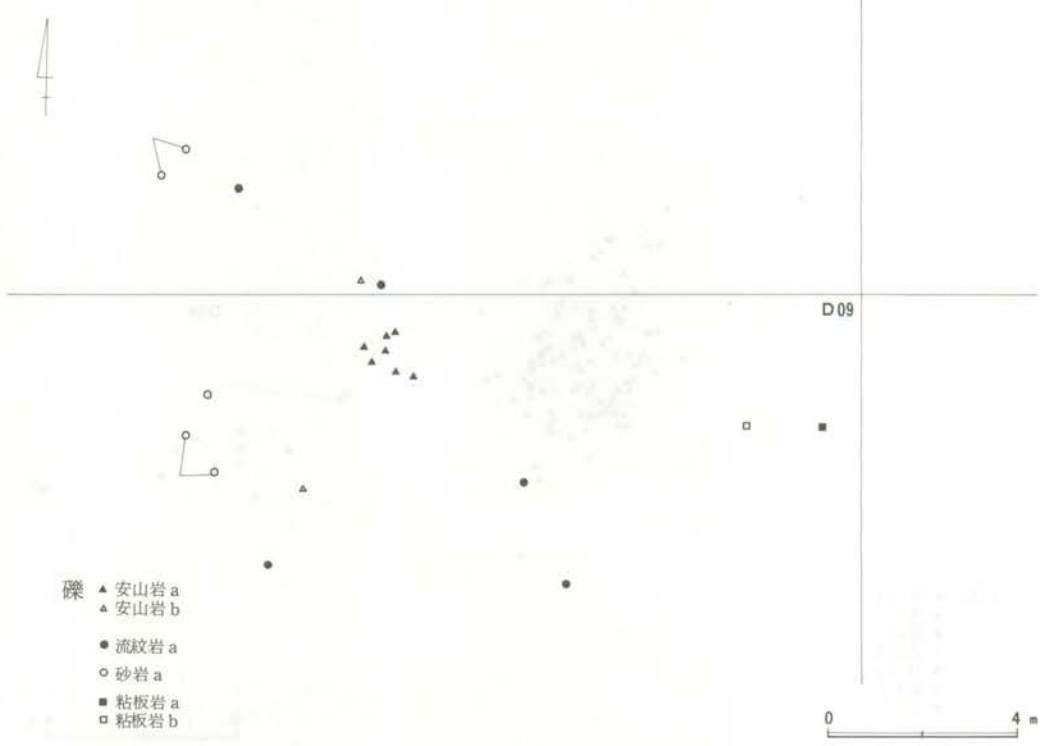
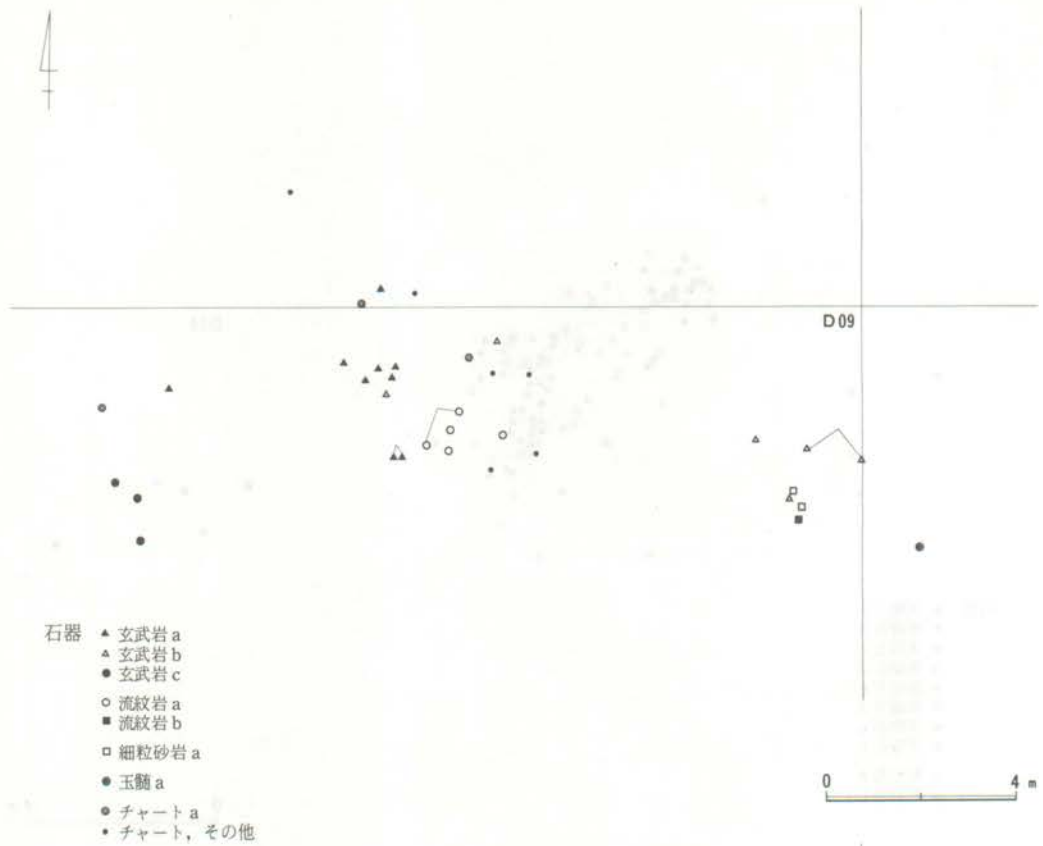
第39図 E12グリッド採集石器



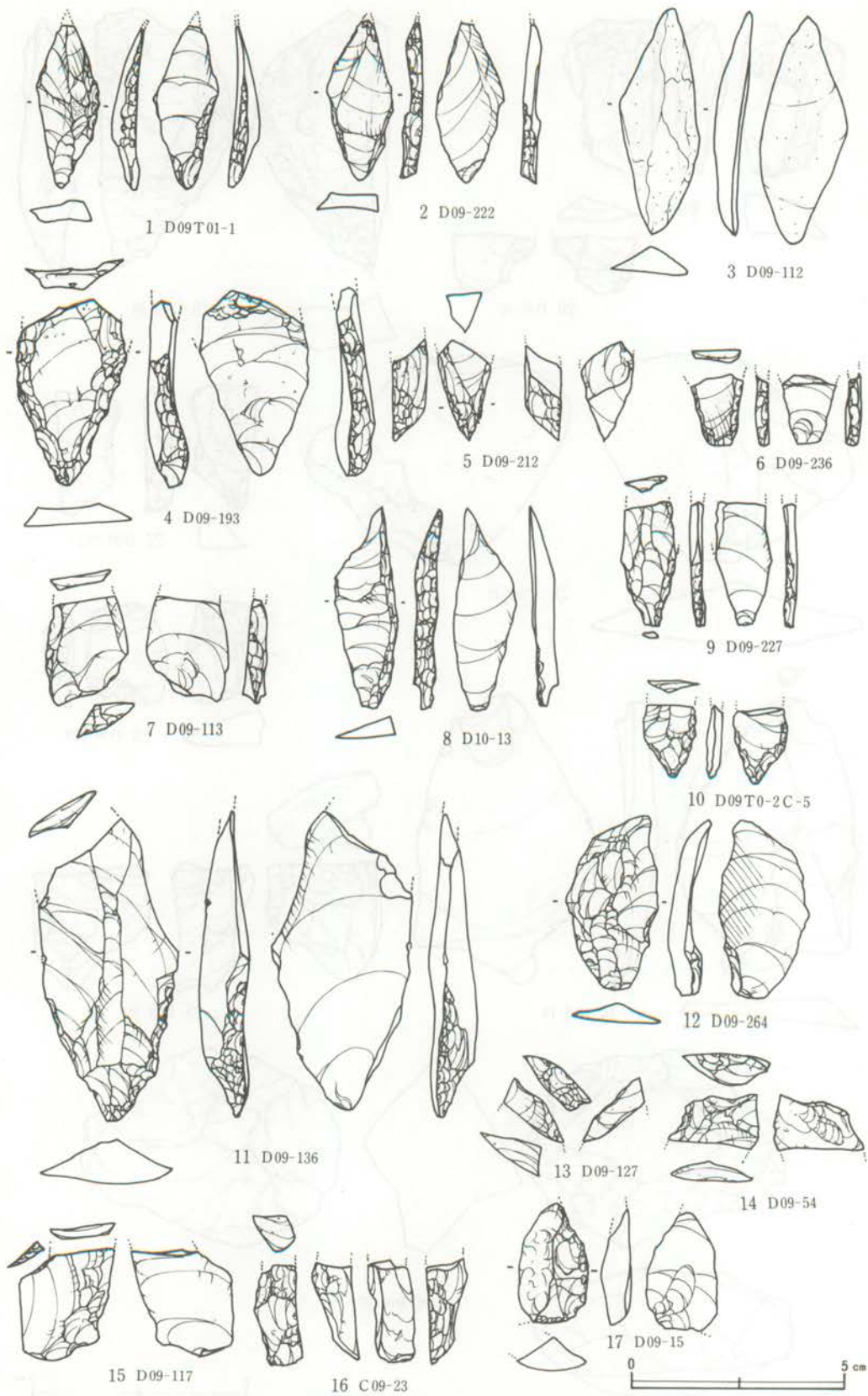
第40図 第2ブロック遺物出土状況



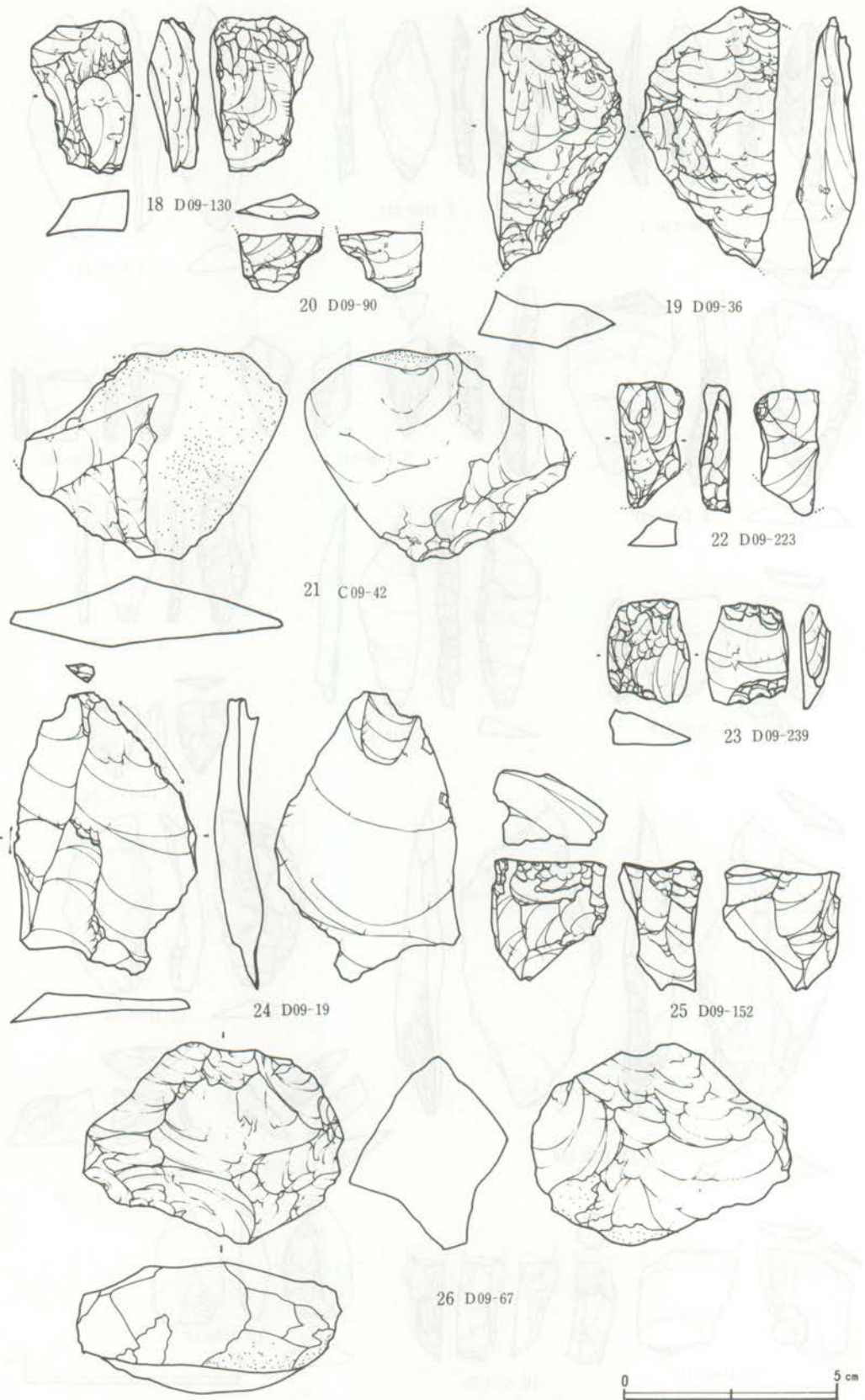
第41図 第2ブロック母岩別分布・接合関係 (1)



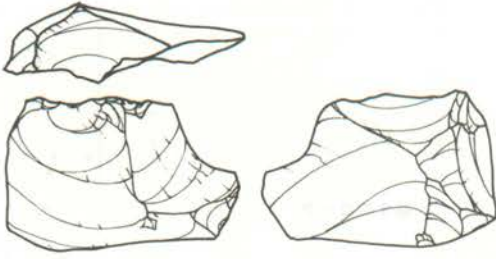
第42図 第2ブロック母岩別分布・接合関係 (2)



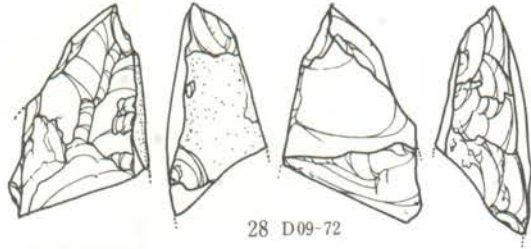
第43図 第2ブロック石器 (1)



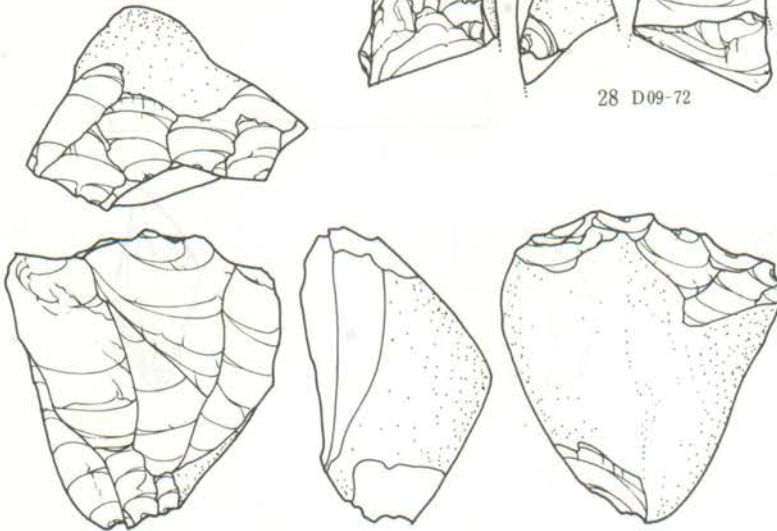
第44図 第2ブロック石器 (2)



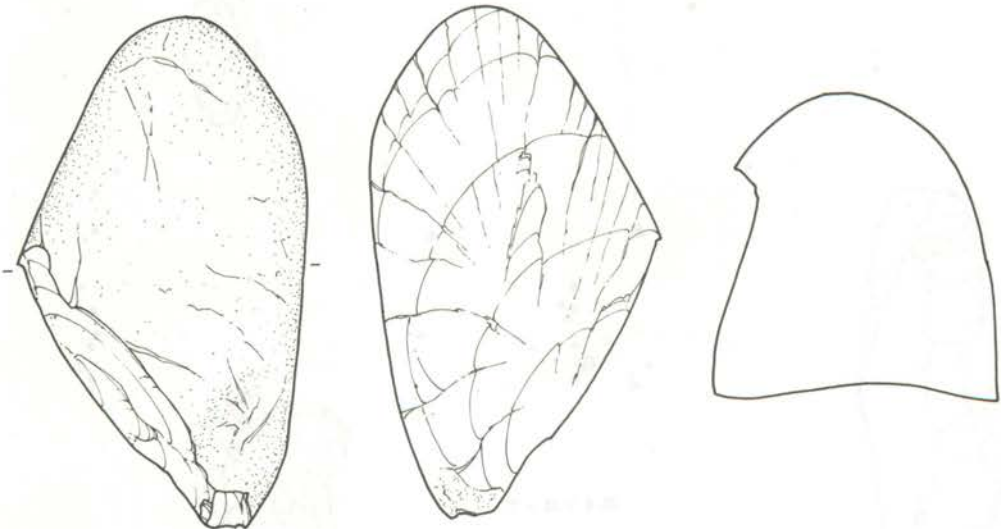
27 D09-257



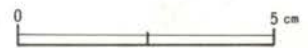
28 D09-72



29 D09-119

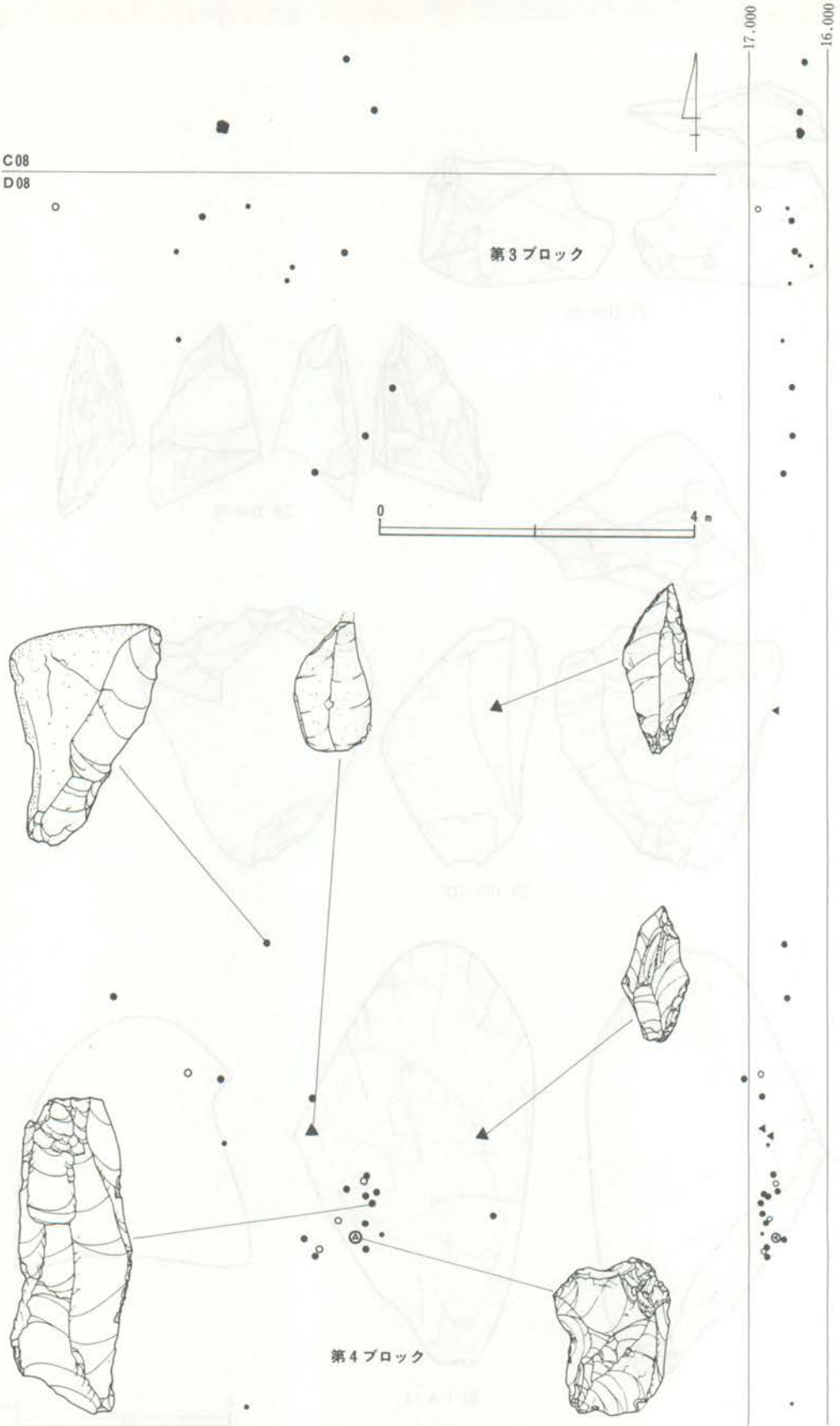


30 レA-11

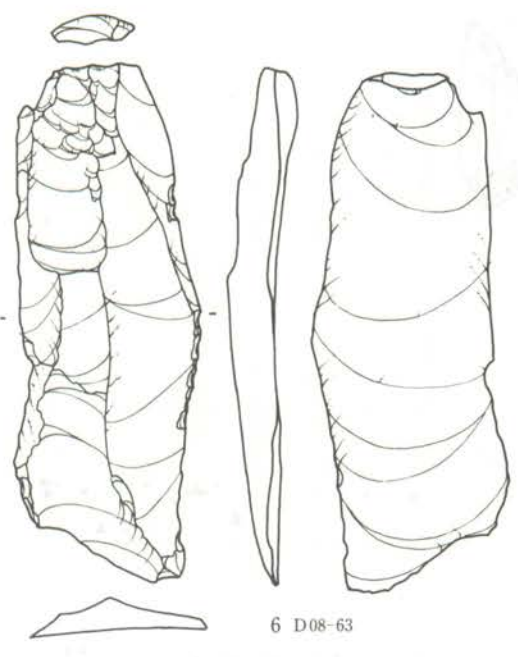
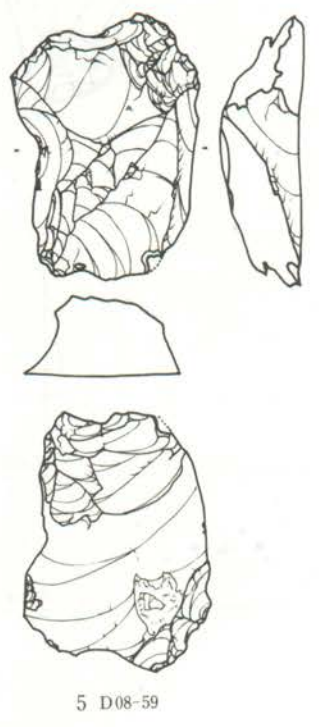
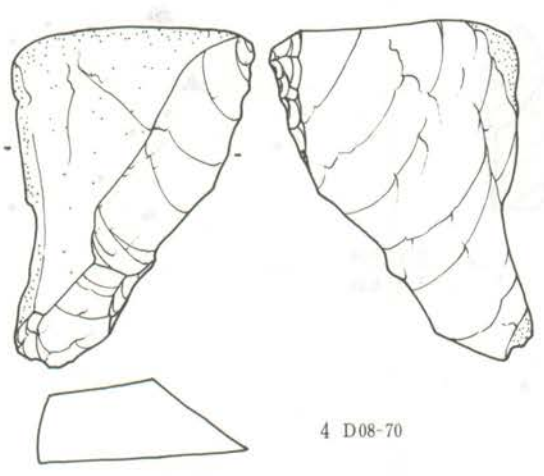
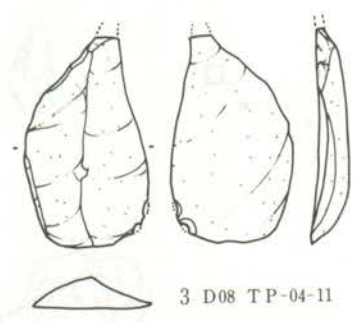
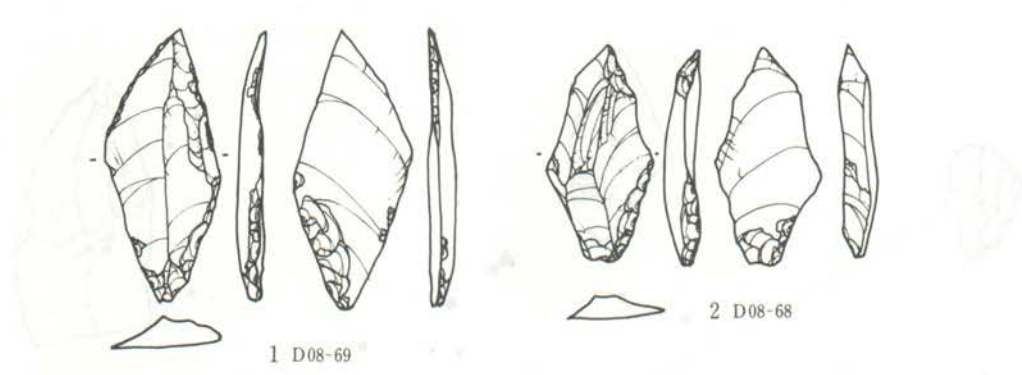


第45図 第2ブロック石器 (3)

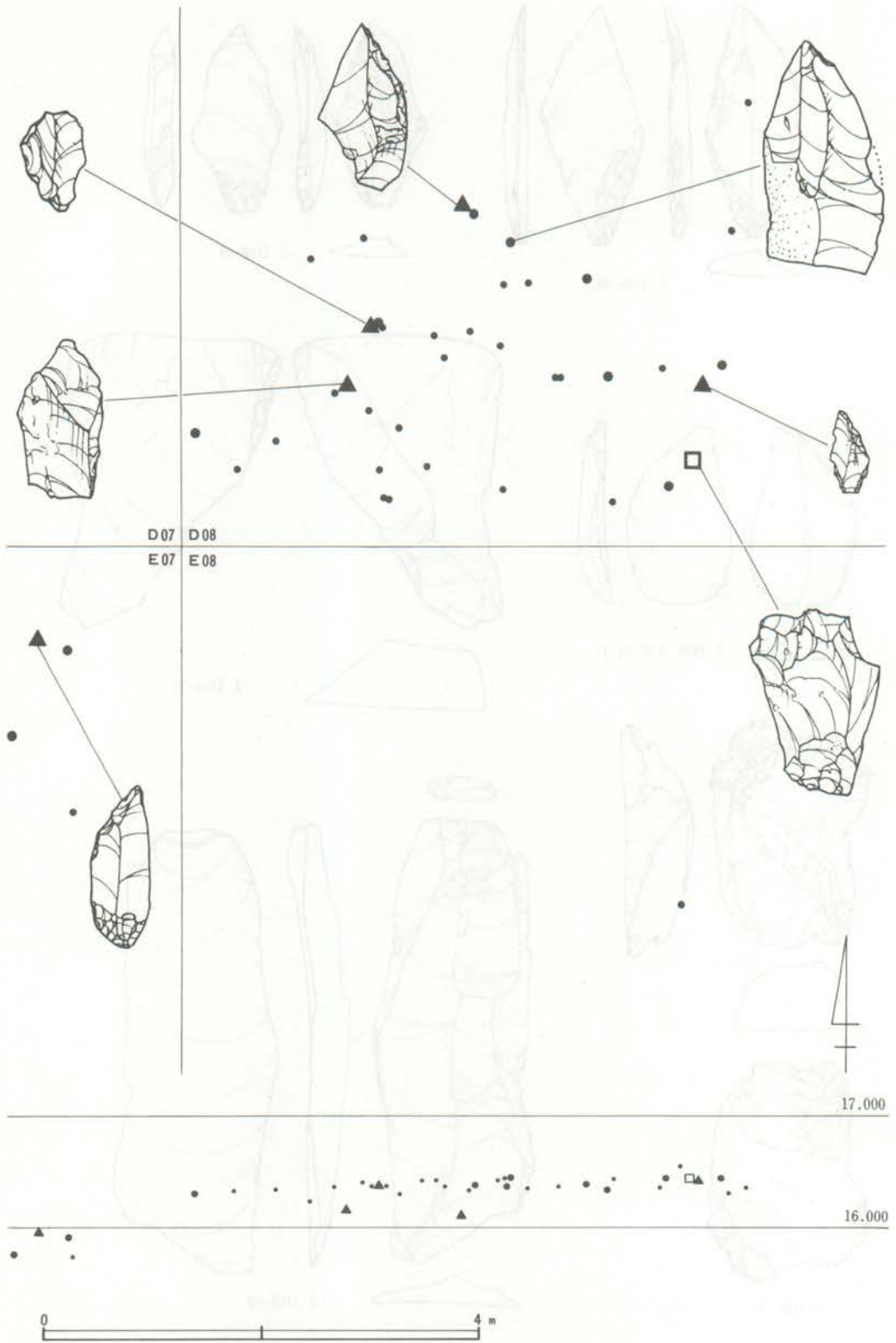
C08
D08



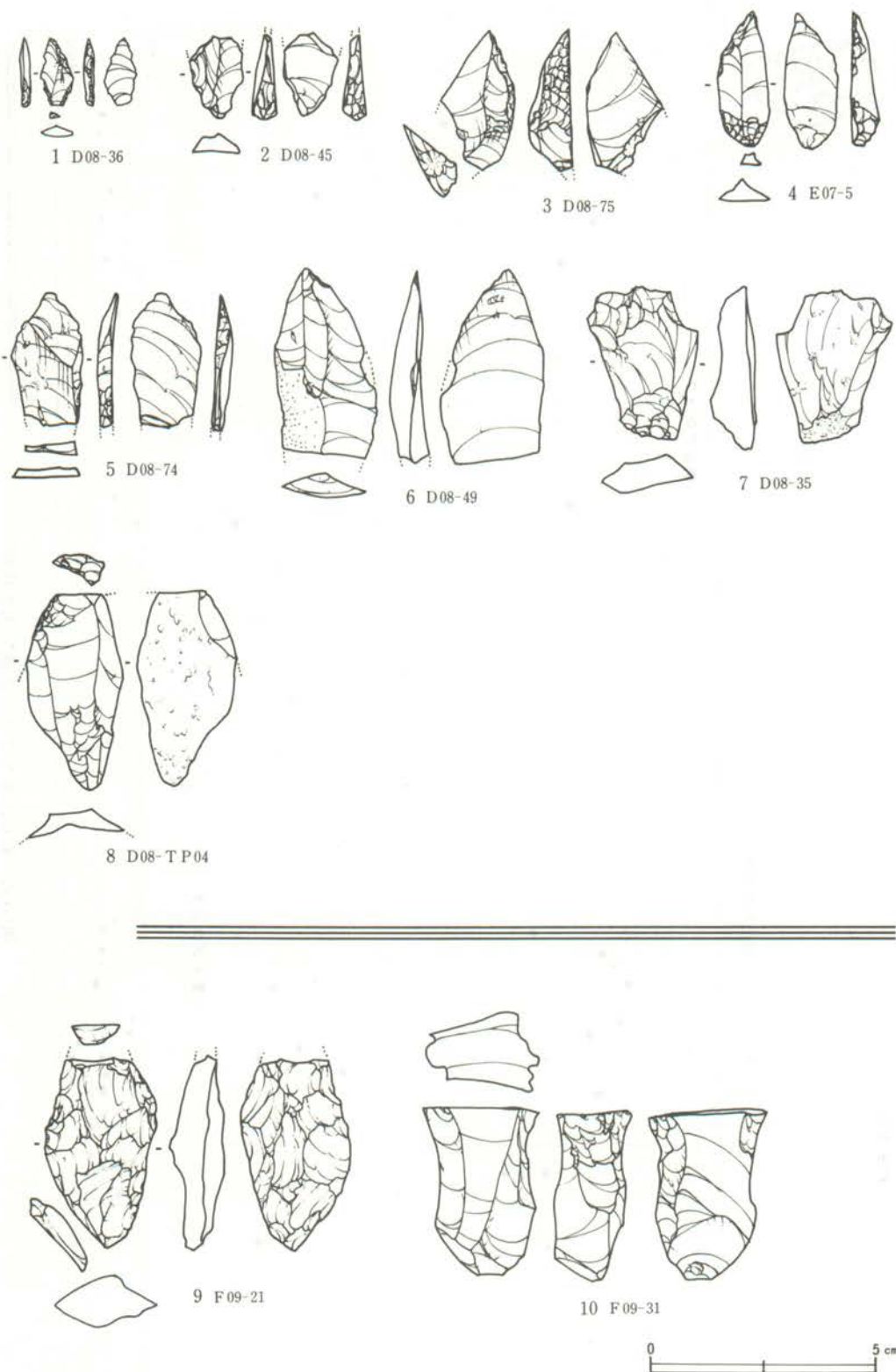
第46図 第3, 第4ブロック遺物出土状況



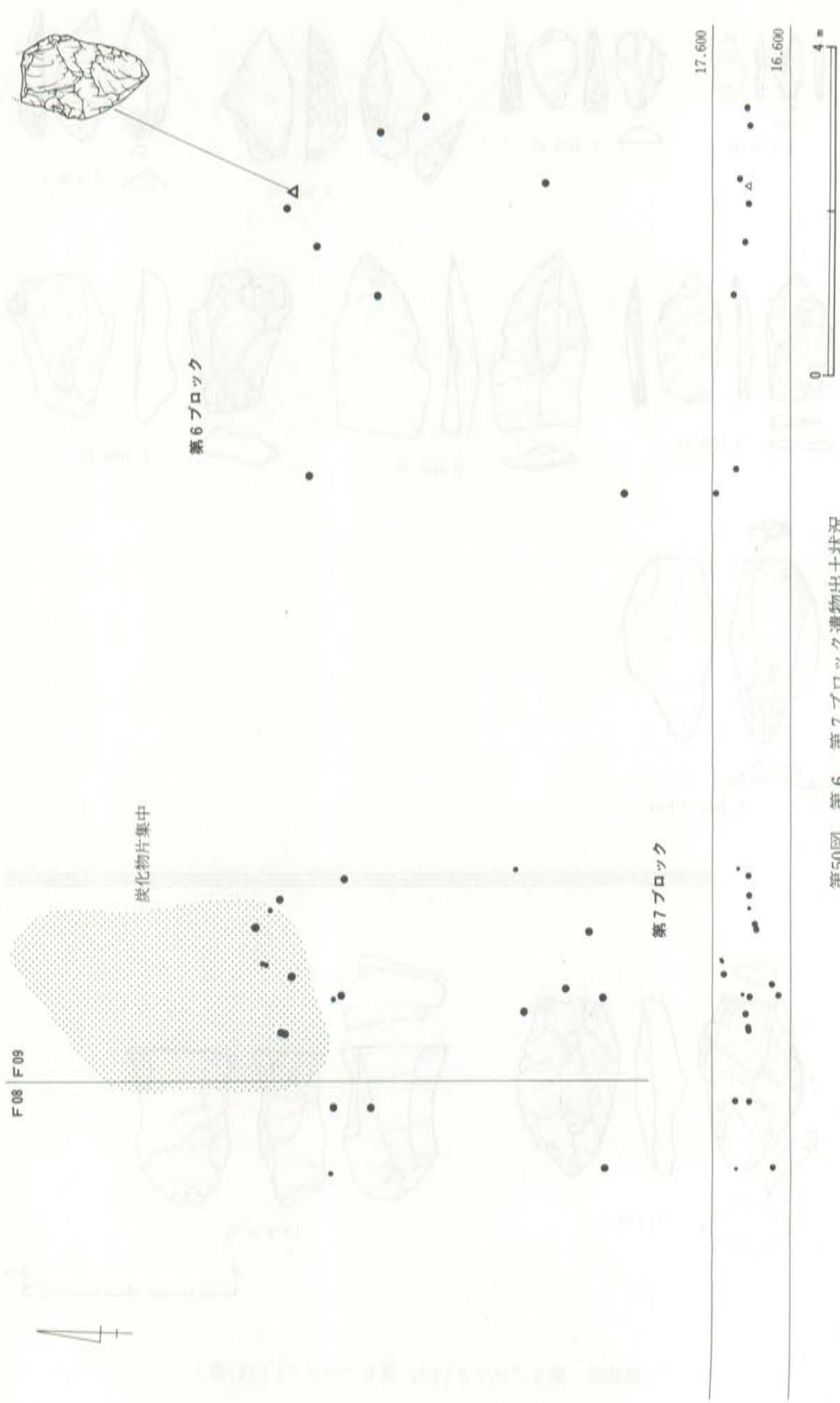
第47図 第4ブロック石器



第48図 第5ブロック遺物出土状況



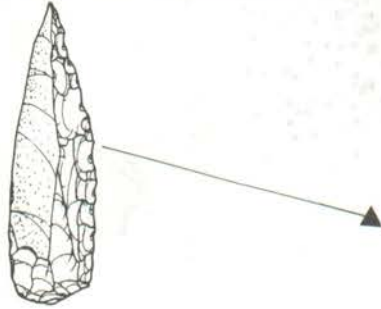
第49図 第5ブロック(上), 第6ブロック(下)石器



第50図 第6, 第7ブロック遺物出土状況



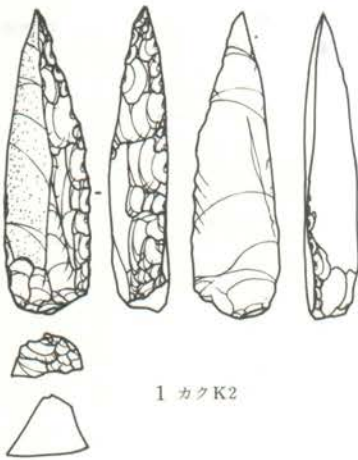
J19
K19



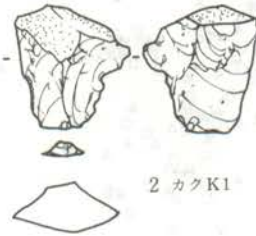
17.800

Ⓒ ▲

16.800



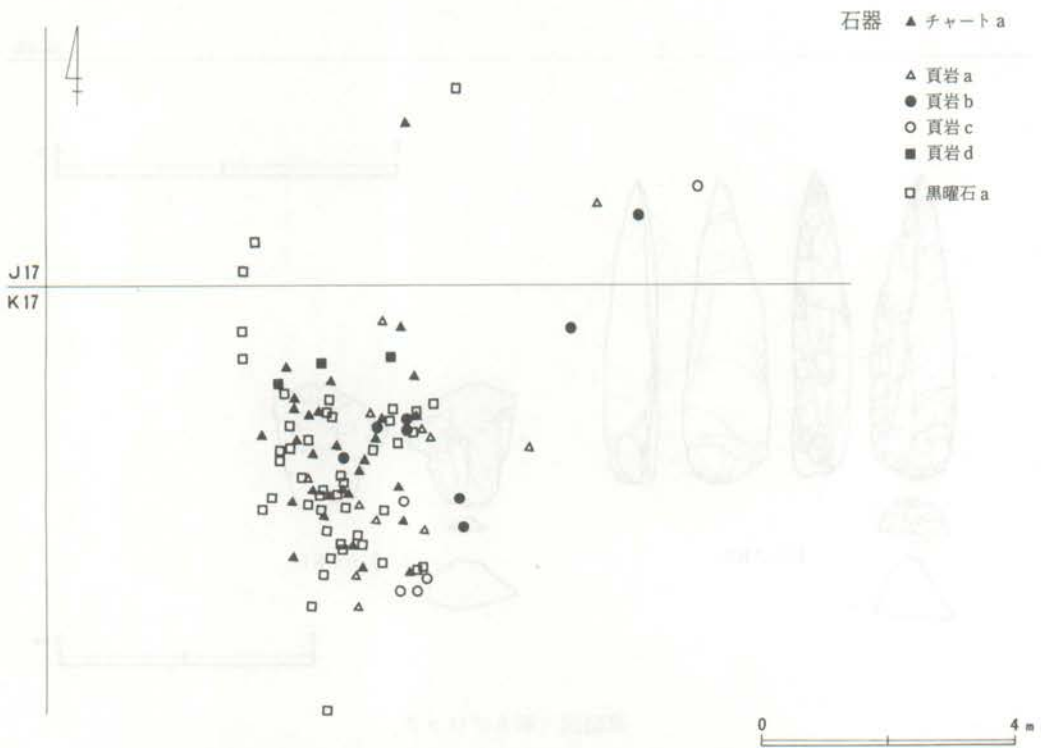
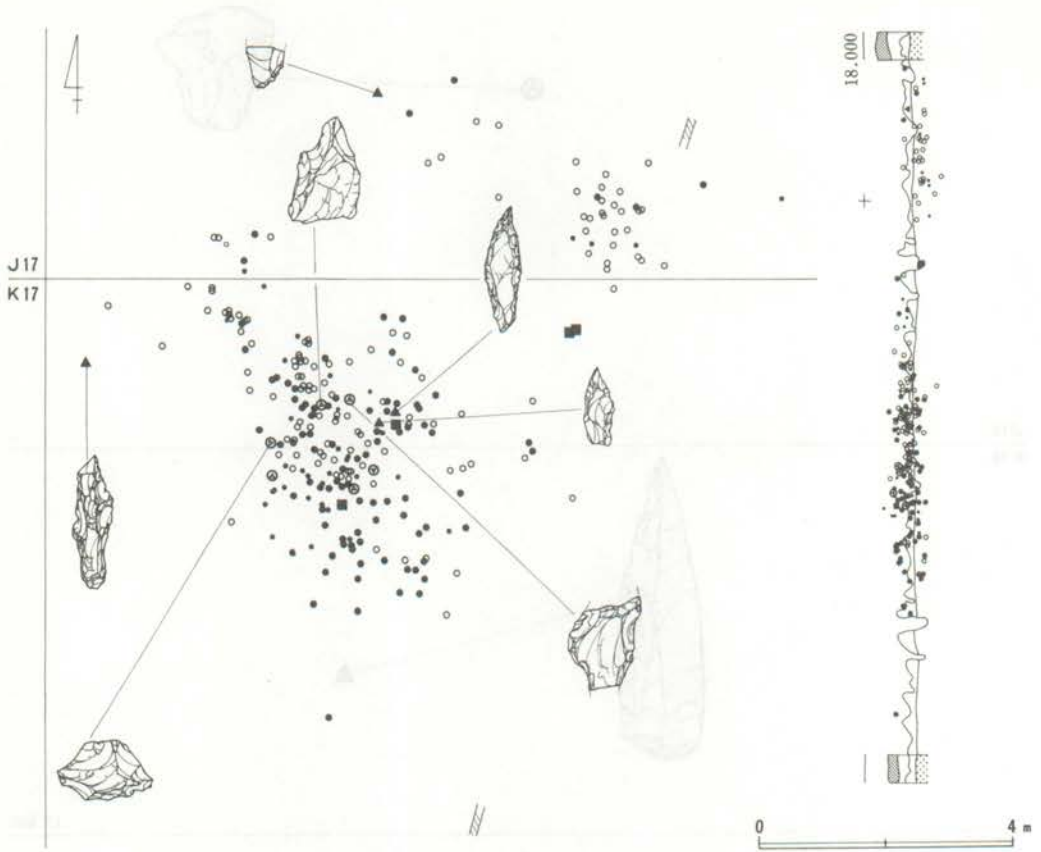
1 カクK2



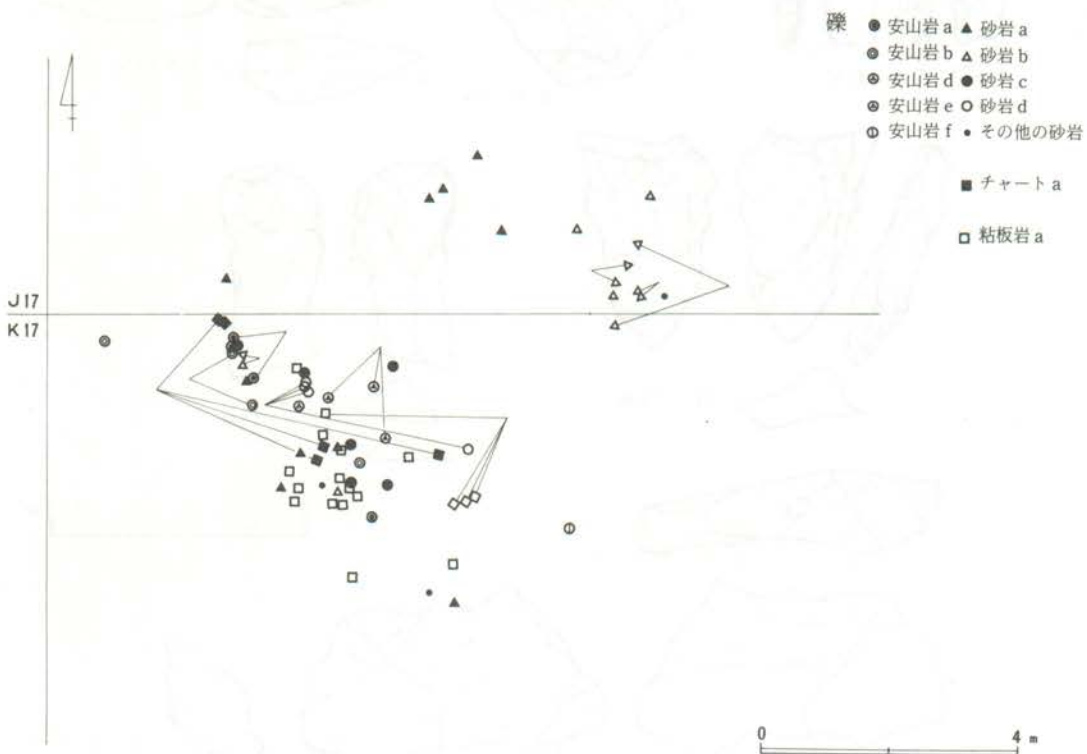
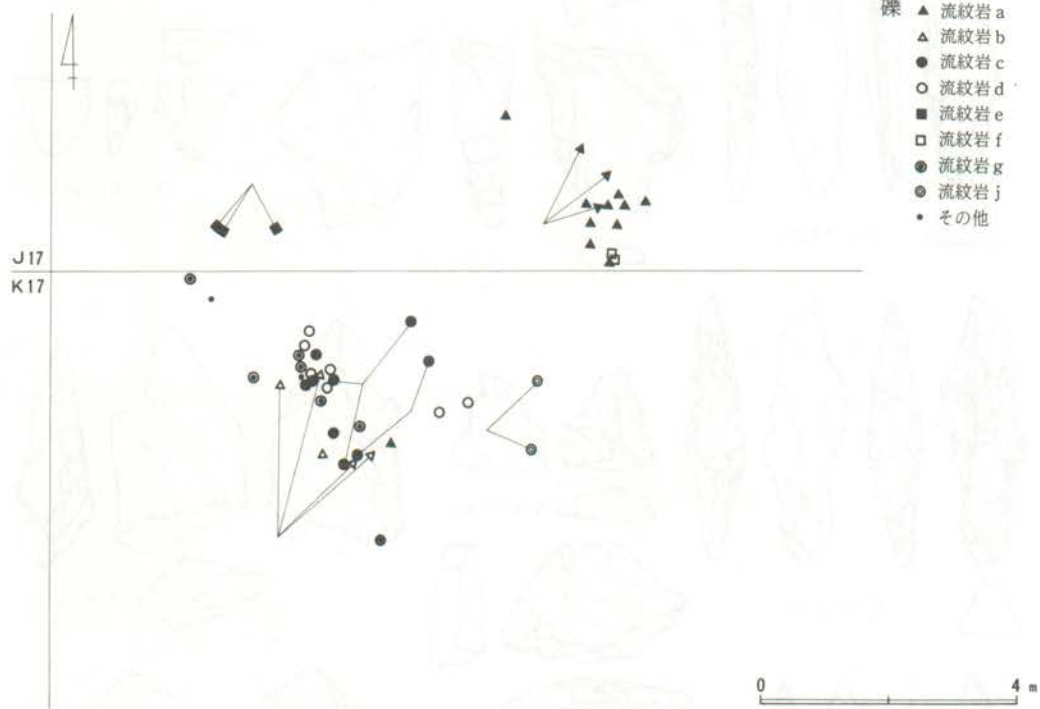
2 カクK1



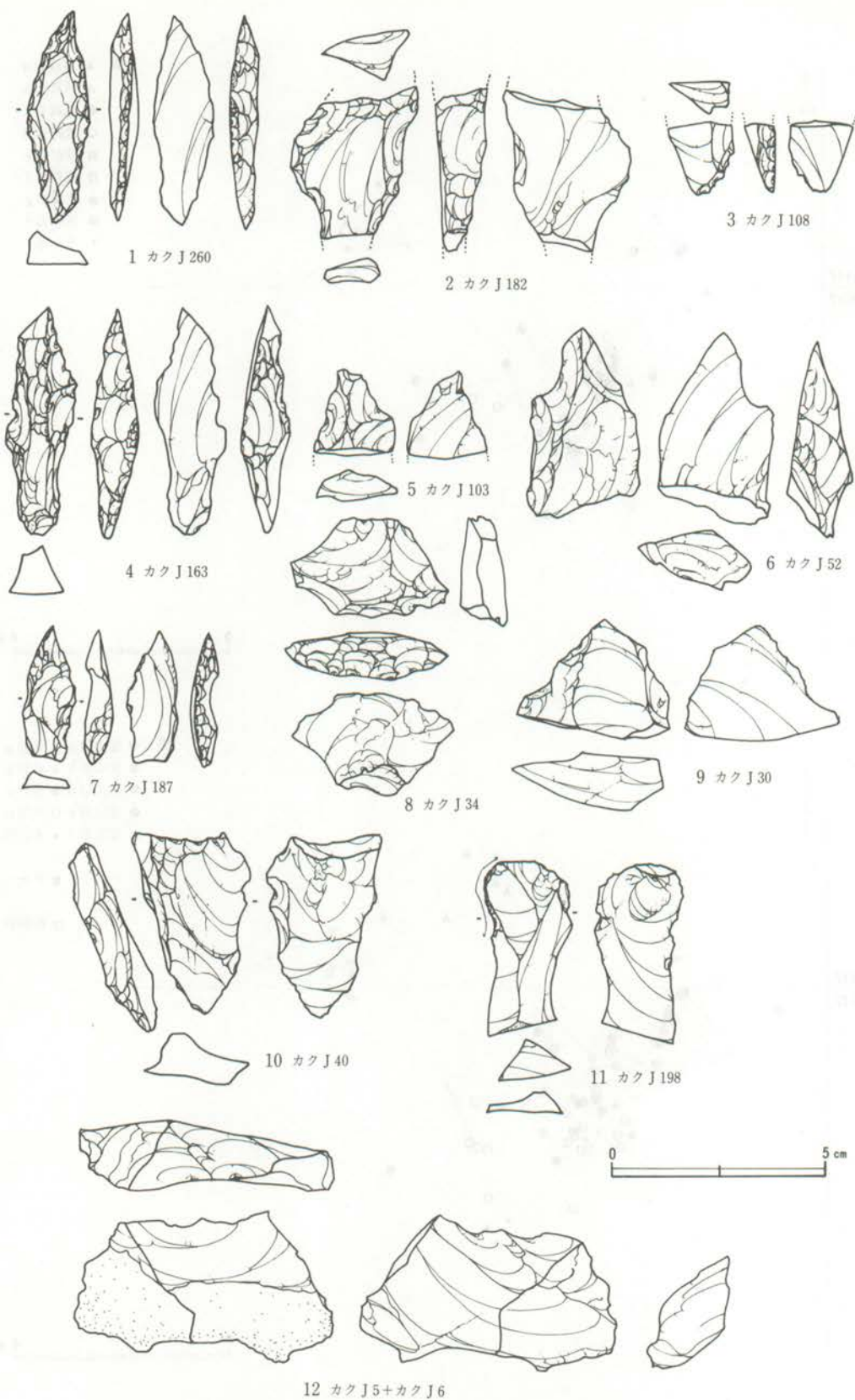
第51図 第8ブロック



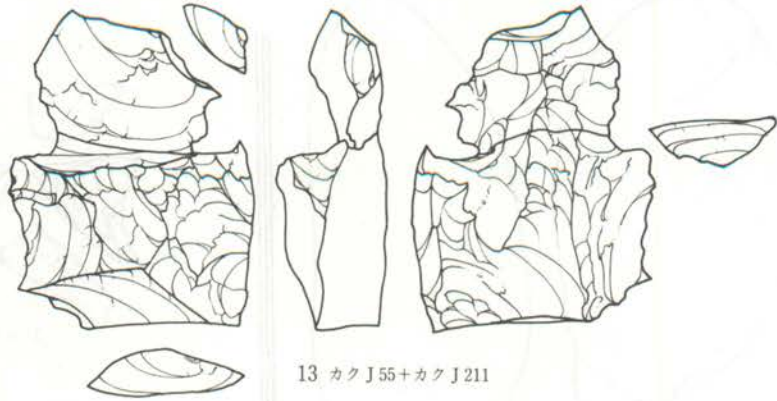
第52図 第11ブロック遺物出土状況(上)母岩別分布・接合関係 (1) (下)



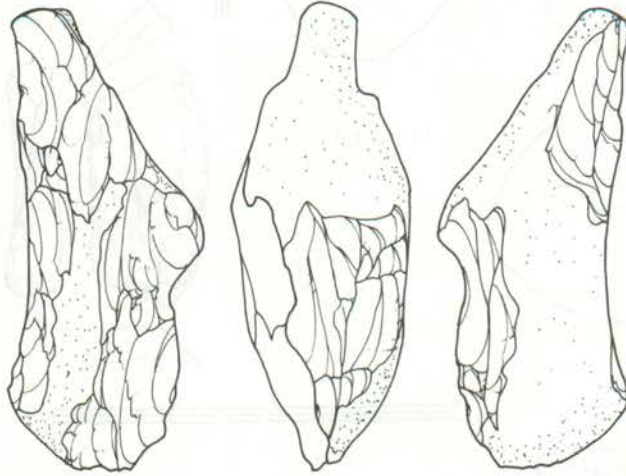
第53図 第11ブロック母岩別分布・接合関係 (2)



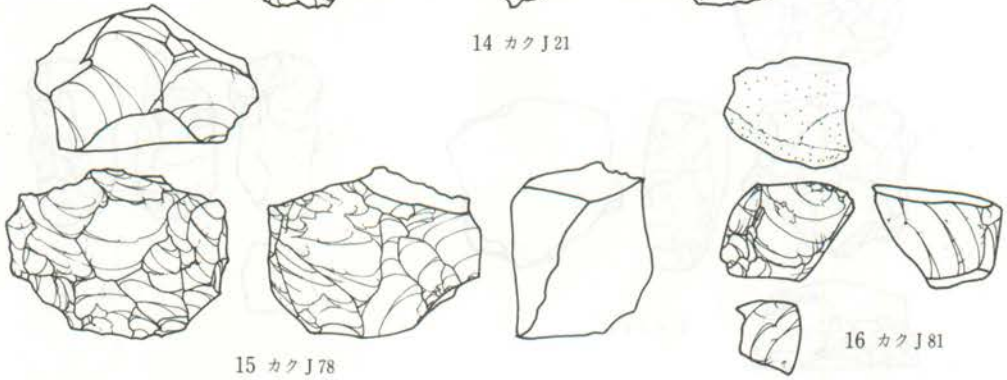
第54図 第11ブロック石器 (1)



13 カク J55+カク J211

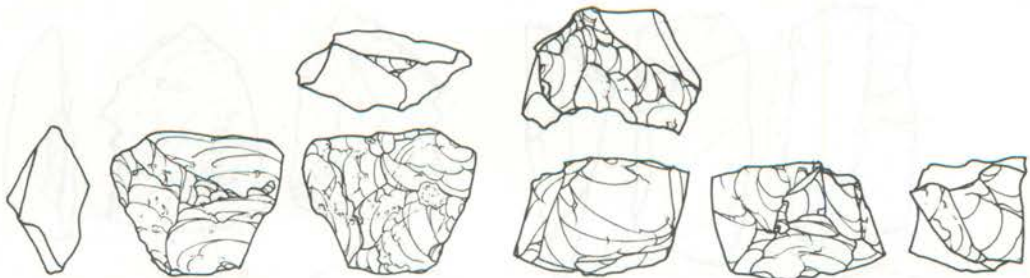


14 カク J21



15 カク J78

16 カク J81

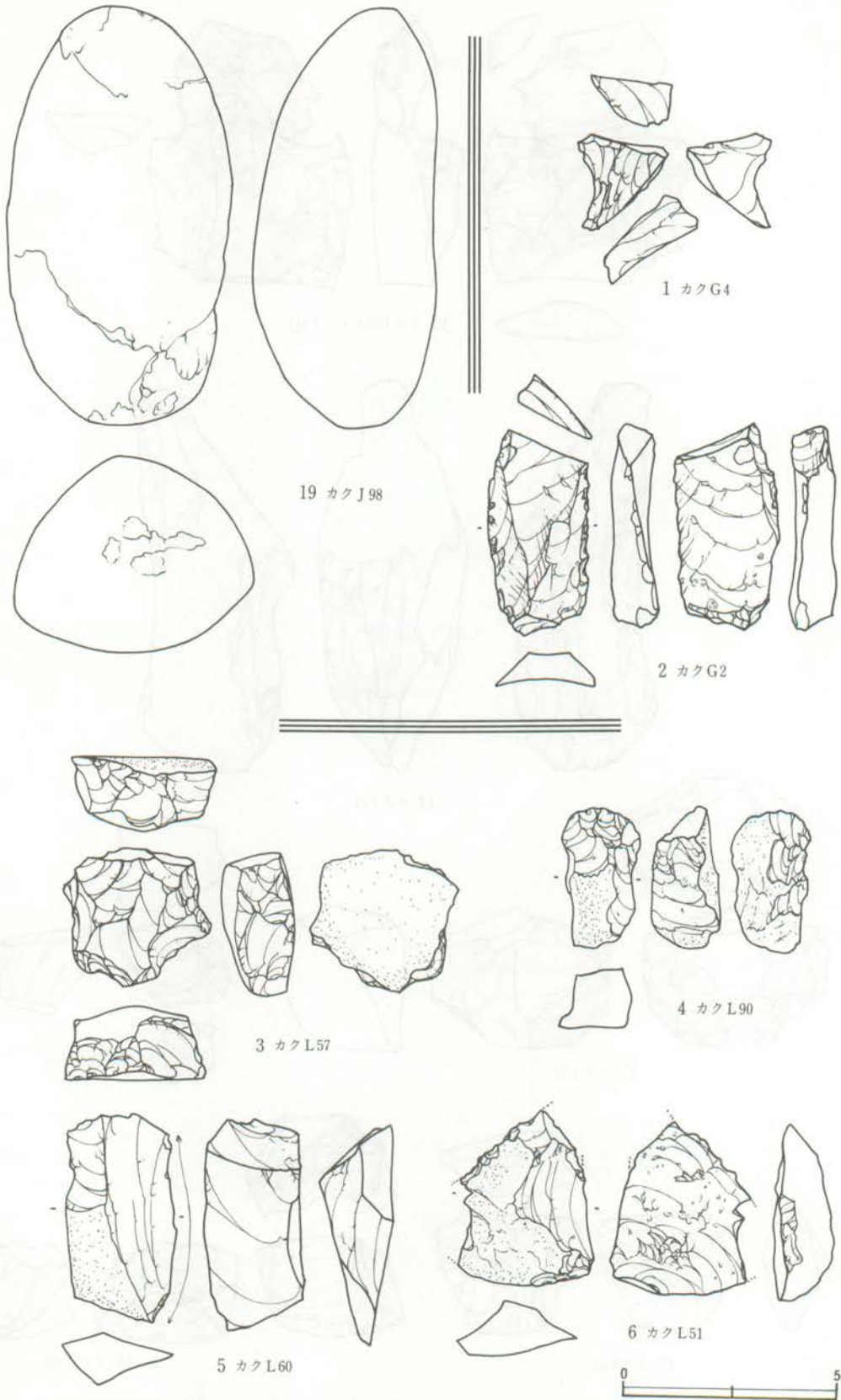


17 カク J63

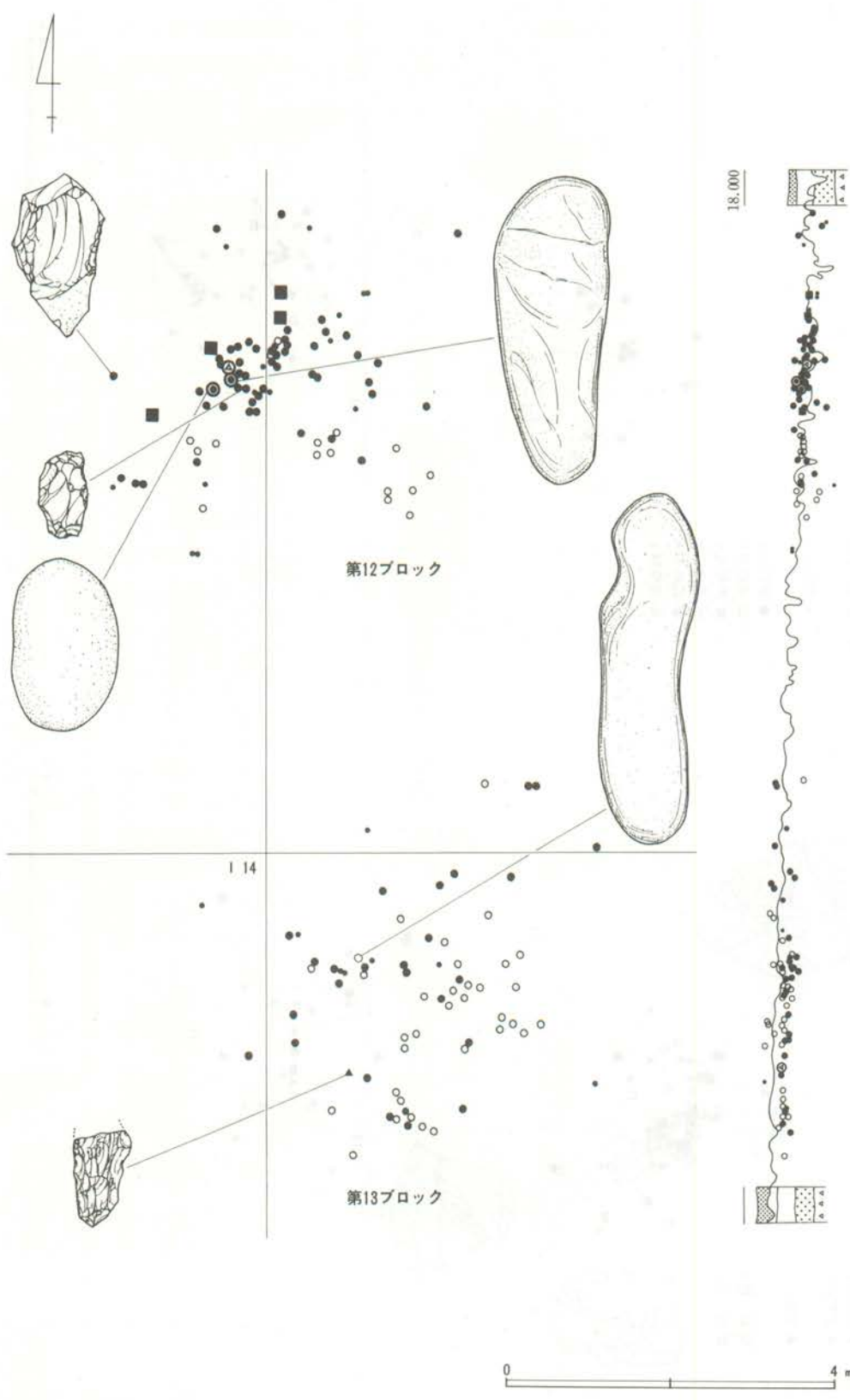
18 カク J256



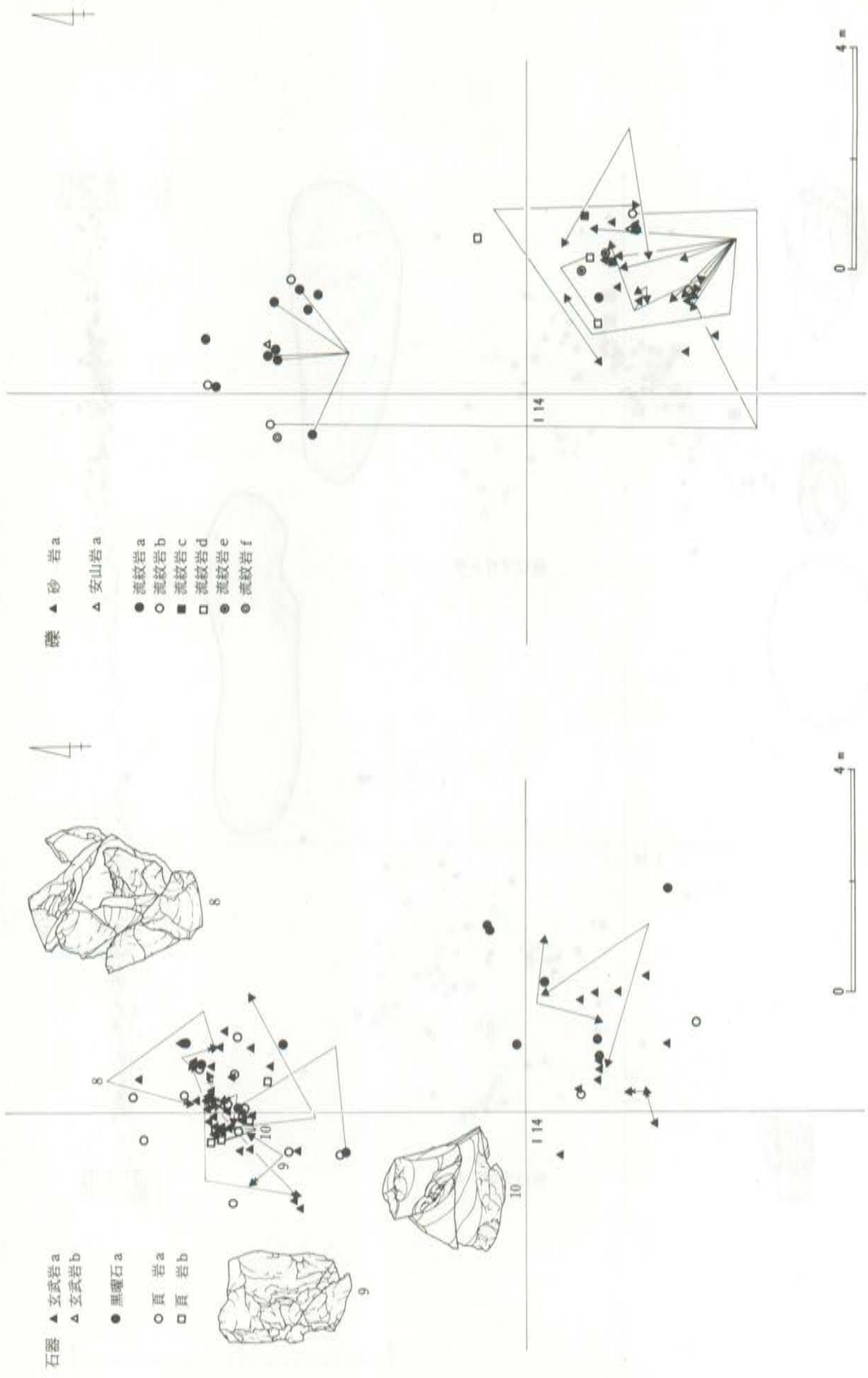
第55図 第11ブロック石器 (2)



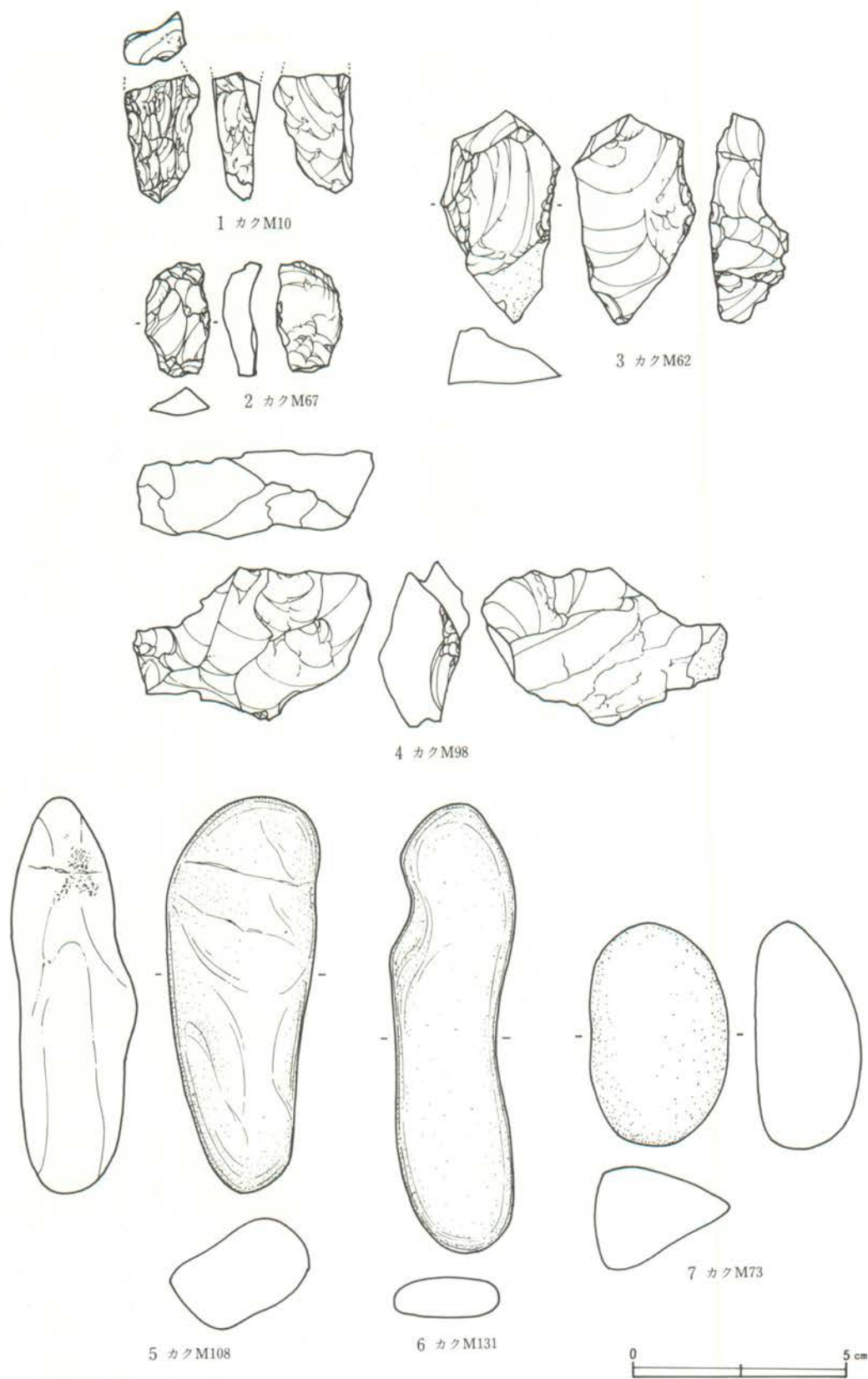
第56図 第10, 第11, 第14ブロック石器



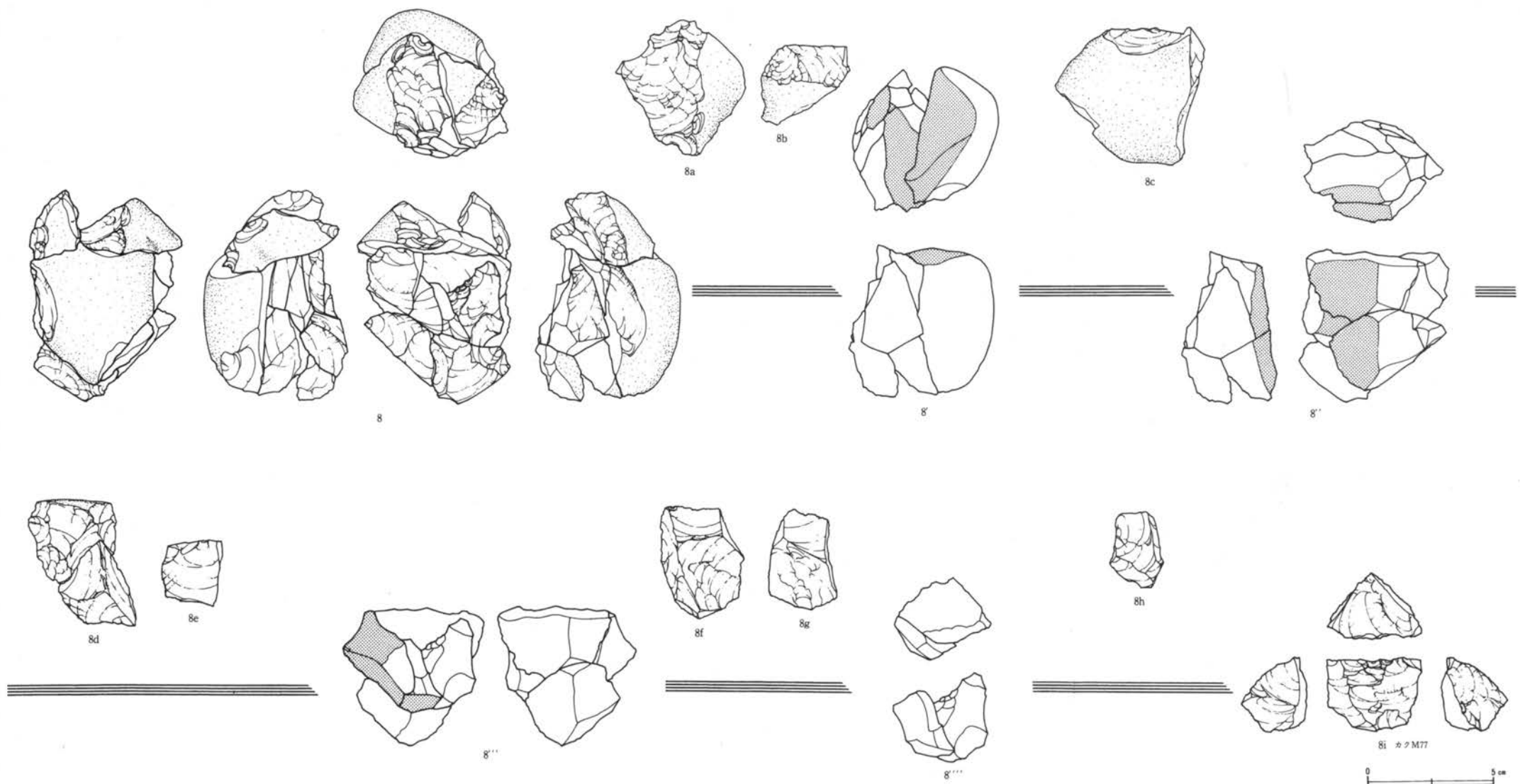
第57図 第12、第13ブロック遺物出土状況



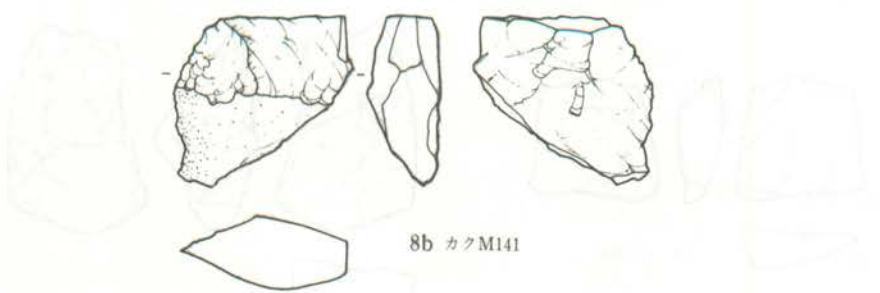
第58図 第12, 第13ブロック母岩別分布・接合関係



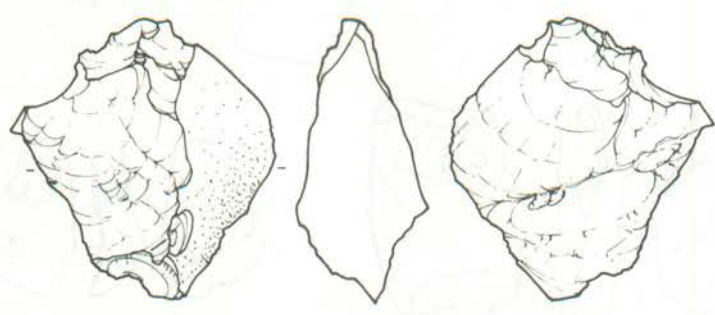
第59図 第12, 第13ブロック石器



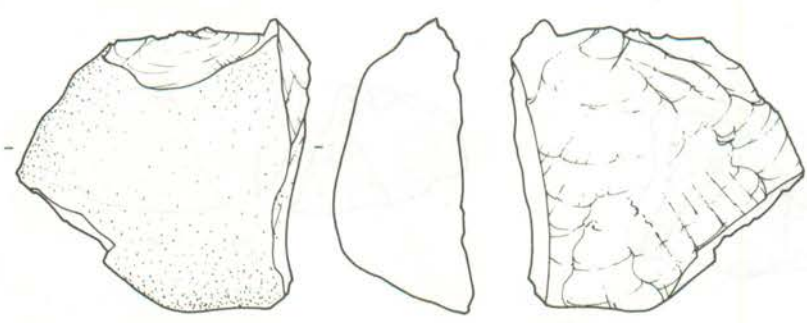
第60図 第12ブロック接合資料(1)



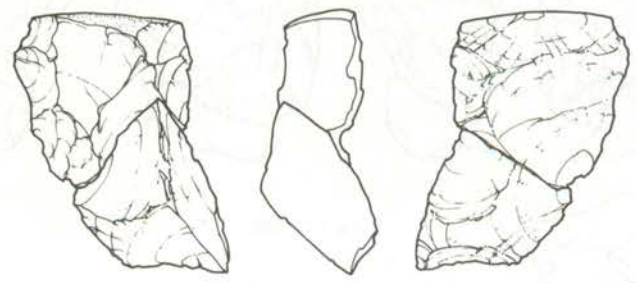
8b カクM141



8a カクM60



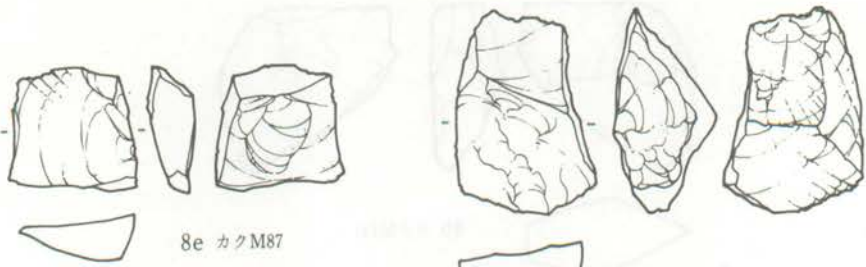
8c カクM101



8d カクM72+カクM141

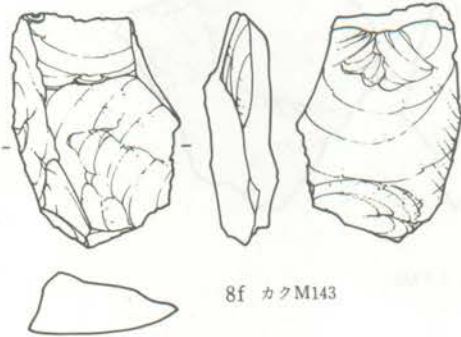


第61図 第12ブロック接合資料 (2)



8e カクM87

8g カクM142

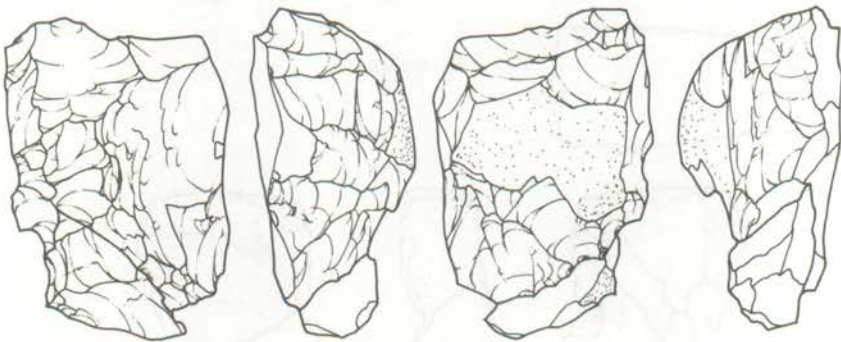


8f カクM143

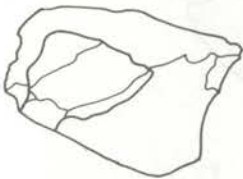
8h カクM90



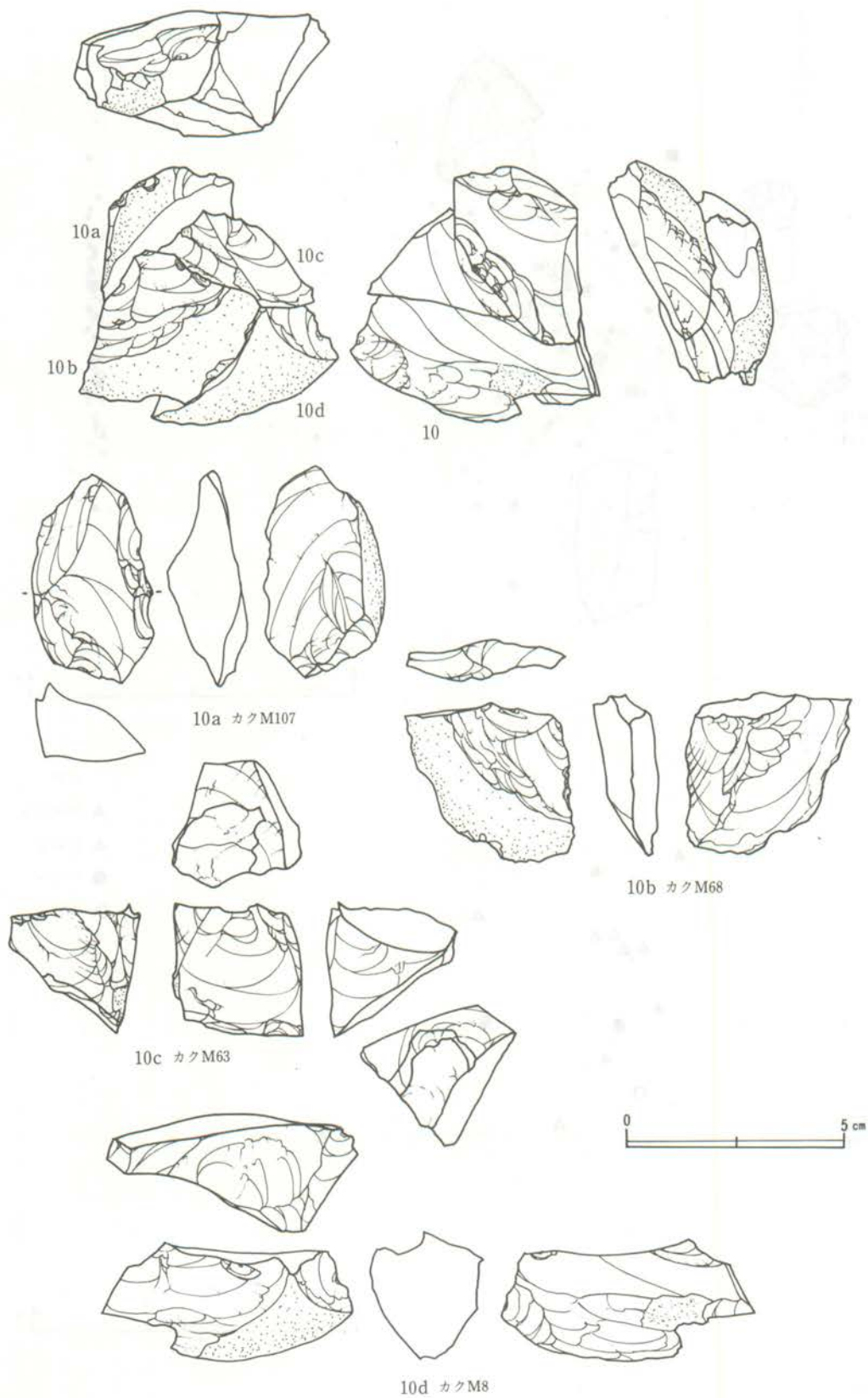
9a カクM58



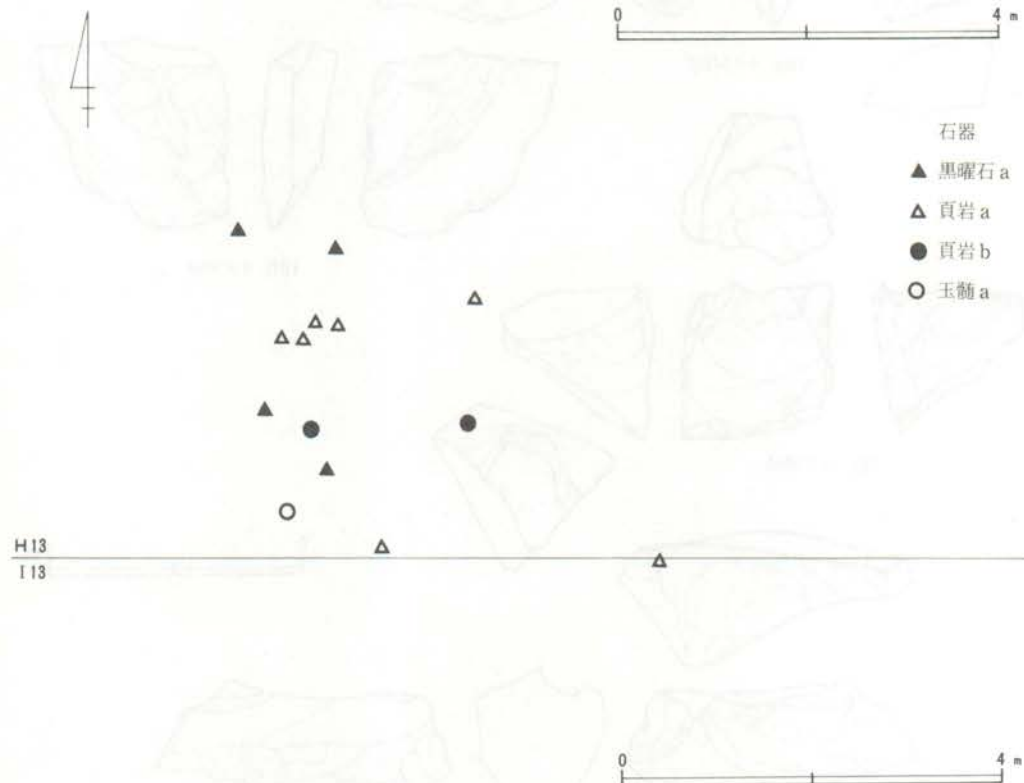
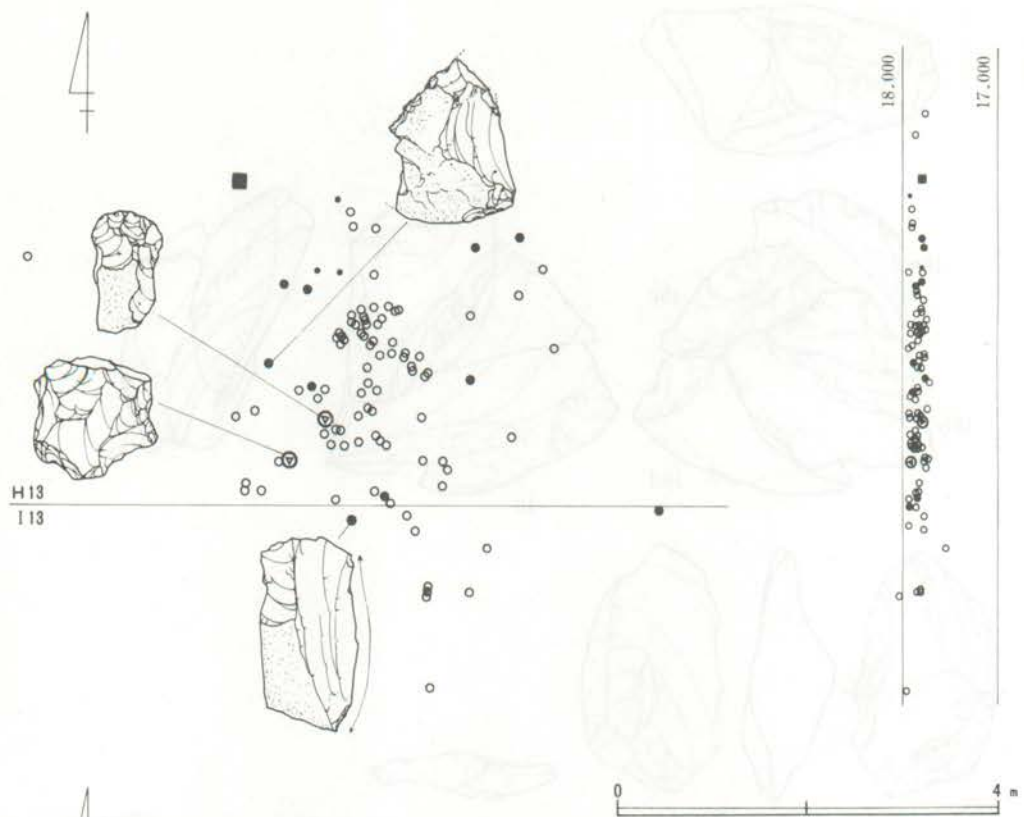
9 9a + カクM61



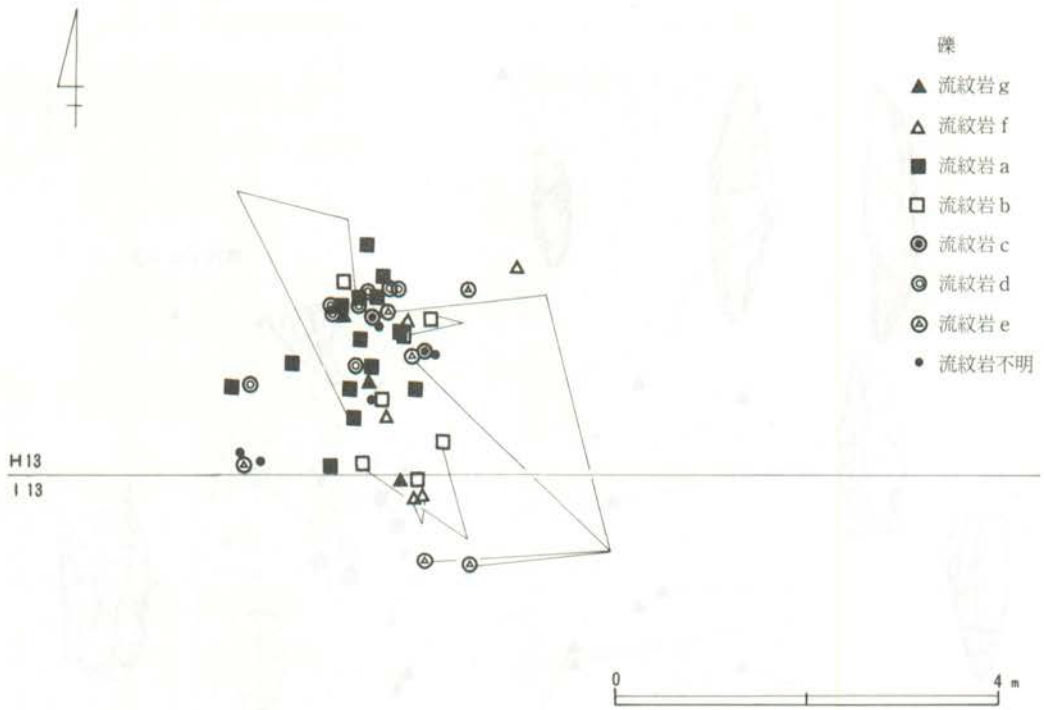
第62図 第12ブロック接合資料 (3)



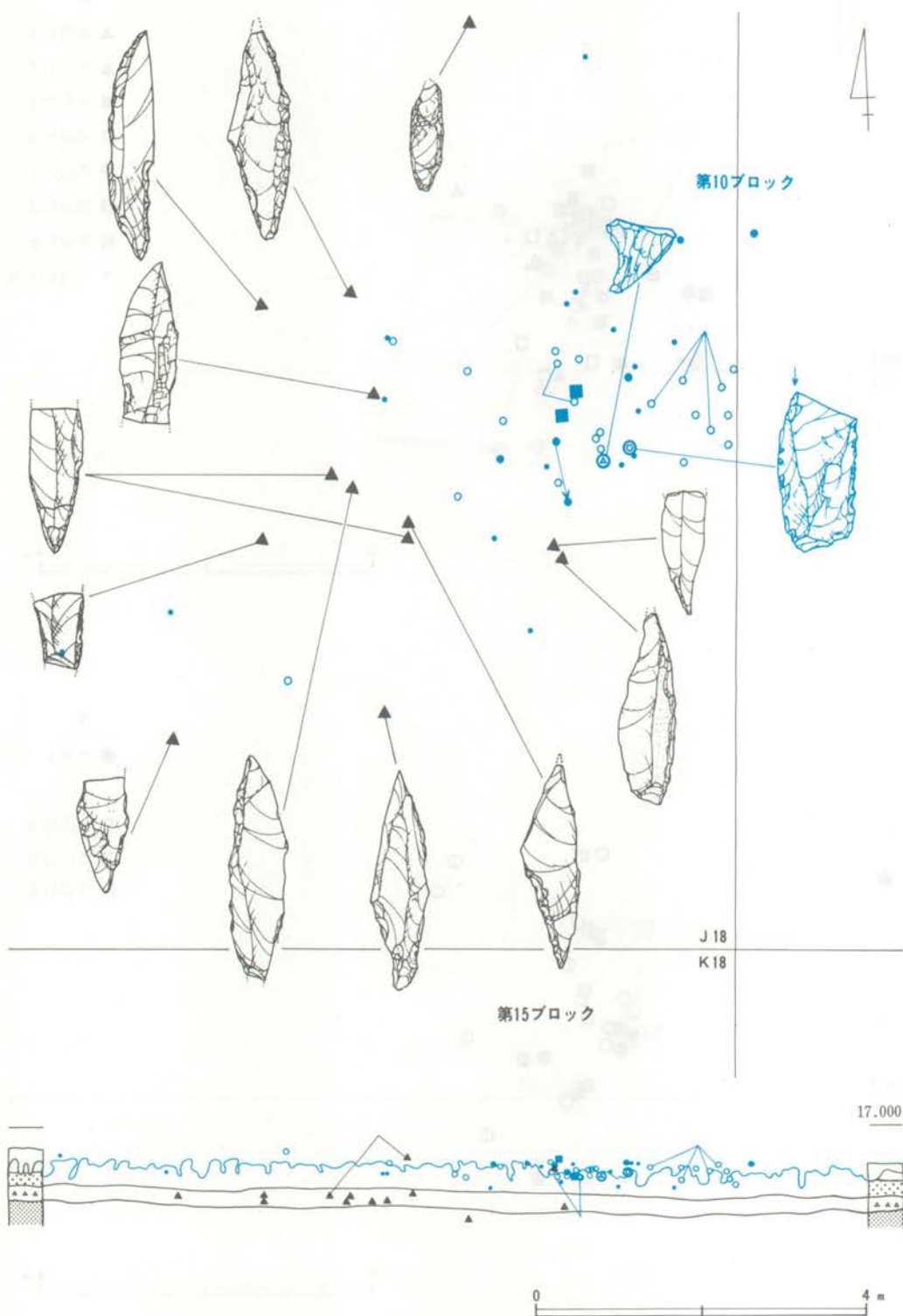
第63図 第12ブロック接合資料(4)



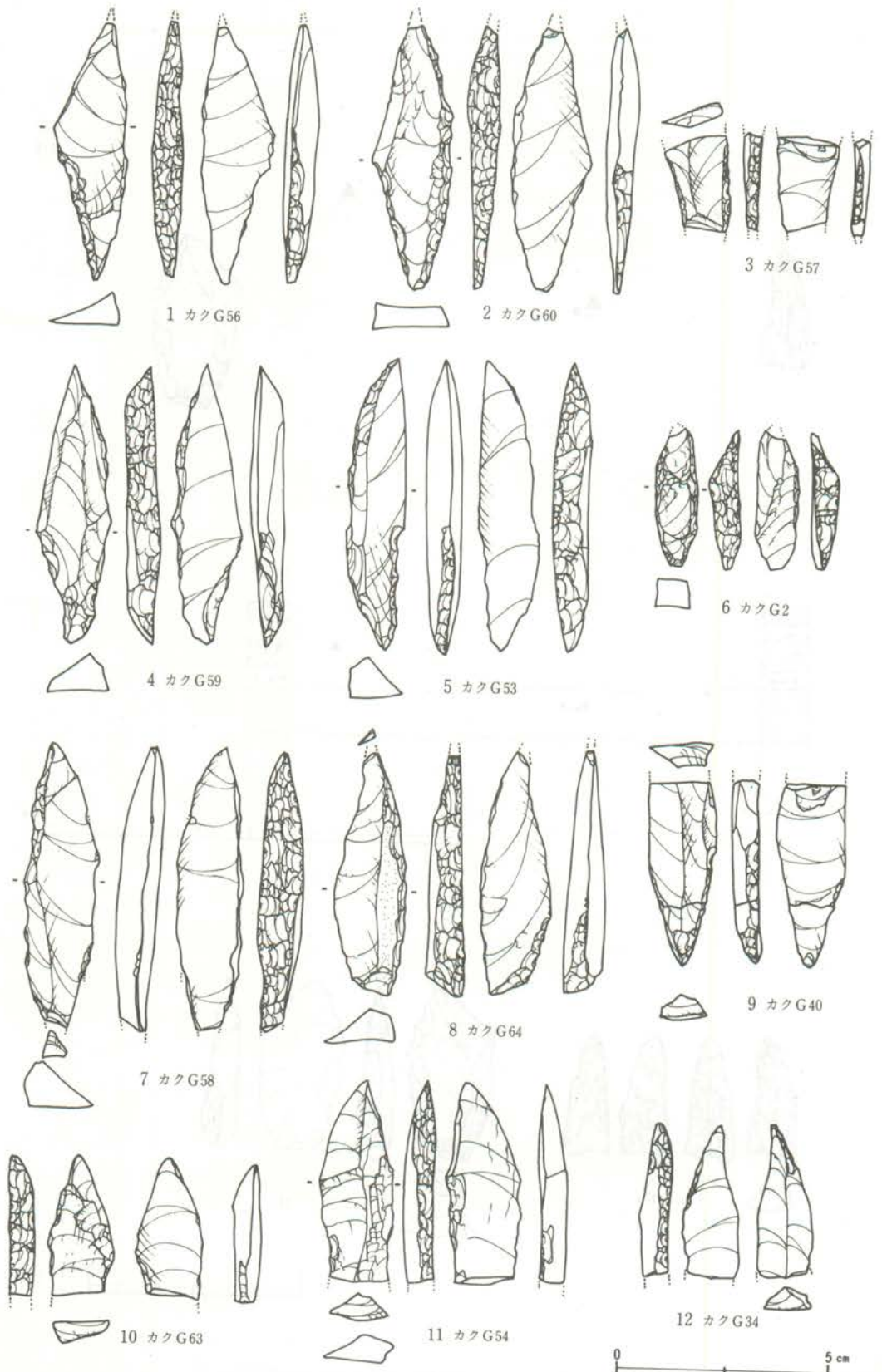
第64図 第14ブロック遺物出土状況(上) 母岩別分布・接合関係 (1) (下)



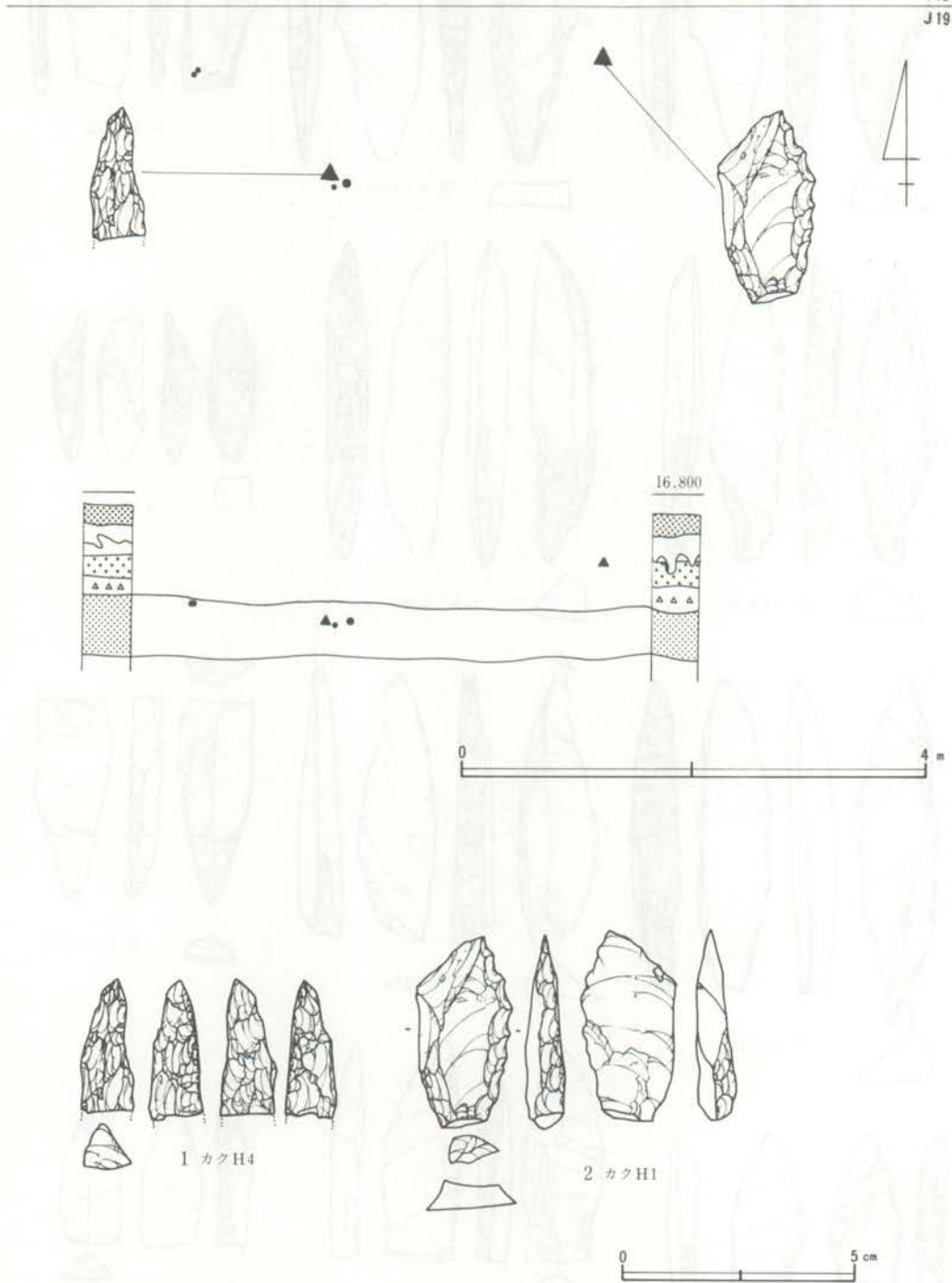
第65図 第14ブロック母岩別分布・接合関係 (2)



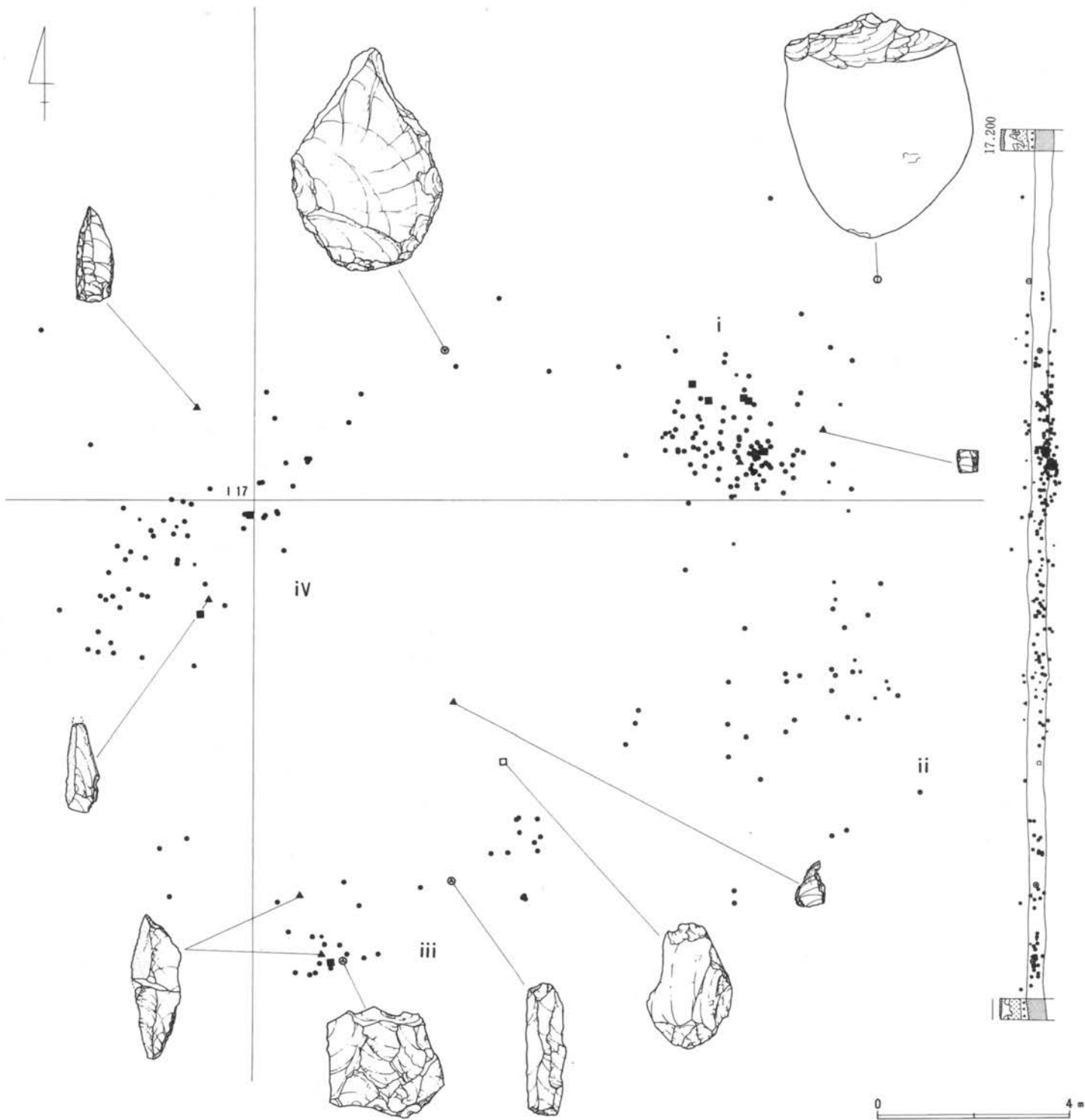
第66図 第6, 第15ブロック遺物出土状況



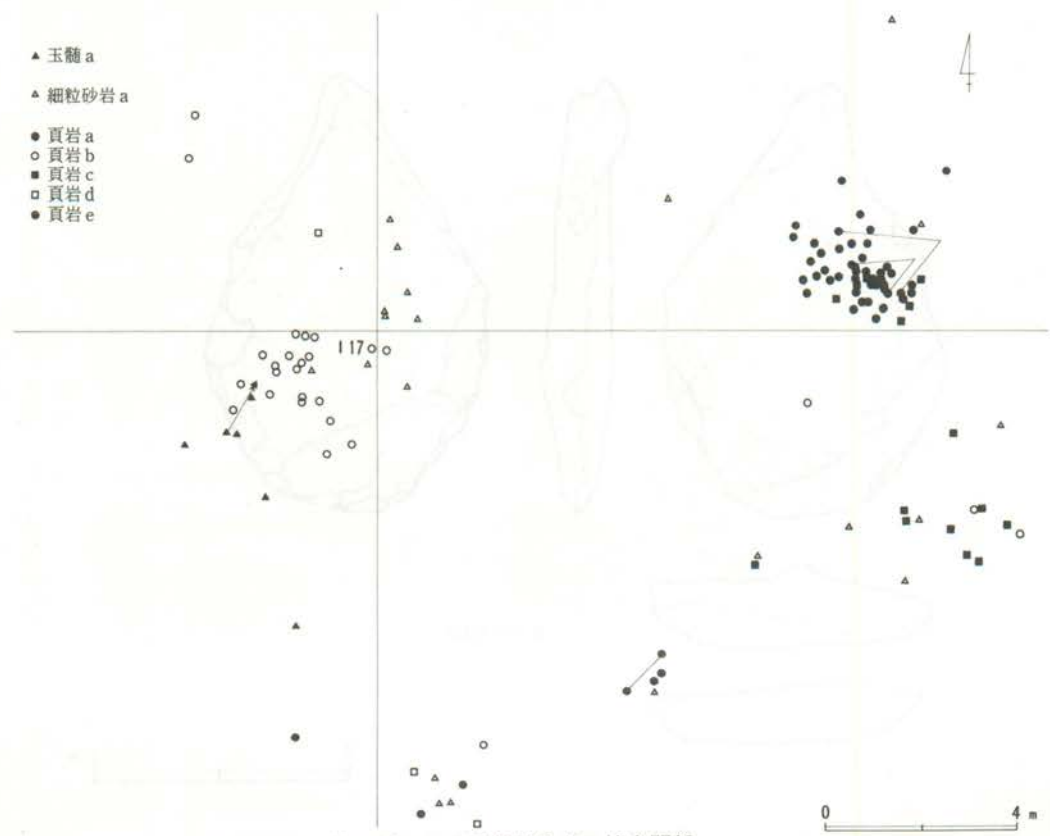
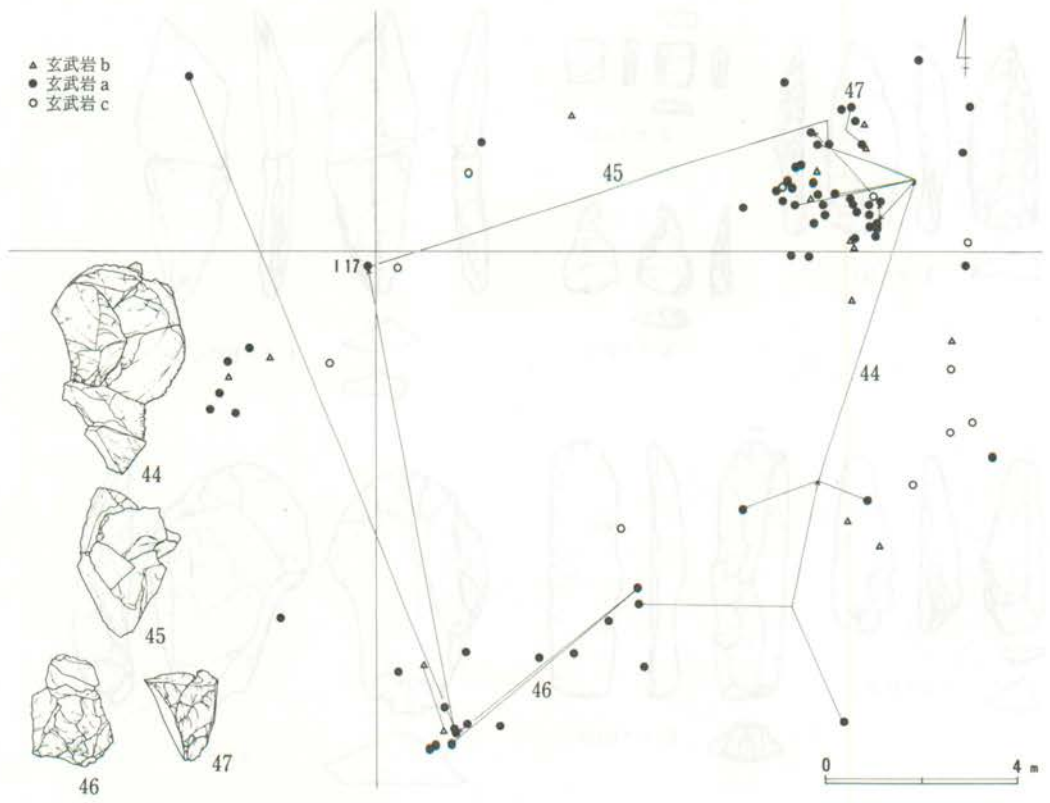
第67図 第15ブロック石器



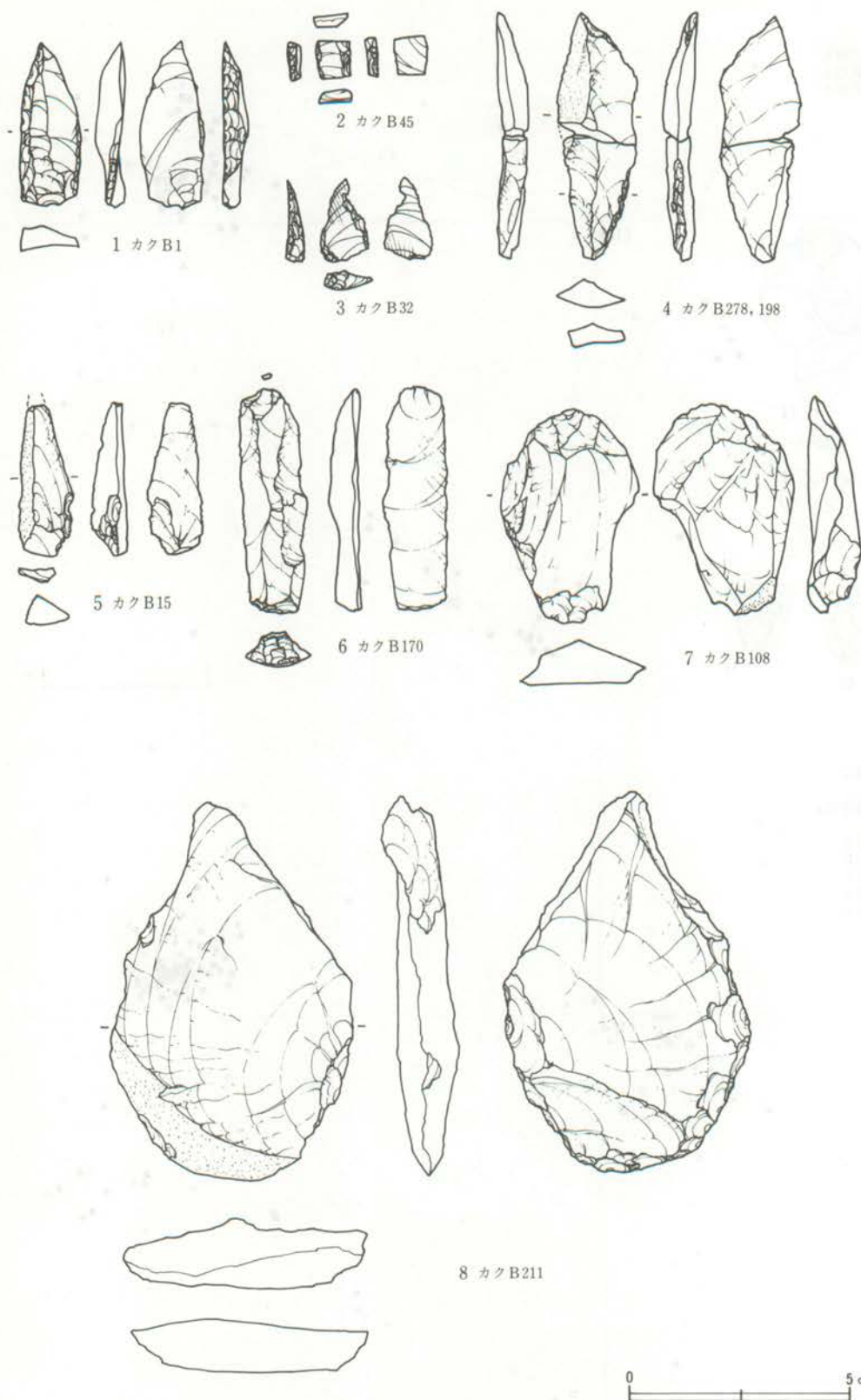
第68図 第16ブロック遺物出土状況(上)石器(下)



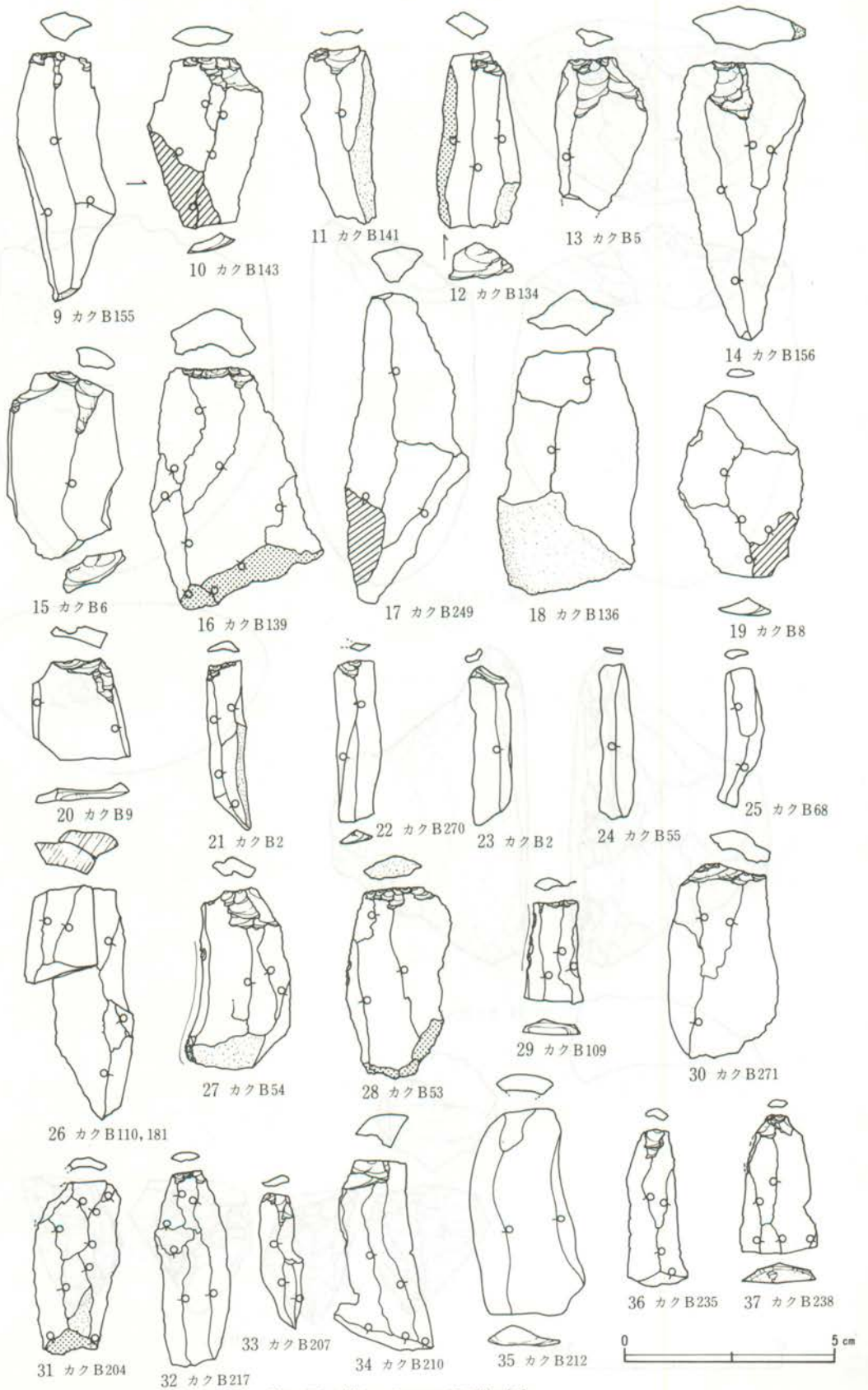
第69図 第17ブロック遺物出土状況



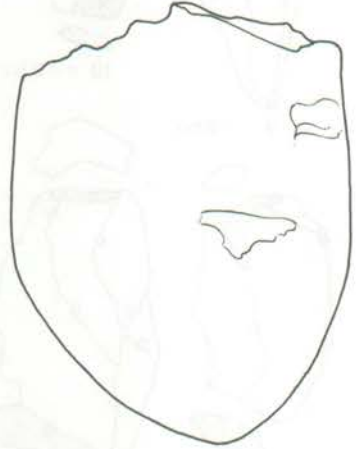
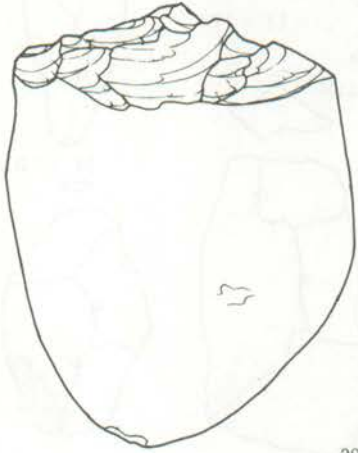
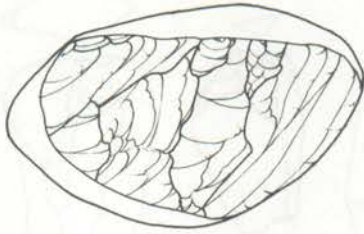
第70図 第17ブロック母岩別分布・接合関係



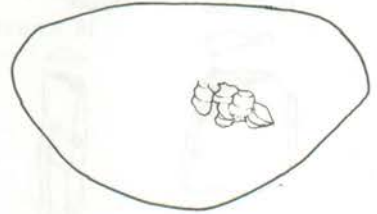
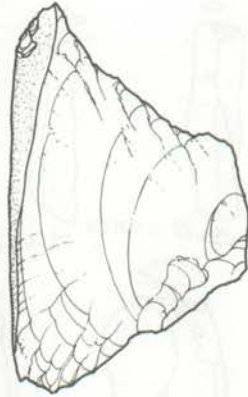
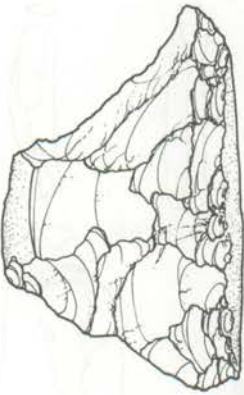
第71図 第17ブロック石器 (1)



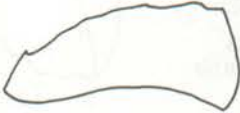
第72図 第17ブロック石器 (2)



38 カク B165



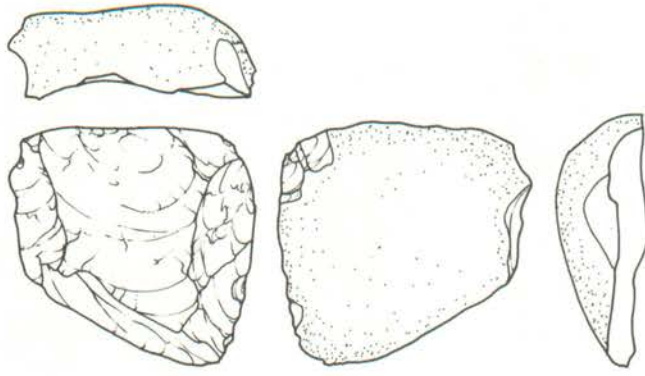
39 カク B205



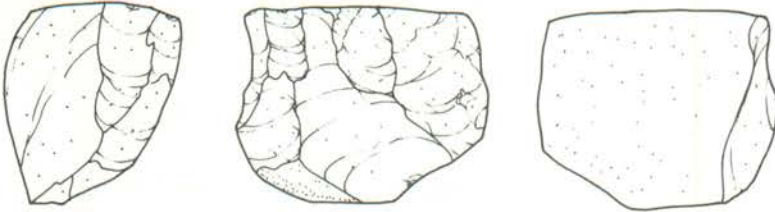
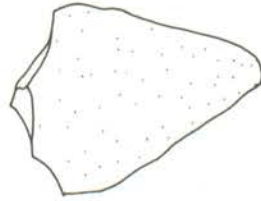
40 カク B16



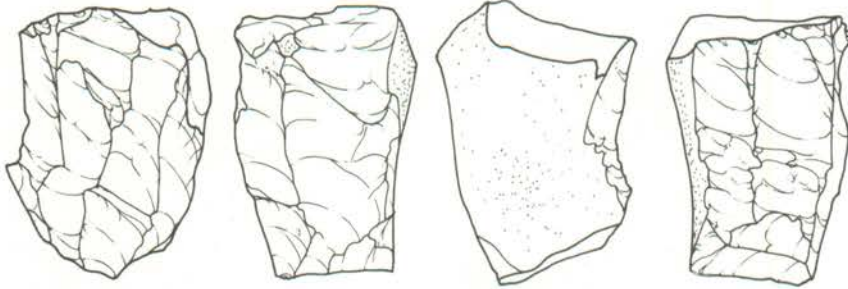
第73図 第17ブロック石器 (3)



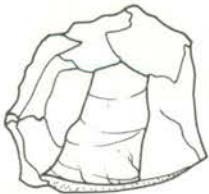
41 カクB9



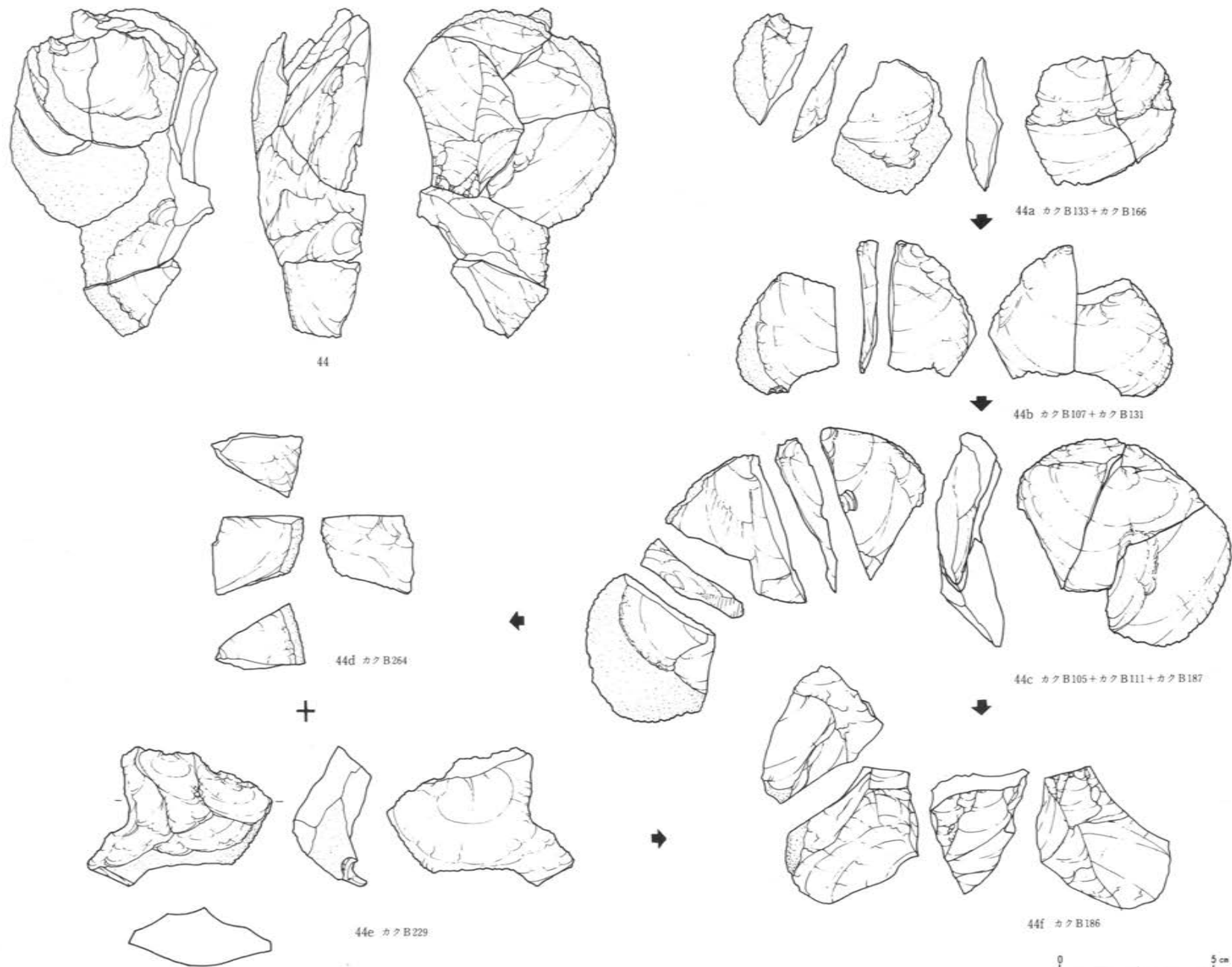
42 カクB280



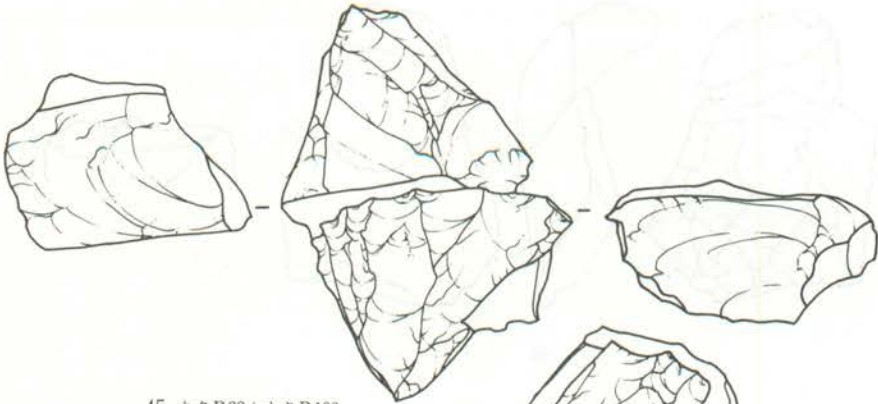
43 カクB226



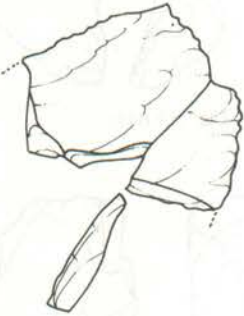
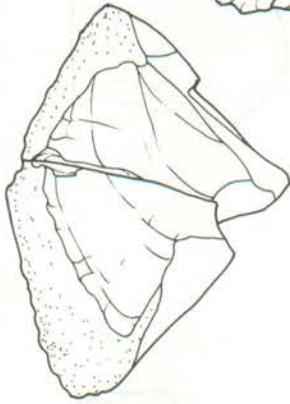
第74図 第17ブロック石器 (4)



第75図 第17ブロック接合資料 (1)



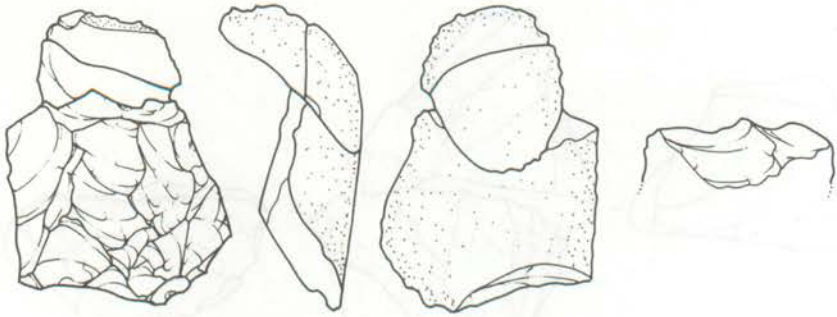
45 カク B22+カク B188



45a 44+カク B183+カク B207



第76図 第17ブロック接合資料 (2)

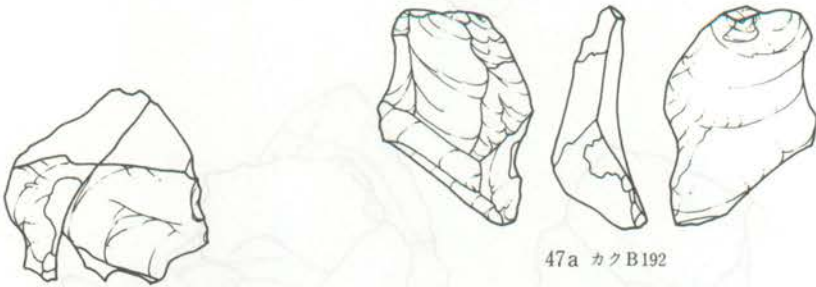


46

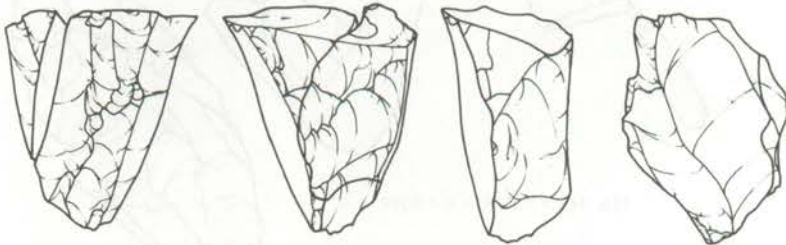


46a カク B272

46b カク B109+カク B277



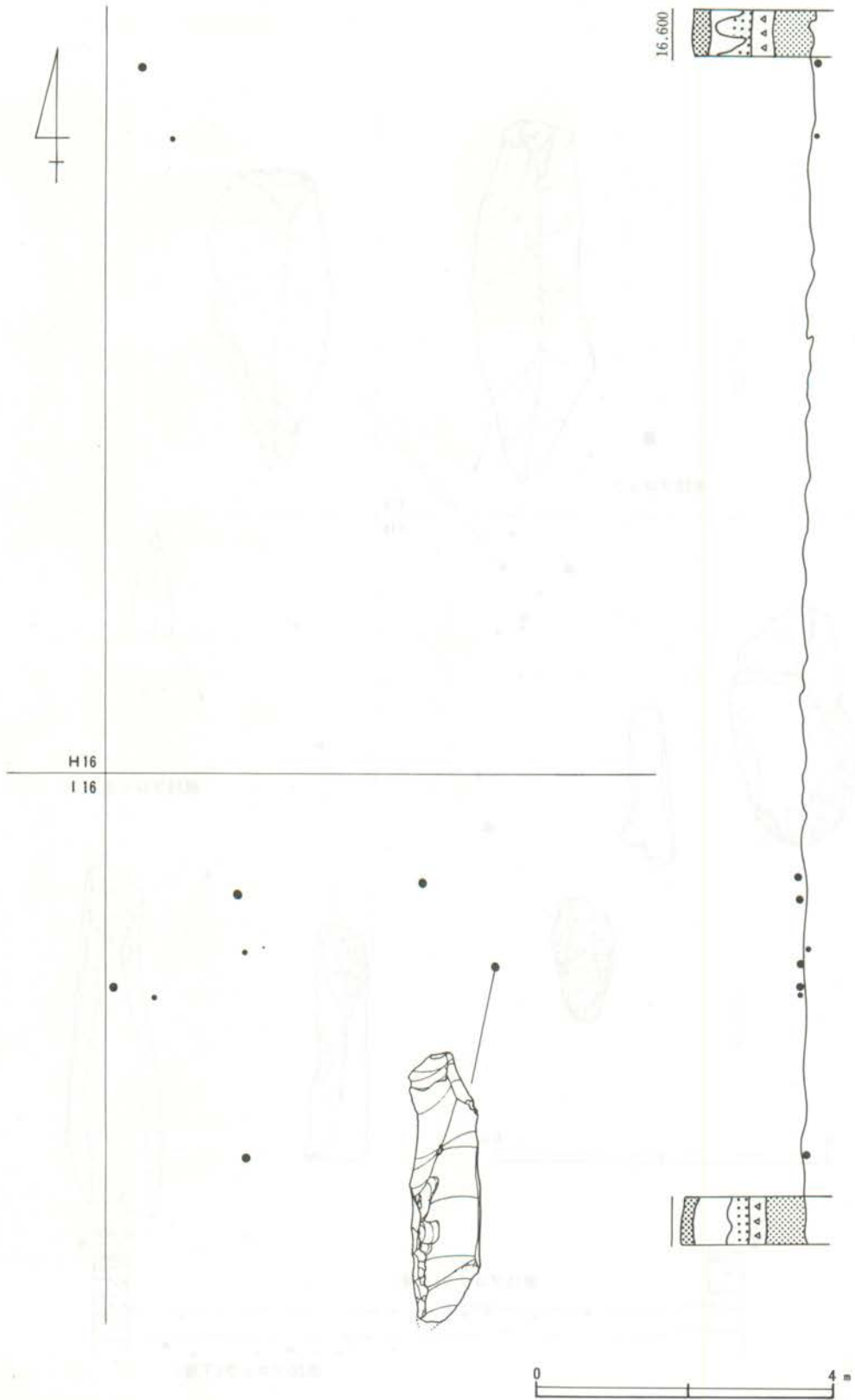
47a カク B192



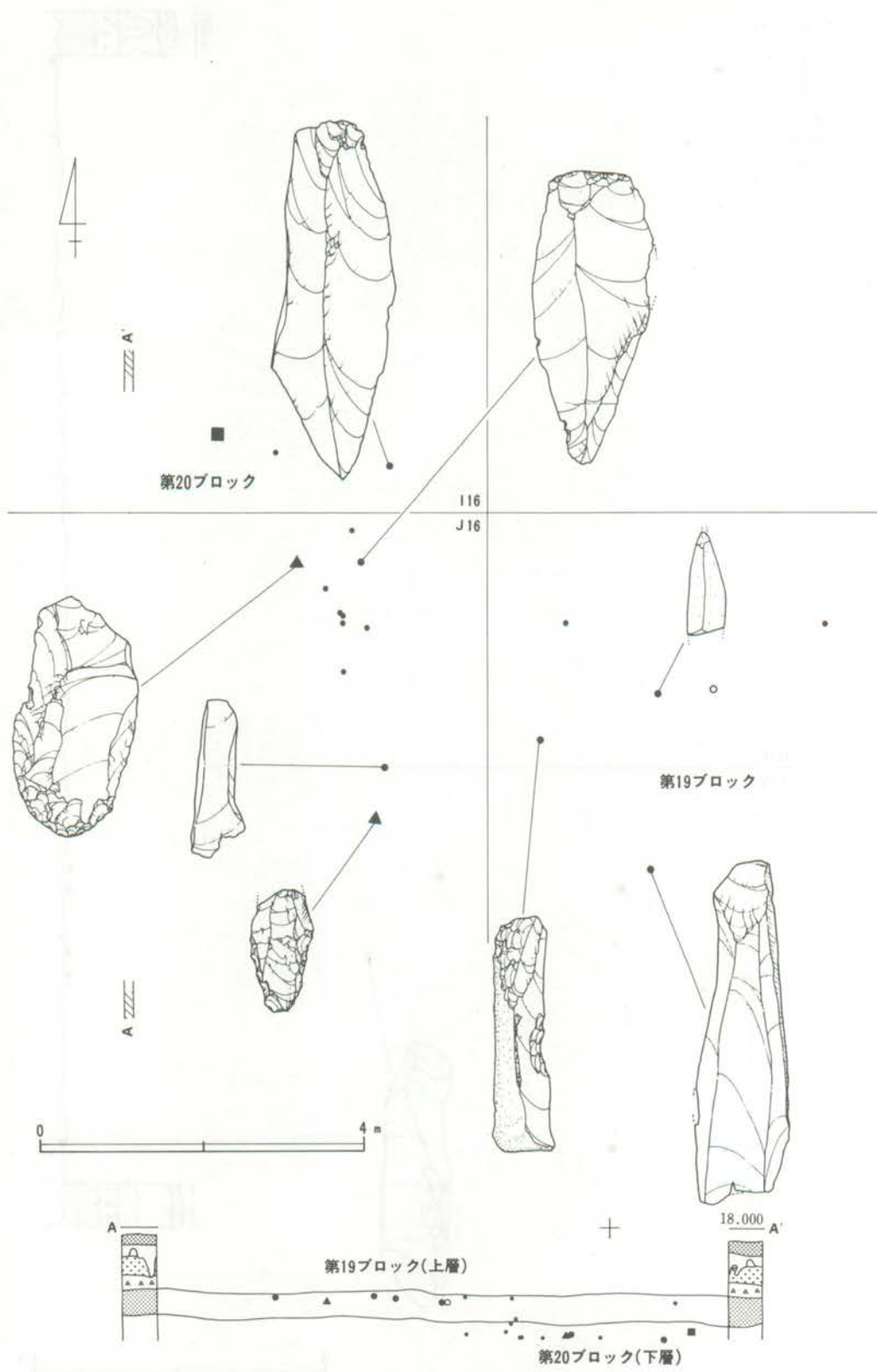
47 47a +カク B225



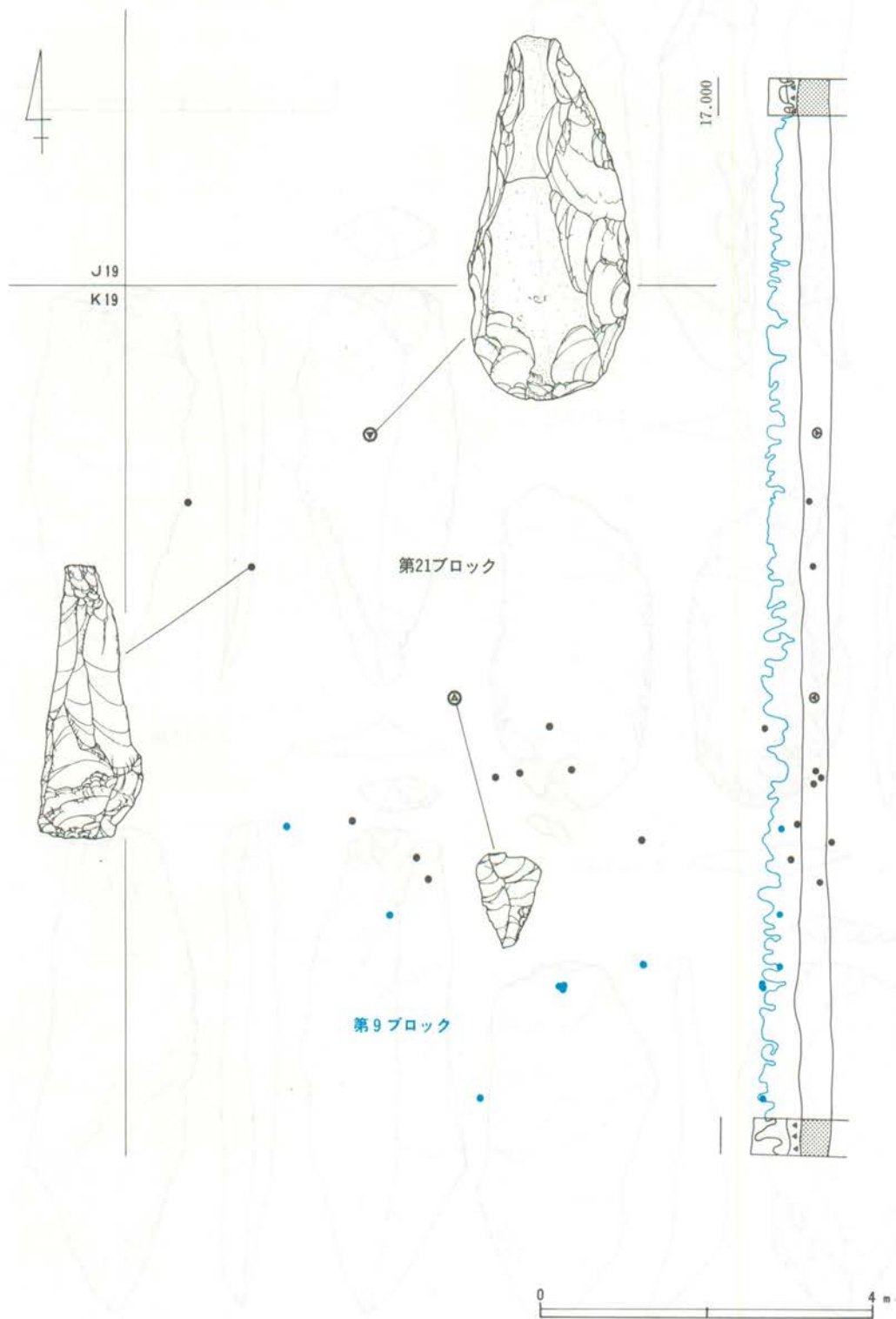
第77図 第17ブロック接合資料 (3)



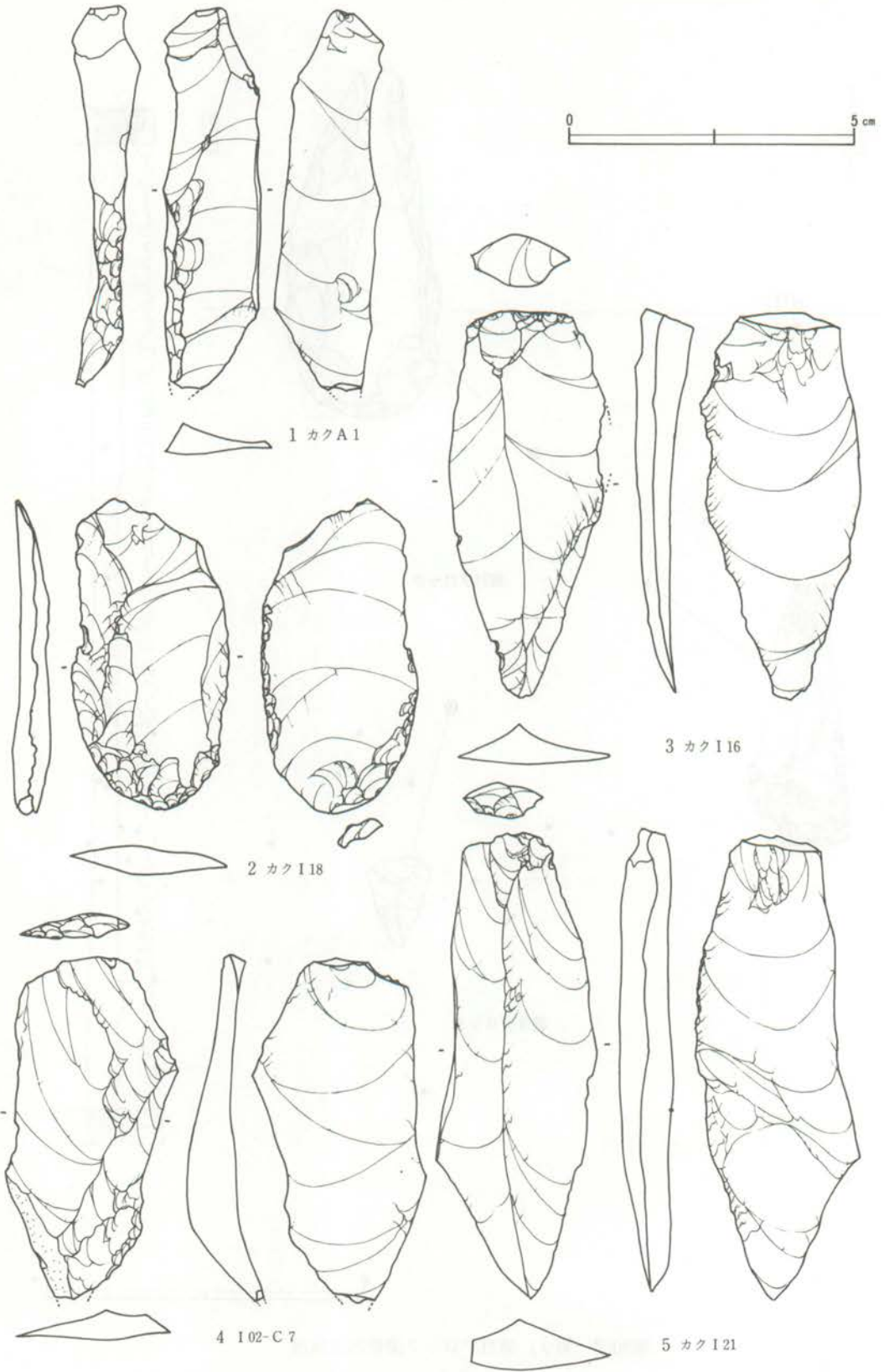
第78図 第18ブロック遺物出土状況



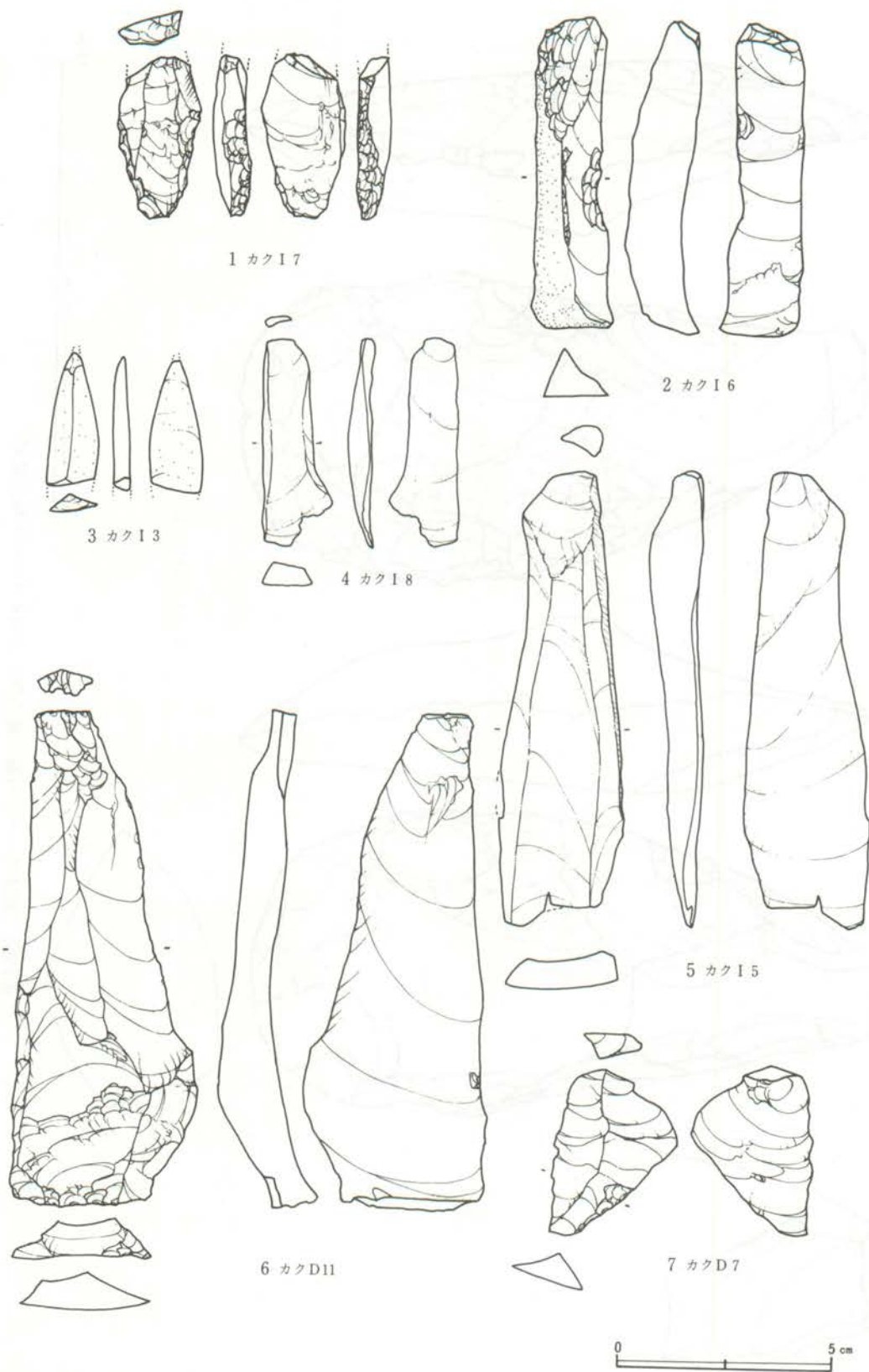
第79図 第19, 第20ブロック遺物出土状況



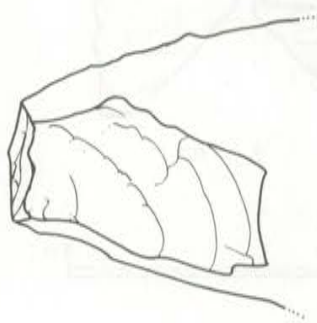
第80図 第9, 第21ブロック遺物出土状況



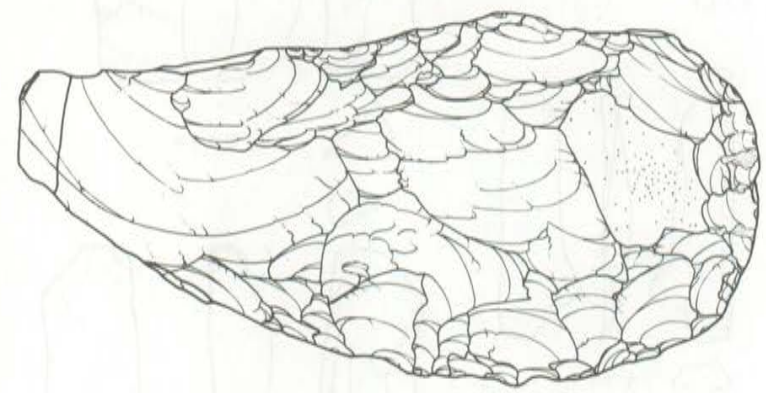
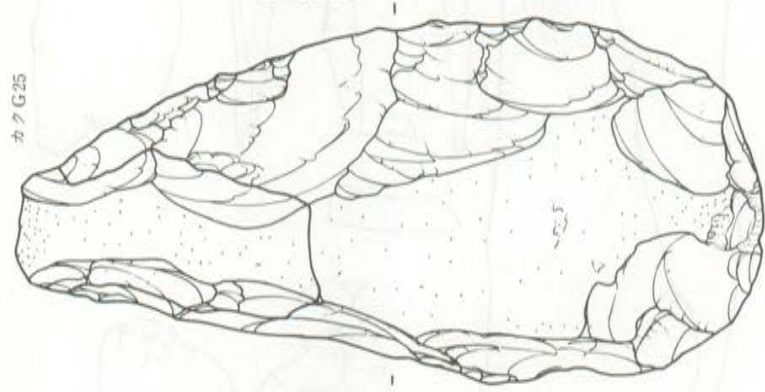
第81図 第18(1), 第19(2~5)ブロック石器



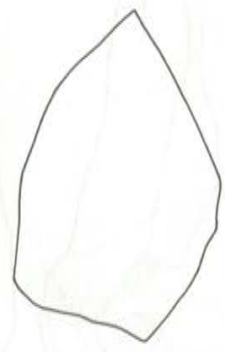
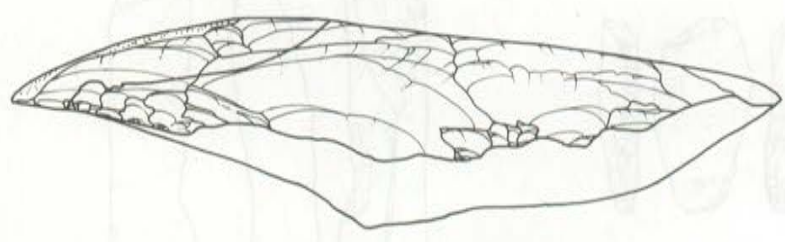
第82図 第20(1~5), 第21(6, 7)ブロック石器



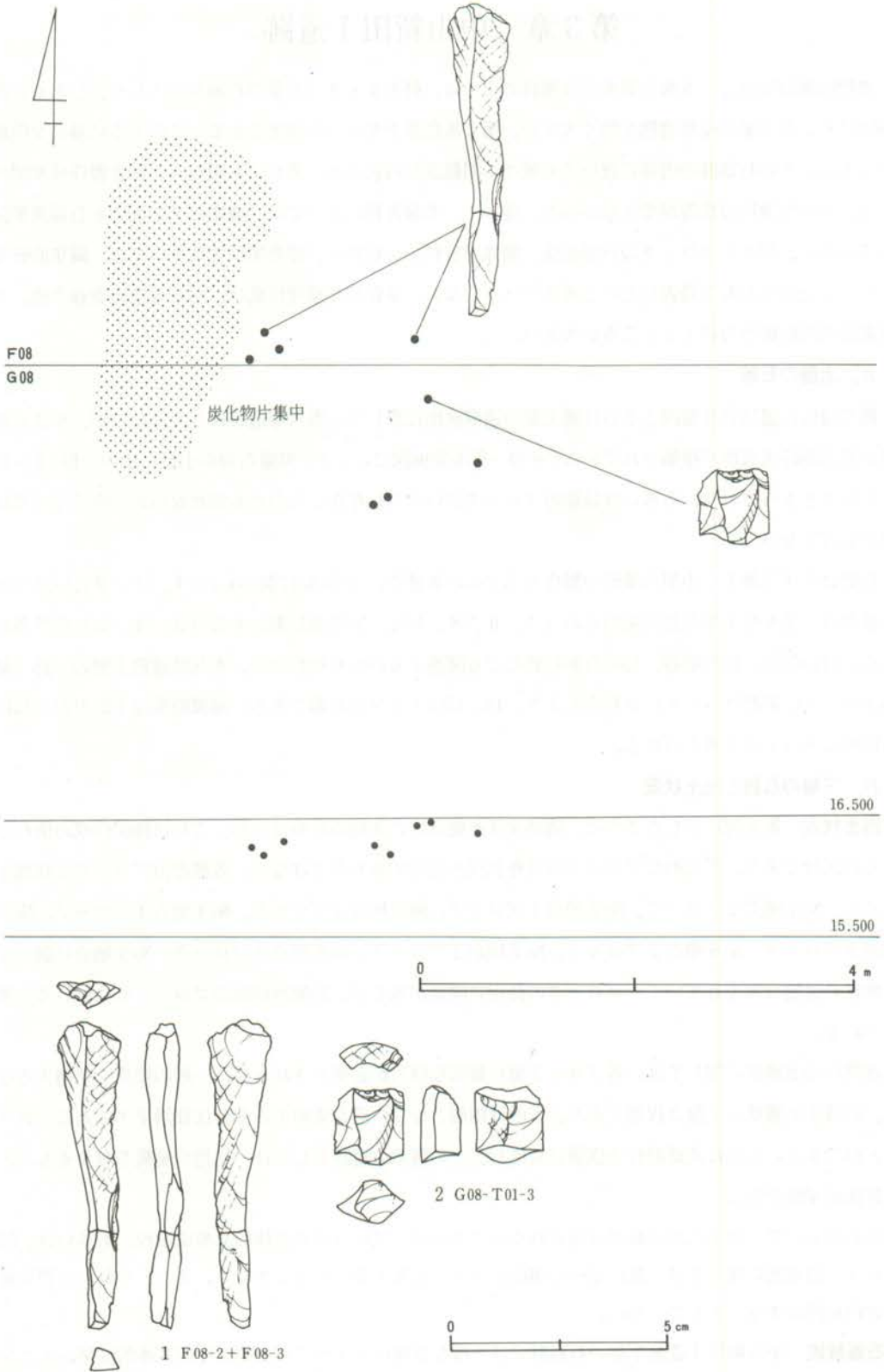
カクG25



1 カクD10+カクG25



第83図 第21ブロック石器 (接合剥片は第6ブロック検出資料)



第84図 第22ブロック遺物出土状況(上)石器(下)

第3章 中山新田 I 遺跡

遺物総数2156点と、本報告書所収3遺跡の中では、最もまとまった量の石器が出土した。しかも、第96図に示した少量の採集遺物を除く大半が、第2黒色帯下半からの検出である。このように量的な問題とともに、その石器群の内容に就いても種々の問題点が内包され、余りにも短かった報告書作成期間内では、十分な遺物の処理ができなかった。従って、本報告書においては、遺物出土状況図と石器実測図のみ公表し、個々のブロックの石器組成、個別別資料の分布状況、接合関係等に就いては、編年的研究とともに別なかたちで発表したいと考えている。なお、基礎的な整理作業は、明治大学の齋藤幸恵、大竹憲昭両氏の御尽力によるところが大きい。

A. 上層の石器

縄文時代の遺物包含層内あるいは縄文期の遺構検出に際して、聖人塚遺跡ほどではないが、やはり多量の先土器時代遺物が採集されている。その一部を第96図に示した。黒曜石製の小型石槍の一群(1~10a)がまとまっており、あるいは該期のブロックがいくつか存在したのかも知れないが、今となっては何とも言えない。

石槍は全体に薄手で小型木葉形の製作を示すのが普通で、(1)両面打製のもの(1、7、9)、(2)主要剝離面の一部を残す半両面打製のもの(2、6、8、10)、(3)片面打製のもの(3、4、5)の3者がある。11の削器、12の彫器、13の台形石器なども関連するのかも知れない。木苜峠遺跡上層の一部(第10ユニット、第23ユニット)に対応しよう。14、15はナイフ形石器である。帰属時期は不詳だが、15は時期的に遡行すると考えられる。

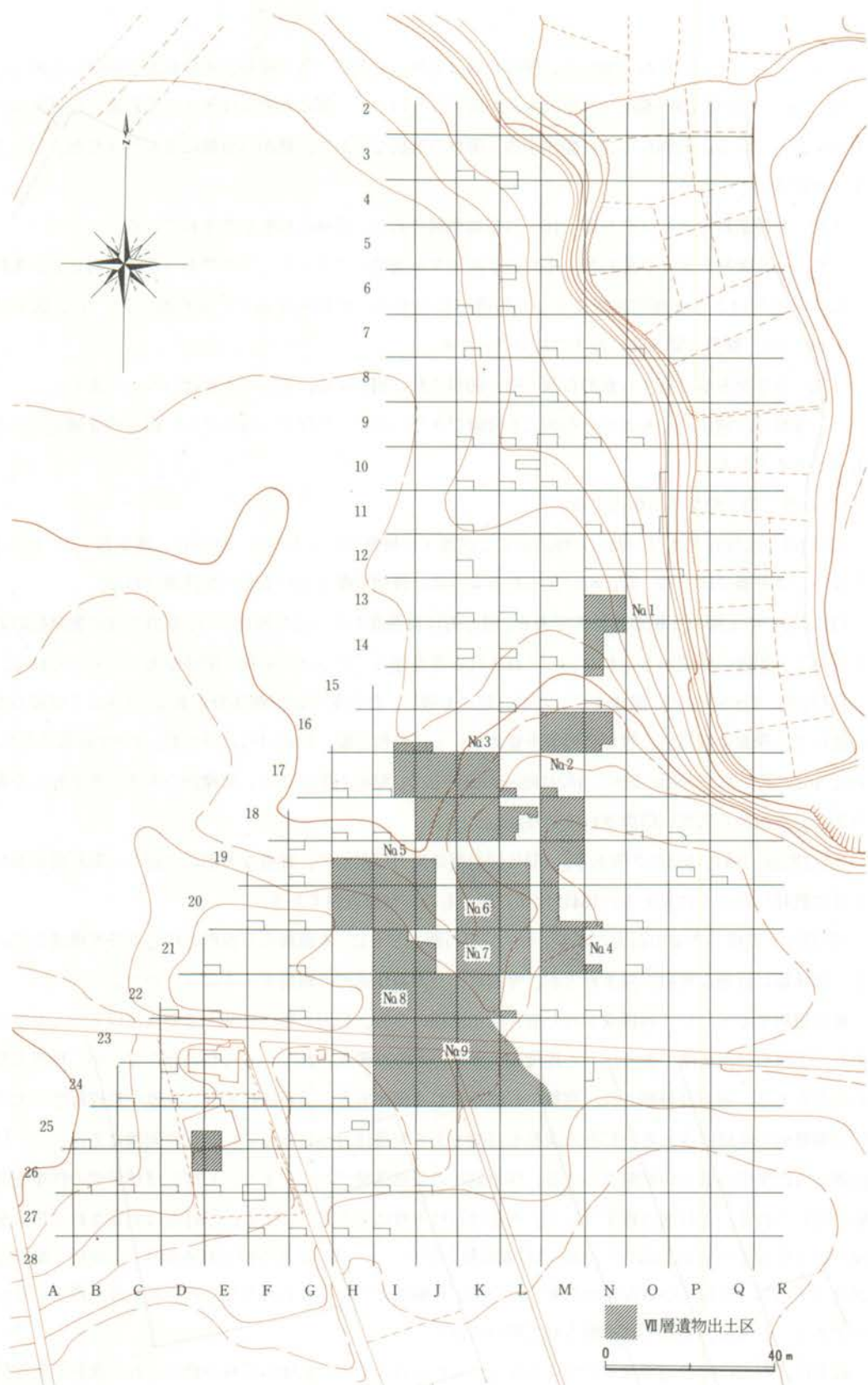
B. 下層の石器と出土状況

出土状況 第8図に示したように、遺跡全体を便宜的に9地点に分けたが、これは挿図作成の便利のための区分であり、平面的なブロックの分布状況を呈示するものではない。各地点のブロックの状態を見ると、No.1地点2ブロック、No.2地点1ブロック、No.3地点3ブロック、No.4地点1ブロック、No.5地点3ブロック、No.6地点2ブロック、No.7地点3ブロック、No.8地点2ブロック、No.9地点に就いては環状の遺物分布をしていて、ブロックの認定に問題が残るが、10箇所前後のブロックに分かれると考えられる。

遺物の産出層準に関しては、各ブロック毎に厳密な検討が必要とされるが、一般的傾向を指摘するならば、石器産出層準の上限はIV層であり、下限はVIII層となり、最も集中する部分はVII層下半であると言うことができる。これは武蔵野台地IX層に対応し、この層準の遺跡としては、屈指の規模を有するものとの評価が可能である。

以上によって、出土状況の概要は知られるのであるが、ブロックの具体的な形成過程、あるいは、間ブロックの連関に関しては、既に述べた事由により、言及することはできない。また、それに必要な基礎資料を提示することもできない。

石器解説 中山新田 I 遺跡下層の石器群には多様な器種が含まれているが、その基本的性格がナイフ形石器文化であることに異論は無いであろう。ナイフ形石器以外には、石刃が多量にあり、石錐、削器、類彫器等の剝片石器と共に、局部磨製石斧、打割器が加わり、さらに、それらの製作に関与したであろう



第85図 中山新田 I 遺跡先土器全体図

うハンマーストーン、台石が加わる。楔形石器は未検出である。各器種毎にその概要を指摘しておく。

(1) ナイフ形石器 (16~69) 大半のものを図示している。一部に厳密にはナイフ形石器とは言えないものも含んでいる。形態ならびに製作手法、素材の選択などから、細かい分類に進むべきだが、ひとまず3類に大別しておく。

1類 石刃素材のナイフ形石器 16~31が典型例であり、諸種の形態が含まれている。

2類 剥片素材のナイフ形石器 1類の2次加工が通常のプランティングであったのに対して、本類は、縁辺角の小さな面的剥離によって特徴づけられる。形状を見ると、3角形 (36、37)、切出様 (49~54)、鱗型 (55~60) の3つに分けられる。

3類 水平な刃部を有する台形石器 62~69がこれに相当する。作出の手法はいろいろある。

この3類は、層位的にもまた分布的にも分離できないので、共伴するばかりか、組成的な補完関係をもつと考えられる。

(2) 石錐 70、83などが相当する。

(3) 削器 比較的大き目の剥片の縁辺部に2次加工の観察されるものを一括した。端削器 (71、73) は少ない。側削器には、72、77、82に見られるように、腹面剥離を用いるものが注意される。

(4) 彫器 89と90の2例が典型的である。91と92は自然面あるいは折断面から、垂直方向の剥離痕のある石器で、彫器の仲間かもしれない。これらは石斧を伴うブロックと密接な関係があると考えられる。

(5) 石斧 158~162に5個体を示したが、他にも破片、作出剥片が何個体分がある。158は1側縁のみの破片で、礫面に敲打痕、腹面に磨痕を留めている。粘板岩製。159~161は砂岩製。159は頭部であり、160、161は磨かれた刃部の破片。162は唯一の完形品で、粘板岩製である。原礫面を大きく残す剥片を素材とし、両面から入念に研磨されている。

(6) 打割器 163、164の2例ある。163は砂岩製の両刃打割器で、鈍重な刃部には細かい敲打痕があり、全体に磨耗したように見える。164は片面打製のもの。粘板岩製である。

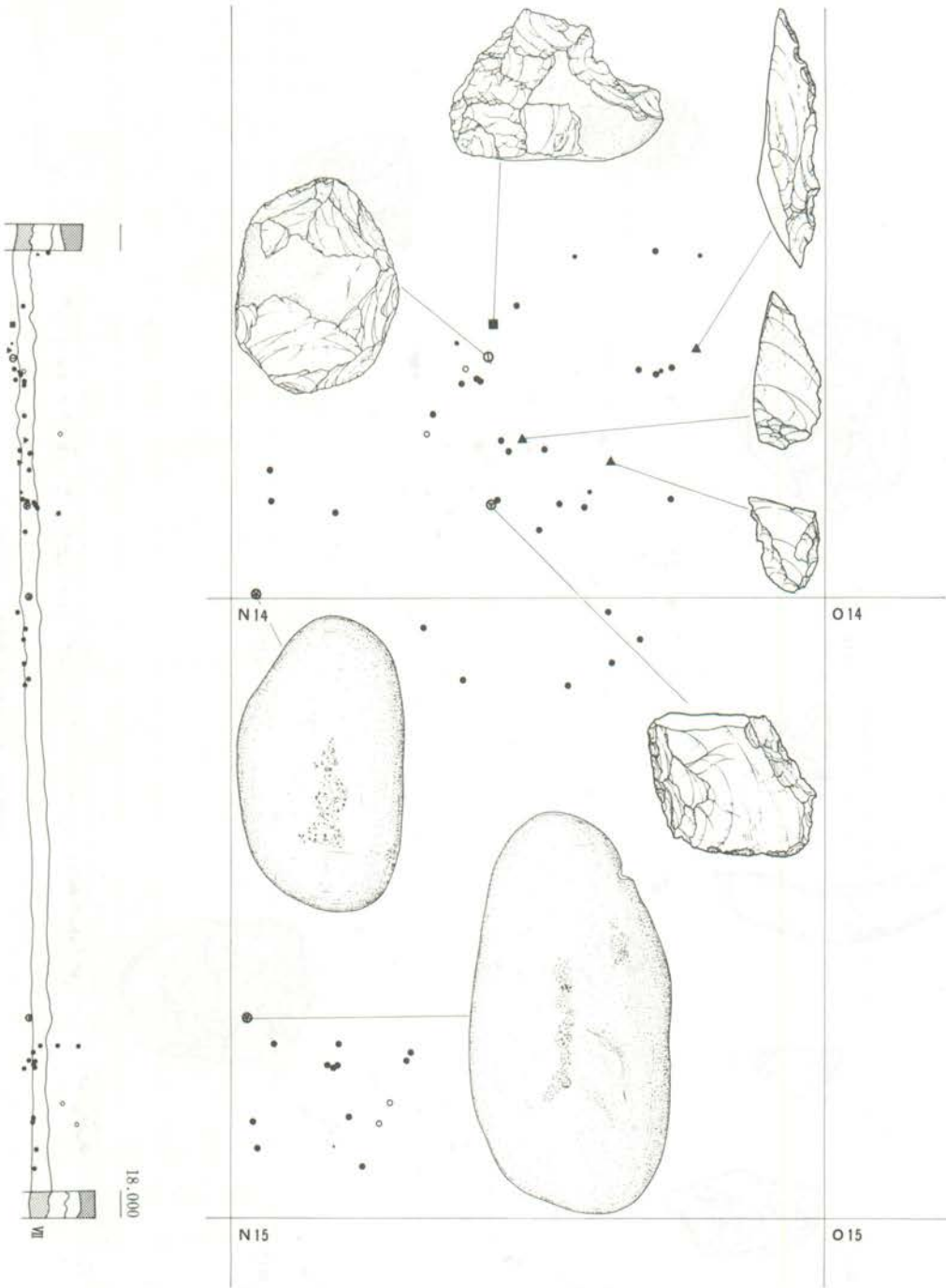
(7) 剥片と石核 多量の石刃があり、ナイフ形石器とともに、本遺跡の石器群の核心部分を構成している。個体毎に詳細な検討が望まれるが、今回は、石刃製作過程の概要を示すにとどめた。

接合資料をもとにして再構成された剥片作出過程のうち、石刃の製作に関する要点は以下のとおりである。①原石は河床礫である。どの程度の大きさのものが搬入されているのかは分らないが、相当大型のものもある。原石は分割され、複数の石核を生じる例がある。②石核打面は、1枚~数枚程度の大き目の剥離面から構成される。打面の調整を目的とする剥離は行なわれない。③剥片剥離に先行して、打面側から作業面へ細かい剥離を加える。作出剥片の頭部調整である。また、しばしば稜形成の作業面調整が認められる。④打面は再生される。再生は石核を横に切る方法による。⑤打面は固定され、再生を繰り返す場合もあるが、同時に、180°の打面転移を行うことも多い。⑥作出される剥片は、背稜と側縁とがほぼ平行し、比較的小さな打面をもつもので、長幅比の上からも石刃としての必要条件を満足するものである。石刃は、しばしば折断されて用いられる。

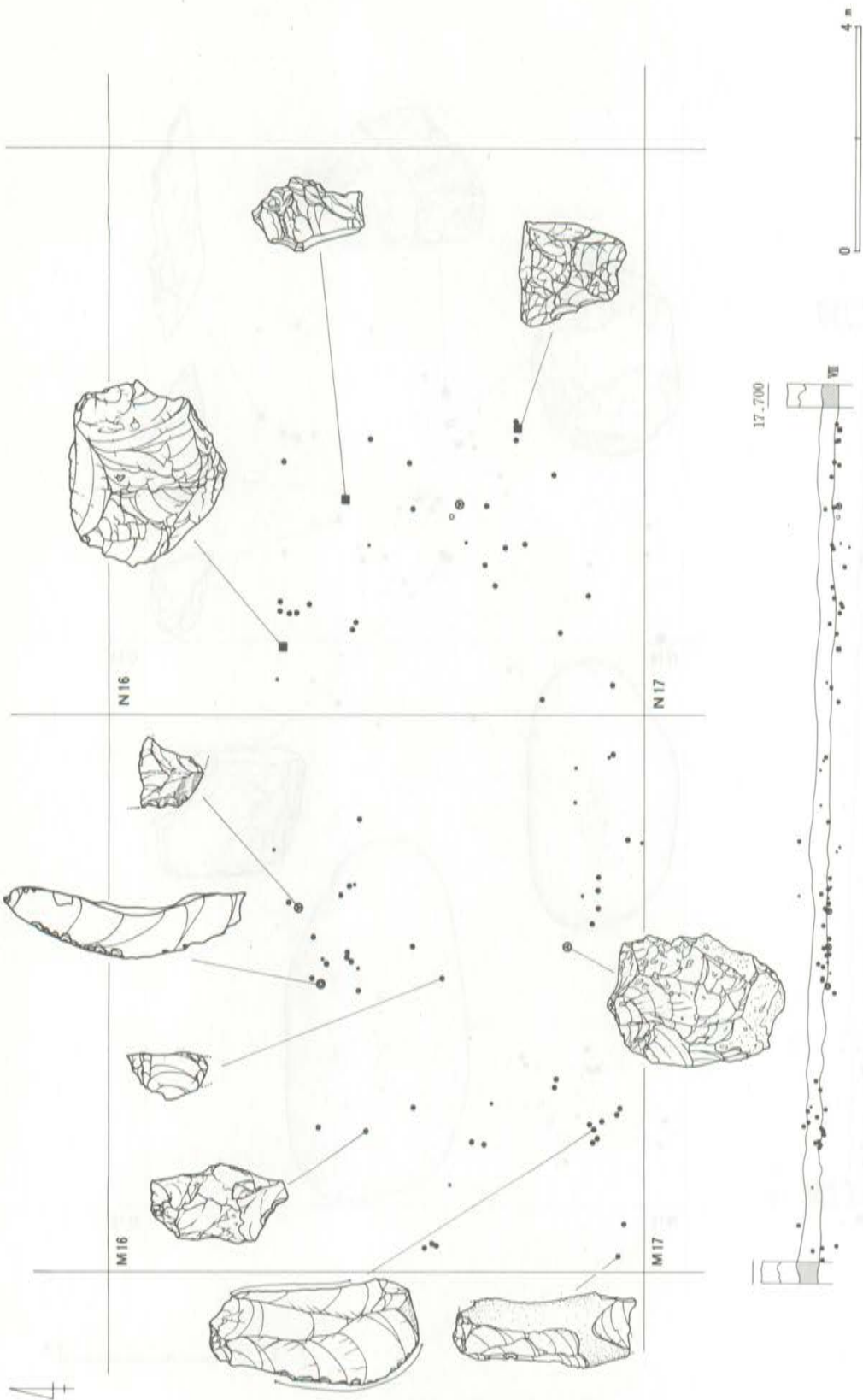
以上は、石刃作出の過程を示す例であるが、これ以外に、また別種の石核が認められ、複数の剥片剥離工程が存在する。

①171に代表される。表裏に求心的な剥離痕のある円盤形石核である。

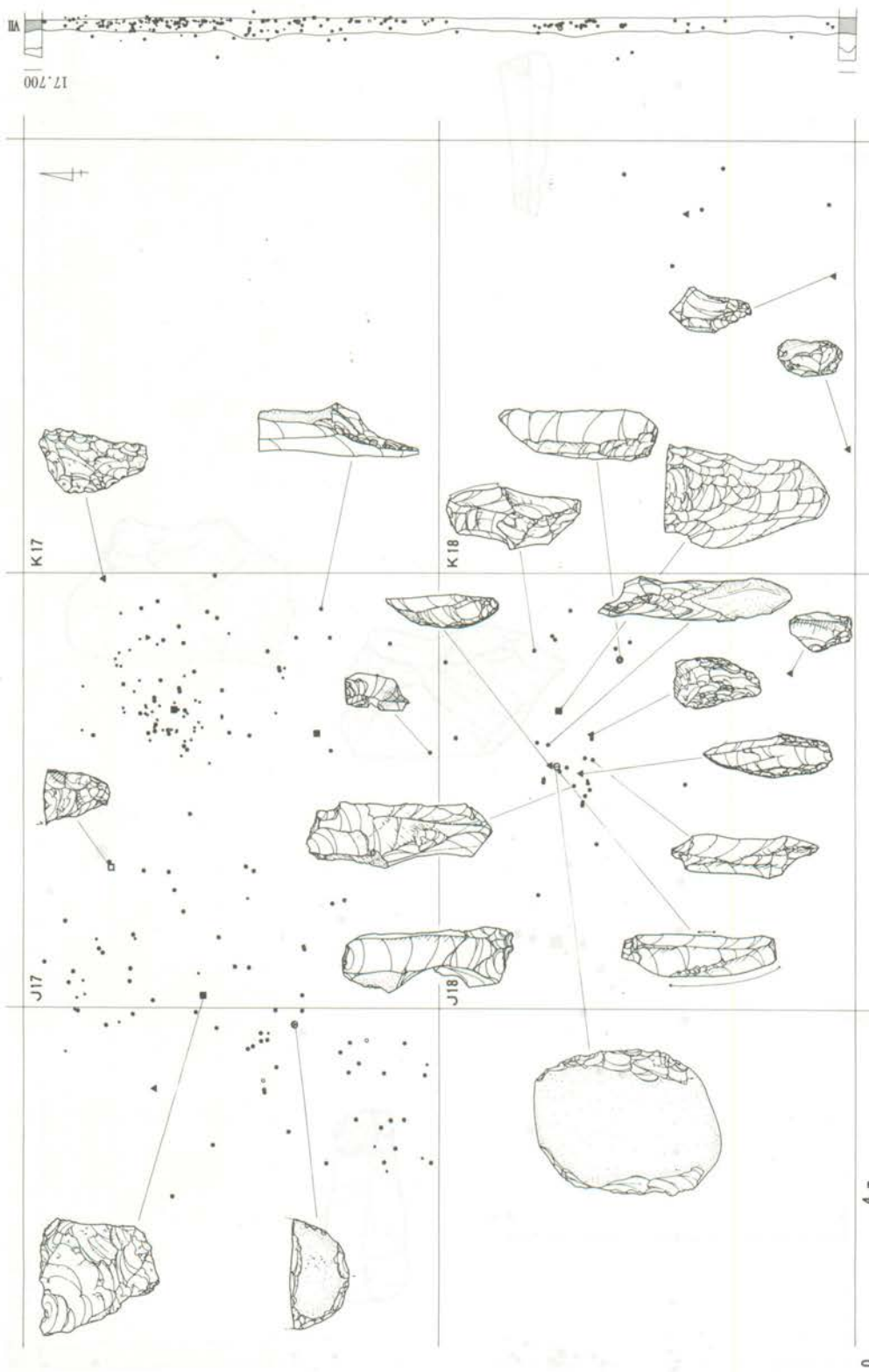
4



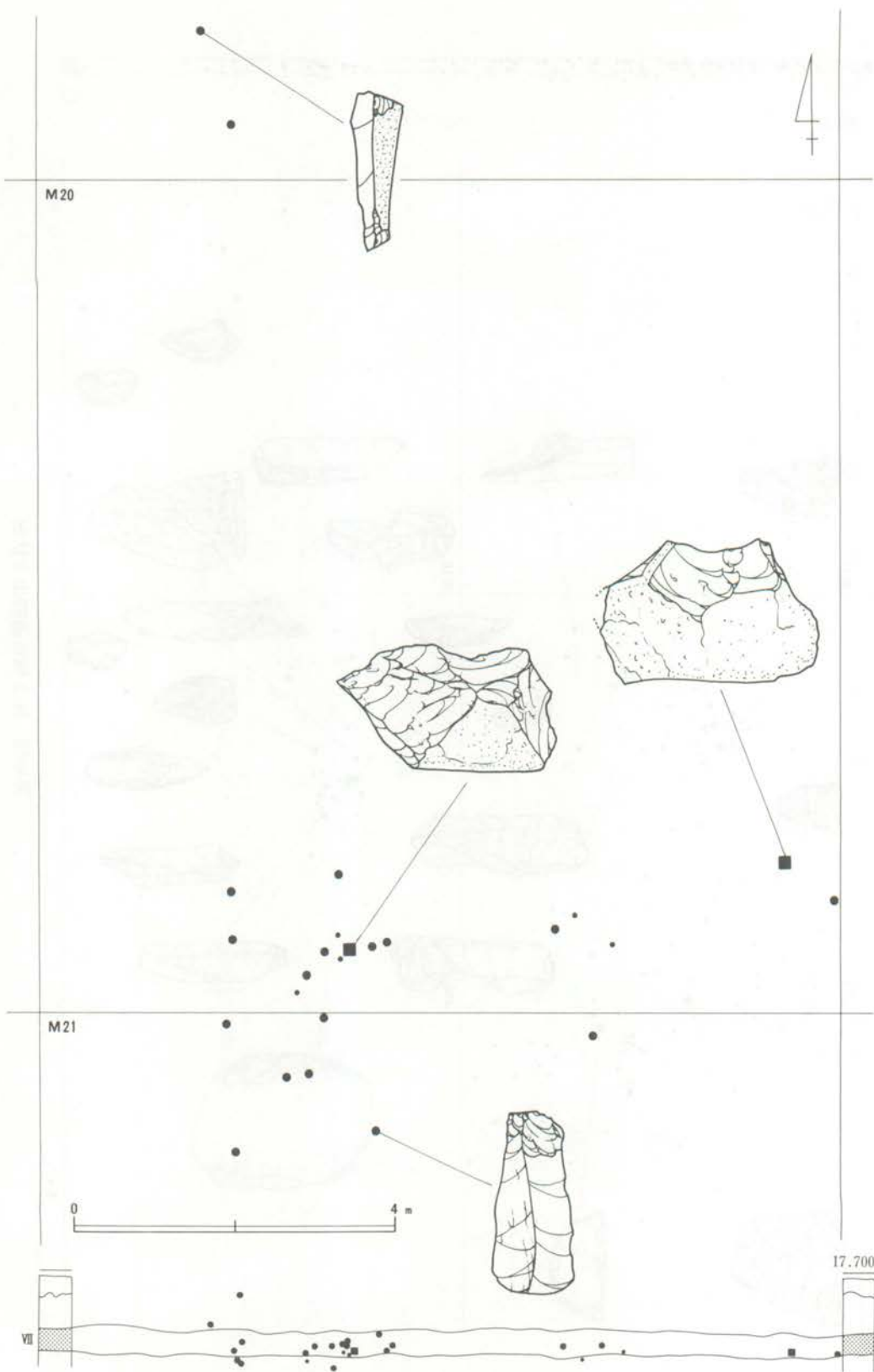
第86図 No 1 地点遺物出土状況



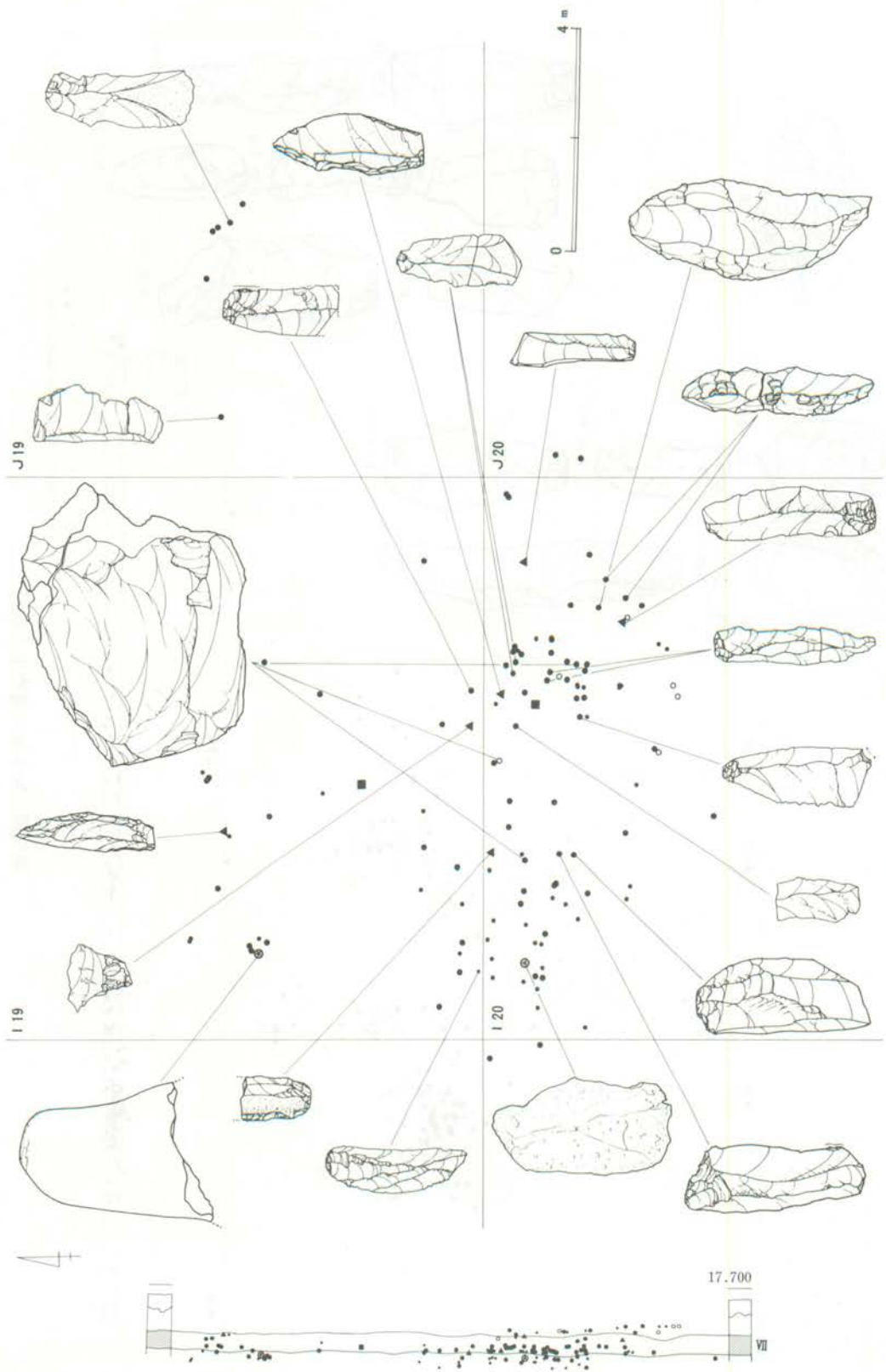
第87図 No. 2 地点遺物出土状況



第88图 No.3 地点遺物出土状況

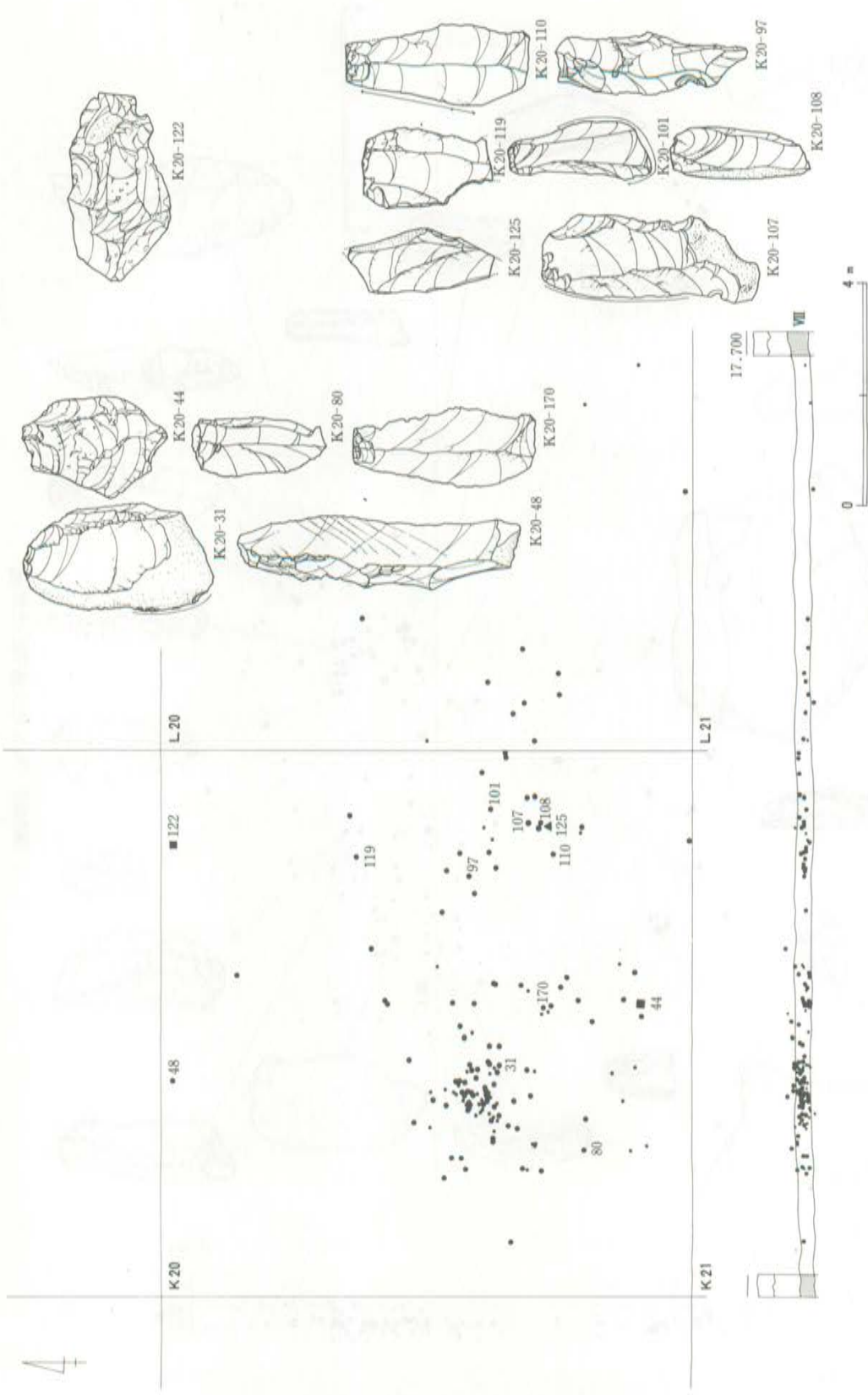


第89図 No 4 地点遺物出土状況

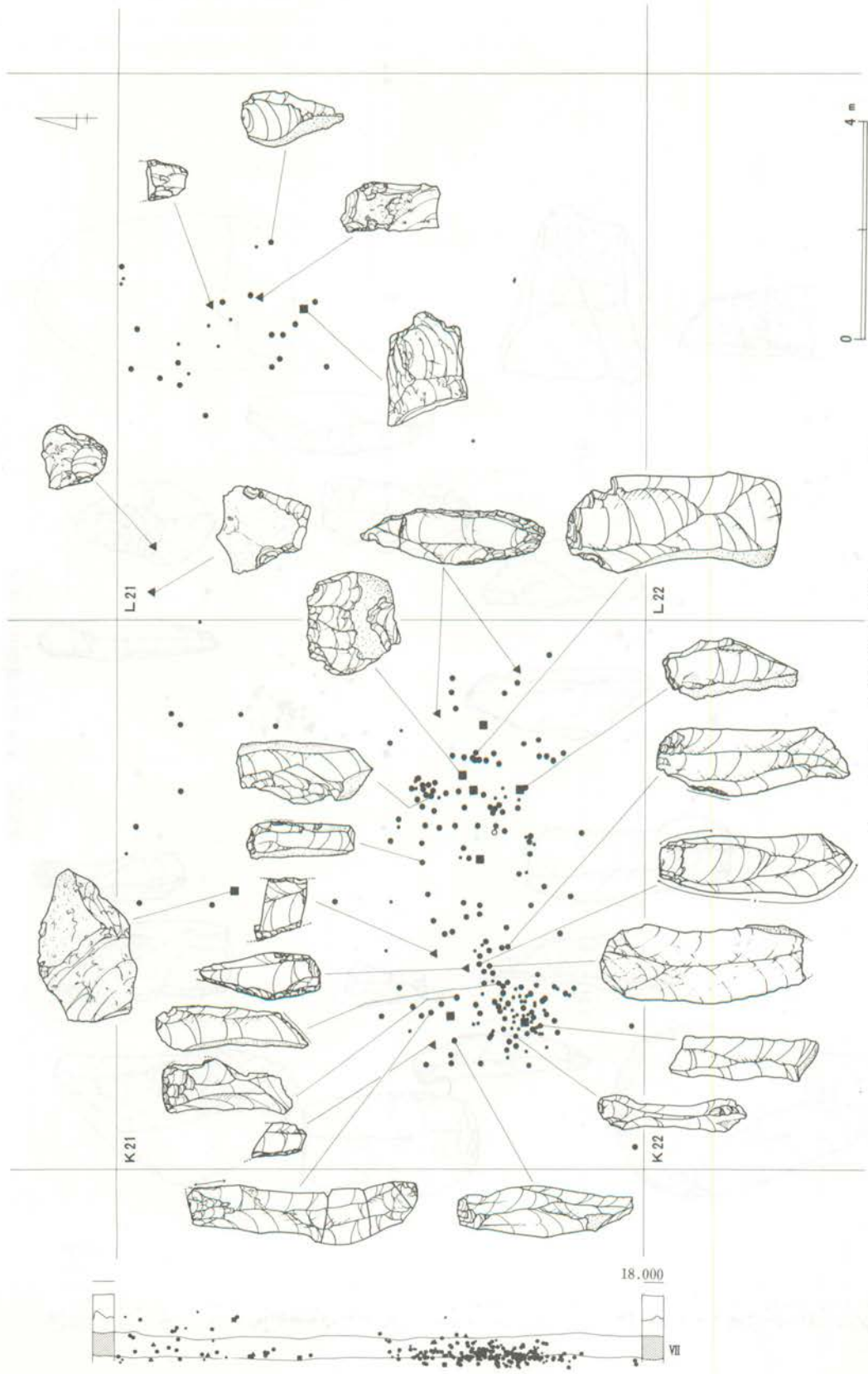


第90図 No. 5 地点遺物出土状況

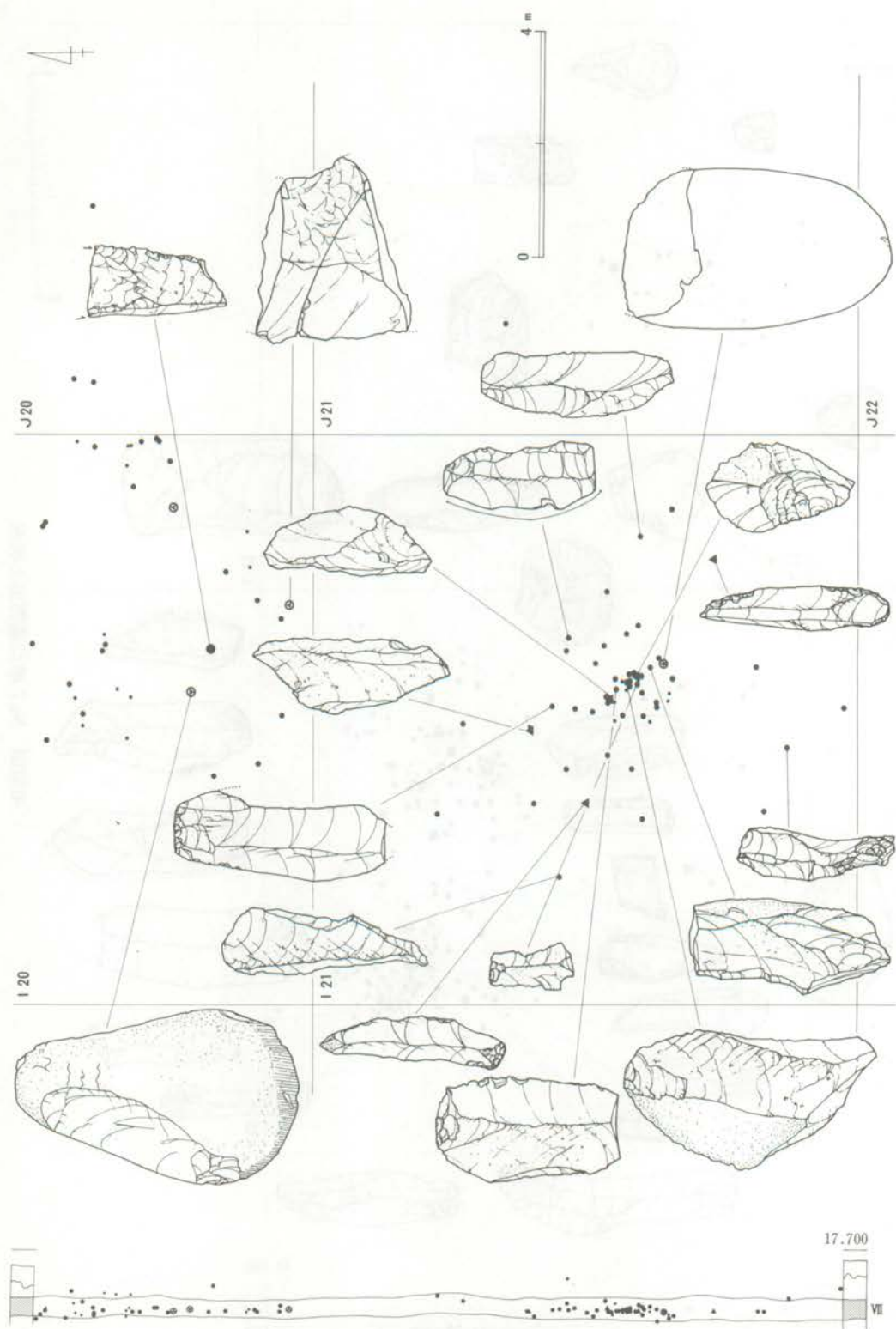
4



第91図 No.6 地点遺物出土状況



第92図 No.7 地点遺物出土状況



第93图 No. 8 地点遺物出土状況

②175は部厚い剥片素材の板状石核であり、一端から横長剥片が剥離されている。剥片剥離後に、山形に打面調整が実施されているようである。

③176～181に見られる様に、打点を横に移動しながら多様な形状の剥片を生産するもの。

使用された石材に関しても、詳しく触れられない。各地点ごとに数種の母岩が消費され、地点間にも移動している。既に100個体以上を識別しているが、頁岩、玄武岩、黒曜石、流紋岩の使用頻度が高い。他に、チャート、粘板岩、砂岩、ホルンフェルス、玉髓、石英斑岩、凝灰岩などがある。石刃素材としては、頁岩が他を圧する。このため、ナイフ形石器1類にも頁岩が多く見受けられることになる。(田村)

(注)本文脱稿後、各遺跡出土の石器石材に関して、再検討をする機会があり、石質名称に若干の変動をきたした。詳細は後日、他遺跡の石質を含めて公表される予定になっているが、概要は以下のとおりである。

玄武岩 黒色安山岩を含む。

粘板岩 黒色頁岩、泥岩、ホルンフェルスを含む。

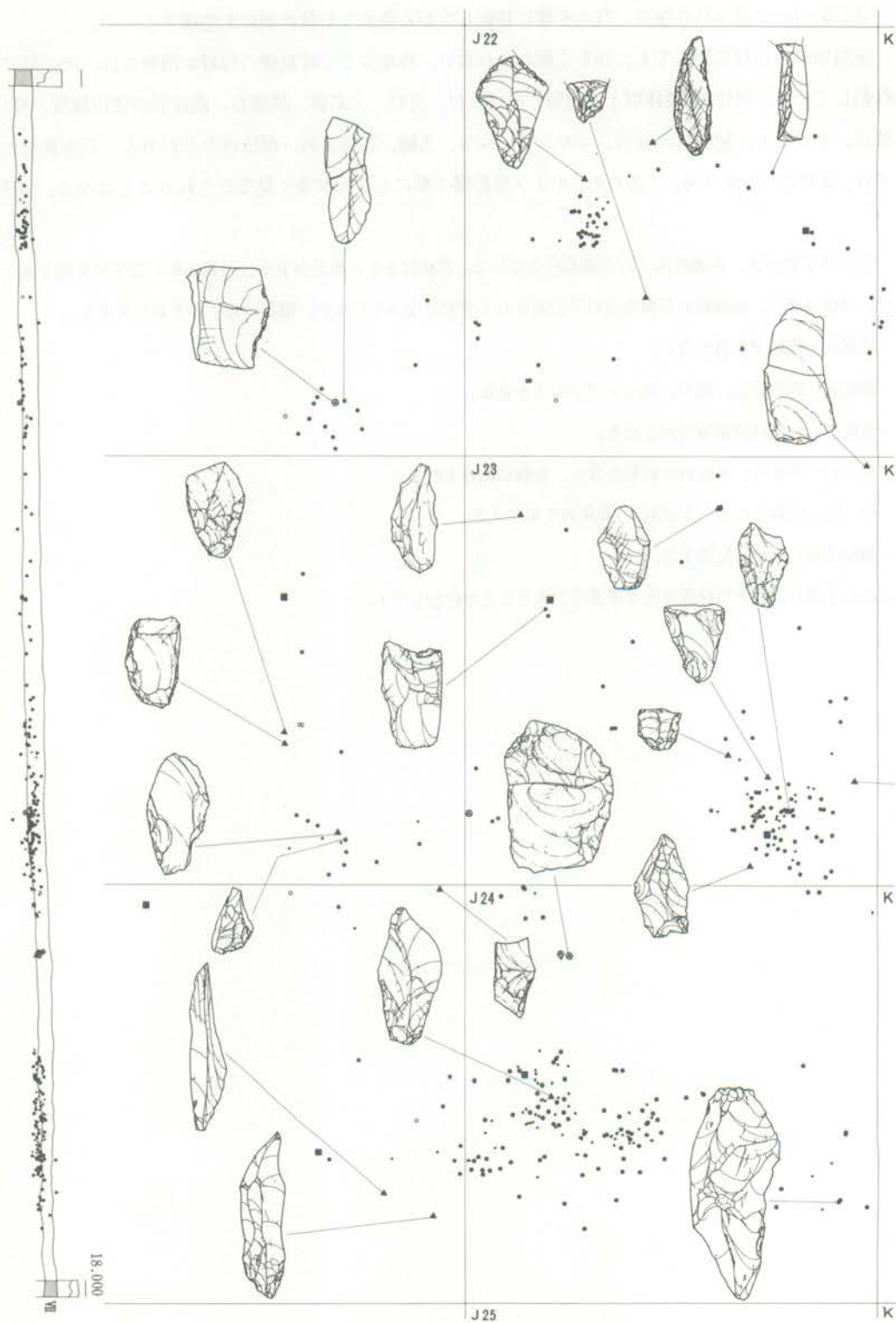
流紋岩 一部は溶結凝灰岩となる。

頁岩 凝灰岩、流紋岩の仲間を含む。数種に細分される。

砂岩 変質安山岩(玄武岩)、凝灰岩を混じえる。

細粒砂岩 頁岩に変更する。

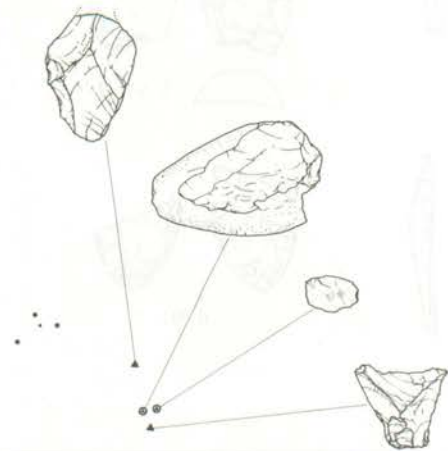
これらを含め、目下石材原産地を探索中であることを付記しておく。



第94図 No 9 地点遺物出土状況 (西半) (10mグリッド)

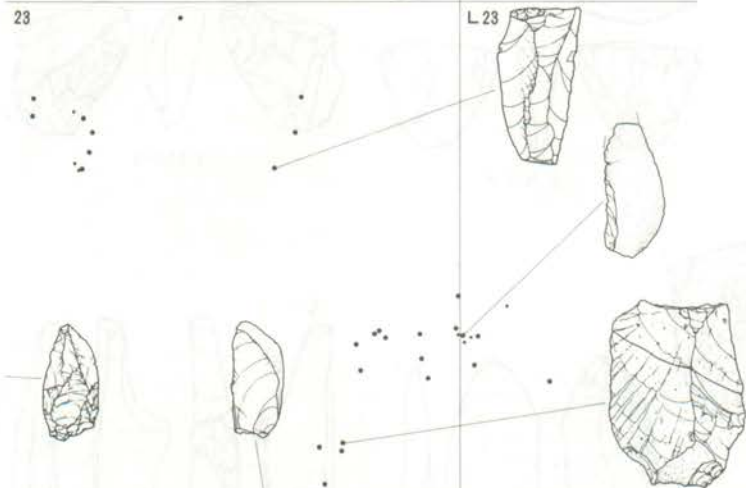
22

L 22



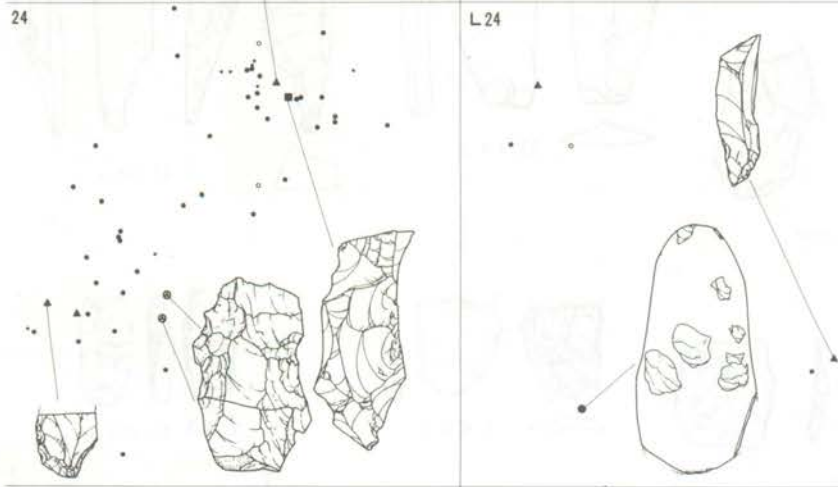
23

L 23



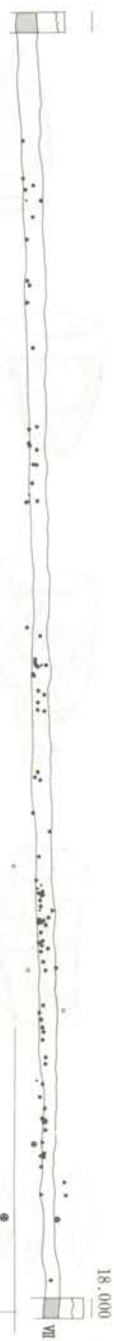
24

L 24

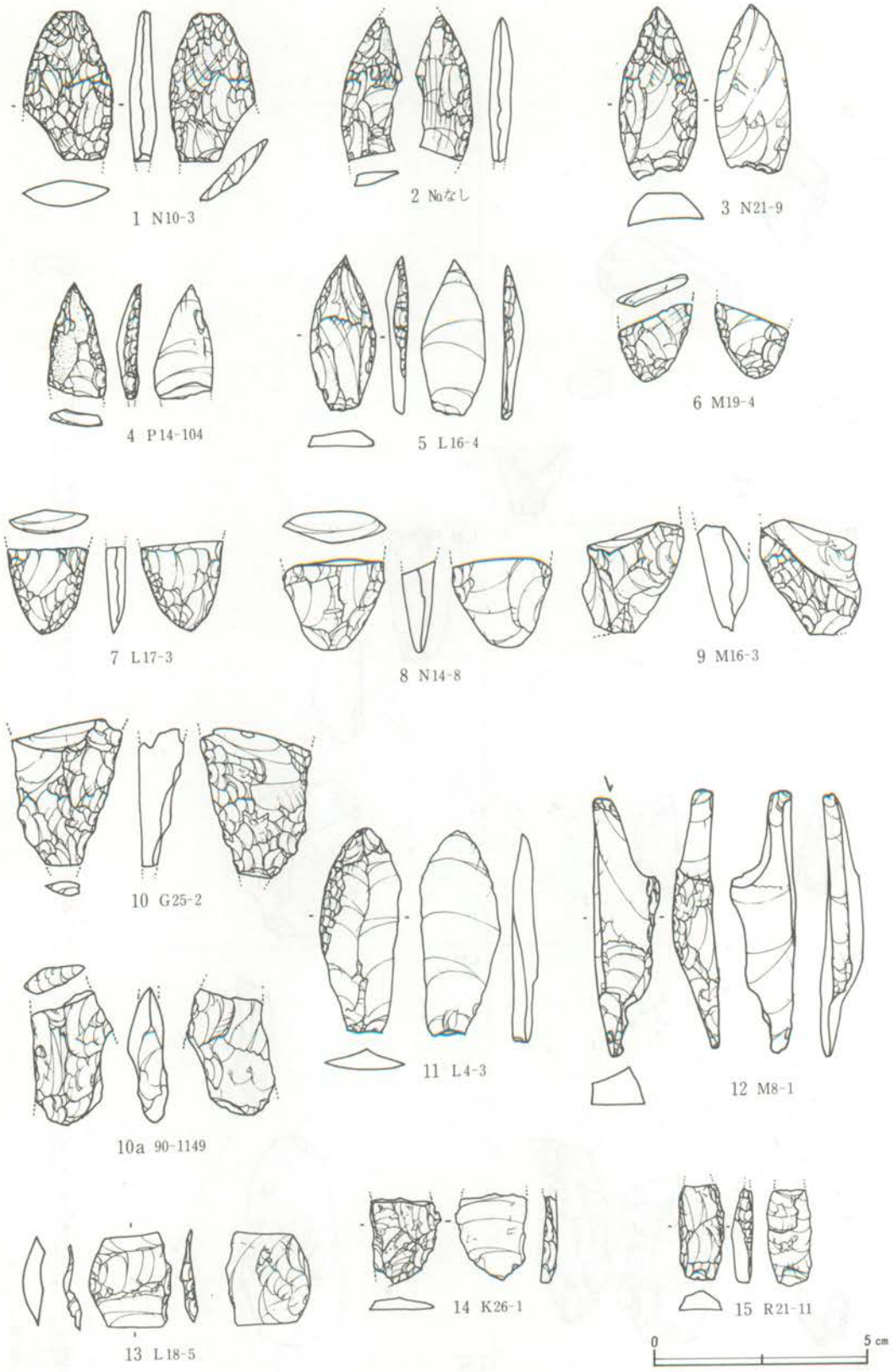


25

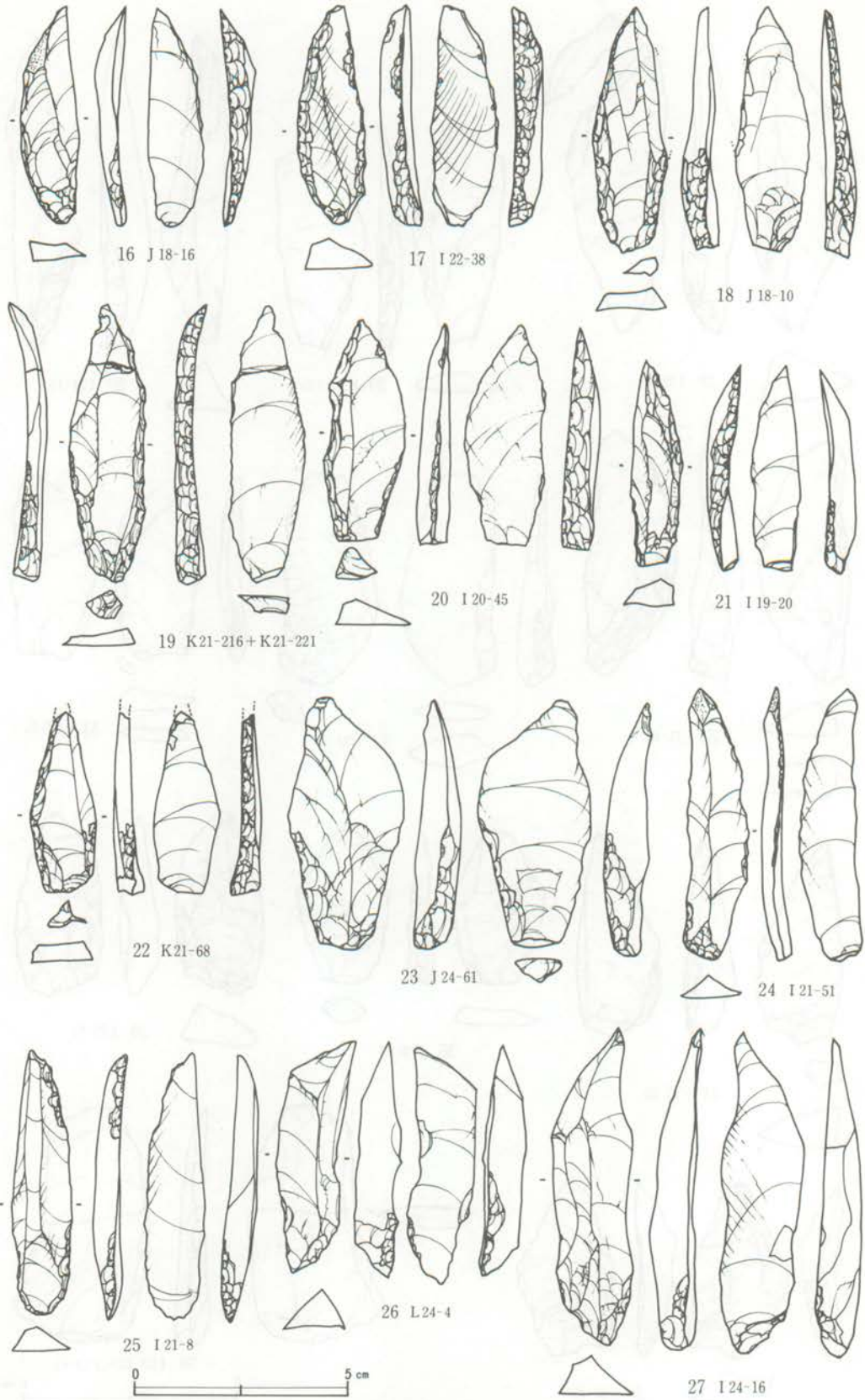
L 25



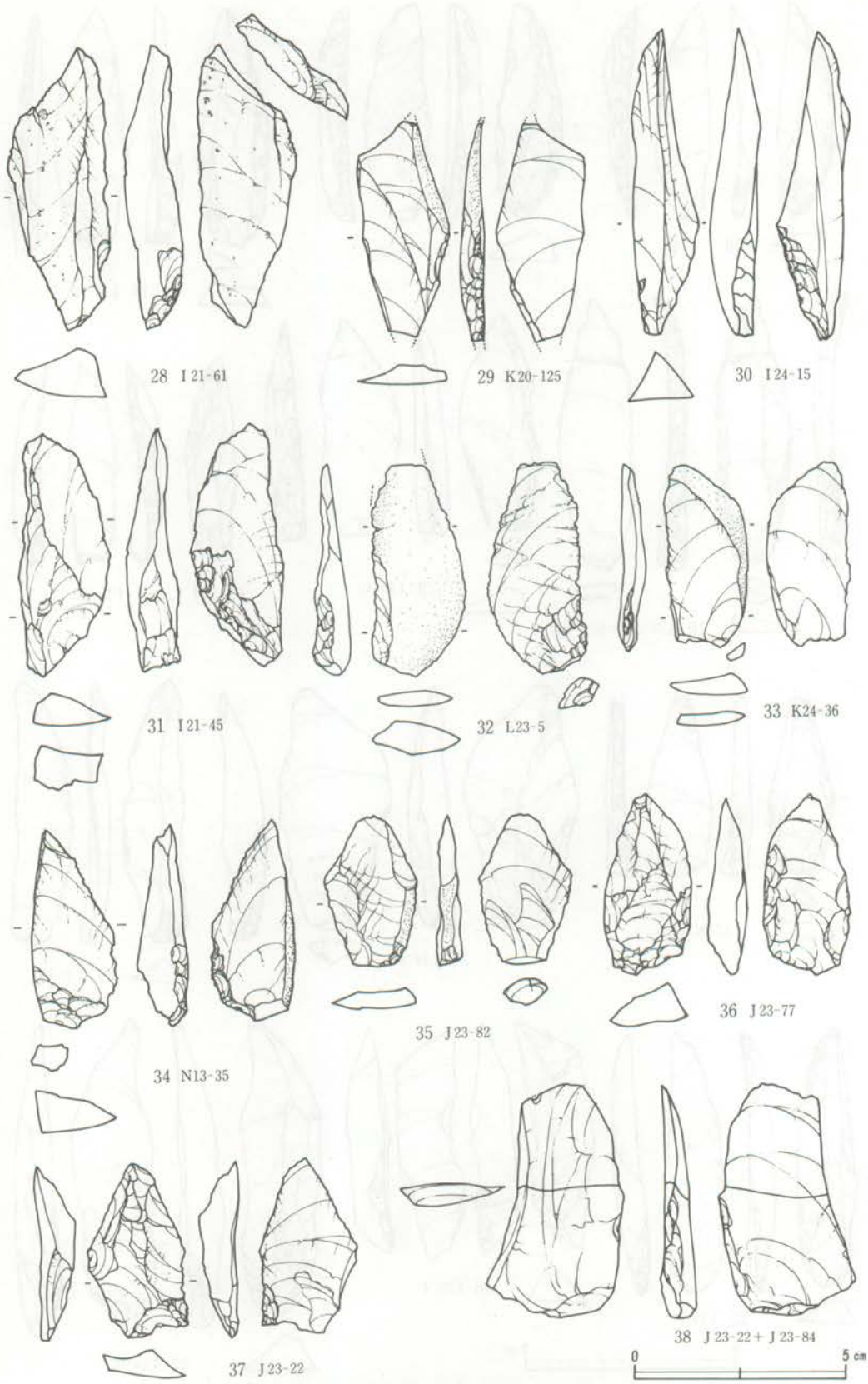
第95図 Na 9 地点遺物出土状況 (東半)



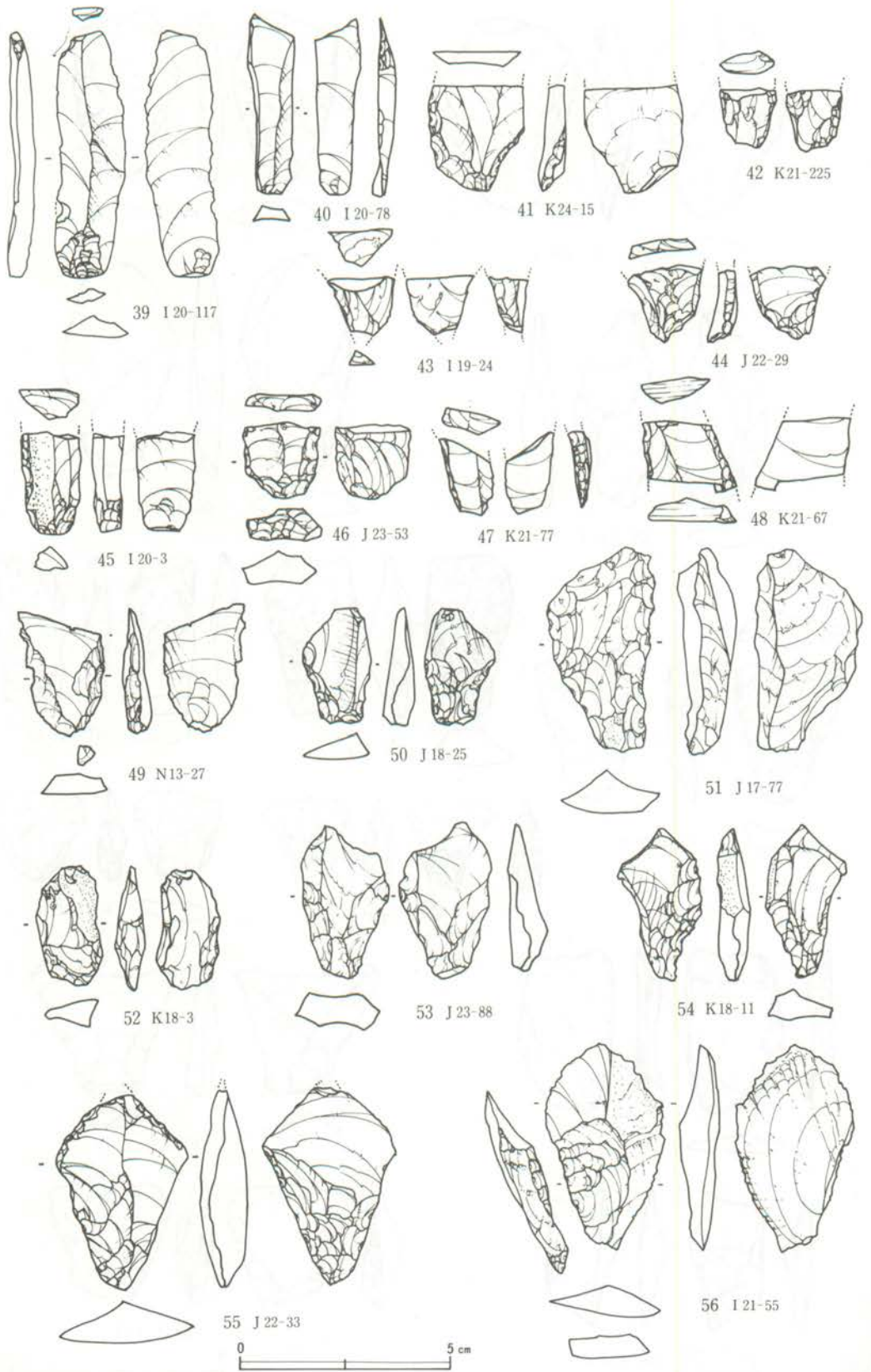
第96図 石器 (1)



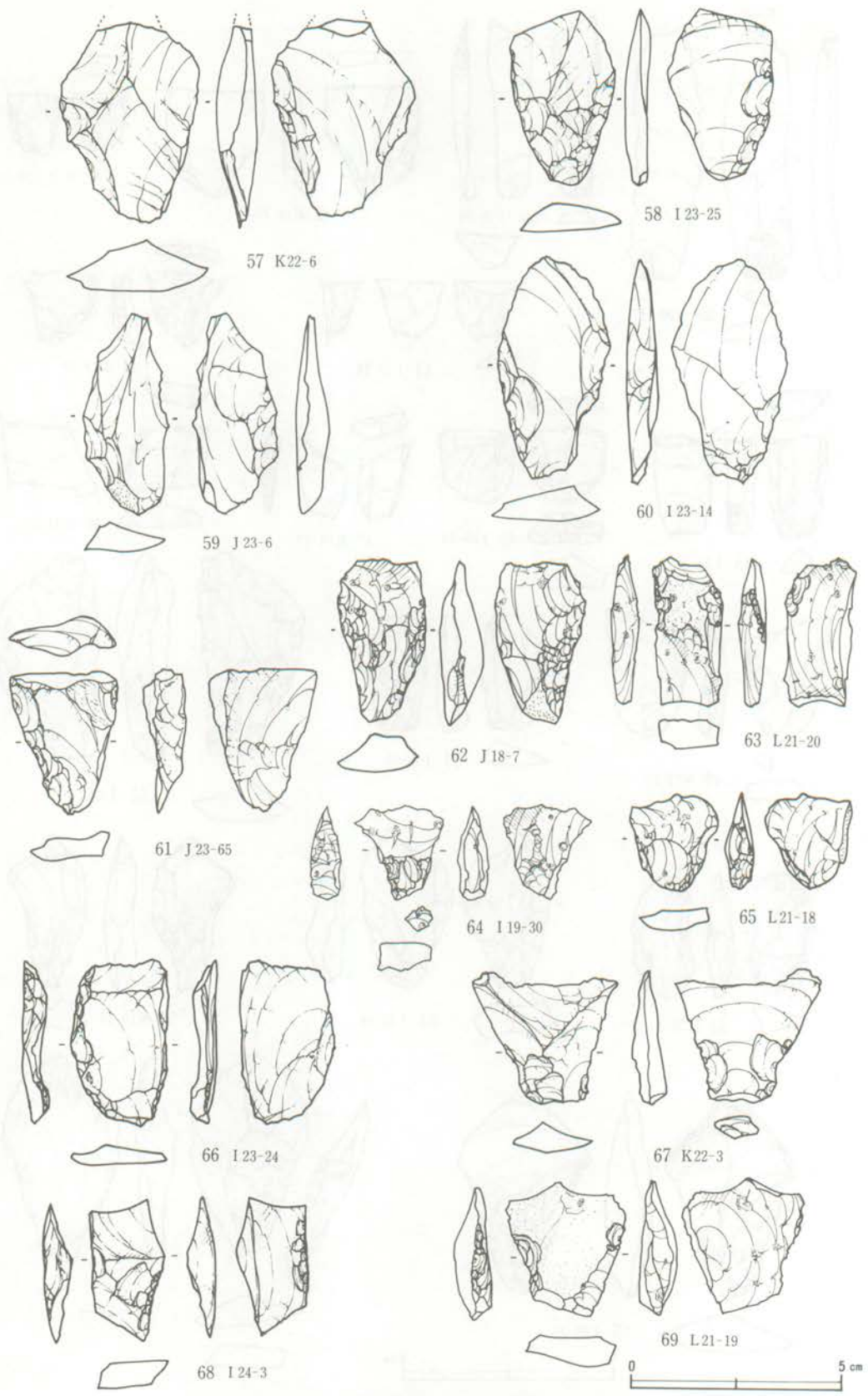
第97図 石器 (2)



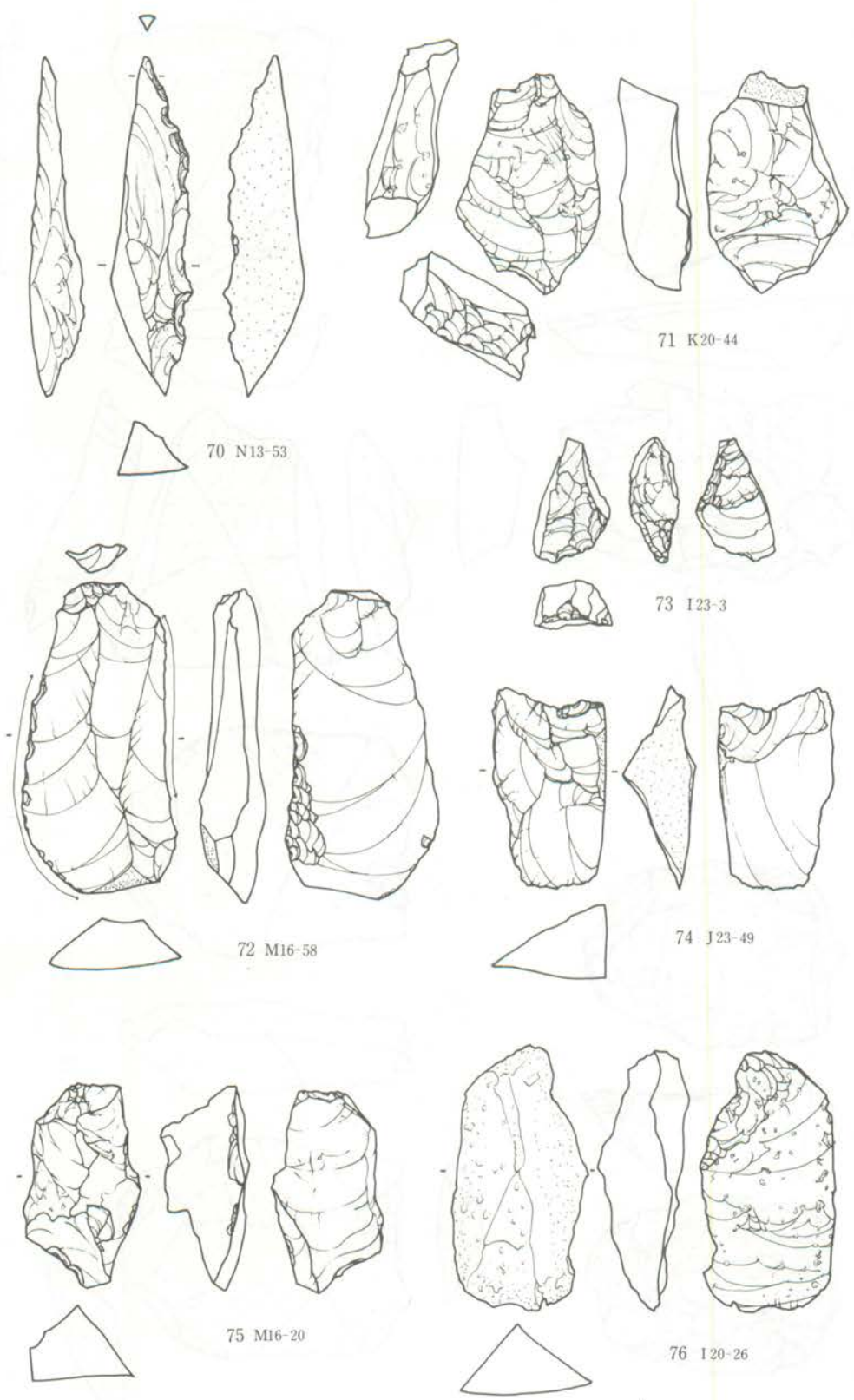
第98图 石器 (3)



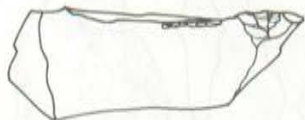
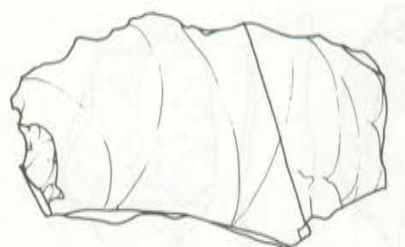
第99図 石器 (4)



第100图 石器 (5)



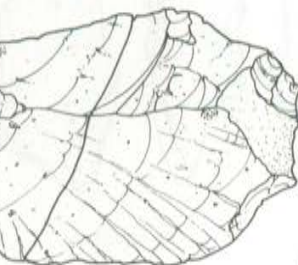
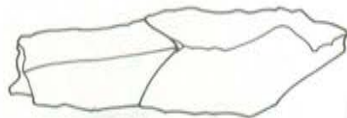
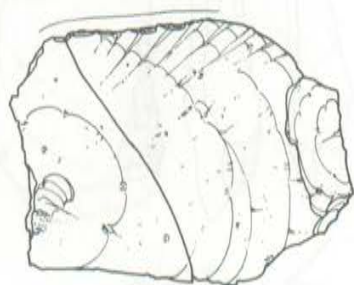
第101図 石器 (6)



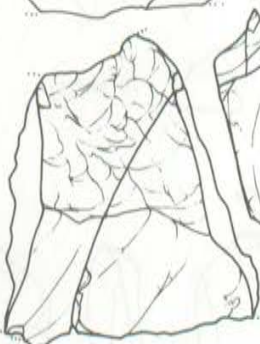
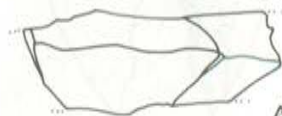
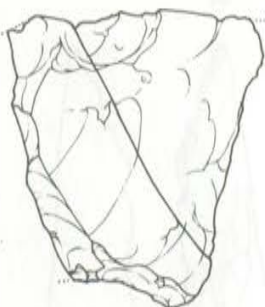
77 M16-32



78 K24-10+K24-19



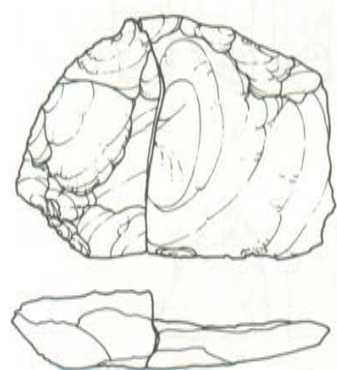
79 I23-4+K23-31



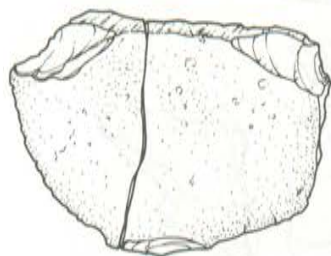
80 I20-89



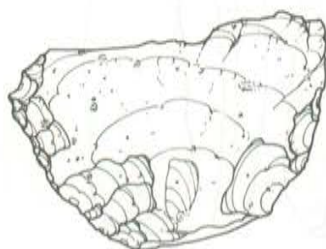
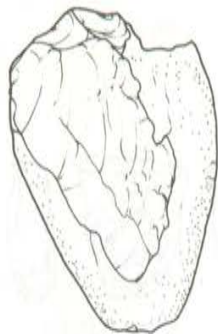
第102图 石器(7)



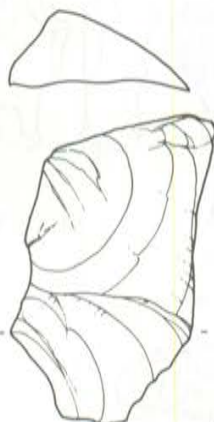
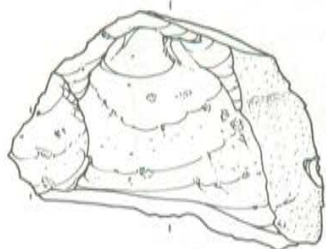
82 J 24-53 + J 24-124



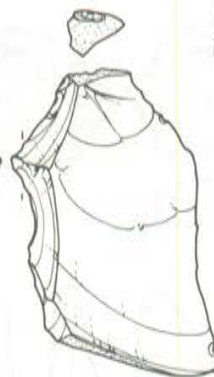
81 K 23-4



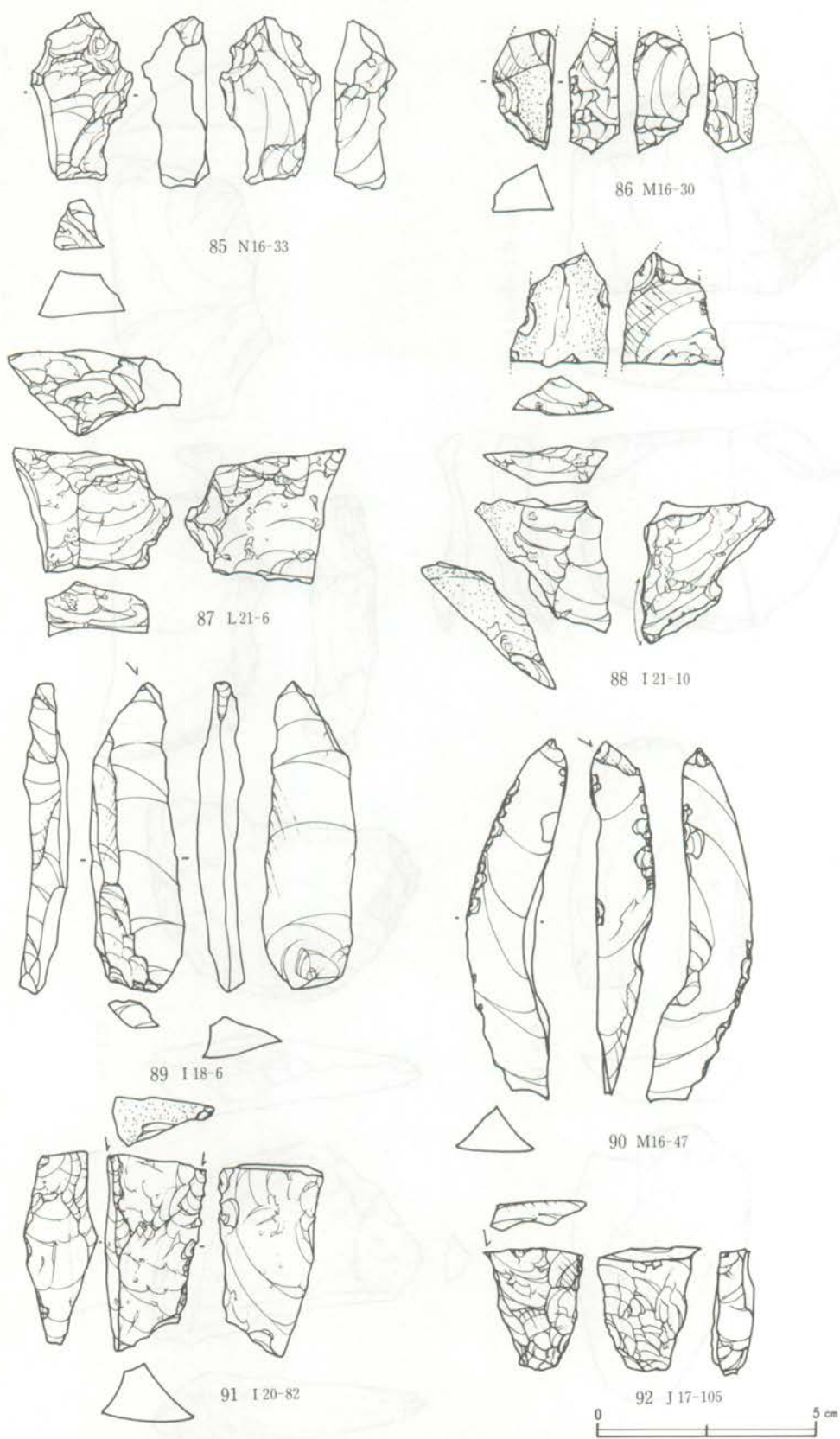
83 E 25-5



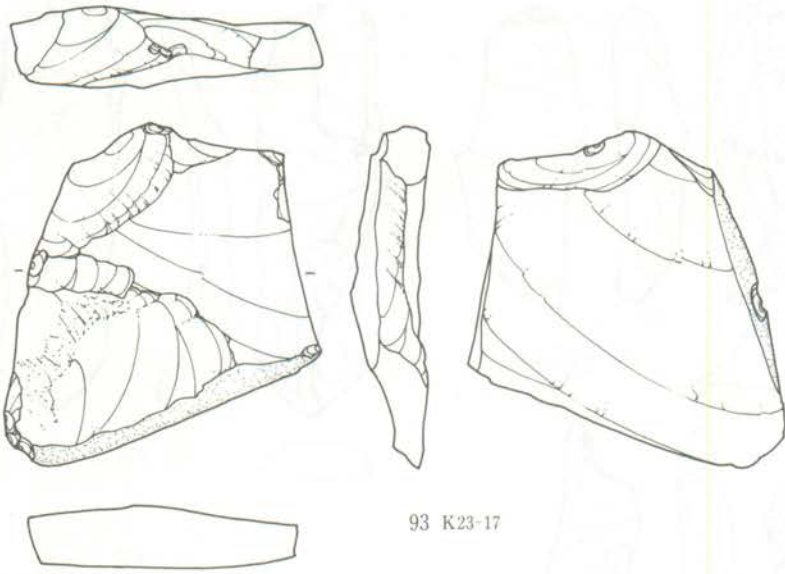
84 K 22-18



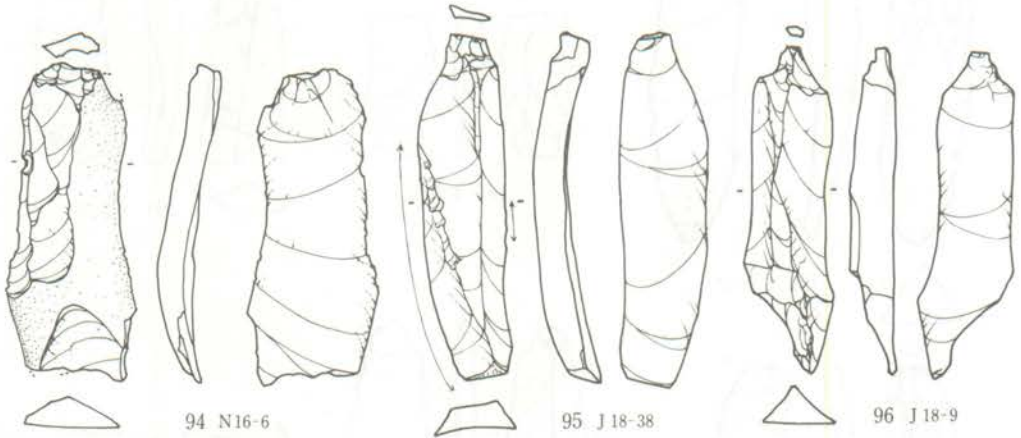
第103图 石器 (8)



第104图 石器 (9)



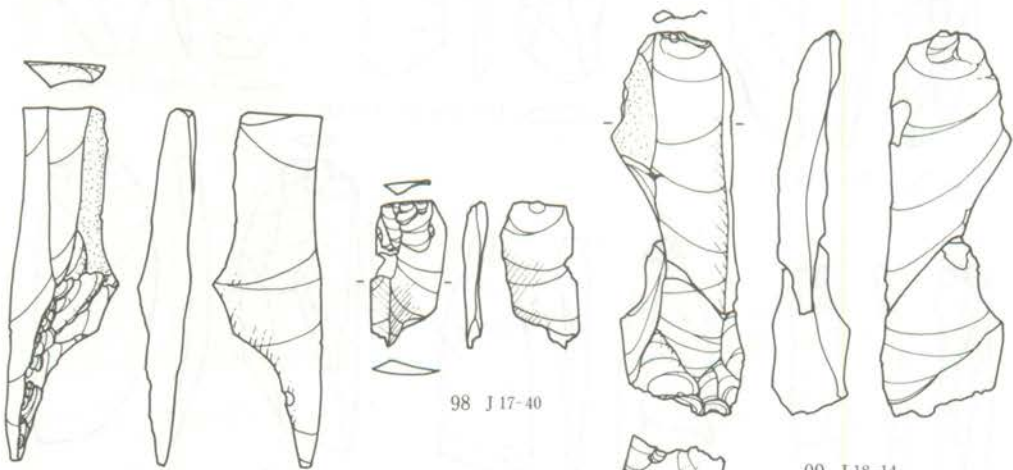
93 K23-17



94 N16-6

95 J18-38

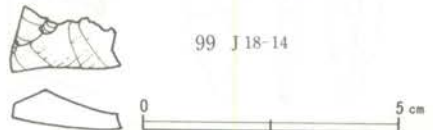
96 J18-9



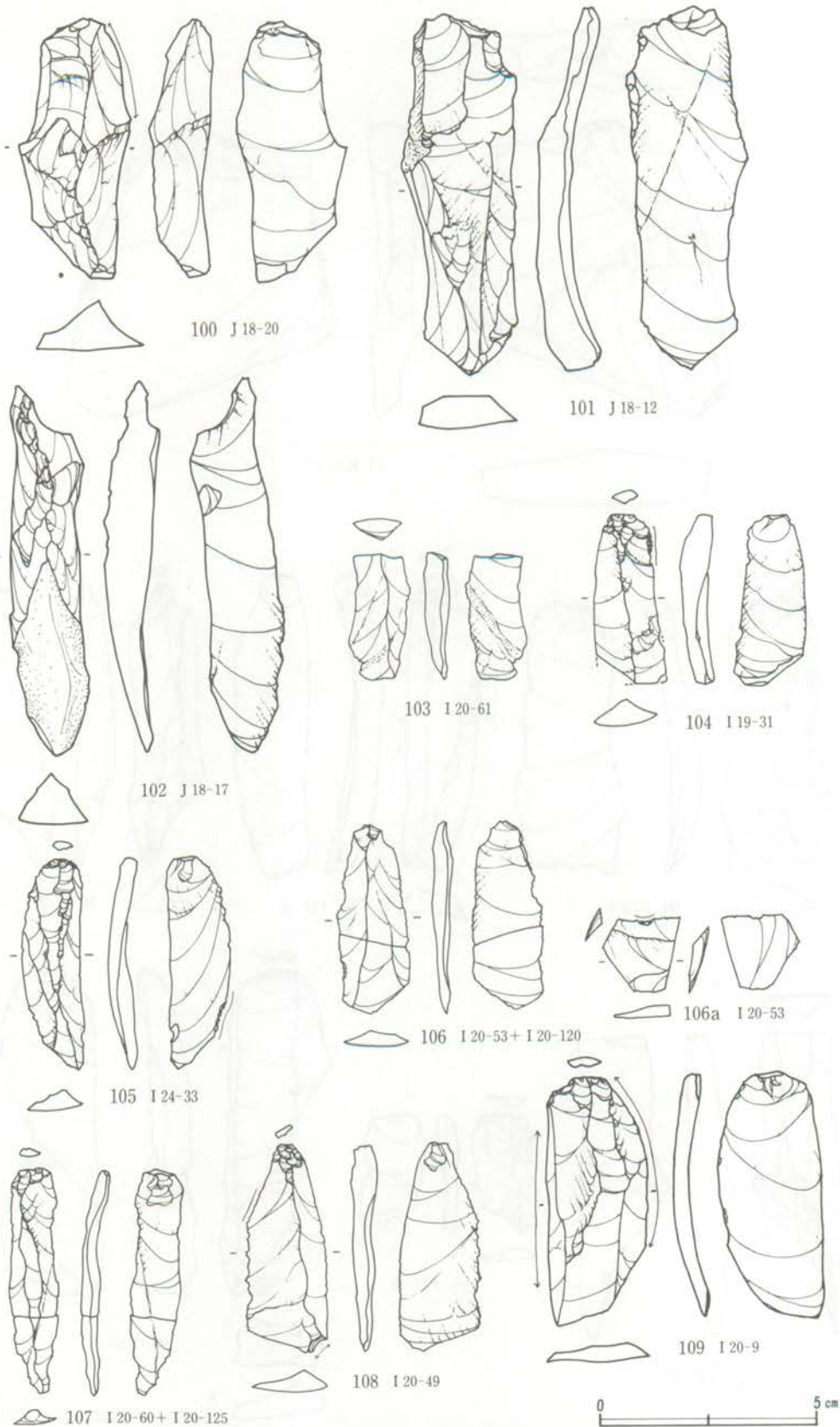
97 J17-43

98 J17-40

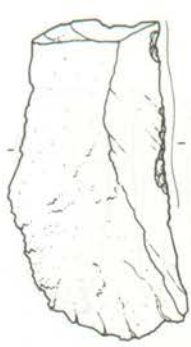
99 J18-14



第105图 石器 (10)



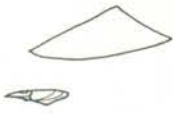
第106図 石器 (11)



110 J20-8



111 J19-3



112 J19-6



113 K20-107



114 K20-80



115 K20-64



116 K20-196



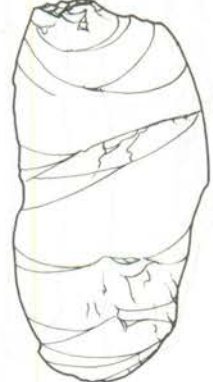
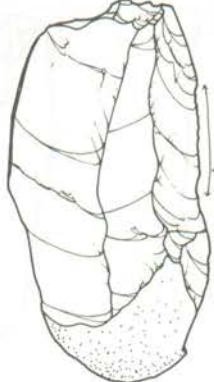
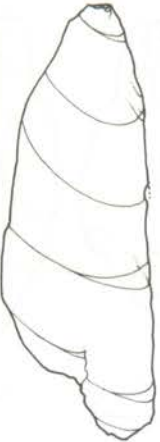
117 K20-163



118 K20-79



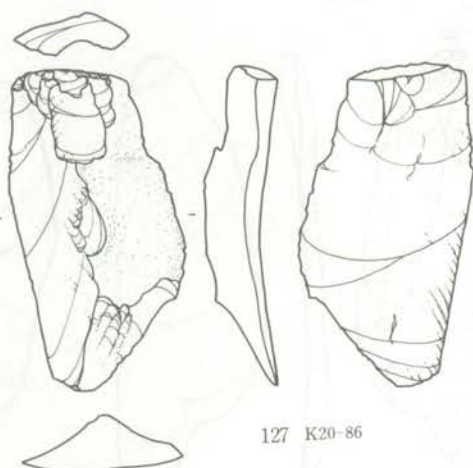
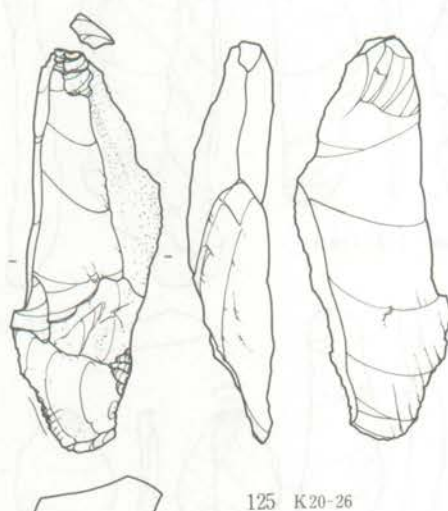
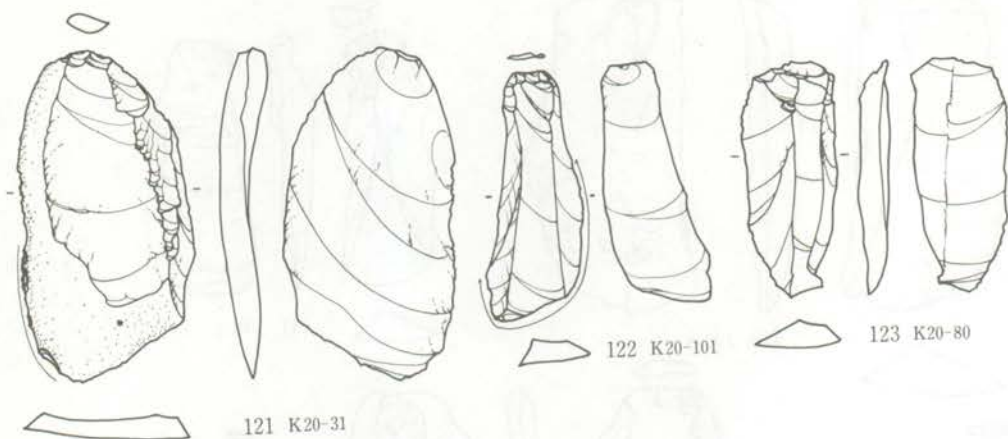
119 K20-153



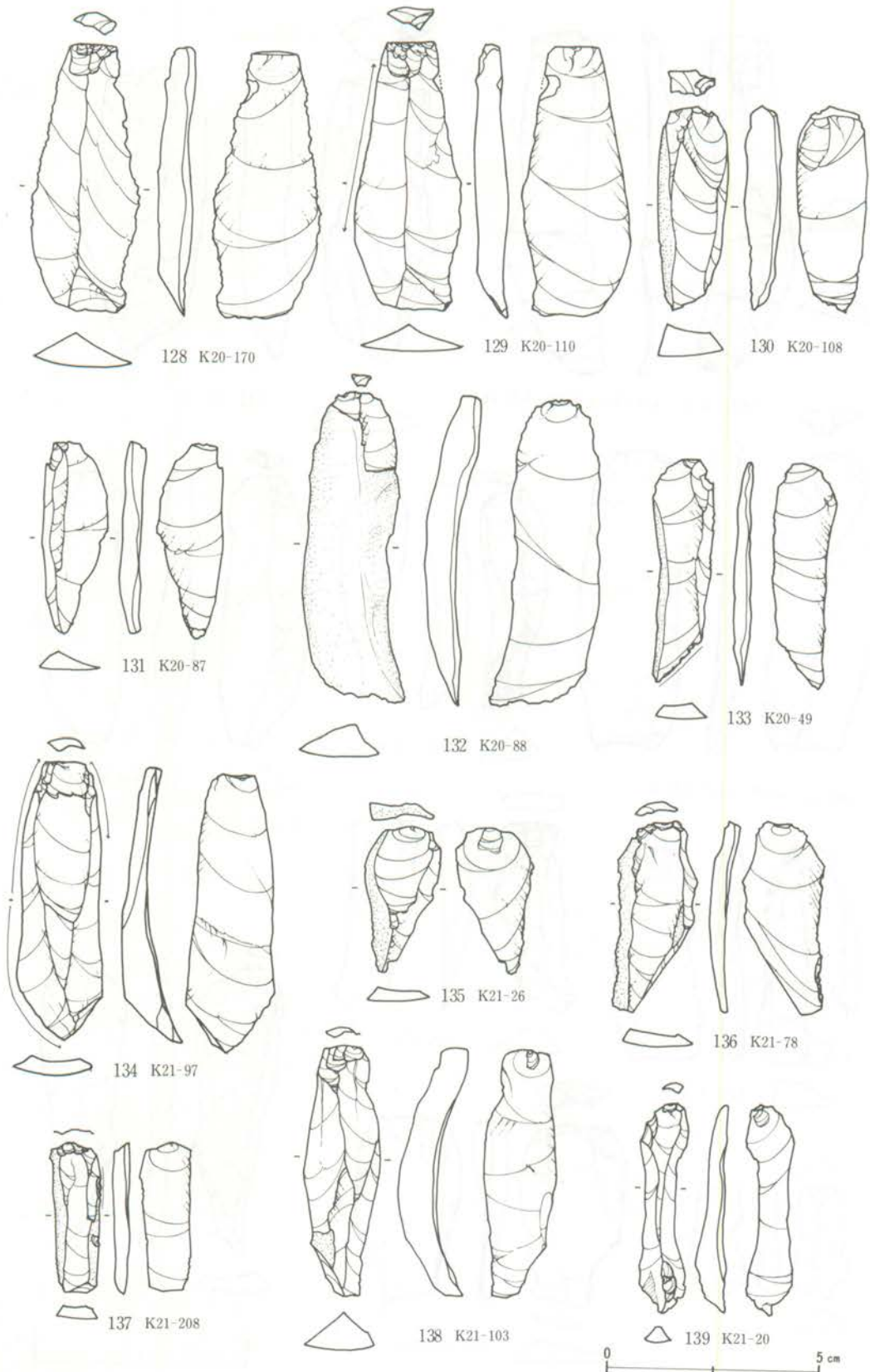
120 K20-51



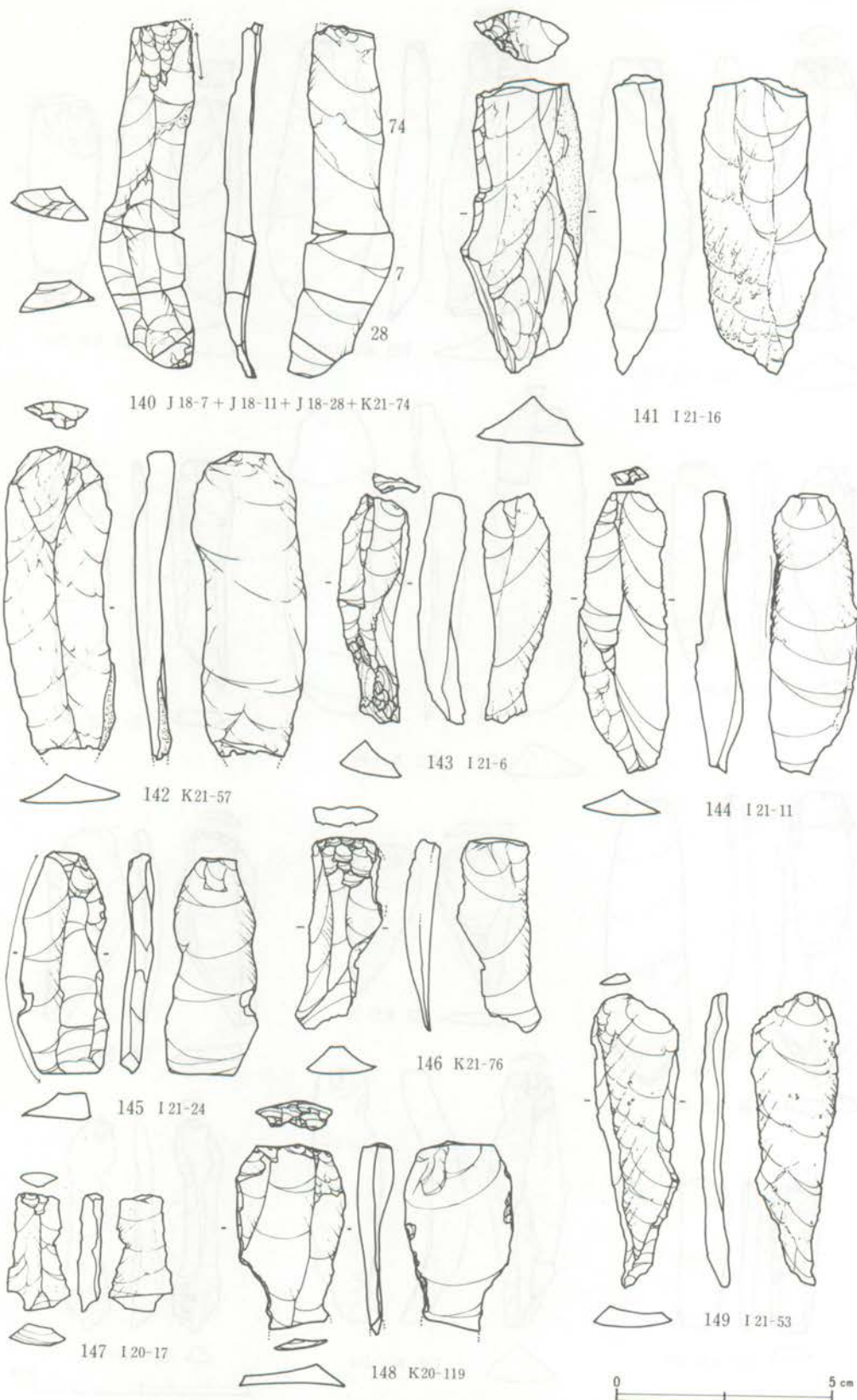
第107图 石器(12)



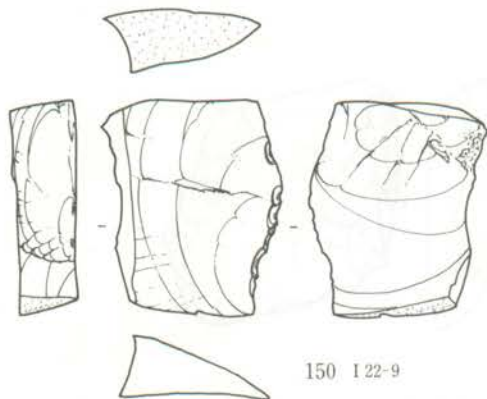
第108図 石器 (13)



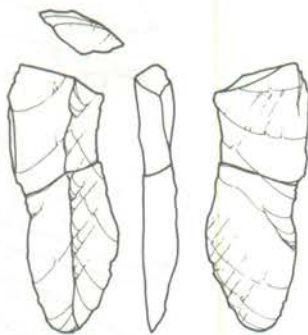
第109図 石器 (14)



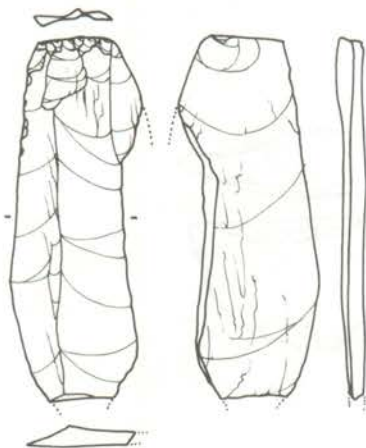
第110図 石器 (15)



150 I 22-9



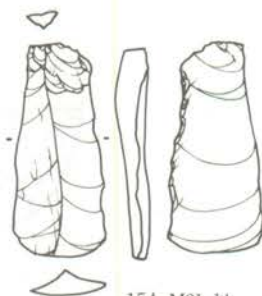
151 I 22-10



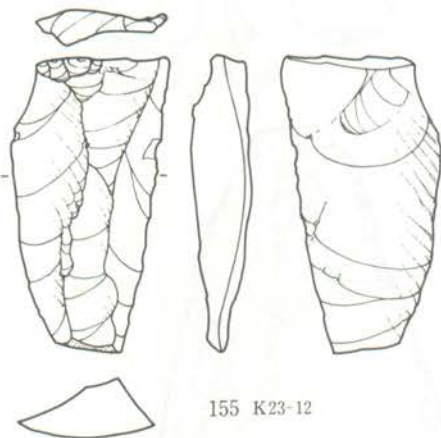
152 I 21-25



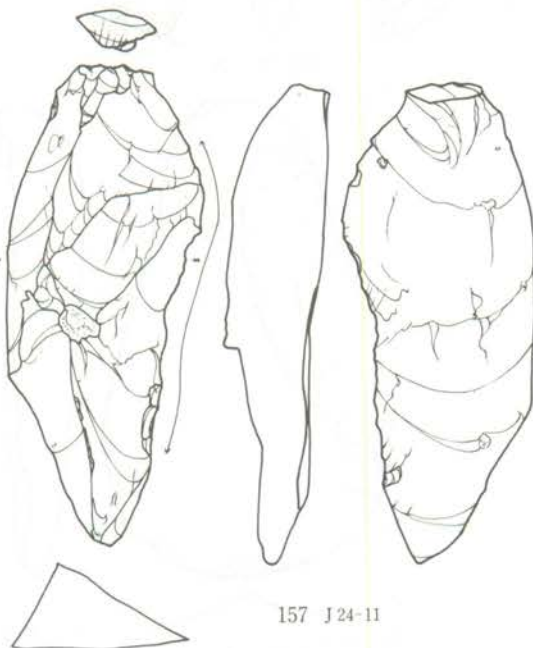
153 M19-8



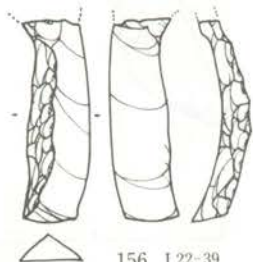
154 M21-14



155 K23-12



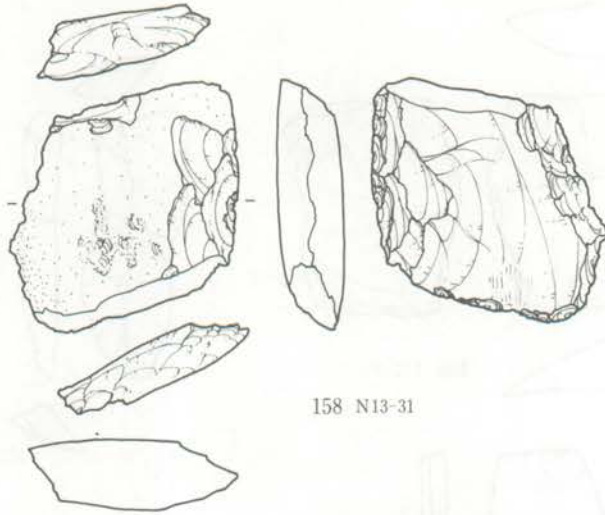
157 J 24-11



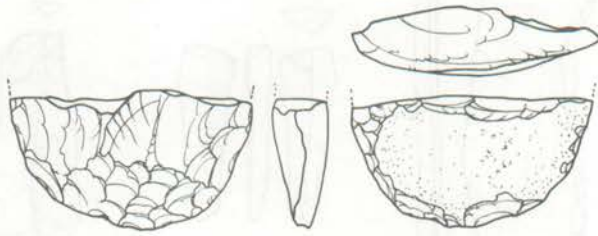
156 J 22-39



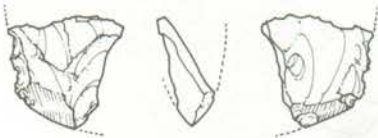
第111图 石器 (16)



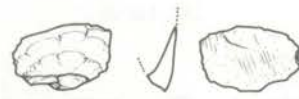
158 N13-31



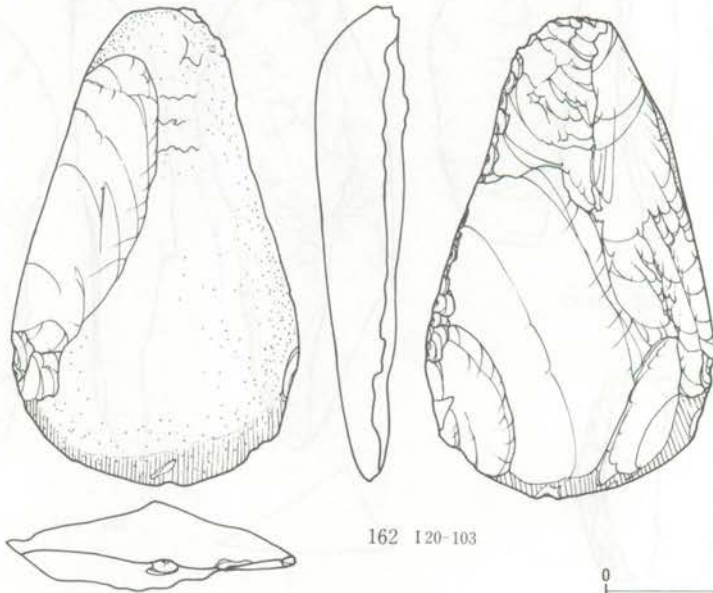
159 I17-16



160 M16-26



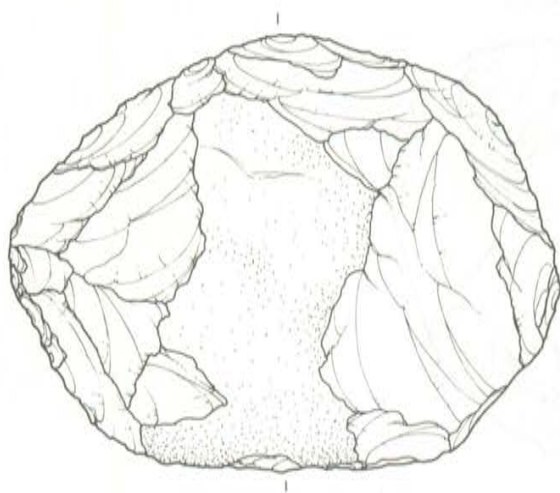
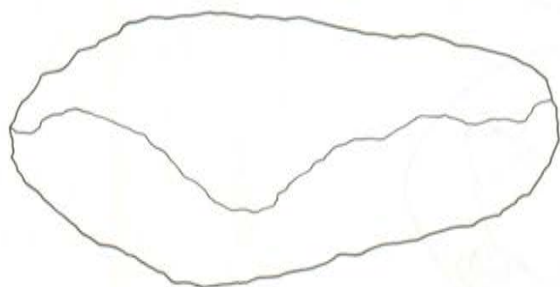
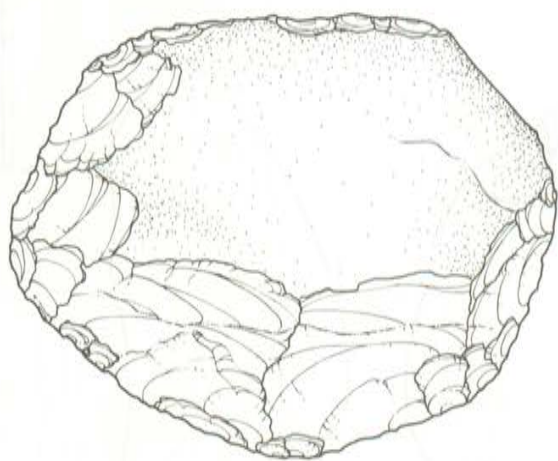
161 K22-5



162 I20-103



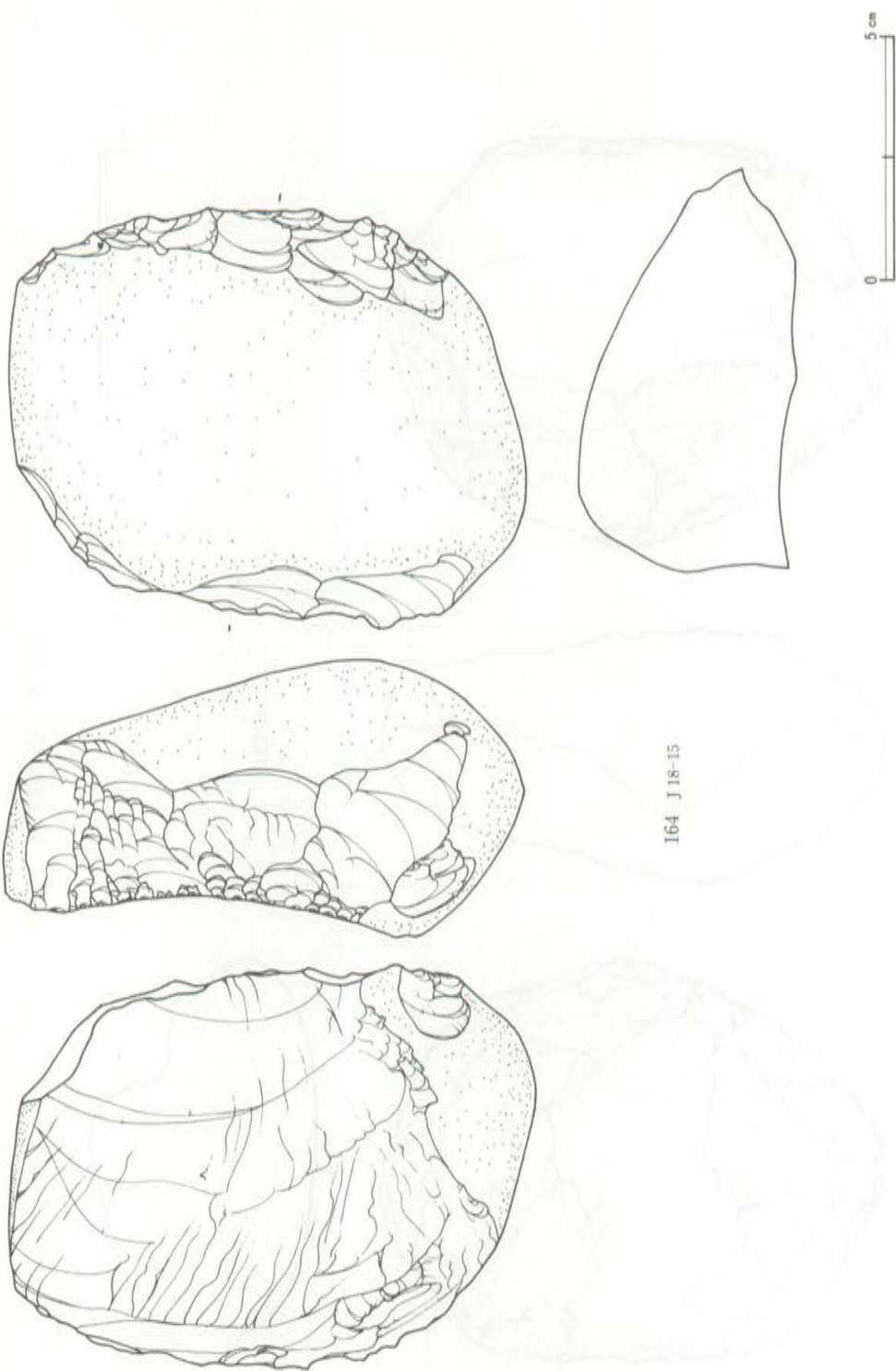
第112图 石器 (17)



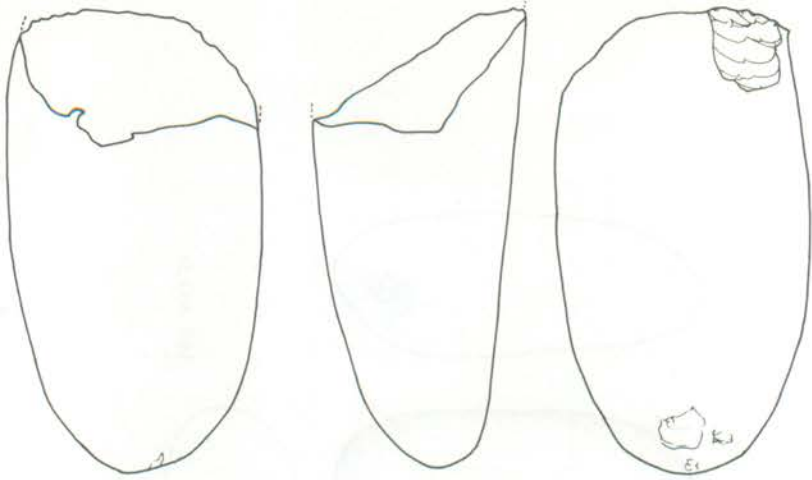
163 N13-57



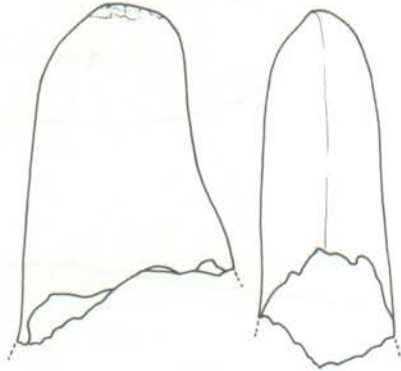
第113图 石器 (18)



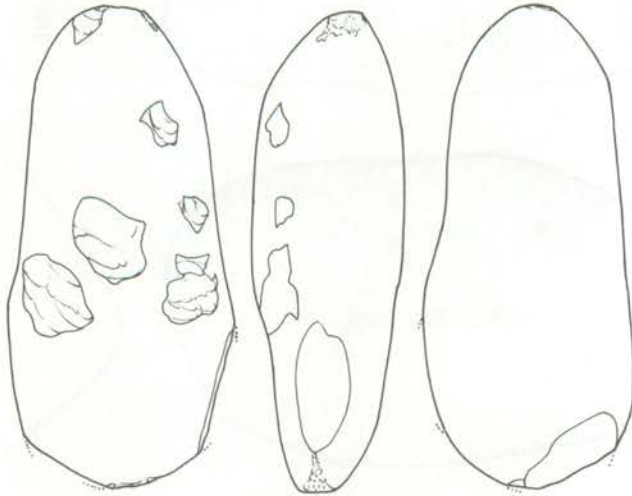
第114图 石器 (19)



165 I 21-15

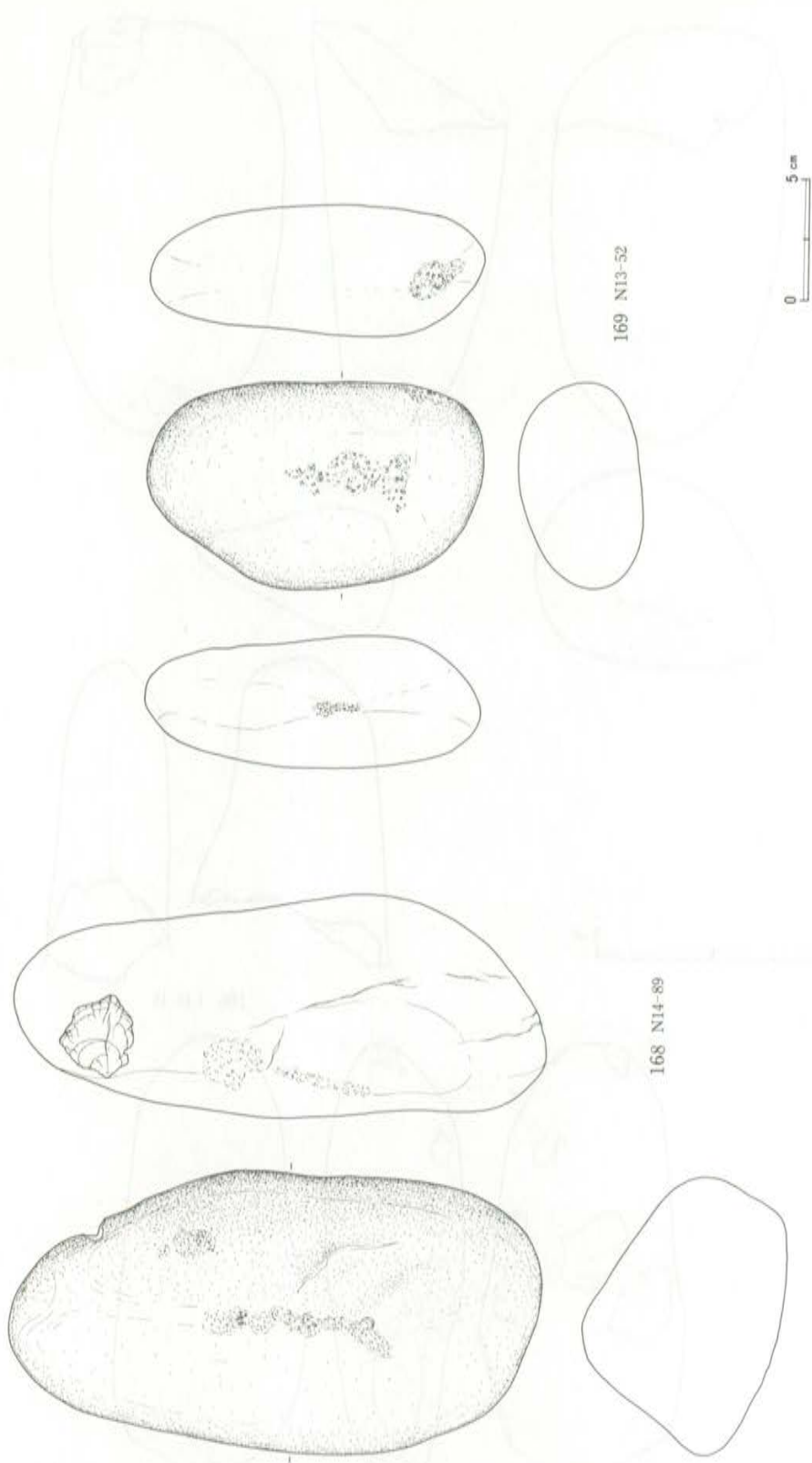


166 I 19-15

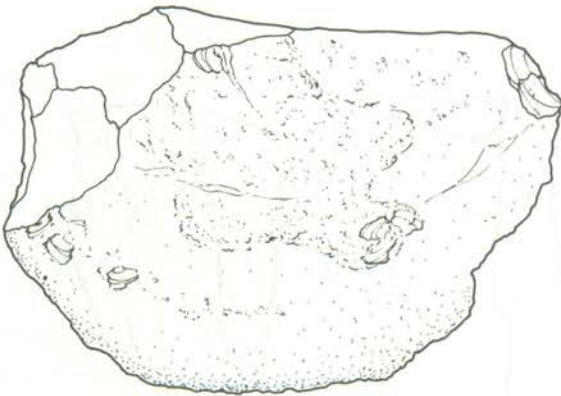
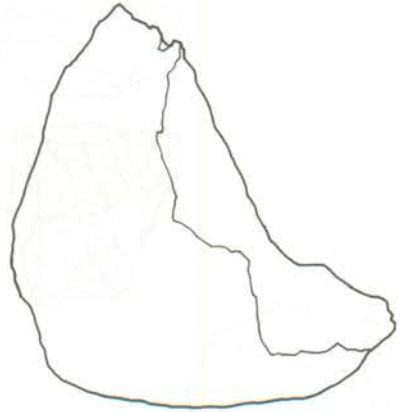
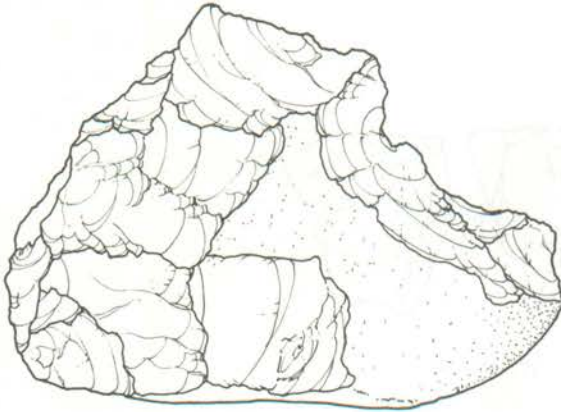
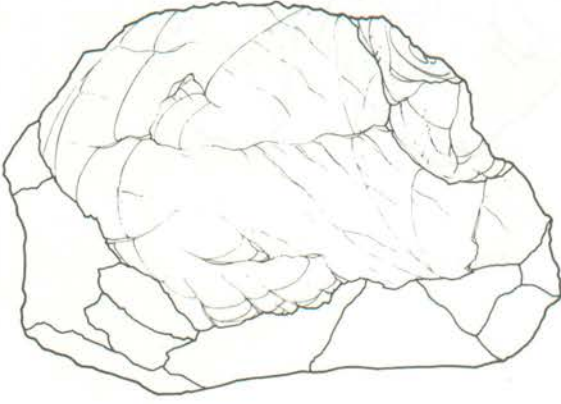


167 L 24-8

第115図 石器 (20)



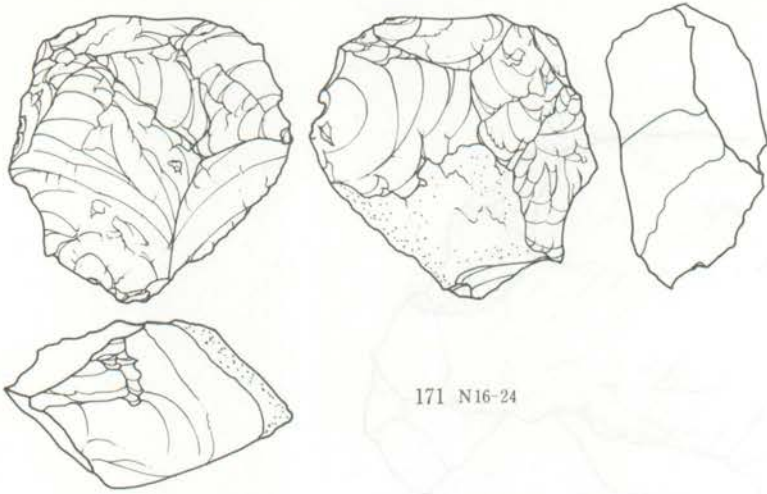
第116圖 石器 (21)



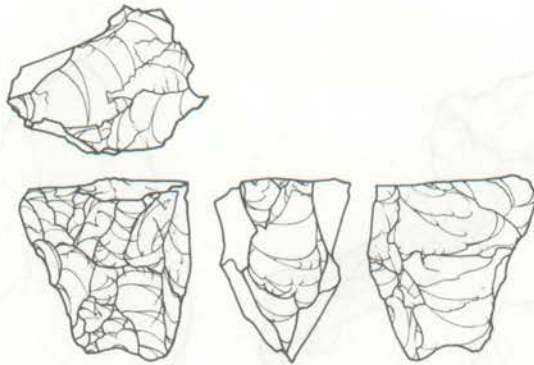
170 N13-56



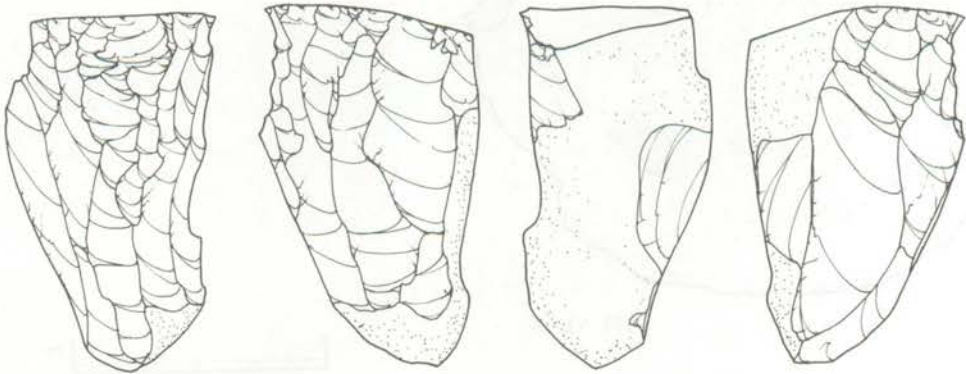
第117图 石器 (22)



171 N16-24



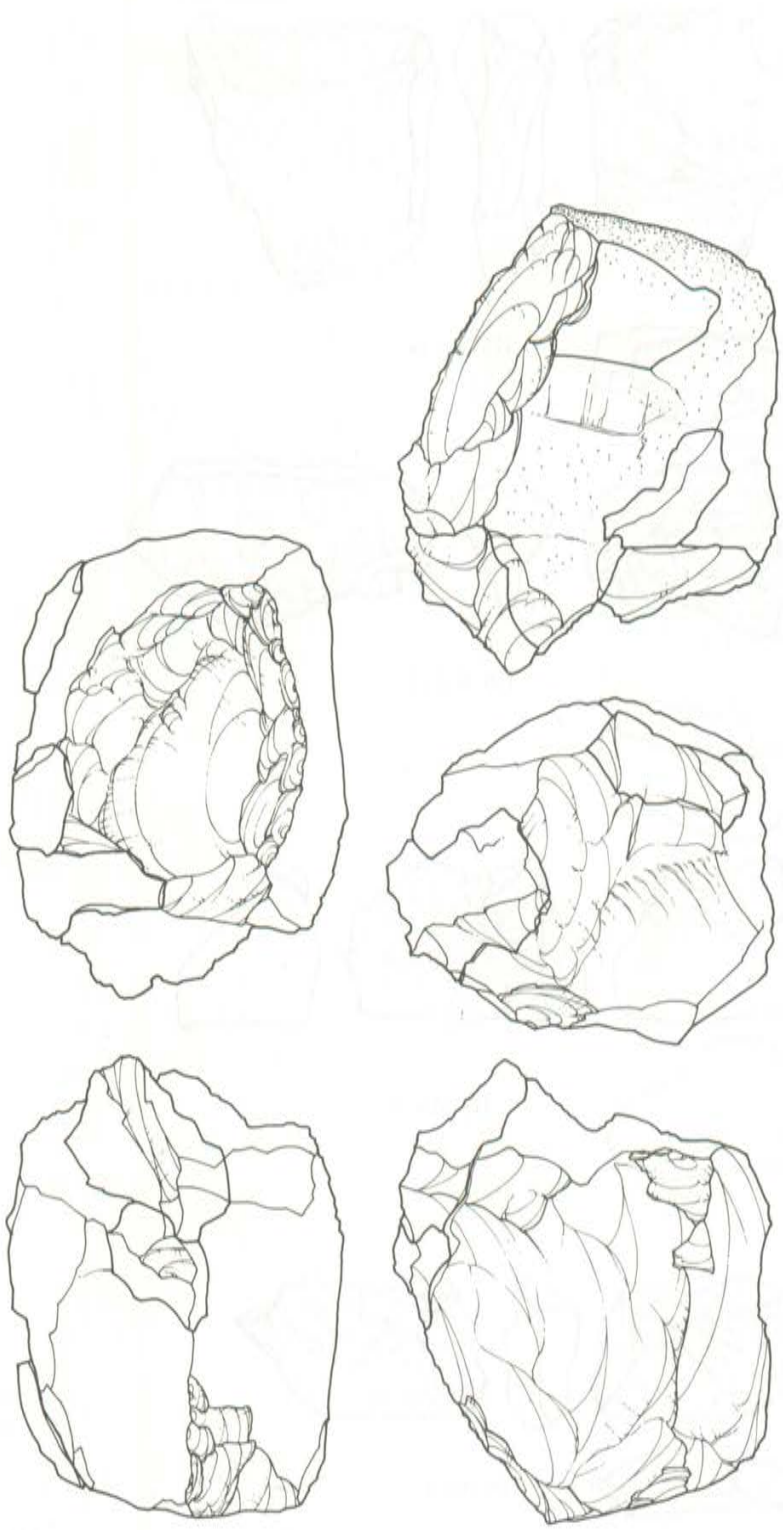
172 N16-28



173 J18-19



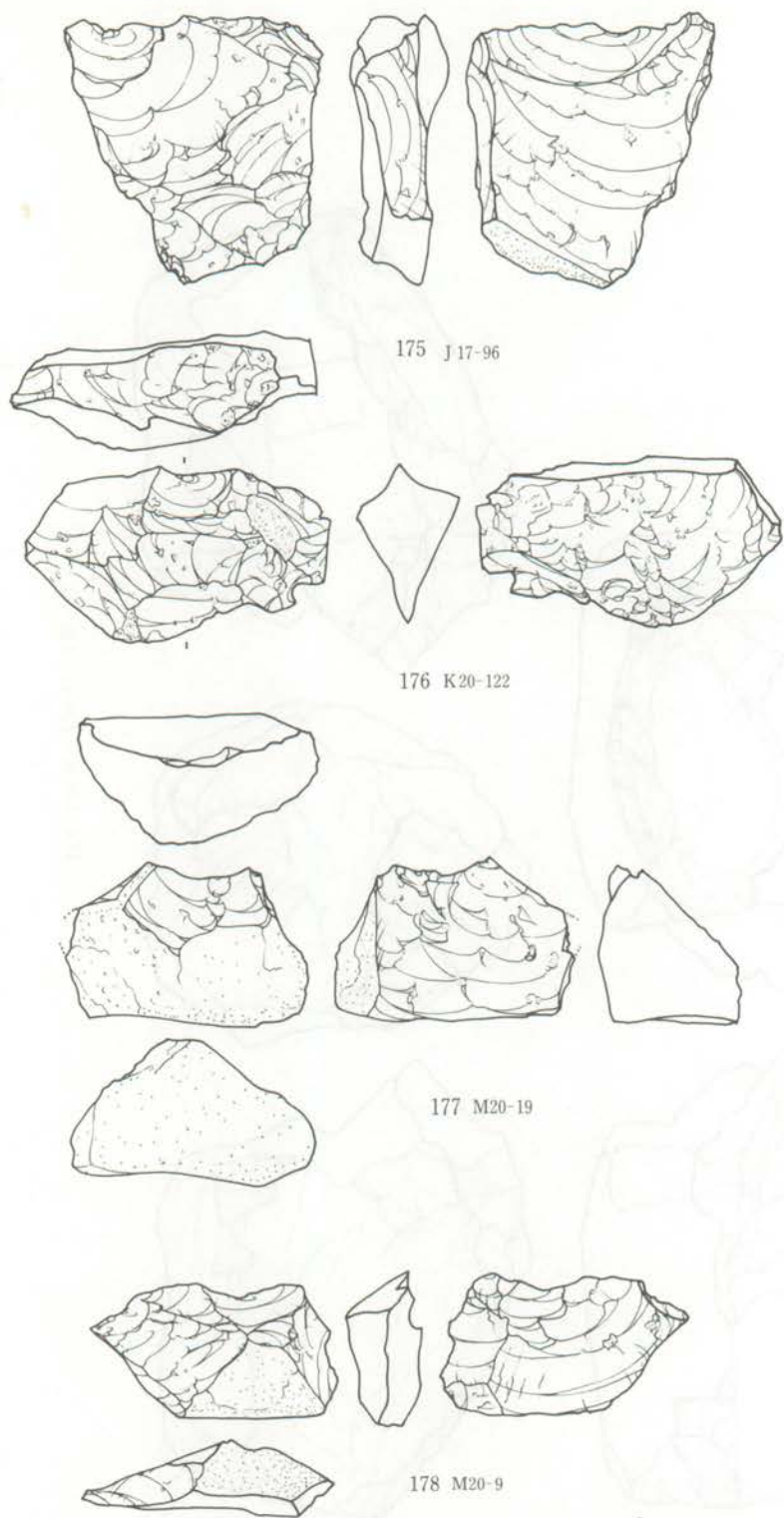
第118図 石器 (23)



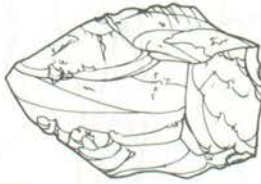
174 120-07 + 120-41 + 120-118



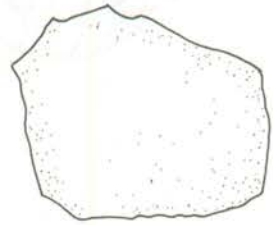
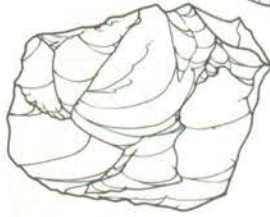
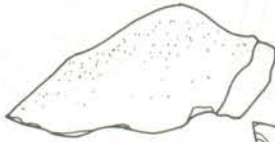
第119图 石器 (24)



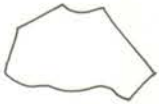
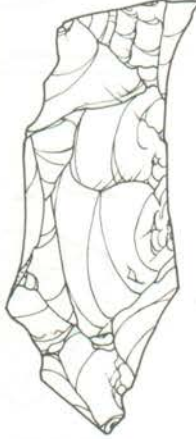
第120図 石器 (25)



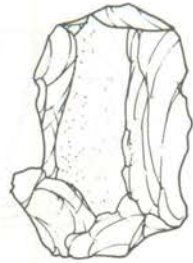
179 K21-234



180 J24-12



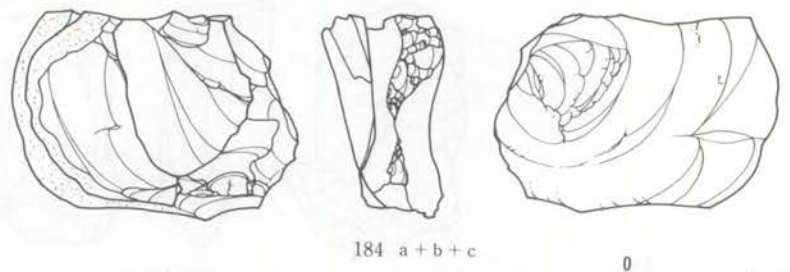
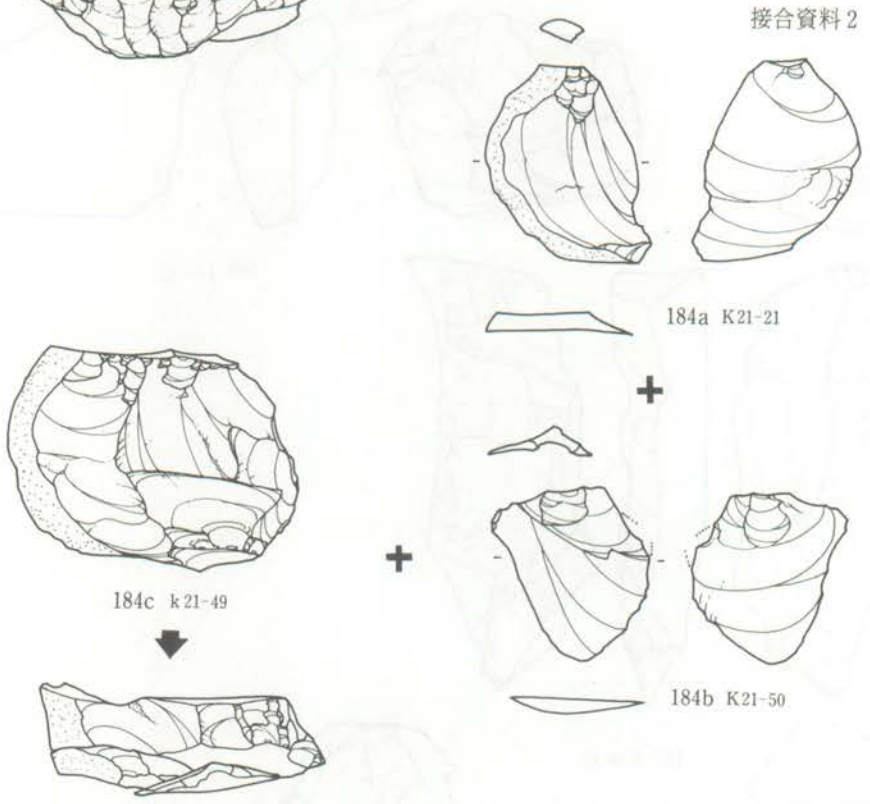
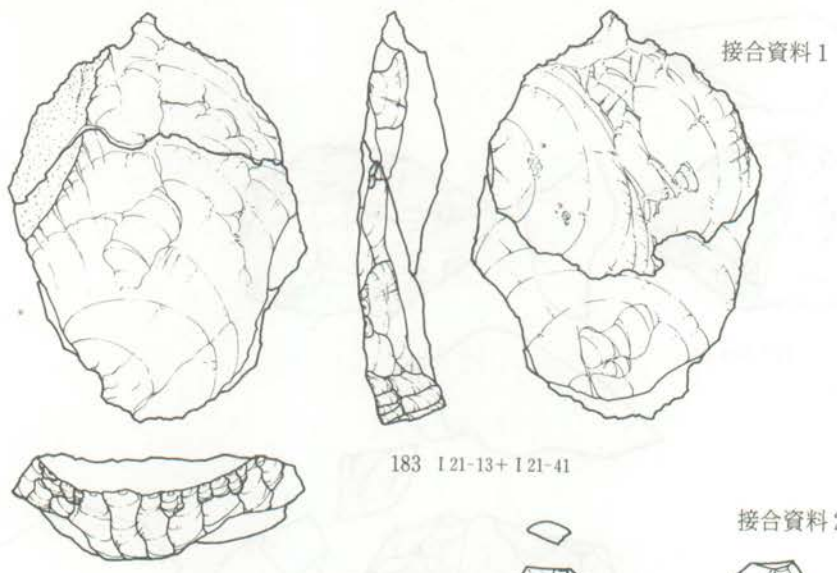
181 K24-48



182 J23-34

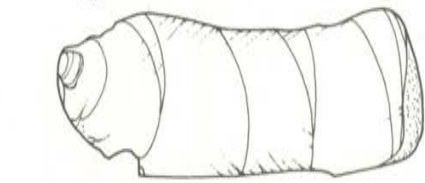


第121图 石器 (26)

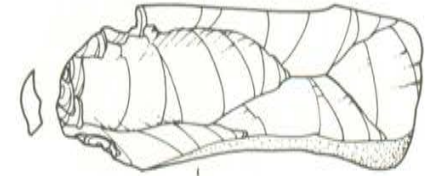


第122図 接合資料 (1)

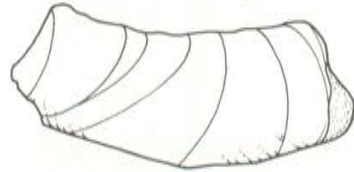
接合資料 3



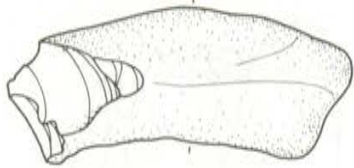
185d K21-194



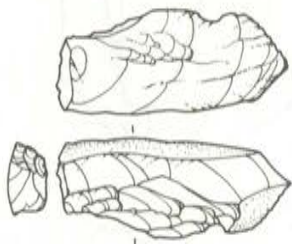
+



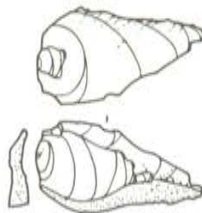
185c K21-246



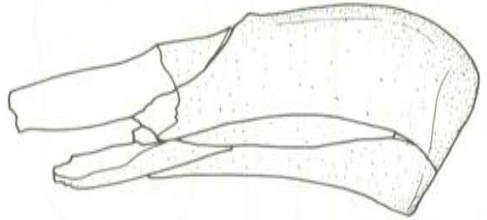
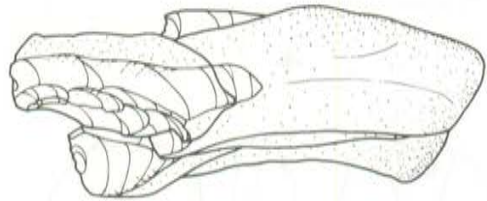
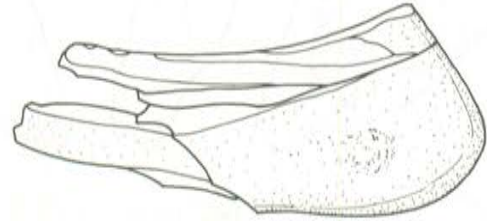
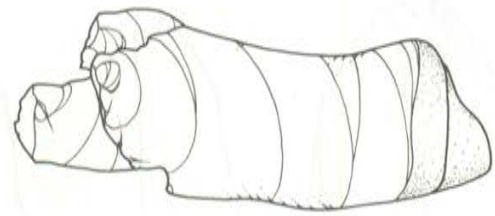
+



185a K21-202



185b K21-26

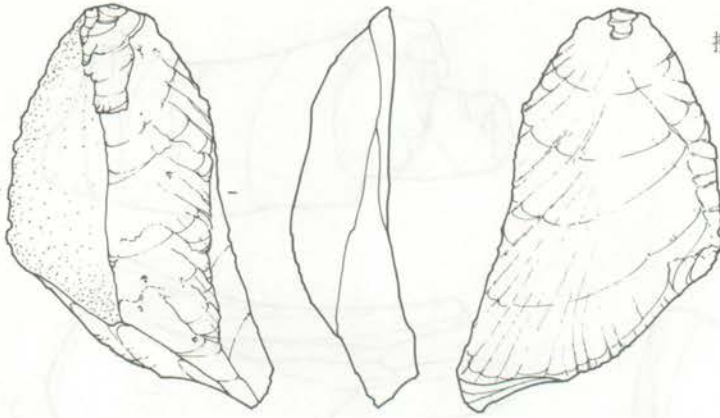


185 a+b+c+d

第123図 接合資料 (2)



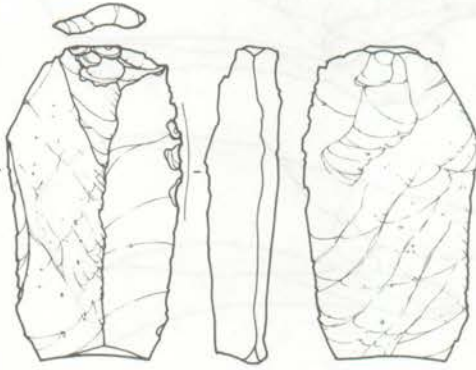
接合資料 4



186a I 21-18



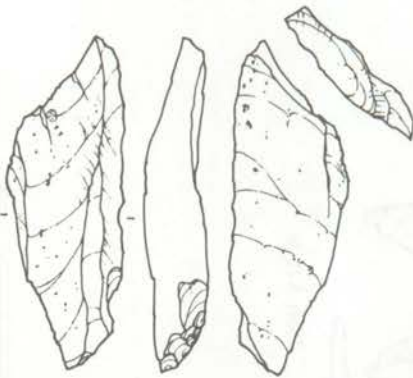
+



186b I 21-21



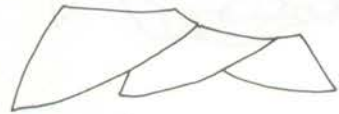
+



186c (28) I 21-61



186 a + b + c



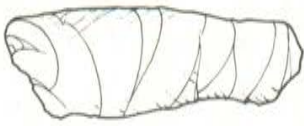
0 5 cm

第124図 接合資料 (3)

接合資料 5



187 a+b



187a K21-99



187b I20-8



187a K21-99

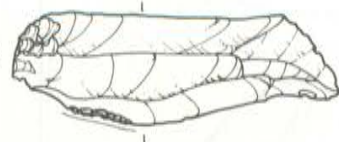
+



187a K21-99



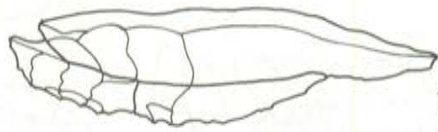
187b I20-8



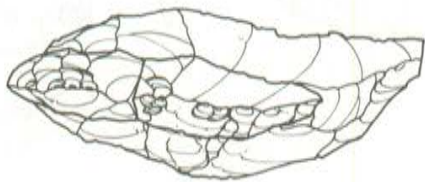
187a K21-99



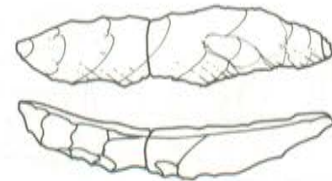
接合資料 6



188a I20-75



188b I20-74

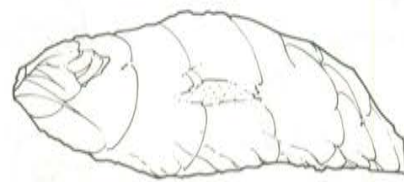


188a I20-75



188b I20-74

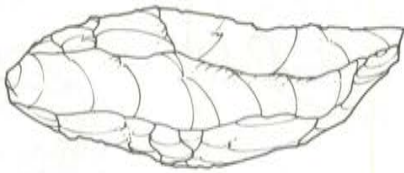
+



188a I20-75



188a I20-75

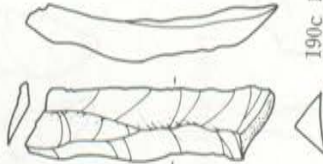
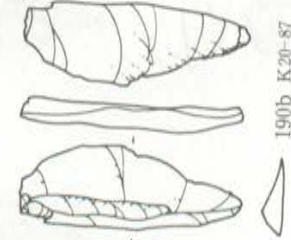
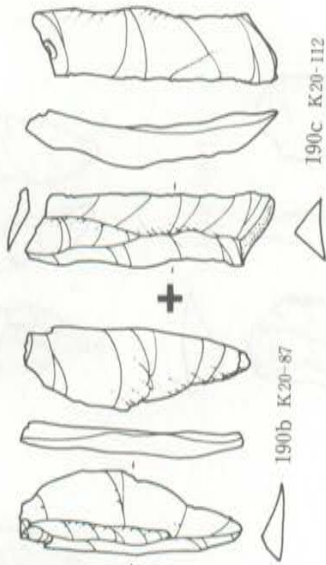
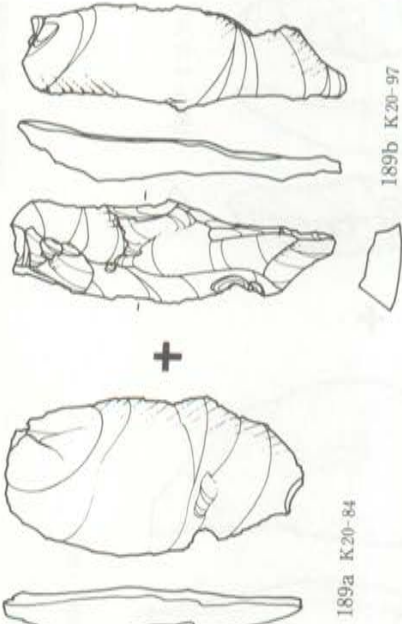
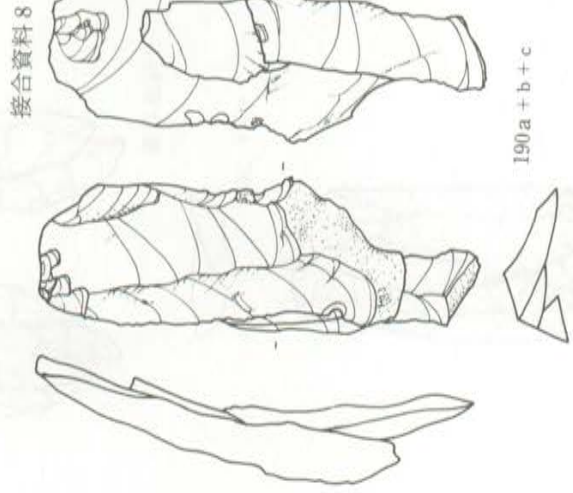
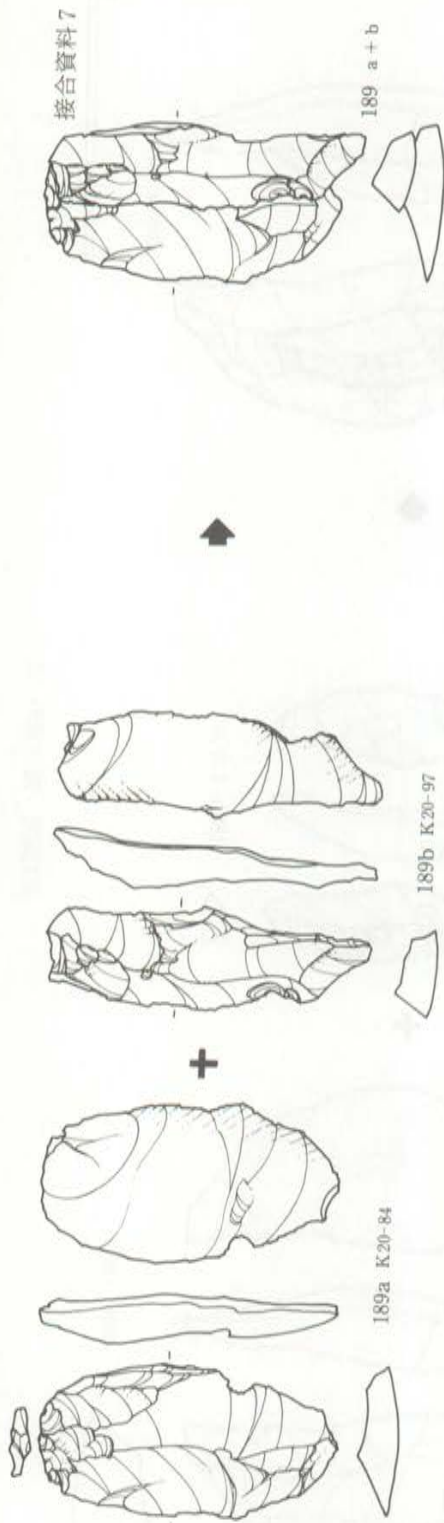


188b I20-74

188 a+b

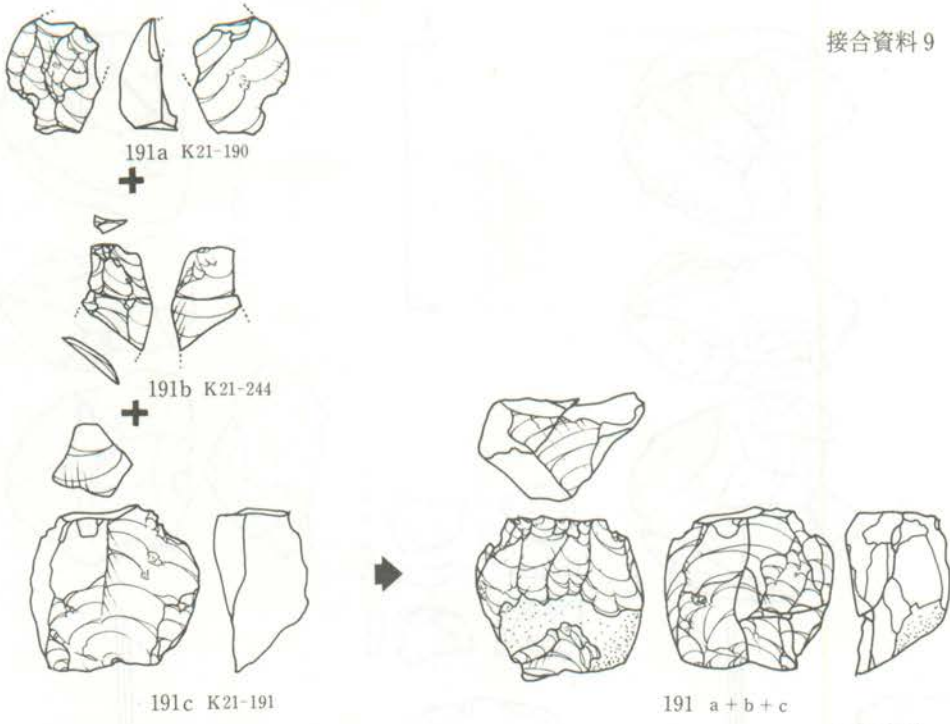


第125図 接合資料 (4)

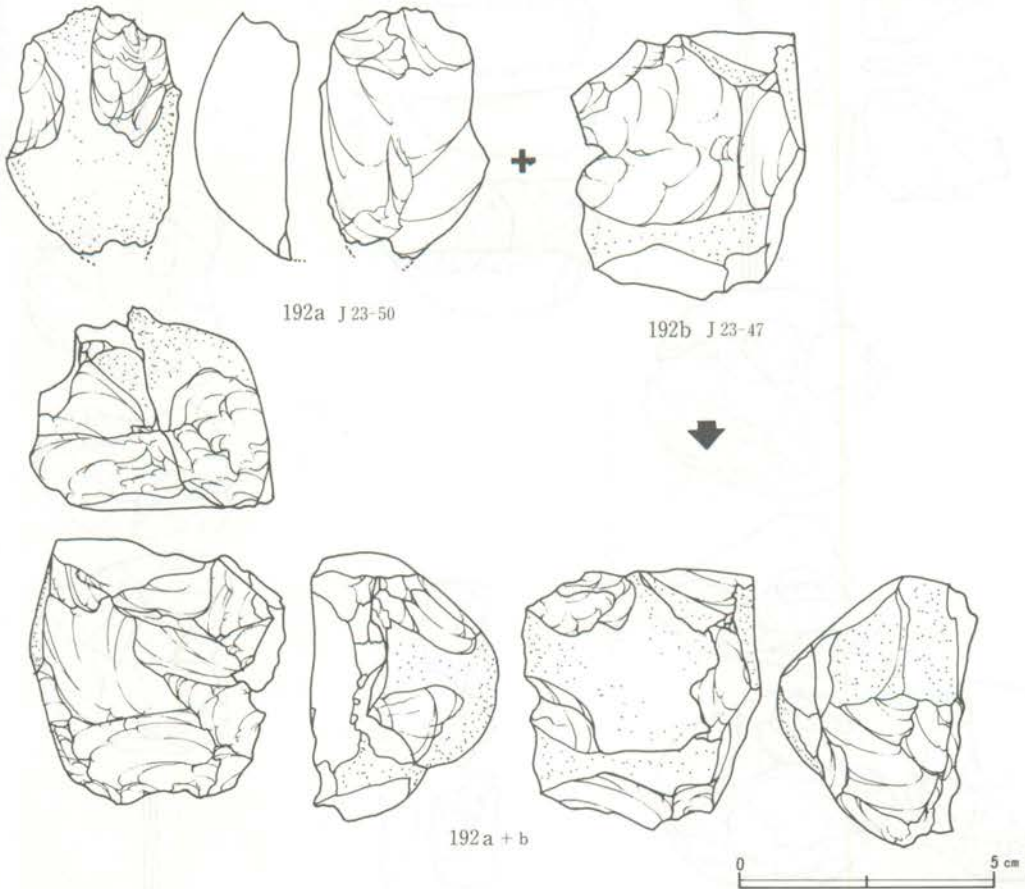


第126図 接合資料 (5)

接合資料 9

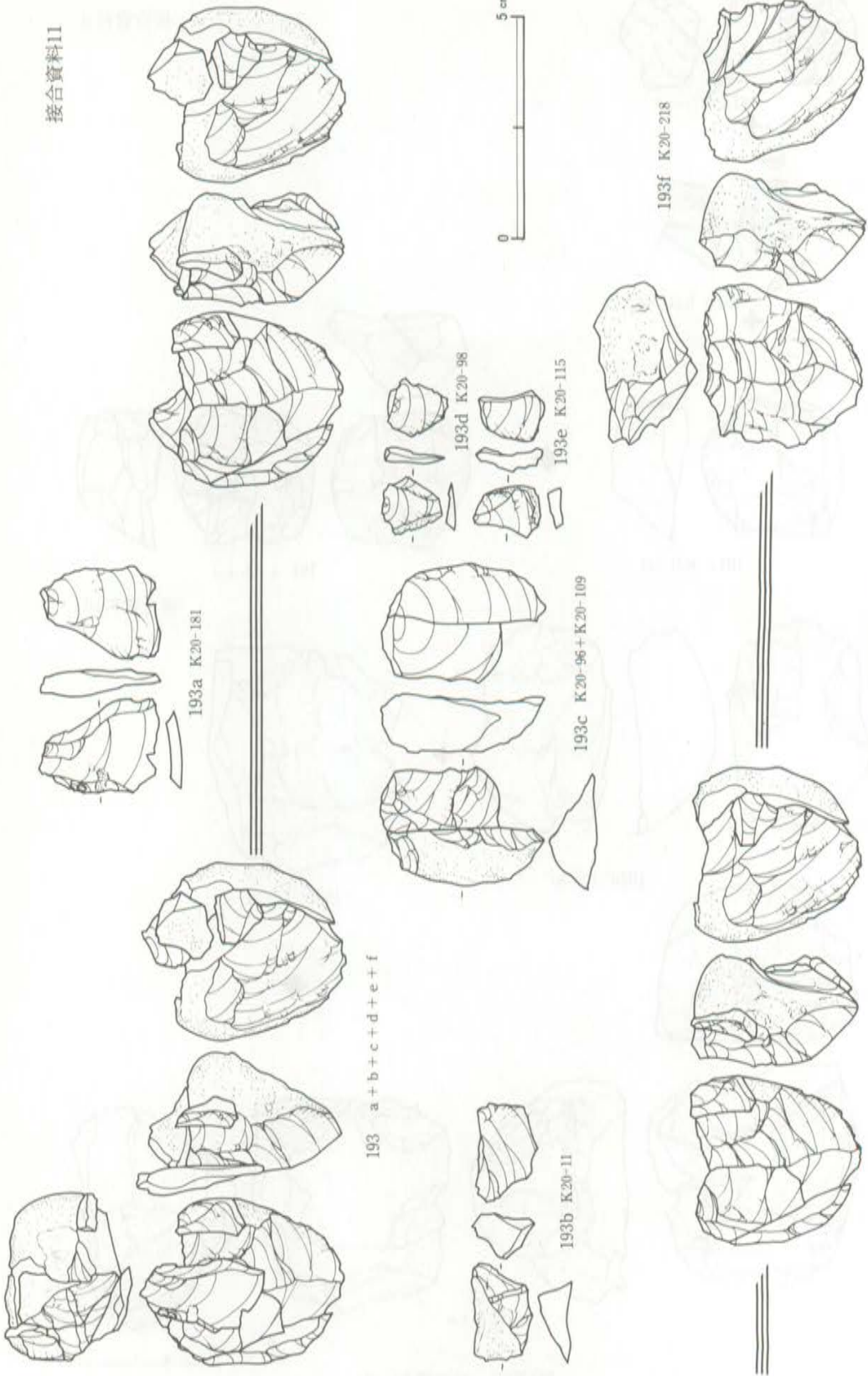


接合資料10

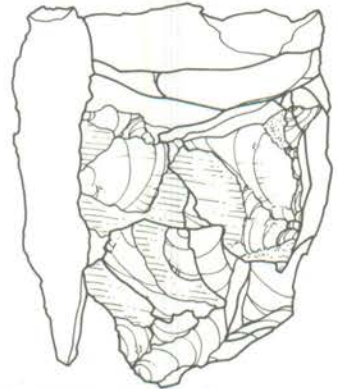
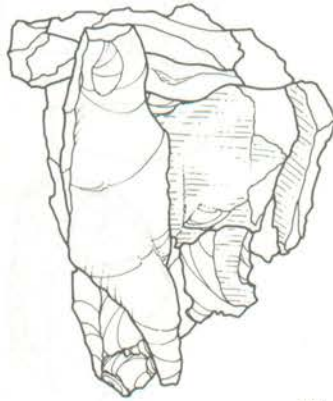
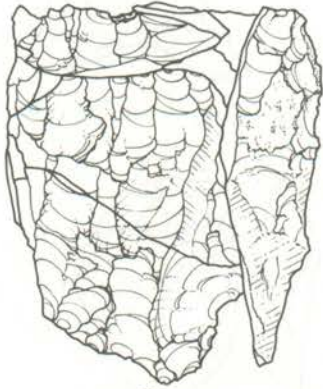
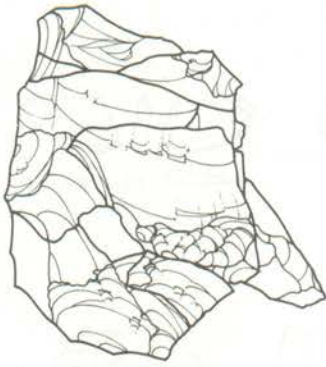


第127図 接合資料 (6)

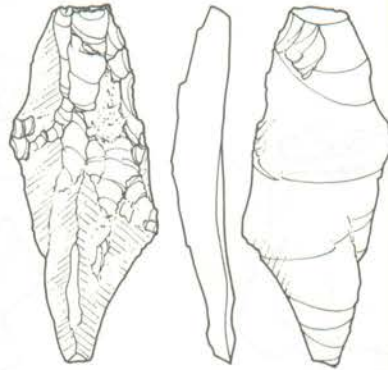
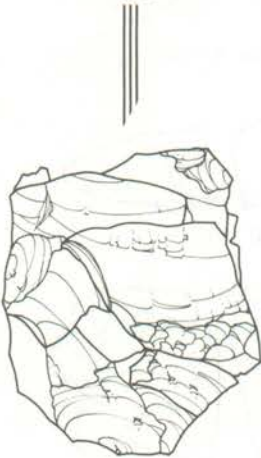
接合資料II



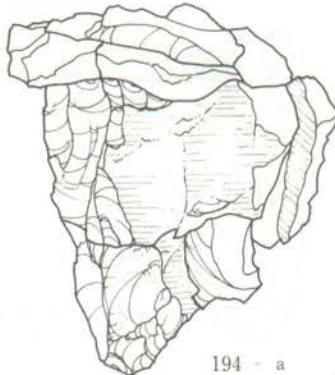
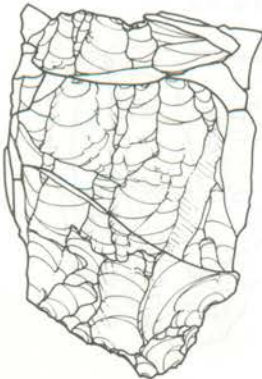
第128図 接合資料(7)



194 a+b+c+d+e+f+g
+h+i+j+k+l+m



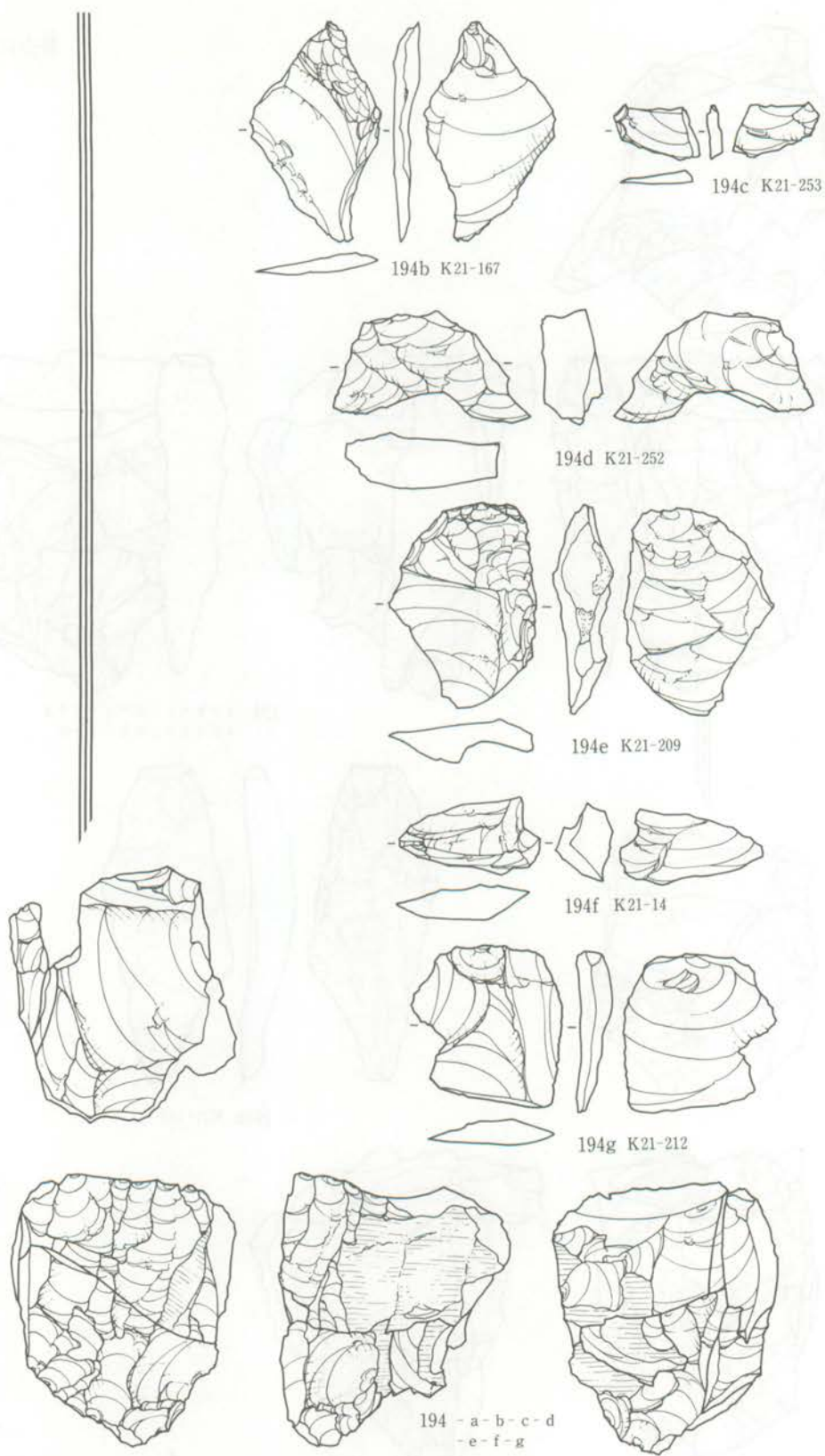
194a K21-163



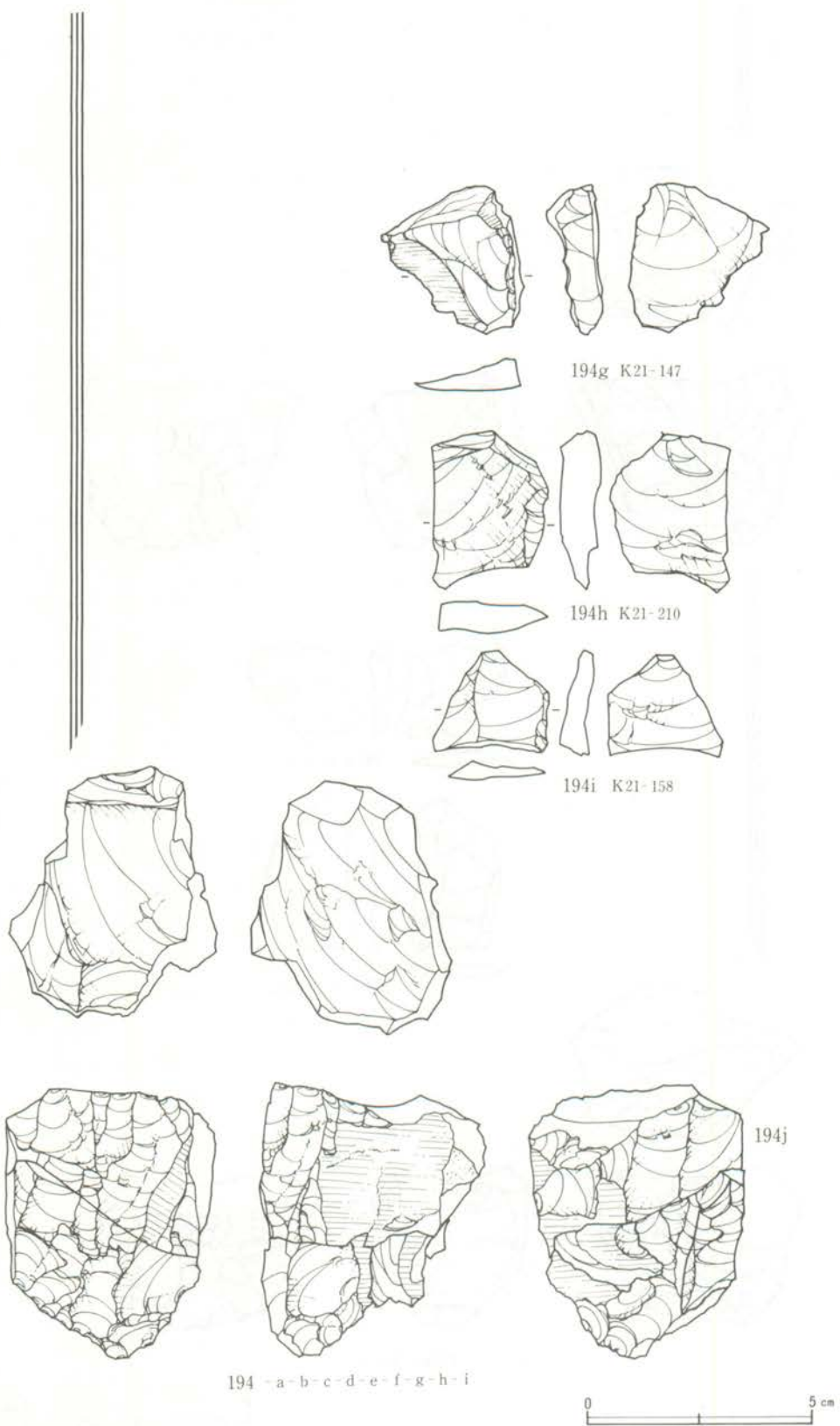
194 - a



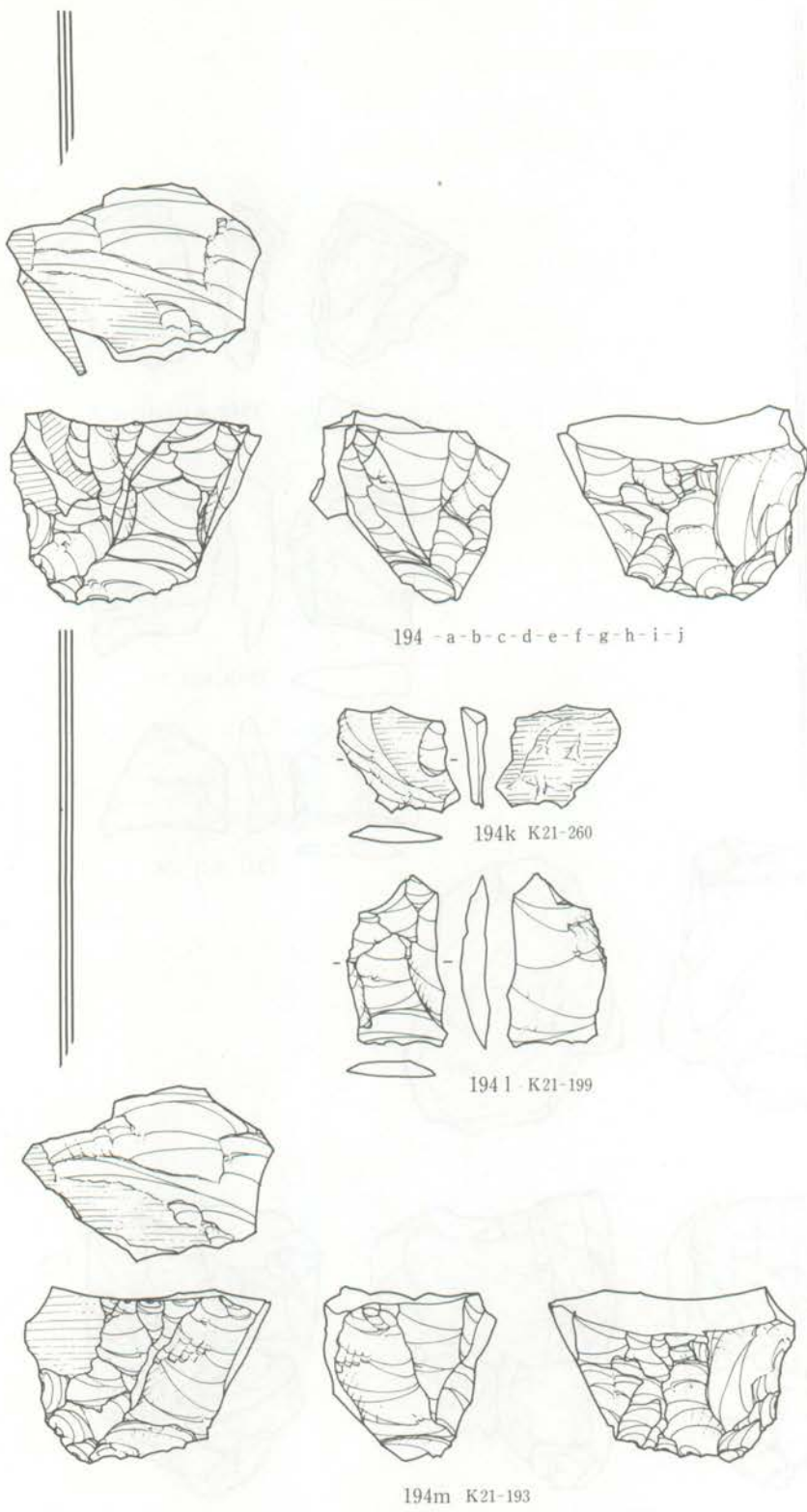
第129圖 接合資料 (8)



第130圖 接合資料 (9)



第131図 接合資料 (10)



194 a-b-c-d-e-f-g-h-i-j

194k K21-260

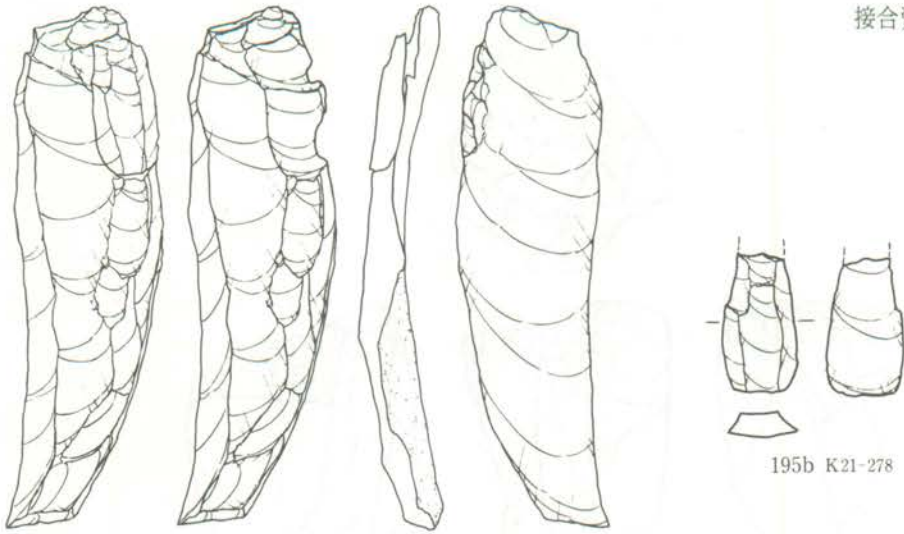
194l K21-199

194m K21-193

0 5 cm

第132図 接合資料 (11)

接合資料13

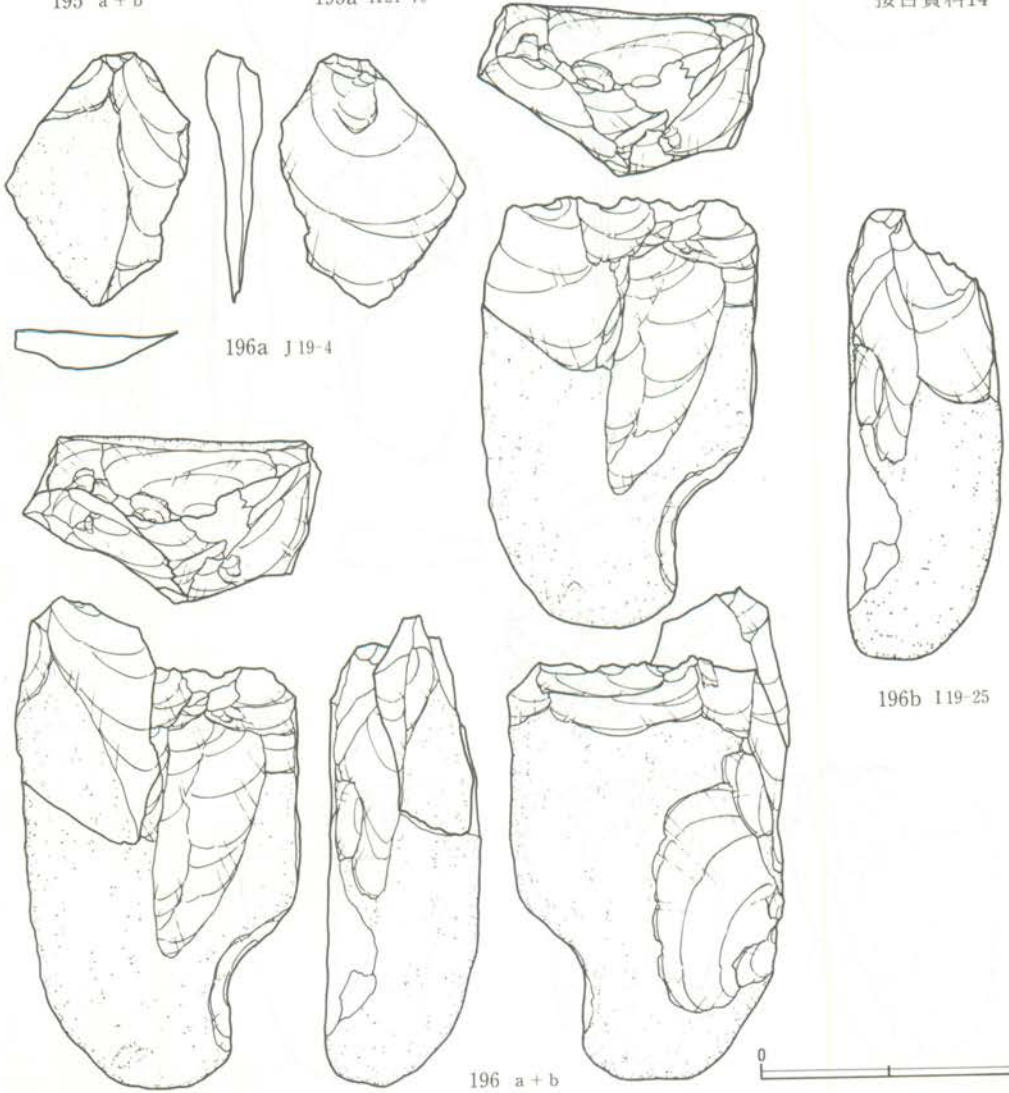


195 a + b

195a K21-70

195b K21-278

接合資料14



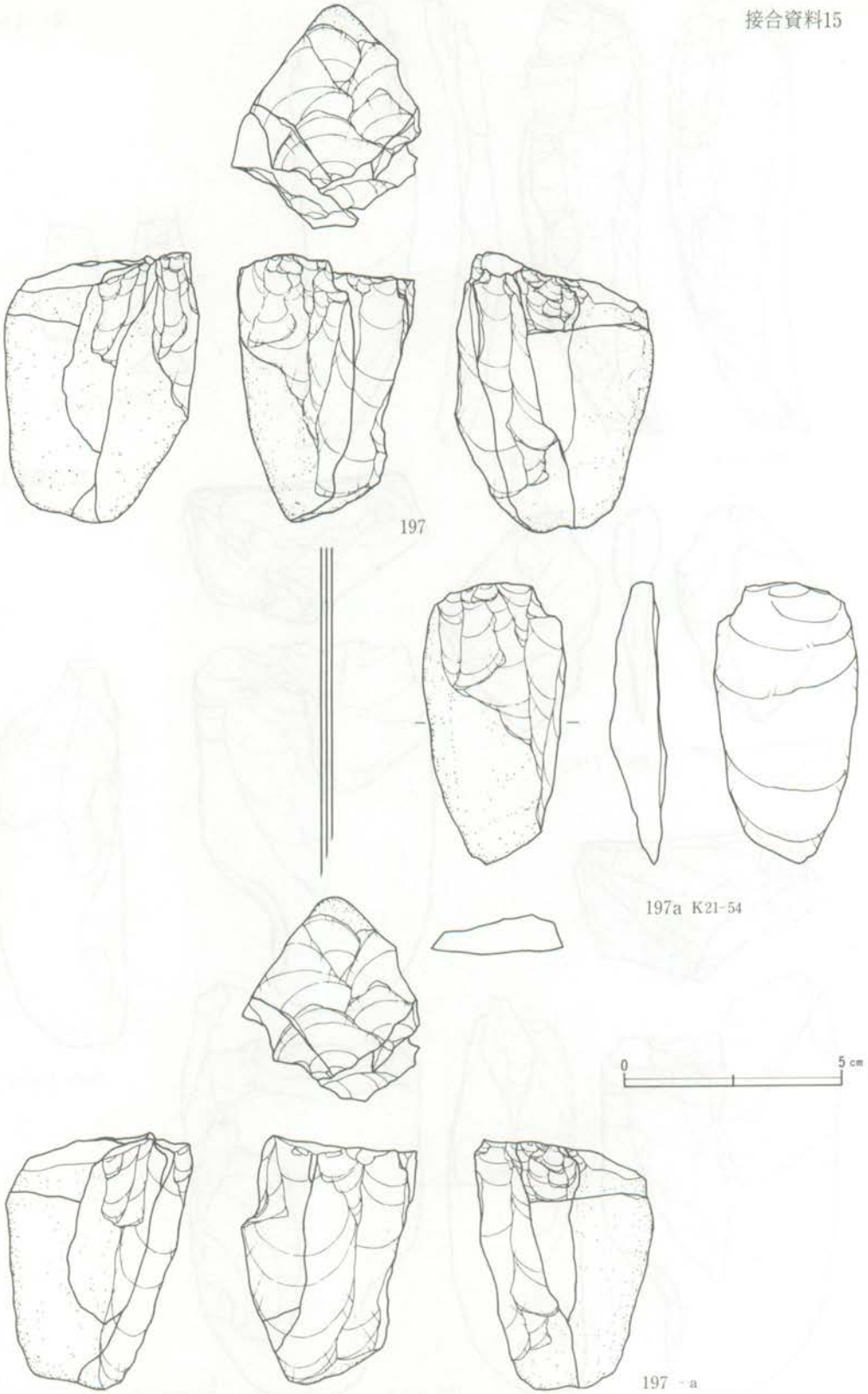
196a J19-4

196b 119-25

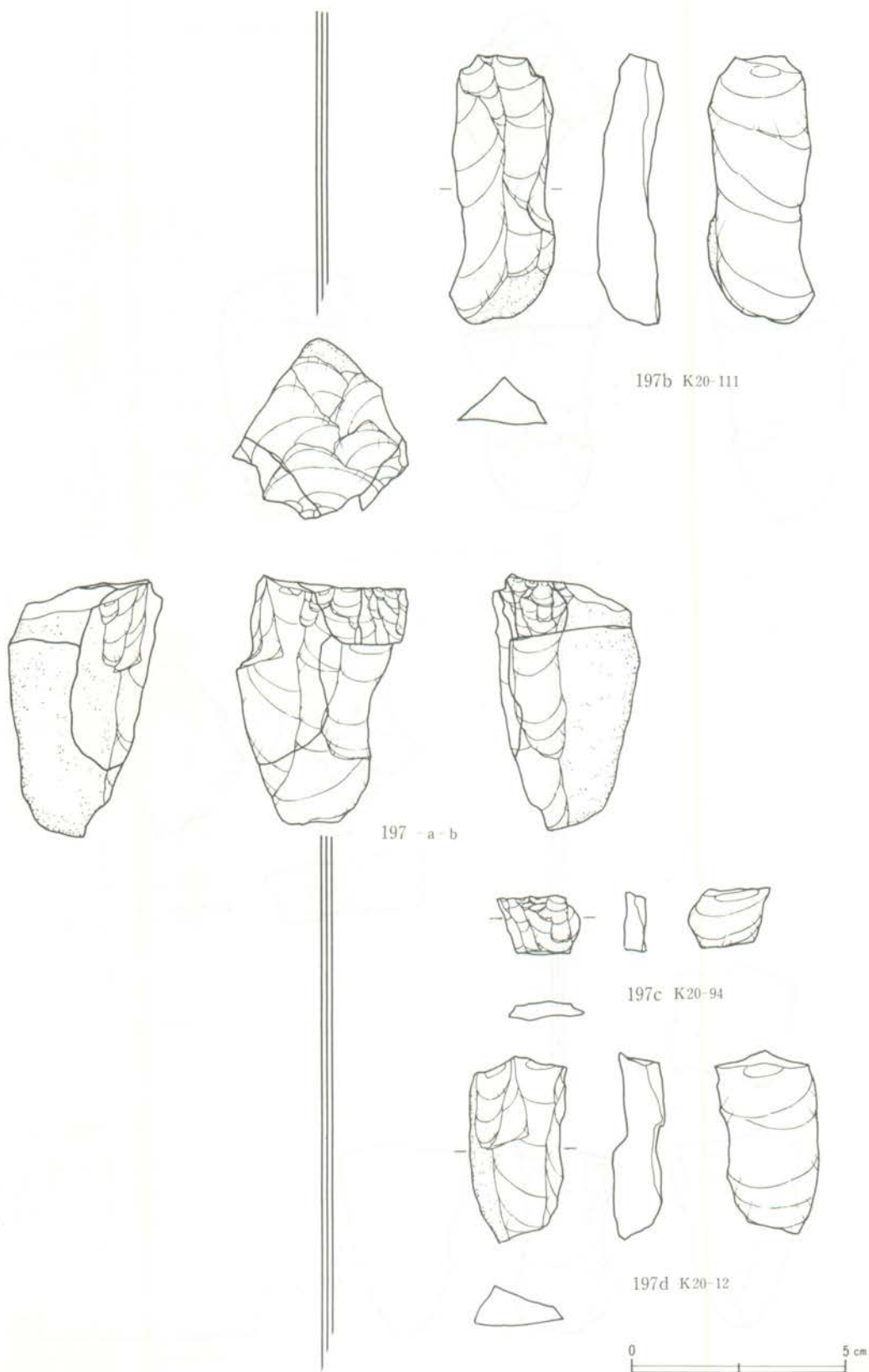
196 a + b



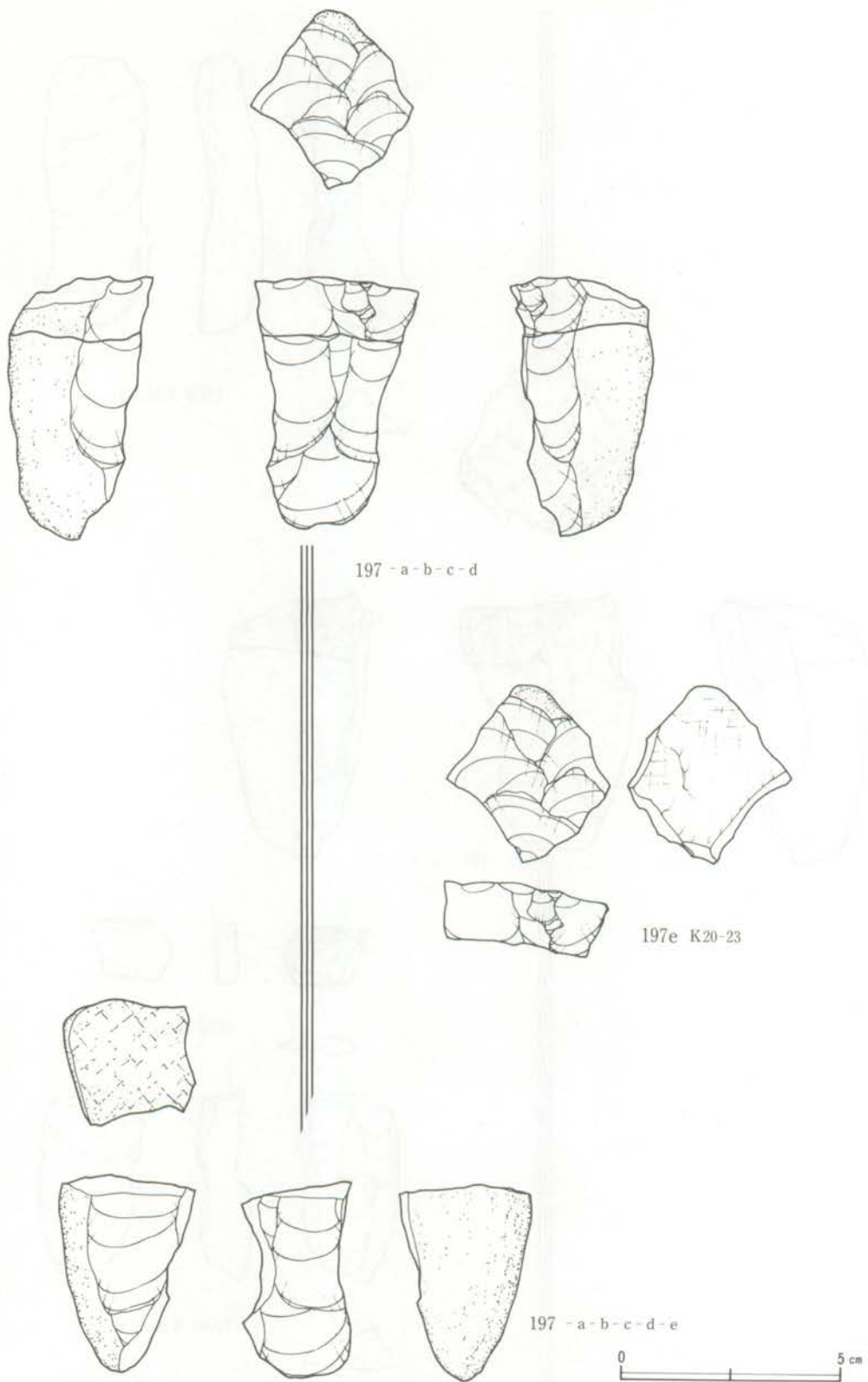
第133圖 接合資料 (12)



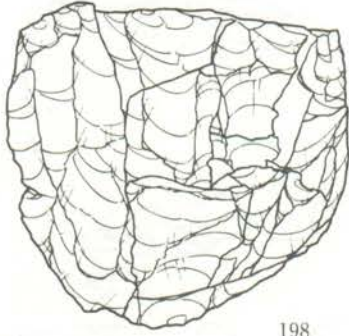
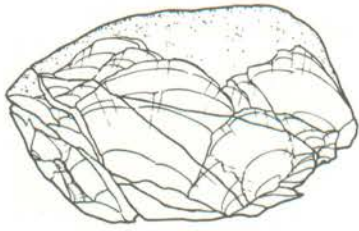
第134圖 接合資料 (13)



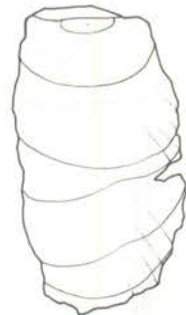
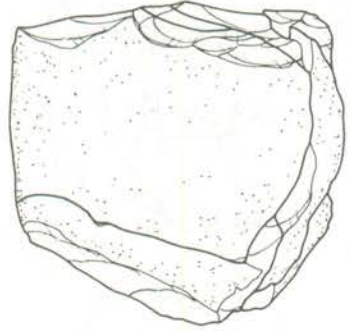
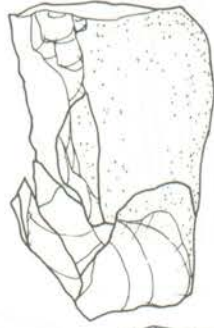
第135図 接合資料 (14)



第136図 接合資料 (15)



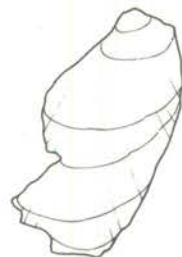
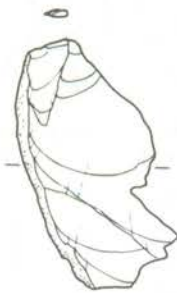
198



198a K21-135



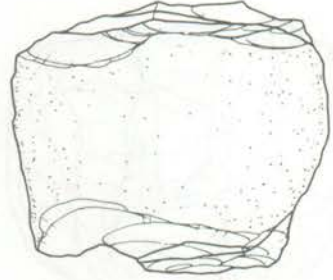
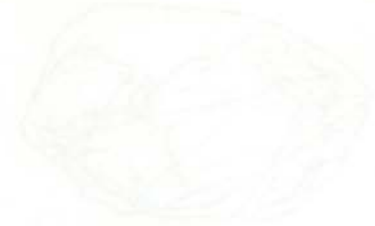
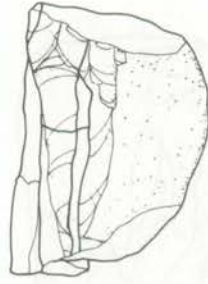
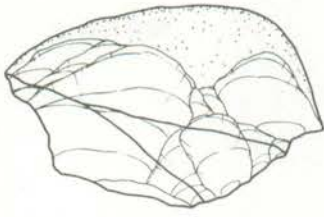
198b K21-62



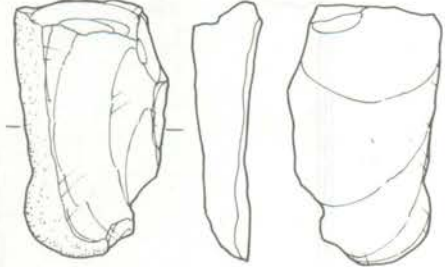
198c K21-58



第137圖 接合資料 (16)



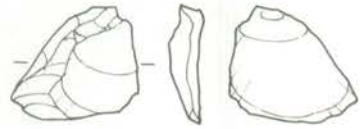
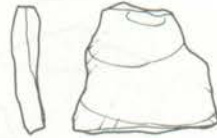
198 - a - b - c



198d K21-132



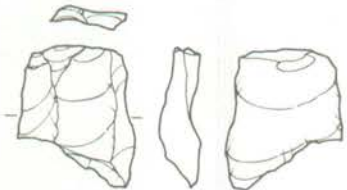
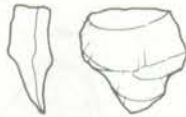
198e K21-156



198f K21-94



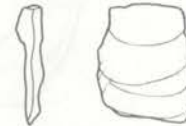
198g K21-134



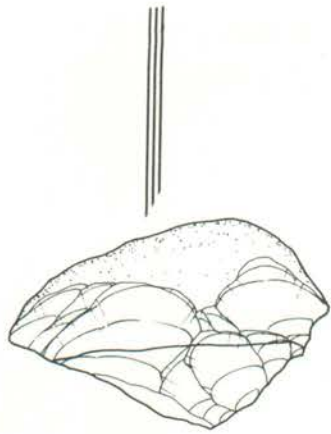
198h K21-236



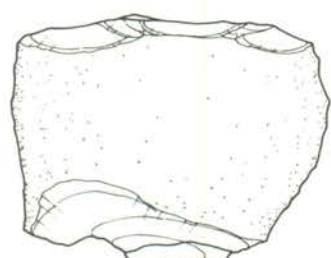
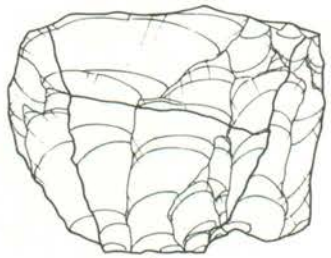
198i K21-142



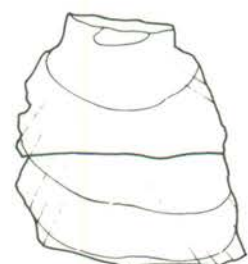
第138図 接合資料 (17)



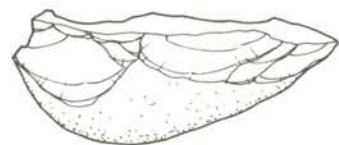
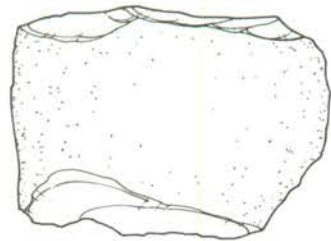
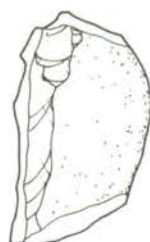
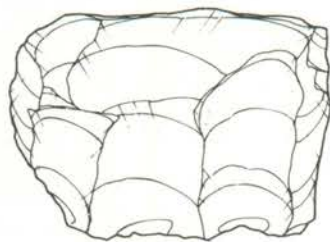
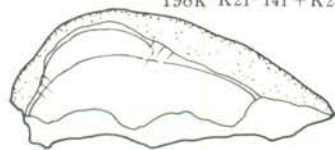
198j K21-189 + K21-181



198 -a-b-c-d-e-f-g-h-i-j



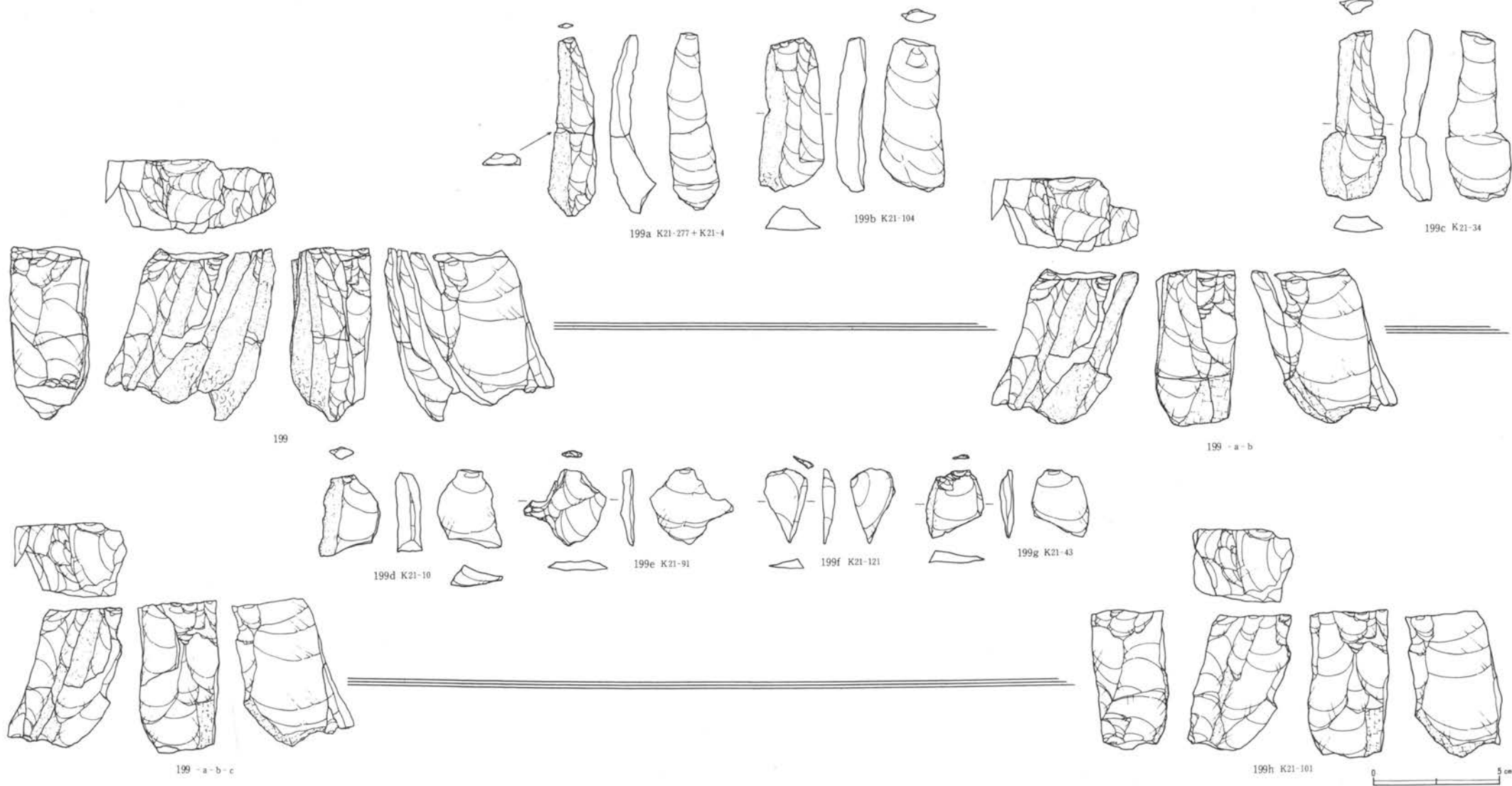
198k K21-141 + K21-64



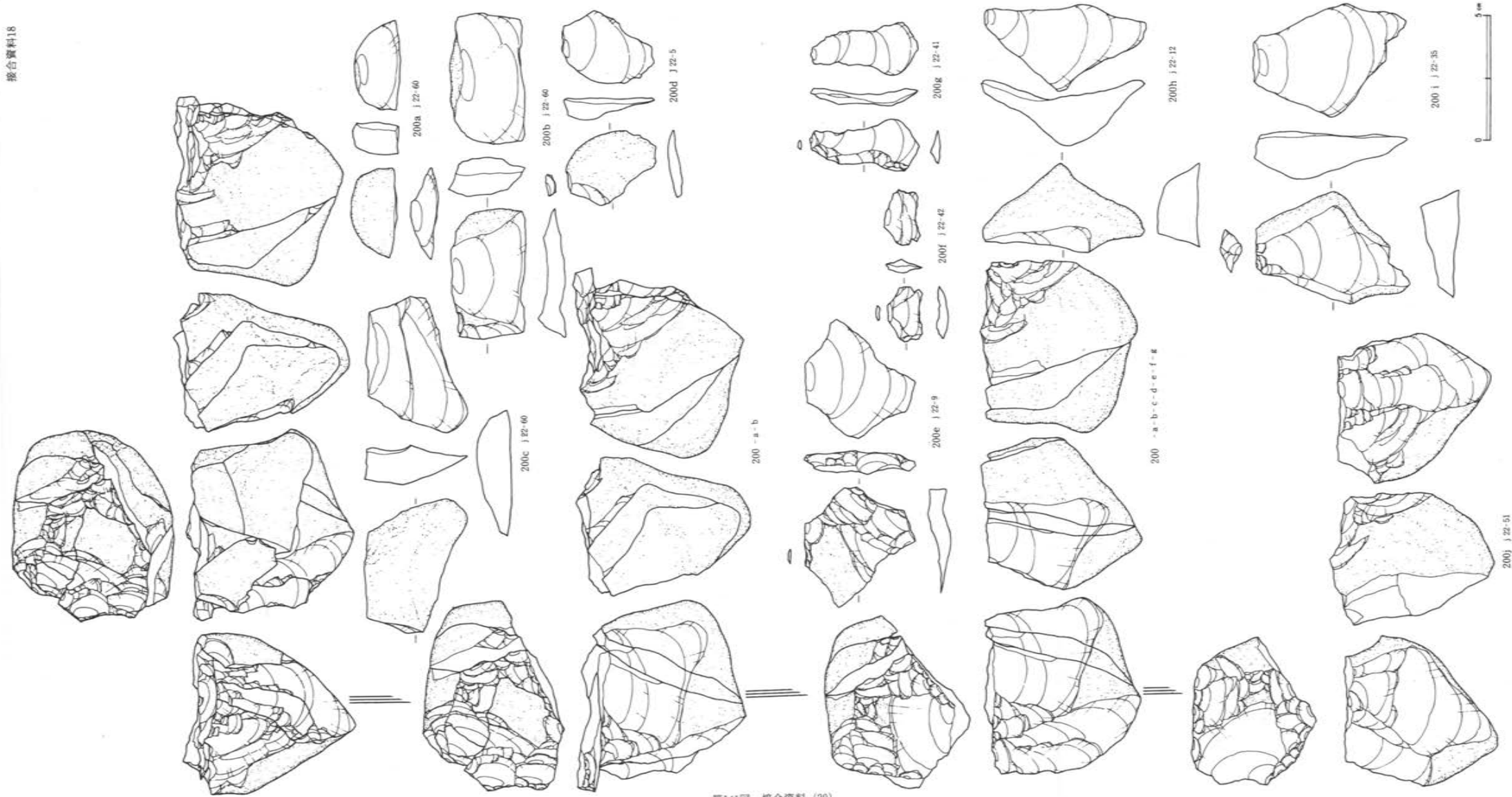
198l K21-183



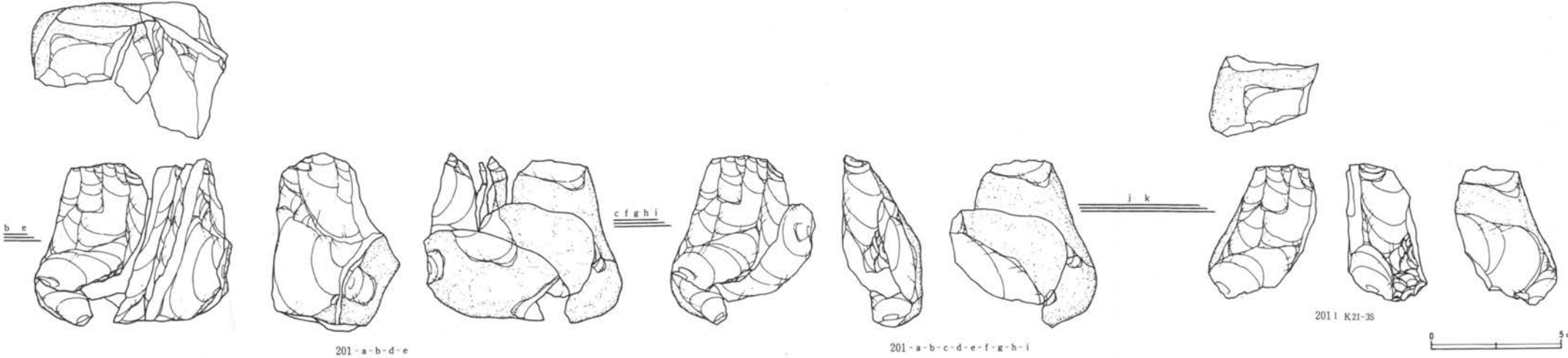
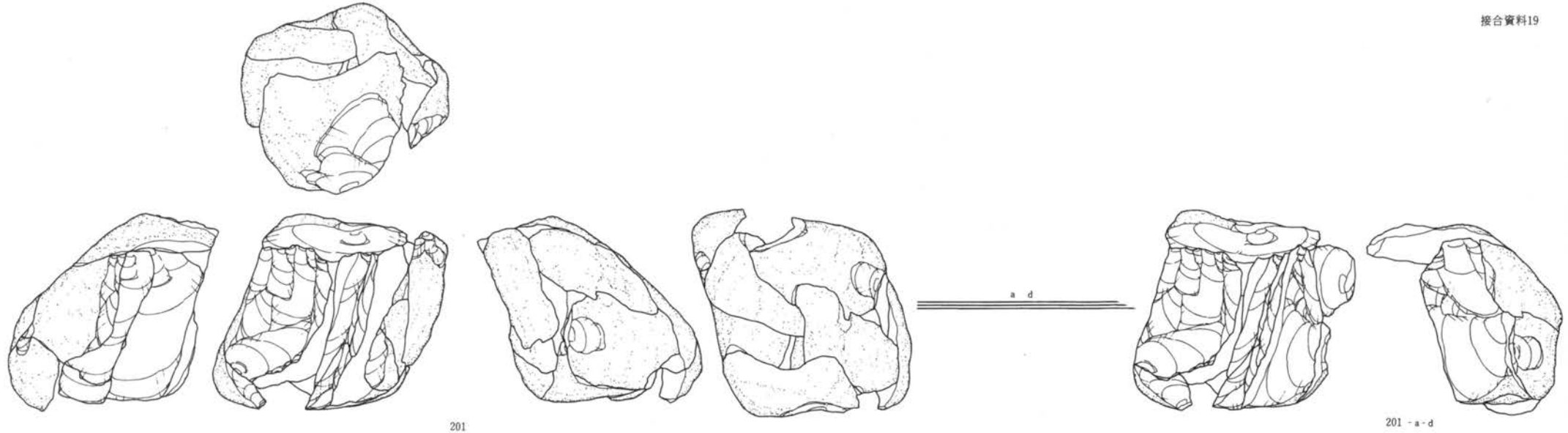
第139圖 接合資料 (18)



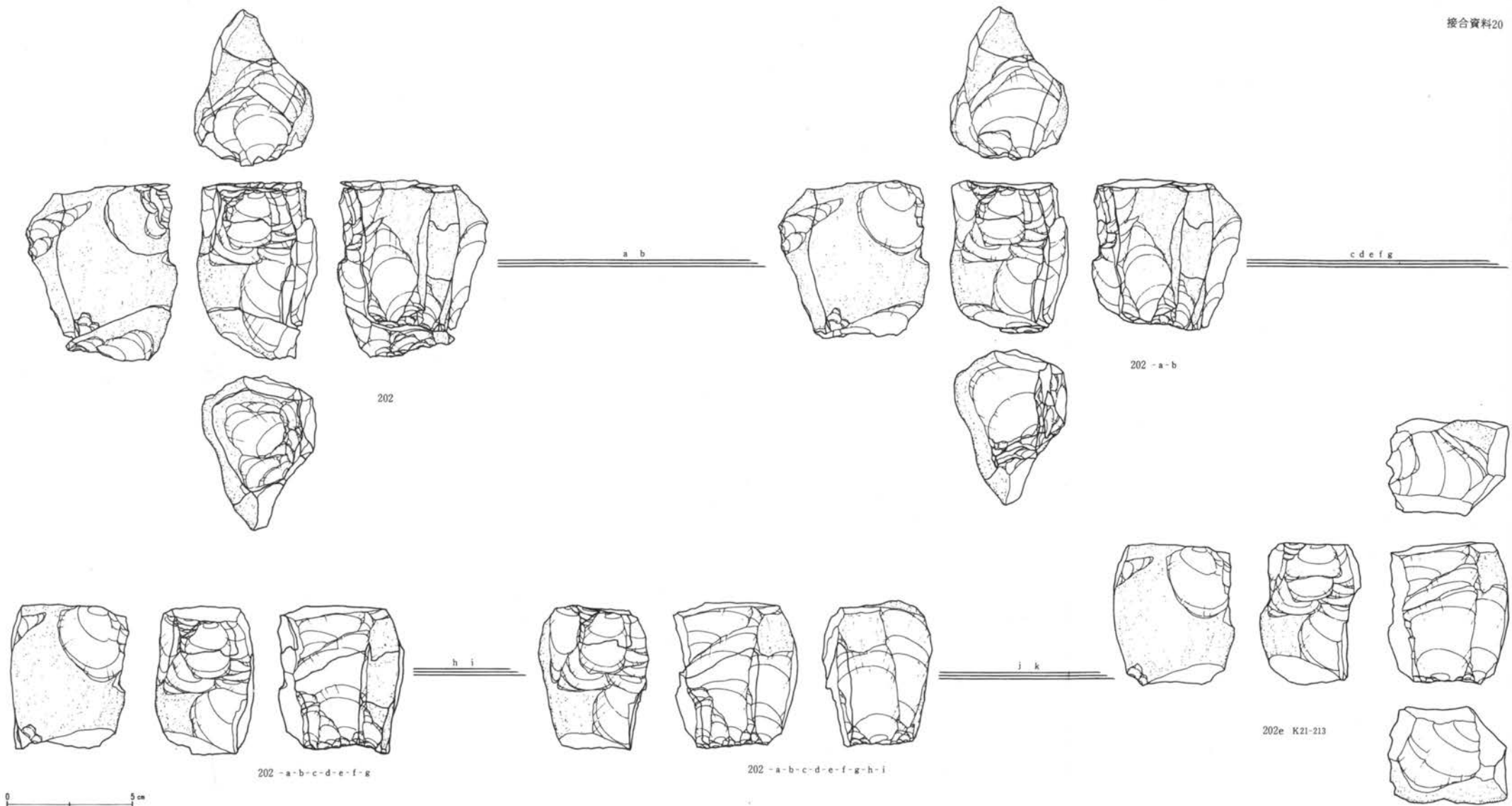
第140圖 接合資料 (19)



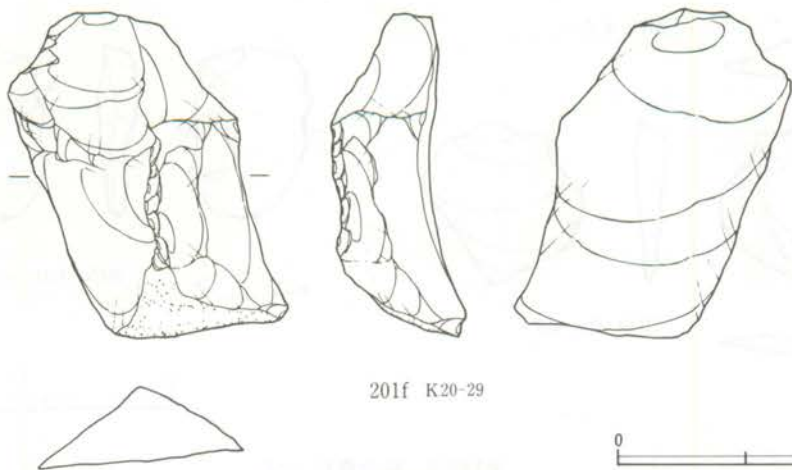
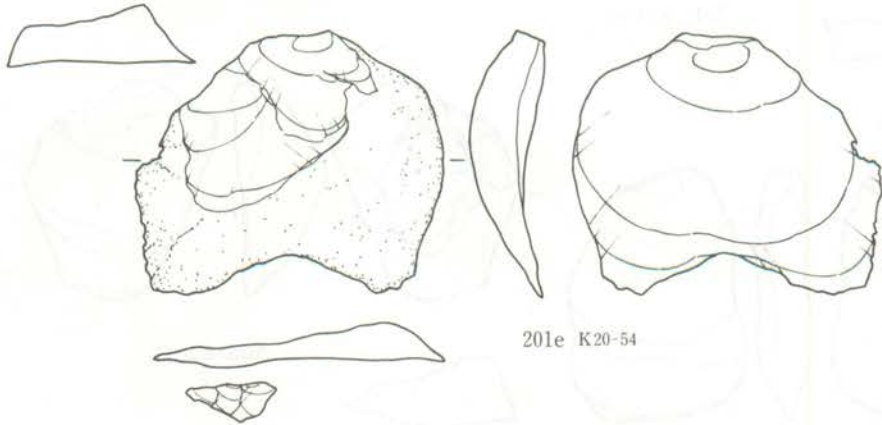
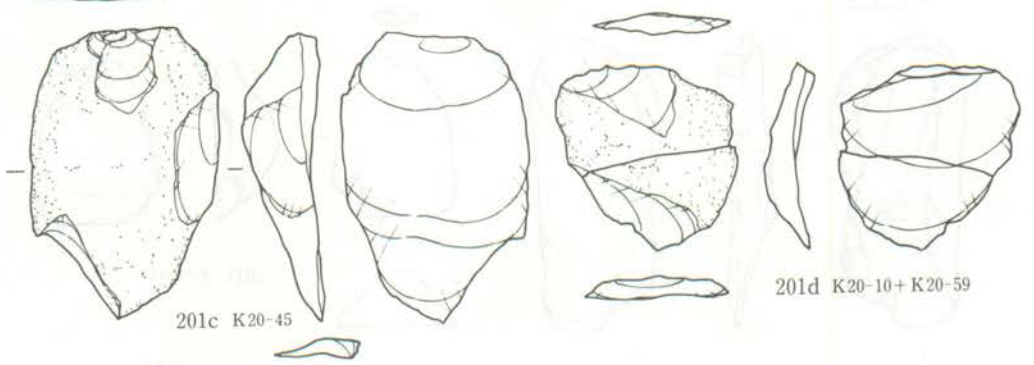
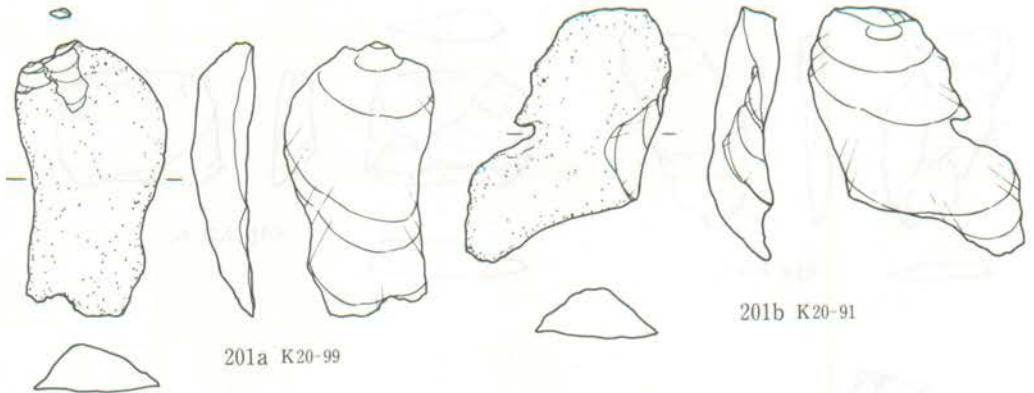
第141図 接合資料 (20)



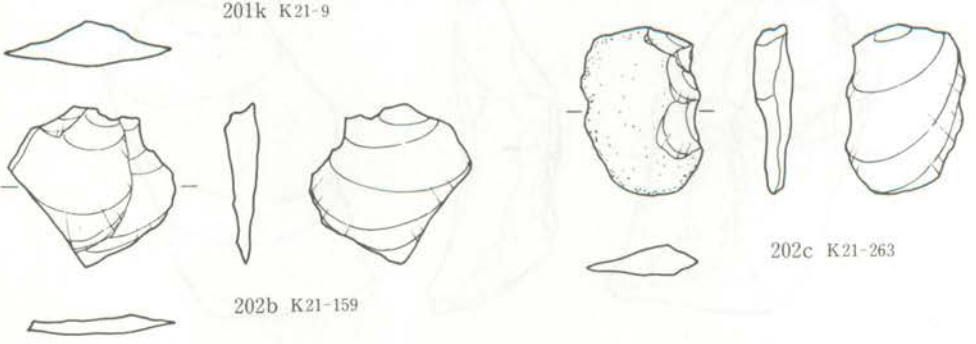
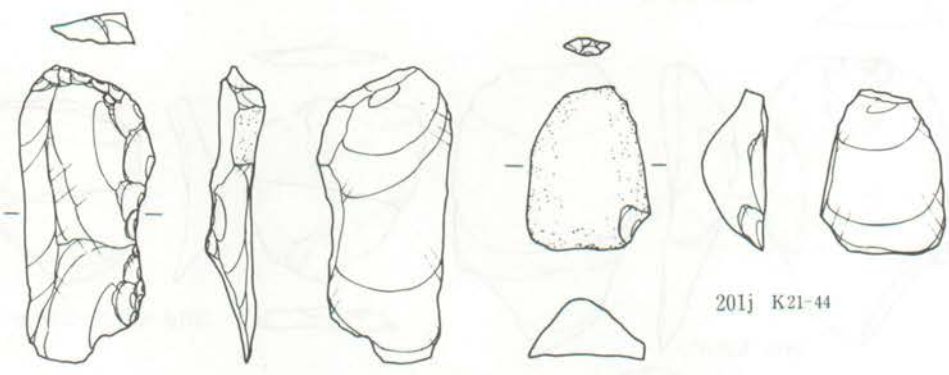
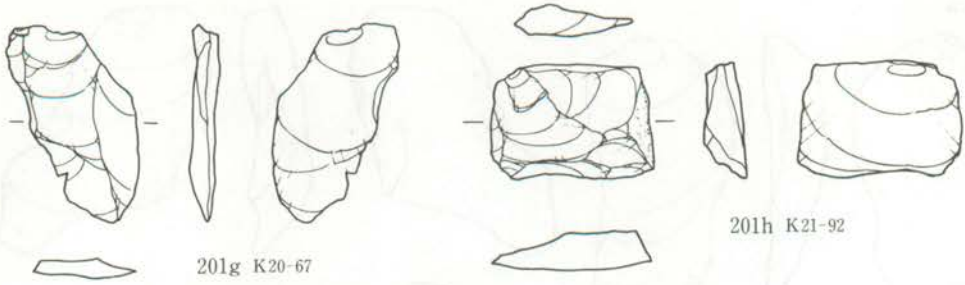
第142圖 接合資料 (21)



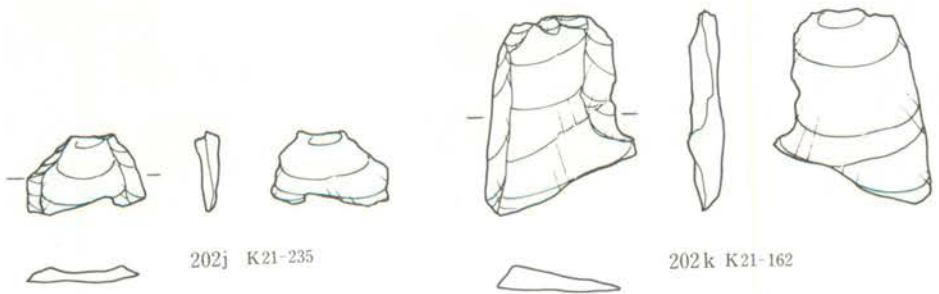
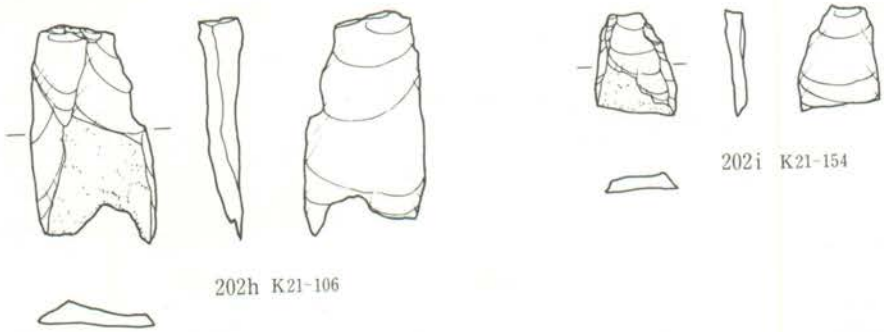
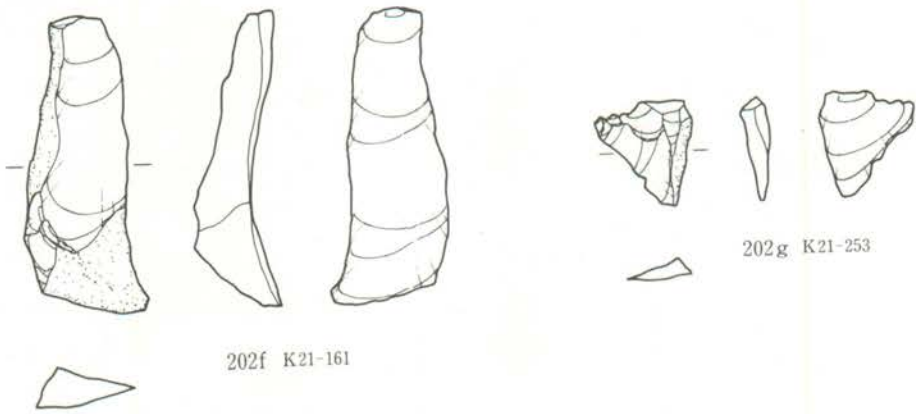
第143圖 接合資料 (22)



第144図 接合資料 (23)



第145図 接合資料 (24)



第146図 接合資料 (25)

第2部 縄文時代

第1章 元割遺跡

A. 縄文土器 (第147図)

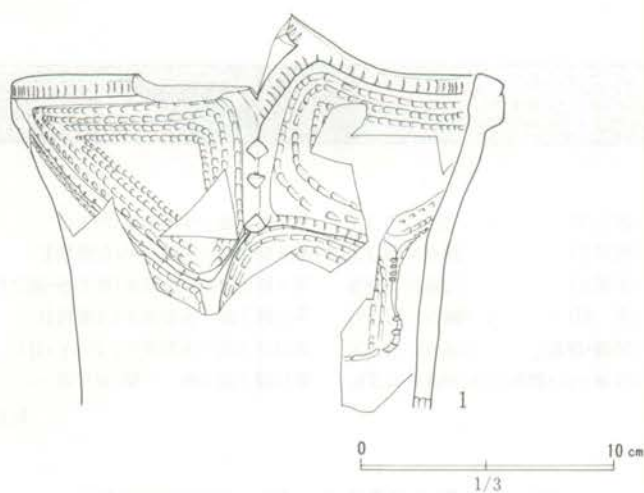
元割遺跡からは、縄文時代に属する遺構は検出されなかったが、近世に構築された馬土手盛土内から出土した、2個体の縄文土器がある。西南に隣接した聖人塚遺跡と同じ台地上に位置するが、さらに内陸の台地平坦部であるためか、縄文時代の生活遺構は本来的に営まれることが無かったらしい。

第147図1は竹管状工具による結節沈線文を多用した深鉢形土器である。中期前半阿玉台I b式前後に併行する、中部地方貉沢式、或いは勝坂式直前期の資料。他に典型的な三角形区画文を持つ、勝坂II式(中部地方新道式併行)の深鉢片1個体分があるが、粉々に破壊された状態で、復元・図示ができなかった。馬土手盛土を採取する際に破碎され、当遺跡に将来されたものと思われる。

B. 縄文時代の石器

石器は土器と同様に、極く少量の出土にとどまった。紙面の都合により図は掲載しなかったが、石鏃3点、石斧1点、他に剥片が若干量ある。別に礫側面に溝を刻んだ礫が1例あるが、時期を決定できない。石鏃は3点共凹基無茎鏃、石斧は砂岩製で短冊型を呈する。なお、有溝の礫については、先土器時代末期の石槍に伴う有溝砥石の可能性があり、いずれ別の機会を見て資料紹介したいと考えている。

(田村・原田)



第147図 元割遺跡出土の縄文土器

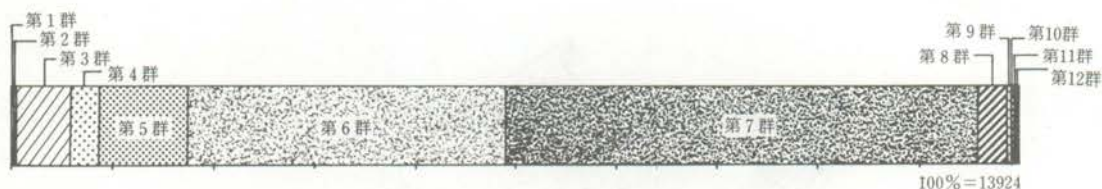
第2章 聖人塚遺跡

第1節 遺構・遺物の概要

聖人塚遺跡からは、縄文時代早期前半から晩期に至る、各期の遺物が出土した。これらの中で、その主体を占めるのは、中期前半から中葉にかけての遺物である。また検出された遺構は、縄文時代**早期**：炉穴23基、**前期前半**：竪穴状遺構1基、**中期前半阿玉台期**：竪穴状遺構2基・土坑1基・埋甕土坑1基、**中期中葉勝坂末から所謂中峠式期**：竪穴住居跡14基・竪穴状遺構3基・土坑2基・埋甕土坑1基であり、これらの他に、時期比定が困難な竪穴住居跡1基・竪穴状遺構2基・土坑20基がある。遺構の分布は、調査区西寄りの谷津に突き出した小舌状台地、及びその縁片部に集中し、台地上の平坦面にはあまり見られない（第150図）。報告は各遺構の種類毎に、番号順に行ったが、整理途中の分析で、自然営力による非人為的落ち込みと判断されたために除かれたものも多く、従って遺構番号には欠番が含まれる。

一方、調査によって出土した縄文土器は、その全てについて時期別分類を行い、様式毎の総量把握に努めた結果、細別可能な資料13,924点を確認した（第148図）。内容的には、多くの遺構に伴う中期前半および中葉期の土器が主体を占め、また該期の完形土器や大型破片の割合が高いために、遺物量の割には出土点数が少ない印象を受ける。なお、他に細別不可能な土器細片が、整理用コンテナで120箱ほど出土している。

（原田）

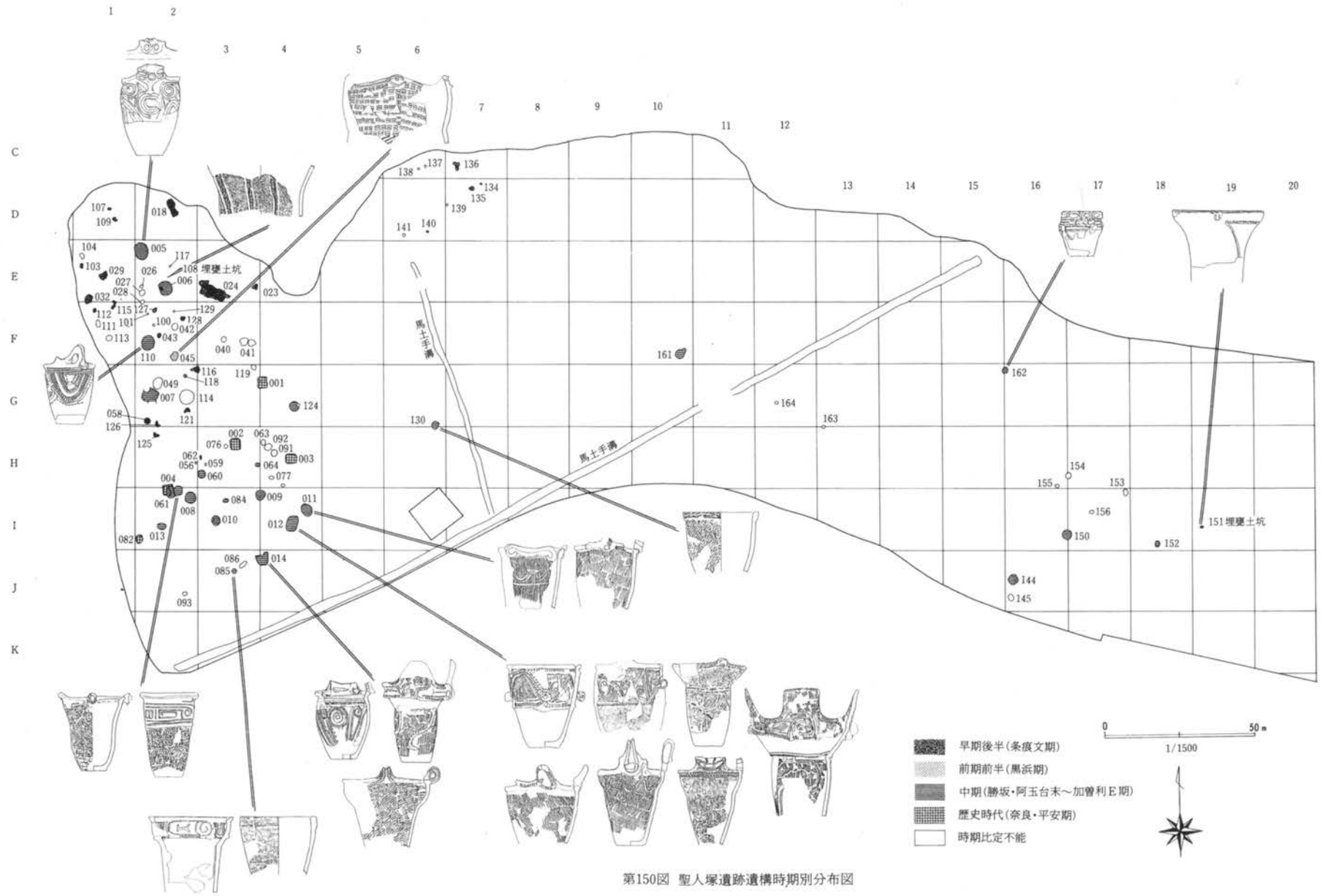


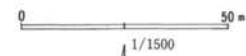
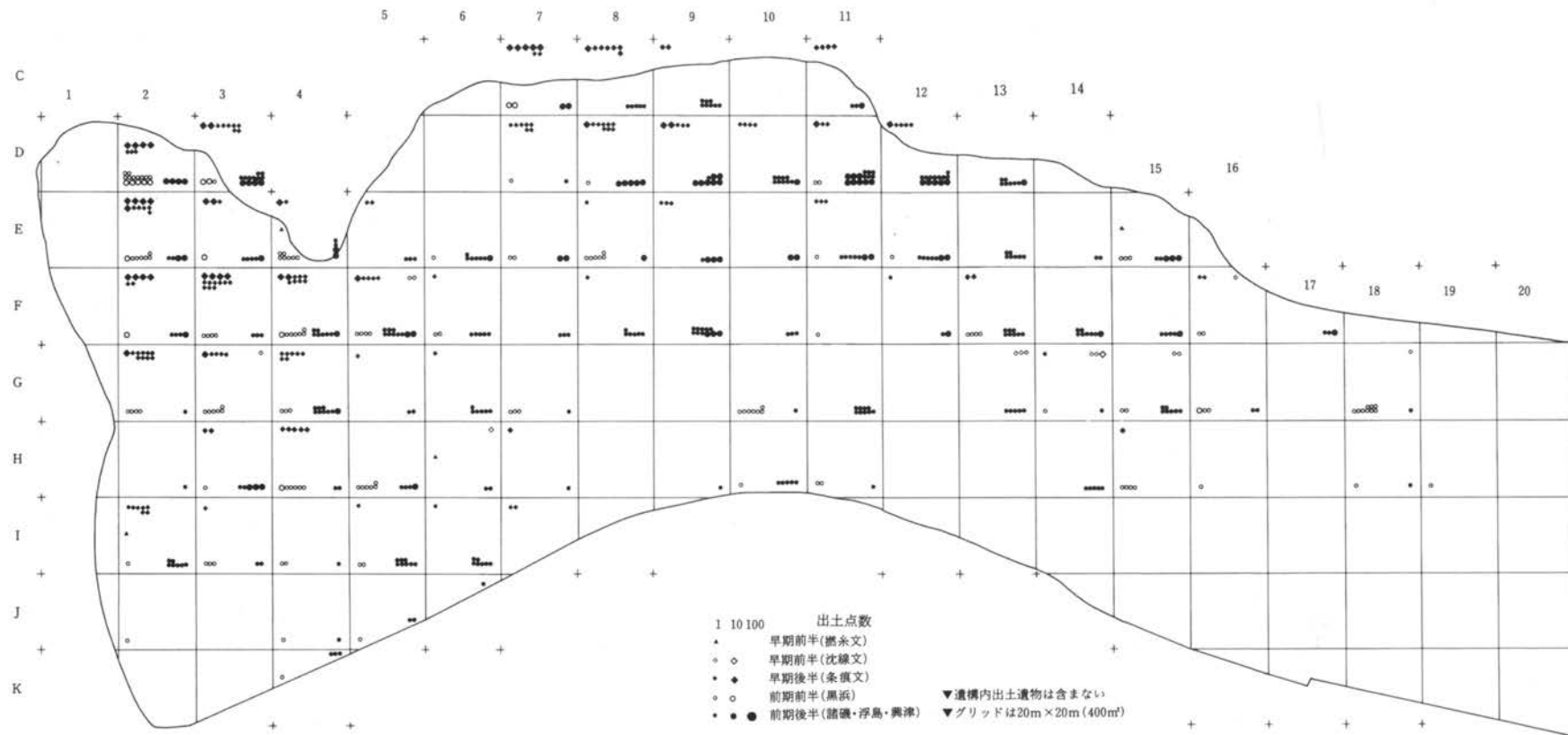
第1群土器=早期前半(燃糸文)	: 9点= 0.1%	第7群土器=中期前半(阿玉台)	: 6537点=46.9%
第2群土器=早期前半(沈線文)	: 25点= 0.2%	第8群土器=中期後半(加曾利E)	: 379点= 2.7%
第3群土器=早期後半(条痕文)	: 772点= 5.5%	第9群土器=後期前半(称名寺・堀之内)	: 104点= 0.7%
第4群土器=前期前半(黒 浜)	: 386点= 2.8%	第10群土器=後期後半(加曾利B)	: 52点= 0.4%
第5群土器=前期後半(諸磯・浮島)	: 1216点= 8.7%	第11群土器=後期後半(安行I・II)	: 2点= 0.1%
第6群土器=中期前半(五領ヶ台・勝坂)	: 4420点= 31.7%	第12群土器=晩 期(安行III~)	: 22点= 0.2%
総計: 13924点= 100%			

第148図 聖人塚遺跡出土縄文土器時期別数量比



第149図 聖人家遺跡全体図 (細文以降：欠番遺構を含む)





第151図 聖人塚遺跡グリッド別出土遺物分布図(1)

A. 遺構

(1) 炉穴 (第153～157図=図版21～24)

炉穴は、調査区北東部、谷津に突き出した小舌状台地の西半部、及び調査区中央部の北側台地縁片に、大きく2つのブロックを形成して分布する。足場及び炉部を持つ、早期後半の特徴的な形態を示すものも存在するが、足場を共有、或いは切り合う、重複例も多いため、実質上の遺構数は23基を大幅に上まわる。なお、覆土から遺物が出土し、構築時期を、土器型式レベルで求められる炉穴は多くない。

018炉穴(第153図) D2区、小舌状台地の北縁に位置する。長径560cm、短径130cm、長軸方向をN-19°-Wにとり、5基の炉穴が長軸線上に重複する。早期後半の土器17点が出土。炉部の重複状態から、掘り込みの深い炉穴が先に構築され、順次浅いものが重複したものと考えられる。早期後半、条痕文期の所産である。

023炉穴(第153図) E3区に位置し、長径155cmと195cmの炉穴2基が、足場を共有しながら直交、重複する。特に、そのうちの1基には、明確な煙道状施設が遺存しており、掘り込みも検出面から53cmと深い。出土遺物はなく、詳細な時期決定ができないが、構造から見て、早期後半条痕文期の所産と判断した。

024炉穴(第154図) E3区、023炉穴の南西に位置する。便宜上単一の遺構番号で扱ったが、実際には長径200cm内外の楕円形プランを持つ炉穴10基が群在し、1つのブロックを形成する。検出面からの掘り込みが浅く、相互の新旧関係は不明確。規模の割には出土遺物が少なく、早期後半3点、中期前半2点の土器片のみである。後者は流れ込みであろう。遺構の形態、群在の状態から、早期後半条痕文期の所産と考えたい。

029炉穴(第154図) E1区に位置する。長径320cm、短径220cm、長軸方向をN-37°-Eにとり、不整形を呈すが、実際には4基の炉穴が足場の一部・全面を共有、重複したものである。明確な新旧関係は不明だが、覆土観察からは、北側のものが最も新しい。早期後半の土器1点のみが出土。遺構の構造から、早期後半条痕文期の所産と判断した。

032炉穴(第155図) E1・F1区境界上に位置する。長径325cm、短径200cm、長軸方向をN-35°-Eにとり、不整形を呈す。底面の焼土堆積状態から、4基の炉穴が重複している可能性がある。足場は小竪穴状で平坦、比較的広い。早期後半29点、前期後半3点の土器片が、覆土中から散漫に出土した。早期後半条痕文期の所産である。

043炉穴(第155図) F2区中央部に位置する。長径195cm、短径100cm、長軸方向をN-6°-Wにとり、不整形楕円形を呈す。2基の炉穴が重複するが、新旧関係は不明。出土遺物は無いが、構造・形態から、早期後半条痕文期の所産と判断した。

058炉穴(第155図) G2区に位置する。最大径228cmの略円形を呈す。底面の東側と南側に、2か所の焼土堆積があり、前者は浅い掘り込みを伴う。足場は竪穴状を呈し、平坦で広い。柱穴状の掘り込みが3か所検出された。出土遺物は無いが、覆土の状態等から早期後半条痕文期の所産と考えられる。

062炉穴(第155図) H3区に位置する。壁の一部を欠くが、推定長径155cm、短径70cm、長軸方向をN-8°-Eにとり長楕円形を呈す。出土遺物は無いが、形態から早期後半条痕文期の所産と考えられる。

103炉穴(第155図) E1区、台地縁片部に位置する。長径150cm、短径95cm、長軸方向を $N-4^{\circ}-E$ にとり、楕円形を呈す。壁の立ち上がりは急角度で、炉部の両側がオーバーハングすることから、構築当初は煙道状施設を有する炉穴であった可能性が高い。早期後半の土器8点、礫1点が出土した。早期後半条痕文期の所産である。

107炉穴(第155図) D1区、小舌状台地の最北端に位置する。長径120cm、短径97cm、長軸方向を $N-88^{\circ}-E$ にとり、楕円形を呈す。出土遺物は無いが、遺構の構造から、早期後半条痕文期の所産と考えられる。

109炉穴(第156図) D1区、107炉穴の南東に位置する。最大径155cmの不整形を呈し、底面中央に炉部を持つ。出土遺物は無いが、遺構の構造から、早期後半条痕文期の所産と考えられる。

112炉穴(第156図) F1区、032炉穴の南東に位置する。中央部を攪乱溝で切られるが、長径145cm、短径105cm、長軸方向をほぼ $N-S$ にとり楕円形を呈す。出土遺物は無いが、構造から見て、早期後半条痕文期の所産と考えられる。

115炉穴(第156図) E1・F1区境界上に位置する。長径310cm、短径100cm、長軸方向を $N-27^{\circ}-E$ にとり、不整長楕円形を呈すが、実際には3基の炉穴が重複する。新旧関係は不詳。出土遺物は無いが、構造の特徴から、早期後半条痕文期の所産と思われる。

116炉穴(第156図) G2・G3区境界上に位置する。長径260cm、短径200cmを測るが、実際はほぼ $N-S$ に長軸方向を持つ炉穴2基と、 $E-W$ に長軸方向を持つ炉穴1基が重複する。出土遺物は無く、相互の切り合い関係も不明だが、構造から考えて早期後半条痕文期の所産と判断される。

121炉穴(第156図) F2区に位置する。長径150cm内外の炉穴が2基、足場を共有する形で重複している。南側炉部付近から、早期後半の土器23点が集中して出土した。早期後半条痕文期の所産である。

125炉穴(第156図) H2区に位置する。長径170cm、短径80cm、長軸方向を $N-47^{\circ}-E$ にとり、長楕円形を呈す。典型的な、単独の炉穴の形態を持つが、出土遺物は全く無い。形態・構造から、早期後半条痕文期の所産と考えられる。

126炉穴(第157図) G2区に位置する。長径210cm、短径90cm、長軸方向を $N-18^{\circ}-W$ にとり、弧状の長楕円形を呈す。足場を共有して北と南に各1か所炉部を有し、2基が重複する。遺物の出土は無いが、形態・構造から、早期後半条痕文期の所産と考えられる。

127炉穴(第157図) F2区に位置する。長径163cm、短径78cm、長軸方向を $N-21^{\circ}-E$ にとり、楕円形を呈す。北側に厚い焼土堆積を伴う炉部を持つ。遺物の出土は無いが、形態・構造から、早期後半条痕文期の所産と考えられる。

128炉穴(第157図) F2区に位置する。最大径142cmの不整形を呈す。南東隅に一段と掘り込まれた炉部を持ち、また北壁際に小規模な焼土堆積が認められる。前期後半の土器1点が出土したが、流れ込みであろう。構造・覆土の状態から、早期後半条痕文期の所産と考えられる。

134炉穴(第157図) D7区に位置する。推定長径130cm、推定短径65cm、長軸方向を $N-50^{\circ}-W$ にとり、楕円形を呈す。遺物の出土は無いが、形態から見て、早期後半条痕文期の所産であろう。

135炉穴(第157図) D7区、134炉穴の西側に位置する。長径195cm、短径124cm、長軸方向を $N-80^{\circ}-W$ にとり、不整楕円形を呈す。遺物の出土は無いが、形態・構造から早期後半条痕文期の所産と考えら

れる。

136炉穴(第157図) C7区、台地北縁に位置する。長軸方向を $N-3^{\circ}-E$ にとり、長径245cmの炉穴と、長軸方向を $N-80^{\circ}-E$ にとり、長径210cmの炉穴がT字形に重複する。焼土堆積は5か所検出されたが、明確に炉部としての条件を満たすものは西側の1か所のみである。切り合い関係は不明。出土遺物は無いが、形態等から、早期後半条痕文期の所産と判断される。

140炉穴(第157図) D6区に位置する。長径208cm、短径95cm、長軸方向を $N-38^{\circ}-E$ にとり、長楕円形を呈す。北側に大きく掘り込まれた炉部を持ち、その焼土堆積上面から、早期後半条痕文期の遺構である。

(2) 竪穴住居跡・竪穴状遺構 (第158~169図=図版24~35)

聖人塚遺跡からは竪穴住居跡15基、及びそれと構造的に類似しながら、積極的に居住遺構として評価をなし得ない、所謂竪穴状遺構7基が検出されている。このうち、竪穴住居跡14基、竪穴状遺構3基までが、勝坂式末葉から、所謂中峠式期の所産である。報文では、これらを便宜的に中期前半の遺構・遺物として扱ったが、同じ中期前半期でも、後述の中山新田I遺跡で出土した阿玉台Ib式期に属する遺構・遺物とは、本来別に扱うべき性格を示している。以下、遺構番号順に、竪穴住居跡・竪穴状遺構を一括して報告するが、遺構番号は必ずしも連続してはいない。

005竪穴住居跡(第158図) E2区西寄りに位置する。台地縁片部の傾斜により、北側の壁 $\frac{1}{3}$ は検出されていない。推定長径540cm、短径435cm、長軸方向を $N-5^{\circ}-W$ にとり楕円形を呈す。床面は平坦で、現存壁高は8cm前後と浅い。炉跡は無く、北東壁際のみ周溝が認められ、柱穴16本も検出されているが、配置に規則性を感じられない。出土遺物は早期後半1点、前期前半4点、同後半4点、中期前半10点、同後半2点の土器片がある。出土遺物の在り方から、中期勝坂末葉から所謂中峠式期の所産と考えられる。

006竪穴住居跡(第158図) E2区中央南寄りに位置する。東壁 $\frac{1}{4}$ を欠き、長径464cm、短径355cm以上、長軸方向を $N-20^{\circ}-W$ にとり、楕円形を呈す。西壁際に土坑状の落ち込みが重複するが、直接当遺構と関連を持つものとは思えない。床面は平坦で、現存壁高15cmと浅い。中央やや北寄りに地床炉を有し、それを囲むように支柱穴4本が配される。出土遺物は早期前半1点、同後半3点、前期前半2点、同後半1点、中期前半2点、晩期前半5点の土器片があるが、中期前半の大型破片が目立つ。このことから、当遺構は中期勝坂末葉から所謂中峠式期の所産と考えて良いだろう。

007竪穴住居跡(第159図) G2区に位置する。遺構の北側・南側を風倒木痕や、後世の掘り込みに破壊され、また西壁も検出されなかった。長径510cm以上、推定短径400cm、長軸方向をほぼ $E-W$ にとり、楕円形を呈す。床面は平坦だが、現存壁高20cmと浅い。炉跡は無く、不規則に分布する柱穴6本が検出された。東壁際から30cmほどの位置に、周溝が断続的に確認され、住居の改築・拡張行為が示唆される(土層断面図からは否定的)。遺物は早期8点、前期後半11点、中期前半11点の土器片と、土錘6点、土製円板2点が出土した。中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と考えられる。

008竪穴住居跡(第159図) I2区北東隅に位置する。最大径385cmの円形を呈し、中央に地床炉を持つ。柱穴は炉跡を中心に8本検出され、うち6本が支柱穴と思われる。床面は平坦で、現存壁高20cm内

外。炉跡北側を中心に、早期後半4点、前期後半3点、中期前半17点、同後半15点の土器片が出土した。出土遺物及び遺構の構造から、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と判断される。

009竪穴住居跡 (第160図) I 3・I 4区境界上に位置する。最大径290cm、略円形を呈し、東側に若干の張り出し部を有すが、この部分は掘り過ぎの可能性が高い。炉跡は無く、床面は平坦で、現存壁高は8cm内外と浅い。柱穴は不規則な配置で8本確認されたが、西壁側の4本は互いに対をなし、入口部の存在を示す。前期後半1点、中期前半3点の土器片が出土した。形態的には竪穴状遺構として扱うべきかも知れないが、柱穴の配置等から住居跡として報告した。出土遺物の状態から、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と考えられる。

010竪穴住居跡 (第160図) I 3区に位置する。長径365cm、短径328cm、長軸方向をN-18°-Wにとり、楕円形を呈す。中央南寄りに地床炉を有し、それを取り巻くように主柱穴6本が配される。炉跡北西側に浅い掘り込みがあり、そこから大型の土器片が出土した。床面は平坦で、現存壁高20cm程度を測る。中期前半15点、同後半8点の土器片が出土した。遺構の構造、出土遺物から考えて、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と判断される。

011竪穴住居跡 (第162図) I 4区北東隅に位置する。一部攪乱を受けるが、長径435cm、短径350cm、長軸方向をN-32°-Wにとり、楕円形を呈す。炉跡は無く、床面中央部が若干凹み、現存壁高は最大25cmを測る。柱穴2本が、相対する位置で検出された。遺物は中期前半の土器31点、同後半の土器11点、土錘2点、土製円板1点が出土した。出土遺物、遺構の構造から、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と考えられる。

012竪穴住居跡 (第161図) I 4区中央に位置する。長径630cm、短径423cm、長軸方向をN-8°-Eにとり楕円形を呈す。南東隅と西壁中央に張り出し状の部分があるが、これらは掘り過ぎの可能性が高い。炉跡は無く、床面中央が長径520cm、短径220cmに渡り、一段深く掘り込まれる。柱穴は不規則な配置で20本検出されたが、いずれも径が小さい点で、他の遺構例と異なる。床面中央の掘り込み内、及び南壁寄りから復元可能な土器が数多く出土した。出土遺物の内訳は前期後半3点、中期前半295点、同後半9点の土器片の他、大木様式の大型破片1点(図示できず)、土錘21点、土製円板1点と変化に富む。中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の「有段式竪穴」である。

013竪穴住居跡 (第162図) I 2区中央に位置する。壁の立ち上がりが検出されたのは北西側1/4のみである。推定長径420cm、推定短径350cm、長軸方向をN-61°-Wにとり楕円形を呈す。胴部以下を欠く埋設土器を伴う地床炉が設けられ、それを中心に17本の柱穴が検出された。対になった柱穴の存在から、南東隅が出入口にあたる可能性がある。床面は平坦で、現存壁高20cm内外。出土遺物は炉に埋設された所謂中峠式の深鉢1点のみである。遺構の時期も、この土器から、中期中峠式期に求められる。当遺跡で、炉跡に埋設土器を有する唯一の住居跡である。

014竪穴住居跡 (第163図) J 3・J 4区境界上に位置する。北側1/3を削平され、長径不明。短径395cm、長軸方向をN-2°-Eにとり、隅丸方形を呈していたものと思われる。遺存範囲に炉跡は無く、床面南西寄りに浅い掘り込みを持つが、その性格は不明。柱穴は7本検出された。床面は平坦で、現存壁高35cmを測る。出土遺物は多く、早期後半1点、前期後半1点、中期前半295点、同後半9点の土器片と、土錘7点、土製円板4点がある。出土土器の在り方から、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の遺構

と判断される。

041A・B 竪穴状遺構 (第163図) F 3 区にA・Bが近接して存在する。041Aは最大径295cm、041Bは最大径245cm、いずれも不整形を呈し、床面は平坦だが現存壁高は最大15cmと浅い。炉跡は無く、柱穴状掘り込みも、不規則に4基が検出されたに留まる。遺物も前期前半1点、同後半1点、中期前半3点の土器小片が出土したが、遺構に伴うものかは疑わしい。明確な構築時期は不明で、或いは自然営力による落ち込みの可能性もある。

045 竪穴状遺構 (第164図) F 2 区に位置する。最大径270cm、不整形を呈す。炉跡は無く、床面は僅かに凹凸を有し、壁はなだらかに立ち上がる。柱穴状掘り込みを2か所検出したが、浅い。西壁際から、前期前半、黒浜式土器9点出土・接合した。他に早期後半の土器3点も出土している。出土遺物から、前期前半黒浜期の所産と考えられる。小舌状台地に単独で存在した、小型の竪穴状遺構(原田、昭和57年)である。

049 竪穴状遺構 (第164図) G 2 区、007 竪穴住居跡北側に近接する。長径395cm、短径265cm、長軸方向をN-12°-Eにとり楕円形を呈す。炉跡は無く床面は平坦だが、壁の立ち上がりは緩やかで浅い。柱穴状掘り込みを4か所検出した。遺物は早期後半1点、前期後半1点、中期前半5点の土器片が出土したが、遺構の時期決定に足る資料ではない。

060 竪穴状遺構 (第164図) H 3 区西寄りに位置する。最大径265cmの略円形を呈す。床面は中央部に向かってやや傾斜し、検出面からの掘り込みは最大18cmを測る。炉跡は無く、柱穴状掘り込みが3か所検出された。出土遺物は中期前半の土器19点、他に土師器片4点が混在する。遺構の形態等から、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と考えられる。

061A・B 竪穴住居跡・061C 竪穴状遺構 (第165図) H 2・I 2 区境界上に位置する。本来、3基を個別に扱うべきだが、整理途上の便宜から、一括して報告する。061Aは長径推定310cm、短径275cm、長軸方向をN-83°-Eにとり、楕円形を呈す住居跡で炉跡は無い。061Bは最大径368cmの不整形を呈する住居跡で、061Cにその西半部を切られている。061Cは径210cm、円形を呈する竪穴状遺構である。柱穴は061A・B・C合わせて16本検出されたが、柱穴配置を復元できるのは061Aに伴う9本のみである。出土遺物は3遺構一括で、早期後半1点、前期後半10点、中期前半17点、同後半5点の土器片と、土錘5点がある。復元可能な土器から見て、遺構の時期は中期勝坂式末葉から所謂中峠式期に求められるが、061A・B相互の時間差は認識できなかった。

084 竪穴状遺構 (第165図) I 3 区に位置する。長径263cm、短径210cm、長軸方向をほぼE-Wにとり楕円形を呈す。床面は若干の凹凸があり、現存壁高15cm、壁の立ち上がりは緩やかで、炉跡・柱穴は無い。出土遺物は、中期前半の土器46点、土製円板2点がある。出土遺物から考えて、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産とされる。

085 竪穴状遺構 (第165図) J 2 区に位置する。最大径185cmの円形を呈す。床面は平坦で炉跡、柱穴は無い。壁は急角度で立ち上がり、現存壁高最大18cmを測る。北壁際から大型破片が出土した。遺物の内訳は前期後半4点、中期前半3点の土器片である。出土遺物から考えて、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と判断される。

110 竪穴住居跡 (第166図) F 2 区に位置する。床面の僅かな残存部と、柱穴6本が検出されたのみ

で、規模は不明。出土遺物は前期後半1点、中期前半8点、同後半1点の土器片、土錘2点がある。遺物の在り方から、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と考えられる。

114 竪穴住居跡 (第166図) G 2区東寄りに位置する。地床炉と、それに付随する柱穴14本が検出されたのみで、規模は不明。出土遺物も時期細別可能なものは皆無であり、遺構の時期を決定できない。

124 竪穴住居跡 (第167図) G 4区に位置する。北壁を欠き、また東側に攪乱部分がある。径325cm程の円形を呈し、炉跡は無く、床面は平坦だが、現存壁高8cm以下と浅い。不規則な配置で柱穴9本が検出された。出土遺物は前期後半1点、中期前半2点、同後半1点の土器片と、土製円板1点のみだが、遺構の構造から考えて、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産と判断した。

130 竪穴住居跡 (第167図) G 6・H 6区境界上に位置する。長径515cm、短径445cm、長軸方向をN-48°-Eにとり楕円形を呈す。床面中央が350cm×290cmの範囲に一段掘り込まれ、その中央に地床炉2基が検出された。柱穴20本が散在し、2回以上の建て替え行為が考えられる。遺物は中期前半12点の土器片と、土錘1点が出土した。このことから、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の「有段式竪穴」と理解して良いだろう。

144 竪穴住居跡 (第168) J 16区西寄りに位置する。最大径325cmの円形を呈し、炉跡は無い。床面は平坦で、現存壁高最大45cmと深い。柱穴3本が検出され、うち1本は床面中央に穿たれる。中期前半の土器9点が出土し、遺構の時期は中期前半阿玉台I b式期に求められる。一般的な竪穴住居跡と言うより、むしろ該期に普遍化する「小竪穴」に属するものである。

150 竪穴住居跡 (第168図) I 16・I 17区境界上に位置する。最大径300cmの円形を呈し、炉跡は無い。床面は平坦で、現存壁高最大50cmを測る。床面中央に2本、南壁際に2本の柱穴と、南壁に袋状の掘り込みが検出された。出土遺物は中期前半の土器24点、土錘2点、土製円板2点があり、これらの資料から、遺構の時期も中期前半、阿玉台I b式期に比定される。144竪穴住居跡同様、該期に多い「小竪穴」に属するものである。

161 竪穴住居跡 (第169図) 調査区のほぼ中央、F 10区に位置する。径270cmの円形を呈する竪穴の北東部に、長さ130cmの張り出し部が付随した形状を示すが、この部分が本来的に共伴する施設なのかは確証が無い。竪穴部分の床面はやや中央が盛り上がり、柱穴が1本検出された。壁の立ち上がりは緩やかで、掘り込みも浅い。前期後半3点、中期前半139点の土器片、土錘9点、土製円板14点が出土した。出土遺物、遺構の形状から、中期前半、阿玉台I b式期の所謂「小竪穴」に属する遺構と判断される。

162 竪穴住居跡 (第169図) G 15・G 16区境界上に位置する。最大径268cmの円形を呈し、炉跡は無い。西壁の一部が破壊されているが、床面は平坦で現存壁高43cmと深い。中央に浅い柱穴1本が検出された。前期前半7点、中期前半176点の土器片と、土錘30点、土製円板10点、及び時期不詳の土玉1点が出土した。出土遺物、遺構の形態から、中期前半阿玉台I b式期の、所謂「小竪穴」と考えられる。

(3) 土 坑 (第170~174図=図版35~42)

当遺跡からは、炉穴・竪穴住居跡等の生活遺構とともに29基の土坑が検出された。これらの分布は、調査区東側に竪穴住居跡とともに集中した在り方を示すが、数基の土坑は調査区中央部、及び西部に別個のまともりを形成する。しかし、他遺跡の例に漏れず、遺物を出土し、その所属時期、性格が明らか

なもの少い。中期前半阿玉台 I b 期の 1 基、中期勝坂式末葉から中峠式期の 2 基以外は、いずれも所属時期を究明することができなかった。

026土坑 (第170図) E 2 区に位置する。長径128cm、短径92cm、長軸方向をE-Wにとり、不正楕円形を呈す。検出面からの掘り込みは7cm内外と浅く、出土遺物も無い。非人為的な落ち込みである可能性を拭えない。

027土坑 (第170図) E 2 区、026土坑の南に近接する。長径207cm、短径170cm、長軸方向をN-11°-Eにとり楕円形を呈す。北壁際と南壁際に柱穴状掘り込みが存在する。床面は平坦だが浅い。前期前半2点、同後半1点、中期前半3点の土器片が出土したが、遺構の時期を知る手懸りにはならなかった。

028土坑 (第170図) E 2・F 2 区境界上に位置する。最大径160cmの不正円形を呈す。床面は平坦だが掘り込みは浅い。北壁寄りに2本の柱穴状掘り込みが検出された。前期前半の土器1点が出土したが、時期決定に足るものではない。

040土坑 (第170図) F 3 区に位置する。径180cmの円形を呈す。床面は平坦で、掘り込みは浅いが壁は垂直に立ち上がる。後期前半の土器1点が出土した。遺構の時期・性格に関する知見は得られていない。

042土坑 (第170図) F 2 区に位置する。最大径243cmの不整形円形を呈する。床面は平坦で、検出面からの深度23cm、壁は比較的急角度で立ち上がる。時期判別可能な遺物は出土していない。

056土坑 (第170図) H 2 区東寄りに位置する。長径175cm、短径132cm、長軸方向をN-75°-Wにとり楕円形を呈す。底部が一段と掘り込まれ、検出面から最深60cmを測る。出土遺物は無く、遺構の時期・性格とも不明。

059土坑 (第170図) H 3 区に位置する。長径195cm、短径140cm、長軸方向をN-32°-Eにとり楕円形を呈す。底部は平坦で、検出面からの深度33cmを測る。出土遺物は皆無で、遺構の時期・性格とも不明。

063土坑 (第171図) H 4 区北西隅に位置する。最大径155cmの略円形を呈す。床面は平坦で、検出面からの掘り込みは、最大30cm。中期前半の土器片2点が出土したが、遺構の時期・性格を把握する材料とはならなかった。

064土坑 (第171図) H 3 区東寄りに位置する。最大径163cmの不正円形を呈す。底部は鍋底状で、壁の立ち上がりはなだらか。中期前半の土器11点が出土し、遺物の在り方から、遺構の時期を中期勝坂式末葉から所謂中峠式期に求められる。

076土坑 (第171図) H 3 区に位置する。最大径140cmの略円形を呈す。底部は平坦で、検出面からの深度は最大45cmを測る。出土遺物は無く、遺構の時期・性格ともに詳らかではない。

077土坑 (第172図) H 4 区に南西隅に位置する。長径215cm、短径155cm、長軸方向をN-70°-Wにとり楕円形を呈す。底面は鍋底状で、南西壁際に一段掘り込みを有す。出土遺物は無く、時期・性格とも不詳。

079土坑 (第172図) H 4 区、077土坑の南東に位置する。長径140cm、短径105cm、長軸方向をほぼE-Wにとり楕円形を呈す。断面鍋底状、検出面から最深35cmを測る。出土遺物は無く、時期・性格とも不明。

086土坑(第172図) J 3区に位置する。長径282cm、短径143cm、長軸方向をN-47°-Eにとり楕円形を呈す。断面は鍋底状で、検出面からの深度最大45cmを測る。中期前半の土器片2点が出土したが、遺構の時期決定に供し得るものではない。

091土坑(第171図) H 4区、092土坑の北西に近接する。長径200cm、短径173cm、長軸方向をN-12°-Wにとり楕円形を呈す。床面は平坦で、検出面から最深32cmを測る。時期不詳の土器底部片が出土した。遺構の時期・性格は不明。

092土坑(第171図) H 4区、063土坑の南東に近接する。最大径225cmの略円形を呈し、底面は平坦で、検出面から最深30cmを測る。出土遺物は無く、遺構の時期・性格は詳らかでない。

093土坑(第172図) J 2区に位置する。長径140cm、短径103cm、長軸方向をN-74°-Eにとり、楕円形を呈す。検出面からの深度28cmを測り、壁はなだらかに立ち上がる。出土遺物は無く、遺構の時期・性格は不明。

104土坑(第172図) E 1区北西隅に位置する。長径210cm、短径120cm、長軸方向をN-26°-Wにとり楕円形を呈す。底面は若干の凹凸があり、検出面からの深度最大50cmを測る。早期後半5点、前期後半2点の土器片が出土したが、遺構の時期・性格を決定づけるものではなかった。

111土坑(第172図) F 1区に位置する。長径218cm、短径150cm、長軸方向をほぼN-Sにとり、不正楕円形を呈す。床面は北側ほど浅く、壁は比較的急角度で立ち上がる。出土遺物は無く、時期・性格とも不明である。

113土坑(第173図) F 1区、111土坑の南東に位置する。長径185cm、短径165cm、長軸方向をN-50°-Wにとり楕円形を呈す。北東側半分が一段と深く掘り込まれ、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。出土遺物は無く、遺構の時期・性格は不明である。

118土坑(第173図) G 2区北東隅に位置する。径120cmの円形を呈し、底部が南西側に張り出した、所謂フラスコ状を示す。検出面からの深度は65cmで、底面は平坦。中期前半3点、同後半2点の土器片と、土錘1点が出土した。遺構の形態及び出土土器から、中期勝坂式末葉から所謂中峠式期の袋状土坑と考えられる。

119土坑(第173図) G 3区北東隅に位置する。長径172cm、短径147cm、長軸方向をN-73°-Wにとり楕円形を呈す。底面は平坦で、検出面からの深度40cmを測る。時期決定に耐える遺物は出土せず、遺構の性格も分からない。

145土坑(第173図) J 16区、144竪穴住居跡南側に位置する。長径215cm、短径165cm、長軸方向をほぼN-Sにとり楕円形を呈す。底面は平坦で、検出面からの深さ165cm、壁は垂直に立ち上がる。所謂「陥穴状」土坑だが、出土遺物は無い。構築時期不明。

152土坑(第173図) I 18区に位置する。長径175cm、短径138cm、長軸方向をほぼN-Sにとり楕円形を呈す。断面は凹凸の多い鍋底状を呈し、検出面からの深度85cm。中期前半の土器片3点が出土し、所属時期を中期阿玉台I b式期に求められる。

153土坑(第174図) I 17区北東隅に位置する。長径223cm、短径161cm、長軸方向をN-18°-Eにとり楕円形を呈す。底面は平坦で、検出面からの深度100cmを測る。所謂「陥穴状」土坑であるが、出土遺物は無く、所属時期も明らかではない。

154土坑(第174図) H16・H17区の境界上に位置する。径173cmの略円形を呈し、底面はほぼ平坦で浅く、柱穴状掘り込みが2か所に検出された。出土遺物は無く、遺構の時期・性格とも不明である。

155土坑(第174図) H16区南東隅に位置する。長径175cm、短径155cm、長軸方向をN-62°-Wにとり楕円形を呈す。底面は平坦で、検出面からの深度25cmを測る。出土遺物は無く、遺構の時期・性格とも不明である。

156土坑(第174図) I17区中央部に位置する。長径157cm、短径130cm、長軸方向をN-8°-Wにとり楕円形を呈す。底面は平坦で、検出面からの深度70cm、所謂「陥穴状」の土坑である。出土遺物は無く、構築時期は不明。

163土坑(第174図) G13・H13区境界上に位置する。径180cm前後の略円形を呈すが、西側の一部が攪乱を受けている。底面は中央に向って若干深くなり、検出面から最深40cmを測る。中期前半の土器2点が出土しているが、遺構の時期・性格を知る手懸りにはならない。

164土坑(第174図) G12区中央に位置する。長径210cm、短径190cm、長軸方向をN-71°-Eにとり、不正楕円形を呈す。底面が南側に張り出した所謂フラスコ状で、検出面からの深度95cmを測る。中期前半の土器1点が出土したが、明確な構築時期は不明。袋状土坑である。

(4)焼土(第175図)

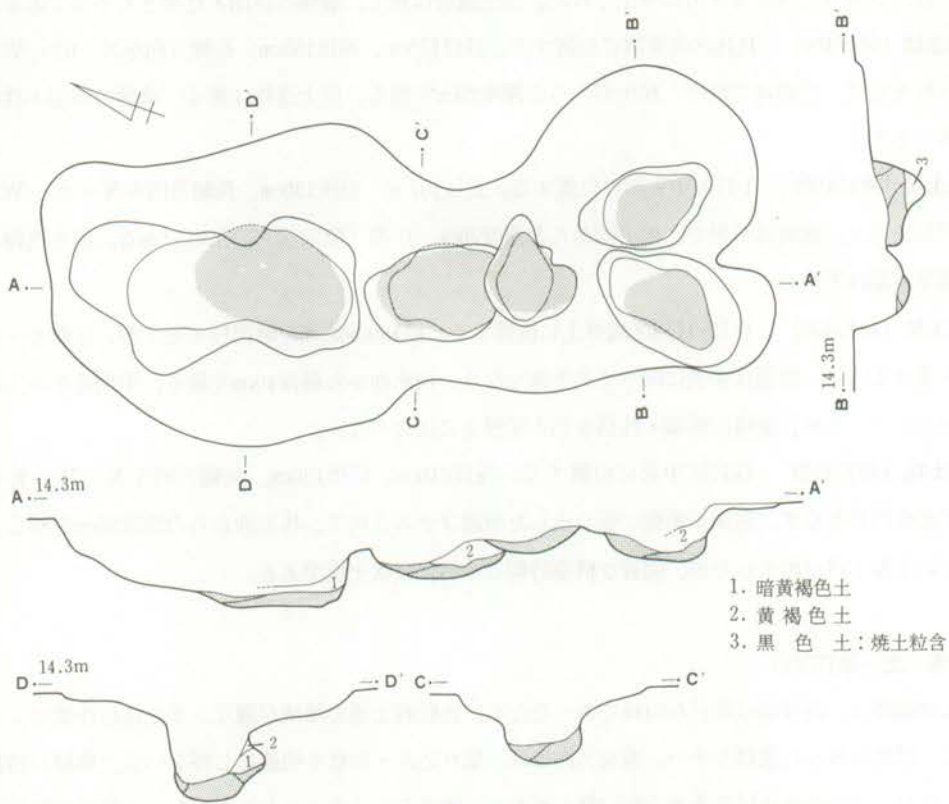
聖人塚遺跡は、調査前の地目が山林であったため、比較的土壌の堆積が薄く、また抜根作業によって止むなく損傷を被った遺構も多い。調査区内には、掘り込み・形状を明確にし得ない焼土堆積が10基検出されたが、その分布は早期後半の炉穴群の所在と一致する。このことから、これらは足場が削平されてしまった炉穴の一部である可能性が高い。ここでは個別に詳述する余地を持たないため、各遺構の位置は第148図を参照されたいが、142・143焼土については、原図の不備から調査区上の位置が不明である。なお、これらの焼土堆積に伴う明確な出土遺物は皆無である。

(5)埋甕土坑(第175図)

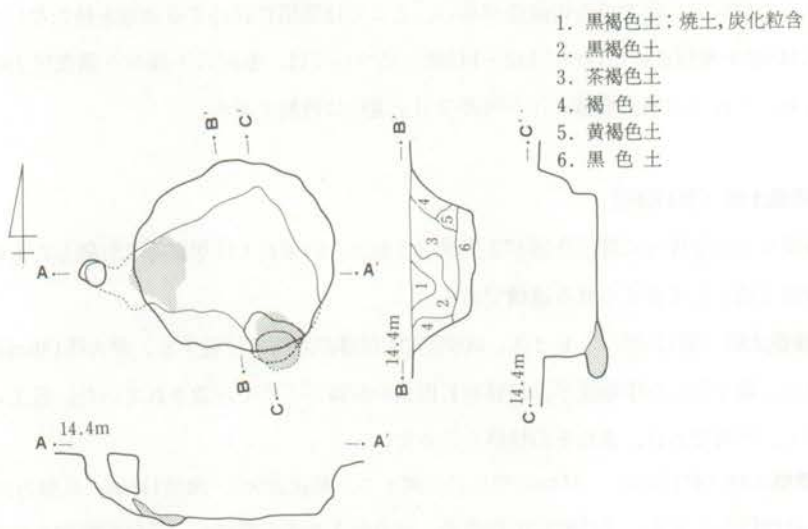
小規模な土坑を伴った埋設土器が2例検出された。いずれも住居跡等に付随したものではなく、所謂屋外埋甕土坑として捉えられる遺構である。

108埋甕土坑(第175図) E2区、006竪穴住居跡の北側に位置する。最大径130cmの不整形を呈し、ほぼ中央に破片化した中期後半、加曾利EⅢ式の深鉢が正位で埋設されていた。覆土の状態は、原図記載がなく、不明であり、またその性格も分らない。

151埋甕土坑(第175図) H19西寄りに位置する。長径205cm、短径118cm、長軸方向をN-63°-Wにとり、長楕円形を呈す。北西側に中期前半、阿玉台I a式の深鉢が、逆位で埋設されていた。今回報告の諸遺跡を通じて、阿玉台I a式期の遺構としては唯一のものである。(原田)



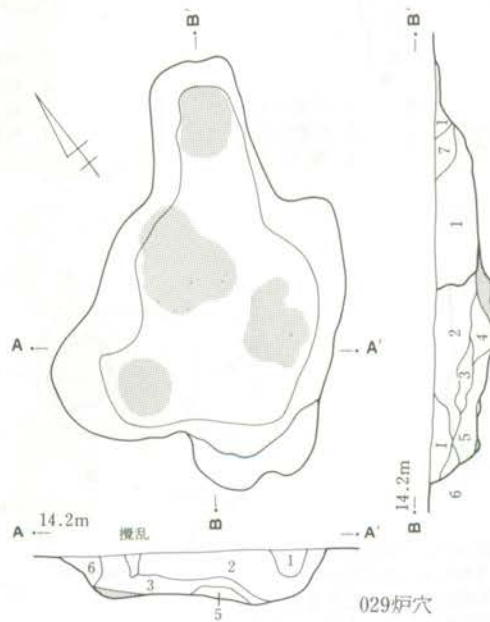
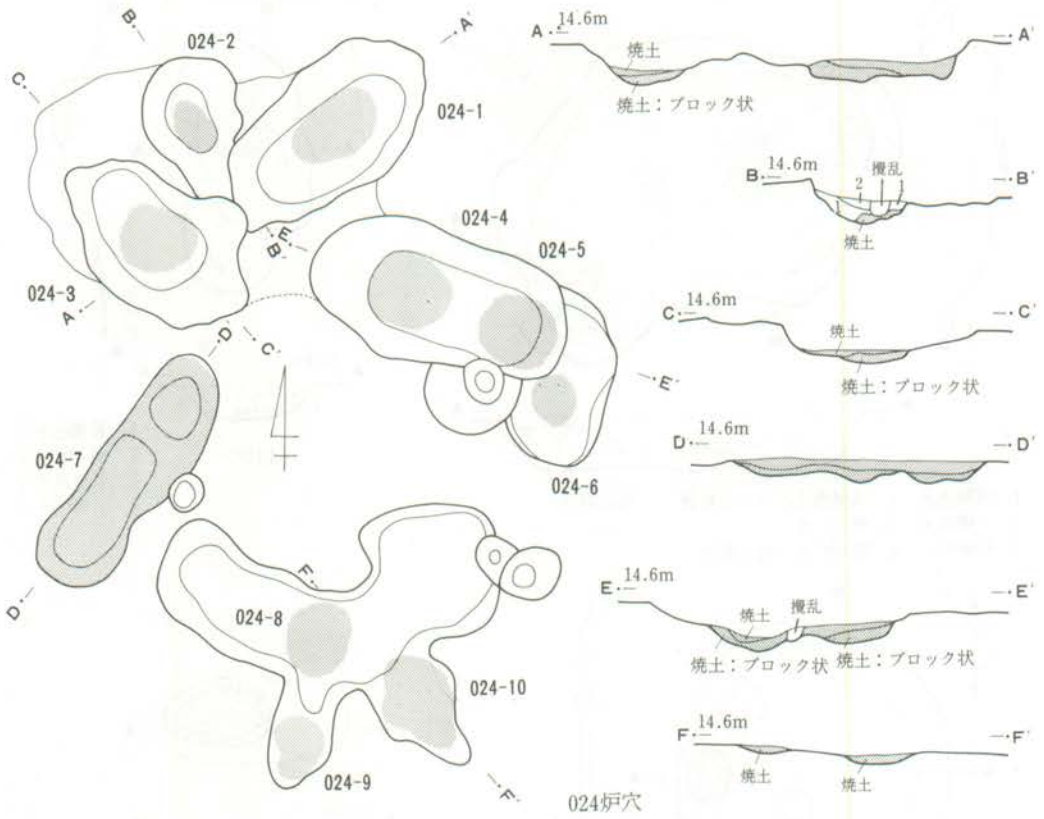
018 炉穴



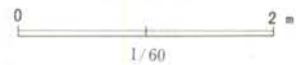
023 炉穴



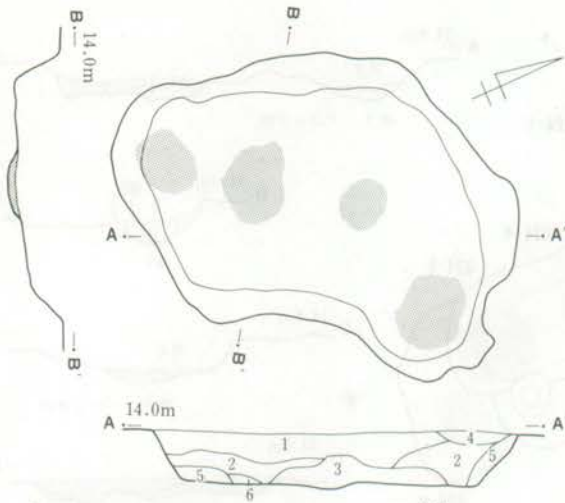
第153图 018·023炉穴



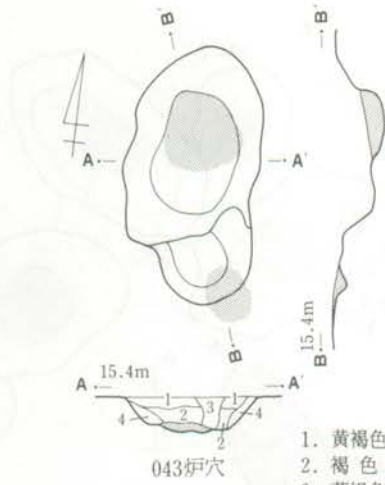
1. 黒褐色土
2. 褐色土
3. 茶褐色土
4. 黄褐色土
5. 暗褐色土：ローム粒含
6. 黄褐色土：ローム粒含
7. 褐色土：ローム粒含



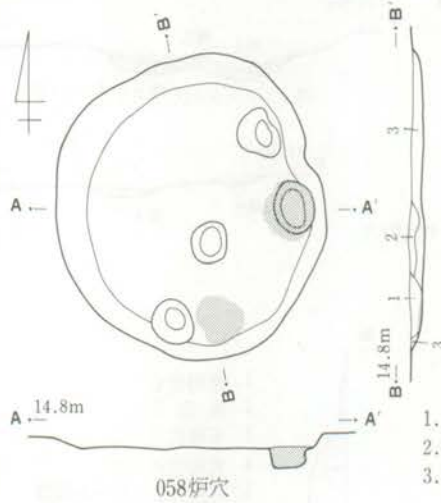
第154図 024・029炉穴



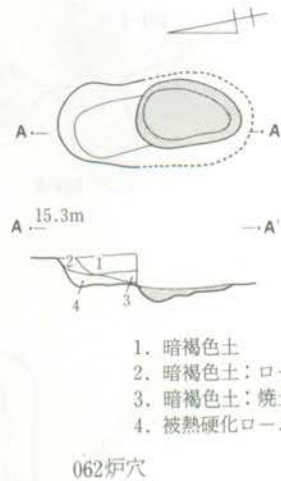
1. 暗褐色土 4. 茶褐色土：ローム粒含 032 炉穴
 2. 茶褐色土 5. 褐色土
 3. 明褐色土 6. 褐色土：焼土粒含



- 043 炉穴
 1. 黄褐色土
 2. 褐色土
 3. 茶褐色土
 4. 明褐色土



1. 茶褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 褐色土

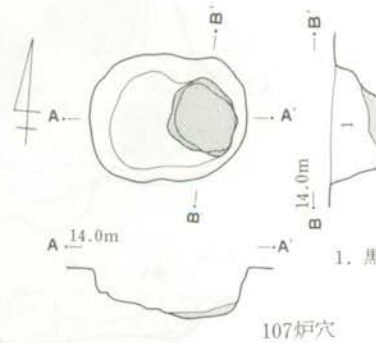


1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土：ローム粒含
 3. 暗褐色土：焼土粒含
 4. 被熟硬化ローム



103 炉穴

1. 黄褐色土：焼土粒含
 2. 黒褐色土：焼土粒含
 3. 黒褐色土：焼土粒多量含
 4. 黄褐色土：ロームブロック含
 5. 茶褐色土：焼土粒含

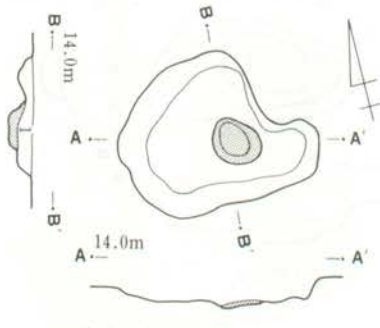


107 炉穴

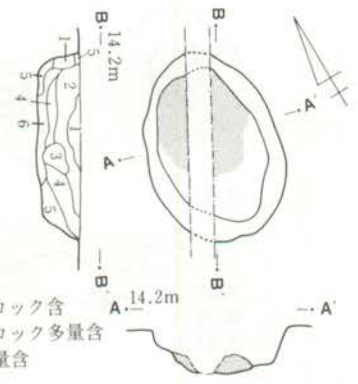
1. 黒褐色土



第155図 032・043・058・062・103・107炉穴

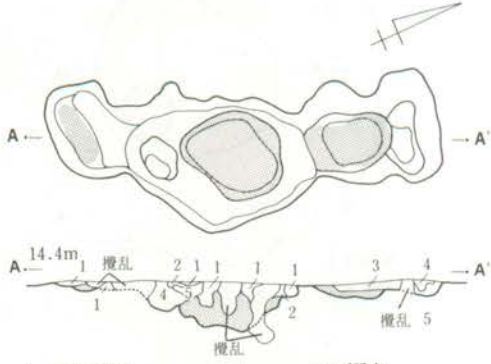


1. 黒褐色土 109 罎穴



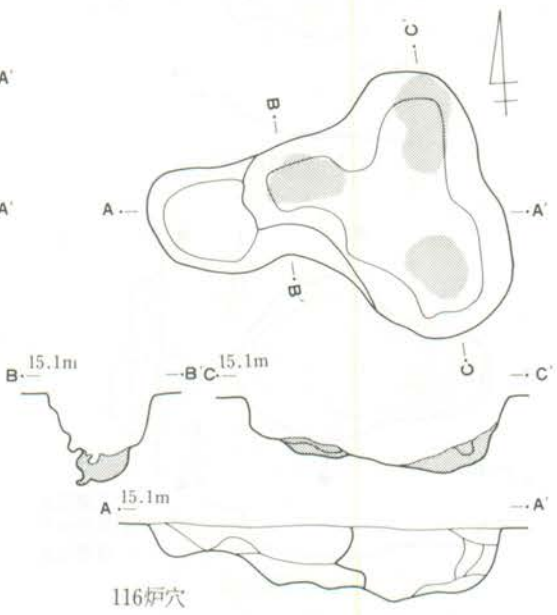
112 罎穴

1. 茶褐色土
2. 褐色土
3. 暗褐色土
4. 茶褐色土：ロームブロック含
5. 茶褐色土：ロームブロック多量含
6. 赤褐色土：焼土粒多量含

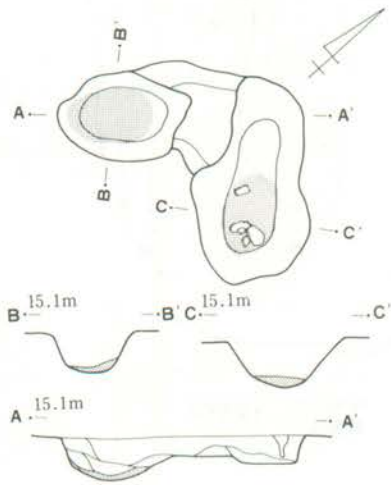


1. 黒褐色土
2. 褐色土：パミス粒多量含
3. 褐色土
4. 茶褐色土
5. 暗褐色土

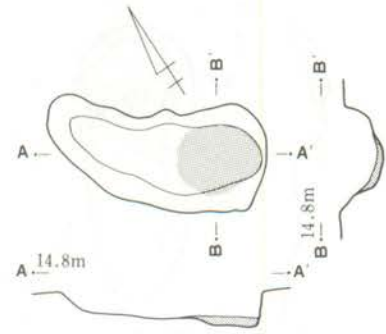
115 罎穴



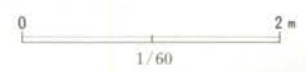
116 罎穴



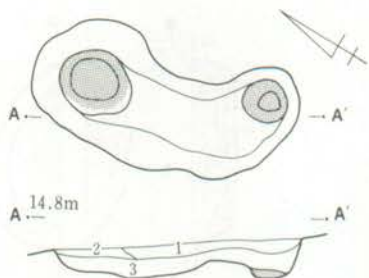
121 罎穴



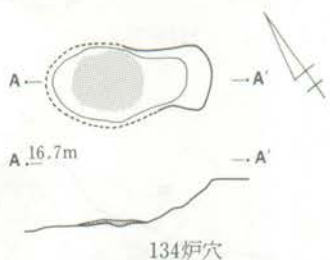
125 罎穴



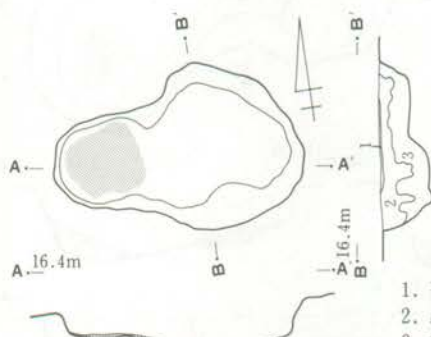
第156図 109・112・115・116・121・125 罎穴



1. 黑褐色土
2. 褐色土
3. 茶褐色土
- 126 炉穴

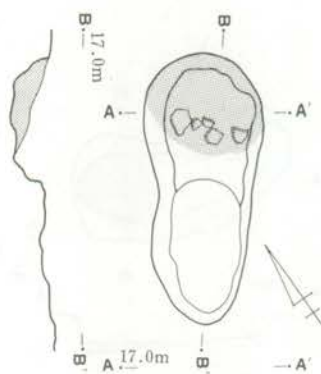


134 炉穴

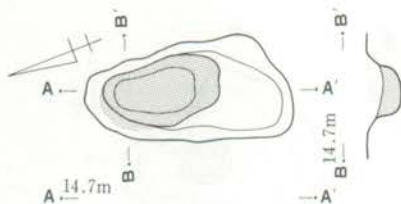


1. 茶褐色土
2. 黑褐色土
3. 黄褐色土

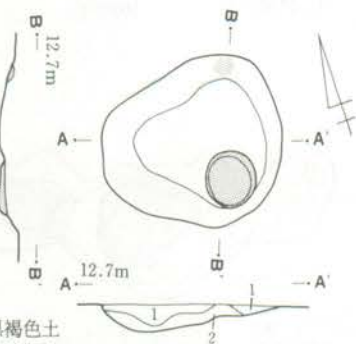
135 炉穴



140 炉穴



127 炉穴



1. 黑褐色土
2. 黄褐色土

128 炉穴

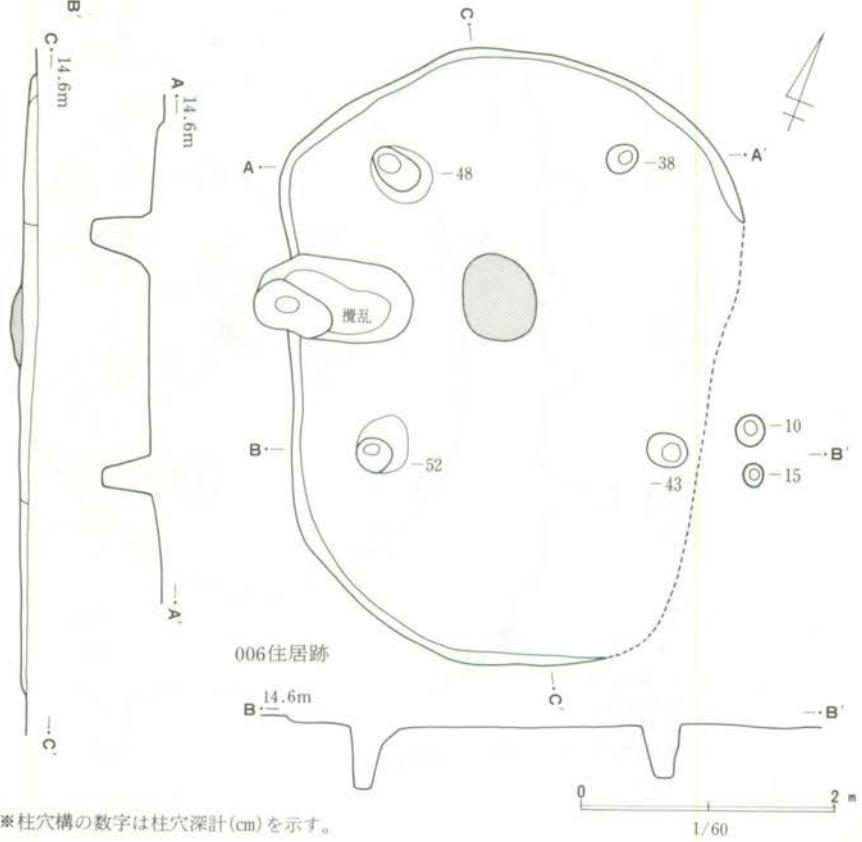
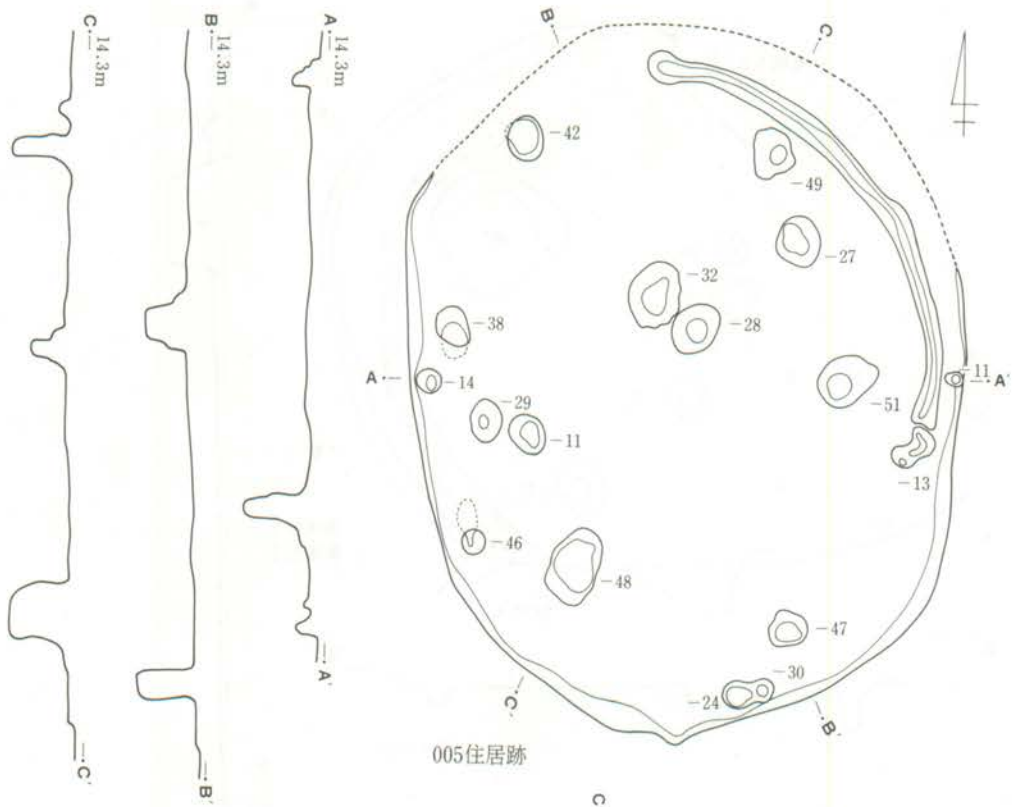


1. 暗褐色土
2. 茶褐色土

136 炉穴

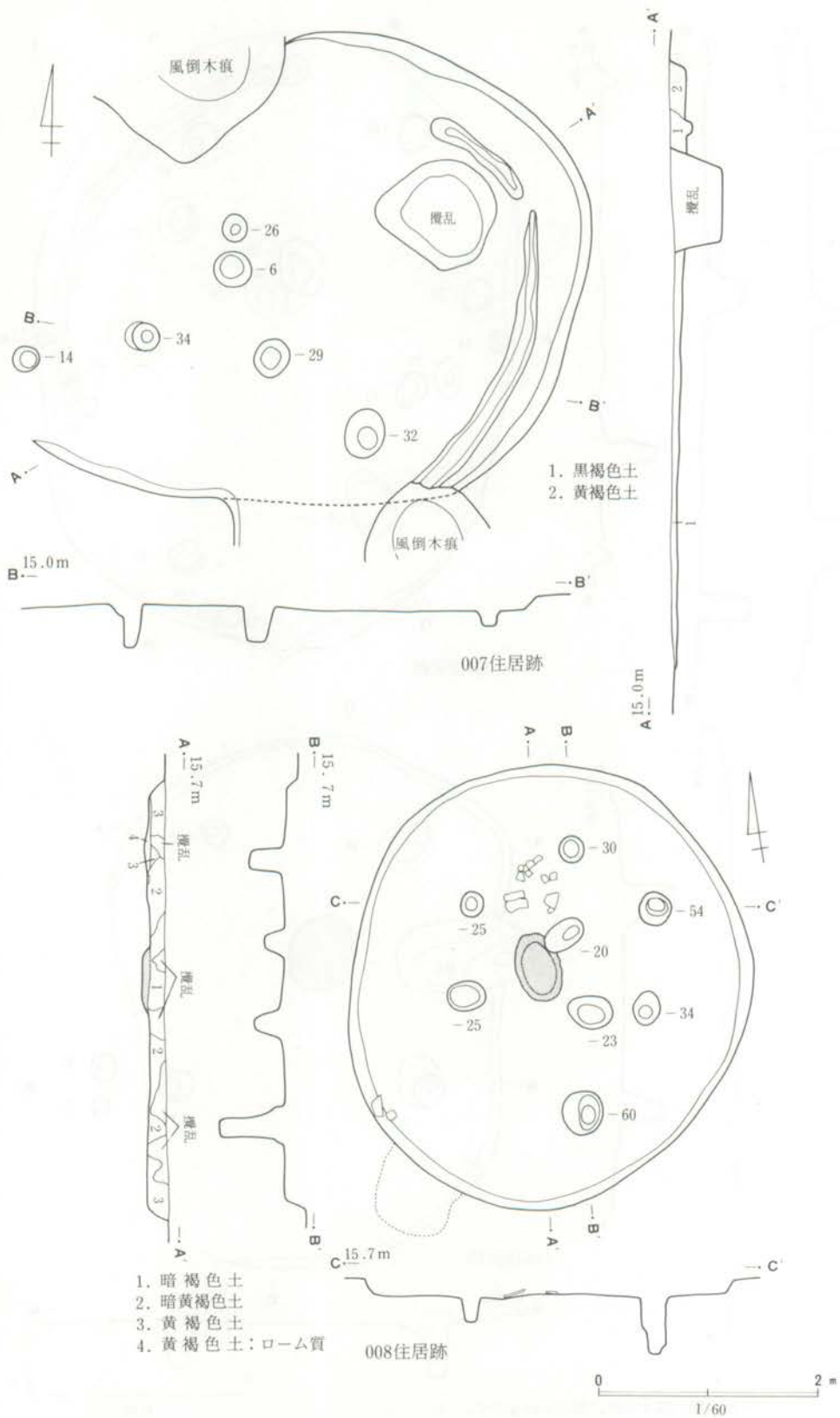


第157图 126~128·134~136·140炉穴

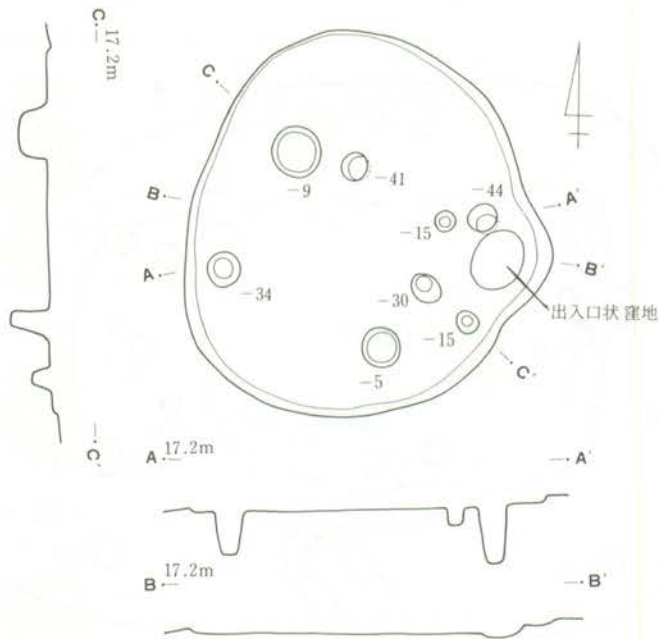


※柱穴構の数字は柱穴深計(cm)を示す。

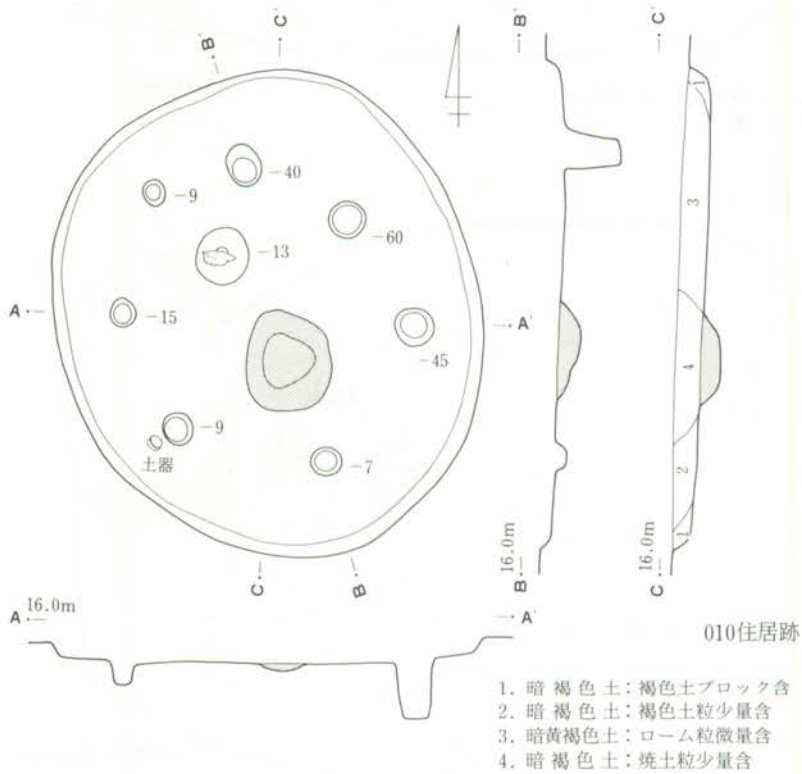
第158図 005・006住居跡



第159図 007・008住居跡



009住居跡

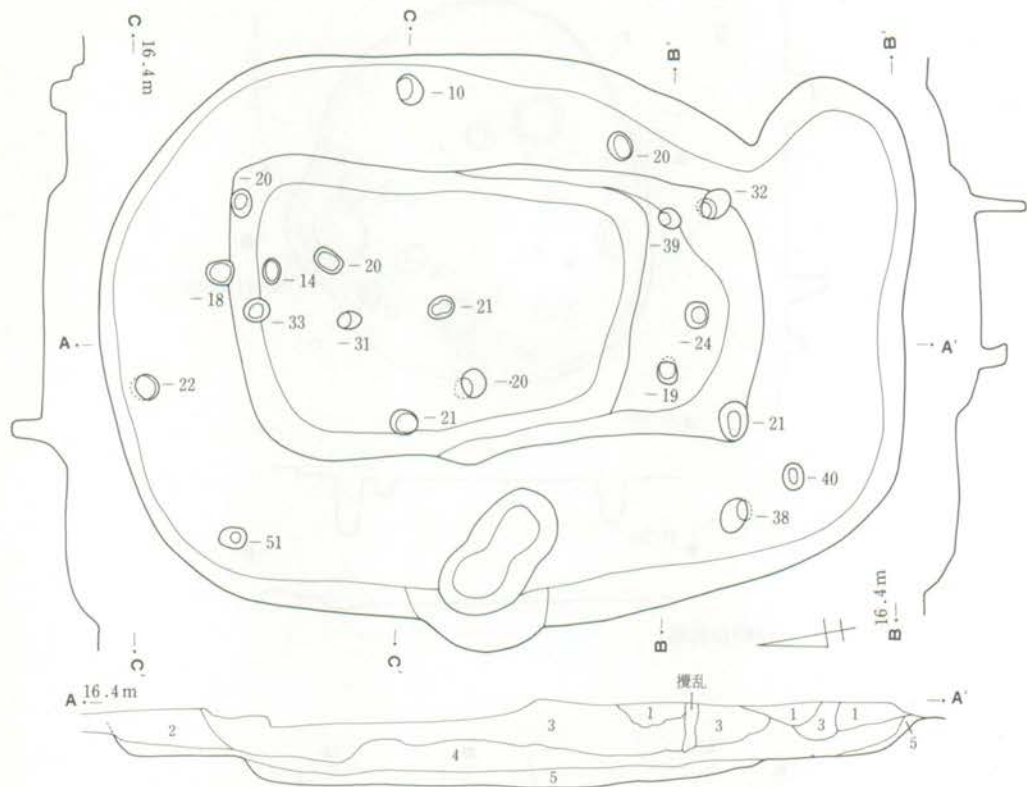


010住居跡

1. 暗褐色土：褐色土ブロック含
2. 暗褐色土：褐色土粒少量含
3. 暗黄褐色土：ローム粒微量含
4. 暗褐色土：焼土粒少量含

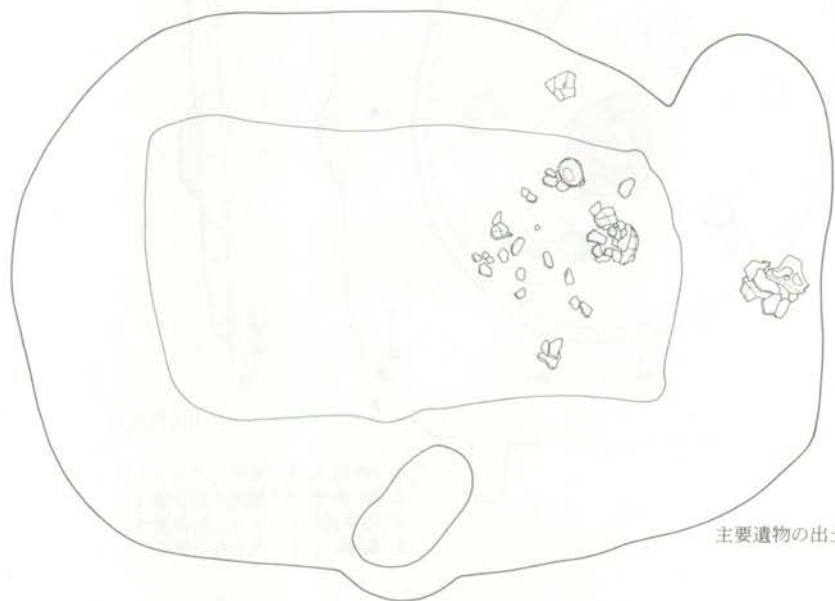


第160図 009・010住居跡



012住居跡

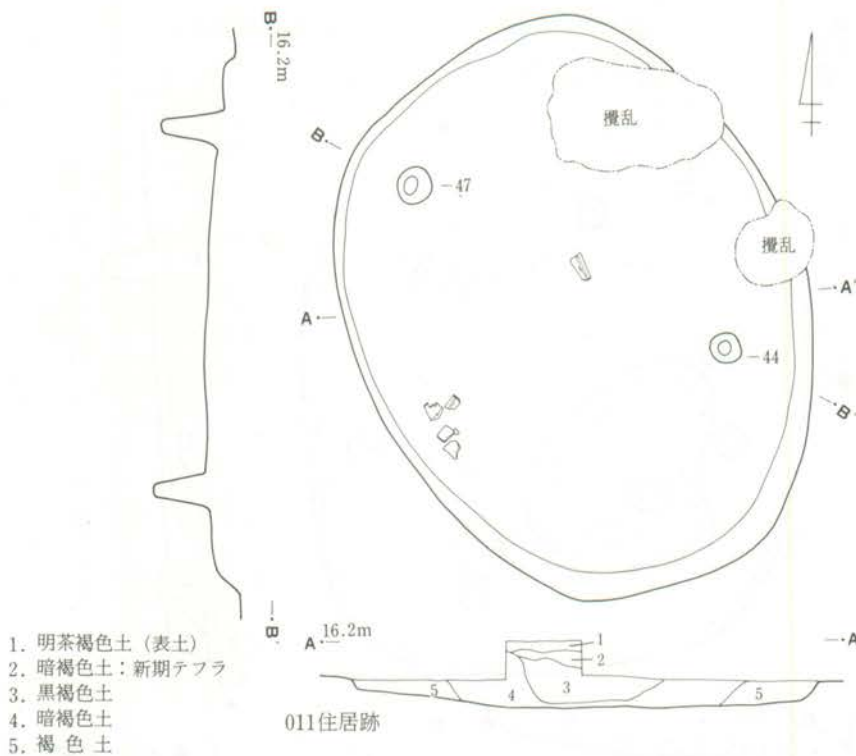
- 1. 明褐色土 3. 黒褐色土 5. 黒色土
- 2. 暗褐色土 4. 褐色土



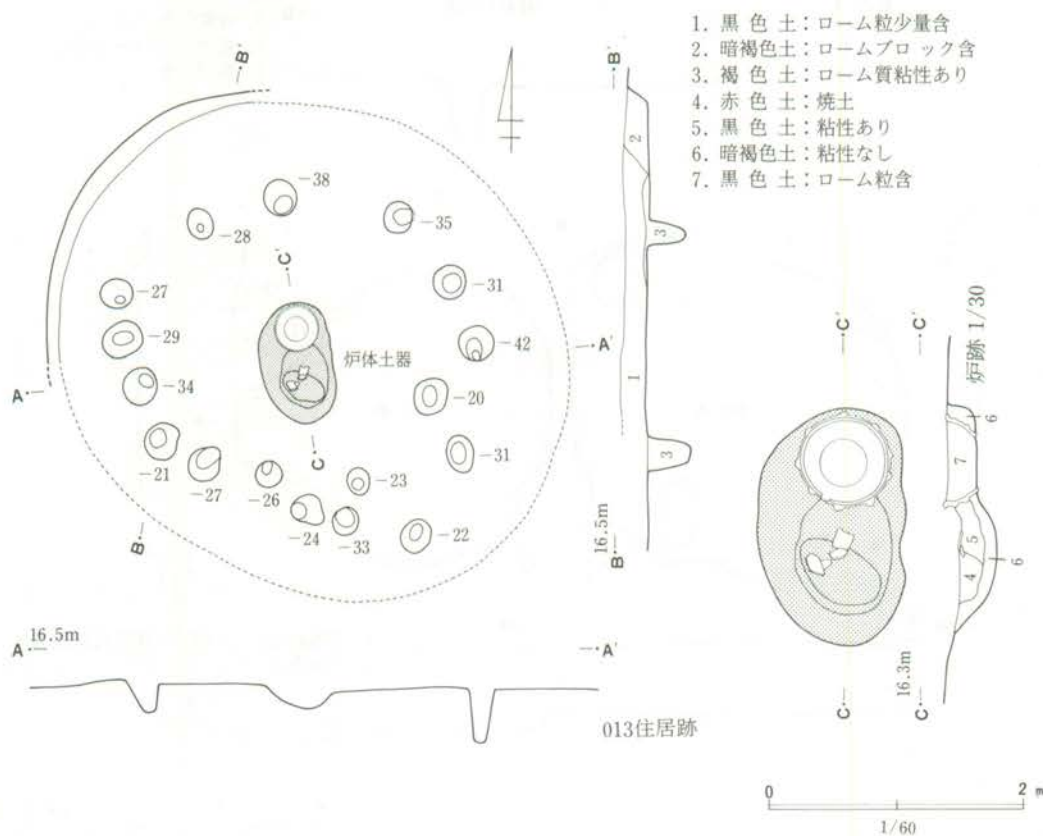
主要遺物の出土状況



第161図 012住居跡

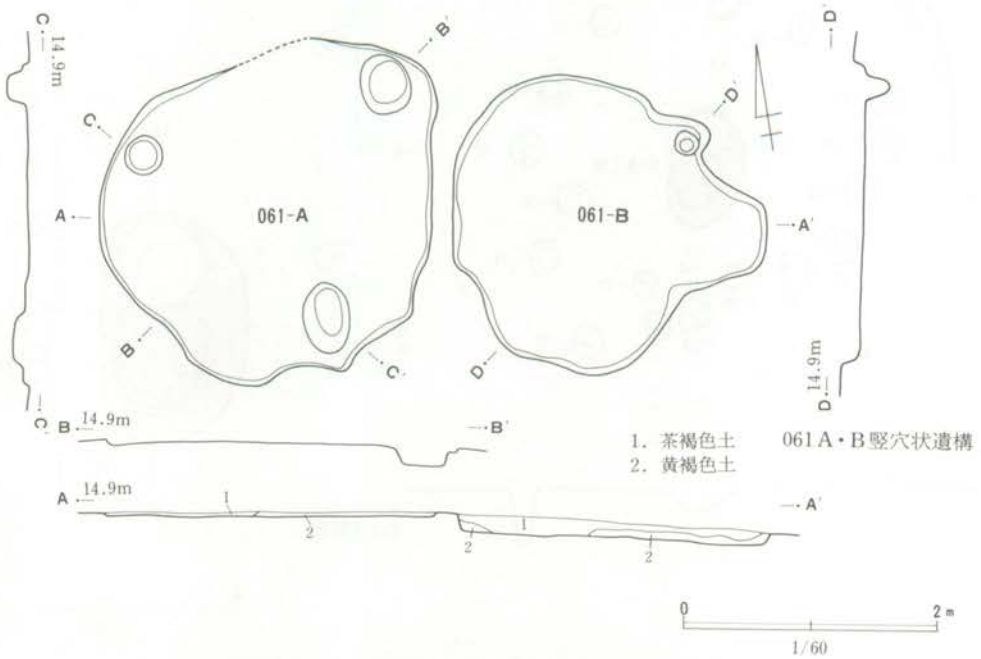
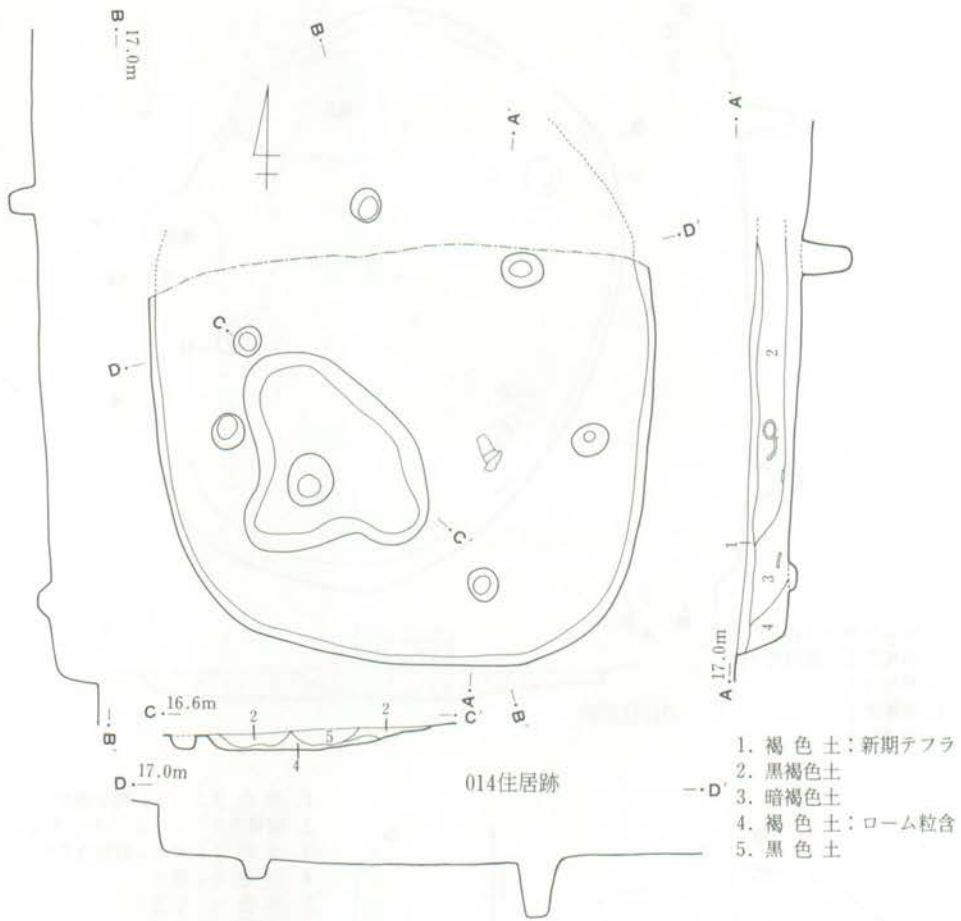


1. 明茶褐色土 (表土)
2. 暗褐色土: 新期テフラ
3. 黒褐色土
4. 暗褐色土
5. 褐色土

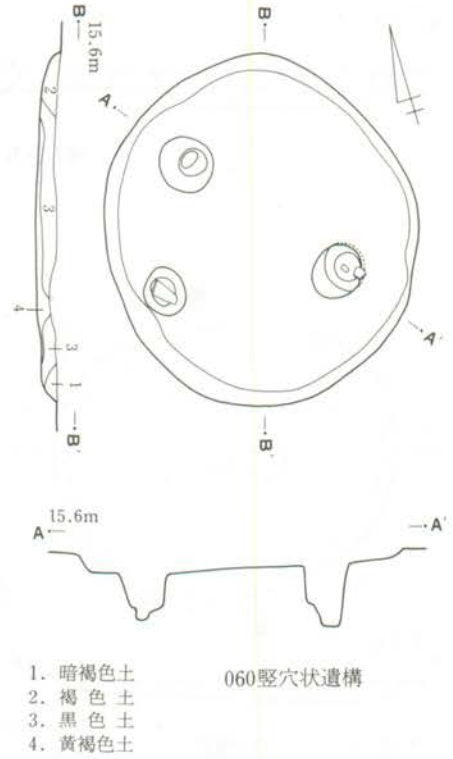
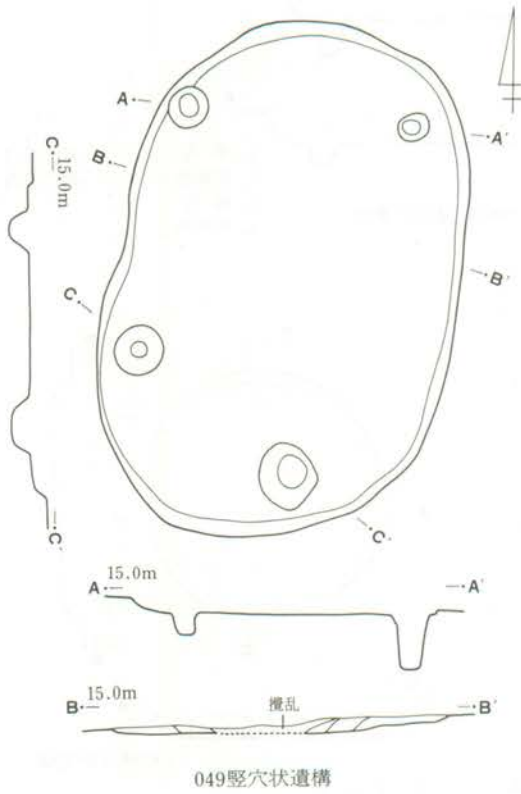
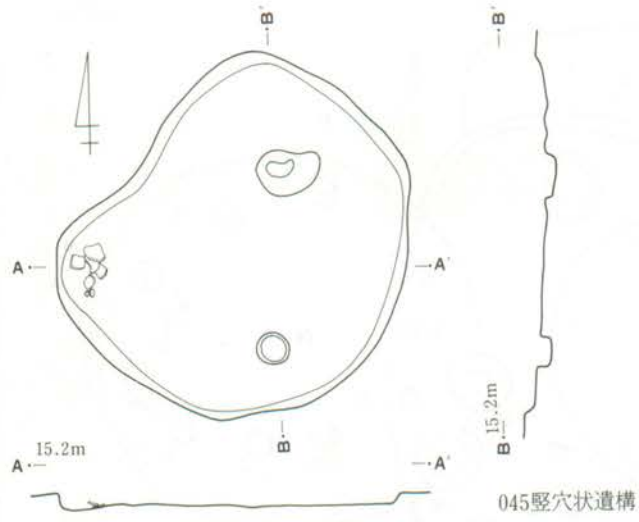


1. 黒色土: ローム粒少量含
2. 暗褐色土: ロームブロック含
3. 褐色土: ローム質粘性あり
4. 赤色土: 焼土
5. 黒色土: 粘性あり
6. 暗褐色土: 粘性なし
7. 黒色土: ローム粒含

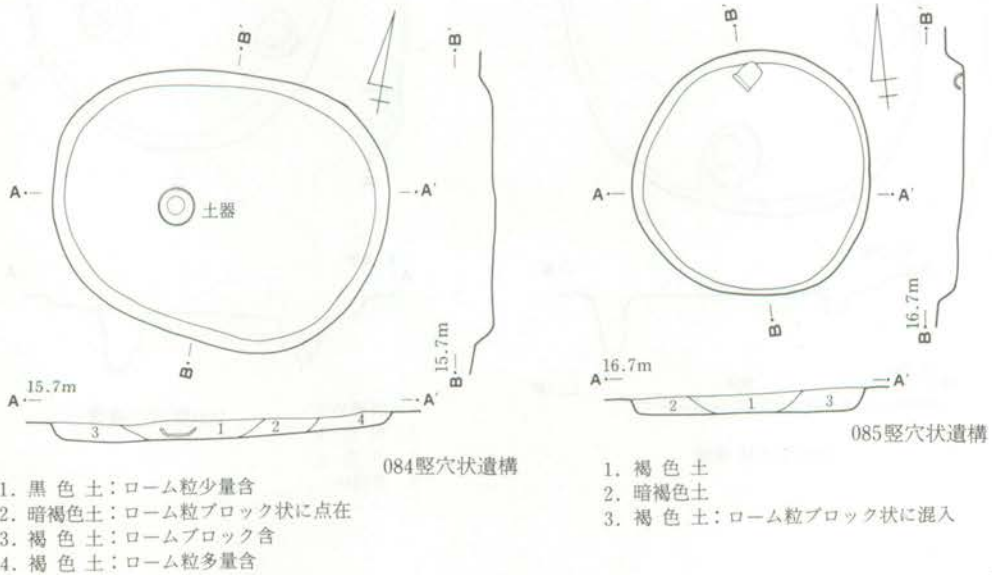
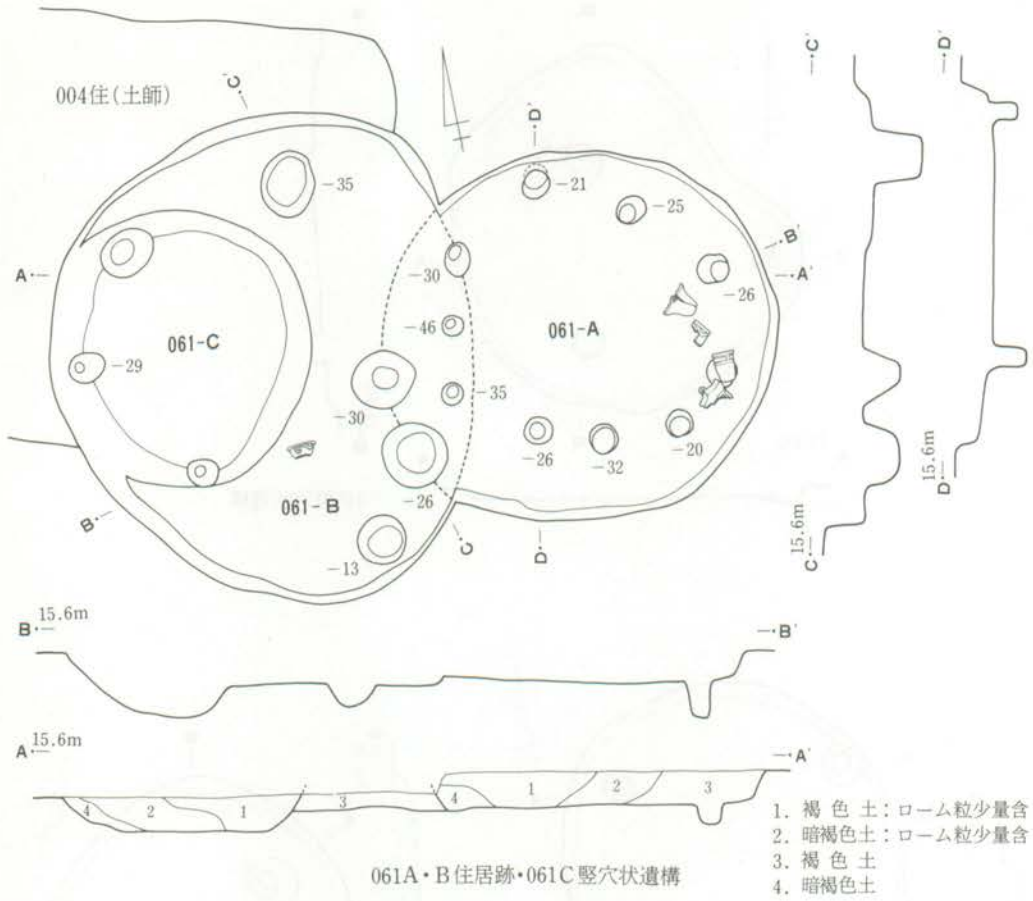
第162図 011・013住居跡



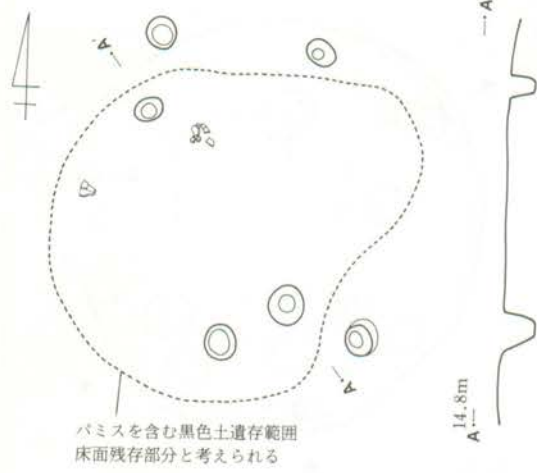
第163図 014住居跡・061A・B 竖穴状遺構



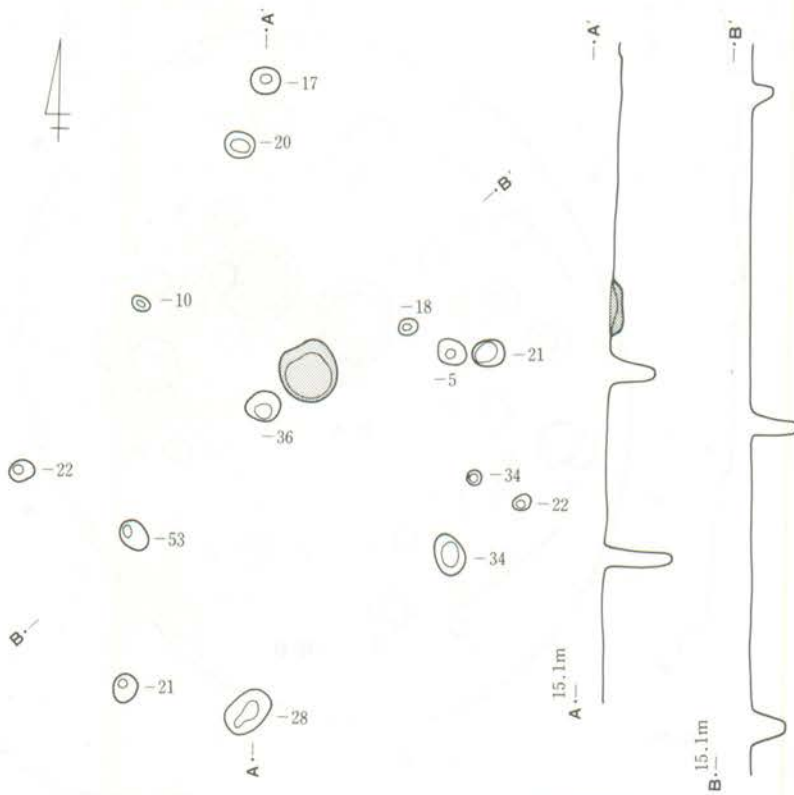
第164图 045·049·060竖穴状遺構



第165図 061A・B住居跡, 061C・084・085竪穴状遺構



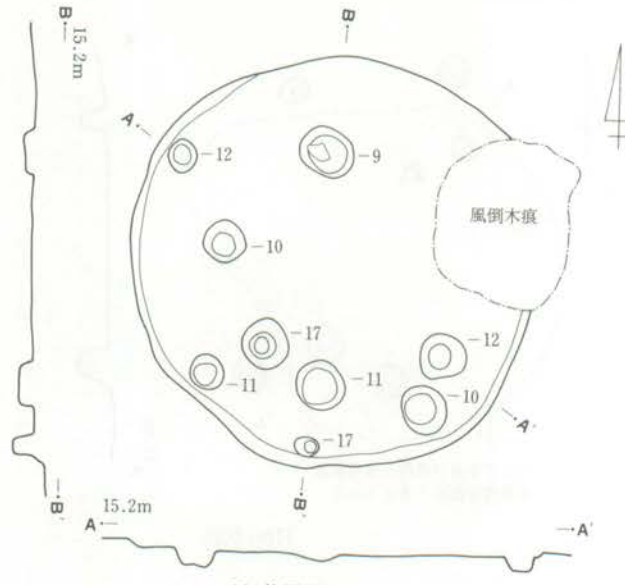
110住居跡



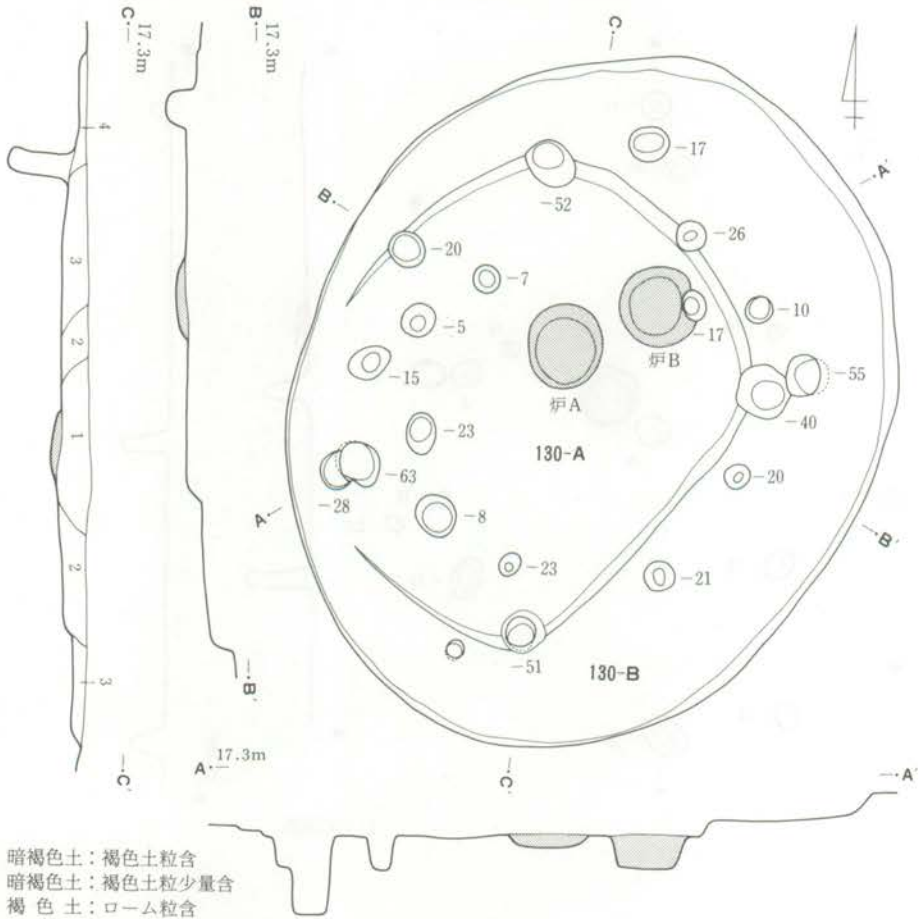
114住居跡



第166図 110・114住居跡



124住居跡

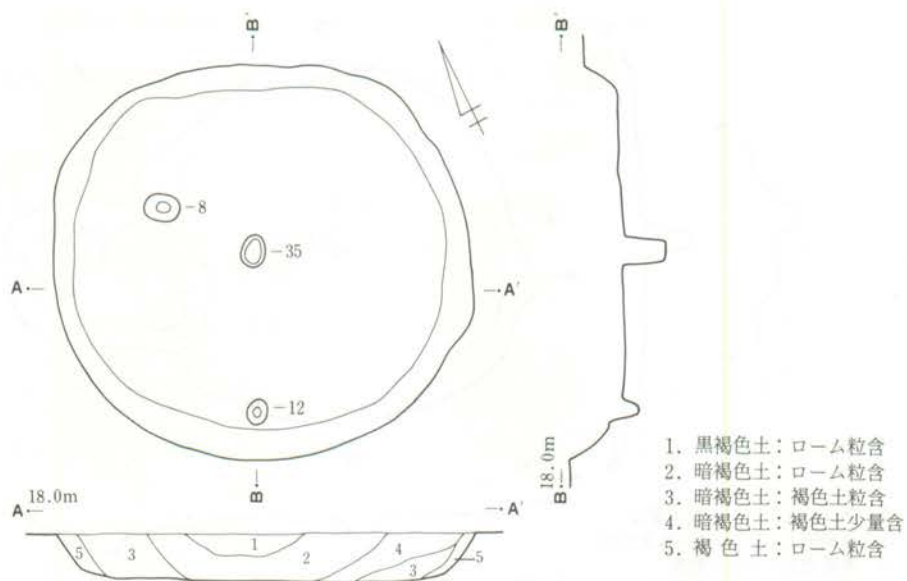


130 A・B住居跡

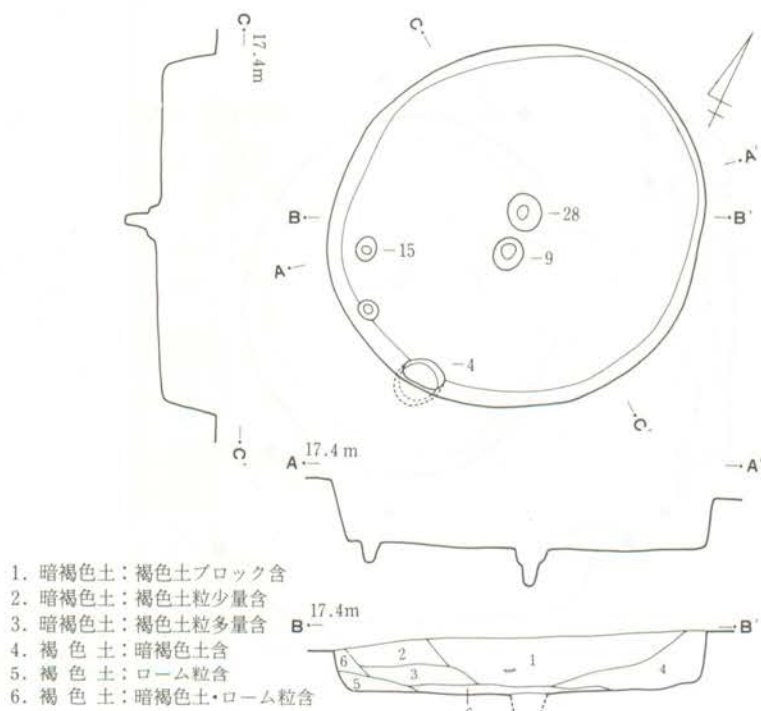
1. 暗褐色土：褐色土粒含
2. 暗褐色土：褐色土粒少量含
3. 褐色土：ローム粒含
4. 褐色土：ロームブロック含



第167図 124・130 A・B住居跡



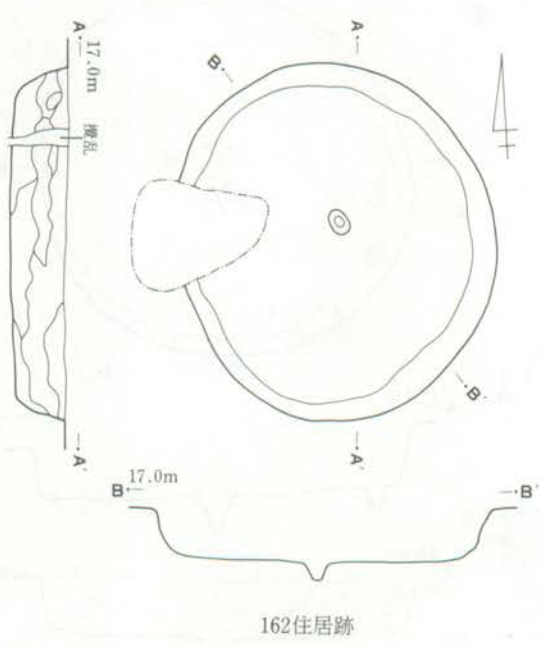
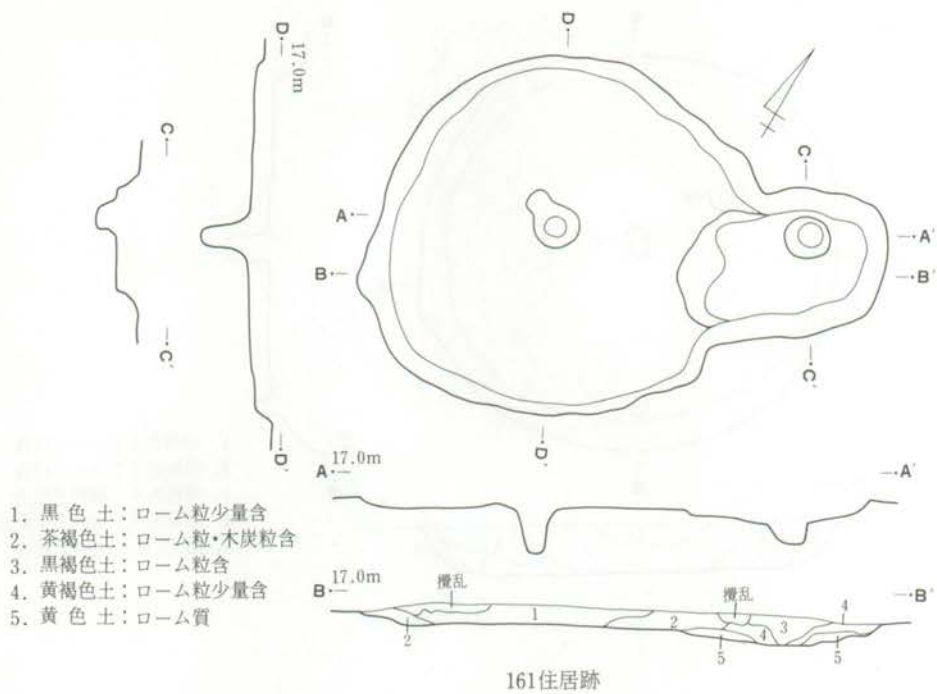
144住居跡



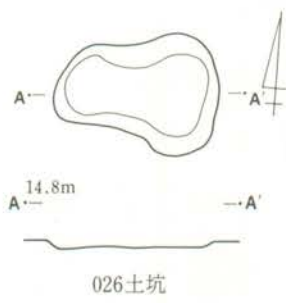
150住居跡



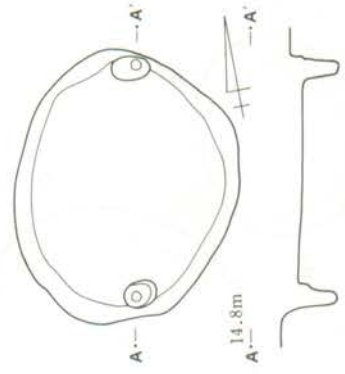
第168図 144・150住居跡



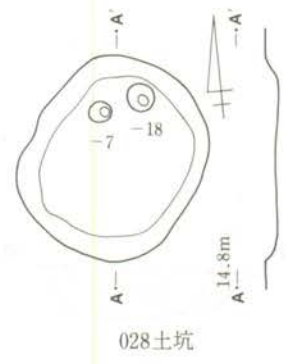
第169図 161・162住居跡



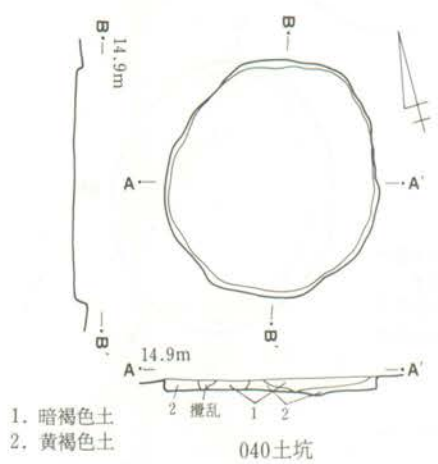
026土坑



027土坑

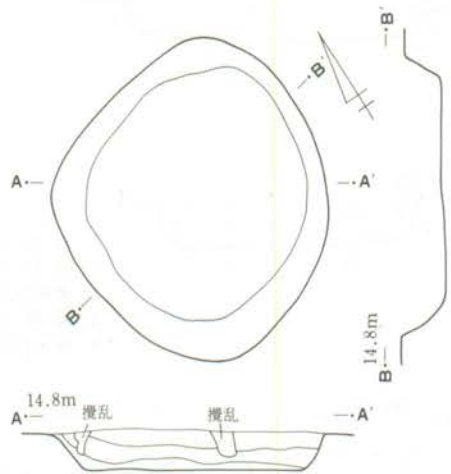


028土坑

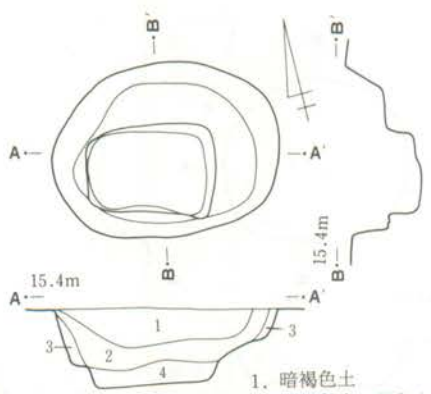


- 1. 暗褐色土
- 2. 黄褐色土

040土坑

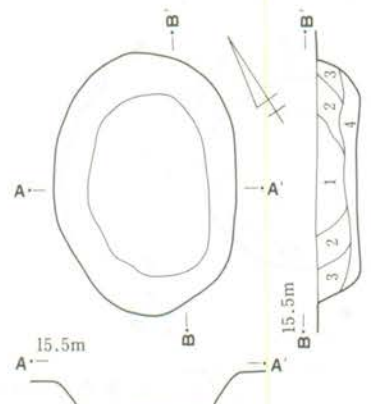


042土坑



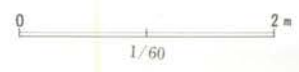
- 1. 暗褐色土
- 2. 暗褐色土：褐色土粒含
- 3. 黄褐色土：ロームブロック含
- 4. 暗褐色土：スコリア粒少量含

056土坑

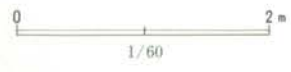
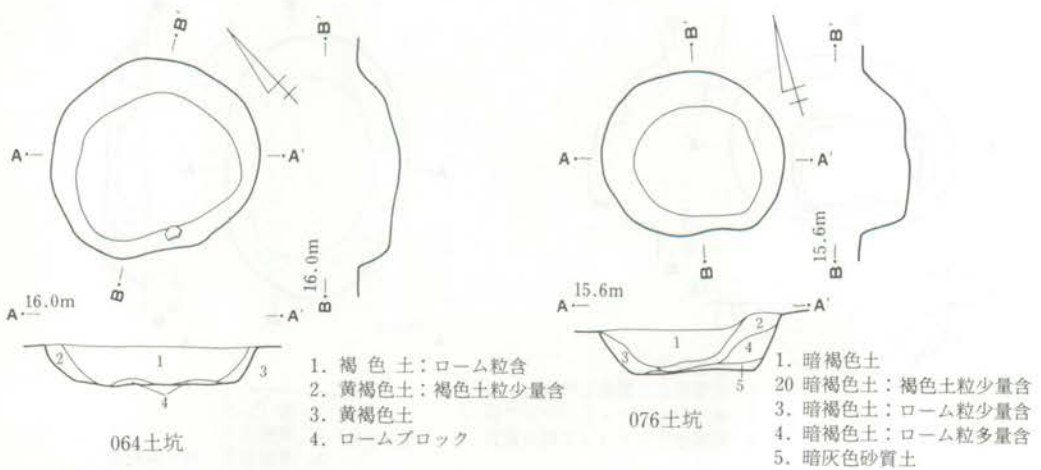
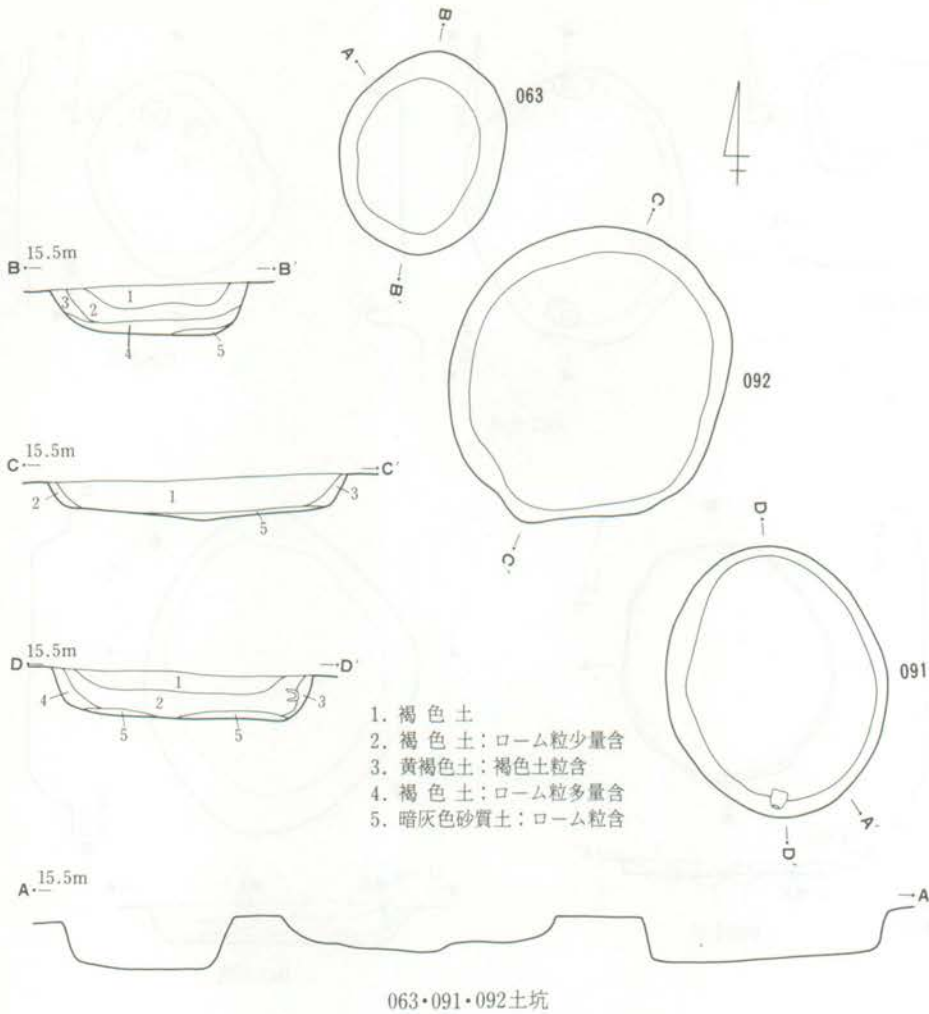


- 1. 褐色土
- 2. 黄褐色土
- 3. 黄褐色土：ローム粒含
- 4. 黄褐色土：ロームブロック含

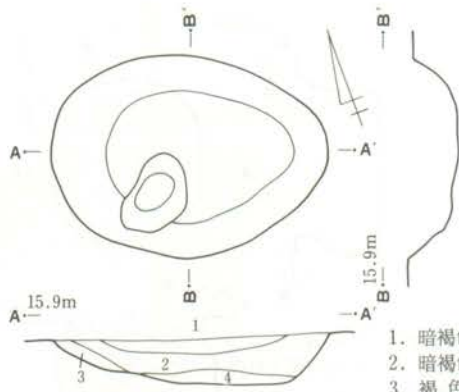
059土坑



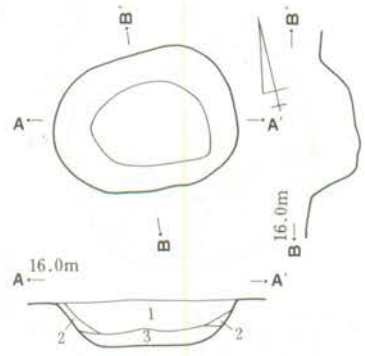
第170図 026~028・040・042・056・059土坑



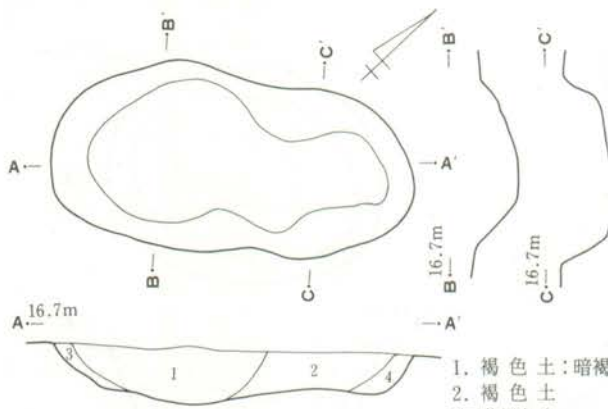
第171図 063・064・076・091・092土坑



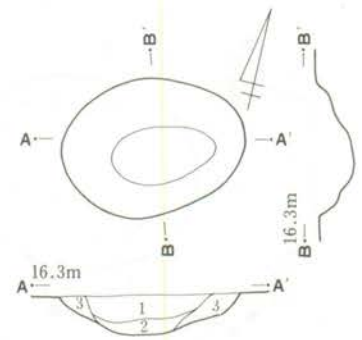
077土坑



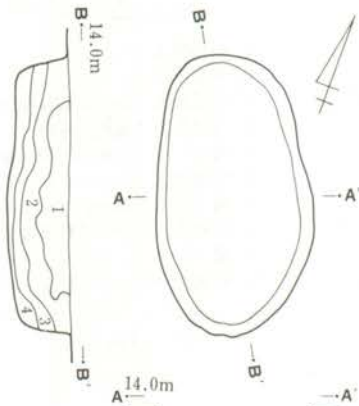
079土坑



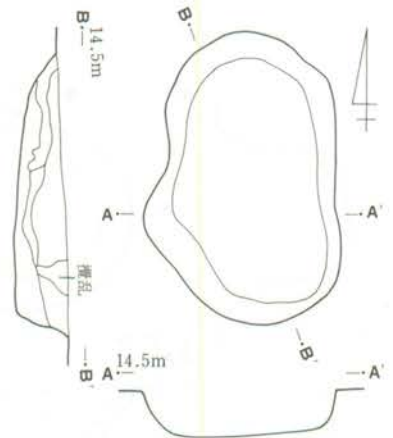
086土坑



093土坑



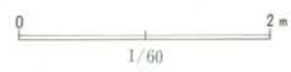
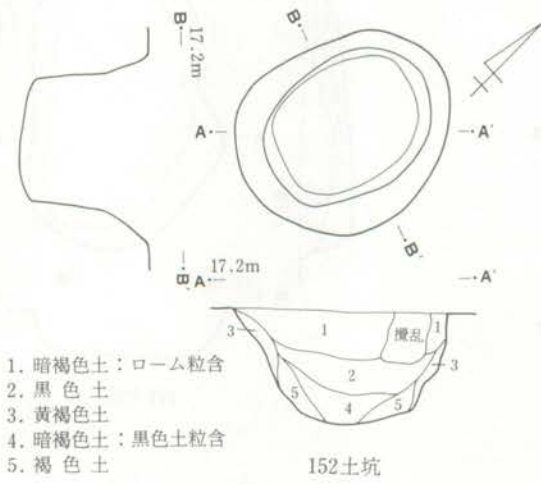
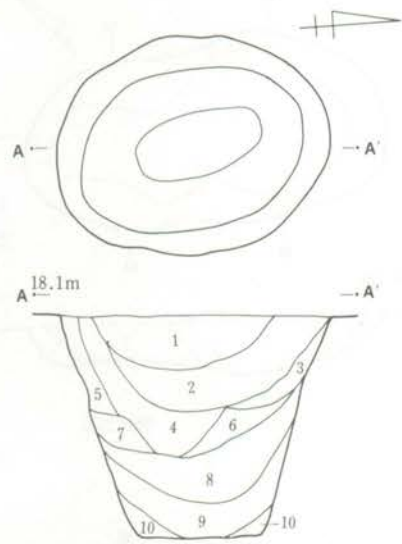
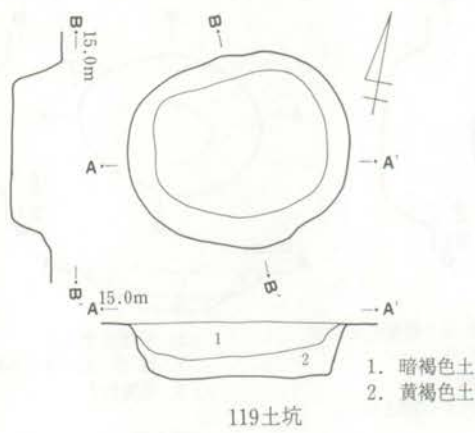
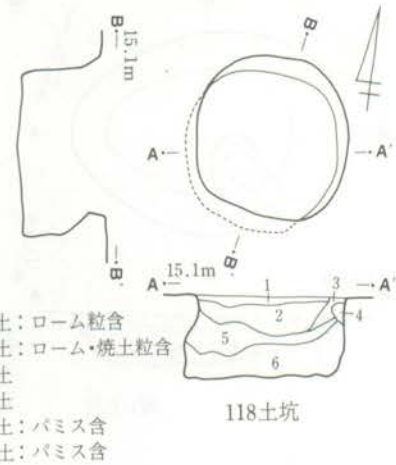
104土坑



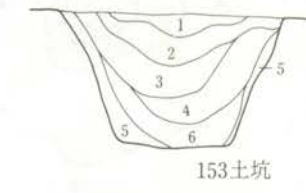
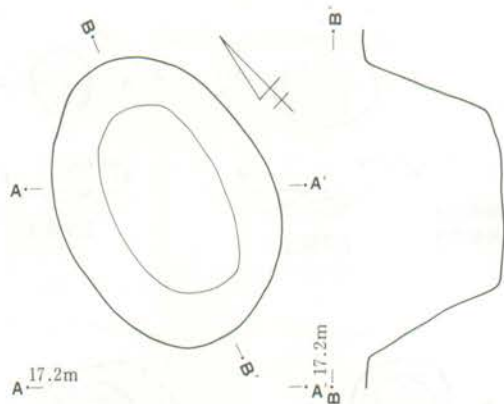
111土坑



第172図 077・079・086・093・104・111土坑

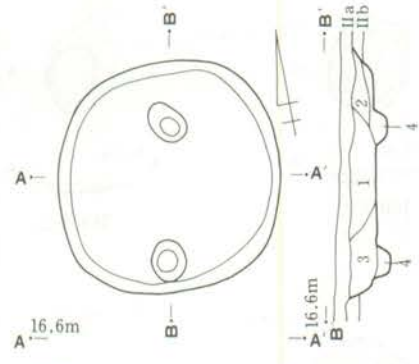


第173図 113・118・119・145・152土坑



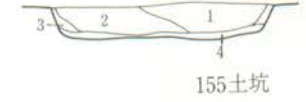
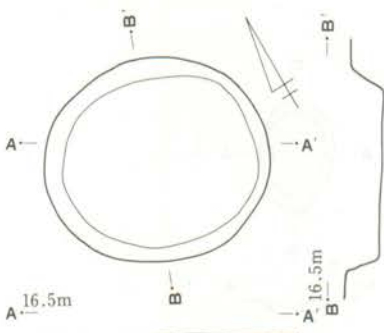
1. 暗褐色土：ローム粒含
2. 黒色土：ローム粒含
3. 暗褐色土：ローム粒多量含
4. 暗褐色土：褐色土粒含
5. 黄褐色土：ローム粒含
6. 褐色土

153土坑



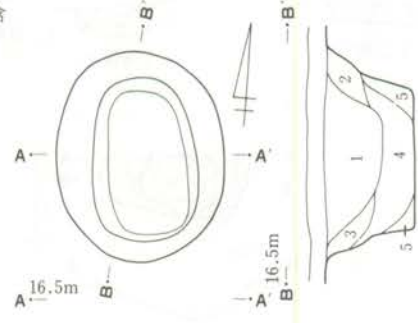
- II a : 新期テフラ 2. 黒褐色土：ローム粒含
 II b : 黒褐色土層 3. 黒褐色土
 1. 黒褐色土：ロー 4. 明褐色土

154土坑



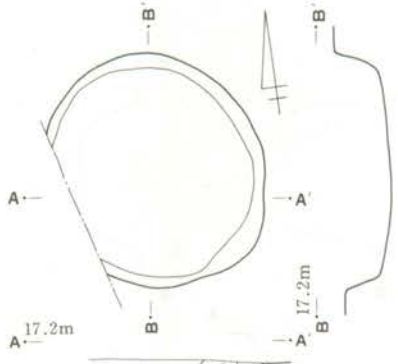
1. 黒色土：ローム粒含
2. 黒褐色土：ローム粒多量含
3. 暗褐色土：ローム粒少量含
4. 褐色土：ローム粒多量含

155土坑



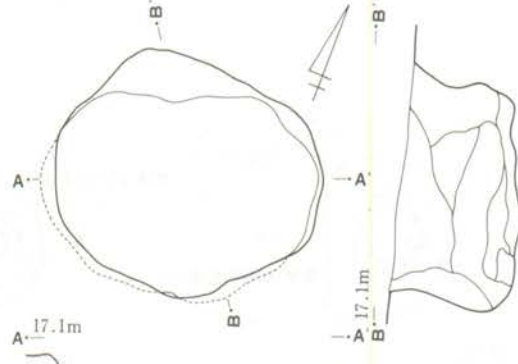
- II c : 黒色土
 1. 黒色土：ロームブロック含
 2. 褐色土：粘性あり
 3. 褐色土：黒色土粒多量含
 4. 黒褐色土：ローム粒多量含
 5. 暗褐色土：ローム質

156土坑

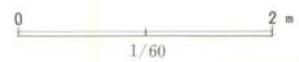


1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 赤褐色土：焼土粒含
4. 黄褐色土：ソフトローム粒含
5. 暗黄褐色土

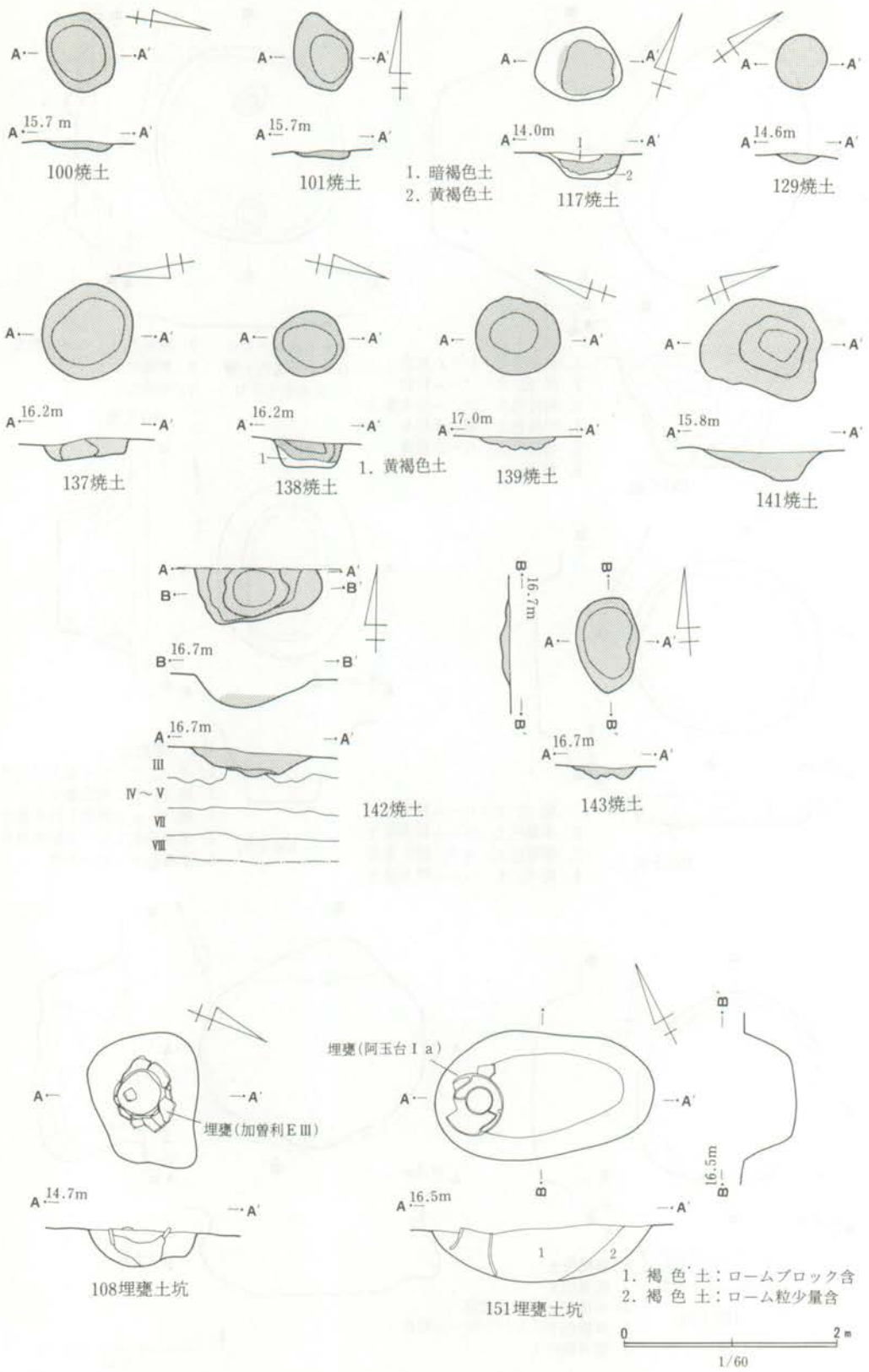
163土坑



164土坑



第174図 153~156・163・164土坑



第175図 100・101・117・129・137～139・141～143焼土, 108・151埋壘土坑

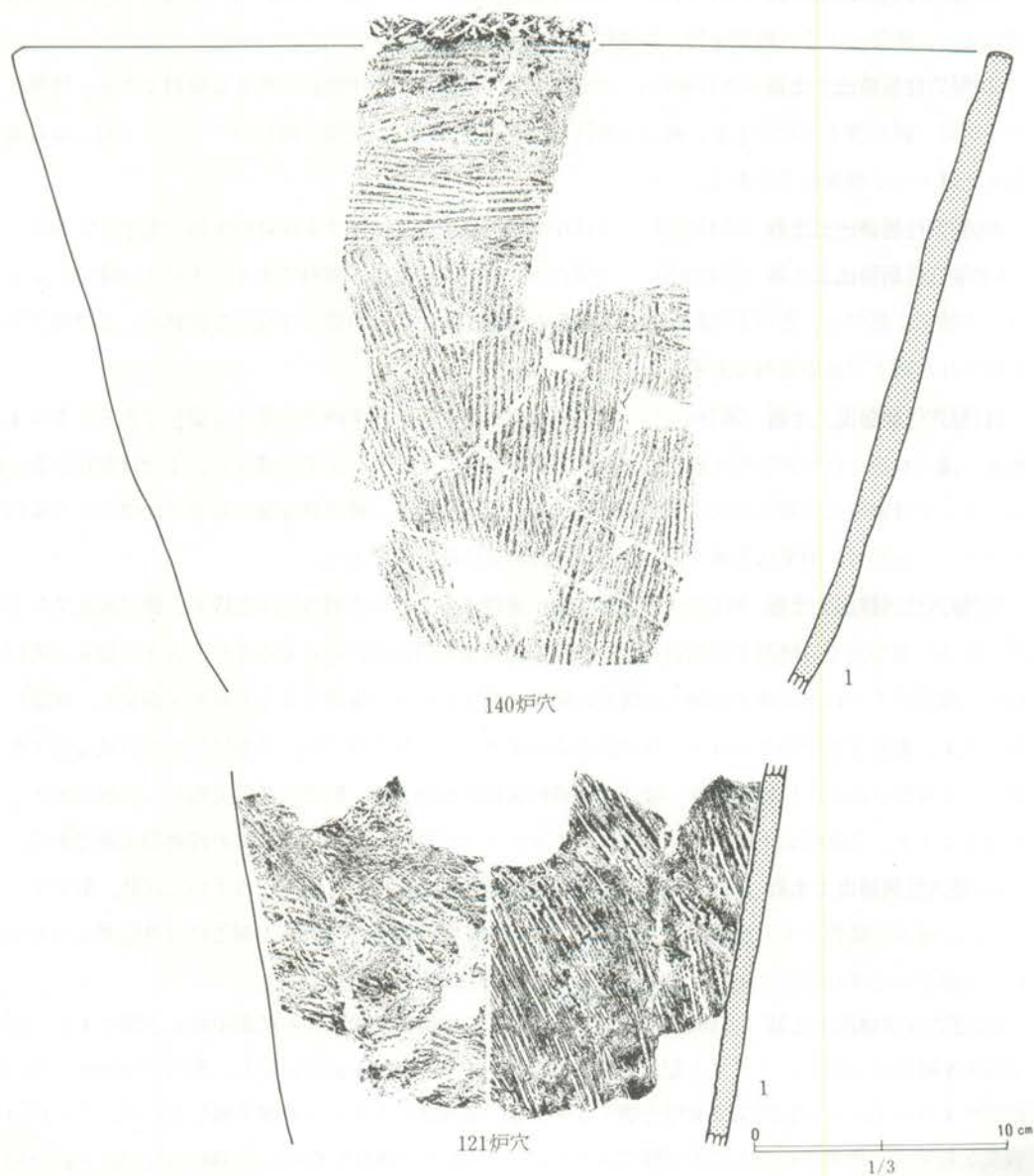
B. 出土遺物：土器

(1) 炉穴出土土器 (第176図)

聖人塚遺跡からは23基の炉穴が検出されているが、その覆土内から出土した遺物は少ない。しかも出土土器の大半は小片で、図示し得た資料は、2遺構出土のものに限られる。なお、各遺構毎の遺物出土数、内容は、前項の遺構報告中に記載した。

140炉穴出土土器 1は、口縁が直線状に外反する深鉢で、口唇部付近に横位の、胴部以下に縦位の条痕文が施される。口唇上面には格子目状の刻みを持ち、内面は無文。

121炉穴出土土器 2は、内外面に斜方向の条痕文が施された胴部片である。140炉穴出土土器とともに、早期後半、条痕文系土器でも茅山下層式前後の資料であろうか。



第176図 炉穴出土土器

(2) 竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土器 (第177~191図=図版52~59)

005竪穴住居跡出土土器 (第177・178図) いずれも中期勝坂式末葉から所謂中峠式に属する資料であるが、阿玉台式の要素を強く残すものを含む。ミミズク状把手を持ち、竹管状工具による波状文を描く1、口唇が厚く外反し、縄文地の上に隆帯を貼付する2、細い隆帯により口縁部文様体を区画し、内部にクランク状文を充填する3がある。また4は、断面半円状の太い隆帯と曲線状モチーフを施した、阿玉台IV式に近似する土器である。

006竪穴住居跡出土土器 (第178図) 中期中葉、阿玉台II式土器に属する1と、勝坂式末葉に属する2がある。前者は断面三角形の低隆帯及び結節沈線分が施された、胴部が張る深鉢、後者は頸部がくびれ、口縁部に横S字状隆帯を、胴部に三叉文を施す土器である。両者は型式的に、若干の隔りを持つ。

007竪穴住居跡出土土器 (第179図) 中期勝坂式末葉から、所謂中峠式に属する資料である。無文の浅鉢1と、隆帯による入組文を施した破片2がある。

008竪穴住居跡出土土器 (第179図) 中期勝坂式末葉から所謂中峠式に属する資料である。隆帯状モチーフの一部が残る底部片1と、縦の文様区画を隆帯で表現し、間隙に横位のペン先状工具による刺突文を充填する小型深鉢2がある。

009竪穴住居跡出土土器 (第179図) 1は中期の所謂中峠式に属する深鉢形土器の把手片である。

010竪穴住居跡出土土器 (第179図) 中期の所謂中峠式に属する資料である。1は太い隆帯によるクランク状文を貼付し、その上に縄文及び沈線文を加飾する。口縁が強く外反した深鉢片。2は縄文のみが施された胴下半部の資料である。

011竪穴住居跡出土土器 (第180図) 中期勝坂式末葉から所謂中峠式に属する資料である。1~4は地文に縄文が施された深鉢形土器で、口縁部に厚い隆帯がめぐり、1では縄文が、4では刻目が施される。5・7は勝坂式土器の系統を引く橋状把手片。6は口縁部に蕨手状隆帯、胴部に沈線文による渦巻状モチーフを持ち、地文は条線で飾る深鉢、8は無文の底部片である。

012竪穴住居跡出土土器 (第180~183図) 出土遺物はいずれも中期の阿玉台IV式、勝坂式末葉から所謂中峠式土器である。隆帯上に刻目を持つ楕円形区画文を口縁部に巡らせる1や、大きく扇状の突起を持ち、頸部がくびれた深鉢4は阿玉台IV式の範疇に属するもの。隆帯による三角形区画文と、沈線による三叉文、刻目文を充填する5・7等は勝坂式のモチーフを強く残すが、大半は所謂中峠式に属するものとして理解される。口縁部に厚い隆帯で曲線の装飾文が施され、胴部に連弧文類似の弧線状モチーフが巡る6・8、人面様の把手が付く9等、バラエティーに富む。13・14は無文の浅鉢形土器である。

013竪穴住居跡出土土器 (第184図) 1は住居跡の炉体土器として転用されていた深鉢。胴下半を欠くが、口縁部に隆帯による楕円区画文を描き、その上を細かな刻目で飾る。胴部には単節縄文が充填され、沈線による幾何学的モチーフが描かれる。中期の所謂中峠式土器である。

014竪穴住居跡出土土器 (第185・186図) いずれも中期勝坂式末葉から所謂中峠式土器である。胴部文様帯を縦位に分割し、三叉文を配した渦巻文を描く1や、隆帯を波状に配し、刻目で加飾する2、口縁部無文帯の下に交互刺突文で文様を描く3・4は、勝坂式のモチーフを濃く残している。7~10の沈線文と刺突文が併用されたものも同様であろう。一方、地文に縄文を多用し、口縁部に肉厚の隆帯・把手を加飾した5・6・11・12は、所謂中峠式土器の範疇で捉えられる。無文の深鉢片15、内面に楕円形文

を描く18も、これらに含めて考えて良いだろう。14・16・17は底部片である。

045竪穴状遺構出土土器 (第187図) 前期前葉、黒浜式土器に属する1がある。胎土に繊維を含み、胴部がくびれた波状口縁の深鉢片である。口縁部直下には断面半円形の隆帯がめぐり、波頂部に小円孔を有す。竹管状工具による連続刺突文が胴部上半に、撚糸2条を単位とする付加条縄文が胴下半に施される。文様要素の特色から、黒浜式土器古段階(新井分類第II段階)に位置づけられる(新井、昭和57年)。

061A・B竪穴住居跡出土土器 (第187・188図) 中期の勝坂式末葉から所謂中峠式に属する資料である。重複した竪穴のうち、061Aから多量の復元可能な土器が出土した。1は頸部に文様帯区画線として隆帯文をめぐらし、口縁部に沈線による幾何学的モチーフを描く、勝坂式土器の系統上に位置づけられるものである。2～5は所謂中峠式及びそれに類する土器で、いずれも口縁部に肉厚な隆帯による装飾が施される。6は浅鉢形土器。

085竪穴状遺構出土土器 (第189図) 1・2は中期の所謂中峠式土器。口縁部が肉厚・帯状に肥厚した1と、口縁部文様帯を楕円区画文で飾り、胴部以下を無文とする2がある。

110竪穴住居跡出土土器 (第189図) 1は中期勝坂式末葉の土器で、竹管状工具による弧線文と爪形刺突文で胴部を飾る。

130竪穴住居跡出土土器 (第189図) 1・2とも、中期の所謂中峠式土器である。口縁部が肥厚した深鉢形土器で、1は無文、2は頸部以下に単節縄文が施される。

150竪穴住居跡出土土器 (第190図) 1は無文の浅鉢形土器で、同下半部の破片である。他の出土土器小片から考えて、中期前半阿玉台I b式期に属する可能性が高い。

161竪穴住居跡出土土器 (第190図) いずれも中期前半、阿玉台I b式土器である。1・2は小型の同一個体に属する深鉢で、人面様の突起が付く。3は断面三角形の隆帯が垂下し、結節沈線文及び指頭圧痕文が残る深鉢形土器の胴部片である。

162竪穴住居跡出土土器 (第190・191図) 中期前半、阿玉台I b式土器である。1・2は波状口縁の深鉢で、口縁部に楕円区画文が発達し、頸部以下には波状沈線文、結節沈線文、及び指頭圧痕文が加飾される。3は平縁で小型な深鉢形土器で、口縁部に楕円区画文がめぐり、隆帯及び曲線状モチーフを多用する結節沈線で充填される。

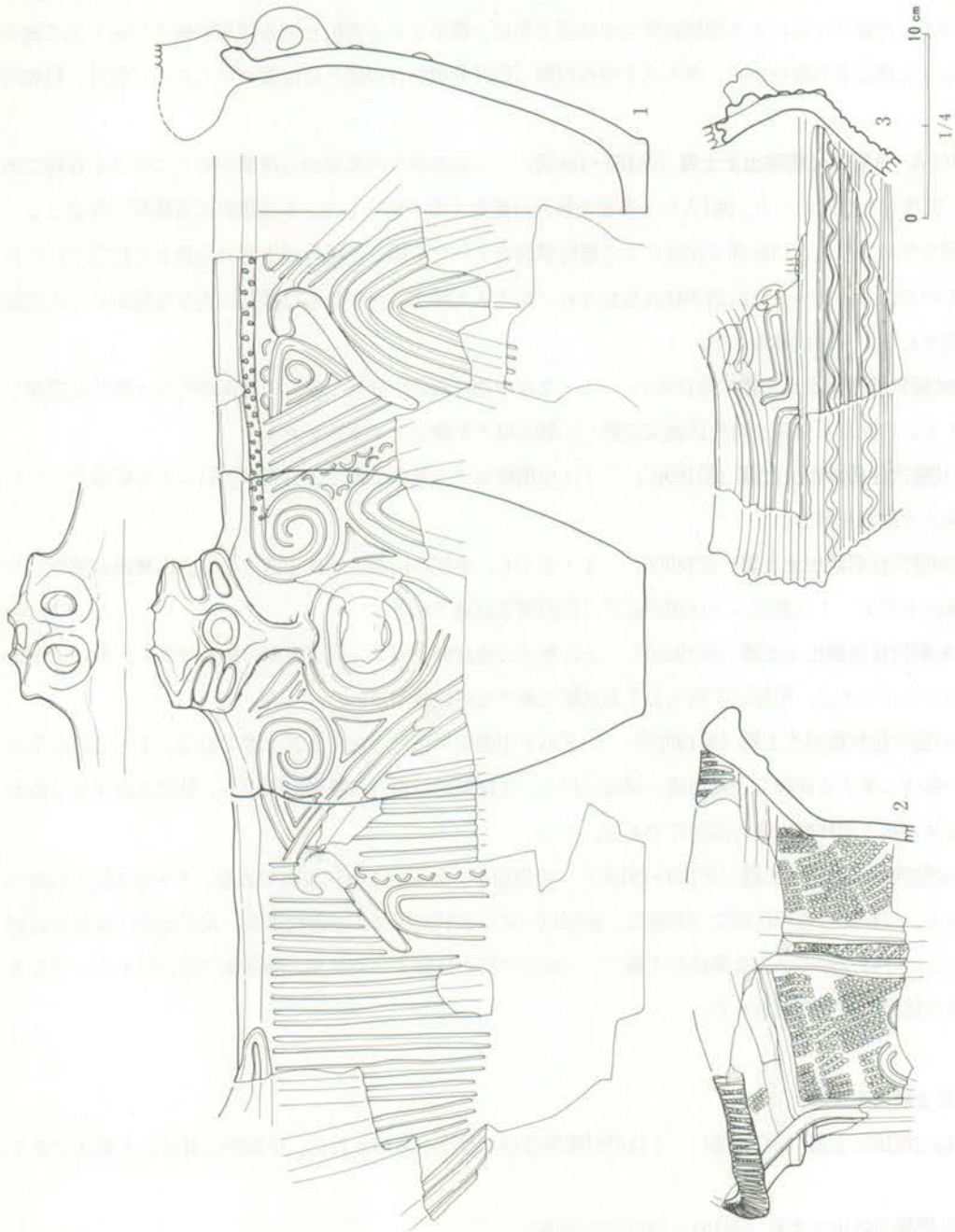
(3) 土坑出土土器

118土坑出土土器 (第191図) 1は貼付隆帯及び沈線文が多用された、中期勝坂II式の土器片である。

(4) 埋壙土坑出土土器 (第191・192図=図版60)

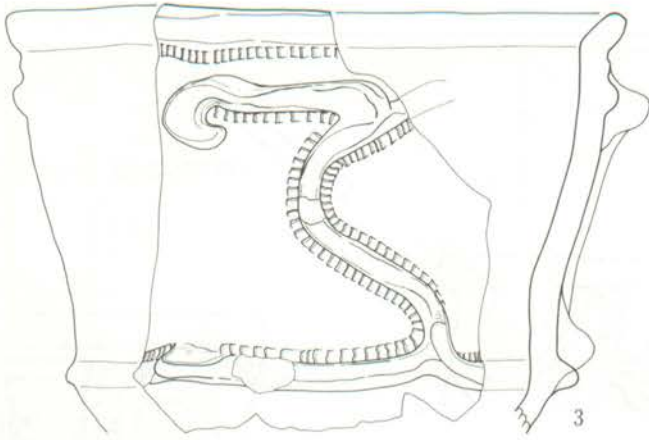
108埋壙土坑出土土器 (第191図) 中期後半、加曾利E III式深鉢と胴部片である。粗い単節縄文を地文に、磨消手法で垂下沈線を描出する。

151埋壙土坑出土土器 (第192図) 中期前半、阿玉台I a式の深鉢形土器。胴下半部を欠失する。口縁部に細い断面三角形の隆帯と、それに付随した1条の結節沈線文が施されるが、明瞭な楕円形区画文は形成しない。口縁部に突起が2か所、さらに1か所の小突起が付加される。 (原田)

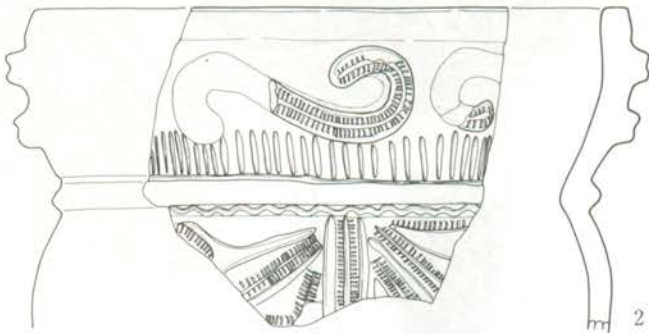
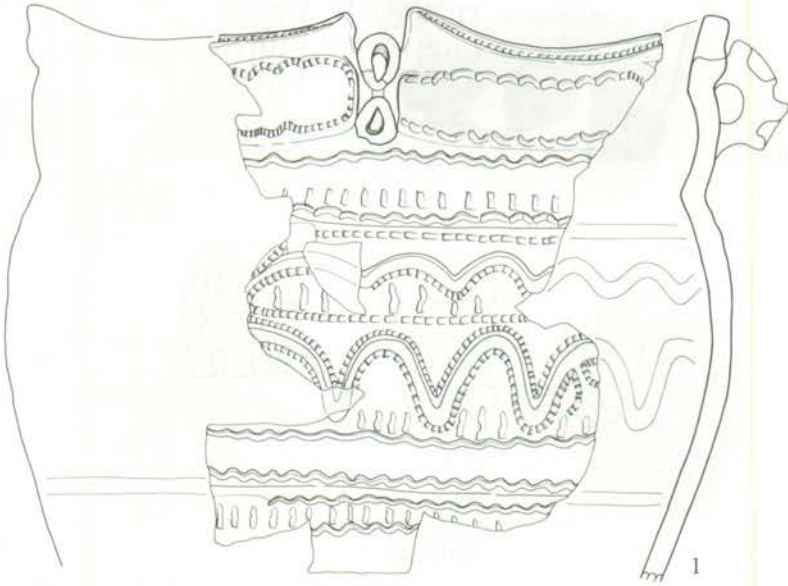


005住居跡(1)

第177図 住居跡・堅穴状遺構出土土器(1)



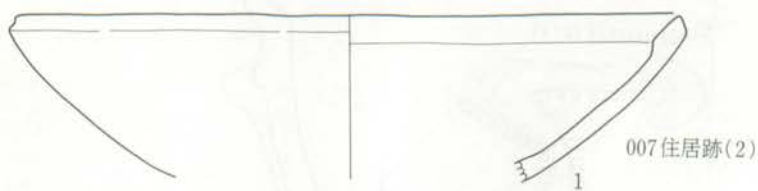
005住居跡(2)



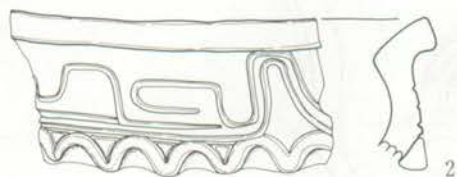
006住居跡



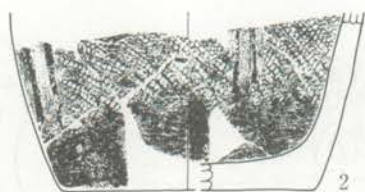
第178圖 住居跡・豎穴狀遺構出土土器 (2)



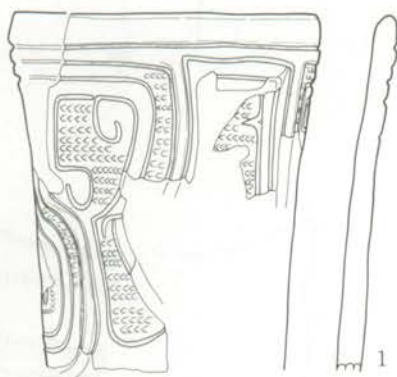
007住居跡(2)



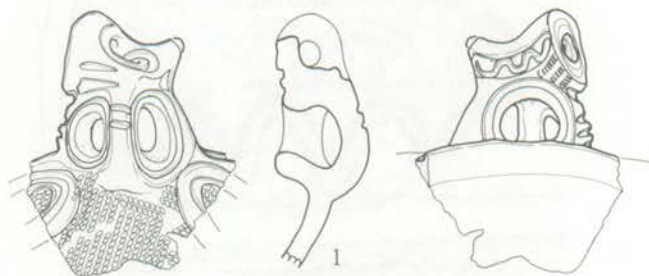
2



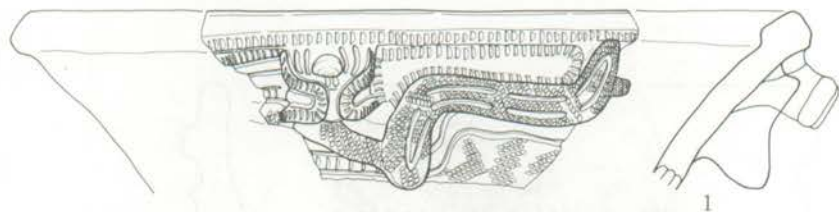
008住居跡



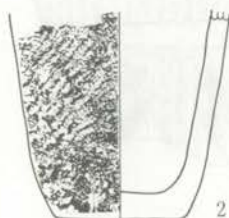
1



009住居跡



1

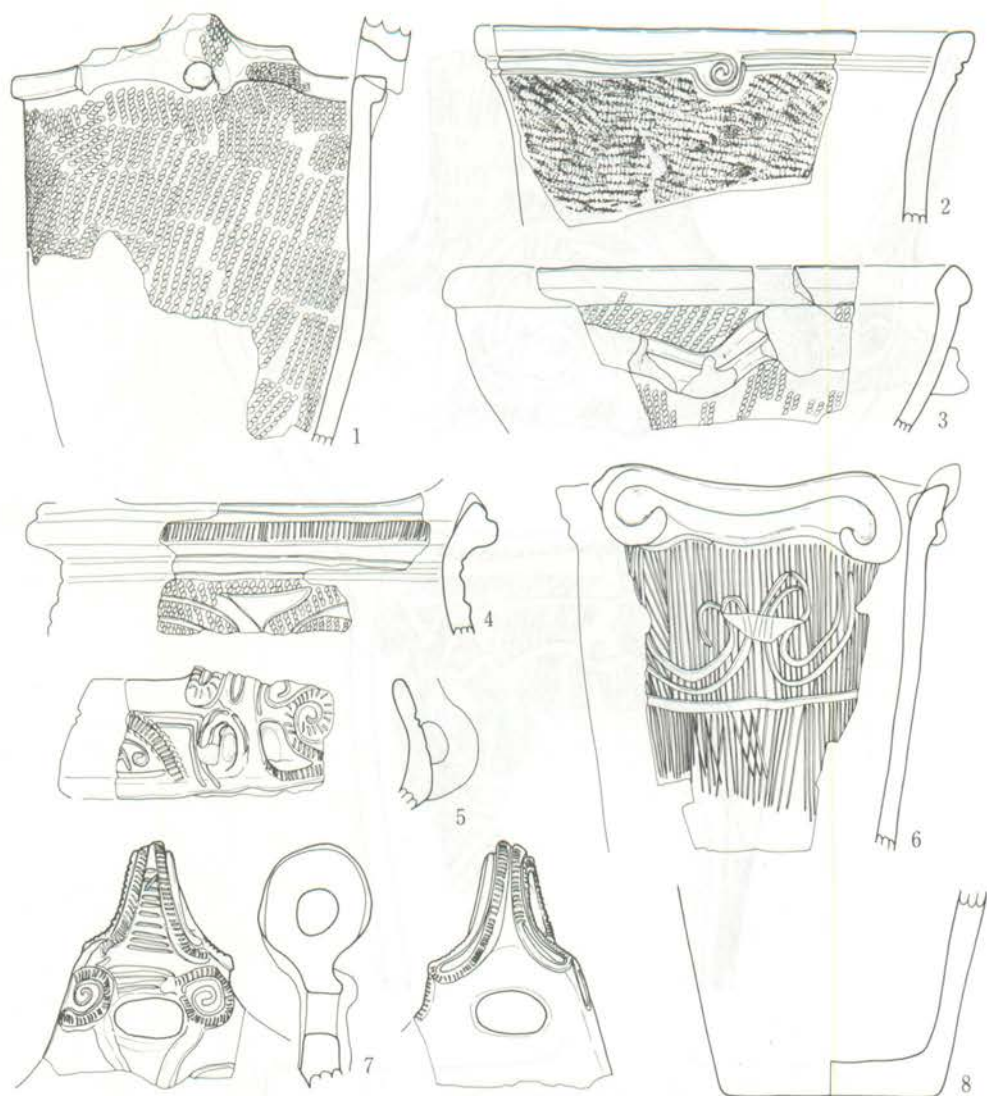


010住居跡

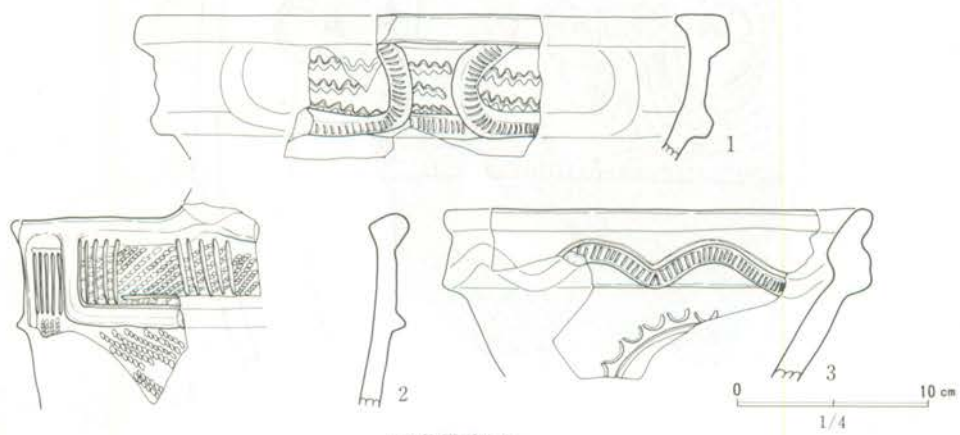
2



第179図 住居跡・堅穴状遺構出土土器 (3)

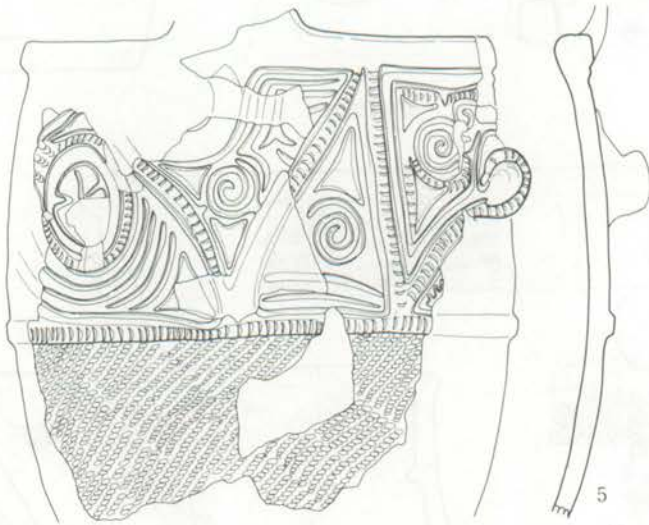
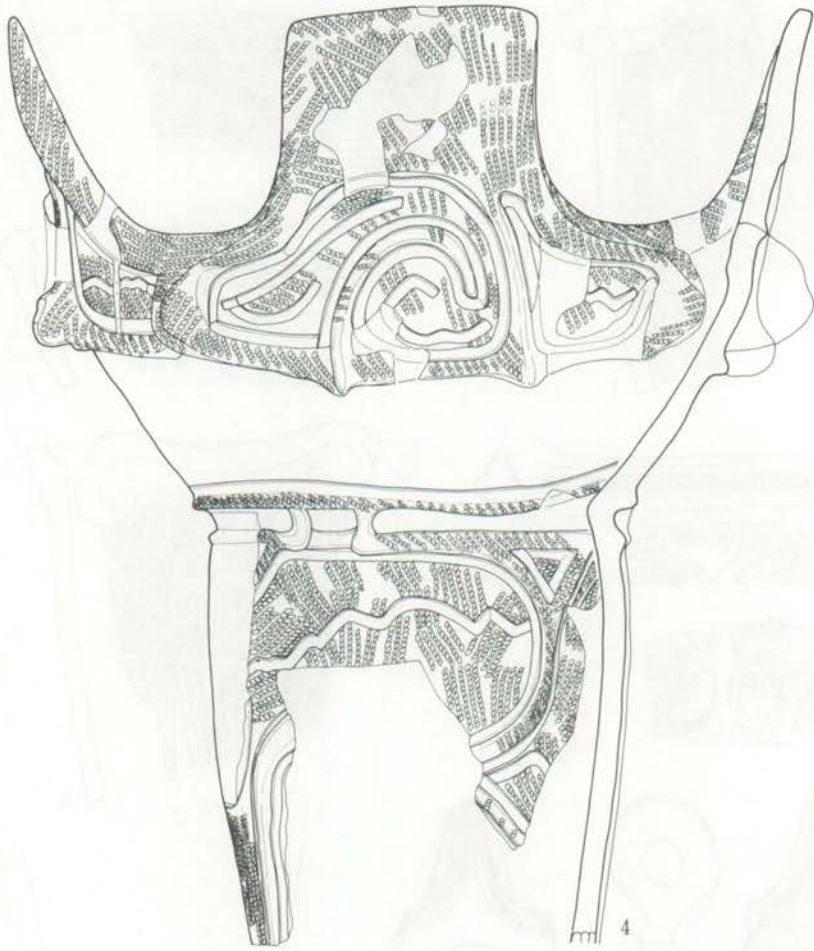


011住居跡



012住居跡(1)

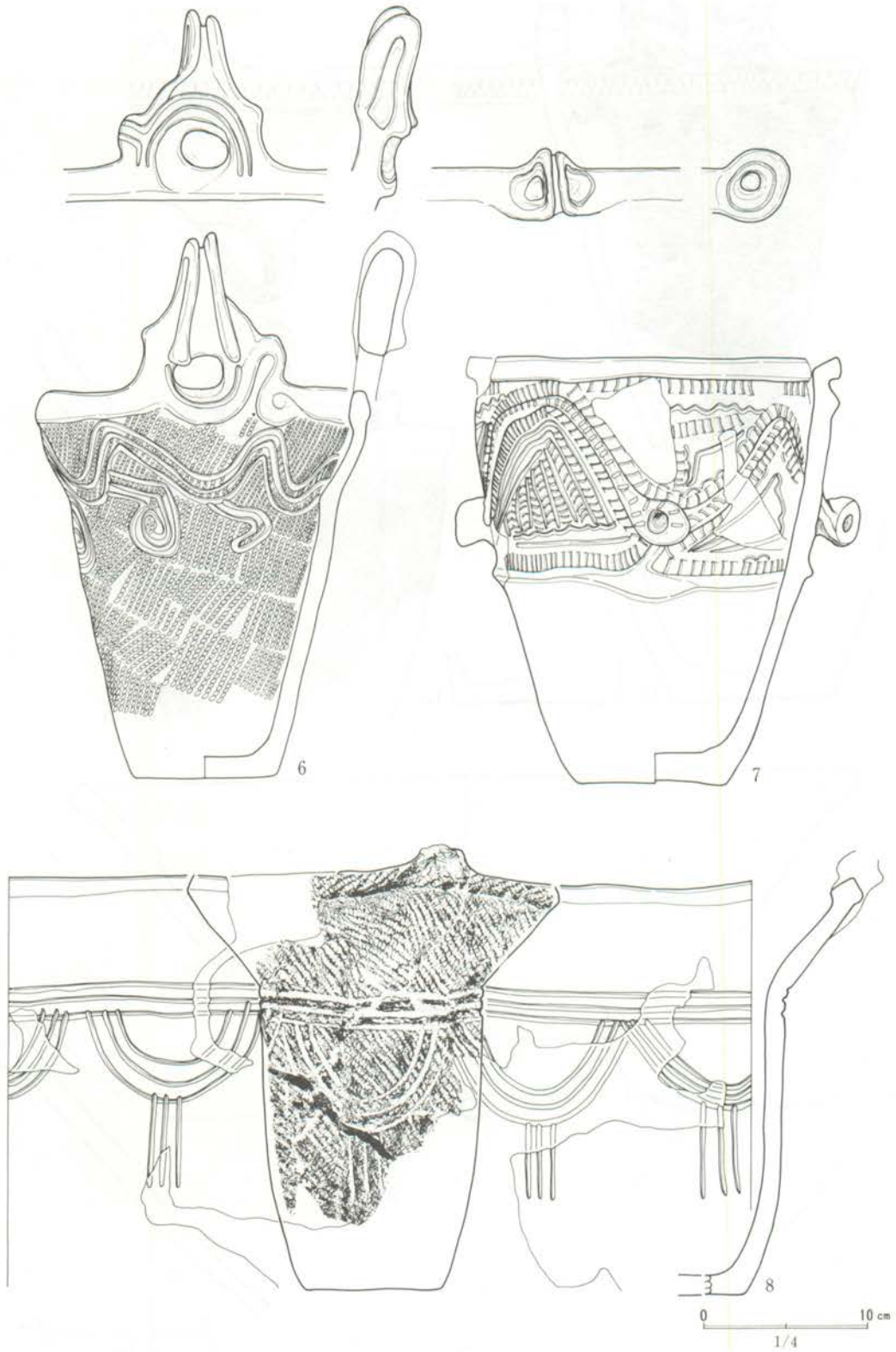
第180圖 住居跡・竪穴状遺構出土土器(4)



0 10 cm
1/4

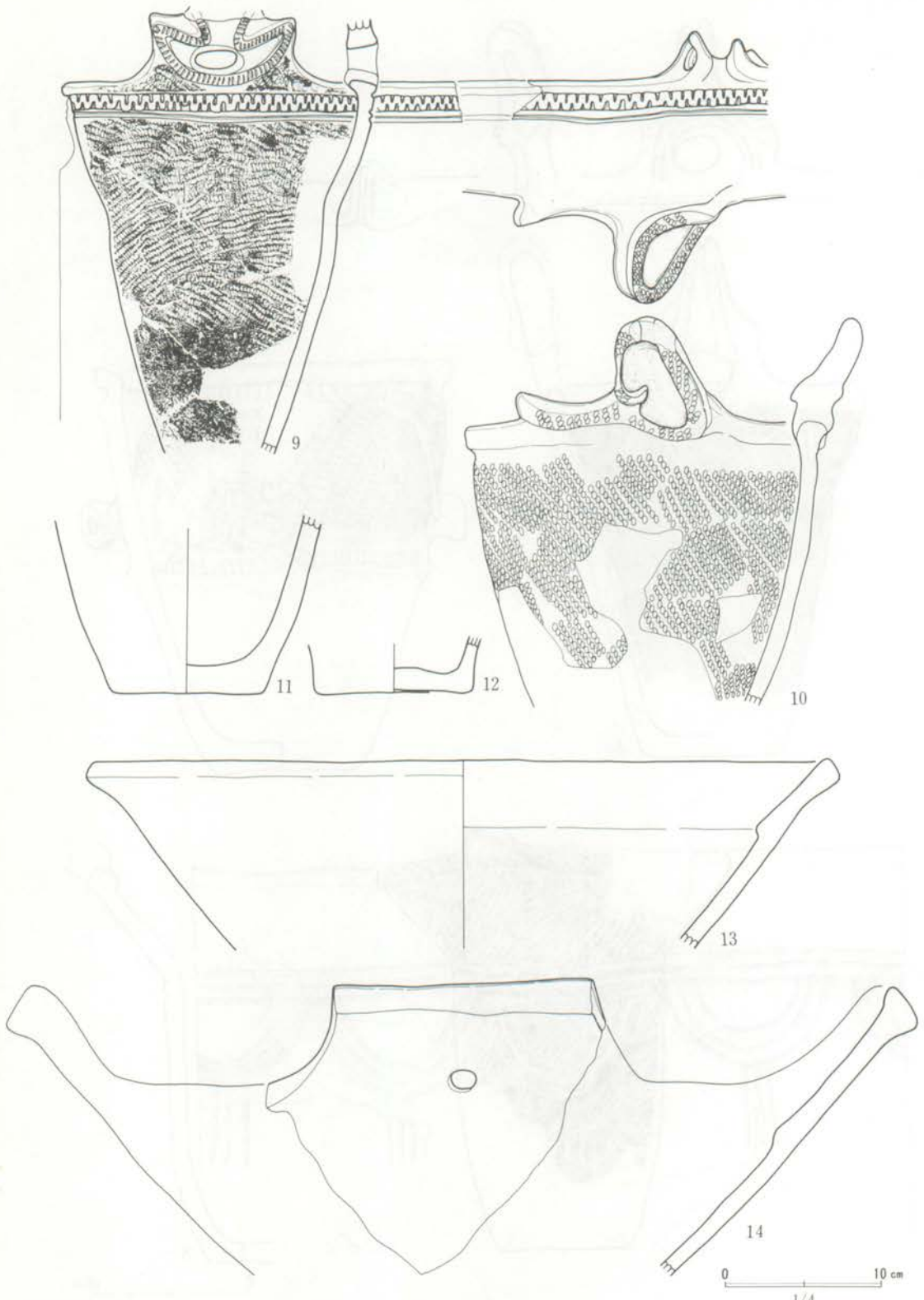
012住居跡(2)

第181図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(5)



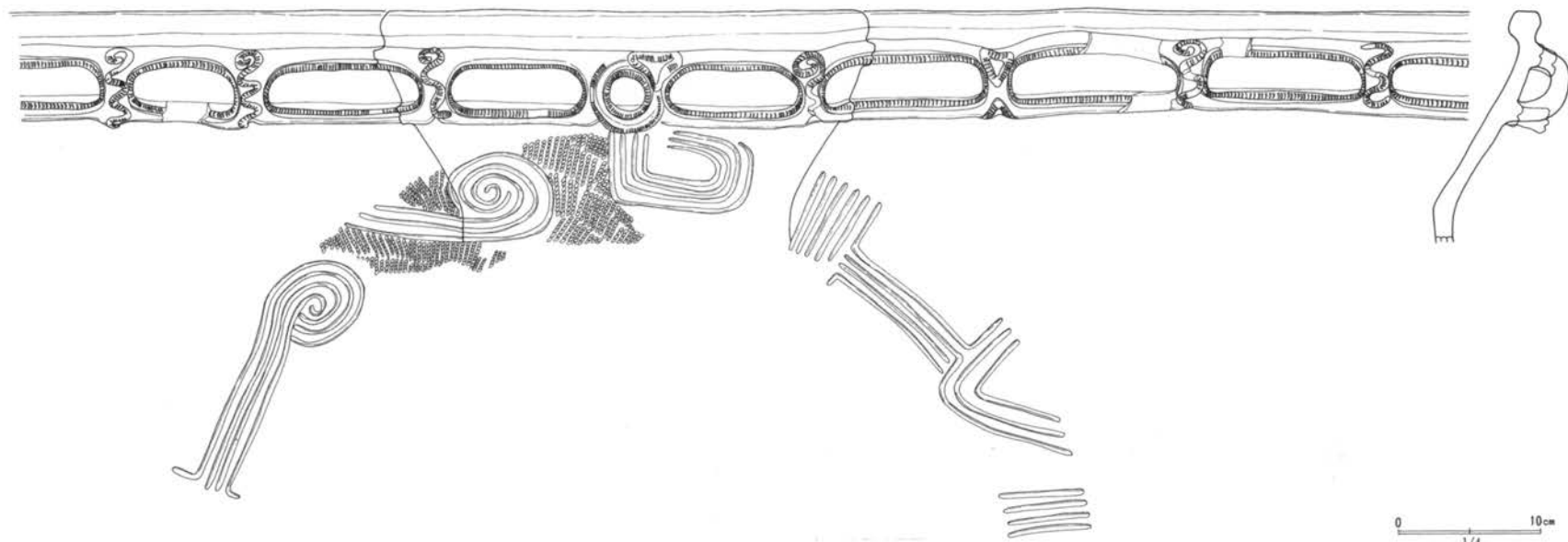
012住居跡(3)

第182図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (6)



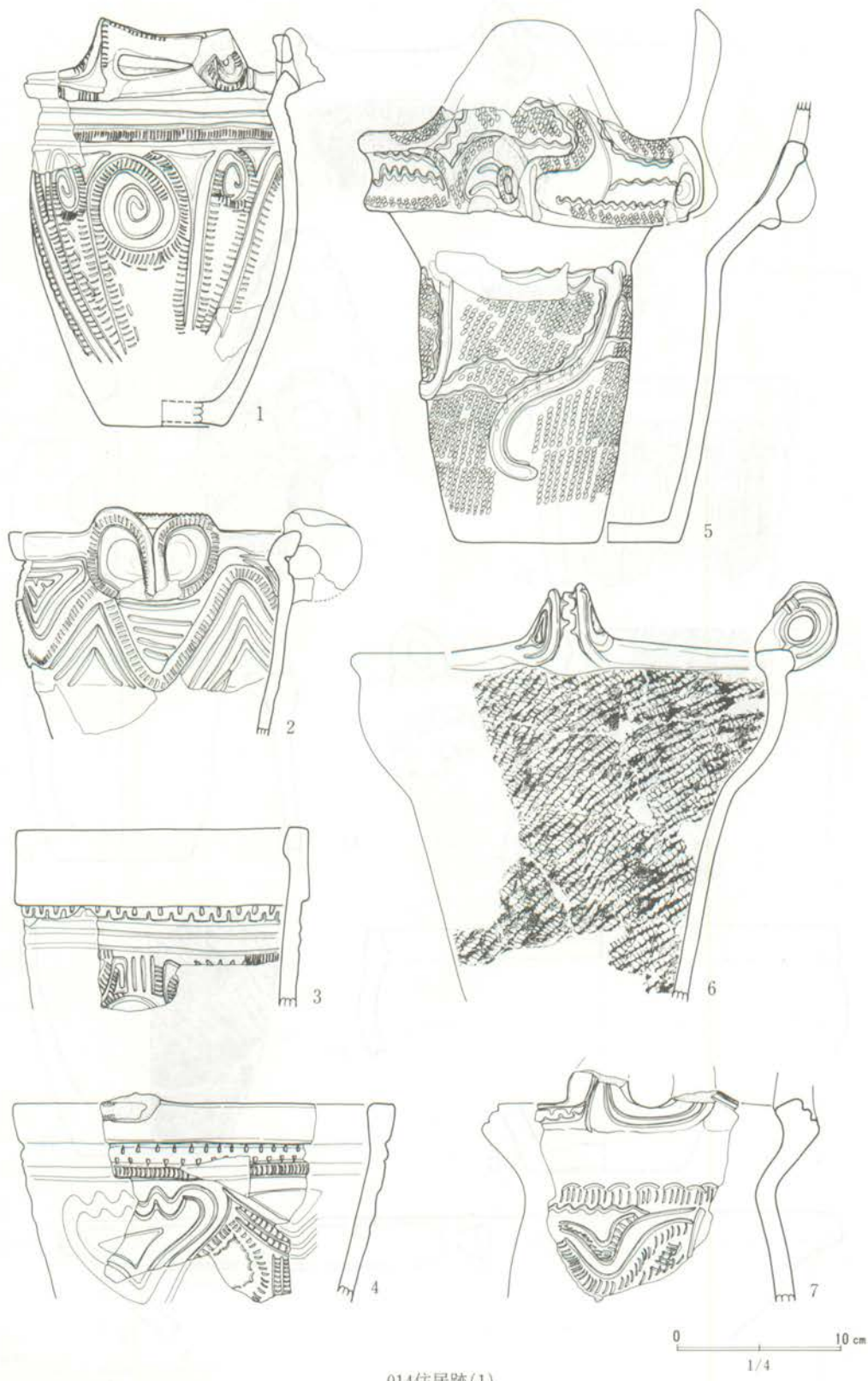
012住居跡(4)

第183図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(7)



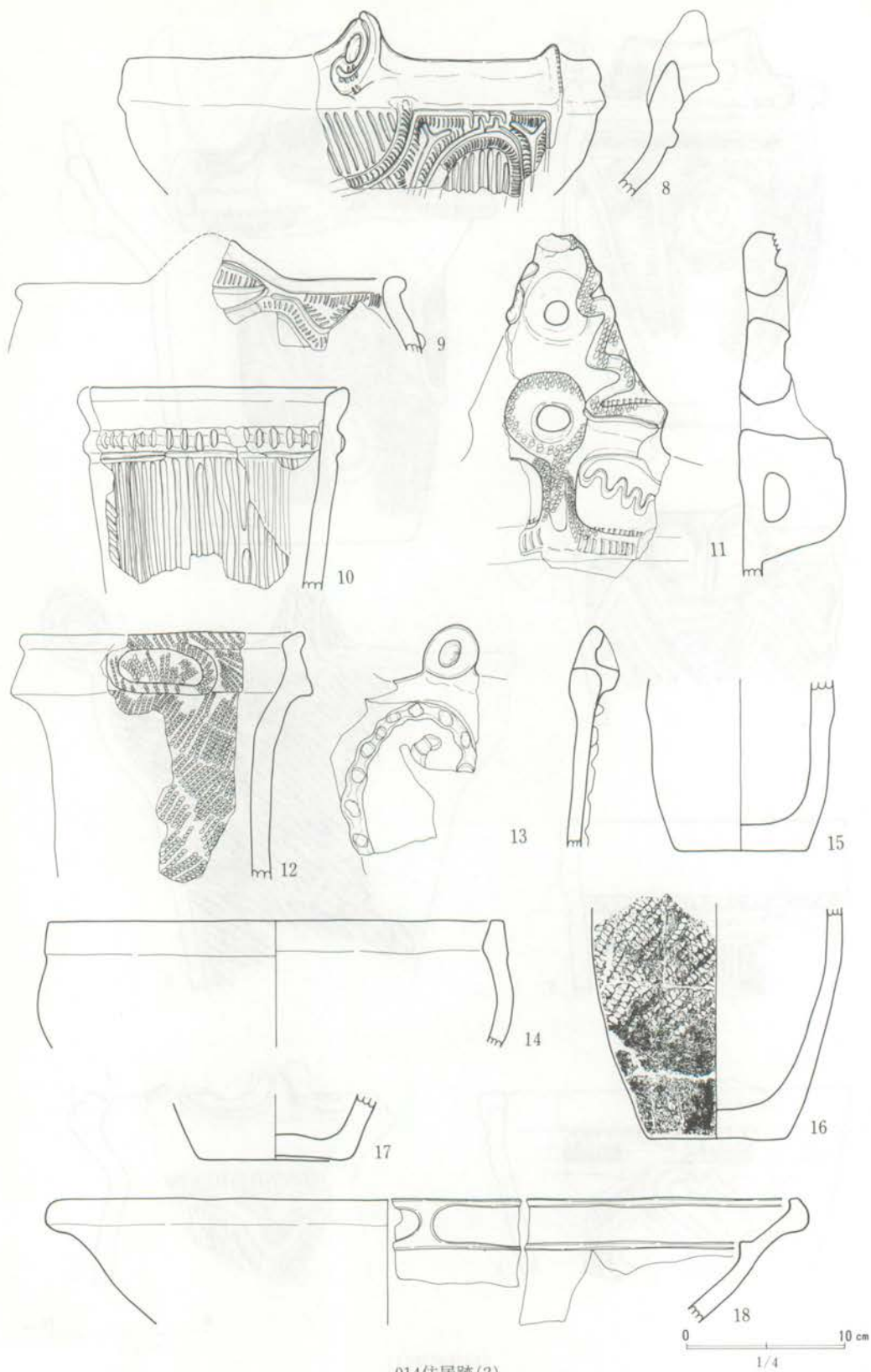
013 住居跡 炉体土器

第184図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (8)

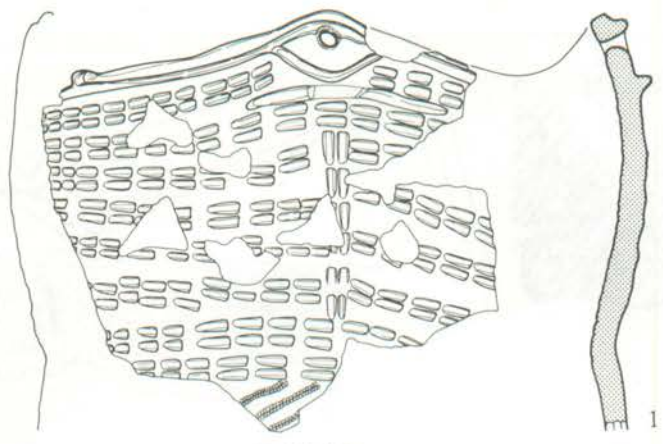


014住居跡(1)

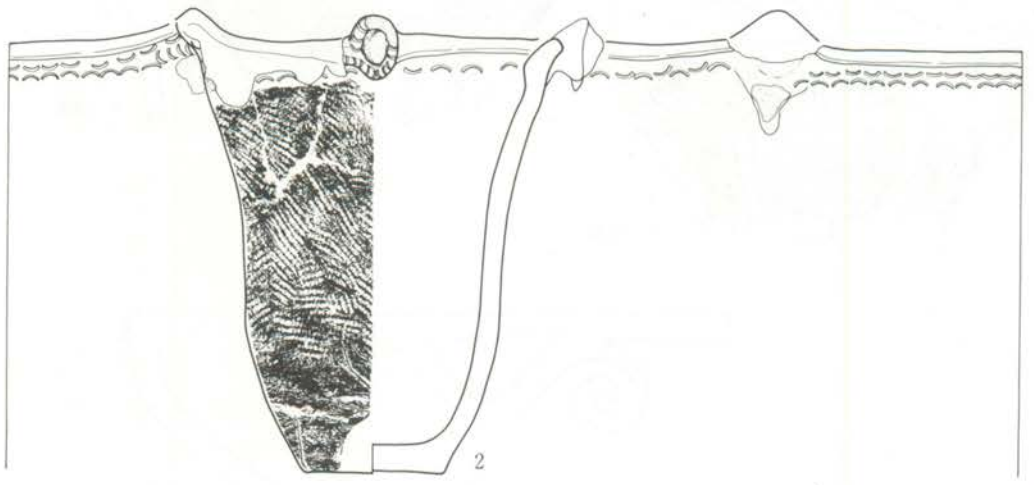
第185図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(9)



第186図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (10)



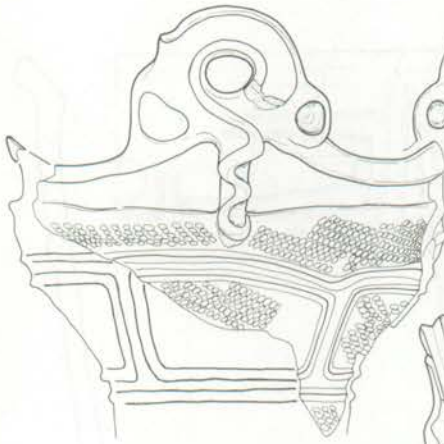
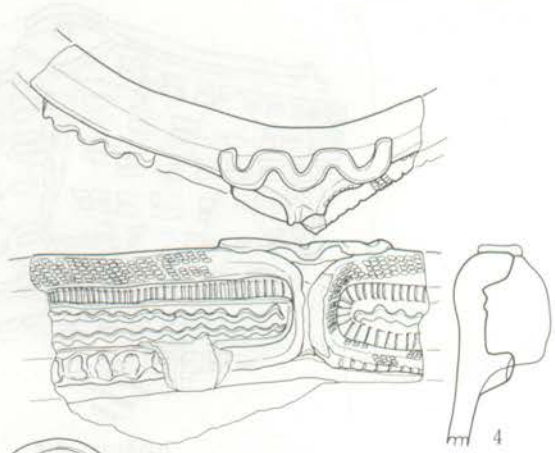
045 豎穴状遺構



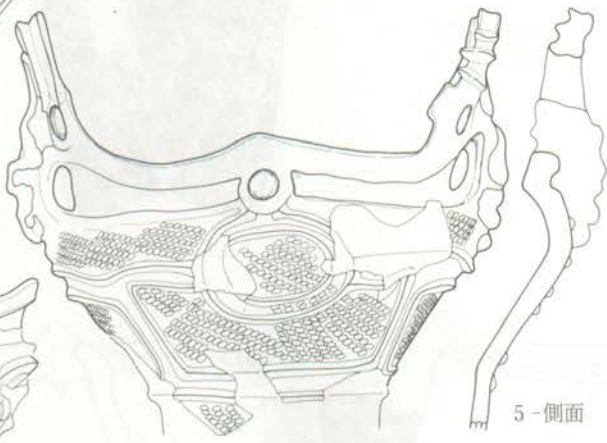
061 A・B 豎穴状遺構(1)

0 10 cm
1/4

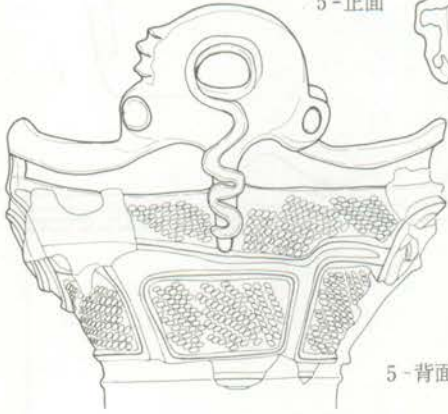
第187図 住居跡・豎穴状遺構出土土器 (11)



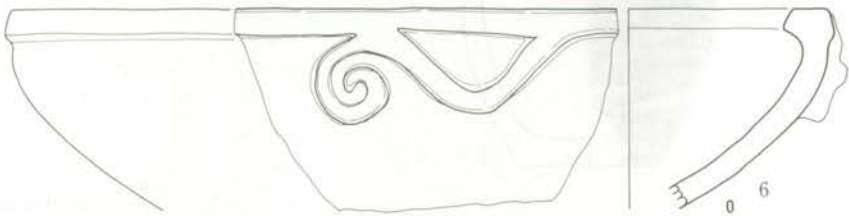
5-正面



5-側面



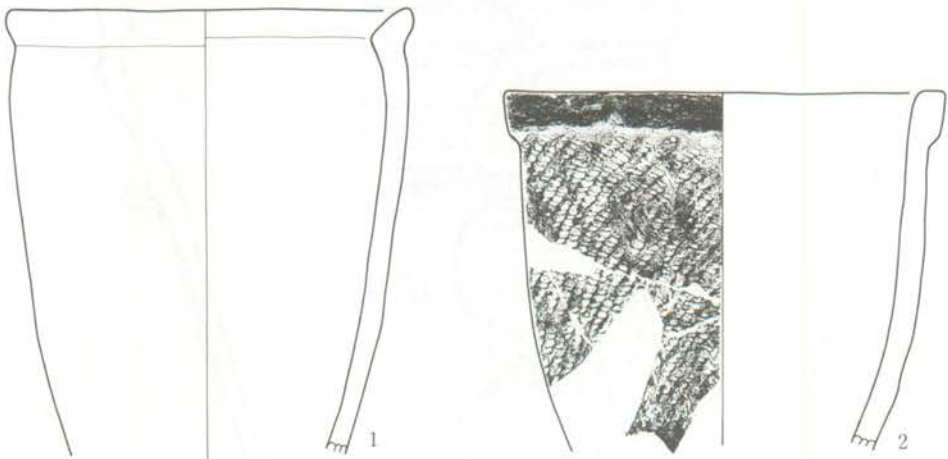
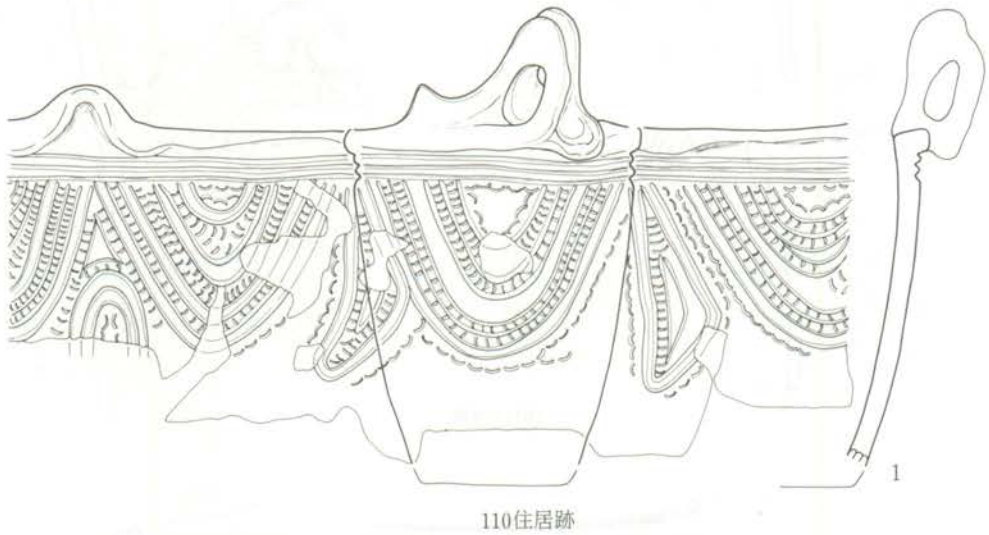
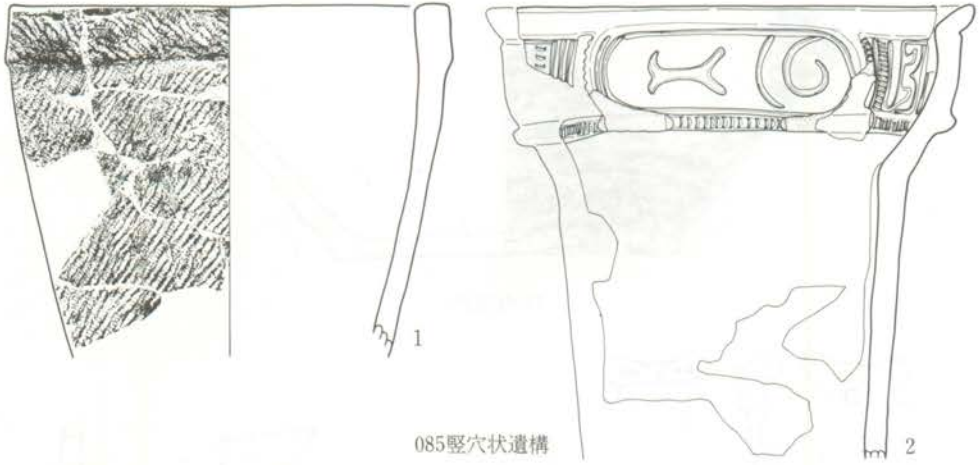
5-背面



0 6 10 cm
1/4

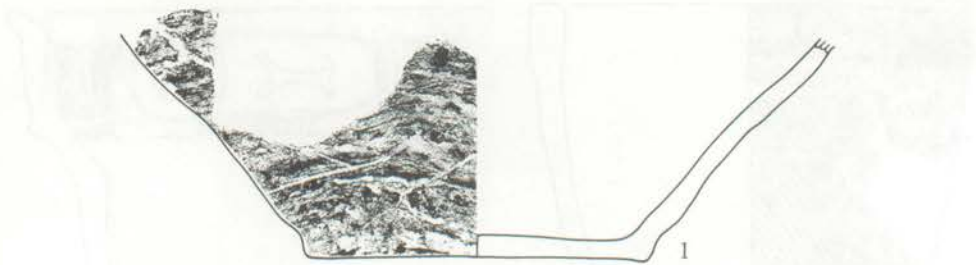
061A・B 竖穴状遺構(2)

第188図 住居跡・竖穴状遺構出土土器 (12)

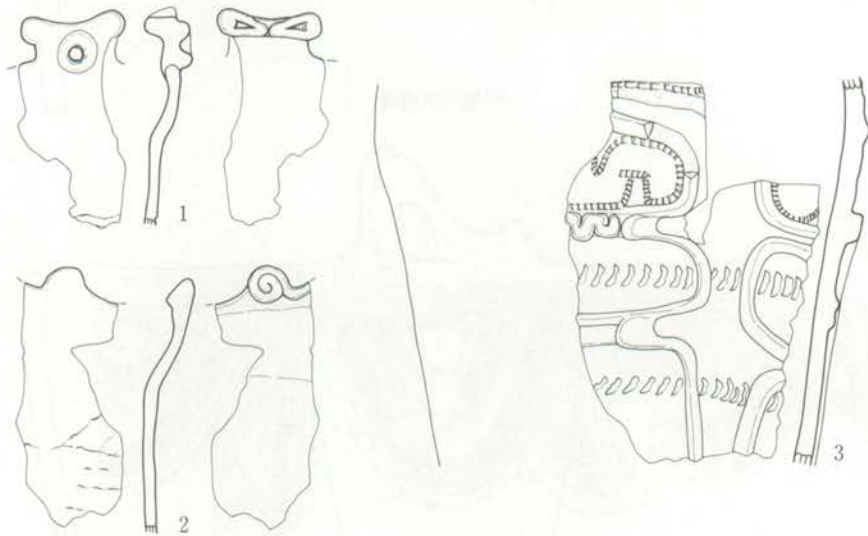


0 10 cm
1/4

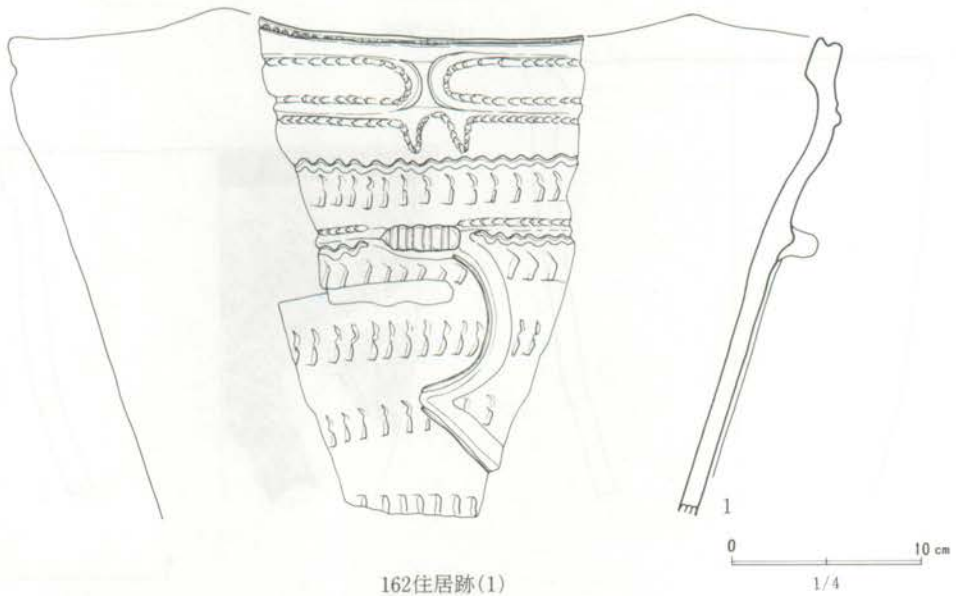
第189図 住居跡・竖穴状遺構出土土器 (13)



150住居跡

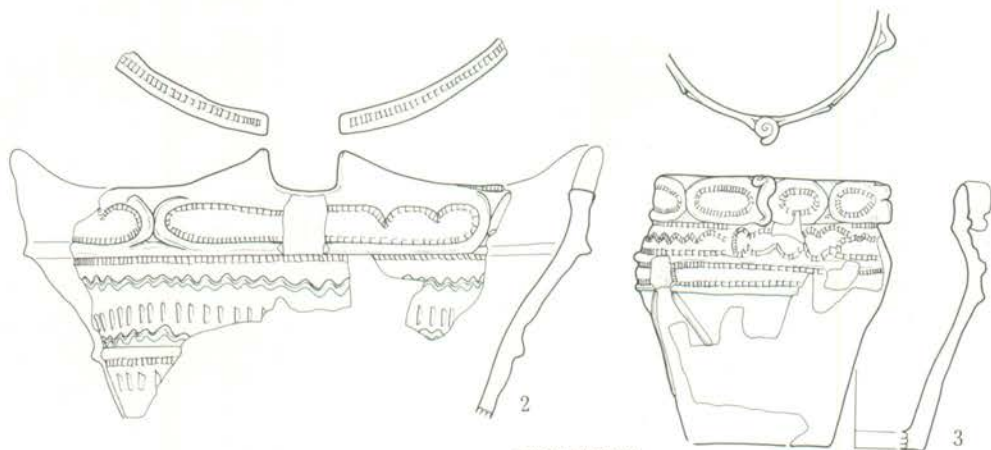


161住居跡

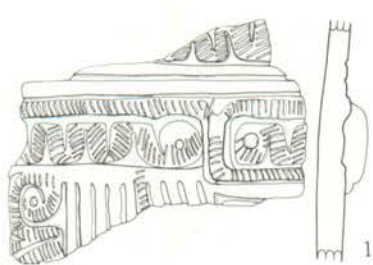


162住居跡(1)

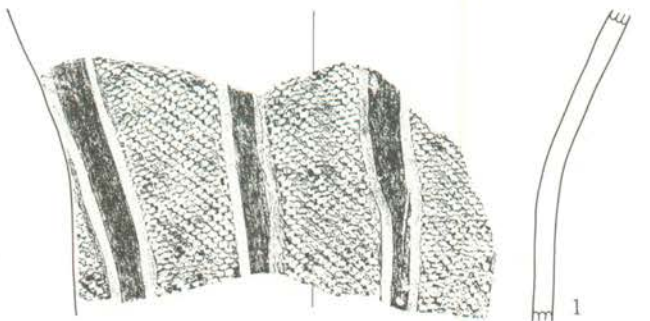
第190図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (14)



162住居跡(2)



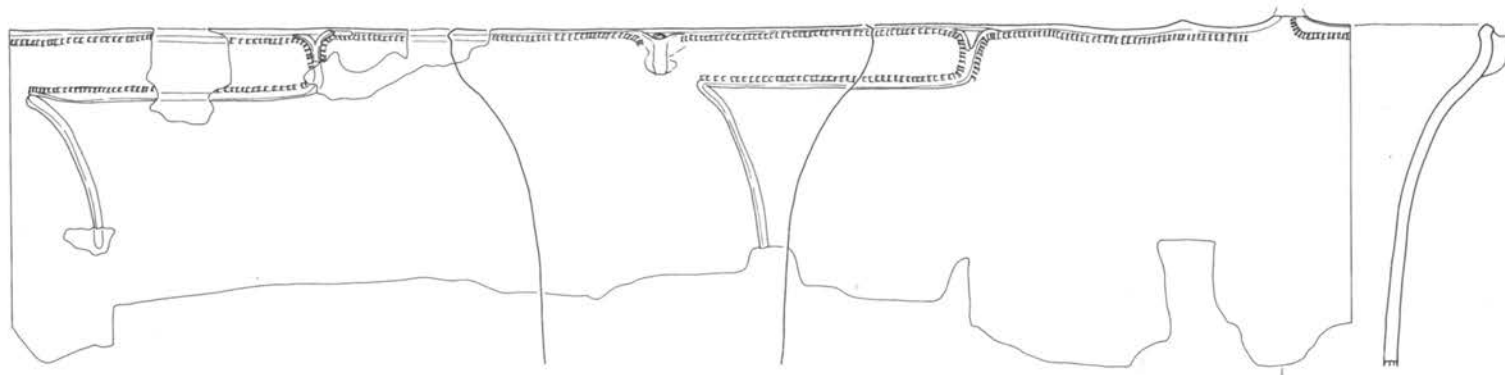
118土坑



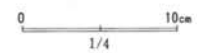
108埋甕土坑

0 1/4 10 cm

第191図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(15)・埋甕土坑出土土器(1)



1



151埋藏土埴

第192図 土埴出土土器 (2)

(5)遺構外出土の土器

第1群土器（第193図：1～4）

早期前半、捺糸文系土器を本群とした。出土総数9点と僅少で、出土地点も調査区全域に散在する。口縁部破片は図示した4点が全てで、いずれも縄文施文型<J型>、第3様式（夏島式）に属するものである。

第2群土器（第193・194図：5～20）

早期前半、沈線文系土器を本群とした。出土総数25点で、平面分布に顕著な片寄りは見られない。口縁部が外削ぎ状を呈し、浅い凹線・刺突文との細かな集合沈線を加える5～8・12、外削ぎの口唇上面に刻目を有する9、横位の沈線文が重畳する10～12と、細沈線文に貝殻腹縁文を加飾する13～17がある。17の内面には条痕文が顕著に残る。18は口縁直下から縦位に条痕文が施された土器で、胎土・器面調整から本群に属するものと考えた。19・20は尖底部破片。いずれも田戸下層式土器に比定される。

第3群土器（第194～196図：21～56）

早期後半、条痕文系土器を本群とした。出土総数772点で、該期の炉穴群と重なるように、調査区北西の小舌状台地上と、調査区北端のC・D列7～9区付近にまとまって出土した。本来、文様組成比等の分析から、より細かな時期細分が可能だが、未了のまま報告を進める。

21・22：微隆起線文による幾何学的モチーフを持つ、野島式土器。薄手で内外面ともナデ整形が行き届く。

22～26：比較的明瞭な条痕文を地文に、沈線文・竹管状工具により刺突文で、菱形を基調としたモチーフを描く。胴上半に屈曲部を残す25・26もあり、鶺鴒島台式土器に比定される。

27～31：低平な貼付隆帯上に、粗雑な刻目を施すもの。地文に条痕が残る28・31や、ナデ整形が顕著な29・30がある。一般に茅山上層式土器に通有な文様要素だが、29・30はより古く、田戸上層式の新しい段階に属する可能性もある。

32～46：条痕文のみで器面を飾るもの。口唇上面に刻目を有する32～39・45と、口唇上に刻目のない40～44・46に大別される。前者のうち、35・37は貝殻腹縁文により刻目が加飾される。明瞭な内面条痕文が認められるもの以外は、土器外面のみを拓影で示した。時期的な細別は難かしいが、35・37は擦痕文的な様相が強く、子母口式土器に属する可能性を持つ。

47・48：口縁が外反し、柔軟な軸に巻きつけた絡状体による圧痕文が施されたもの。胎土への繊維混入が殊の他多く、断面黒色を呈す。茅山上層式土器以降の、東海地方上の山式土器に併行する、在地の土器である。かつて「下沼部式」（我孫子、昭和57年）と呼ばれた土器と近縁関係にある。

49～56：貝殻条痕文が乱雑に施された胴部片49～52と、底部片53～56を一括した。56は鶺鴒島台式に属する平底片である。

第4群土器（第196図：59～77）

前期前半、黒浜式土器を本群とした。出土総数386点、調査区内の分布は、該期の045竪穴状遺構があるF2区を中心に、小舌状台地の全面に及ぶ。小片が多く、また縄文以外の文様を持つものは少ない。竹管状工具による横位の列点文を施す57、円形刺突文を持つ波状口縁の破片58、竹管状工具による平行沈線文を持つ59～61がある。なお57は045竪穴状遺構出土土器と同一個体。

62～72は地文に単節縄文を施す土器で、口縁部に短沈線が加飾された62や、ループ文が重畳する69、菱形施文の70が含まれる。73は軸縄縄文、74・75は2条を単位とする撚糸付加条縄文である。また76・77は貝殻腹縁文が施された土器であるが、全体に占める割合は少ない。

第5群土器（第197・198図：78～141）

前期後半の諸磯式・浮島式土器を中心に、前期末葉の土器群までを本群とした。出土総数1,216点、調査区の北半、台地縁辺部に沿って散漫ながら広範囲に分布する。該期の遺構は無く、小片が多いが、多様な土器型式を含む。

細かな縄文地に、間隔の広い連続爪形文が施された78・79は諸磯a式土器。81～85は諸磯b式土器で、幅広の爪形文や粘土紐による貼付文、獣面把手片等が含まれる。86～94は横位を基調とした平行沈線文が重畳し、竹管状工具による爪形文を加えた86や、口縁部下に短い縦位沈線を施す92～94を含む。明瞭な時期細別は難しいが、大旨浮島II式土器に比定されよう。95～98は、口縁が外反し、胴部上半に挟り取ったような三角形刺突文を連続させるもので、文様要素の特長から浮島III式土器に分類できる。また99～107は、貝殻腹縁による押し引き文や、刺突・密な波状貝殻腹縁文を特色とした興津式土器。108も爪形状刺突が全面に施され、ほぼ同型式に比定される。109～117は、所謂有段口縁を持つ深鉢片、及び乱雑な細沈線が描かれた土器で、浮島II式からIII式にかけての所産であろうか。

118～124は、綾線縄文を含む、縄文施文の土器。141もそのミニチュアである。130～134は、口縁部に縄文原体の側面圧痕を有し、所謂「粟島台式」土器である。ともに前期末葉から、一部中期初頭までの所産として理解される。

135～148は、耳状、ボタン状突起が特徴的な諸磯c式土器、139は中期初頭、五領ヶ台I式土器だが、1点のみの出土であり、便宜的に本群で扱った。140は諸磯b式の有孔浅鉢片で、塗彩痕跡は窺えない。

第6群土器（第199・200図：155～180）

中期前半の五領ヶ台式土器から勝坂式、さらに所謂中峠式にかけての土器をまとめた。出土総数4,420点と多く、数の上では第7群（阿玉台式）土器に次ぐ。本来的には五領ヶ台II式を中心とした土器群と、勝坂式末葉から所謂中峠式に属する土器群を2分して扱うべきであるが、整理上の都合から一括して報告した。本群土器の分布は、勝坂式末葉前後の遺構群に伴い、H～J列4～6区周辺、及びF・G列12～14区周辺の2か所に大きな集中が認められるが、その一方で第7群土器の分布とも一致する。台地縁辺部に多くの遺物出土を見せる前期後半までの土器分布と比べ、台地内陸部の平坦面にその分布の中心が移っている事実は、該期に至って集落空間が拡大し、より広い面積を得られる台地平坦部に居住の本拠地が移行した結果として理解される。

出土した土器は、五領ヶ台式II式から阿玉台I a式直前の土器と、勝坂式末葉から所謂中峠式に至る土器群に分けられる。このうち、前者は東関東地方、殊に下総台地における阿玉台式土器様式の成立に関して、多くの示唆に富むものであるが、時間的な制約から、それらの拓影図化は断念せざるを得なかった。一方、後者は器形復元可能な土器26点のみをかるうじて図示し得た。155～161は太い隆帯により、楕円形区画文、円形文等を描き、区画内を沈線文で充填する。このうち158はペン先状工具の使用が特徴的で、勝坂式的な文様モチーフを持ちつつも、器形の上では所謂中峠式と見做すべき土器である。162～168は所謂中峠式土器及びそれに近似したもの。条線文の上に半月状の沈線モチーフを加飾する163

や、口縁部文様帯に粘土紐を波状に貼付する165・167等がある。169～173は鉢形・浅鉢形土器で、169が勝坂Ⅱ式的なモチーフを持つ他は、無文である。また174は円筒状の深鉢片で、外面に圧痕の深い、不規則な網目状捺糸文が施され、口唇直下には2条の沈線が描かれる。勝坂式・中峠式等、在地の土器様式内には見られないもので、東北地方の円筒上層式土器の影響を考慮する必要がある。近年新潟方面で類例の検討が行われ、仮称「北平B式土器」とされたものに似る(田中、昭和60年)。175～180は底部付近の破片である。

第7群土器(第201・202図:142～154)

中期前半の阿玉台式土器を本群とした。第6群土器の一部として分類した五領ヶ台式土器に後続し、また勝坂式末葉の土器と、一部が時間的に併行する。出土総数6,537点を数え、当遺跡の中で、最も多く出土した土器である。図示・報告すべき資料は多数存在し、遺物の抽出、分類作業までは終了したが、時間的な制約から、極く一部を報告できたに過ぎない。

遺跡内における平面分布は、ほぼ前述の第6群土器と一致するが、細かく見ると阿玉台Ⅰa、Ⅰb式土器がF・G列15・16区で卓越する。該期の遺構がⅠ・J列16・17区に数基集中して検出されているにも拘らず、遺物の分布がより北側に偏ることは興味深い。

口縁部に幅の狭い楕円形区画文を持つ朝顔形深鉢142、推定4単位の口縁部突起を持ち、結節沈線文と胴部の指頭圧痕文が特徴的な143・144・146、波状突起を持つ鉢型土器145等は、阿玉台Ⅰb式土器である。147～152は無文或いは輪積痕が残る深鉢、153・154は底部片で、やはり同時期の所産であろう。

図化を断念した小片中には、阿玉台Ⅰa式の資料も多く、先述した第6群土器の五領ヶ第Ⅱ式からの型式変化を示唆する資料も含まれる。早急な資料化が課題とされていることを明記しておきたい。

第8群土器(第203図:181・182)

中期後半、加曾利E式土器を本群とした。分類の都合上、加曾利E式直前の、所謂中峠式土器は、第6群土器として扱ったため除外する。出土総数379点、遺跡内の平面分布はH5・J5区に比較的集中するが、概して散漫である。181は同上半部で、口縁が内弯し、口縁部に羽状施文した縄文地に、沈線で磨消区画文帯を描く。182は縄文のみの破片。図示できなかった資料を含め、そのほとんどが加曾利EⅢ式土器であり、特に記述すべき問題点は含まない。

第9群土器(第204図:183～188)

後期前半、称名寺式土器及び堀之内式土器を本群とした。出土総数104点で、平面分布に特色は見られない。183～186のように、堀之内Ⅰ式土器が中心で、187・188等、僅かに堀之内Ⅱ式土器が混在する。

第10群土器(第204図:189～195)

後期後半、加曾利B式土器である。出土総数53点と少く、平面分布も極めて散漫である。

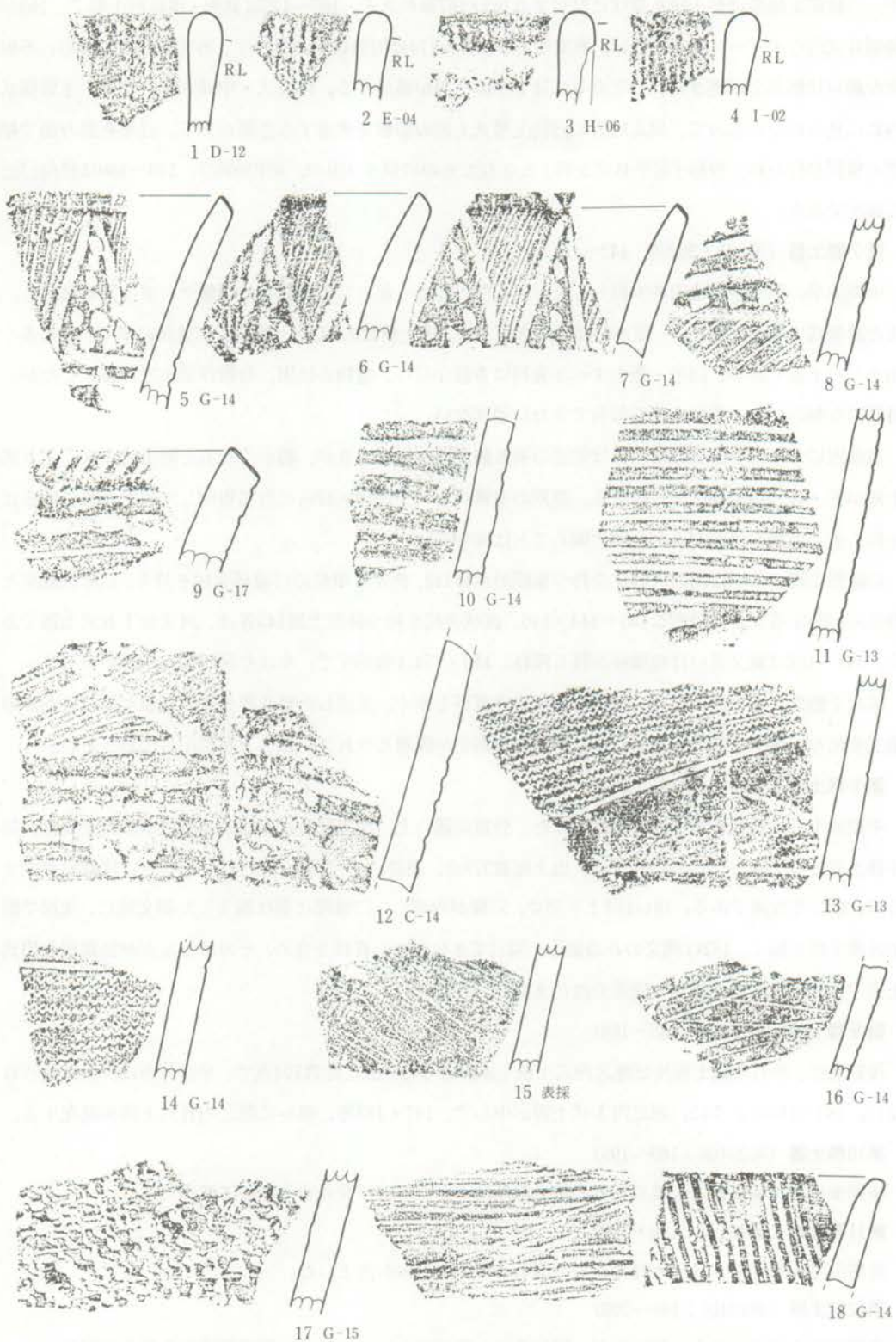
第11群土器(第204図:196・197)

後期後半、安行Ⅰ・Ⅱ式土器である。図示した2点のみが出土した。

第12群土器(第204図:198～203)

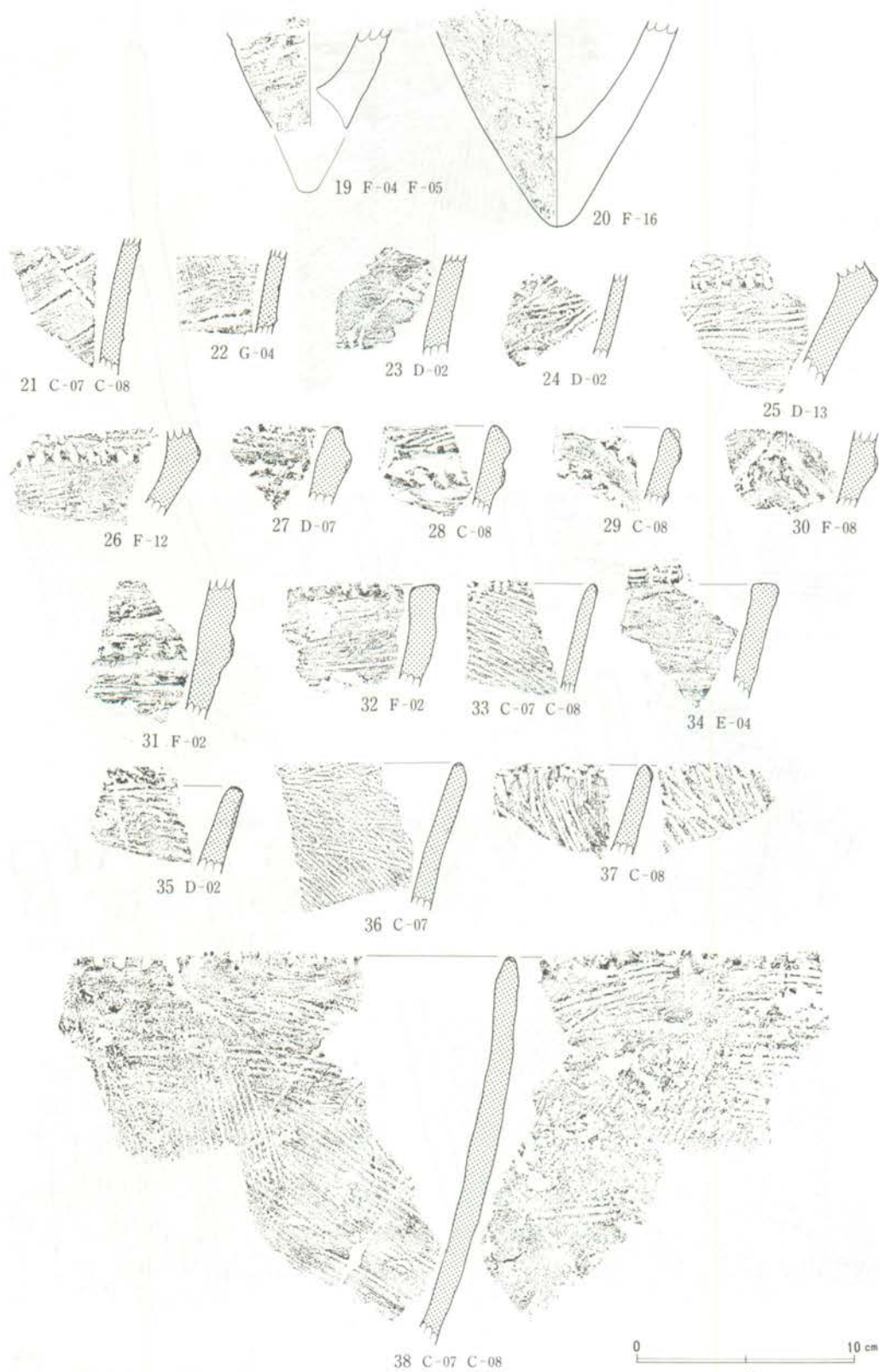
晩期終末までの土器を一括したが、安行系の土器は出土していない。浮線網状文及びその類似モチーフを沈線で抽出する198～200、地文に斜行捺糸文が施された201～203等がある。大旨、大洞A式併行期の土器として良いだろう。

(原田)

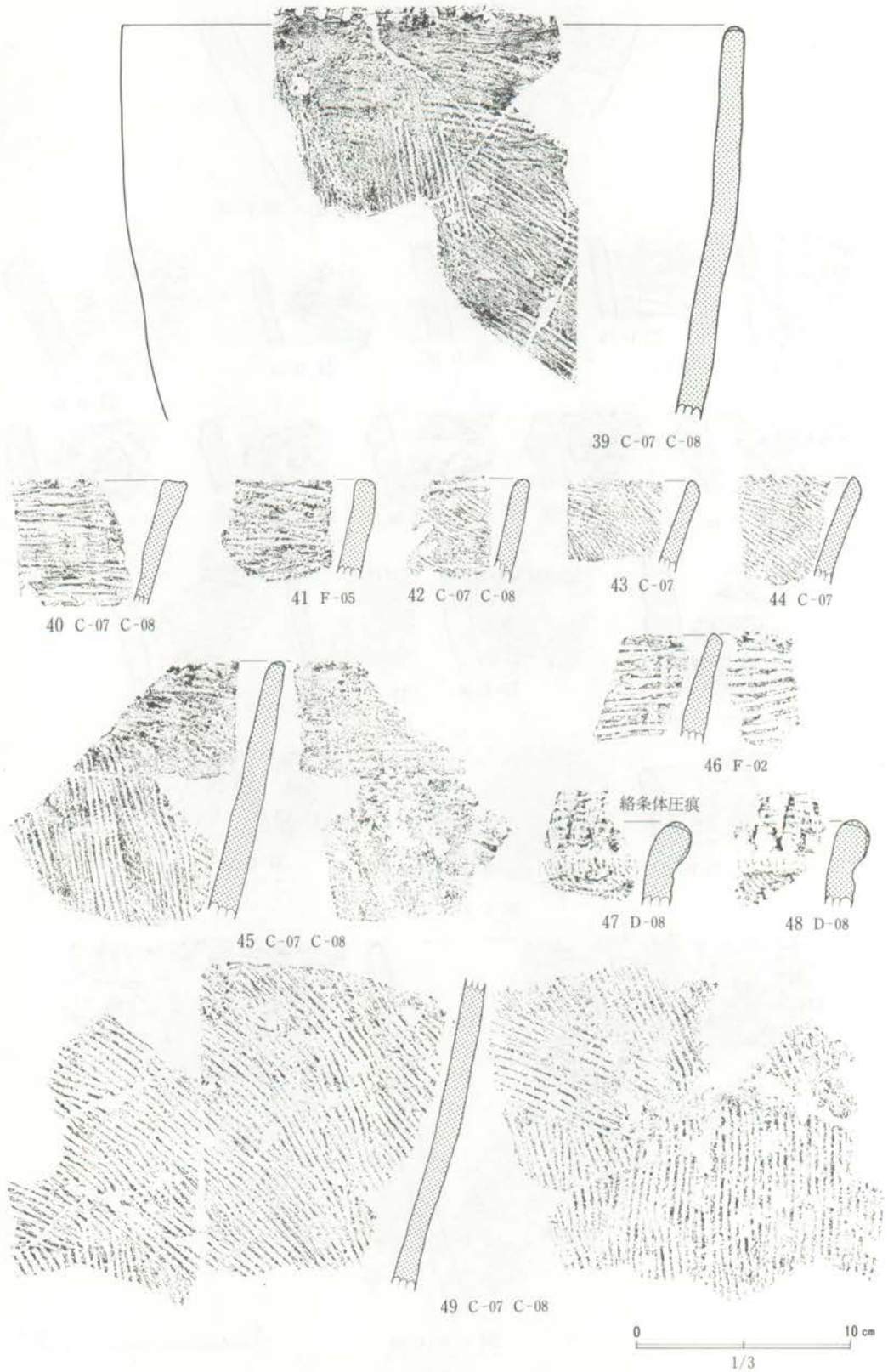


※土器番号の後の表示は出土グリッドを示す。

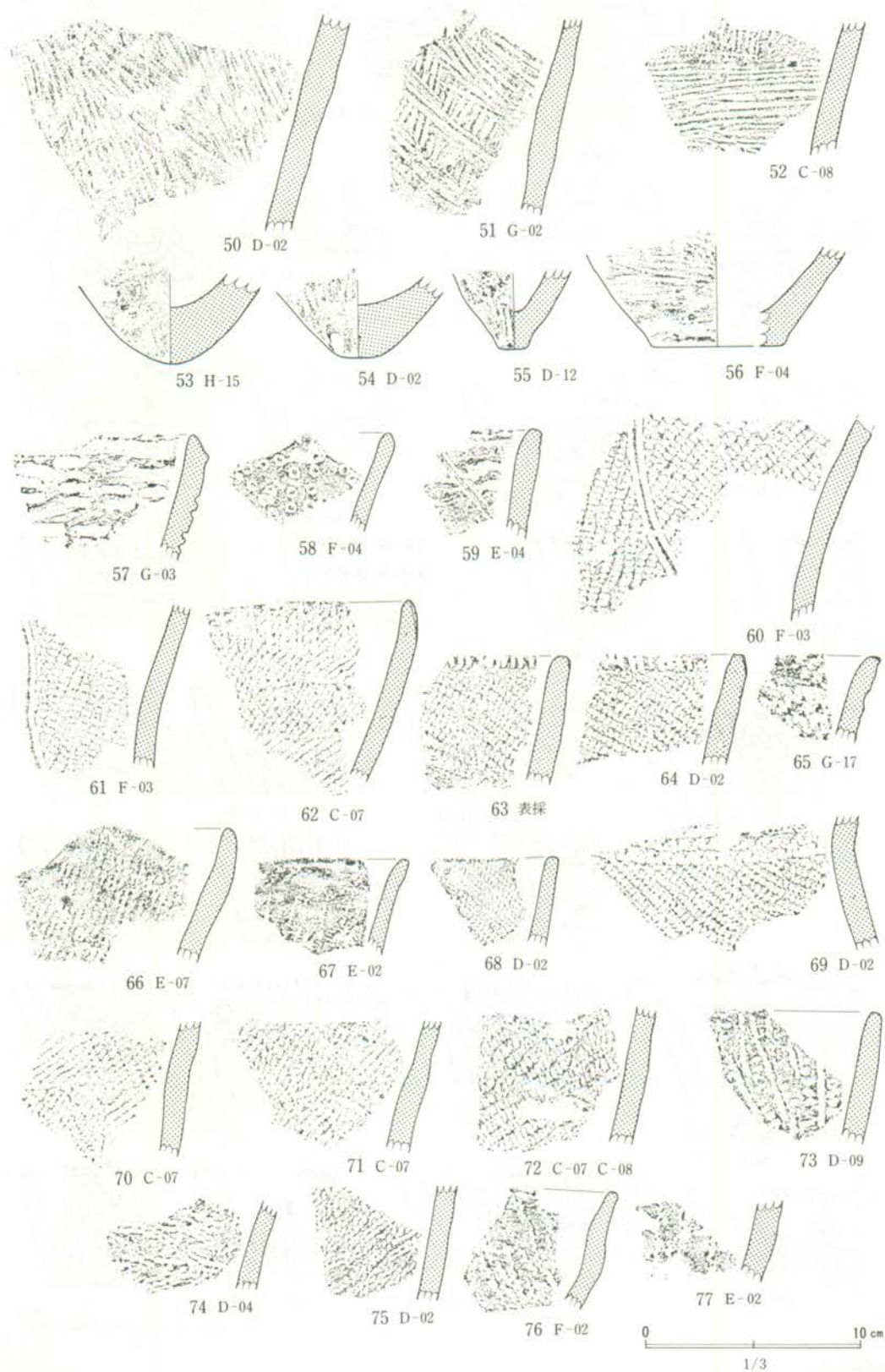
第193図 早期前半の土器 (1)



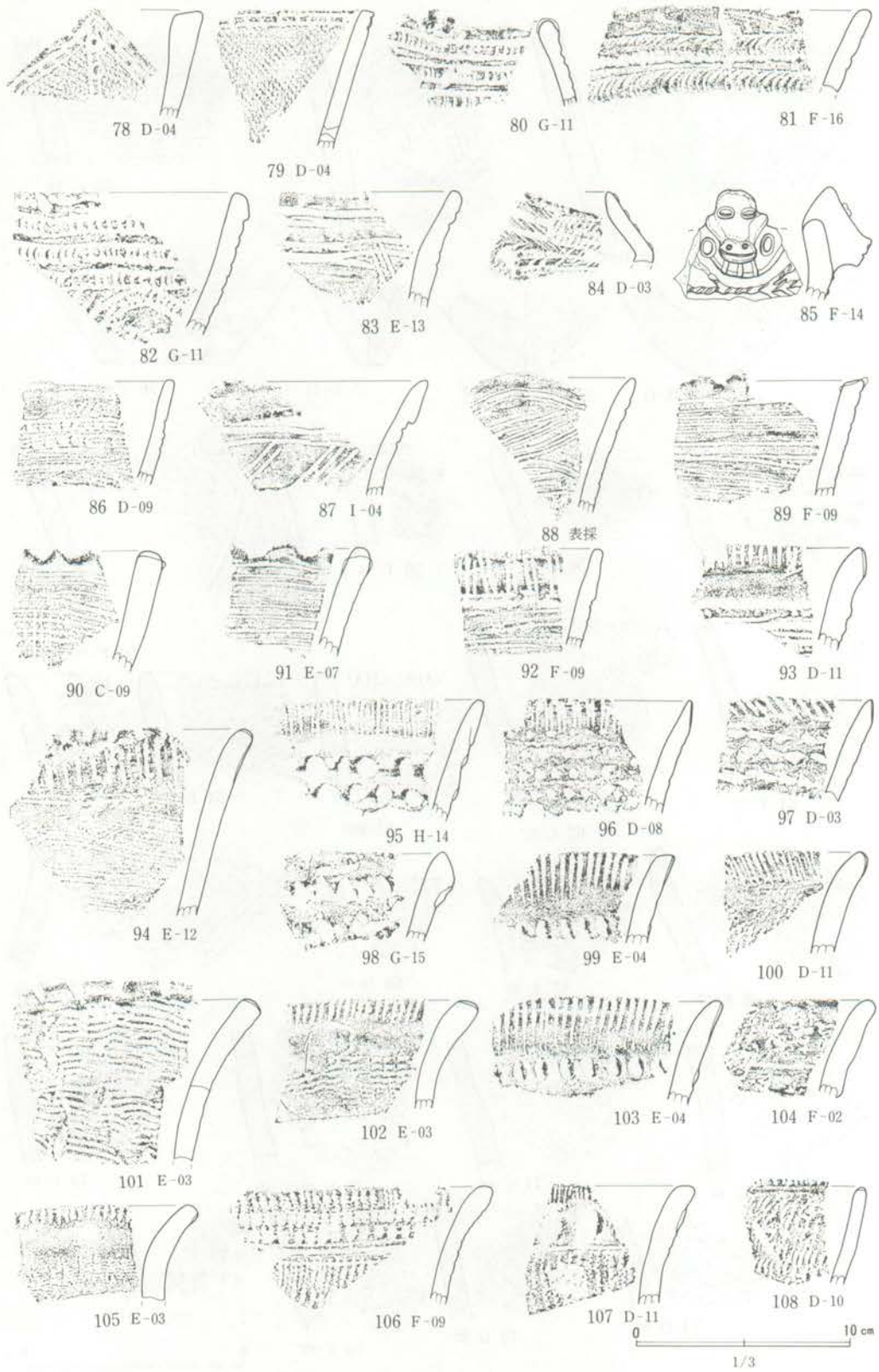
第194図 早期前半の土器(2)・早期後半の土器(1)



第195図 早期後半の土器 (2)



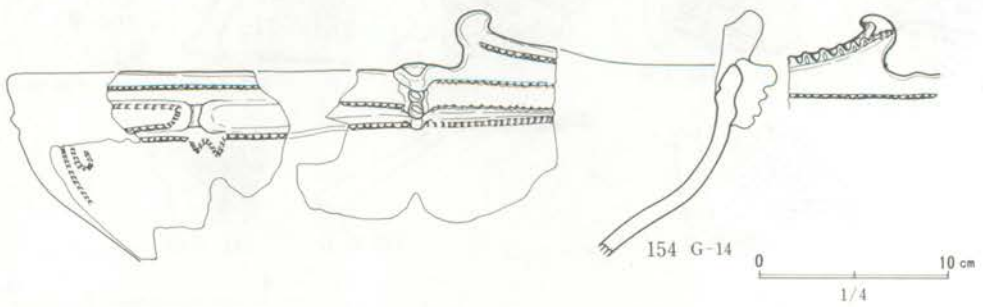
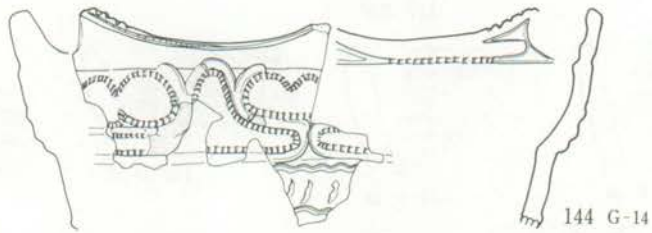
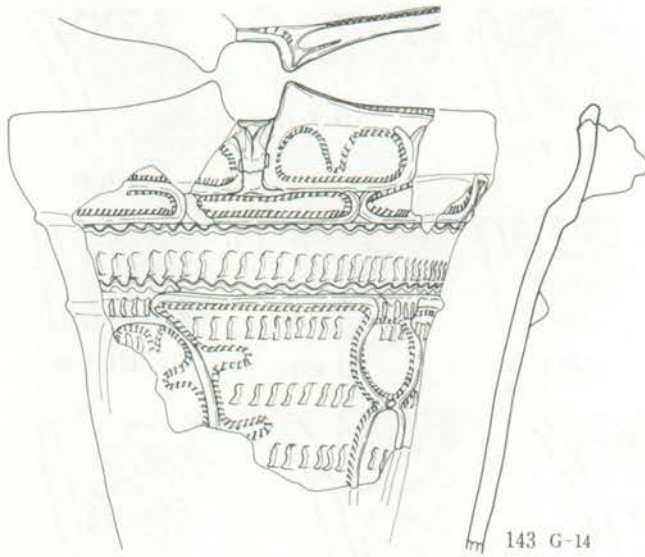
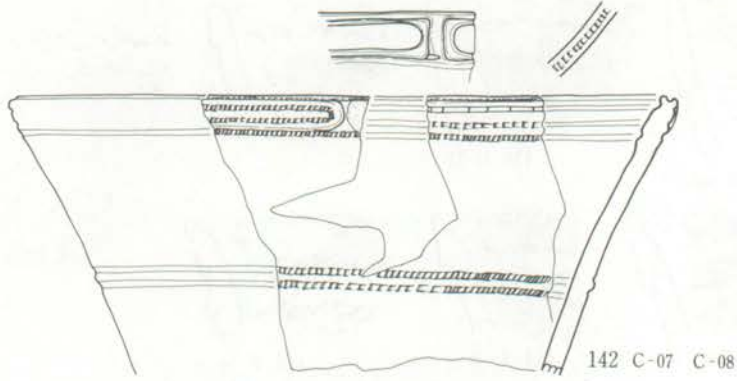
第196図 早期後半の土器(3)・前期前半の土器



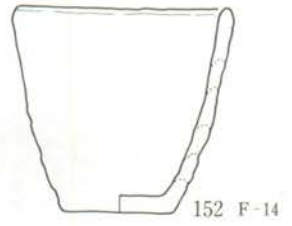
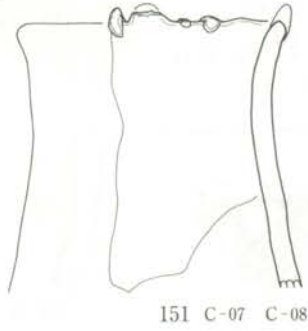
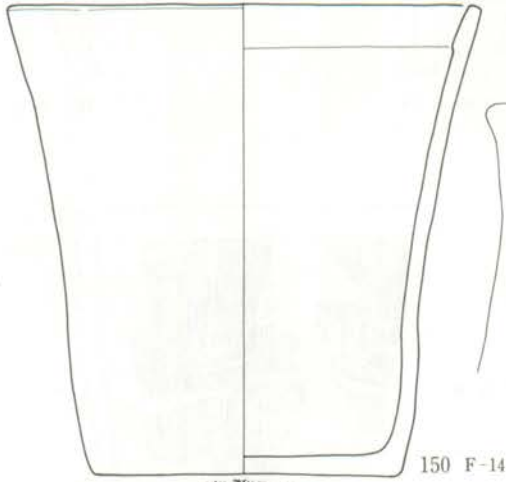
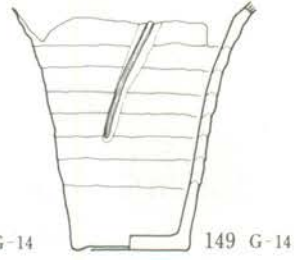
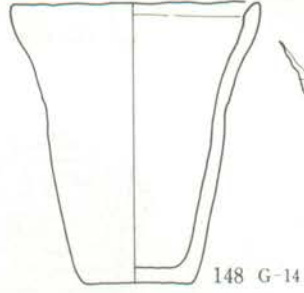
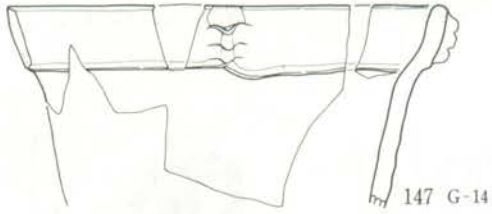
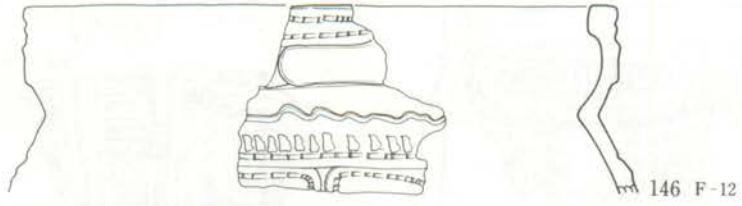
第197図 前期後半の土器 (1)



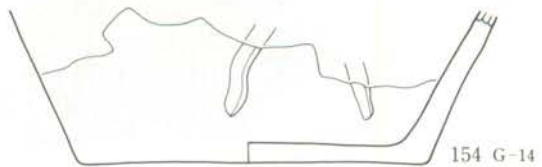
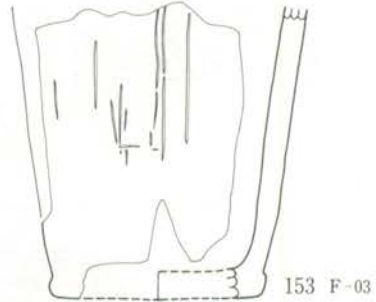
第198図 前期後半の土器 (2)



第199図 中期前半の土器 (1)

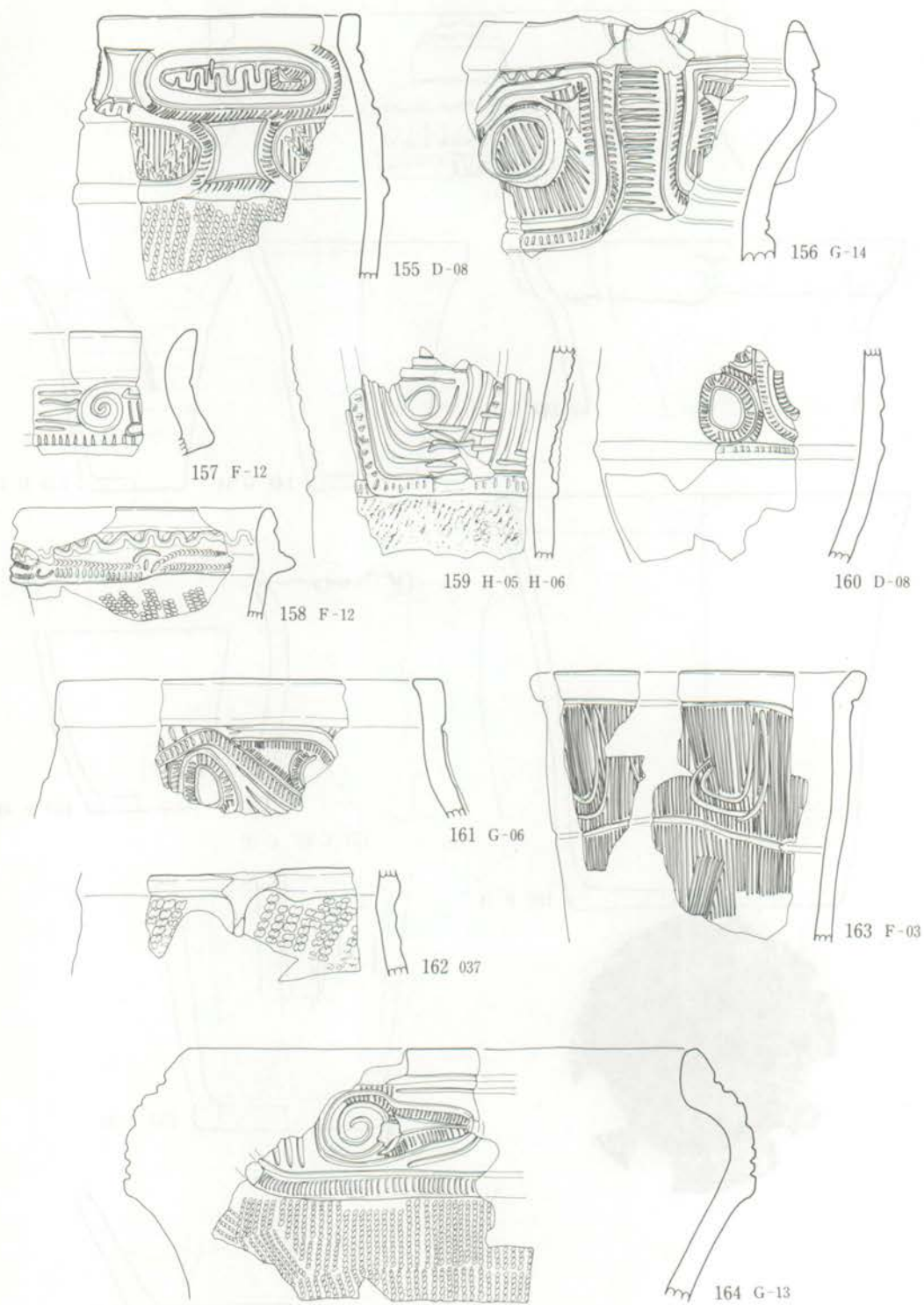


C-08

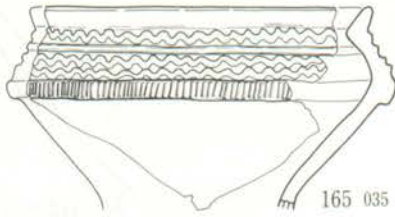


0 10 cm
1/4

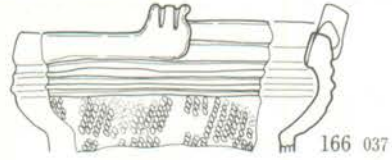
第200図 中期前半の土器 (2)



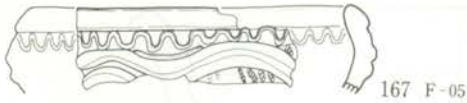
第201図 中期前半の土器 (3)



165 035



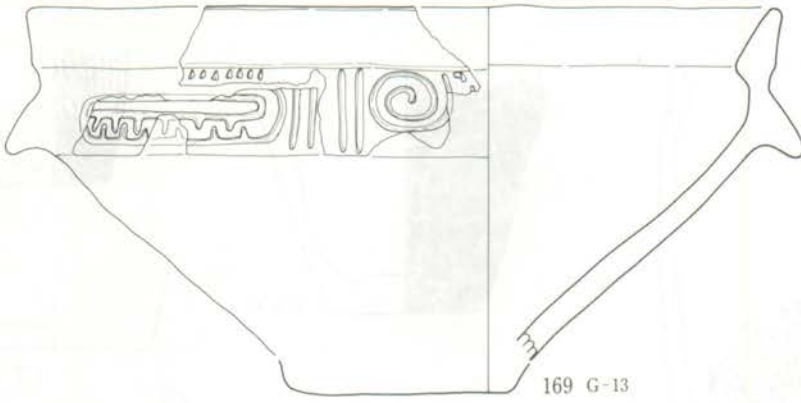
166 037



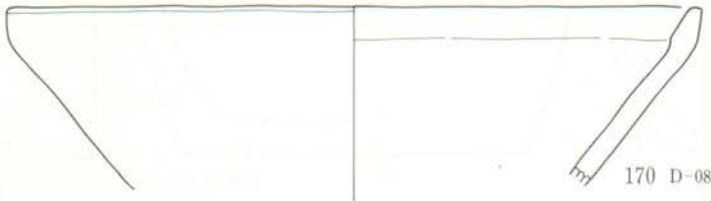
167 F-05



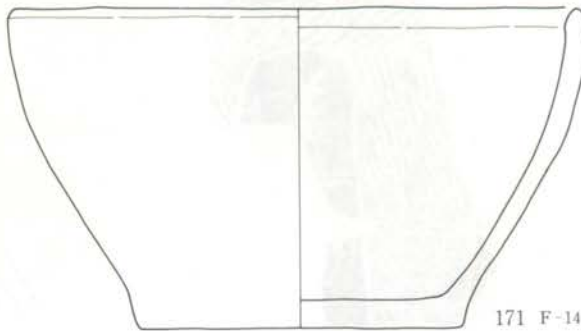
168 H-06



169 G-13



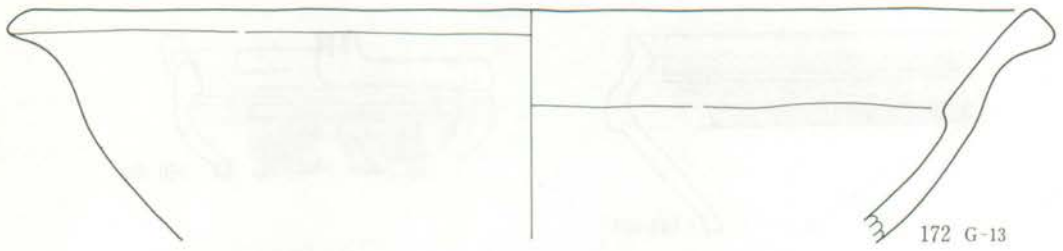
170 D-08



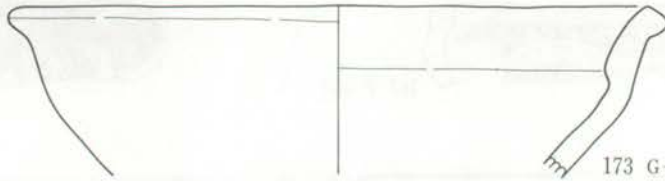
171 F-14



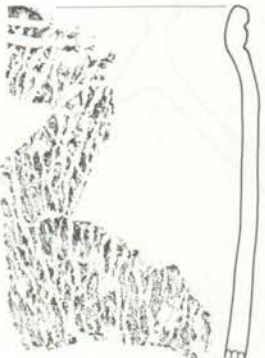
第202図 中期前半の土器 (4)



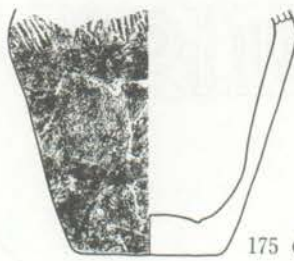
172 G-13



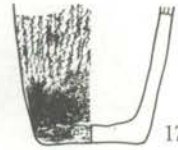
173 G-14



174 D-08



175 G-13



176 G-13



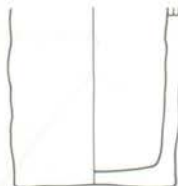
177 G-15



178 F-13



179 G-03



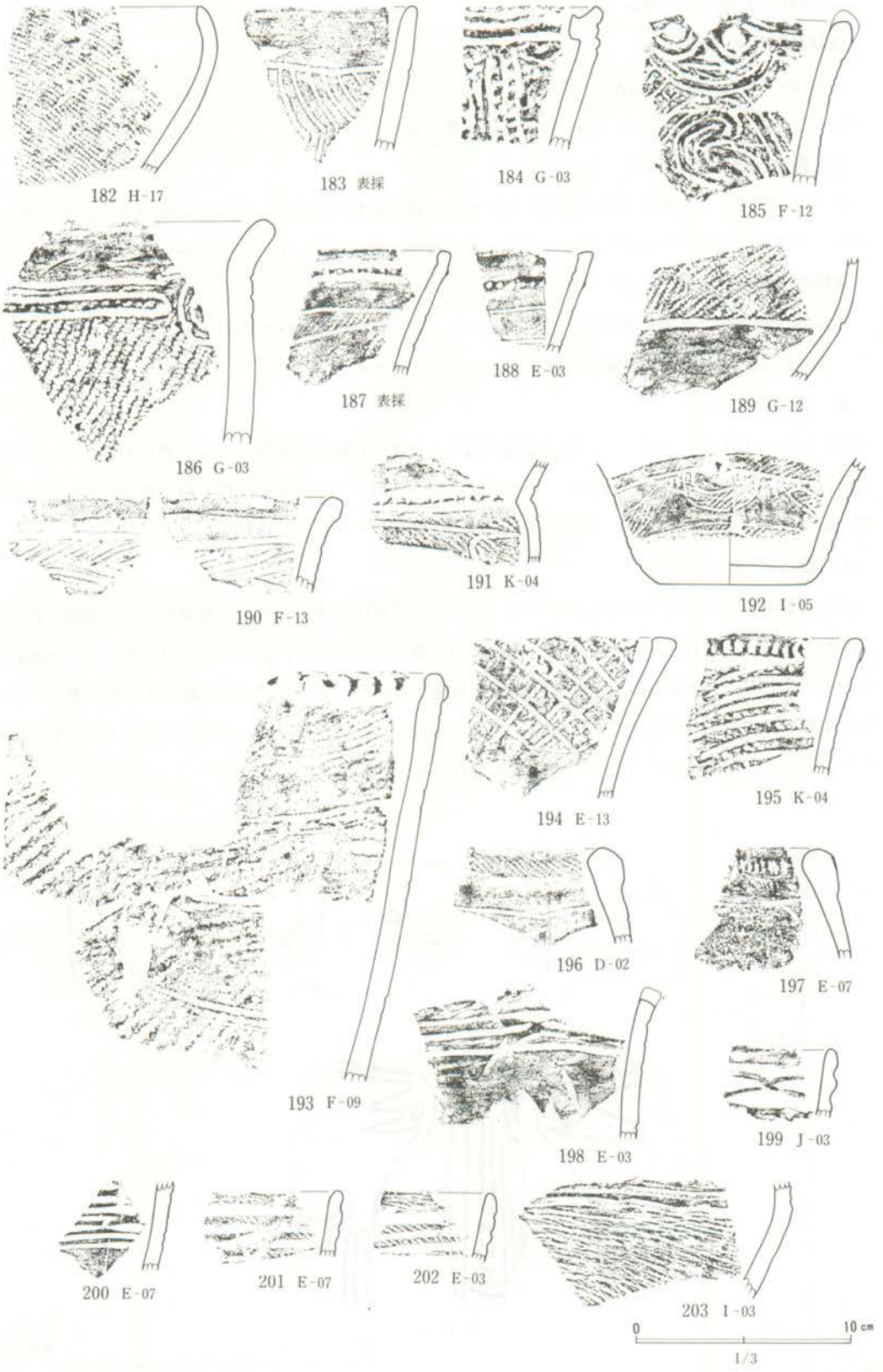
180 F-14



181 F-06



第203図 中期前半の土器(5)・中期後半の土器



第204図 中期後半～晩期の土器

(6)特殊な土器及び土製品 (第205～210図)

玦状耳飾 (第205図: 1)

径3.7cm、中央口径推定0.8cm、表裏が若干凹み、断面四角形を呈する玦状耳飾残欠である。1点のみが出土し、第5群前期後半の土器に伴うものと考えられる。

有孔鍔付土器片 (第205図: 2・3)

薄手の作りで、外面から焼成前穿孔が施される。鍔は比較的低平で、断面三角形を呈す。第6群土器、勝坂式末葉の土器に伴うものと考えられる。塗彩痕跡は無い。図示した2点のみが出土した。

楕円形土製品 (第205図: 4)

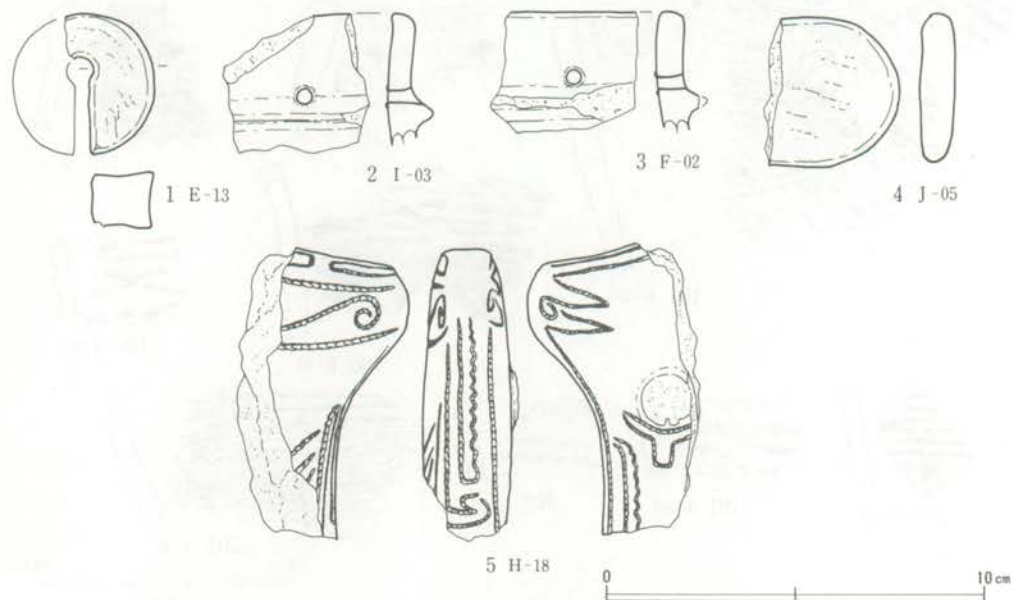
表裏面が無文で、ミガキ整形が入念に行われる。半欠品で、用途・性格は不明。胎土、整形の特色から、第6群土器に伴うものであろうか。1点のみ出土である。

土 偶 (第205図: 5)

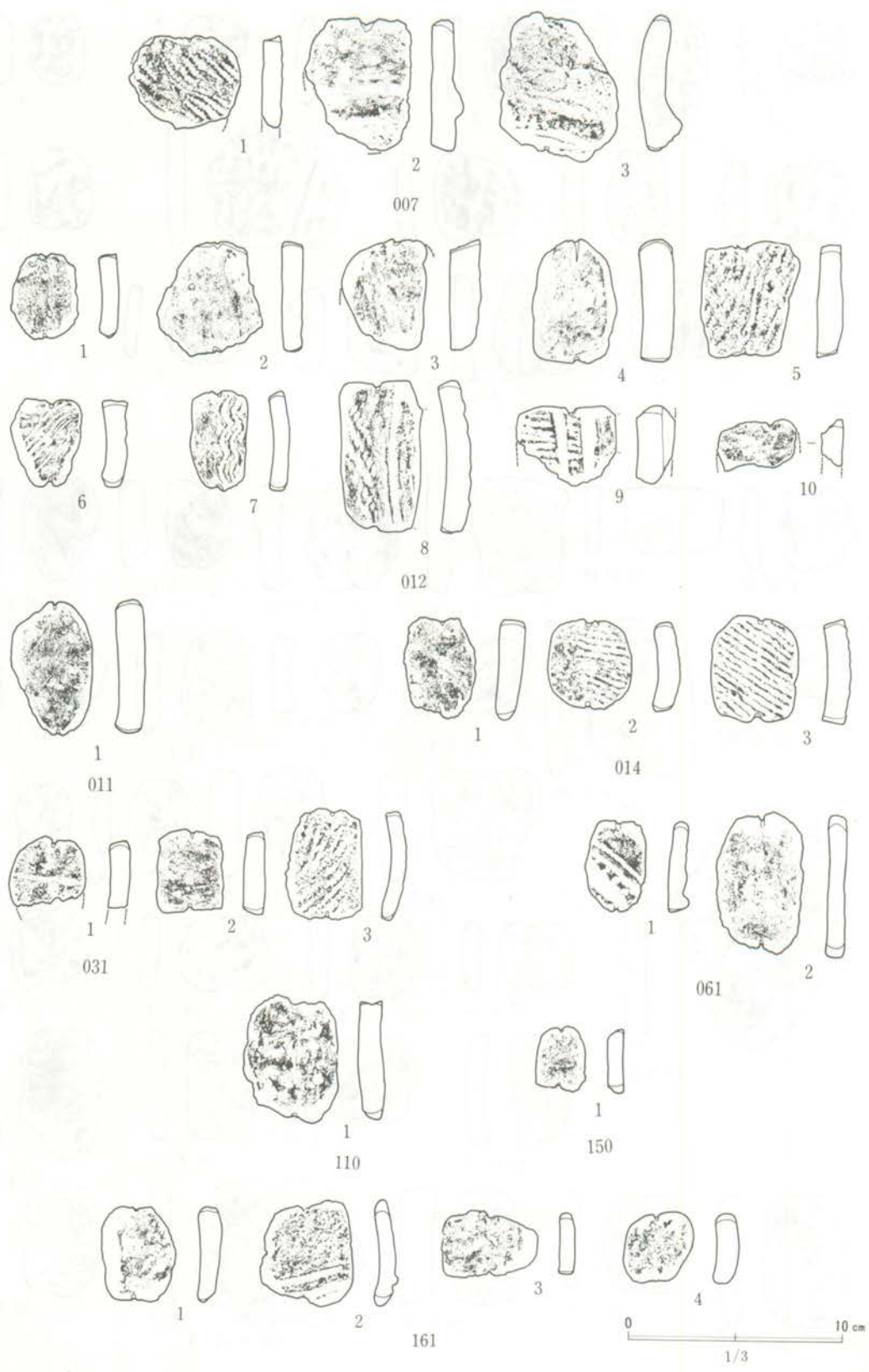
図示した1点のみが出土した。所謂板状土偶で、身体の右腕及び右胸部上半が遺存する。ペン先状工具により結節沈線文が繊細に施され、その施文は胸部側面にまで及ぶ。文様や施文具の特徴から、第6群土器に伴うものと思われる。中期前半の土偶の特色を良く具有した資料である。

土 錘 (第206～209図)

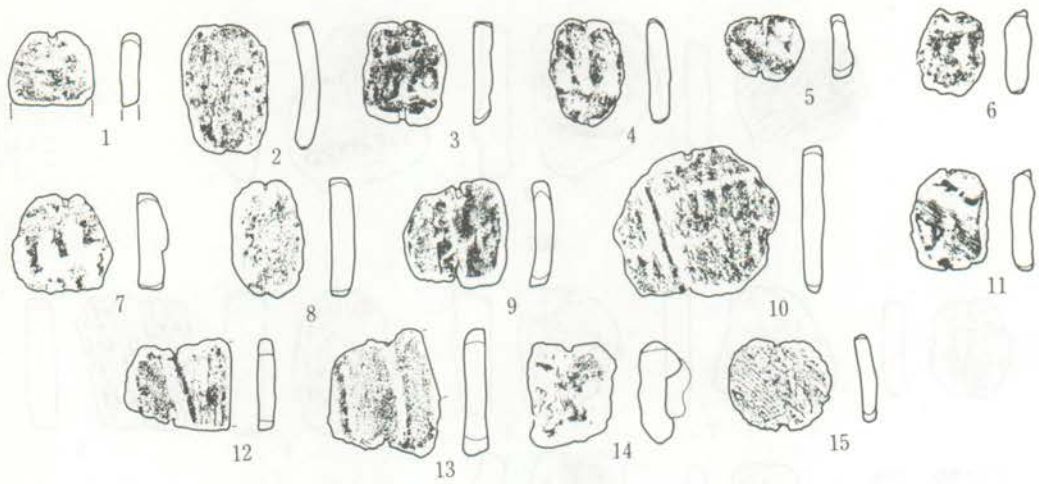
出土総数407点のうち、168点を図示した。大きさ、重量等の諸データは計測済みだが、紙幅の都合から掲載を断念した。資料のほとんどは、楕円形の土器片長軸方向に、2つの切れ目を入れた、土器片錘である。素材となる土器片は、使用した時期を反映するのか、その大半が第6群、第7群土器で、いずれも中期前半のものである。ただし、100のみは当遺跡から出土例のない、前期前半関山I式土器の破片を用いており、近隣遺跡からの素材の搬入を窺わせる。



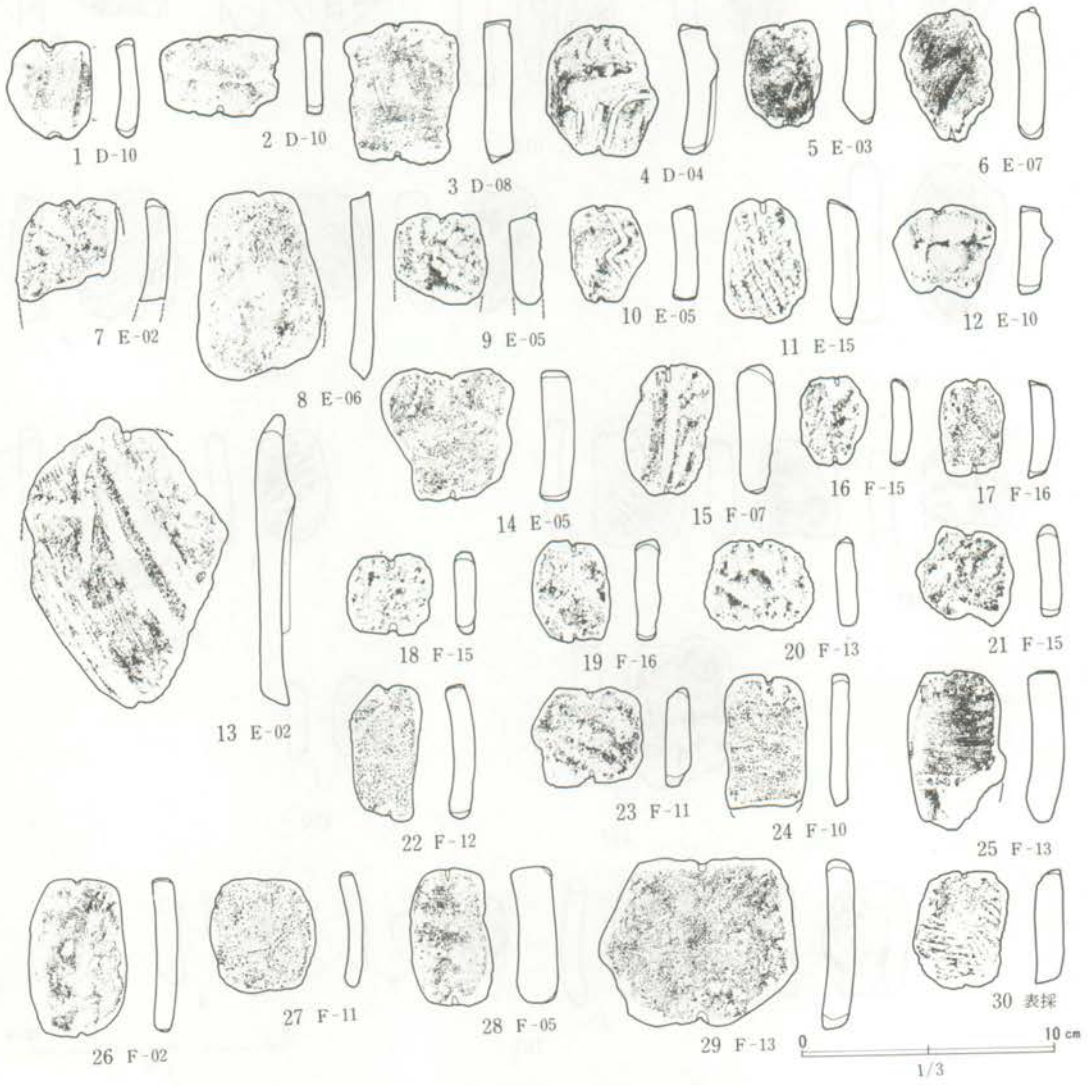
第205図 特殊な土器・土製品



第206図 土錘(1)遺構出土



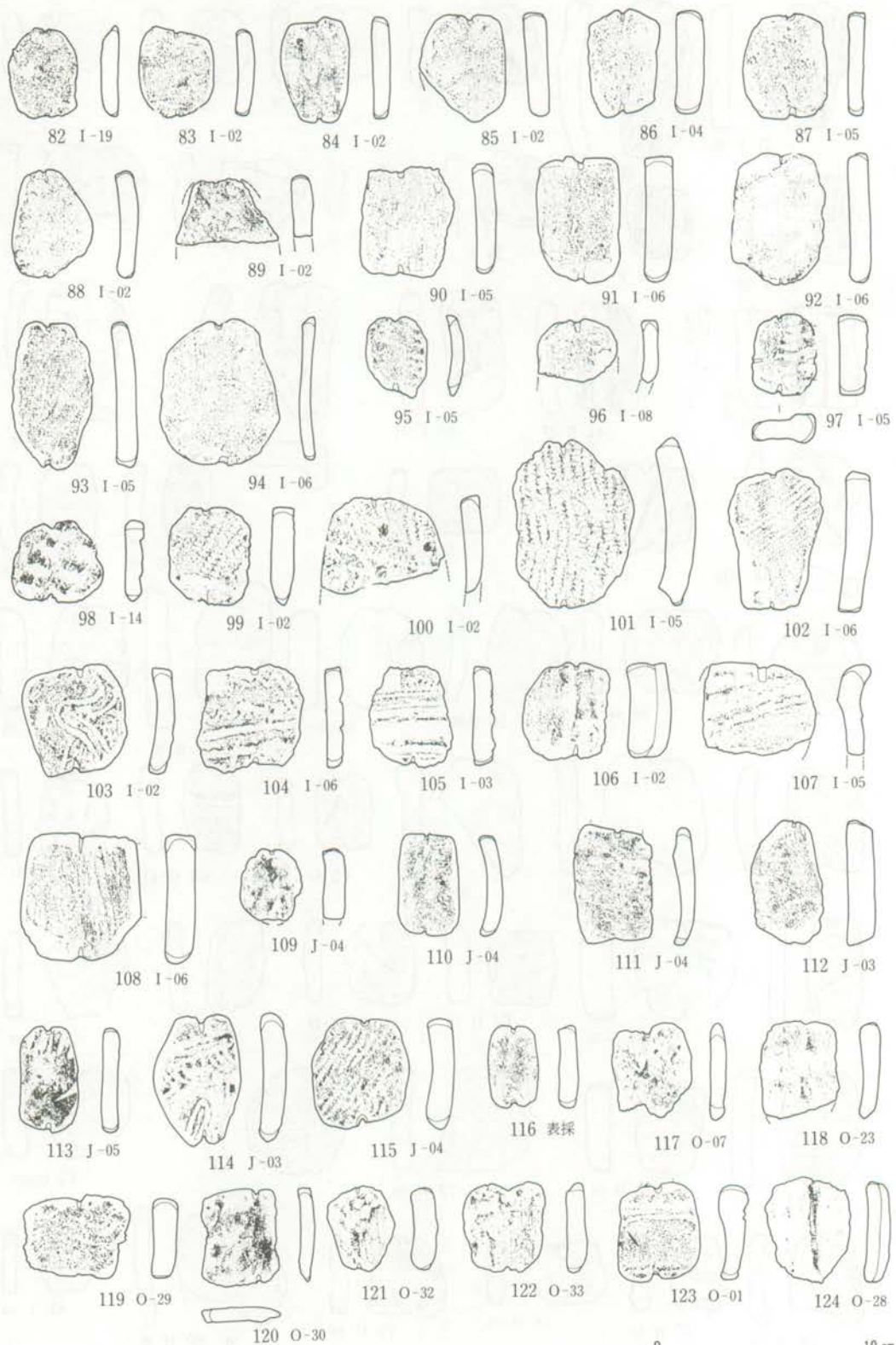
162



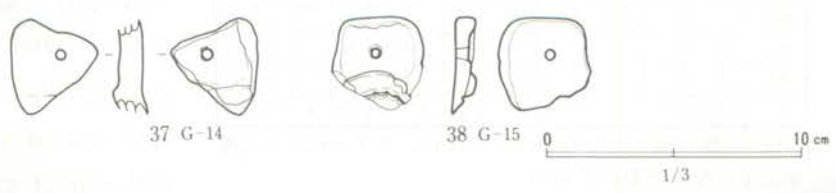
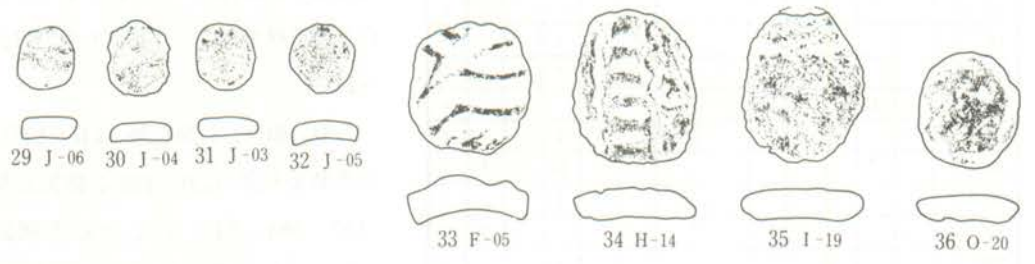
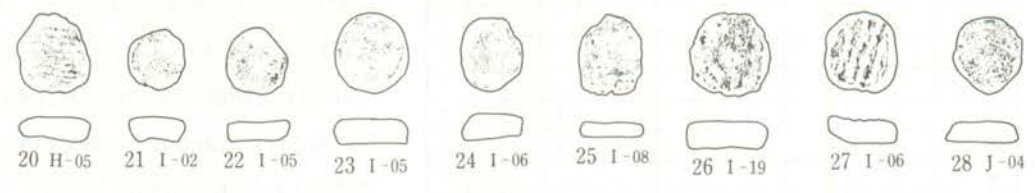
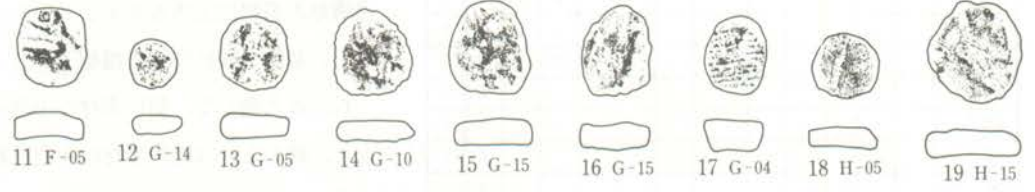
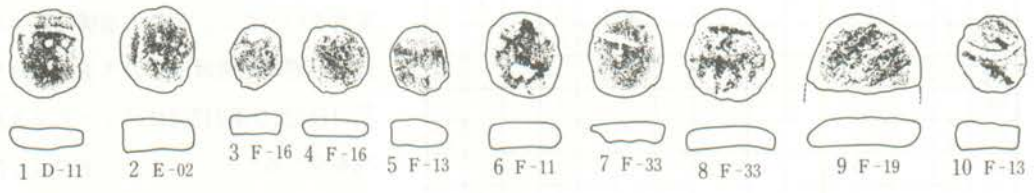
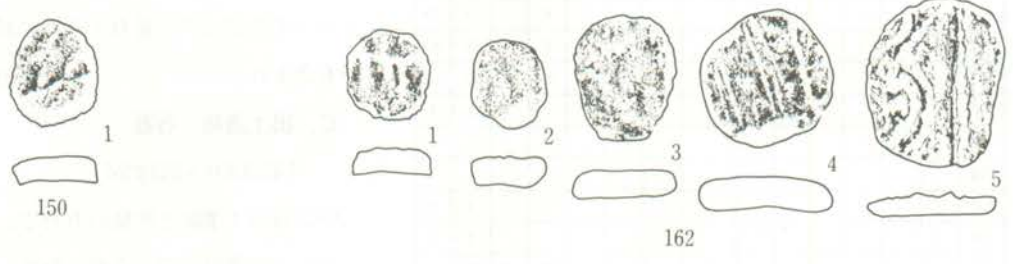
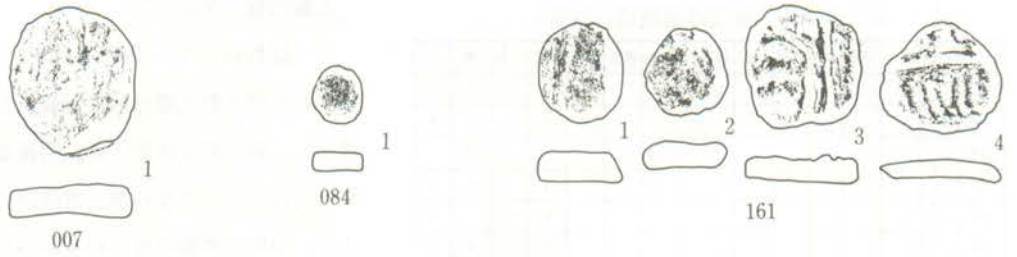
第207図 土 錘 (2)



第208図 土錘 (3)



第209図 土錘 (4)



第210図 土製円板・有孔円板

第3表 聖人塚遺跡遺構別石器組成

	石鏃	石斧	削器	楔形石器	石錐	礫石器	石皿	礫器	浮石	剥片	石核	礫	計
002												7	7
004										7	1		8
005												2	
007							1			1		8	10
008										6			6
010										3		6	9
011									3	6		11	20
012		1	1							41		39	82
014										19	1	21	41
015												1	1
018										2		35	37
024												4	4
029												3	3
030												1	1
031			1			2				27	2	41	73
032										1		3	4
039												1	1
045										1			1
060										1			1
061		1								8		2	11
064										3			3
082										5		2	7
084										2			2
085										2			2
086												1	1
103												4	4
105												7	7
106												2	2
110									2				2
111												2	2
116												1	1
118										1		3	4
124										1		1	2
130												3	3
131												2	2
132										4		1	5
133						1				2		2	5
136			1										1
145										1			1
150										32		5	37
151										1			1
152												2	2
160										1			1
161						1				33		18	51
162		1				1				62		7	71
164												1	1
計	0	3	3	0	0	5	1	0	3	275	4	249	543

(注) 礫石器としたものは、スリ石、タタキ石など円礫を加工しないで用いるもの。

土製円板 (第210図)

出土総数155点中、50点を図示した。いずれも第6群土器の破片周縁部を研磨して、略円形に成形する。明確な製作年代は詳らかでないが、常識的に考えて、中期前半期のものが多いのだろうか。中央部に円孔を有するもの37・38も含まれる。(原田)

C. 出土遺物：石器

(第213図～第233図)

中山新田 I 遺跡と同様の方針で、グリッド・遺構単位で全資料を分類し、集計を行ったが、個々の遺構に関する詳しい資料処理は未了のまま残された。第211図及び第212図にグリッド出土遺物を全て表示した。また、第3表は各遺構毎の遺物出土状況を示している。以下、基本分類に則して概観する。

石器は大別して、剥片素材の小型石器と、礫あるいは礫片素材の大型石器に分けられる。前者には、石鏃(1～43)、石錐(45～53)、楔形石器(54～74)、削器(75～103)が含まれ、別に刃こぼれのある大小の剥片が大量に検出された(104～120)。そして、これらの素材を提供した石核も多い(121～143)。

大型の類は、打製石斧(147～190)、局部磨製石斧(191、192)、磨製石斧(193～204、146)などの石斧礫器(205～211)、一端に敲打痕を残す礫(敲き石)(42～246)、磨石(212～218)、礫表に磨痕と共に被敲打痕のある礫(219～234)、礫表に被敲打痕のある礫(235～237)、石皿(247～250)等の種類がある。

石鏃 大半が黒曜石製で、少量のチャート製のものと混じえる。形態的に見ると、①平基三角鏃（1、2）、②微凹基（3～20、22）、③凹基（21、23～33）の3種類が認められる。①はおそらく縄文早期に朔及しよう。側縁がゆるく外彎し、基部の抉りの深いものが目立つ。41～43、あるいは44などは未製品や、製作途中で破損したもののだろう。

石鏃 比較的幅広の剝片の一端を尖らせたものが多い。鏃体部の加工は表裏から入念に加えられ、断面四角形となる。やはりほとんどが黒曜石製である。

楔形石器 黒曜石製のものに限られる。形態的には、①薄手で幅のある長方形をしているもの（54が典型）と、②厚手で縦に長い紡錘体状のもの（61が典型）の両者があるが、②の方が少し多く出土した。全体に小型のものが多いようである。

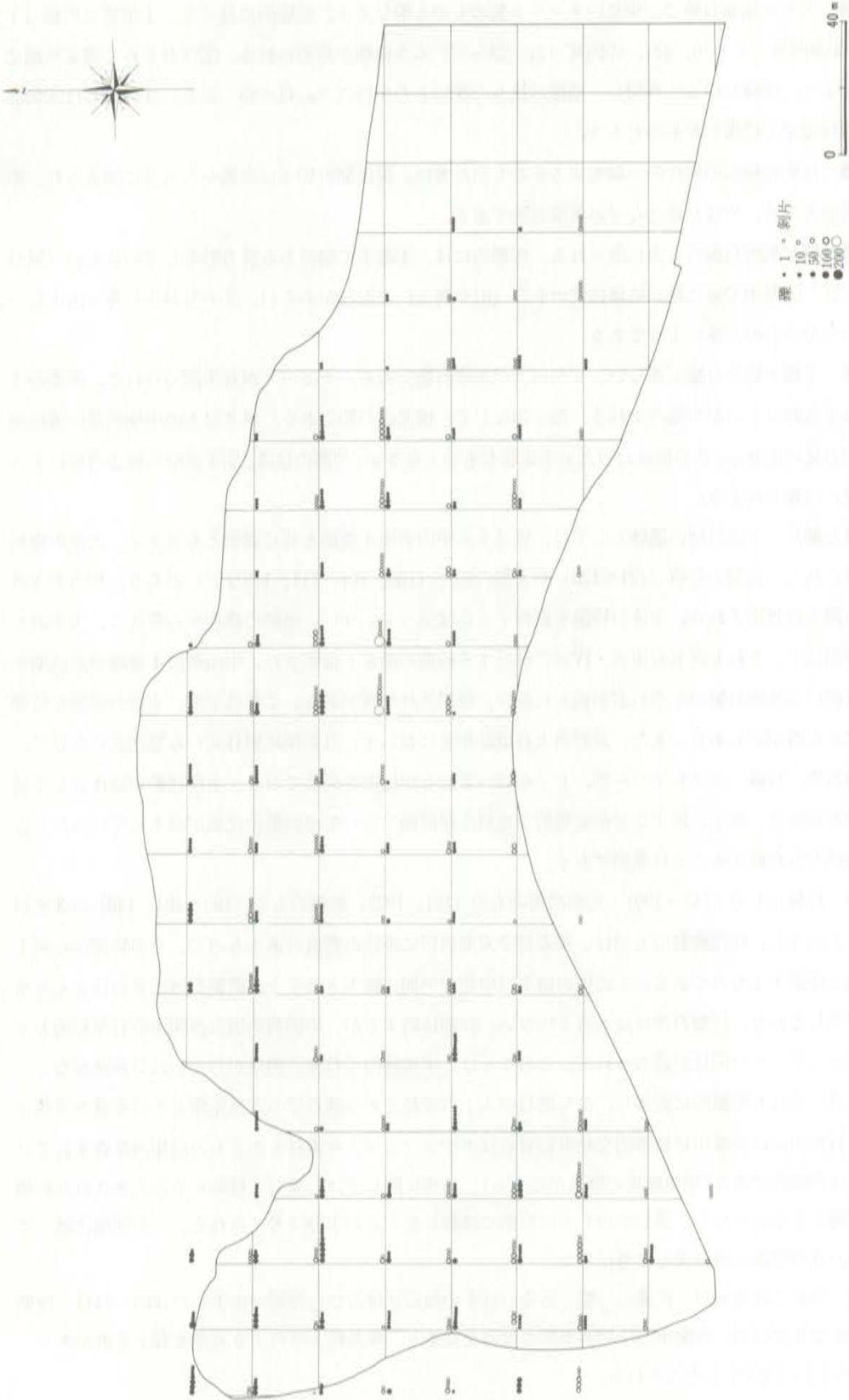
削器 多種多様で分類が難しい。9割以上が黒曜石製である。チャートが若干認められる。削器のうちには定型的なものが少量含まれる。75～79などで、横刃の石匙である。東北日本の中期前葉の遺跡から類例が見い出せる。その他はだいたい不定型なものとなるが、刃部の位置、加工部位の縁边角等によって数種に分類されよう。

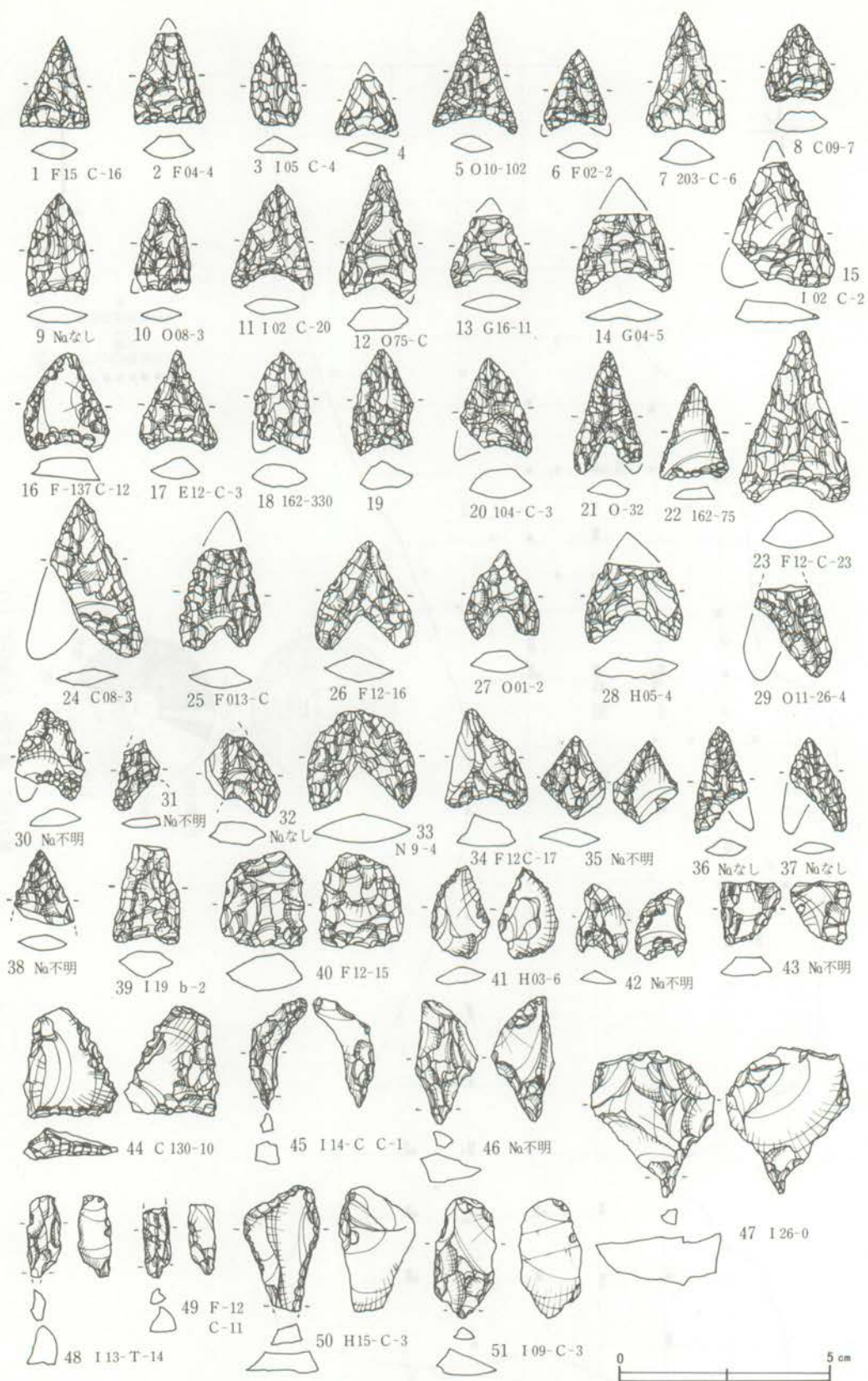
石核と剝片 下総台地の遺跡としては、後述する中山新田Ⅰ遺跡と共に異例とも言える、大量の資料が検出された。大型の石核（121～125）や大型の剝片（106、107、111、112など）があり、相当大き目の原石搬入が想定される。全体の特徴を把握するには至っていない。遺跡の様相から考えて、大半のものが中期前半、それも阿玉台Ⅲ式・Ⅳ式に併行する時期の所産と推定され、中山新田Ⅰ遺跡の形成期から引き続いて黒曜石製の小型石器が盛んに製作、使用された観がある。これは丁度、土器の器面を竹管文が埋める時期でもあり、また、長野県大石遺跡報文において、九兵衛尾根Ⅱ式から貉沢式にかけて、「磨製石斧、石鏃、スクレイパー類、ドリルのいずれもが比率を高めており、生産活動が総体として活発になるなかで、木工、皮工などが直接的な食料生産活動でない生産活動の比重が高まっていった」とする指摘とも合致することは重要である。

石斧 打製のもの（147～190）、局部磨製のもの（191、192）、磨製のもの（193～204、146）の3者がある。このうち、局部磨製のは、礫素材で刃部周辺に帯状の磨痕のあるもので、その特徴から第1群土器に伴出するものである。その他の過半は中期前半期に編入されよう。磨製石斧はそのほとんど全てを図示しており、打製石斧に比べると少ない。詳細は略するが、中期前半期の西関東の石斧形態とその組成にパラレルな関係が認められる。このことは、本遺跡内で石斧の製作が行なわれた形跡がなく、別な地点、それも距離的に近接し、かつ原石の入手の容易である地点での大量生産とその交易を予想させる。石斧中には多摩川に特徴的な粘板岩質点紋ホルンフェルス素材とするものが相当量含まれていたことは示唆的であり（柴田徹氏の御教示による）、石斧に関しては、原石の移動がその大きさのため極めて困難であることから、製品そのものの形態で移動したことが十分に考えられる。この問題に就いては、一の谷西貝塚の報告書を参考にした。

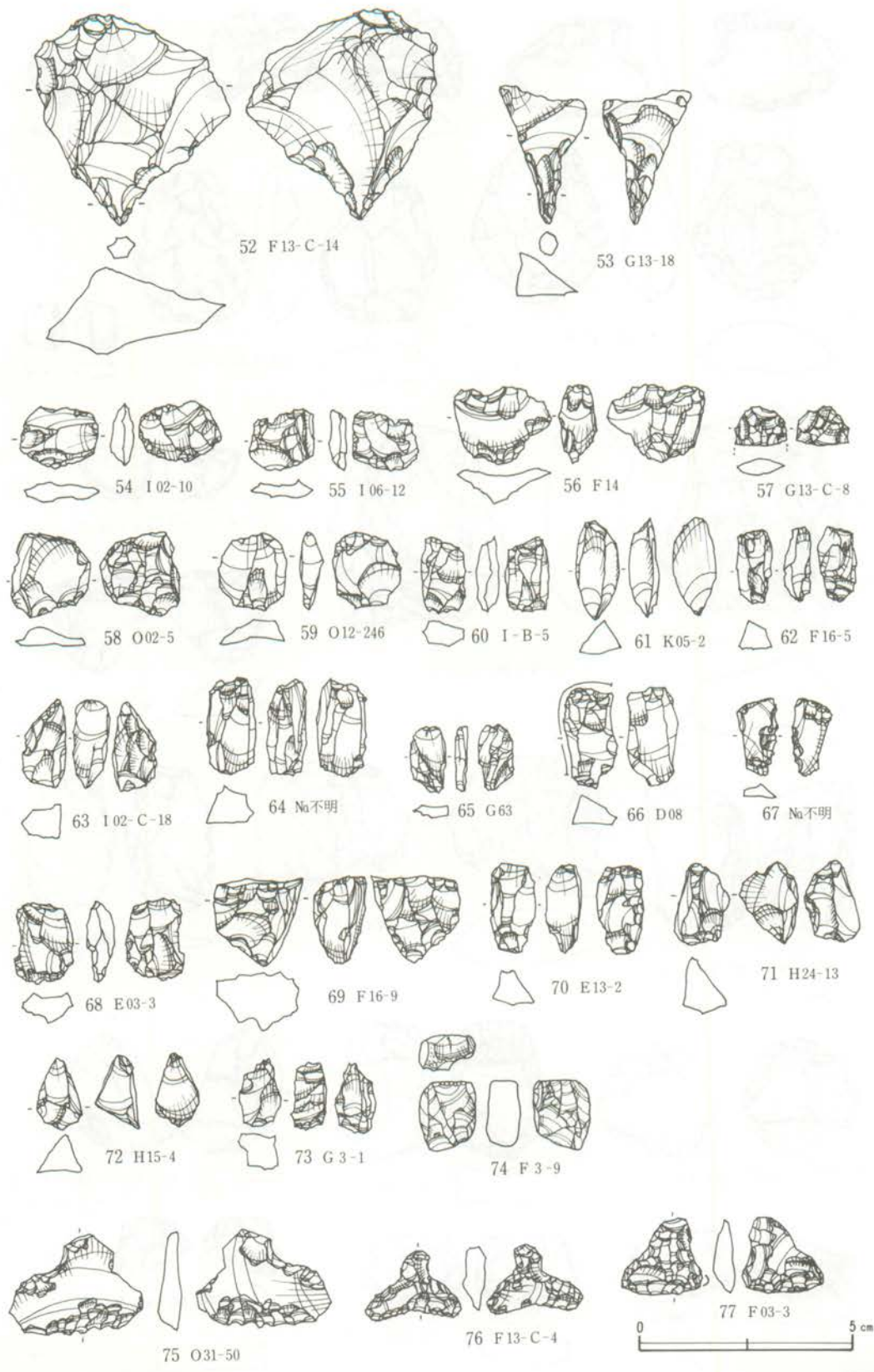
礫器 少量ではあるが、円礫の一端、あるいはその周辺に付刃した礫器が出土した（205～211）。時期の判定はできないが、西関東の中期前半期の礫器を見ると、礫長軸と平行する刃部を有する例があり、211などはこの仲間かと考えられる。

円礫素材の大型石器 礫を余り加工しないで使用に供する石器をまとめたが、種々の変化がある。①

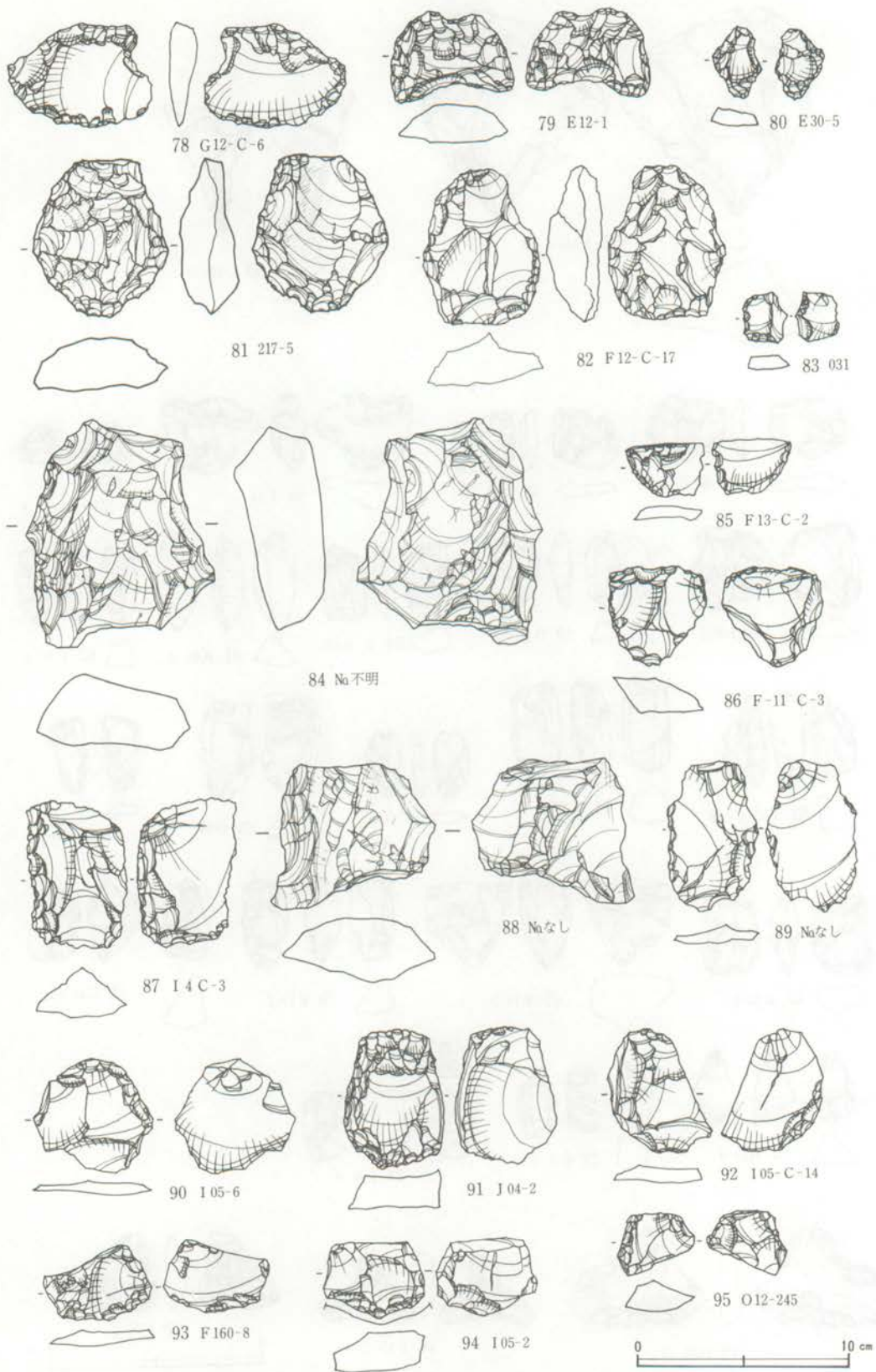




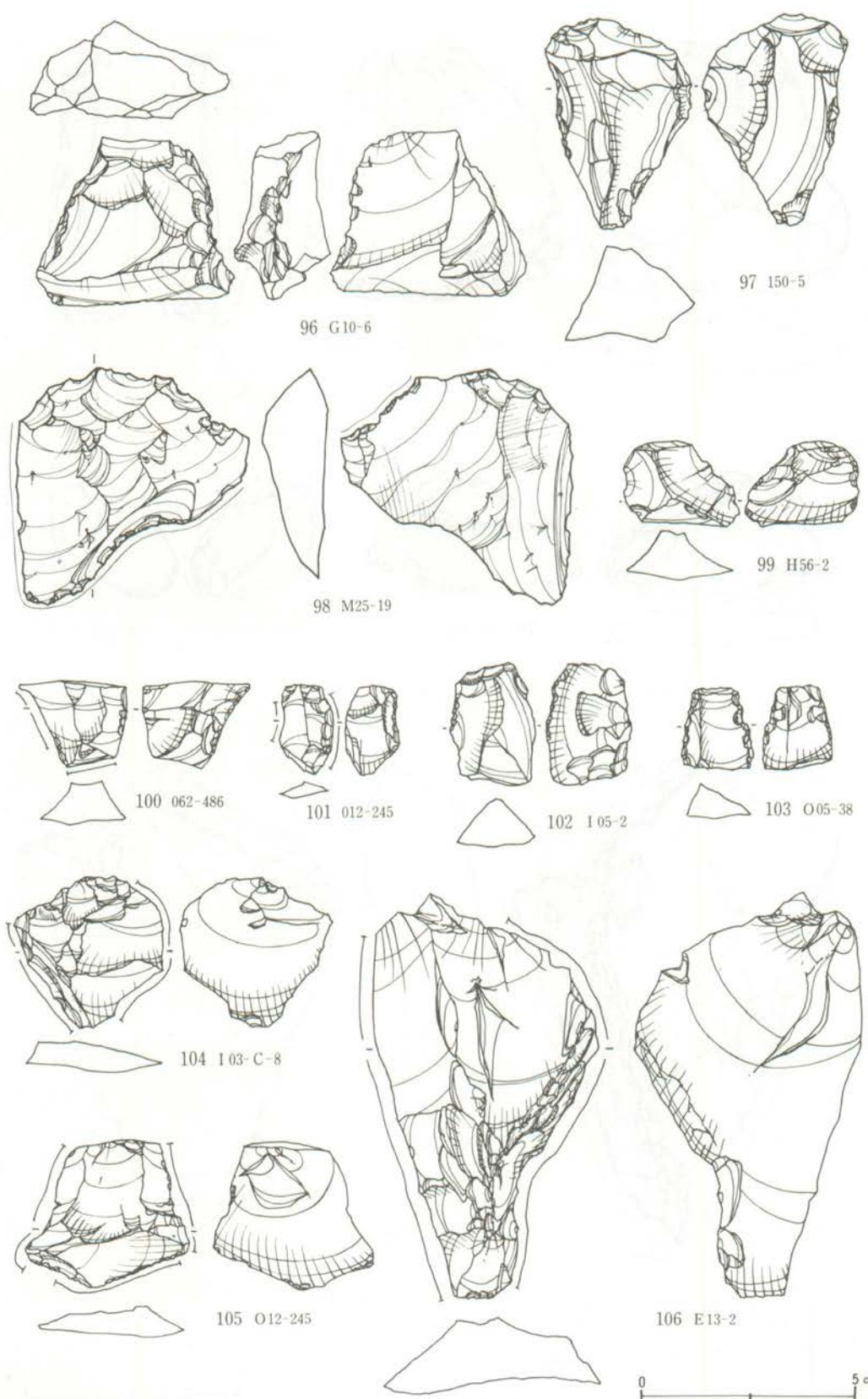
第213図 石器 (1)



第214图 石器 (2)



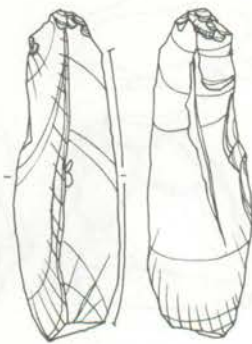
第215図 石器 (3)



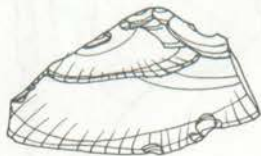
第216图 石器(4)



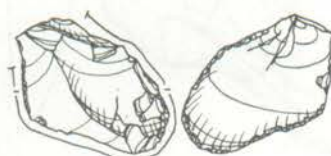
107 H11-4



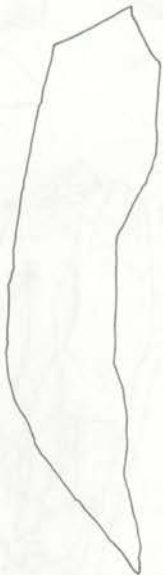
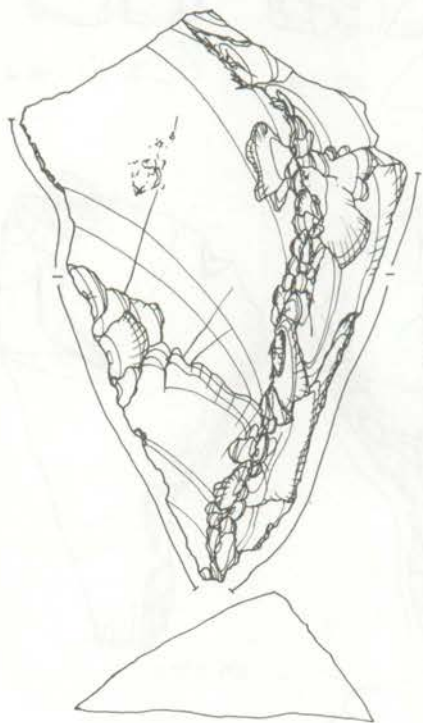
108 P0



109 162-513



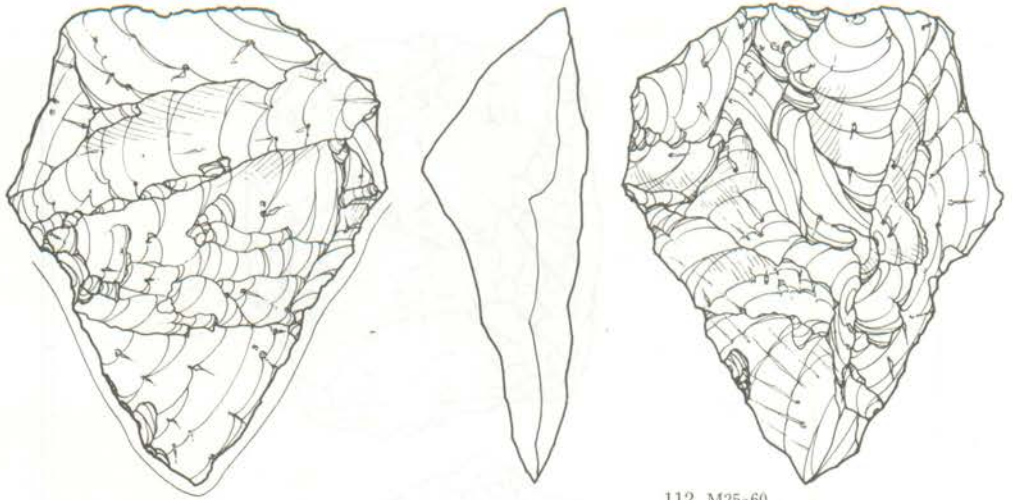
110 O85-3



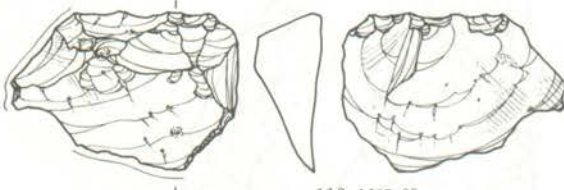
111 F12-16



第217图 石器 (5)

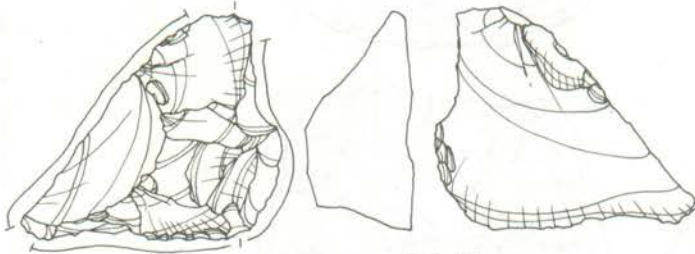


112 M25-60



113 M25-22

114 F12-16



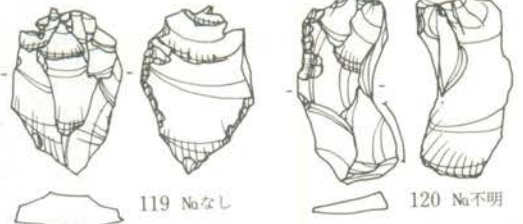
115 F14

116 E16-12



117 H11-4-2-C

118 D31-F12-65

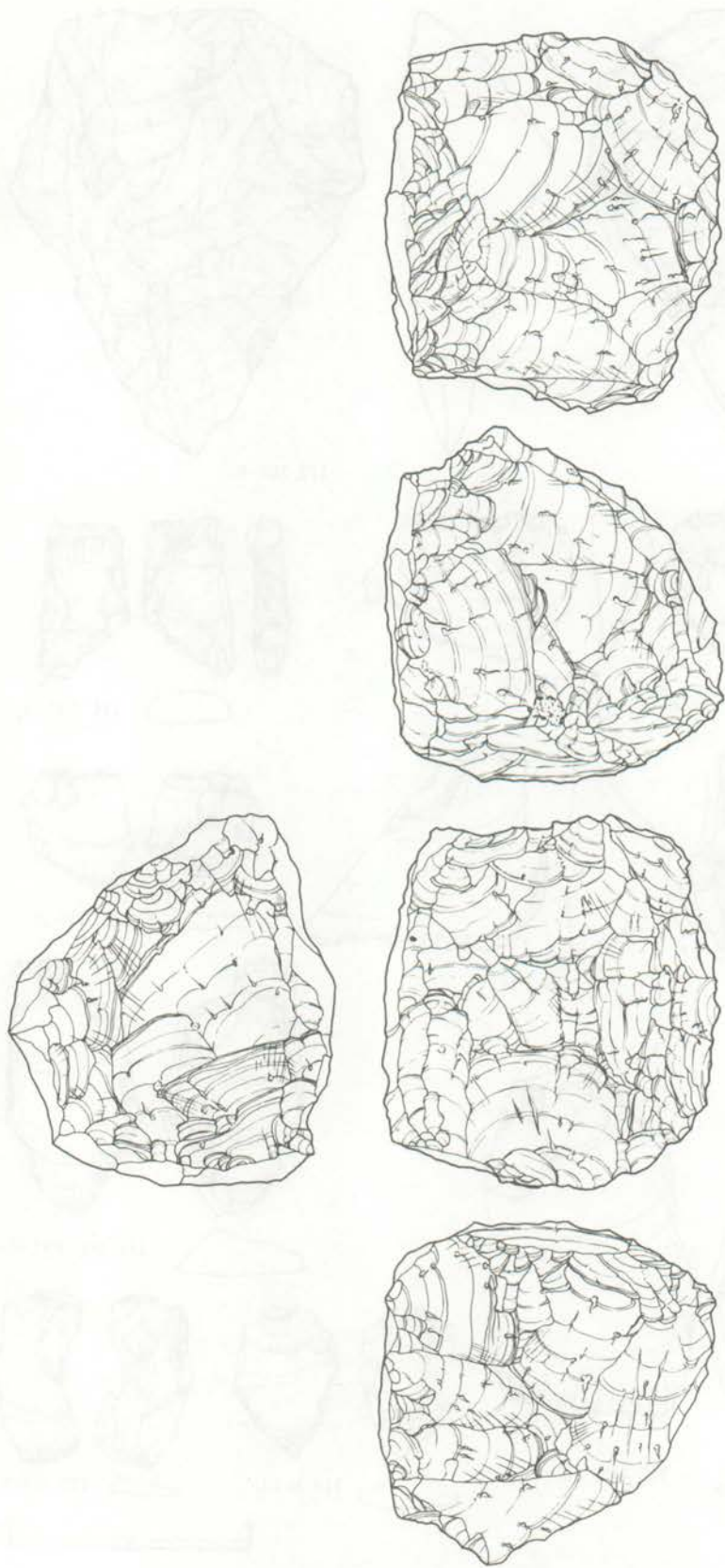


119 Noなし

120 No不明



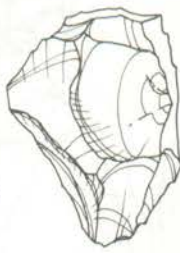
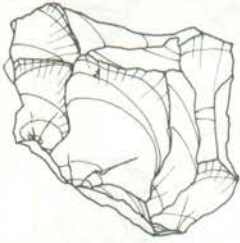
第218図 石器(6)



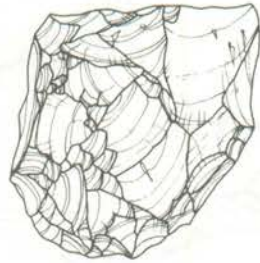
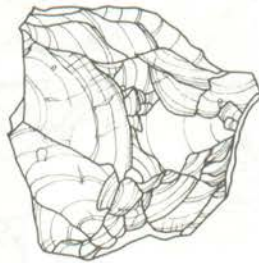
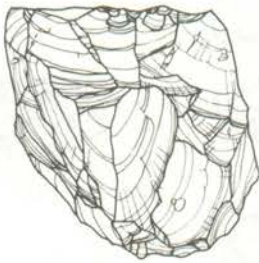
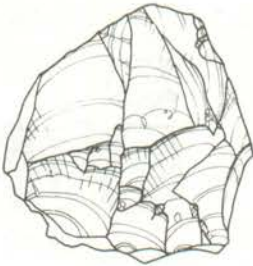
121 F 13



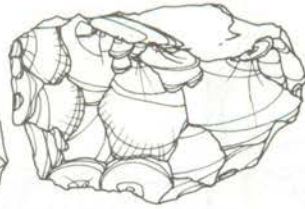
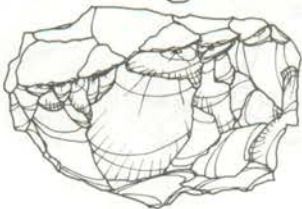
第219图 石器 (7)



122 F13-C-12



123 F14-69



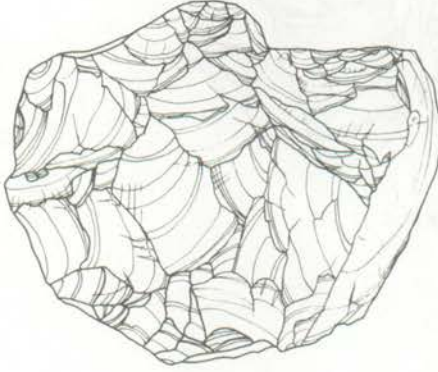
124 O13-C3



第220图 石器 (8)



126 F13-T36-22

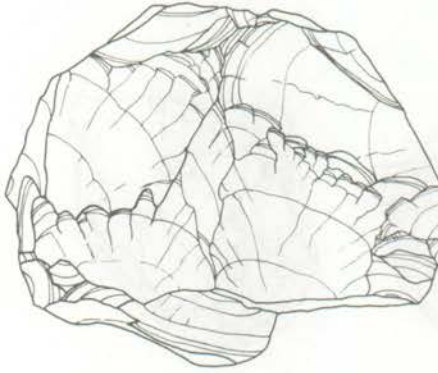


127 I04-10



128 E12-1

125 No不明



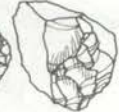
129 G13-C-11



131 H-12



130 E06-2



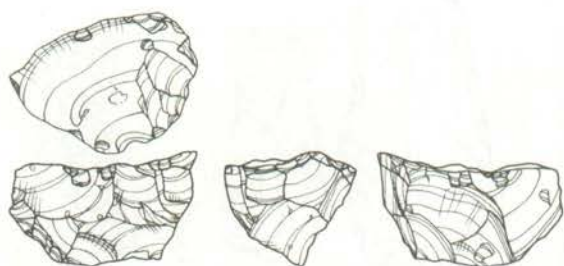
133 O14-74



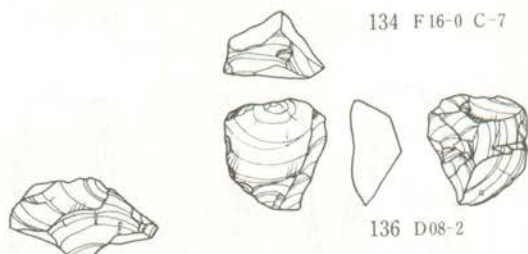
132 I19-A-4



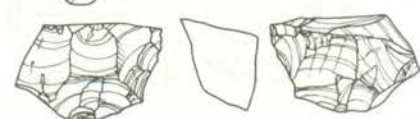
第221图 石器 (9)



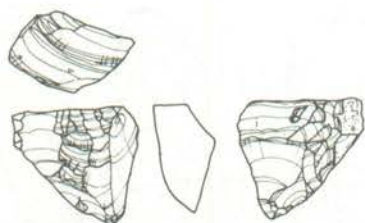
134 F16-0 C-7



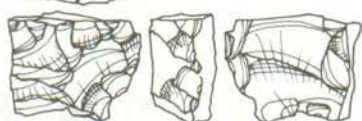
136 D08-2



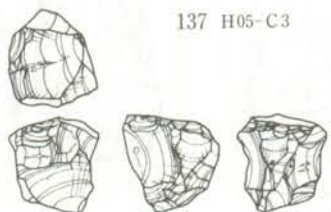
138 P31-P13 67



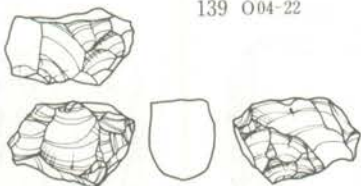
135 D01-1



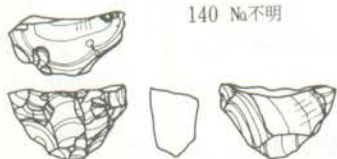
137 H05-C3



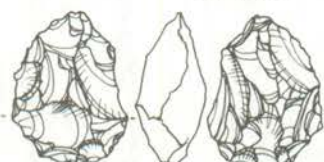
139 O04-22



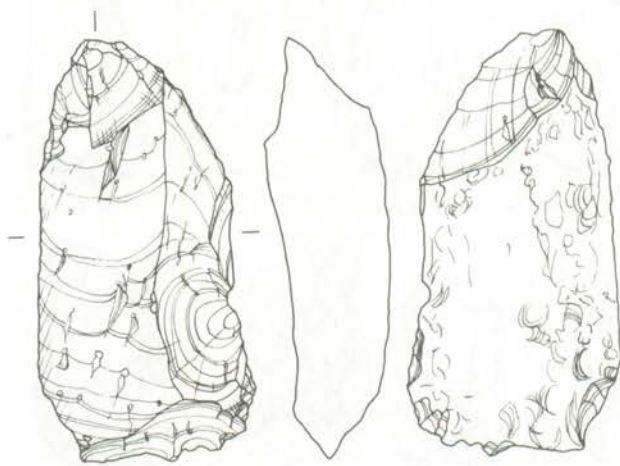
140 Na不明



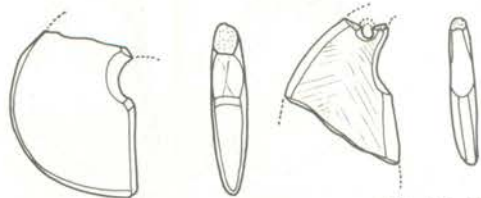
141 F11-1



143 6Q-3

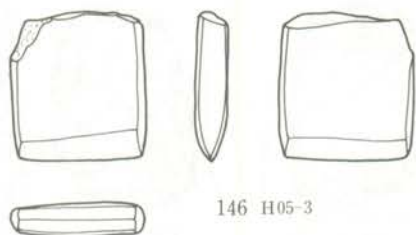


142 F17-C-19



144 Na不明

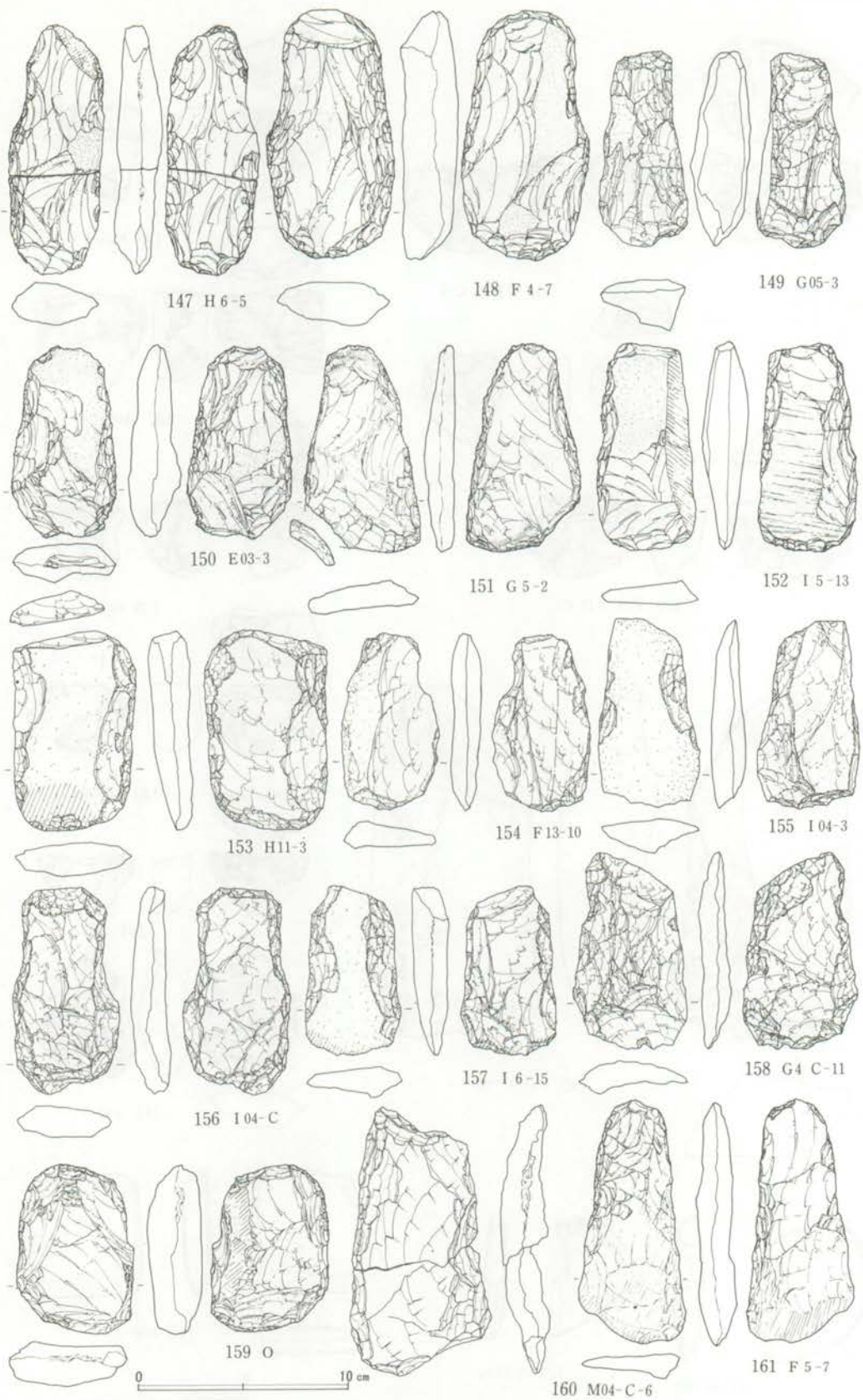
145 G5-15



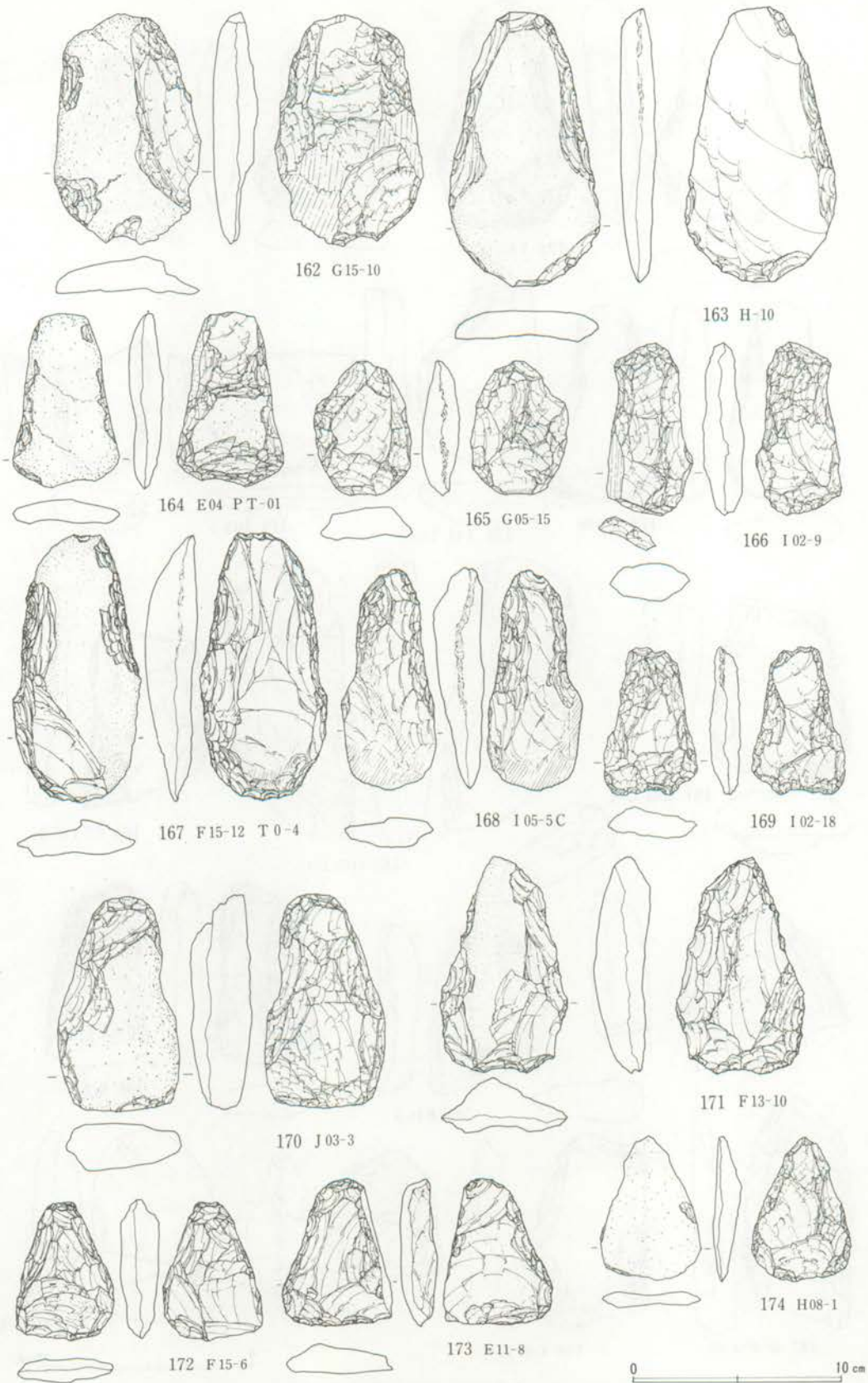
146 H05-3



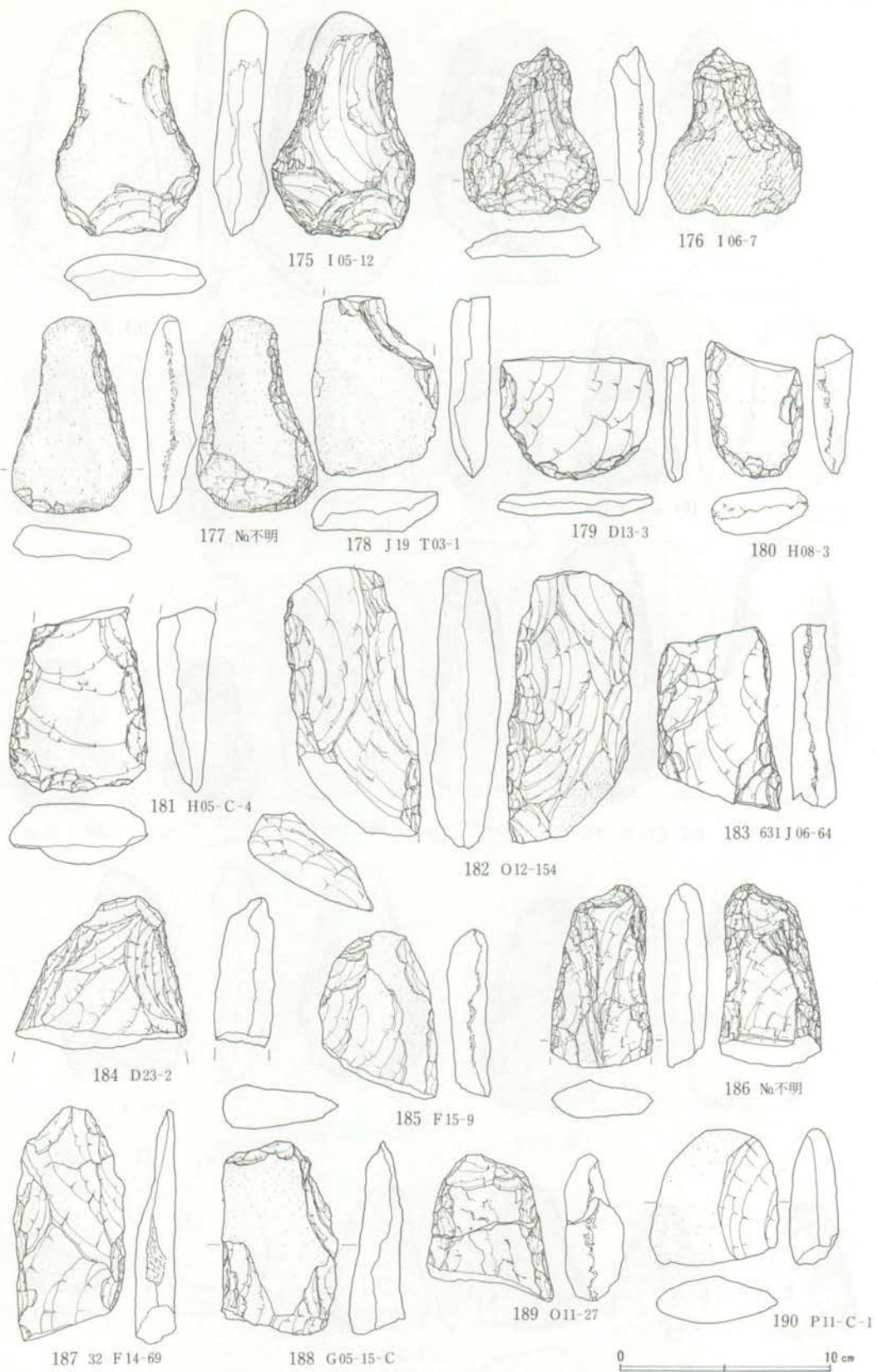
第222图 石器 (10)



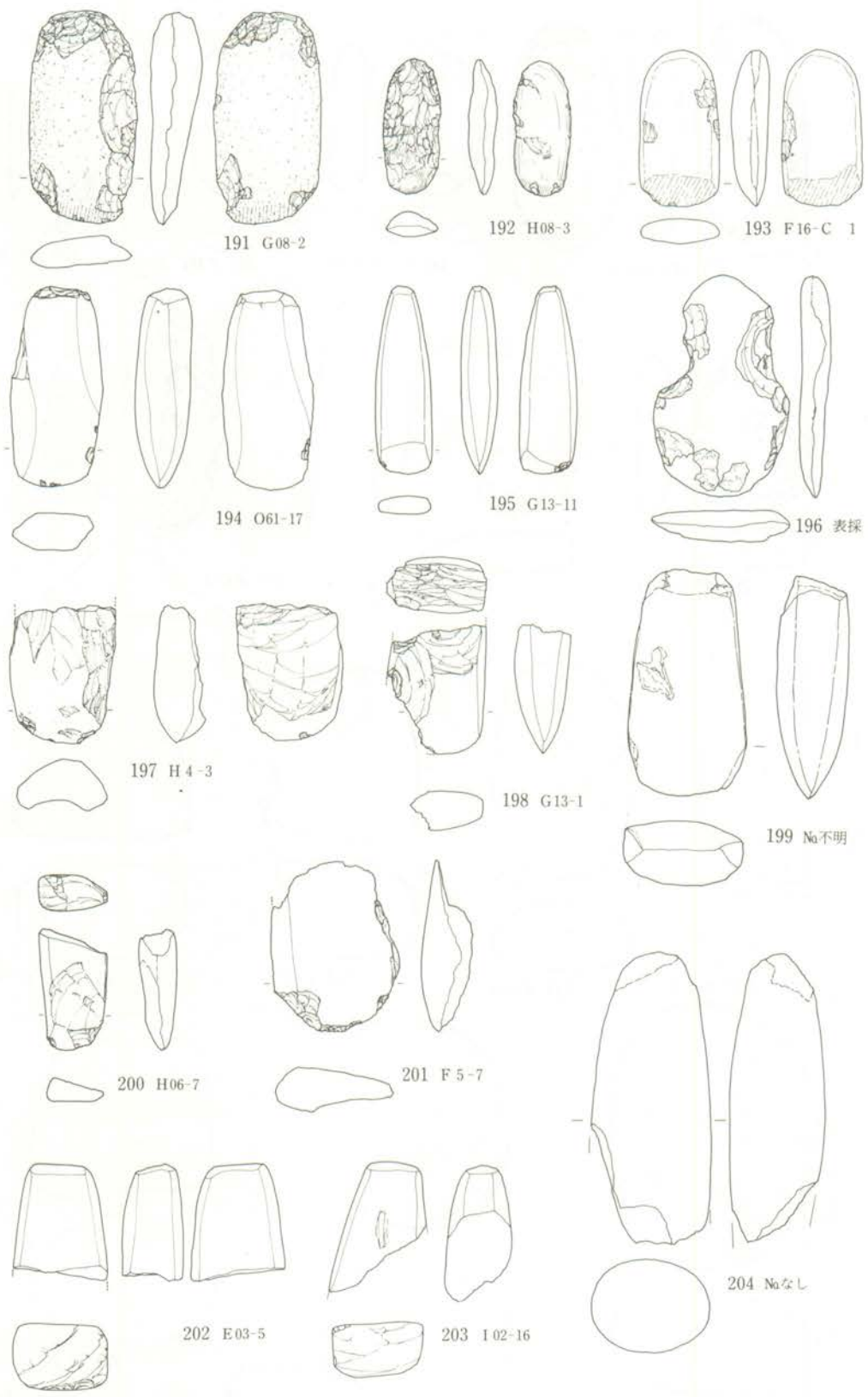
第223图 石器 (11)



第224图 石器 (12)

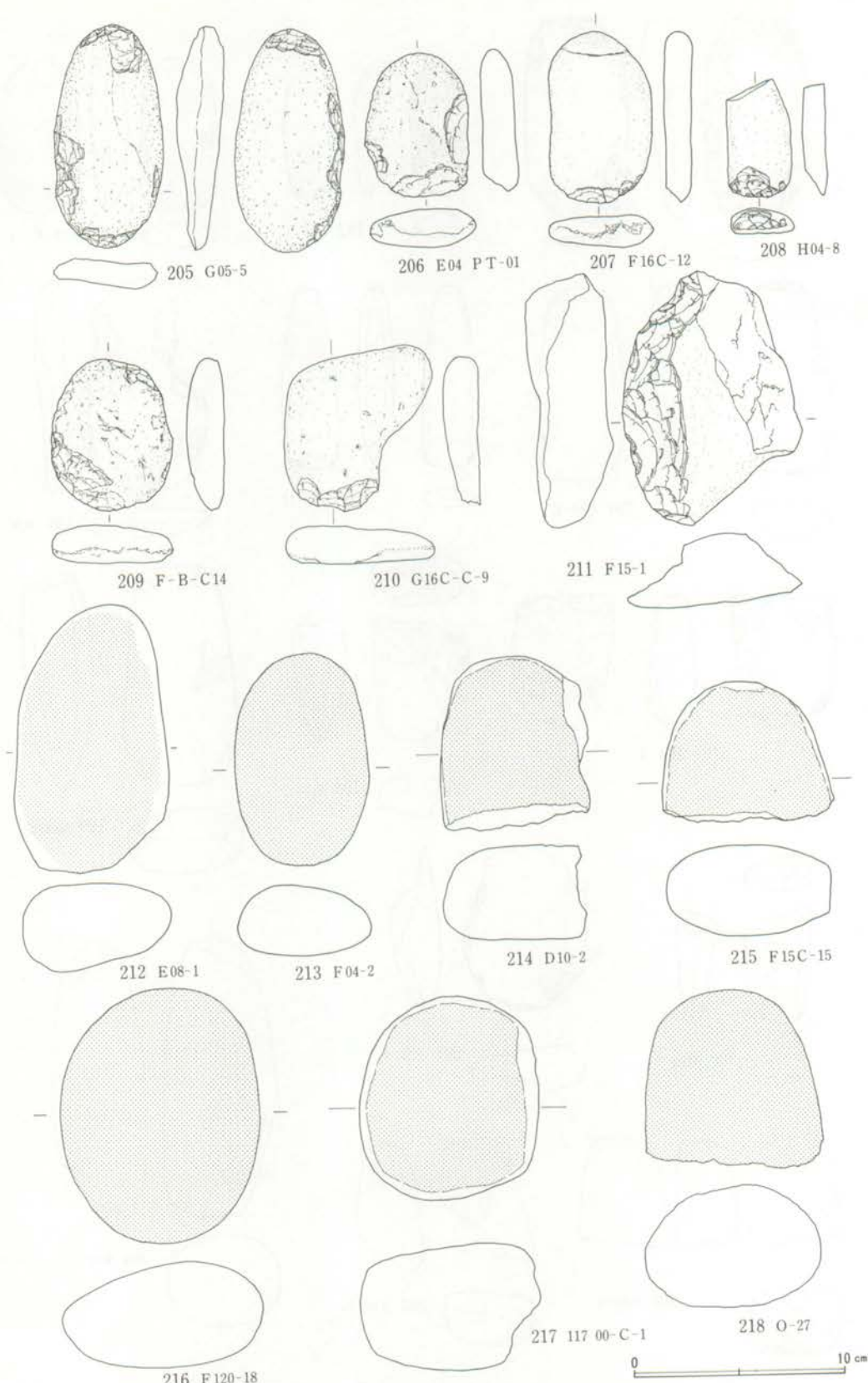


第225图 石器 (13)

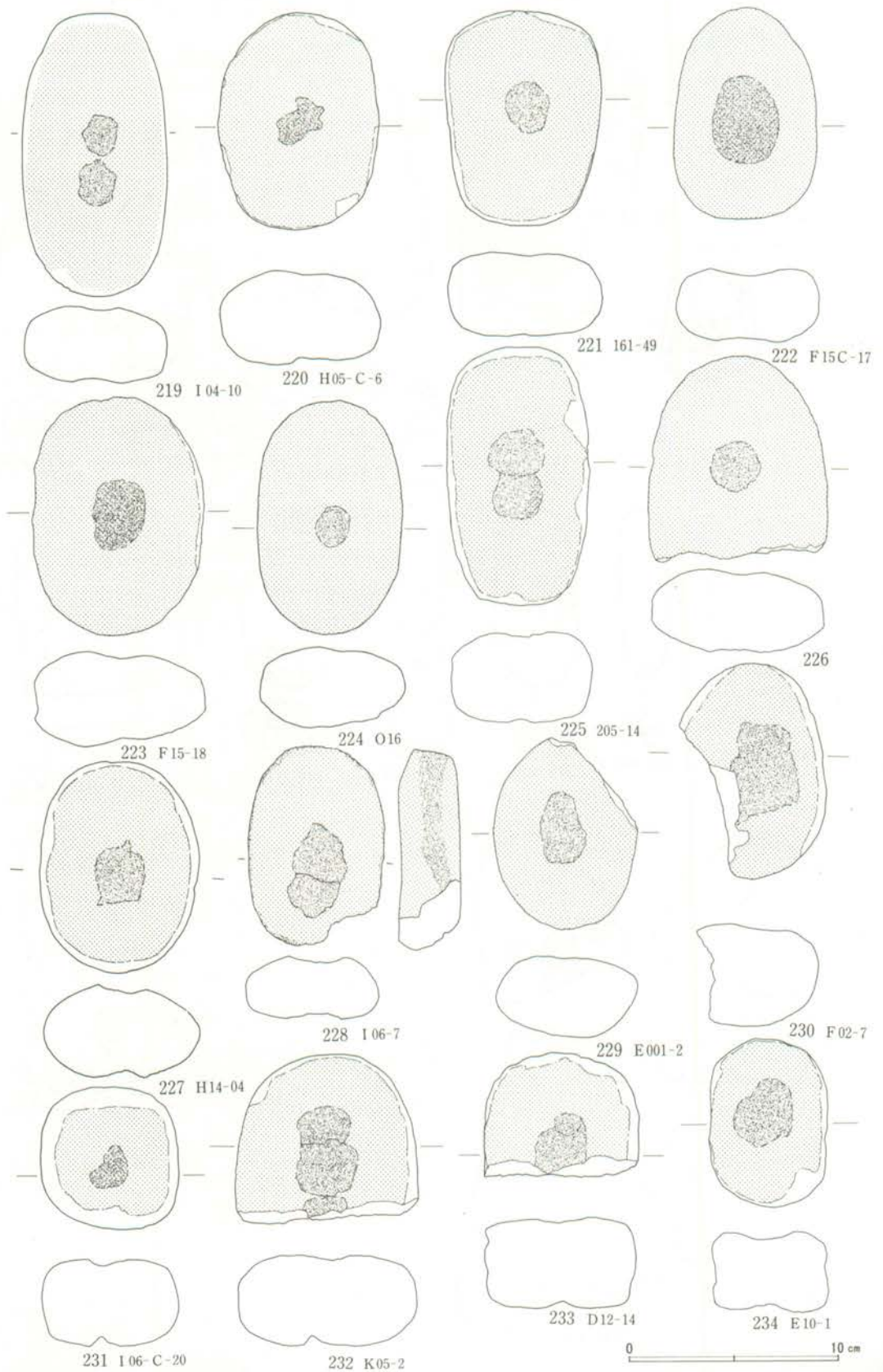


第226図 石器 (14)

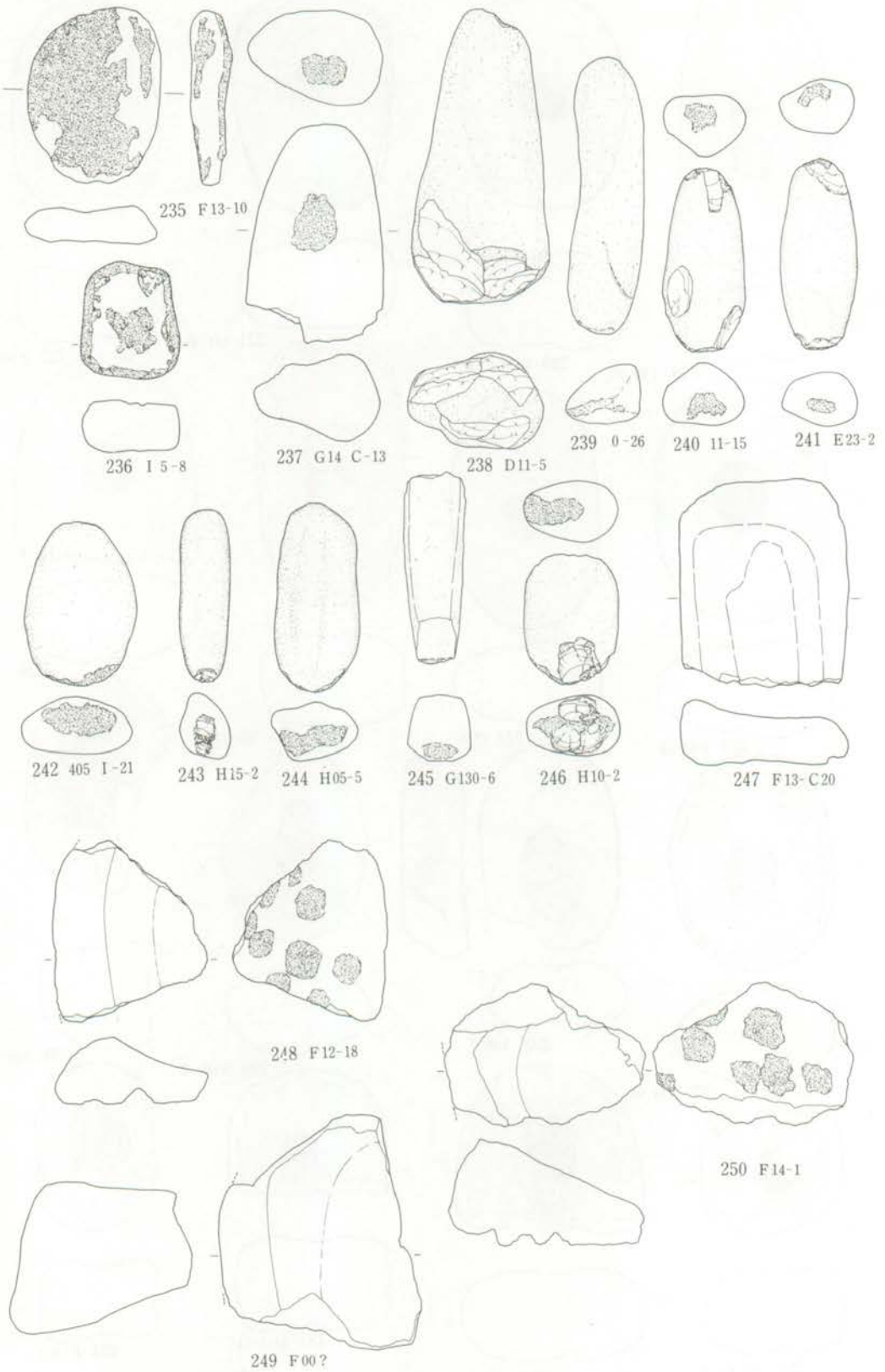




第227图 石器 (15)



第228図 石器 (16)



第229圖 石器 (17)

礫表に広い磨痕のあるもの(212~218)、②礫表に打痕のあるもの(235、236)、③礫端に打痕のあるもの(238~246)、④礫表に磨痕と共に打痕を併せもつもの(219~234)、⑤所謂石皿(247~250)などに分けられるが、①と④には、更に側縁部に帯状敲打痕のあるものがある。

装身具 块状耳飾が3点出土し、うち2例を図示した(144~145)。

なお、抉入磨石、横刃型石器は一例も検出できなかった。

(田村)

第2節 聖人塚遺跡の動態

聖人塚遺跡は、比高5~6mの浅い開析谷に面して張り出した台地上に位置する。次章で報告する中山新田I遺跡とは、西側に入り込んだ谷頭を隔てて近接する位置にあり、遺跡の動態も常に相互の補完性の中で語ることができる。

まず縄文時代に入って、初めて人間の活動痕跡が窺えるのは、早期前半拵糸文期である。しかしそれに続く沈線文期をあわせて、資料は散漫に出土した土器片のみであり、本来的に当遺跡が活動の舞台として利用された形跡は無い。遺構を伴い、生活地として当遺跡が活用されるのは、次の早期後半条痕文期に入ってからである。該期の炉穴が調査区北西の小舌状台地上と、北側台地縁辺の2か所に認められ、遺物の分布も同地区に比較的集中する。

次の縄文時代前期は、前半の黒浜式期に僅か1基の竪穴状遺構が検出されたのみにも拘らず、遺物の分布は台地縁辺部に沿って広汎に拡がる。しかしより詳細に見れば、調査区西北部には前期前半の、調査区北側には前期後半の土器分布が卓越するようだ。

縄文時代中期、当遺跡には多くの住居跡が営まれる。まずその前半期、当遺跡の西側に隣接する中山新田I遺跡で、阿玉台Ib期を中心とした集落が営まれた時期に、当遺跡では台地の奥まった平坦部に、数基の竪穴状遺構が土坑を伴って構築される。そして阿玉台式中葉期に若干の空白期を置いた後、今度は勝坂式末葉から所謂中峠式期にかけて、多くの住居跡群が台地西端部を中心に構築され、同時に膨大な量の遺物が消費され、残された。この時期の集落は、中山新田I遺跡のそれが、ほぼ環状の空間構成を示すのに比べ、必ずしも明瞭に集落の“場”が認識されてはいないようである。

しかし中期後半に集落が廃絶した後、縄文時代終末期に至るまで、当遺跡では明確な生活遺構が営まれた形跡がない。遺物の分布こそ、加曾利E式土器以降、晩期の土器まで、ほぼ間断のない出土が見られるが、内容的には貧弱で、いわば生活地の外縁部に該当した地域と言えようか。

なお調査区外への遺構・遺物分布の拡がりや、全体的な遺物の分布から考えて、南側に若干伸びるか、ほとんど調査区内で完結するものと考えて良いだろう。

(原田)

第3章 中山新田 I 遺跡

第1節 遺構・遺物の概要

中山新田 I 遺跡からは、縄文時代早期前半から晩期に至る各期の遺物が出土したが、遺構が残された時期及び場所は限定される。検出された遺構は、**早期後半**：炉穴22基、**中期阿玉台式前半期**：住居跡・**竪穴状遺構** 9基、土坑 6基、**中期後半加曾利 E 式期**：住居跡 2基、**後期前半堀之内式期**：住居跡 1基、土坑 3基、その他に時期不明の竪穴状遺構 6基、土坑 8基がある。これらの遺構は、調査区中央部に広場状の空間を設けて環状に散在する中期阿玉台式前半期のものを除き、他は調査区北側から東側にかけての台地縁辺部に集中する。

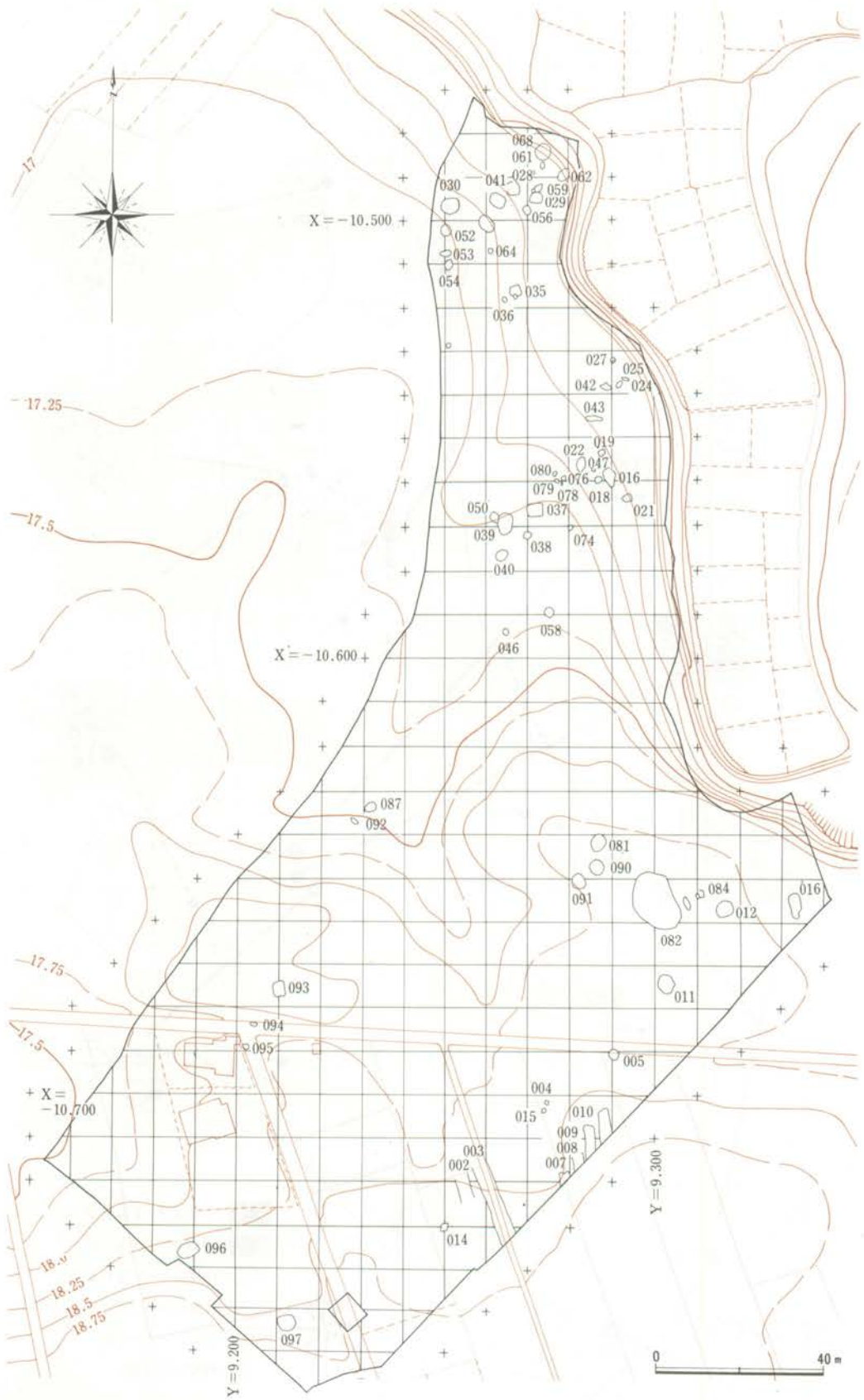
一方、出土遺物は、その全てについて資料の分類を行った結果、時期細別が可能な土器片30,712点を確認した。この他に細別不能の小破片が、遺物コンテナに80箱ある。資料は、早期前半の燃糸文系土器から晩期まで、ほぼ間断なく出土しているが、住居跡が多数営まれた中期前半阿玉台式期の土器が主体を占め、他の全ての時期を凌駕する（第230図）。

なお、報告は、遺構・遺物を分離し、先に遺構を種類毎・番号順に報告、その後で、遺構出土遺物、遺構外出土遺物をまとめて報告した。もとより編集上の時間的制約によるものであり、遺構・遺物の相関性を故意に損わないように極力努めたつもりである。なお、遺構番号は、後の遺物照合に際して混乱を避けるため、調査時に付与された番号をそのまま使用した。従って、欠番が多く含まれ、必ずしも遺構番号は連続していない。（原田）



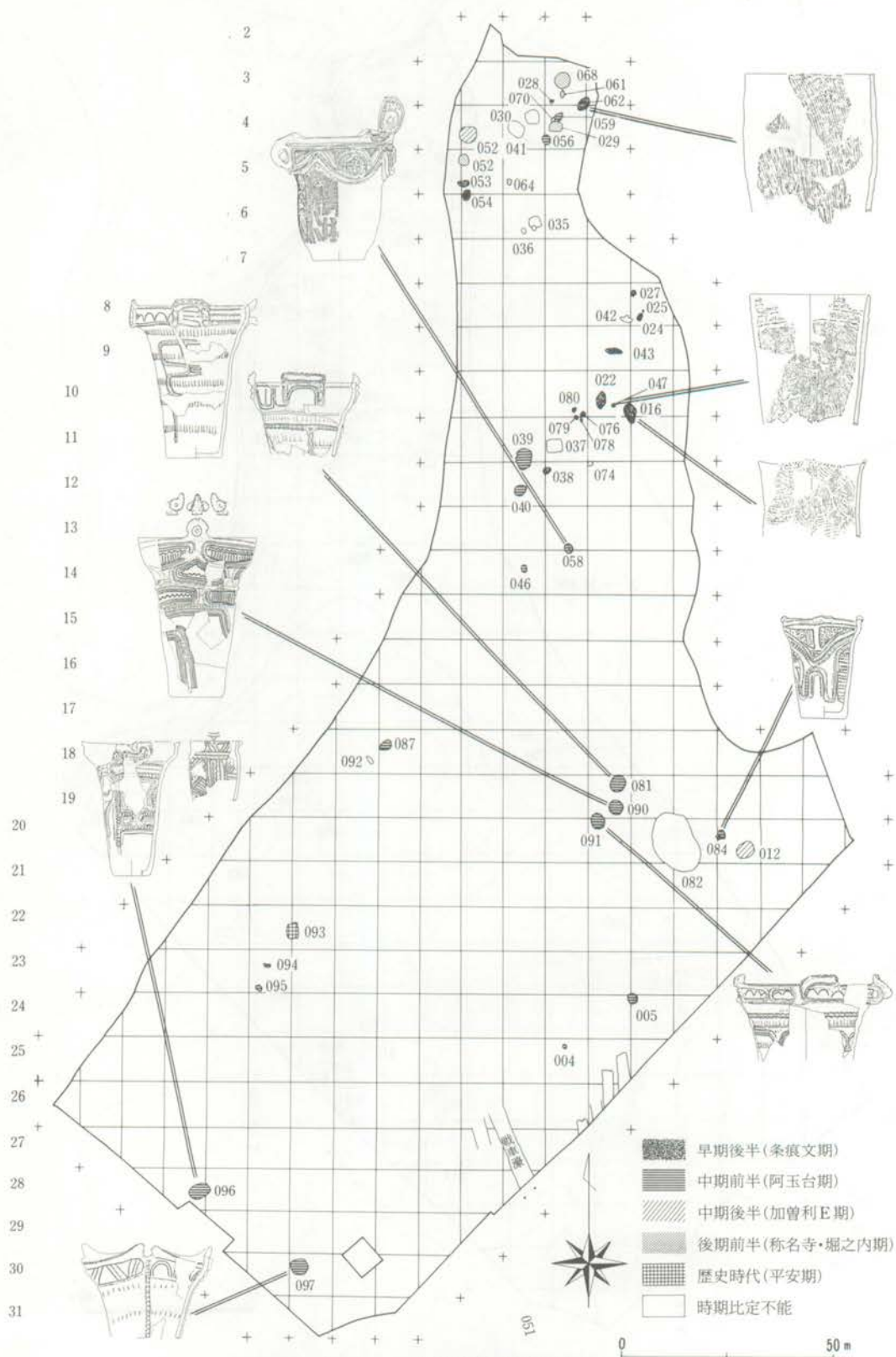
第1群土器=早期前半(燃糸文)	: 227点=0.7%	第7群土器=中期前半(阿玉台)	: 19428点=63.2%
第2群土器=早期前半(沈線文)	: 60点=0.2%	第8群土器=中期後半(加曾利 E)	: 2235点= 7.3%
第3群土器=早期後半(条痕文)	: 1623点=5.3%	第9群土器=後期前半(称名寺・堀之内)	: 2622点= 8.4%
第4群土器=前期前半(黒浜)	: 1346点=4.4%	第10群土器=後期後半(加曾利 B)	: 29点= 0.1%
第5群土器=前期後半(諸磯・浮島)	: 236点=1.8%	第11群土器=後期後半(安行 I・II)	: 1点= 0.1%
第6群土器=中期前半(五領ヶ台・勝坂)	: 2571点=8.4%	第12群土器=晩期(安行 III~)	: 16点= 0.1%
総計: 30712点= 100%			

第230図 中山新田 I 遺跡出土縄文土器時期別数量比



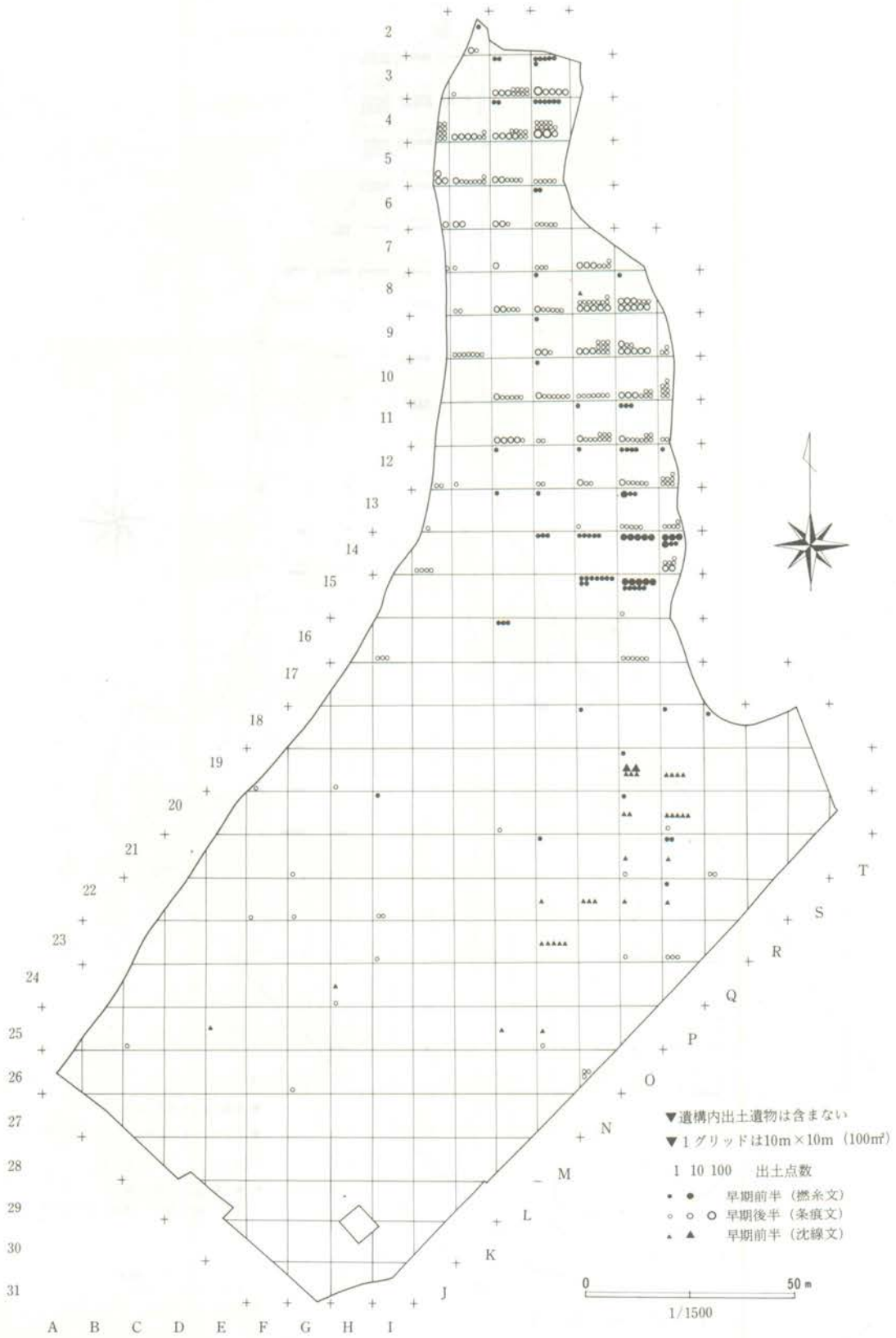
第231図 中山新田 I 遺跡全体図 (縄文以降：欠番遺構を含む)

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T

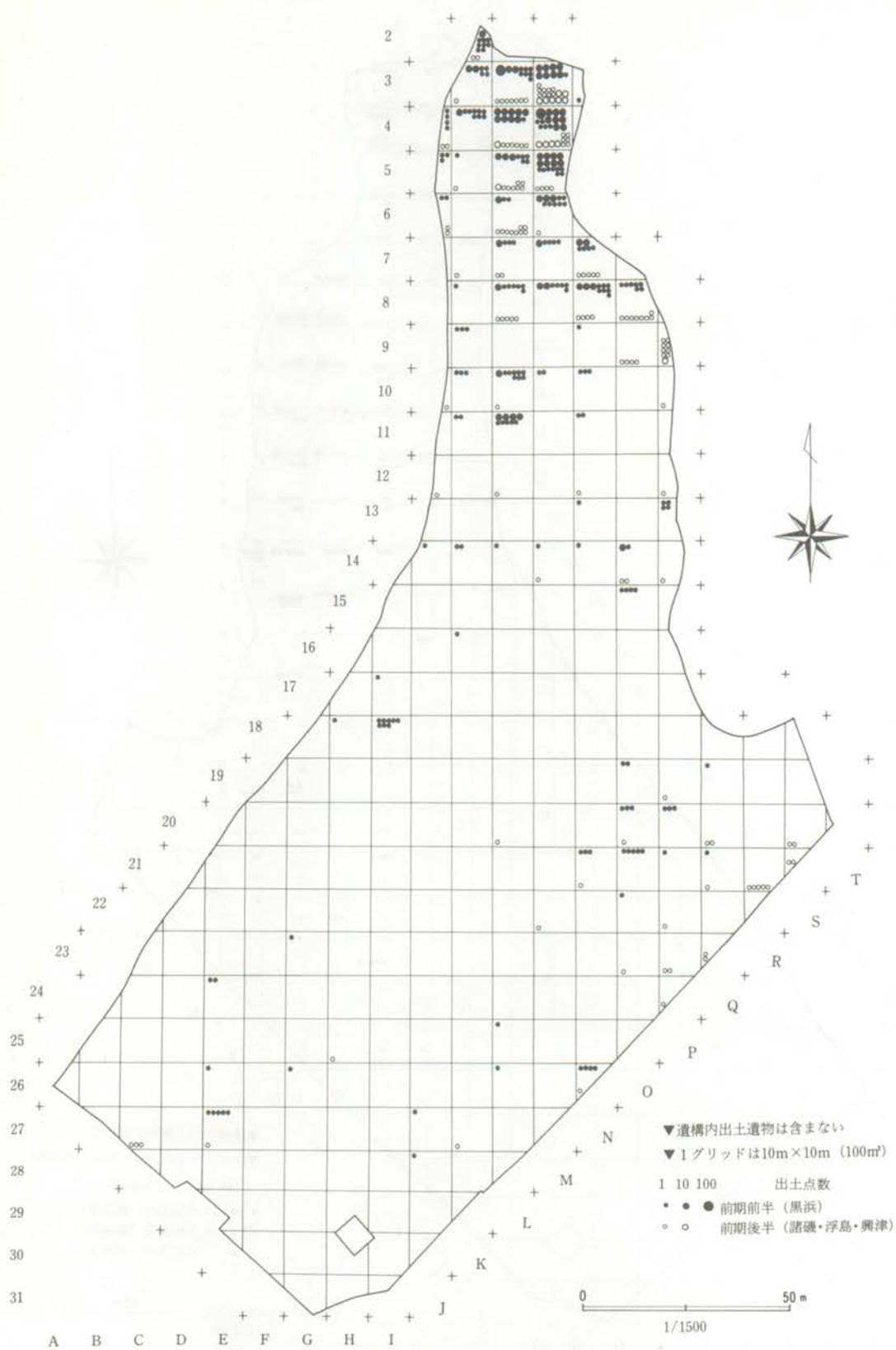


第232図 中山新田 I 遺跡遺構時期別分布図

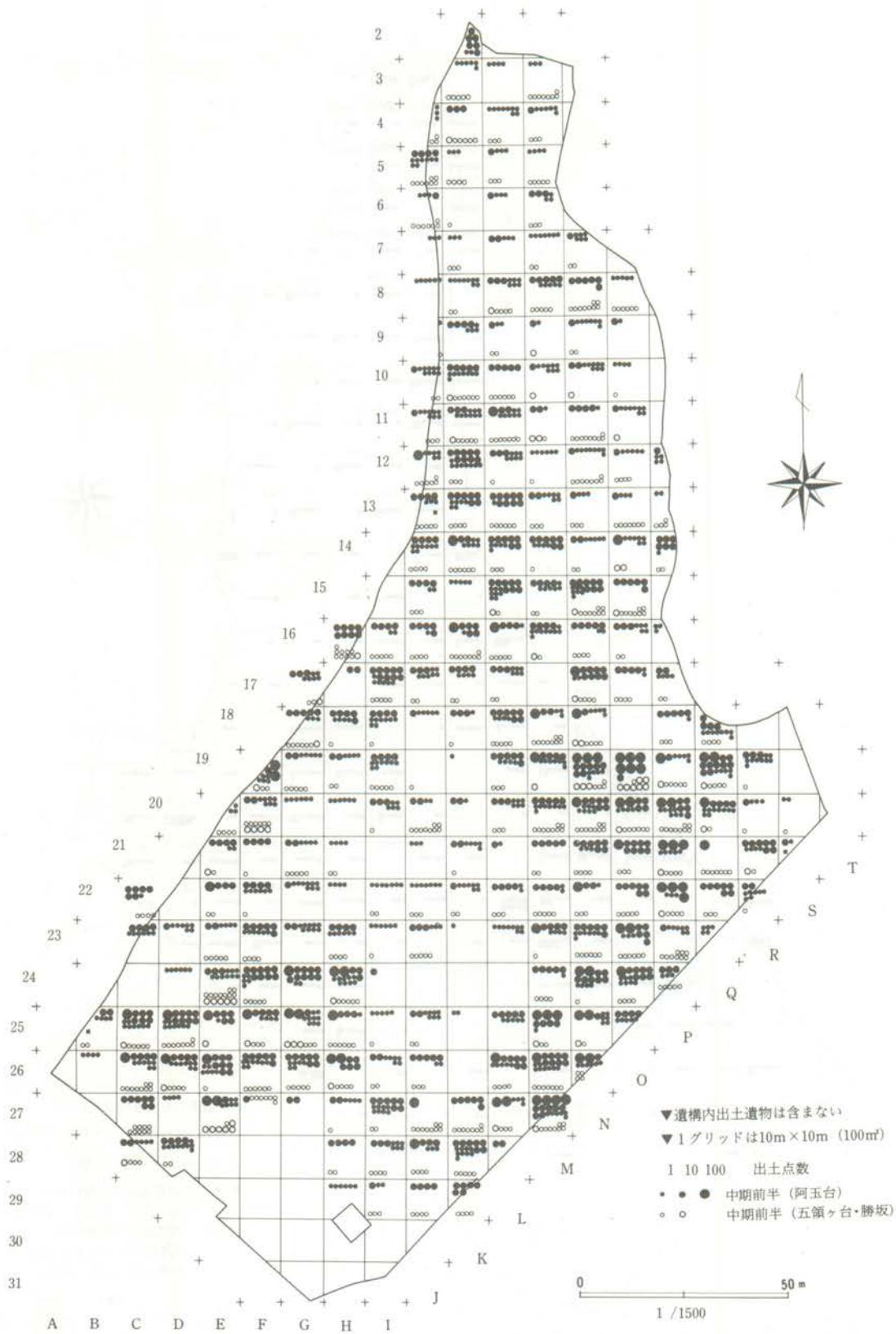
1/1500



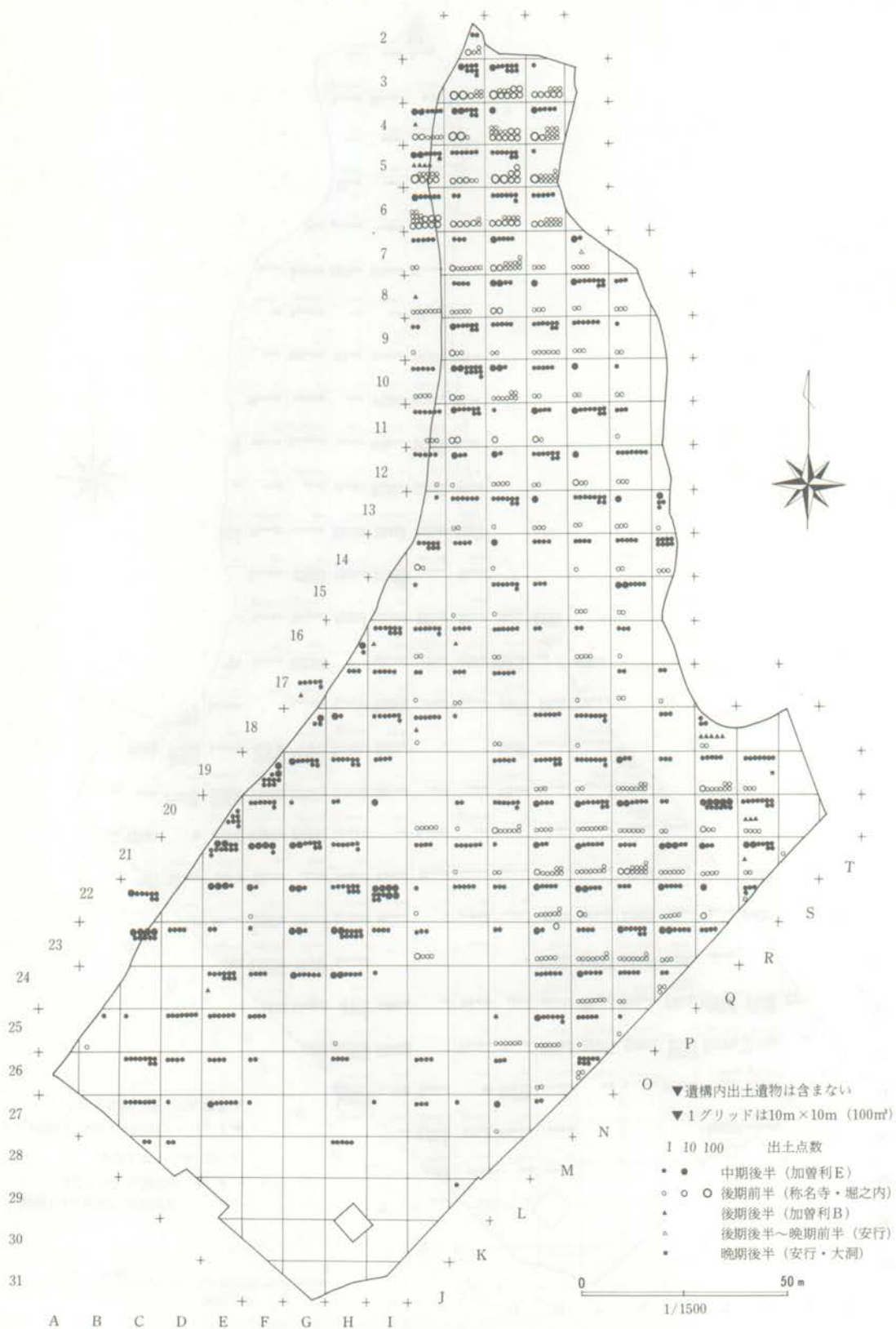
第233図 中山新田I遺跡グリッド別出土遺物分布図 (1)



第234図 中山新田I遺跡グリッド別出土遺物分布図 (2)



第235図 中山新田I遺跡グリッド別出土遺物分布図 (3)



第236図 中山新田I遺跡グリッド別出土遺物分布図(4)

A. 遺構

(1) 炉穴・焼土 (第237～241図=図版66～70)

炉穴は調査区北部、台地縁辺部に散漫な分布を示す。楕円形プランを呈し、その一方に焼土を伴う炉部が設けられた、早期後半に通有な形態のもの他に、円形に近く、所謂“竪穴炉”的なもの、炉部の周辺に竪穴状の足場を持つものなどバラエティーに富む。遺物が出土し、明確な時期認定ができる炉穴は多くない。22遺構中16基を、早期後半の所産と判断した。

016炉穴 (第237図) N・O列10・11区境界に位置する。長径495cm、短径325cm、長軸方向をN-19°-Eにとり、不整楕円形を呈す。南壁寄りと中央部に炉部2か所が設けられ、土層断面の観察から炉部A(旧)→炉部B(新)の変遷を窺えた。出土遺物は早期後半19点、中期前半4点の土器片があるが、後者は流れ込みであろう。中央の炉部周辺から比較的集中して出土した。早期後半野島式期の所産と判断される。

018炉穴 (第237図) N10・N11区の境界上に位置するが、全測図の不備から正確な位置が不明。最大径170cmの不整円形を呈す。底面に柱穴状掘り込みを伴い、覆土中に焼土が堆積する。出土遺物はなく、所属時期は判然としない。

019炉穴 (第237図) N10区に位置するが、全測図の不備から正確な位置が不明。最大径180cmの不整円形を呈す。覆土中に僅かな焼土痕跡が検出された。後の混入と思われる土製円板1点が出土したが、所属時期は判然としない。

021炉穴 (第238図) O11区に位置するが、全測図の不備から正確な位置が不明。最大径205cmの不整円形を呈す。底面は平坦で、中央南西寄りに薄い焼土堆積が検出された。出土遺物はなく、所属時期は判然としない。

022炉穴 (第238図) N10区に位置する。長径364cm、短径230cm、長軸方向をほぼN-Sにとり楕円形を呈す。底面は平坦で、中央部に浅い掘り込みを有し、その部分に重複するように焼土が堆積する。早期後半の土器1点が出土した。形態上、竪穴炉に近いが、早期後半の所産として良いだろう。

023炉穴 (第238図) 全測図の不備から調査区上の位置が不明。長径178cm、短径85cm、長軸方向をN-29°-Eにとり、楕円形を呈す。南西側に炉部を設け、足場から一段掘り込まれる。出土遺物はないが、典型的な炉穴の構造から、早期後半に属するものと判断した。

024炉穴 (第238図) O8区に位置する。長径175cm、短径85cm、長軸方向をN-68°-Wにとり、楕円形を呈す。長軸上東側に炉部を持ち、足場より一段低く掘り込まれる。出土遺物はないが、構造から早期後半の所産と思われる。

025炉穴 (第238図) O8区、024炉穴の北東に隣接する。長径163cm、短径108cm、長軸方向をN-85°-Wにとり、不整楕円形を呈す。中央やや東寄りに炉部を設け、一段掘り込まれる。出土遺物は早期後半の土器5点。構造及び出土遺物から、早期後半の所産と判断した。

028炉穴 (第239図) M3区に位置する。長径125cm、短径88cm、長軸方向をN-66°-Eにとり、楕円形を呈す。中央南西寄りに薄い焼土層を伴う炉部を持つ。出土遺物はないが、炉穴の構造から早期後半に属するものと考えられる。

038炉穴 (第239図) L12・M12区の境界上に位置する。最大径178cmの不整円形を呈す。底面は平坦

で、南東部壁際に炉部が設けられる。出土遺物はないが、その構造から早期後半の所産である可能性が強い。

043炉穴 (第239図) N9区に位置する。長径420cm、短径140cm、長軸方向をほぼE-Wにとり、長楕円形を呈す。中央が長径203cmに亘って一段掘り込まれ、その東側にさらに深く掘り込まれた炉部を持つ。2基の炉穴が重複している可能性もある。出土遺物は礫1点のみだが、構造から早期後半の所産であろう。

047炉穴 (第239図) N10区、016炉穴の西方に位置する。壁の一部が不明だが、長径120cm、短径93cm、長軸方向をN-58°-Eにとり、楕円形を呈す。長軸方向南西側に炉部が設けられ、周辺から早期後半の土器28点、及び中期後半の土器2点が出土した。後者は流れ込みである。出土遺物から早期後半子母口式期の所産と判断される。

051炉穴 (第239図) J5・K5区境界上に位置する。長径305cm、短径200cm、長軸方向をN-34°-Eにとり、不整楕円形を呈す。南西寄りに一段深く炉部が設けられるが、周辺を若干掘り過ぎた可能性がある。後期後半の土器小片2点が出土したが、流れ込みであり本来の構築時期は不明である。

053炉穴 (第240図) J5・K5区境界上に位置する。長径275cm、短径120cm、長軸方向をN-85°-Eにとり、楕円形を呈す。底面の西寄りに炉部が設けられる。出土遺物は早期後半の土器8点。構造及び出土遺物から、早期後半の所産と判断される。

054炉穴 (第240図) K5・K6区境界上に位置する。長径270cm、短径180cm長軸方向をN-21°-Eにとり、楕円形を呈す。底面南寄りに炉部を持つ。出土遺物は早期後半11点、中期前半1点の土器片があるが、後者は流れ込みであろう。構造及び出土遺物から、早期後半の所産と判断される。

062炉穴 (第240図) M・N列3・4区境界上に位置する。壁の一部を欠くが、推定長径346cm、短径260cm、長軸方向をN-38°-Eにとり、不整楕円形を呈す。炉部が3か所設けられ、相互に足場を共有するが、新旧関係は不明。出土遺物は早期後半14点、前期前半1点の土器片。遺物の在り方から、早期後半の所産と判断される。

076炉穴 (第241図) M10区に位置する。最大径150cmの不整円形を呈し、底面中央に一段と掘り込まれた炉部を持つ。出土遺物はないが、周辺の遺物出土状況から、早期後半に属する可能性が強い。

078炉穴 (第241図) M10・M11区境界上、076炉穴の南に近接する。長径96cm、短径68cm、長軸方向をほぼN-Sにとり楕円形を呈す。検出された足場は狭小で、炉部のみが遺存していたものと思われる。出土遺物はないが、周辺の遺物出土状況から、早期後半に属する可能性が強い。

079炉穴 (第241図) M10・M11区境界上、076炉穴の西側に位置する。長径110cm、短径88cm、長軸方向をN-30°-Wにとり、楕円形を呈す。炉部のみが検出されたものであろう。出土遺物はないが、周辺の遺物出土状況から、早期後半の所産と考えられる。

080炉穴 (第241図) M10区、079炉穴の北側に位置する。長径113cm、短径78cm、長軸方向をN-17°-Eにとり、楕円形を呈す。足場が削平された可能性がある。出土遺物はないが、周辺の遺物出土状況から、早期後半の所産と考えられる。

042焼土 (第241図) N8区に位置するが、原図の不備から正確な位置は不明。最大径300cm、不整形な範囲に焼土が薄く堆積する。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明。

(2) 竪穴住居跡・竪穴状遺構 (第242～250図=図版71～80)

当遺跡からは、明瞭な居住痕跡を残す竪穴住居跡10基と共に、構造上、住居跡に類似しながら平面形が著しく不整であったり、炉穴・柱穴等が認められない、所謂竪穴状遺構7基が検出された。所属時期が明瞭なものは、中期阿玉台式前半期：竪穴住居跡5・竪穴状遺構4、中期後半加曾利E式期：竪穴住居跡2、後期前半堀之内式期：竪穴住居跡1、竪穴状遺構1である。竪穴状遺構として報告したものには、所謂「小竪穴」として分類されるべき遺構を含むが、一部には自然営力による土層の落ち込みを誤認した可能性の高い遺構が含まれる。これらの所見は、各項目ごとに明示してある。

005竪穴状遺構 (第242図) N24・O24区の境界上に位置する。最大径280cmの不整円形を呈す。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、中央及び壁寄りに計6本の柱穴を持つ。現存壁高約25cm。遺物は中期前半18点、後期前半3点の土器がある。出土遺物及び遺構の構造から、中期前半阿玉台I b式期の小竪穴と考えられる。

011竪穴状遺構 P22区に位置するが、整理段階の検討で、人為的な遺構とは判断できないため削除した。関連遺物23点(内訳：土器片20点・土錘1点・土製円板2点)のみを、別項で図示してある。

012竪穴住居跡 (第242図) Q20区に位置する。長径403cm、短径360cm、長軸方向をN-65°-Eにとり、楕円形を呈す。床面は平坦で、現存壁高35cm内外、壁はほぼ垂直に立ち上がる。中央部やや北東寄りに地床炉を持ち、その縁辺から土器片が集中的に出土した。或いは土器片囲い炉であった可能性もある。柱穴は5本、また床面北西隅に深さ50cmの不整形の掘り込みが検出されたが、当住居に伴うものかは分らない。出土遺物は前期後半1点、中期前半35点、同後半92点、後期前半4点の土器片、及び土錘2点、土製円板1点がある。これらは覆土全面から出土した。出土遺物の在り方から、中期後半加曾利E III式期の所産と考えられる。

029竪穴状遺構 (第243図) M4区に位置する。長径280cm、短径215cm、長軸方向をほぼE-Wにとり、長方形を呈す。床面は平坦で、現存壁高25cm内外、壁はなだらかに立ち上がる。中央部に楕円形の掘り込み、床面上に4か所の柱穴状掘り込みが検出されたが、焼土等の遺存はない。出土遺物は早期後半2点、前期前半5点、中期前半2点、後期前半4点の土器小片である。出土状態も散漫で、積極的に生活遺構とする根拠は薄い、強いて言えば後期前半堀之内式期の所産である可能性が高い。

030A・B竪穴状遺構 (第243図) L4区に位置する。長径360cm、短径270cm、長軸方向をN-3°-Wにとり、隅丸方形を呈した030Aと、最大径305cm、不整円形を呈した030Bが重複する。床面は両者とも凹凸が著しく、現存壁高は最大28cmを測る。床面上に柱穴状掘り込みを不規則に配すが、本来的な上屋構造を示すものかは疑わしい。出土遺物は早期後半15点、前期前半9点、同後半1点、中期前半2点の土器片であるが、出土状態は散漫で、遺構の時期決定に耐えるものではない。人為的な生活遺構か、検討する余地がある。

035竪穴状遺構 (第244図) L6区に位置する。最大径375cmの不整四角形を呈す。南壁に性格不明の土坑が切り合う。床面は平坦だが東西方向に緩く傾斜する。柱穴5本が不規則な配置で検出された。出土遺物は中期前半の土器1点のみで、遺構の時期決定に耐えるものではない。人為的な生活遺構かは、再検討する余地がある。

037竪穴状遺構 (第244図) M11区に位置する。長径368cm、短径303cm、長軸方向をほぼE-Wにとり、長方形を呈す。床面は平坦で、現存壁高18cm内外、柱穴状の掘り込み6か所を有す。北東隅に一段と掘り込まれた焼土堆積が検出されたが、竪穴に伴うものとするには無理がある。或いは炉穴の炉部が切り合い、残存したものかも知れない。出土遺物は、早期後半1点、中期前半13点、同後半2点の土器小片があるが、出土状態は散漫で、遺構の時期的検討に足るものではない。人為的な生活遺構かどうか、再検討する余地がある。

039竪穴状遺構 (第245図) L11・L12区の境界上に位置する。長径460cm、短径368cm、長軸方向をほぼN-Sにとり、不整楕円形を呈す。床面は僅かに凹凸を呈し、現存壁高17cm内外、柱穴14本が不規則に検出された。炉跡はない。出土遺物は早期前半1点、中期前半21点の土器片がある。出土状態は概して散漫だが、遺構の時期は中期阿玉台式前半期の可能性が高い。

040竪穴状遺構 (第245図) L12区、039竪穴の南側に位置する。長径318cm、短径245cm、長軸方向をN-67°-Eにとり、楕円形を呈す。現存壁高18cm内外を測り、床面は凹凸がある。炉跡はなく、中央部及び壁際に5本の柱穴が検出された。また床面東側に不整円形の掘り込みを持つが、本来的な付属施設なのかは不明。中期前半の土器4点が覆土内から散漫に出土した。遺物量は少ないが、構造や周辺の土器分布に鑑みて、中期阿玉台式前半期の遺構である可能性が高い。

041竪穴状遺構 (第246図) L4区に位置する。長径364cm、短径282cm、長軸方向をN-60°-Wにとり、長方形を呈す。現存壁高約15cm、床面は平坦だが、南北方向に僅かに傾斜する。床面上に柱穴及び浅い掘り込みが10か所検出された。炉跡はない。出土遺物は僅少で、早期後半2点、前期前半3点、中期前半1点、後期後半1点の土器小片である。遺構の時期は不明。構造等から人為的な遺構ではない可能性もある。

052竪穴住居跡 (第246図) J4・K4区の境界上に位置する。最大径395cmの円形を呈す。現存壁高最大15cm、床面は平坦だが南北方向に若干傾斜する。中央に比較的深く掘り込まれた地床炉を設け、周囲に柱穴6本が配される。出土遺物は僅少で、早期後半8点、前期前半1点、中期前半1点、同後半8点の土器片で、覆土全面から散漫に出土した。遺構の構造と出土遺物から、中期後半加曾利EⅢ式期の所産と考えられる。

068竪穴住居跡 (第247図) M3区、調査区の最も北に位置する。最大径375cmの円形。床面は平坦で、現存壁高最大15cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。壁際、床面上から5本の柱穴が検出され、中央やや南東寄りに地床炉を持つ。覆土中4か所に薄い焼土堆積が検出された。遺物の出土状態は散漫で、早期後半9点、前期前半10点、後期前半4点の土器片がある。遺構の構造・出土遺物から、後期前半堀之内I式期の住居跡と考えられる。

081竪穴住居跡 (第248図) N19区に位置する。長径408cm、短径320cm、長軸方向をN-34°-Eにとり、楕円形を呈す。底面は緩やかな鍋底状を呈し、僅かに中央部が段状に窪む。壁は垂直或いはオーバーハング気味に立ち上がり、現存壁高最大78cmと深い。炉跡はなく、床面中央に深い柱穴2本が複合した形で穿たれ、北壁寄りにも浅い柱穴2本がある。特異な構造を持つ竪穴であるとともに、覆土中には床面直上から上層部まで、極めて多量の遺物が、投棄されたような状態で出土し、注目される。また土器・炭化したクルミの果皮とともに、多量の焼土層が、北側から下り重なるように3層以上検出され、単な

る遺物投棄のみならず、何らかの火を焚く行為が繰り返し行われた可能性がある。出土遺物は早期後半1点、前期前半1点、中期前半1139点、同後半2点、後期前半1点の土器片、及び土錘23点、土製円板11点があり、復元可能な土器の中には、091住居跡出土土器と接合関係を持つ個体もある。中期前半阿玉台I b式期の竪穴であるが、単に住居跡とするよりも、特殊な役割を担った遺構である可能性が高い。遺物分布図等のデータ分析を後日試みる必要があろう。

087竪穴状遺構 (第247図) I 18区に位置する。最大径290cmの不整円形。床面は平坦で、現存壁高最大10cmを測る。床面上に3か所の柱穴状掘り込みが検出されたが、上屋架構を示すものかは疑わしい。炉跡はない。遺物は、覆土上層部を中心に若干の集中が認められた。前期後半2点、同後半1点、中期前半53点の土器片と、土錘1点がある。出土遺物の在り方から、中期前半阿玉台II式期の、所謂小竪穴として理解できる。

090竪穴住居跡 (第249図) N 19区、081住居跡南側に近接する。最大径350cmの円形。現存壁高約35cm、床面はほぼ平坦だが、南西側にテラス状の掘り残し部分がある。炉跡はない。柱穴は中央及び床面北東側に各1本検出された。遺物は覆土全体から出土したが、やや北西側に集中が認められる。中期前半の土器のみ73点と、土錘3点が出土したことから、遺構の時期も、中期前半阿玉台I b式期に位置づけられる。

091竪穴住居跡 (第249図) N 19区・N 20区境界上、081・090住居跡に近接する。長径368cm、短径330cm、長軸方向をほぼN-Sにとり、不整円形を呈す。現存壁高45cm、床面は中央に向かって僅かに傾斜し、壁は急角度で立ち上がる。炉跡はないが、中央部に1本、東壁際に2本の柱穴が検出された。遺物は覆土全面から多く出土し、特に北側に集中する。前期後半1点、中期前半106点の土器片と、土錘6点、土製円板4点があり、中期前半の土器のうち1点は、081住居跡出土土器と接合した。遺構の時期も、このことから中期前半阿玉台I b式期に位置づけられる。

096竪穴住居跡 (第250図) D 28区・E 28区境界上に位置する。長径515cm、短径342cm、長軸方向をN-68°-Eにとり、長楕円形を呈す。現存壁高最大65cmを測り、床面は中央に向かって僅かに傾斜する。壁際に幅60cmほど段状に高く、所謂「有段式竪穴」の典型的構造を示す。炉跡はない。中央及びその若干西寄りに2本の深い柱穴が検出され、その周囲は若干貼り床状となる。遺物は覆土中位を中心に、早期後半1点、中期前半233点、同後半1点の土器片と、土錘6点、土製円板3点が出土した。このうち中期前半の1点は、011竪穴状遺構(非人為的遺構として削除)出土土器と、130mの長距離を隔てて接合した。遺構の時期も、中期前半阿玉台I b式期に位置づけられる。

097竪穴住居跡 (第250図) F 30区、調査区最南端に位置する。長径418cm、短径344cm、長軸方向をN-80°-Eにとり、隅丸長方形を呈す。現存壁高最大40cmを測り、壁際から幅1m内外のテラス部を持つ、所謂「有段式竪穴」の典型例である。炉跡はなく、床面中央に4本、南西側テラス上に1本の柱穴が検出された。遺物は中央部付近から、比較的集中して出土した。中期前半の土器190点及び、土錘1点、土製円板1点がある。遺構の時期は、中期前半阿玉台I b式期に求められる。

(3) 土坑 (第251~254図=図版81~88)

当遺跡からは、炉穴・竪穴住居跡・竪穴状遺構とともに、19基の土坑が検出された。しかし、構築時

期の明らかな土坑は中期阿玉台式前半期 6 基、勝坂式末から所謂中峠式期 1 基、そして後期前半堀之内 I 式期 3 基に限られる。なお、一部には人為的遺構か否か、検討を要するものも含まれる。

004土坑 (第251図) M25区に位置し、径180cm、長軸方向をN-6°-Eにとり、隅丸方形を呈す。検出面からの深度40cm、断面鍋底状で、凹凸がある。覆土内から比較的集中して、中期前半の土器18点、後期前半の土器3点が出土したが、後者は流れ込みであろう。出土遺物から見て、中期阿玉台式前半期の所産と判断できる。

015土坑 (第251図) M25区に位置するが、原図が不備なため正確な位置不明。長径195cm、短径175cm、長軸方向をほぼN-Sにとり、不整形を呈す。底面は凹凸があり、壁はなだらかに立ち上がる。ほぼ中央に深い掘り込みが存在し、内部から土器片が重なるように出土したが、整理途上の散逸により現品不明。時期・性格ともに究明できず、残念である。調査時には「埋甕ピット」と認識されていたようだが、出土遺物の状態、土坑の構造からして屋外埋甕とは性格を異にする。

034土坑 (第251図) L 6・L 7区に位置するが、原図の不備から正確な位置が不明。長径140cm、短径115cm、長軸方向をN-42°-Eにとり、楕円形を呈す。検出面からの深度は最大20cm、中央東寄りの底面に焼土堆積を見る。出土遺物がなく、時期不明だが、或いは炉穴の炉部である可能性も強い。

046土坑 (第251図) L 14区に位置する。長径155cm、短径110cm、長軸方向をN-43°-Wにとり、楕円形を呈す。底面は若干凹凸を持ち、壁は緩やかに立ち上がる。南西壁寄りから、中期前半の土器7点がまとめて出土した。出土遺物から、中期阿玉台式前半期の土坑と判断される。

050土坑 (第251図) L 11区に位置するが、原図の不備から正確な位置が不明。長径247cm、短径190cm、長軸方向をN-38°-Wにとり、楕円形を呈す。底面は僅かに凹凸を有すが平坦で、壁は垂直或いはオーバーハング気味に立ち上がる。検出面からの深度118cm、出土遺物なく時期不詳だが、所謂「陥穴状」土坑の典型例である。

056土坑 (第252図) L 4・M 4区に位置し、径205cmの略円形を呈す。底面は東西方向に僅かな傾斜を見せ、壁は比較的急な角度で立ち上がる。検出面から最深40cmを測る。早期後半2点、中期前半6点の土器片が出土した。出土遺物から、中期阿玉台式前半期の所産と思われる。

058土坑 (第252図) M13・M14区境界上に位置し、最大径220cmの不整形を呈す。検出面からの深度30cm、底面はほぼ平坦で、壁は比較的急角度で立ち上がる。周辺から5か所の柱穴状掘り込みが検出されたが、本土坑に伴うものか、判断材料に欠ける。土坑の北寄りに、中期勝坂式末の把手付深鉢が、ほぼ完形で埋置され、さらに覆土中から同時期の浅鉢片が出土した。他に中期前半の土器小片10点も出土したが、遺構の時期は中期勝坂式末から所謂中峠期に求められる。該期の遺構は、隣接した聖人塚遺跡で多く検出されているが、当遺跡では唯一のものである。特殊な遺物出土状態から、墓墳的機能を持つ土坑と想定される。

059土坑 (第252図) M 4区に位置し070土坑に切られ、また029竪穴に近接する。推定長径138cm、短径100cm、長軸方向をN-53°-Eにとり、楕円形を呈す。検出面から最深38cmを測り、底面に焼土堆積が認められた。早期後半12点、前期前半3点、中期前半1点、後期前半3点の土器が出土した。形態から土坑として扱ったが、炉穴の一部である可能性もある。明確な時期は不明。

061土坑 (第252図) M 3区に位置し、068住居跡に近接する。長径184cm、短径130cm、長軸方向をほ

ぼN-Sにとり、不整楕円形を呈す。底面は平坦で、検出面からの深度33cm、壁は比較的急角度で立ち上がる。覆土全体から遺物が出土した。早期後半5点、前期前半3点及び後期前半23点の土器、土錘2点がある。出土遺物から考えて、後期前半称名寺II式期の所産と判断される。

064土坑 (第252図) L5区に位置し、最大径115cmの不整円形を呈す。底面は平坦で、検出面からの深度35cm、壁は垂直に立ち上がる。覆土中に厚さ約10cmのハマグリを主体とした貝殻ブロックが堆積するが、壁際の覆土には貝殻が含まれない。前期後半11点、同後半6点、中期後半20点、後期前半19点の土器片が、覆土全面から出土した。後期前半称名寺II式期の、貝ブロックを伴う土坑である。

069土坑 (第252図) K7区に位置するが、原図不備のため、正確な位置が不明。最大径107cmの略円形を呈す。底面は断面鍋底状で、検出面から最深55cmを測る。中期前半1点、後期前半1点の土器片が出土したが、遺構の時期・性格を判断する資料となるものではない。

070土坑 (第252図) M4区に位置し、059土坑を切る。最大径108cmの円形を呈し、南西側が攪乱で破壊されている。底面は平坦で、検出面からの深度65cm、壁は垂直に立ち上がる。覆土下半にハマグリを主体とした貝ブロックが堆積する。早期後半2点、前期前半3点、中期前半1点、同後半1点と、後期前半39点の土器が出土した。出土遺物の在り方から、後期前半の、貝ブロックを伴う土坑と考えられる。

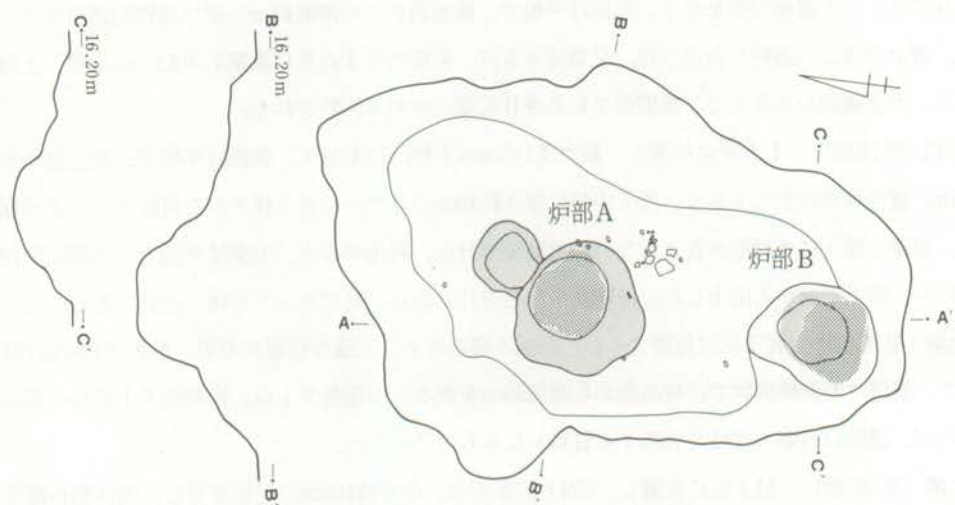
074土坑 (第253図) N12区に位置する。長径114cm、短径75cm、長軸方向をN-15°-Wにとり、楕円形を呈す。底面は凹凸に富み、検出面からの深度25cm、壁の立ち上がりは南側を除き急である。遺物はなく、遺構の時期・性格は詳らかでない。

082土坑 (第253図) O20・P20区付近に位置する。長径1456cm、短径1000cm、長軸方向をN-36°-Wにとり、巨大な楕円形を呈す。底面は北側ほど深く、検出面から最深180cm、壁は極めて緩やかに立ち上がる。覆土は有機質の黒色土が自然堆積し、水分の含有が多い。早期後半7点、前期前半1点、中期前半33点の土器片が散漫に出土した。一応土坑として報告したが、自然営力による水溜り、或いは沼沢状の湿地である可能性が大きい。ちなみに、当遺跡付近の台地上は、地下水水面が意外に高く、隣接する聖人塚遺跡では、規模の大きい沼沢地状の埋没谷が幾つか検出されている。

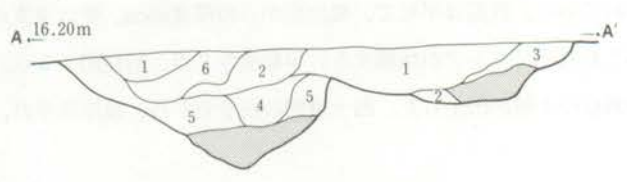
084土坑 (第253図) P20・Q20区の境界上に位置する。西壁が検出されなかったが、径220cmの隅丸方形の掘り込みと、長径118cm、短径87cm、長軸方向をほぼN-Sにとる楕円形の土坑が重複した形をとる。両者の相互関係は不詳。隅丸方形の掘り込みは、検出面からの深度20cmの竪穴状を呈し、西壁際から倒立した状態で、中期前半の小型深鉢形土器が1点、完形で出土した。当土坑は、中期阿玉台式前半期の、墓墳的機能を持つ可能性がある。

086土坑 (第253図) P20区に位置するが、原図の不備から正確な位置が不明。長径315cm、短径110cm、長軸方向をN-70°-Wにとり、緩い弧状の楕円形を呈す。底面は凹凸が激しく、検出面から最深68cmを測る。中期前半の土器6点、同後半の土器1点が出土したが、遺構の時期・性格を決め得るものではなかった。

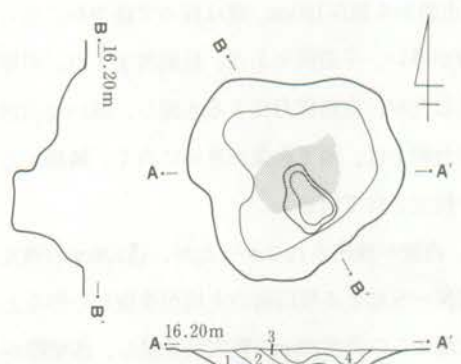
092土坑 (第254図) H18区に位置する。長径225cm、短径95cm、長軸方向をN-57°-Wにとり、底面が長軸方向に張り出した楕円形を呈す。検出面から最深200cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。遺物はなく、時期不詳であるが、所謂「陥穴状」土坑として把握できるものである。(原田)



1. 黑褐色土：烧土粒少量含
2. 黑褐色土：烧土粒含
3. 暗黄褐色土：烧土粒含
4. 黄褐色土：烧土粒含
5. 黄褐色土
6. 黑褐色土：烧土粒微量含

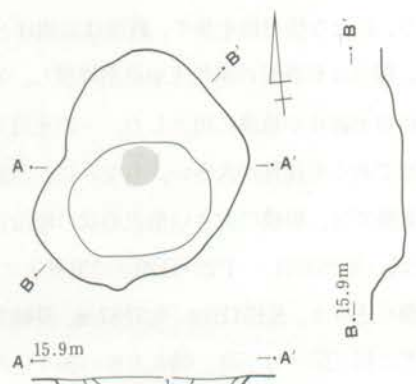


016 炉穴



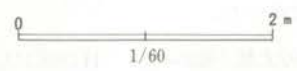
1. 黑褐色土：烧土粒含
2. 暗褐色土：烧土粒多量含
3. 赤褐色土：烧土粒多量含
4. 黑褐色土：烧土粒少量含

018 炉穴

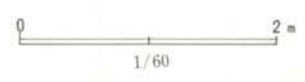
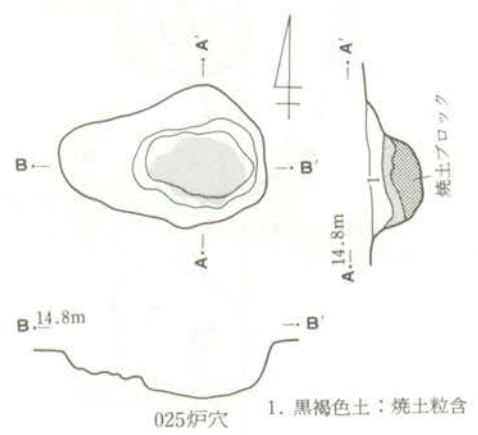
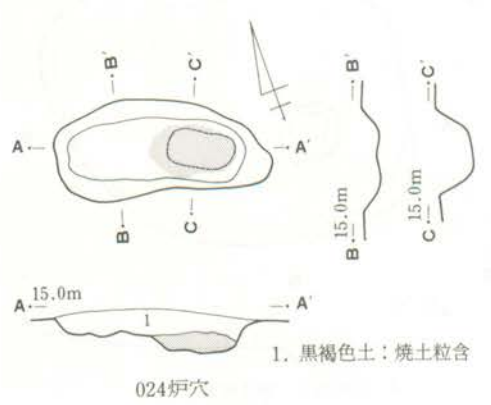
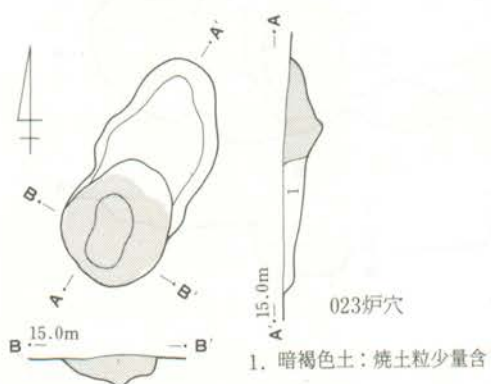
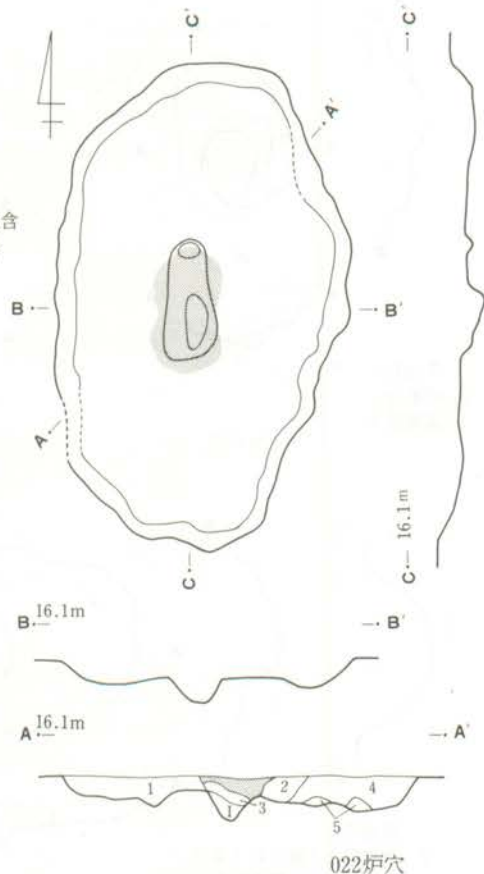
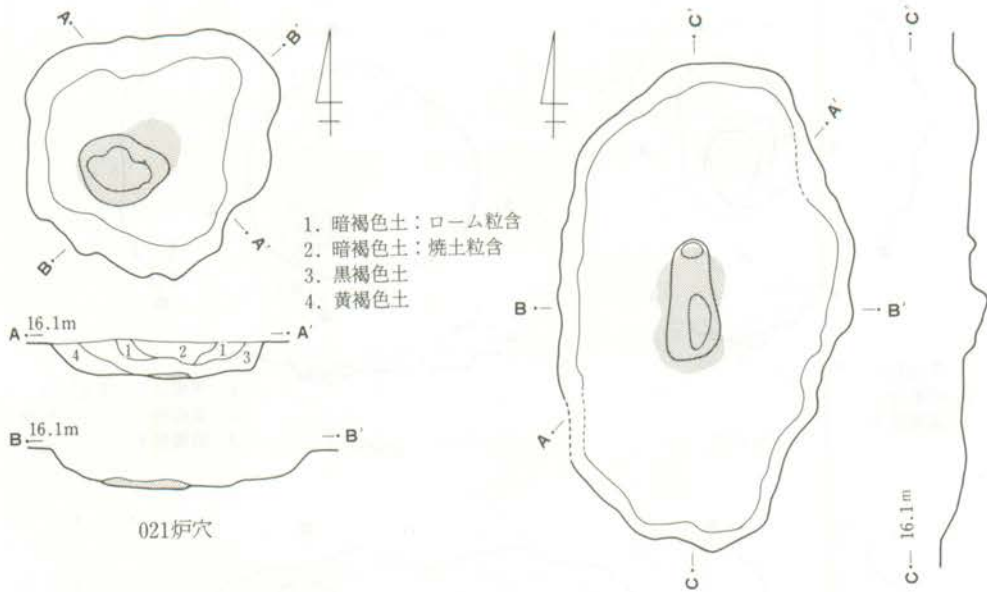


1. 黑褐色土：烧土粒含
2. 黄褐色土：烧土粒含
3. 黄褐色土

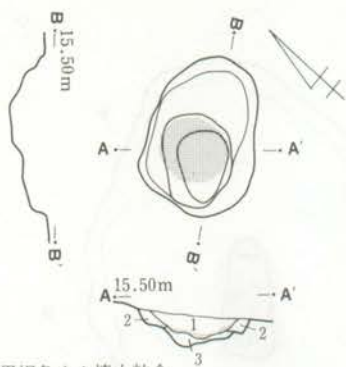
019 炉穴



第237图 016·018·019炉穴



第238図 021~025炉穴



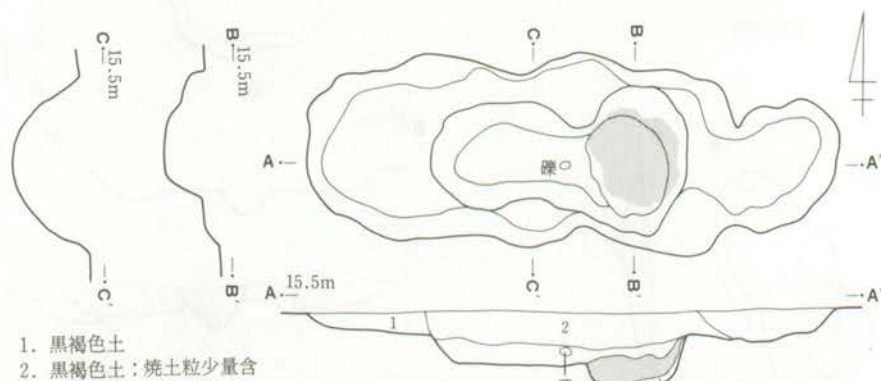
1. 黒褐色土：焼土粒含
2. 暗褐色土
3. 黄褐色土

028 炉穴



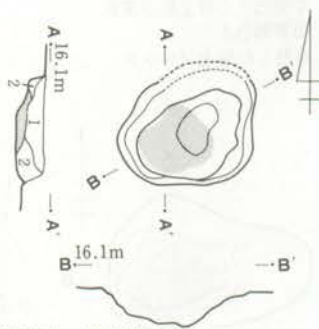
1. 黒褐色土：焼土粒含
2. 黄褐色土：ローム粒含
3. 暗褐色土

038 炉穴



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土：焼土粒少量含
3. 暗黄褐色土：焼土粒含
4. 暗褐色土

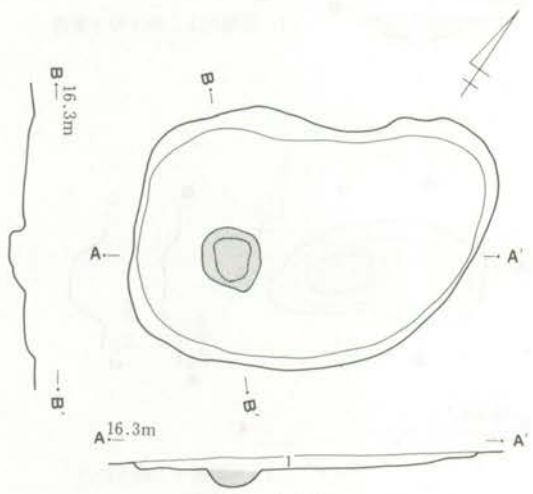
043 炉穴



1. 暗褐色土：焼土粒含
2. 暗褐色土

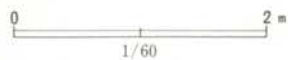


047 炉穴

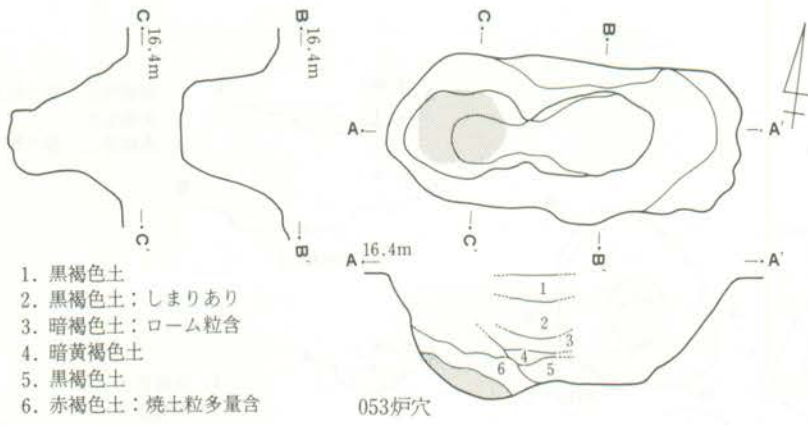


1. 黒褐色土：焼土粒含

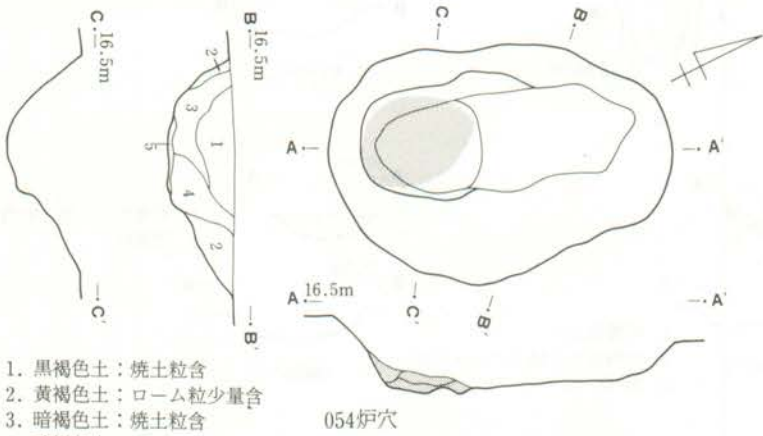
051 炉穴



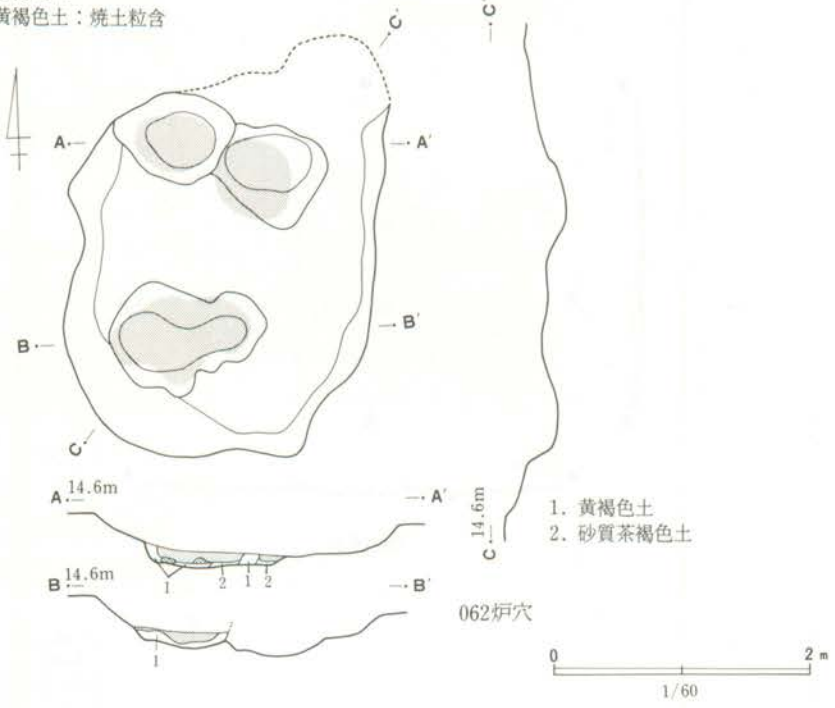
第239図 028・038・043・047・051 炉穴



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土：しまりあり
3. 暗褐色土：ローム粒含
4. 暗黄褐色土
5. 黒褐色土
6. 赤褐色土：焼土粒多量含

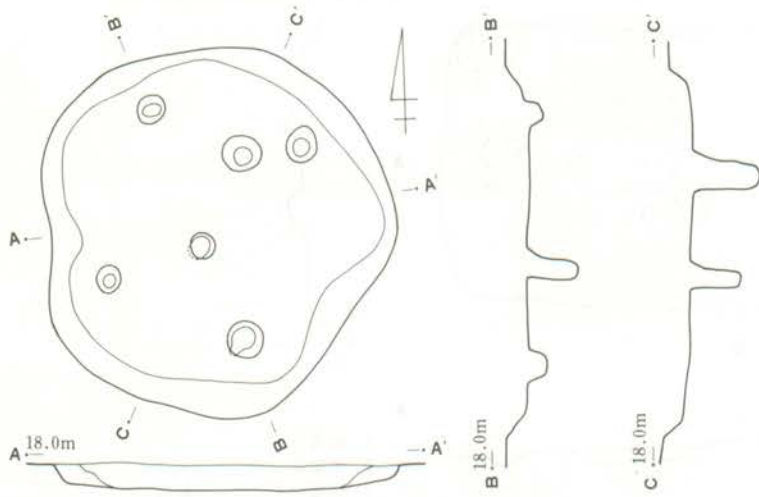


1. 黒褐色土：焼土粒含
2. 黄褐色土：ローム粒少量含
3. 暗褐色土：焼土粒含
4. 暗褐色土
5. 黄褐色土：焼土粒含

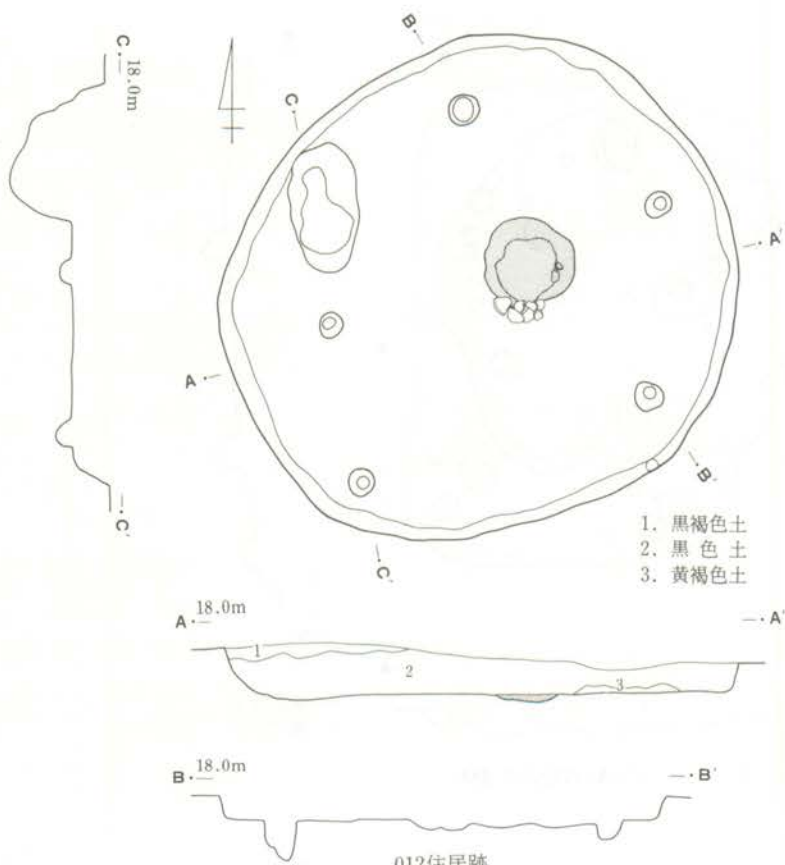


1. 黄褐色土
2. 砂質茶褐色土

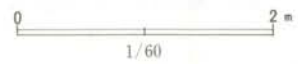
第240図 053・054・062炉穴



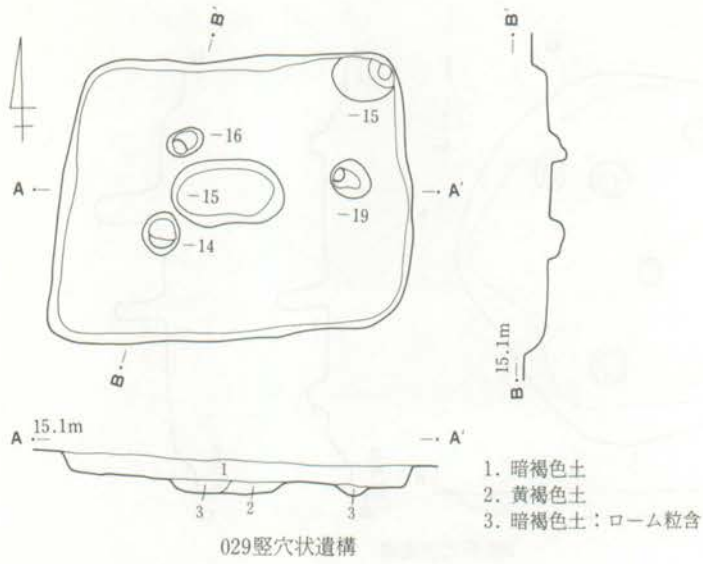
005豎穴狀遺構



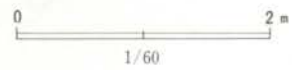
012住居跡



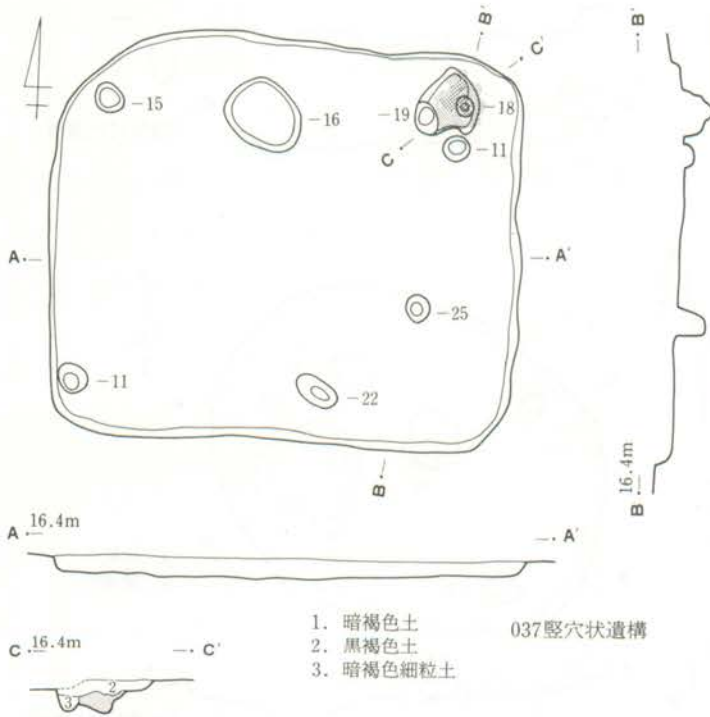
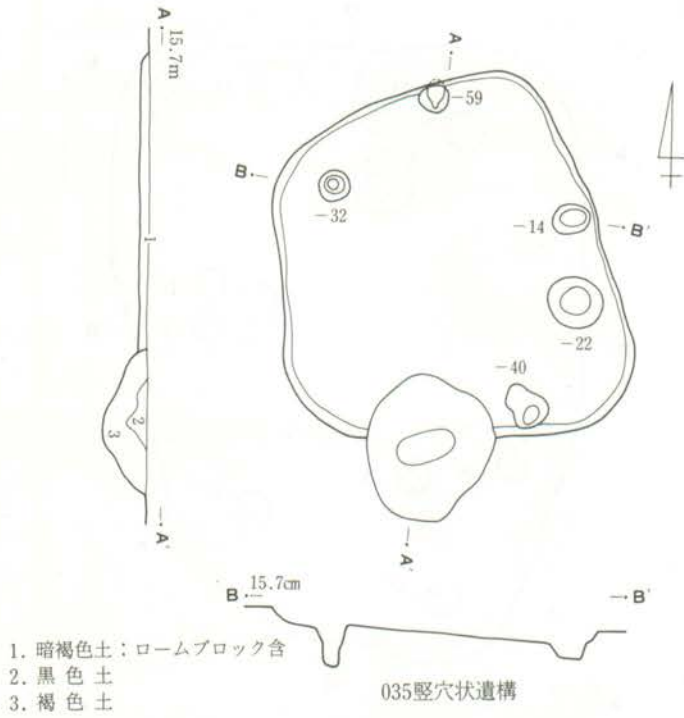
第242圖 005豎穴狀遺構, 012住居跡



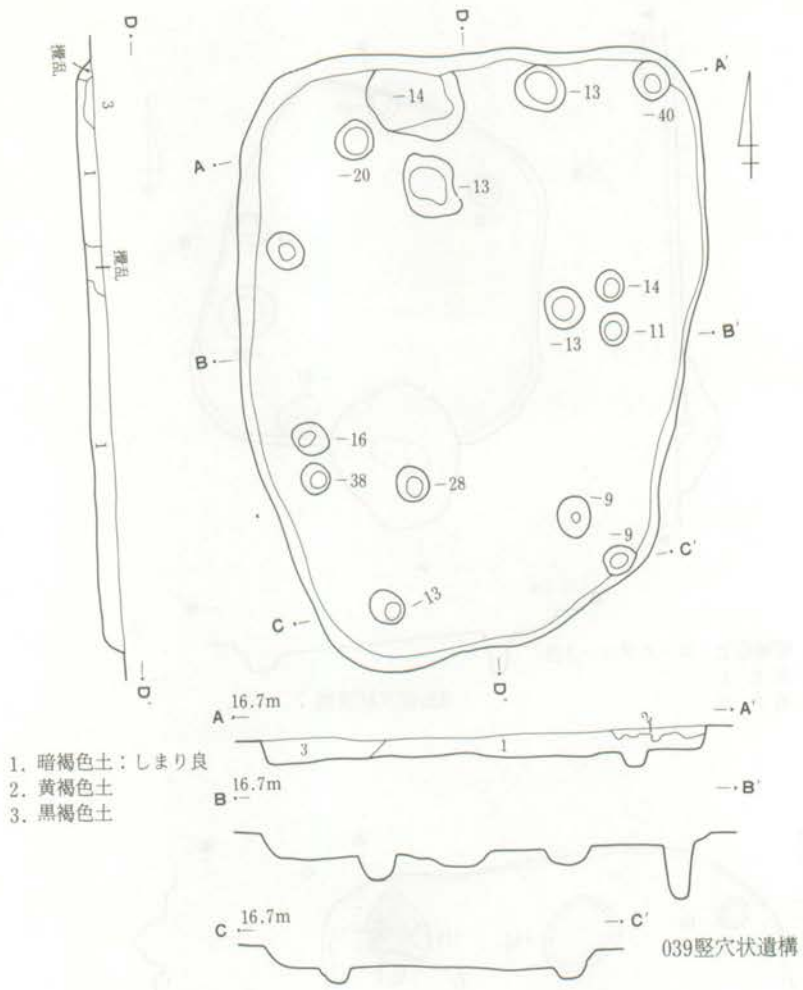
※柱穴横の数字は柱穴深計(cm)を示す



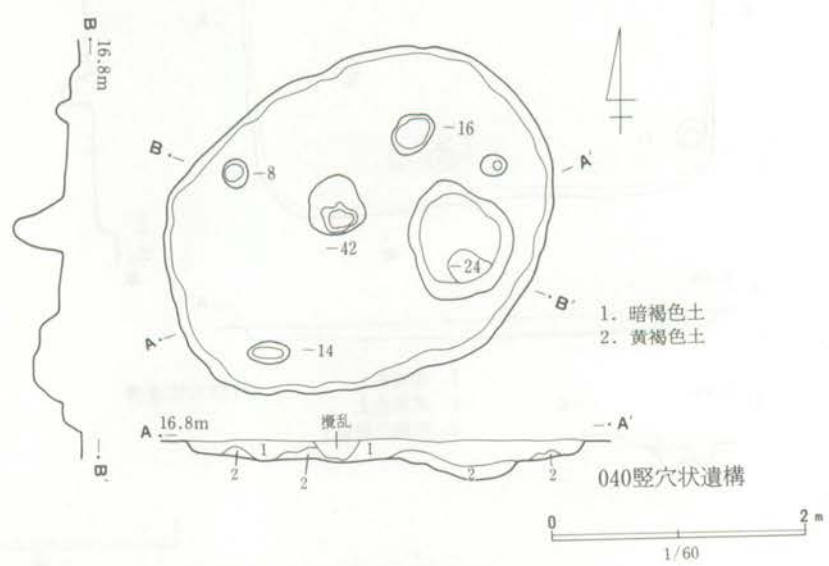
第243図 029・030 竖穴状遺構



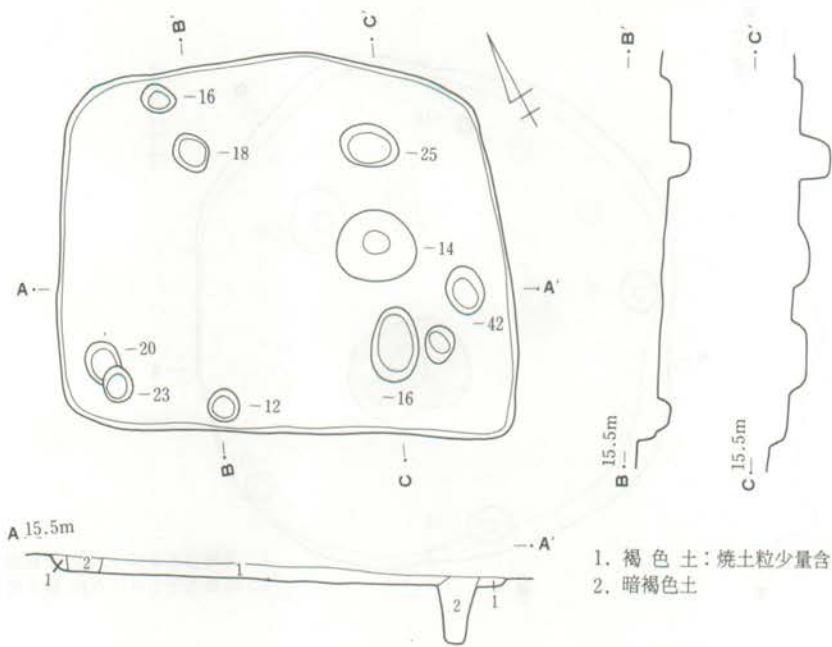
第244図 035・037竪穴状遺構



- 1. 暗褐色土：しまり良
- 2. 黄褐色土
- 3. 黒褐色土

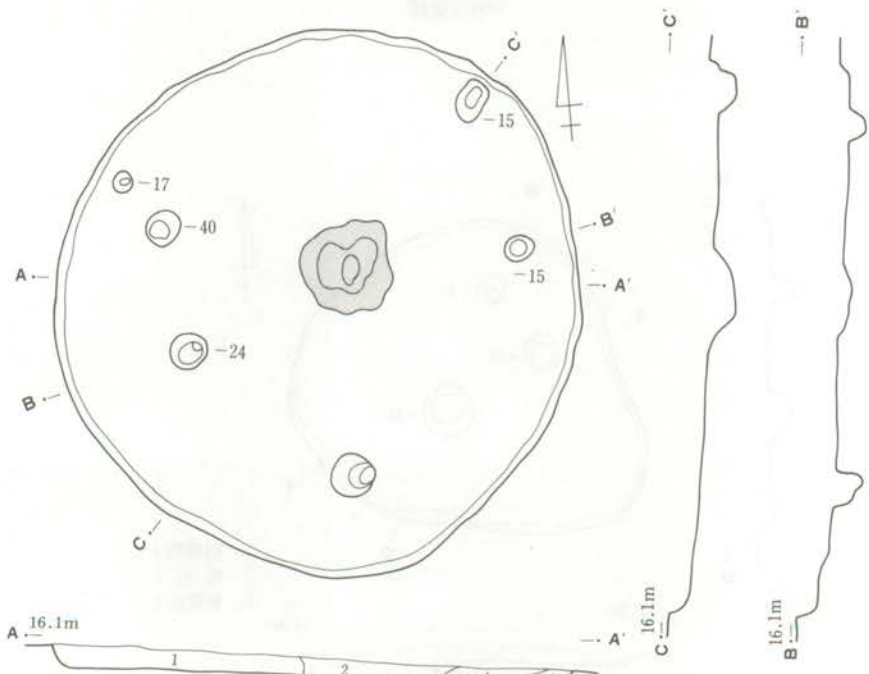


第245図 039・040竪穴状遺構



- 1. 褐色土：焼土粒少量含
- 2. 暗褐色土

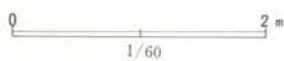
041 竖穴状遺構



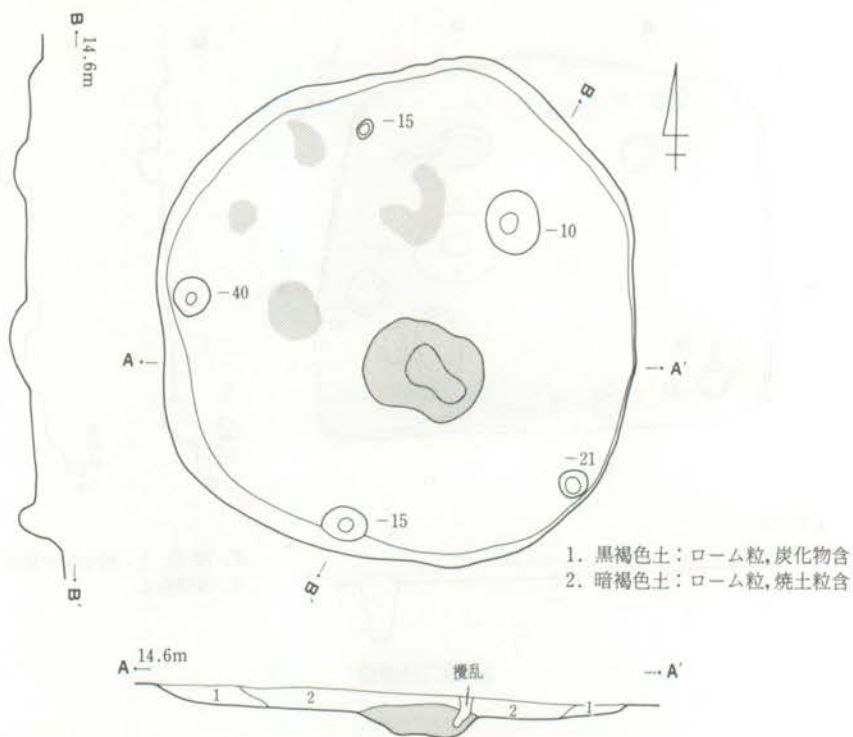
ロームの被熱硬化部分

- 1. 黒色土：ローム粒含
- 2. 黒色土：焼土粒含
- 3. 暗褐色土

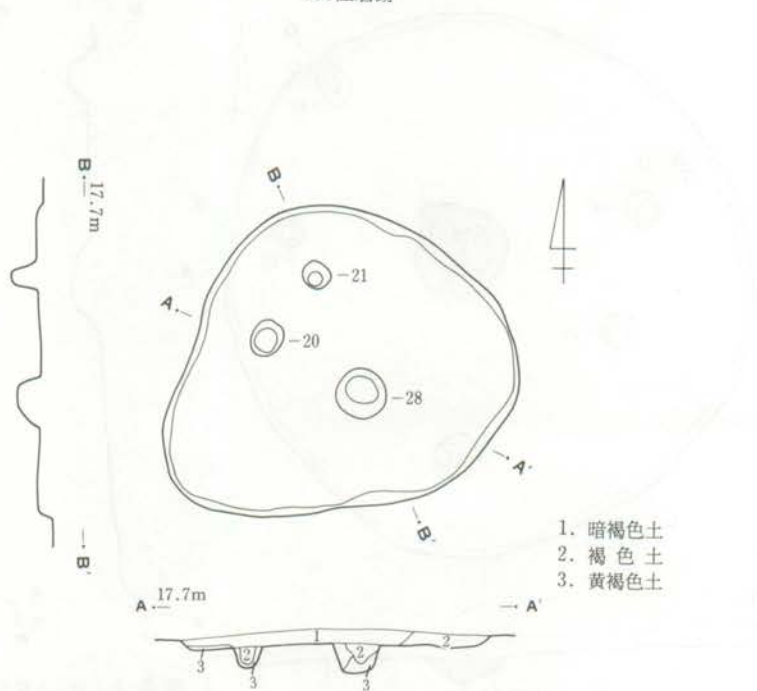
052 住居跡



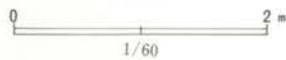
第246図 041 竖穴状遺構・052 住居跡



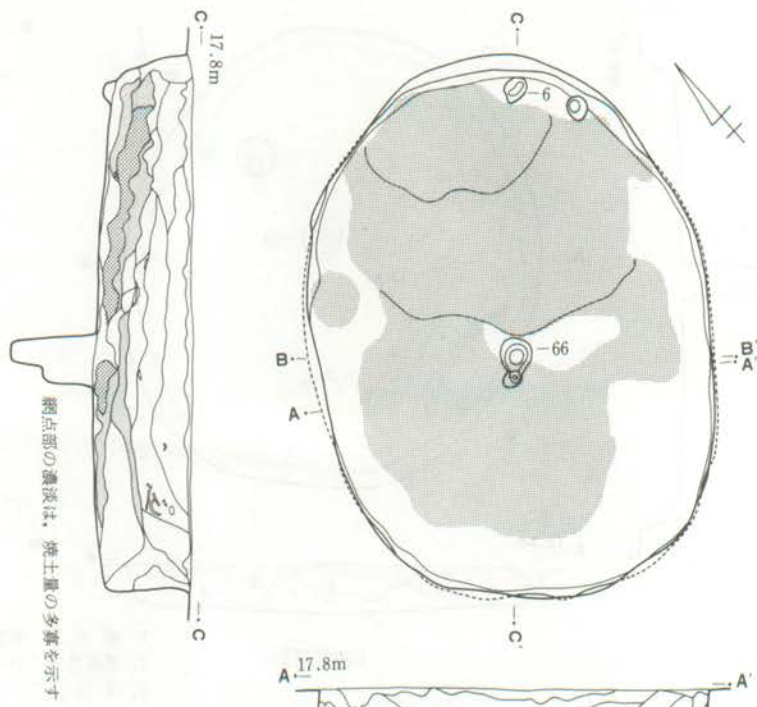
068住居跡



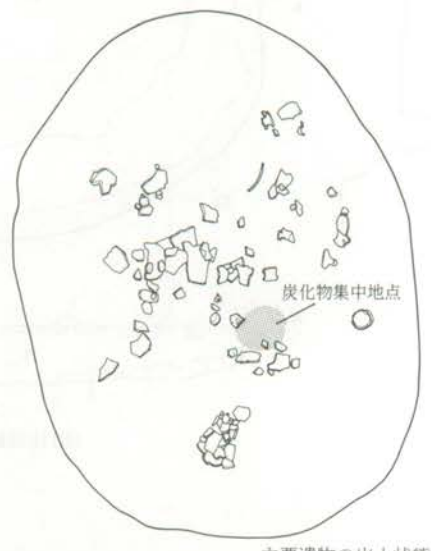
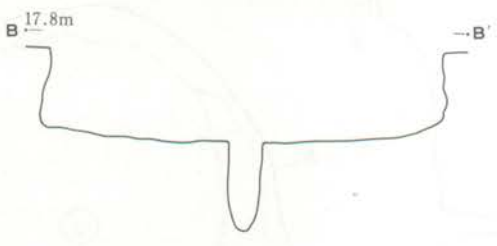
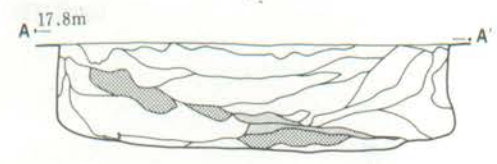
087竖穴状遺構



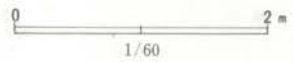
第247図 068住居跡・087竖穴状遺構



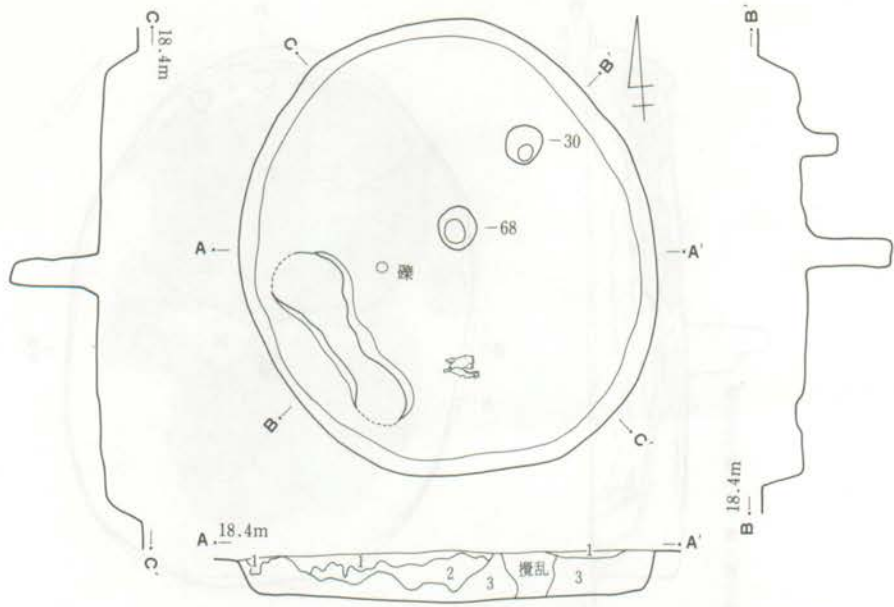
081住居跡



主要遺物の出土状態

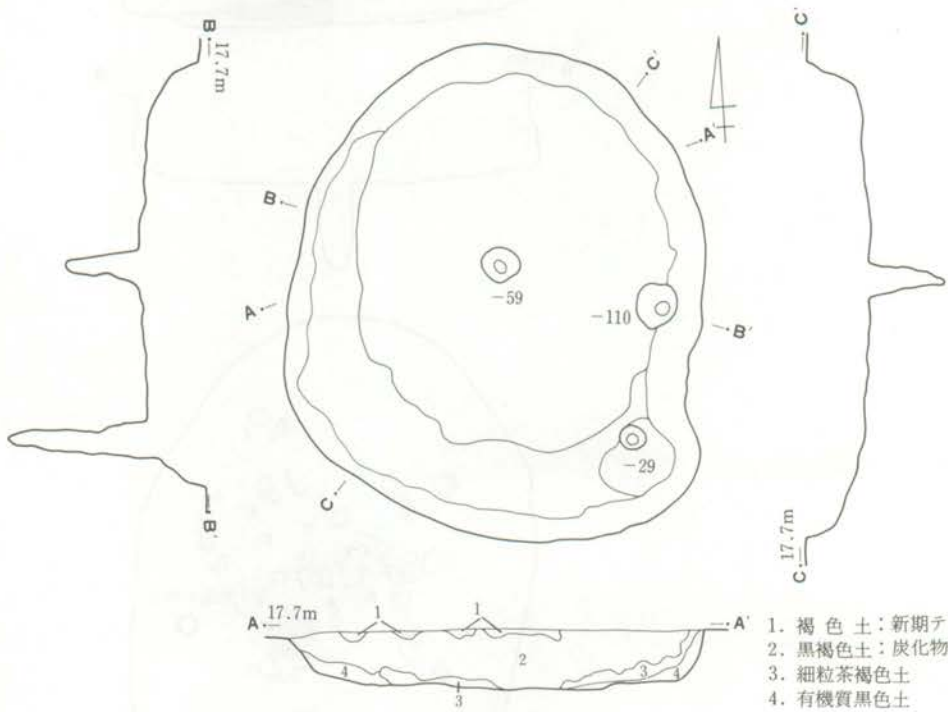


第248図 081住居跡



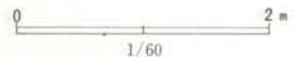
090住居跡

- 1. 褐色土：新期テフラ
- 2. 黒褐色土：ロームブロック少量含
- 3. 黒色土：ローム粒・炭化物含

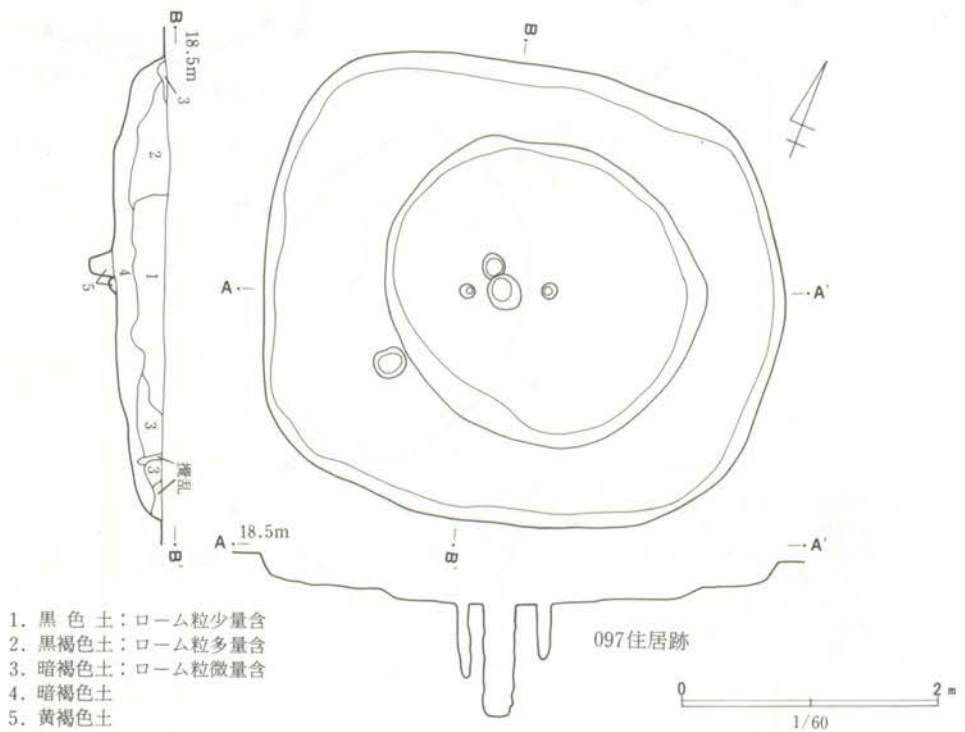
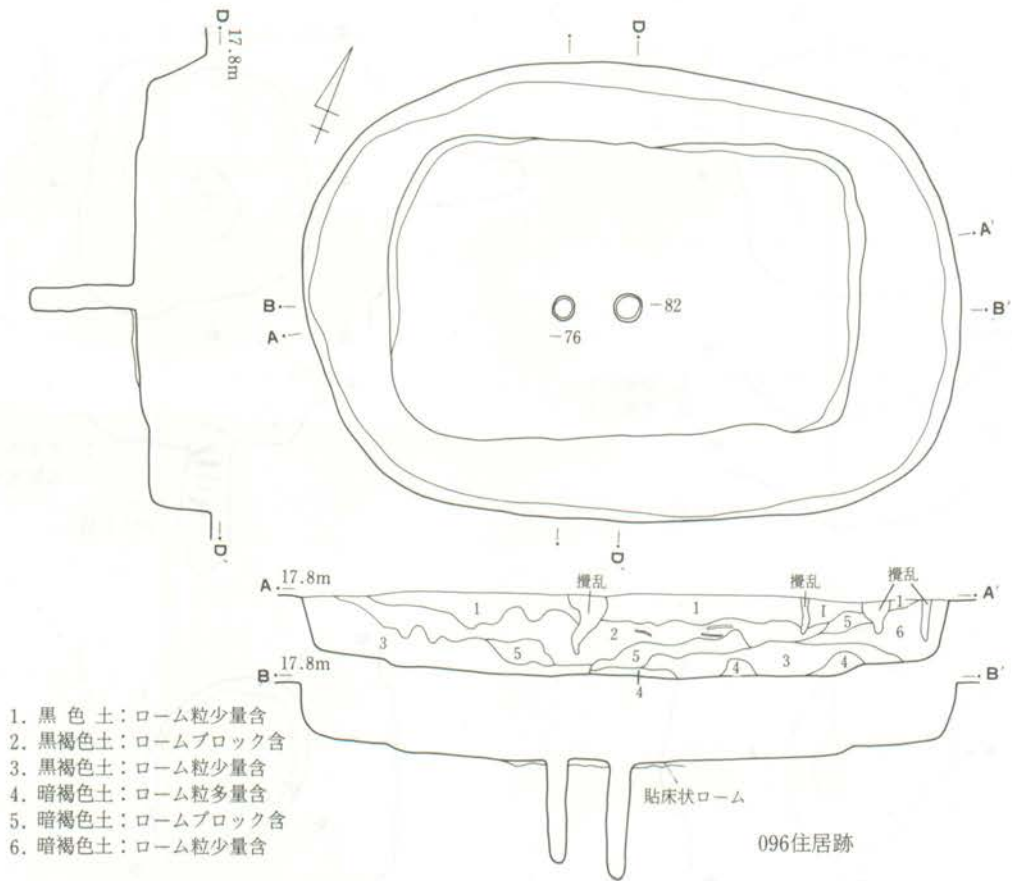


091住居跡

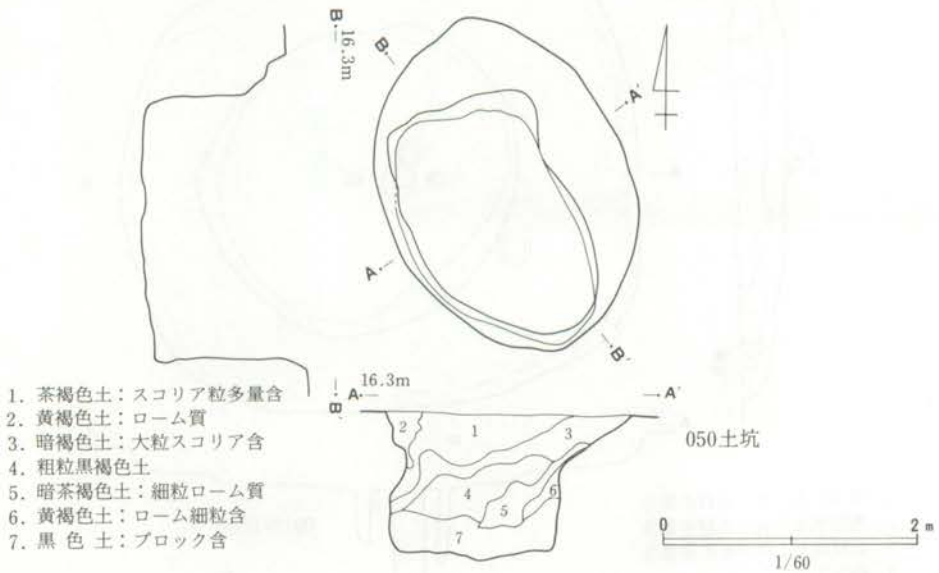
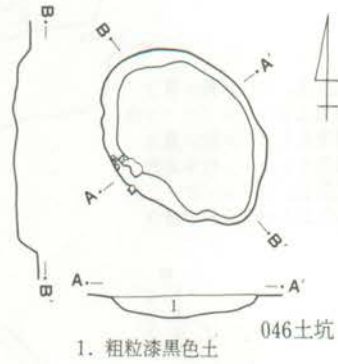
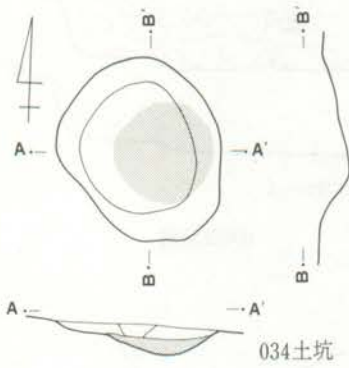
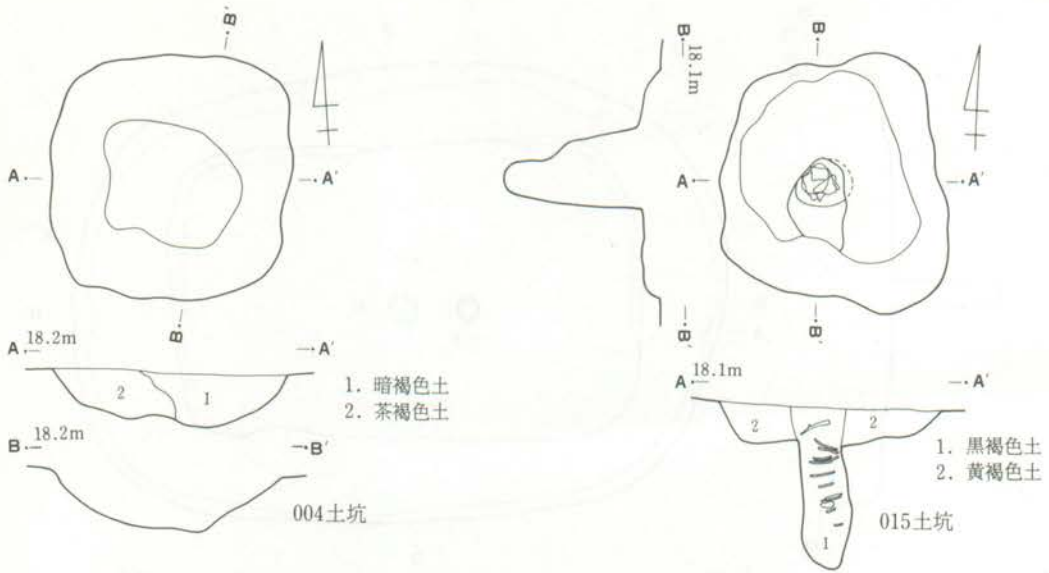
- 1. 褐色土：新期テフラ
- 2. 黒褐色土：炭化物含
- 3. 細粒茶褐色土
- 4. 有機質黒色土



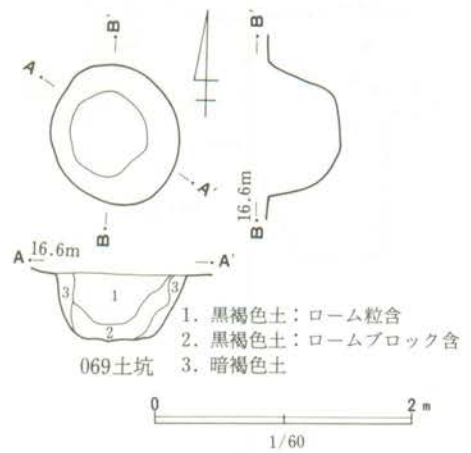
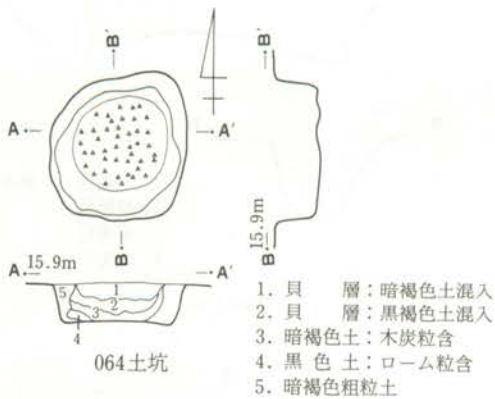
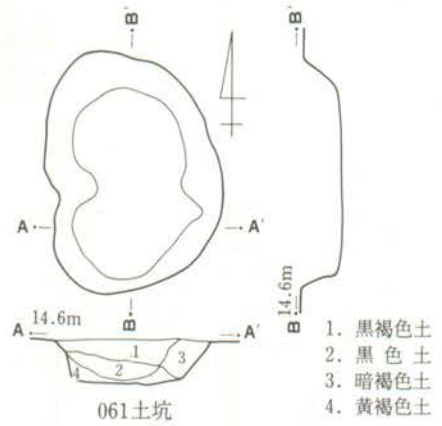
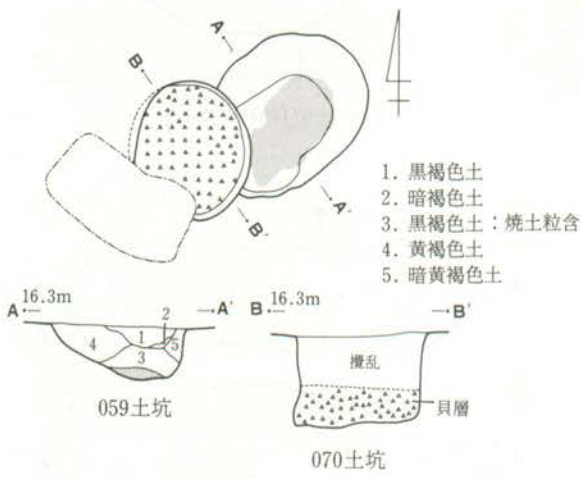
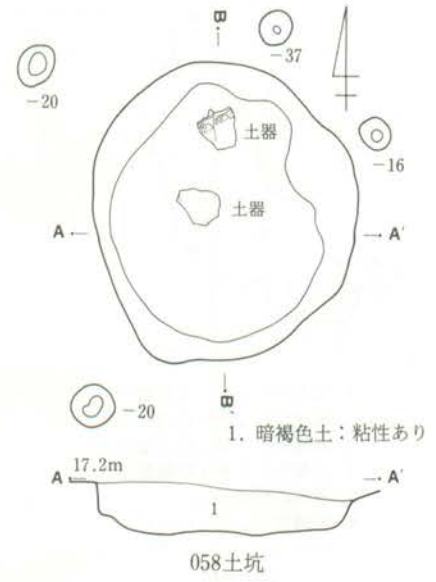
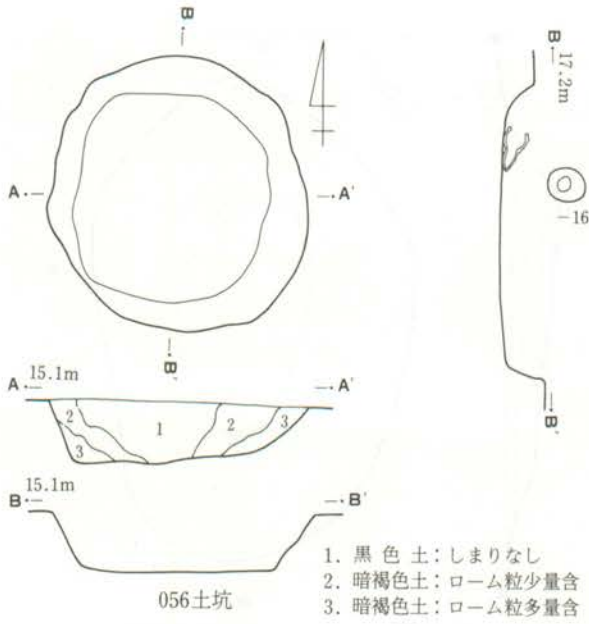
第249図 090・091住居跡



第250図 096・097住居跡



第251図 004・015・034・046・050土坑

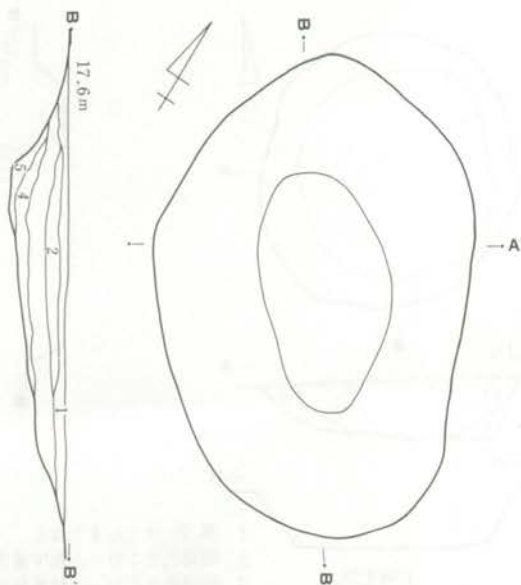


第252図 056・058・059・061・064・069・070土坑



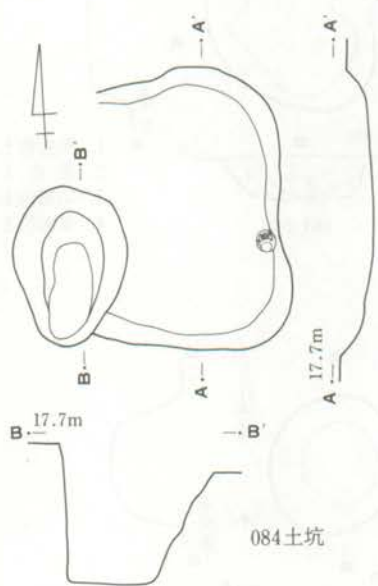
1. 暗褐色土：ローム粒含
2. 黒褐色土：焼土粒含
3. 暗褐色土：焼土粒多量含
4. 暗褐色土：焼土粒微量含
5. 黄褐色粘質土
6. 暗褐色土：しまりなし

074土坑

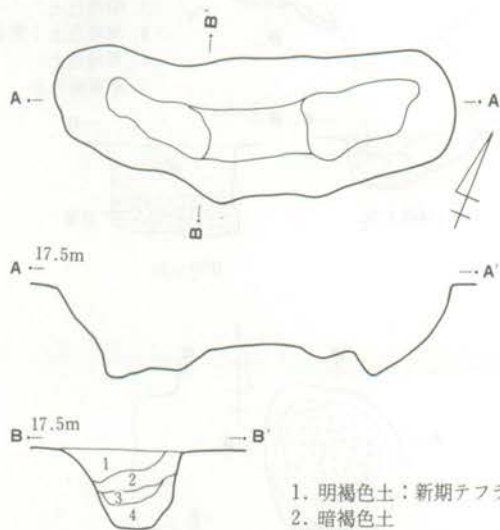


1. 暗褐色土
2. 茶褐色土
3. 黒色土
4. 黒褐色土
5. 黄褐色土

082土坑(池状の窪みか?)



084土坑

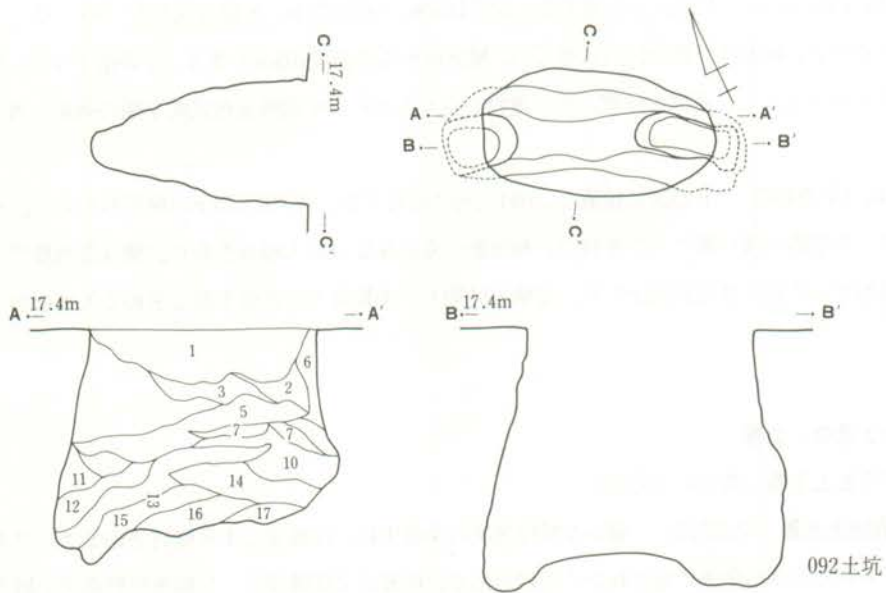


1. 明褐色土：新期テフラ
2. 暗褐色土
3. 黄褐色土
4. 暗褐色土：炭化物含

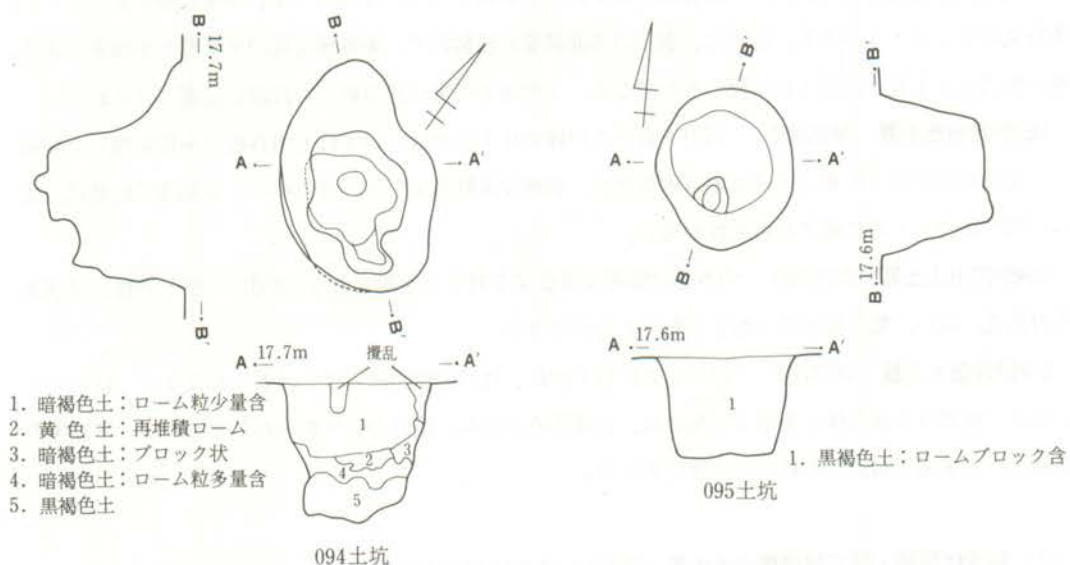
086土坑



第253図 074・082・084・086土坑



- | | | |
|---------------------|-------------------|---------------------|
| 1. 黒褐色土：ロームブロック多量含 | 7. 粘質暗褐色土：ローム粒多量含 | 13. 褐色土：黒色土ブロック含 |
| 2. 暗褐色土：ロームブロック含 | 8. 黒色土：しまりなし | 14. 暗褐色土：ロームブロック少量含 |
| 3. 暗褐色土：ロームブロック多量含 | 9. 褐色土：黒色土粒少量含 | 15. 暗褐色土 |
| 4. 褐色土：ローム粒含 | 10. 黒褐色土：しまりなし | 16. 暗褐色土：ロームブロック多量含 |
| 5. 粘質黒色土：ロームブロック少量含 | 11. 暗褐色土：ローム粒多量含 | 17. 黒褐色土：ロームブロック少量含 |
| 6. 黒味褐色土 | 12. 黒色土：ローム粒少量含 | |



- | |
|-----------------|
| 1. 暗褐色土：ローム粒少量含 |
| 2. 黄色土：再堆積ローム |
| 3. 暗褐色土：ブロック状 |
| 4. 暗褐色土：ローム粒多量含 |
| 5. 黒褐色土 |

- | |
|------------------|
| 1. 黒褐色土：ロームブロック含 |
|------------------|

第254図 092・094・095土坑

094土坑 (第254図) F23区に位置する。長径185cm、短径122cm、長軸方向をN-45°-Wにとり、不整楕円形を呈す。底面及び壁の凹凸は著しい。検出面からの深度105cmを測る。中期前半4点、同後半1点の土器片が出土した。遺構の位置、出土遺物の在り方から、中期阿玉台式前半期の所産と考えて良いだろう。

095土坑 (第254図) F23区に位置し、094土坑に近接する。最大径123cmの略円形を呈す。底面はほぼ平坦で、南壁際に浅い掘り込みを持つ。検出面からの深度は最大85cmを測り、壁は急角度で立ち上がる。中期前半の土器片9点が出土した。遺構の時期も、中期阿玉台式前半期に求めて大過なからう。

(原田)

B. 出土遺物：土器

(1) 炉穴出土土器 (第255～257図)

016炉穴出土土器 (第255図) 細かな横位施文の条痕上に、沈線文による幾何学的モチーフを描く1～6と、条痕文のみが全面に施された7～12がある。前者の文様構成は、早期後半野島式土器でも新しい段階に位置づけられる。

025炉穴出土土器 (第256図) 1～4は、土器内外面に細かな条痕文が施される。文様を持つ土器がなく、明確な型式比定は難しいが、明瞭な条痕施文の特徴、周囲の出土土器から考えて、早期後半野島式から鶺ヶ島台式と思われる。

047炉穴出土土器 (第256図) 口縁部が僅かに外削ぎ状を呈し、頸部に3条の細隆起線が巡る1と、条痕文のみの2・3がある。前者は、胴部の器面調整が特徴的で、条痕施文後のナデ整形が顕著である。他の炉穴出土土器とは明らかに顔つきが異なる。早期後半子母口式の新しい段階に位置づけられる。

053炉穴出土土器 (第256図) 刻目を有する口縁部片1の他は、いずれも内外面に条痕を施した胴部片。文様要素を欠くため、型式比定は困難だが、明瞭な条痕施文手法の特色から、早期後半野島式、或いは鶺ヶ島台式土器に属する可能性が高い。

054炉穴出土土器 (第257図) 内外面に顕著な条痕文を有する土器である。053炉穴例と同様、早期後半野島式、或いは鶺ヶ島台式土器と見做すことができる。

062炉穴出土土器 (第257図) 直立した口唇上面に、浅い凹線が巡る1と、若干外反する口縁部片2がある。前者は外面全体に条痕文が施され、口縁部直下のみ横位のナデ整形が加えられる。早期後半、野島式から茅山下層式にかけての土器であろう。

(2) 竪穴住居跡・竪穴状遺構出土土器 (第258～282図=図版104～114)

005竪穴状遺構出土土器 (第258図) 中期前半の土器1～7と、中期後半の土器8がある。前者は竹管状工具による結節沈線文、断面半円形の隆帯等が加飾され、阿玉台I b式に比定される。後者は加曾利E II式土器の底部片だが、当遺構に伴うものではない。

011竪穴状遺構出土土器 (第258図) 中期前半の土器1～19と、同後半の土器20がある。前者は、口縁部文様帯に楕円区画文を有し、結節沈線による曲線的モチーフを描くものや、口縁部の耳状突起片、胴部の指頭圧痕文に特色が見られる。阿玉台I b式土器であるが、このうち13は、結節沈線文が卓越し、

所謂勝坂直前期の土器に比定される。20は加曾利E III式土器だが、後の混入であろう。

012竪穴住居跡出土土器 (第259～262図) 中期前半の土器1・9～26と、同後半の土器2～8・27～47に大別される。中期前半の土器は、竹管状工具でヒダ状の圧痕文を模倣した1の他、扇状把手が発達し、細かな結節沈線文で楕円区画を描くもの、断面三角形の低平な隆帯を有するもの、さらに胴部に指頭圧痕や、貝殻腹縁刺突文が施されたもの等多彩である。これらは阿玉台I b・II式土器に比定されるが、25は勝坂II式である。中期後半の土器27～47は、いずれも加曾利E II・III式土器であり、住居跡に直接伴うものと思われるが、詳細な出土状態の分析はできなかった。

029竪穴状遺構出土土器 (第262図) 中期前半、阿玉台II式に属する1・2と、後期前半称名寺式の3がある。

030竪穴状遺構出土土器 (第262図) 早期後半、鶴ヶ島台式に属する1～3と、擦糸文が斜走する、前期前半黒浜式の4、中期前半の土器5を図示した。

035竪穴状遺構出土土器 (第262図) 中期前半、勝坂II式の幅広爪形文を持つ1を図示した。

037竪穴状遺構出土土器 (第262図) 中期前半、阿玉台I b式に属する1～3と、勝坂II式の4・5がある。

039竪穴状遺構出土土器 (第263図) 1～3は、中期前半、阿玉台I b式に属するものである。

040竪穴状遺構出土土器 (第263図) 中期前半、阿玉台I b、II式に属する土器がある。1は扇状突起の波頂部片で、竹管状工具による結節沈線文が施される。2・3は胴部に指頭圧痕文を持つものである。

041竪穴状遺構出土土器 (第263図) 早期後半、鶴ヶ島台式に属する1、前期前半黒浜式の2、中期前半の無文口縁部片3、及び後期前半堀之内I式の胴部片4がある。

052竪穴住居跡出土土器 (第263図) 早期後半の条痕文を有する3・4の他は、中期後半の土器である。口縁部が強く内弯し、磨消手法による文様モチーフを持つ1や、微隆起線文を有する7等があり、大旨加曾利E III、IV式に比定される。

068竪穴住居跡出土土器 (第264図) 早期後半の土器1～6と、後期前半の土器7～10を図示した。前者は口縁部に貝殻腹縁による刻目を有する1を含み、子母口式の新しい段階から野島式、鶴ヶ島台式前後の資料と考えられる。後者は堀之内I式に属するもので、小型で壺形の7、ミニチュアの無文土器8・9、焼成前穿孔を持つ蓋10等、特殊なものが多い。

081竪穴住居跡出土土器 (第264～270図) 中期前半阿玉台I b式土器を中心とした膨大な遺物が出土している。1は4単位の耳状突起及び橋状把手を持ち、胴部が外に張り出す深鉢形土器。2～5は細部の形態は異なるが、同じく4単位の耳状・渦巻状突起を口縁部に配し、胴部以下が次第にすぼまる深鉢である。文様要素は、各々単一の竹管状工具による結節沈線文と沈線文で、胴部には指頭によるヒダ状圧痕が残される。6～8もこれに類した深鉢であろうが、胴部の指頭圧痕は整然さを欠く。9～11は平縁、小突起と指頭圧痕文のみの深鉢である。12は胴部が大きく膨らむ深鉢片、13・14は浅鉢形土器、15は比較的小型の鉢形土器である。16～22・72～76は底部付近の破片で、16・18・22には、不鮮明ながら網代痕が残る。なお、19は底部周縁に乾燥後の面取り様のケズリ整形が行われた、特異なものである。破片は主要なものを図示するに止めたが、人面様の貼付突起を持つ23、扇状・渦巻状突起を有する24・

25・27の他、口縁部文様帯として楕円区画文を描くもの等が多い。文様要素は単一工具による結節沈線文と、断面三角形の低平な貼付隆帯が主体で、胴部には多くの場合、指頭によるヒダ状圧痕文が連続する。

087 竪穴状遺構出土土器 (第271図) いずれも中期前半の資料だが、他遺構出土の土器に比べ、断面が半円形の肉厚な隆帯文を特色とした、阿玉台Ⅱ式土器が主体を占める。1は口縁部に三角形の区画文を描くもの、4～6は区画文の内周を、幅広い竹管状工具による爪形文で充填するものである。12・13は無文の浅鉢形土器片。

090 竪穴住居跡出土土器 (第272・273図) 中期前半、結節沈線文を多用する深鉢1と、阿玉台Ⅰb式土器2～11を図示した。特に1は、口縁部に鳥頭状の突起を2単位配し、胴部上半に楕円形区画文及び三角形区画文を3帯重畳させる。文様区画内は、幅広い爪形文と細かな結節沈線文が執拗に充填され、極力無文部を残さない。胴下半にはクランク状の隆帯が結節沈線文を伴って2条垂下する。底面には2本越え、2本潜り、1本送りの網代痕を有す。所謂勝坂式直前期、或いは勝坂Ⅰ式古段階に併行し、文様モチーフは中部地方の貉沢式の影響を強く受ける。阿玉台式土器とは系統を異にする。

091 竪穴住居跡出土土器 (第273・274図) 中期前半阿玉台Ⅰb式土器である。口縁部に耳状突起を有し、竹管状工具による結節沈線文を多用した深鉢1・2・5や、口縁部に楕円形区画文を描出する4、橋状の渦巻文把手が加飾される6等がある。14～16は底部片で、このうち14には、2本越え、2本潜り、1本送りの網代痕が残る。

096 竪穴住居跡出土土器 (第274～278図) 中期前半、阿玉台Ⅱ式土器を中心とした資料が主体を占めるが、一部に勝坂式直前期及び所謂「鳴神山系」と呼ばれる異系統の資料を含む。1は大形の扇状突起を有する深鉢、2・3は同じく口縁部に突起を持つ土器だが、それほど突起は大きくないらしい。13・14も同様の土器であろう。また6は、胴部に縦位分割を基調とした区画隆帯を貼付し、その内側を幅広い爪形文及び、半月状の刺突文に近い結節沈線で充填する。口縁部及び胴部に、先端が渦巻状で肥厚した貼付隆帯を持ち、努めて無文部を残さない。かつて「鳴神山系」土器と呼称された、下総地方に特有な資料である。また7は、単一工具による結節沈線で、幾何学的モチーフを描く小型土器。口縁部に小突起が付され、胴部文様帯は縦位分割が基調となり、充填文の一部に三角形の陰刻文も使われる。勝坂式直前、或いは中部地方貉沢式土器と併行するものである。4・5・10・11は底部片で、10以外には網代痕が残される。

097 竪穴住居跡出土土器 (第278～282図) 中期前半、阿玉台Ⅱ式土器を中心とした資料で、阿玉台Ⅰb式と、一部異系統の文様要素を持つ土器が含まれる。1は口縁部に複雑な貼付突起や、曲線文が施される浅鉢で、隆帯先端が渦巻状に肥厚する特徴や、ペン先状工具による結節沈線文が多用される、所謂「鳴神山系」の土器である。2は波状口縁と4単位の垂下隆帯を持つ深鉢、3は胴部中位に最大径を持ち、扇状突起及び耳状の把手を有する大形深鉢片。4～26は破片資料で、このうち7～9は貉沢式土器に類似したモチーフを持つ。また胴部の指頭圧痕文を、貝殻腹縁による刺突文に置換した17～19・22もある。出土土器全体の様相は、087 竪穴状遺構出土土器に先行し、081・091 竪穴住居跡出土土器に後続するものと考えられる。27～30は底部片で、29には網代痕が残る。

(3) 土坑出土土器 (第283～287図=図版115・116)

004土坑出土土器 (第283図) 中期前半阿玉台 I b、II式土器の胴部片 1～3 を図示した。

046土坑出土土器 (第283図) 1 は中期前半阿玉台式土器の底部で、網代痕を残す。

056土坑出土土器 (第283図) 1・3 は無文の深鉢形土器片、2 は口唇に縄文が施された、所謂中峠式土器に属するものである。

058土坑出土土器 (第283・284図) 中期前半勝坂II式、或いは所謂中峠式に属する把手付深鉢 1 と、無文浅鉢 2 が出土している。1 は完形で、把手周辺の口唇部に単節縄文が、胴部以下に捺糸文が施され、口縁部文様帯は肉厚な貼付隆帯及び爪形状刻目文で飾られる。文様の描出手法は所謂中峠式のそれを援用するが、器形と花卉形の装飾文モチーフは、勝坂II式土器に通有なものである。両系統のいわば折衷型とでも言えようか。2 は 4 単位の波状口縁を持つ無文浅鉢。この他に、中期阿玉台式前半期の土器 3・5 と、中期後半加曾利 E 式の胴部片 4 がある。

059土坑出土土器 (第283図) 早期後半の条痕文を有する土器 1～3 と、後期前半、堀之内 I 式の把手部分 4 を図示した。

061土坑出土土器 (第283図) 後期前半の土器 1～5 を図示した。ミガキ整形が顕著な器面に、沈線文・列点文を施す、称名寺式土器である。

064土坑出土土器 (第285図) 前期前半から後期前半に至る、各期の土器がある。1 はループ文が重畳して施された小型の深鉢、2・3 はミミズ腫れ状の隆帯を残し、単節縄文が施された小片で、前期前半黒浜式土器である。4 は貝殻背圧痕文を弧線状に押し引き施文した、前期後半、浮島II式前後の土器。5～6・13は、中期後半加曾利 E II、III式土器である。7～12は後期前半の称名寺式土器で、底部片14も、器面調整の特徴からこの時期の土器と見て良いだろう。

070土坑出土土器 (第286図) 中期前半の土器と思われる 1、中期後半加曾利 E IV 式の胴部片 2、後期前半の称名寺式土器 3、同堀之内 I 式土器 4、後期前半加曾利 B 式土器 5 等、各期の小片がある。

082土坑出土土器 (第286図) いずれも中期前半、阿玉台 II 式前後の土器片である。

084土坑出土土器 (第287図) 中期前半の小型深鉢 2 点が完形で出土した。1 は口縁部に 4 単位の貼付突起を持ち、胴部が縦区画を基調とした単一工具による結節沈線文・円形刺突文で充填される。上が開いた H 字状の隆帯モチーフは、抽象化された“人体文”と見る向きもあるが確証はない。勝坂式直前期、或いは中部地方貉沢式土器の文様要素と、下総地方の「鳴神山系」土器のモチーフが融合した土器である。底部に網代痕は無い。2 は阿玉台 I b 式の無文土器である。口縁部に 4 単位のつまみ状突起と刻目を有し、胴部には輪積痕を僅かに残す。底部を欠く。

095土坑出土土器 (第287図) 中期前半、勝坂 I 式土器である。低い隆帯と、幅広の連続爪形文・結節沈線文等が複合する。阿玉台 II 式に併行するものと考えられようか。 (原田)



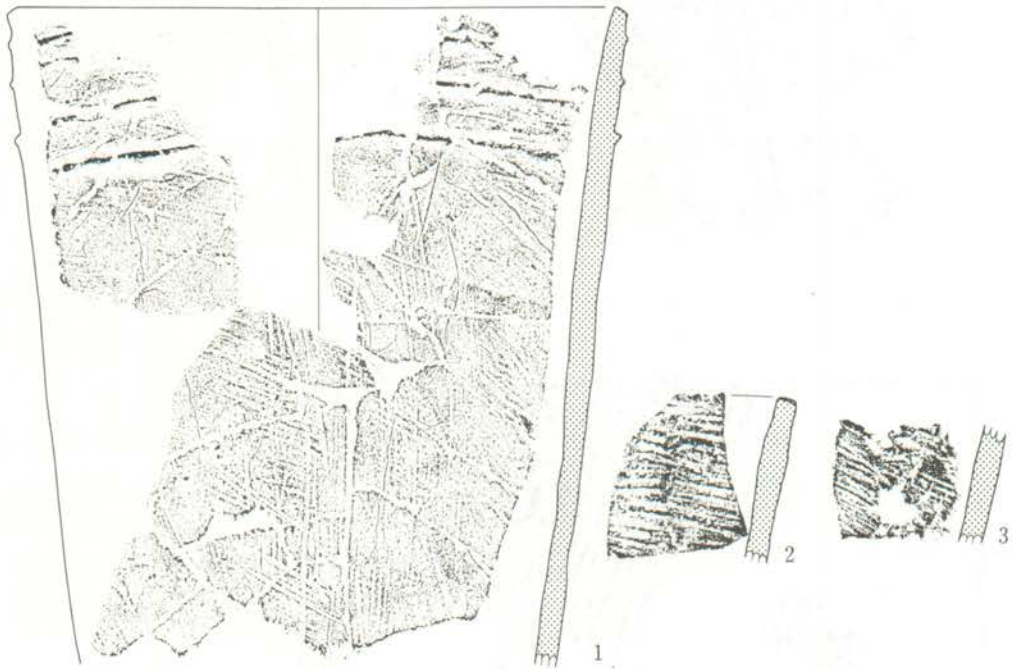
016 炉穴

0 1/3 10 cm

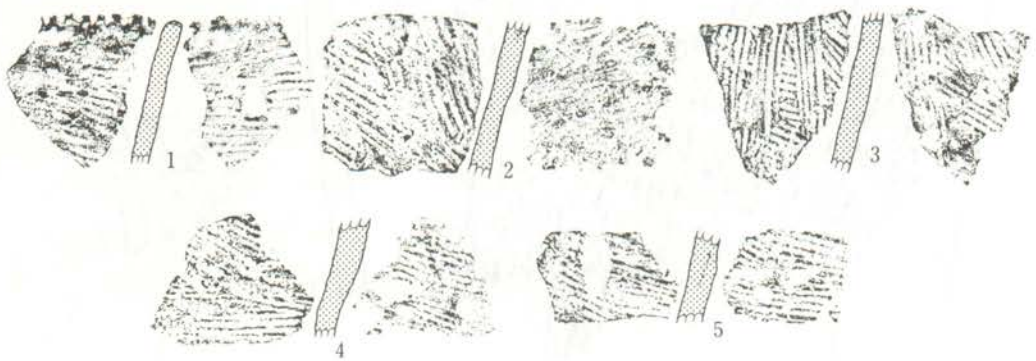
第255图 炉穴出土土器 (1)



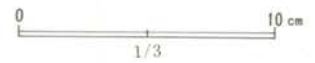
025 炉穴



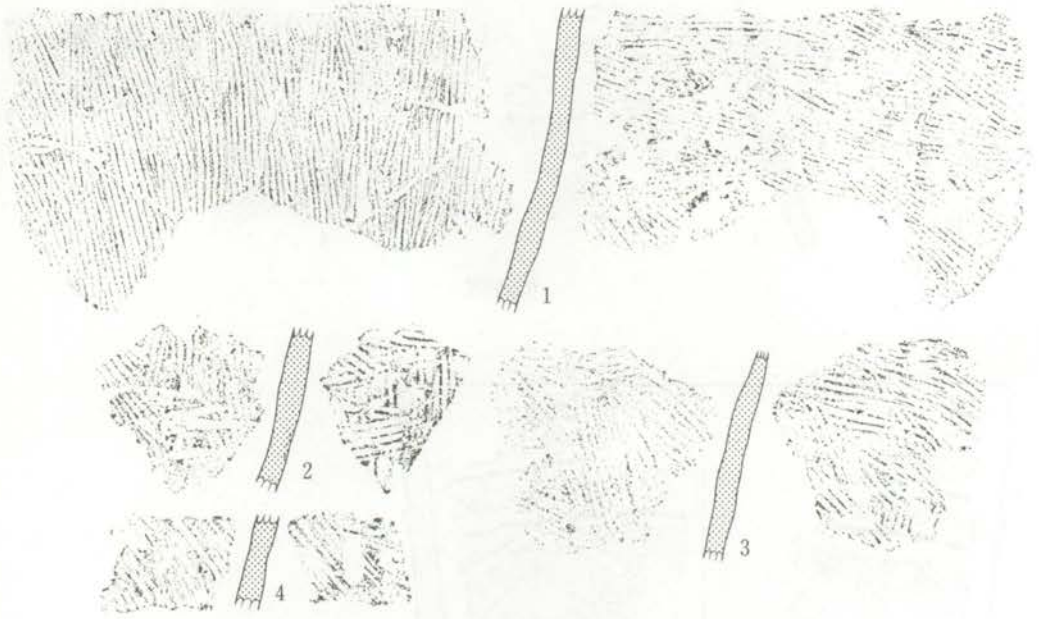
047 炉穴



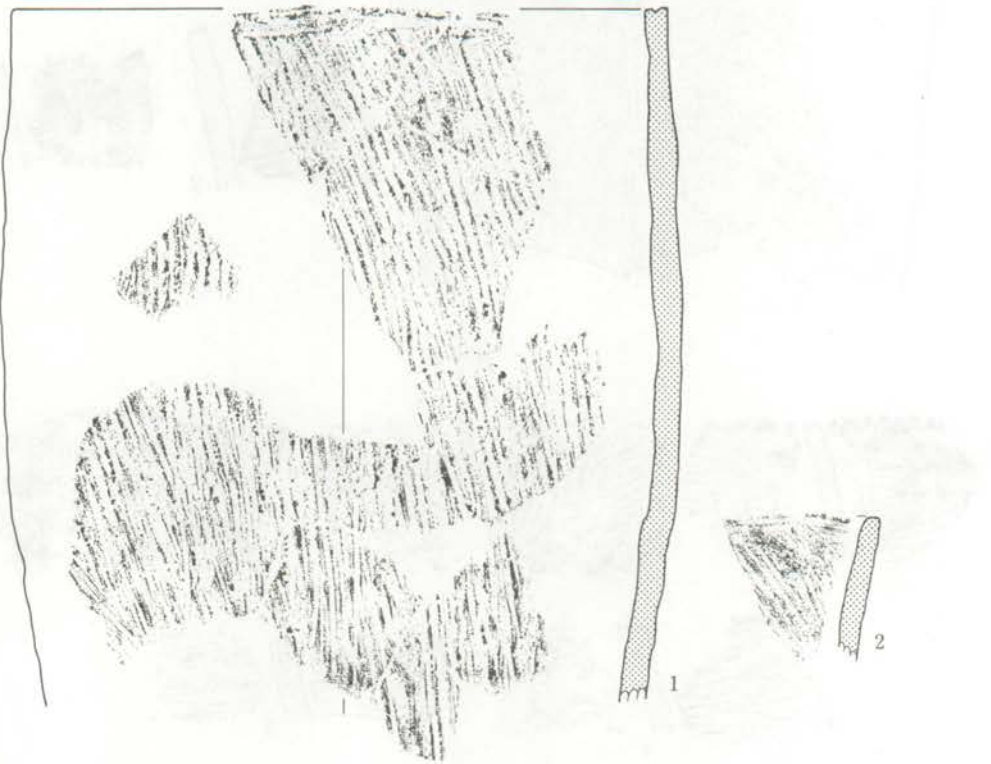
053 炉穴



第256图 炉穴出土土器 (2)



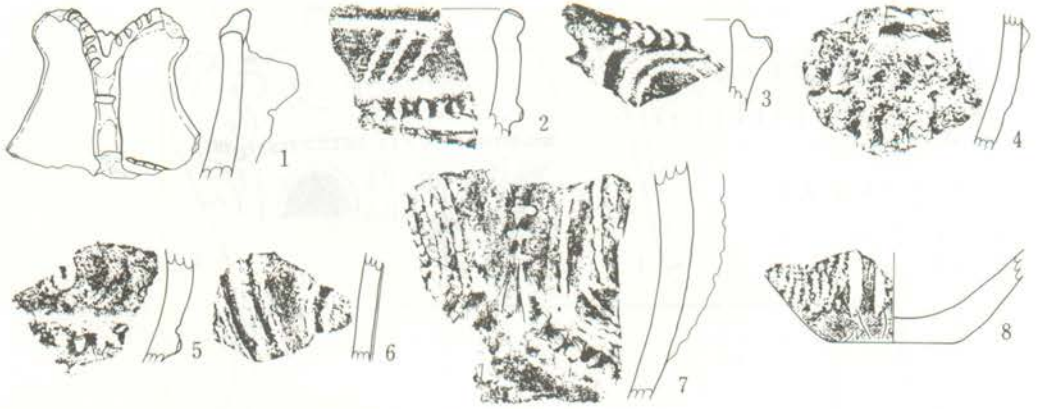
054炉穴



062炉穴



第257图 炉穴出土土器 (3)



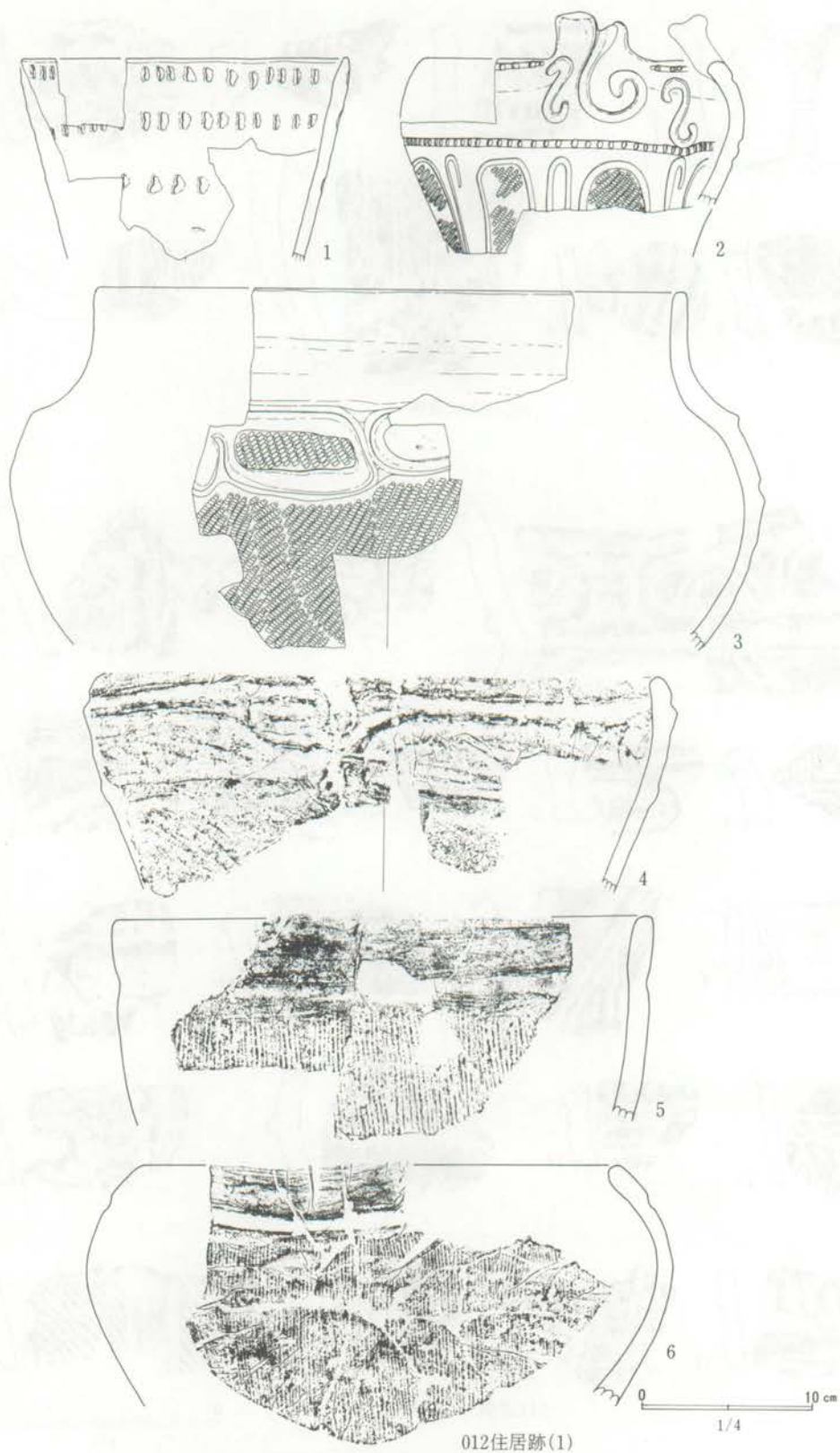
005豎穴状遺構



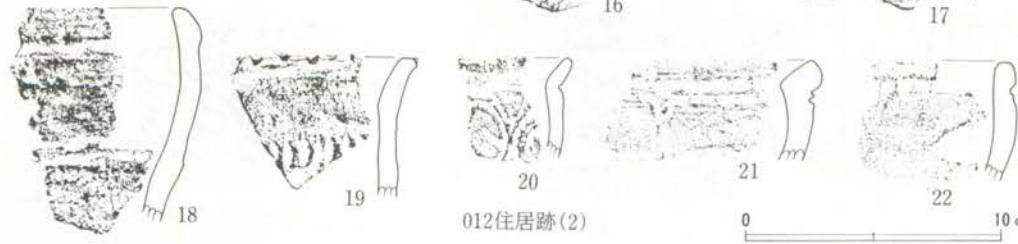
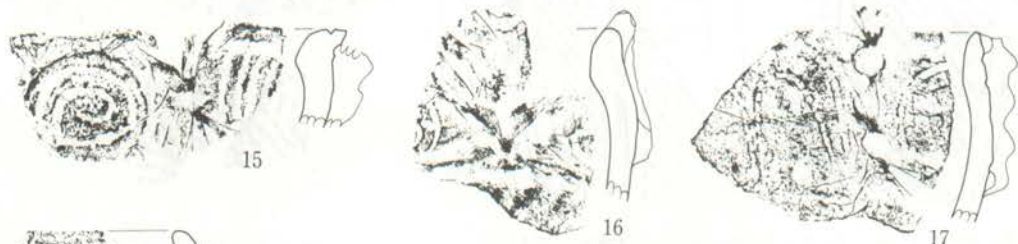
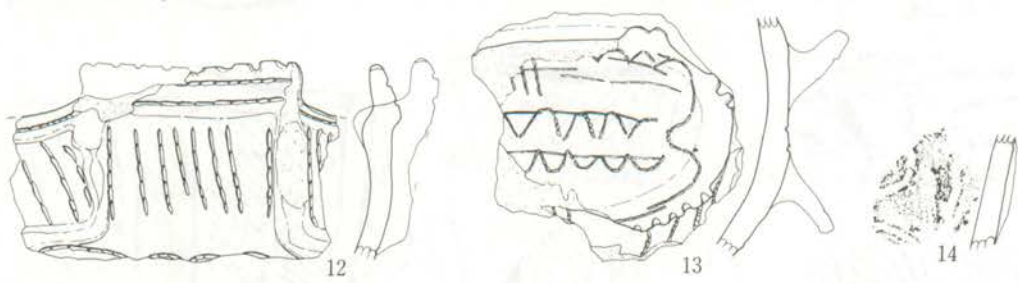
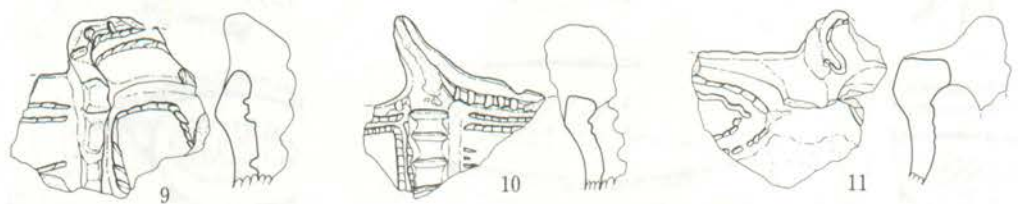
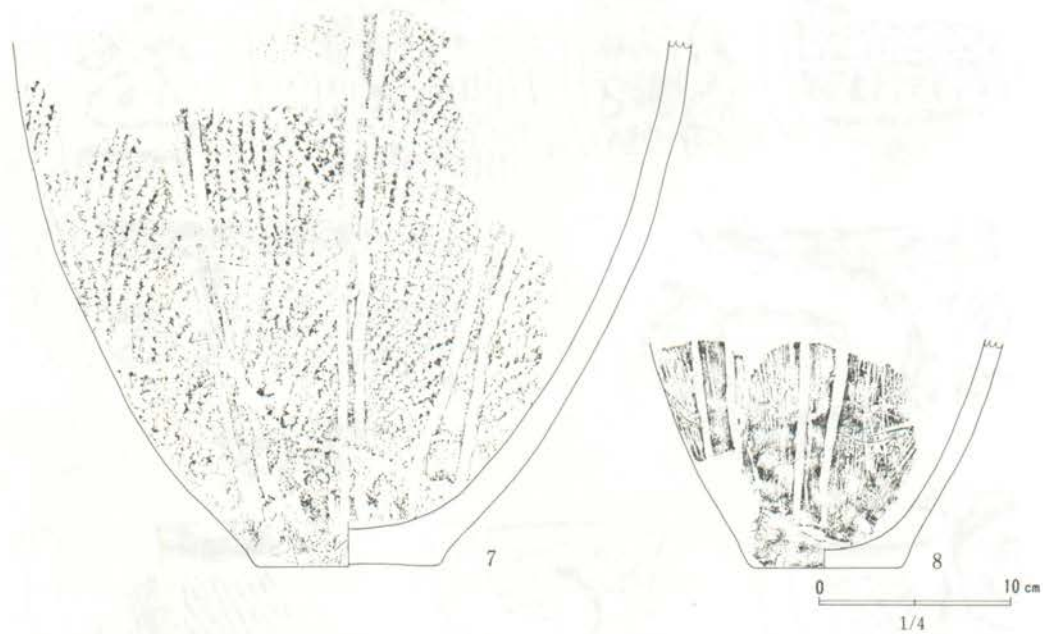
011遺構(欠番扱)

0 10 cm
1/3

第258図 住居跡・豎穴状遺構出土土器 (1)

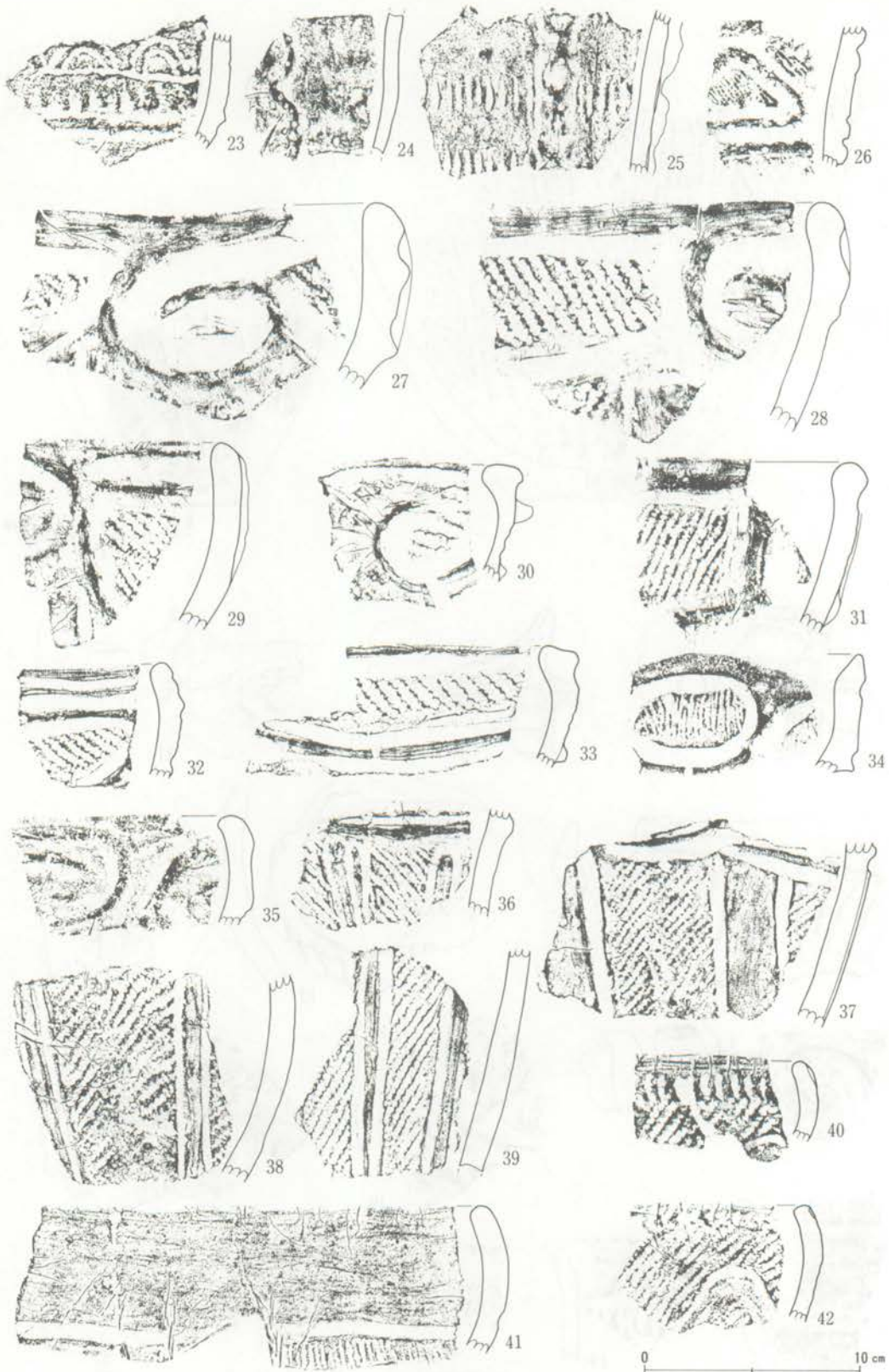


第259図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (2)



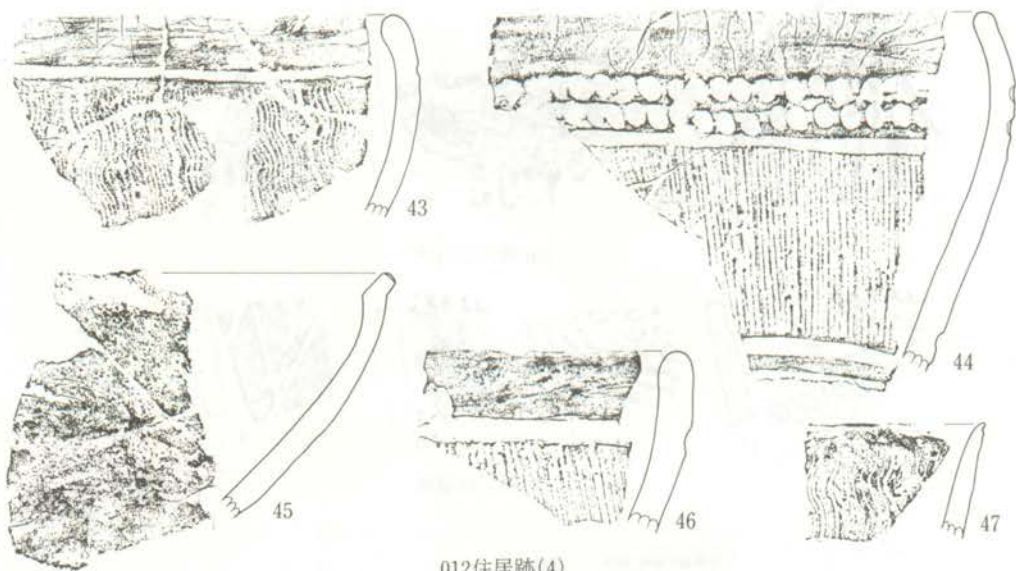
012住居跡(2)

第260図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(3)



012住居跡(3)

第261図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (4)



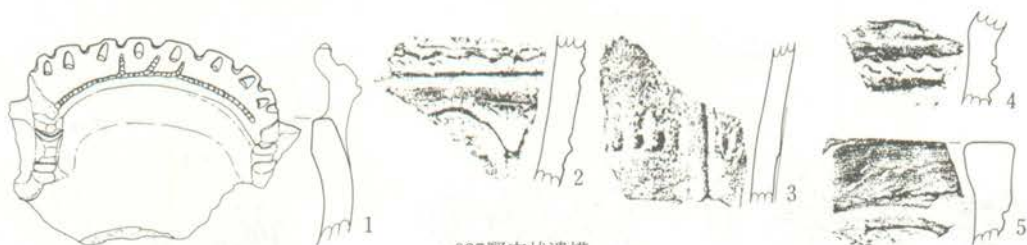
012住居跡(4)



029竪穴状遺構



030竪穴状遺構



037竪穴状遺構



035竪穴状遺構



039竪穴状遺構



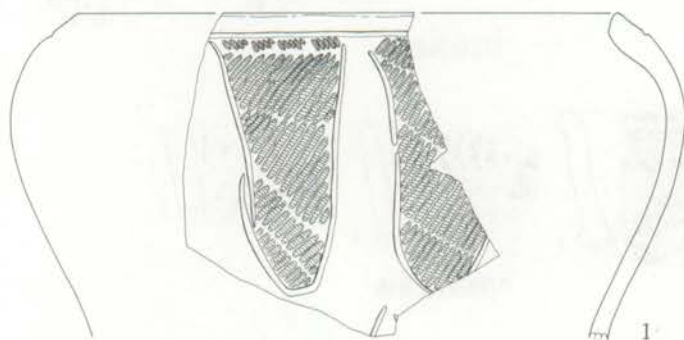
第262図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (5)



040 豎穴状遺構



041 豎穴状遺構

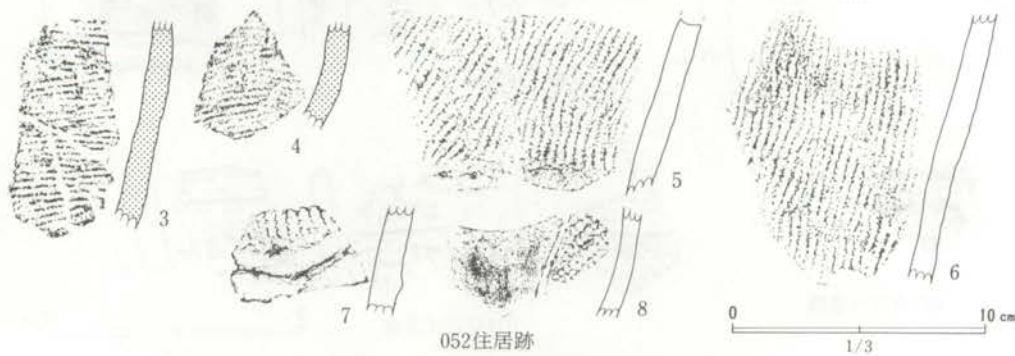


1



2

1/4

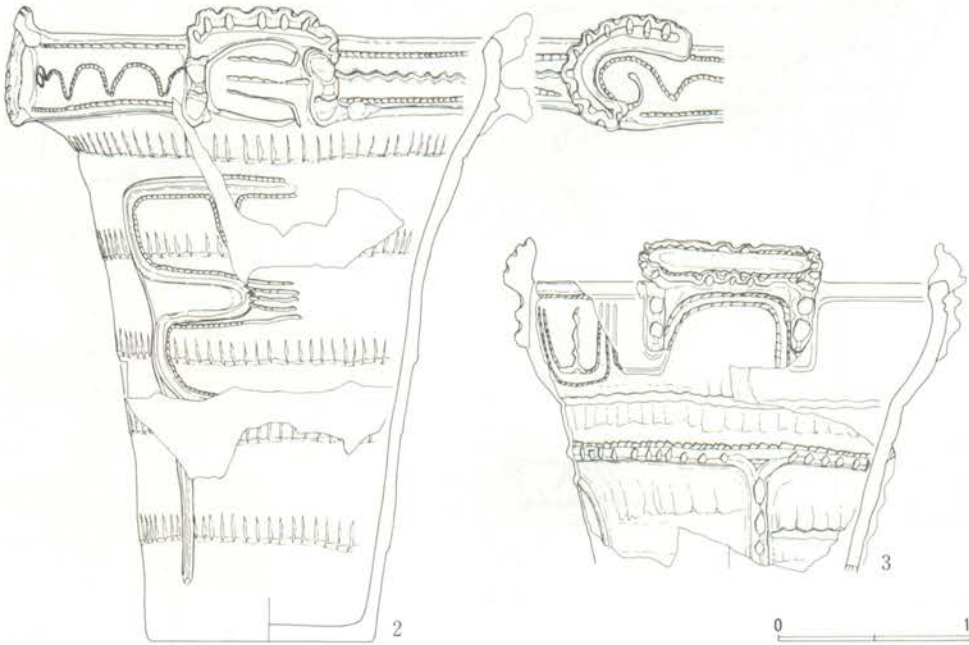
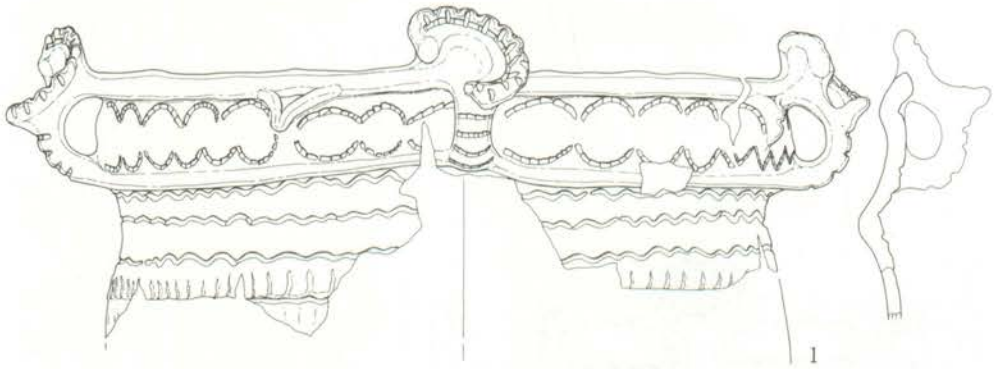
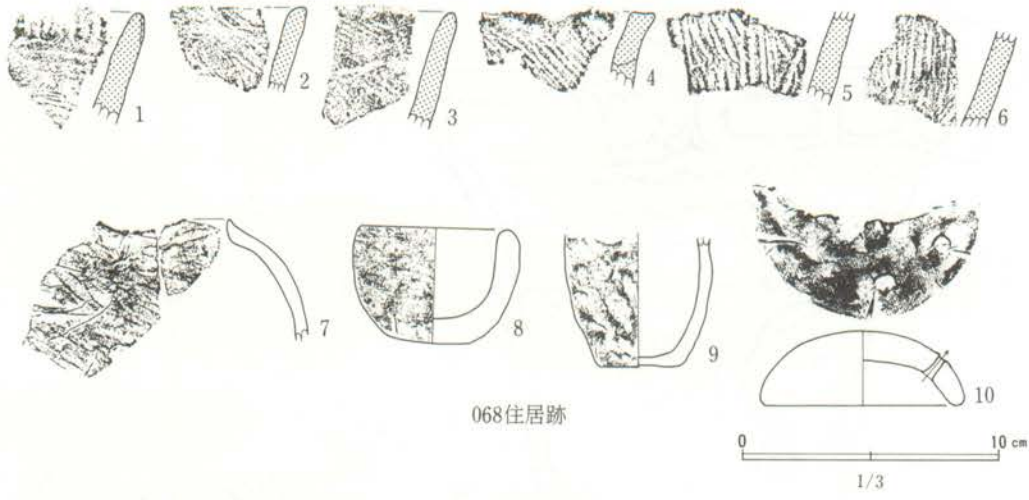


052 住居跡

0

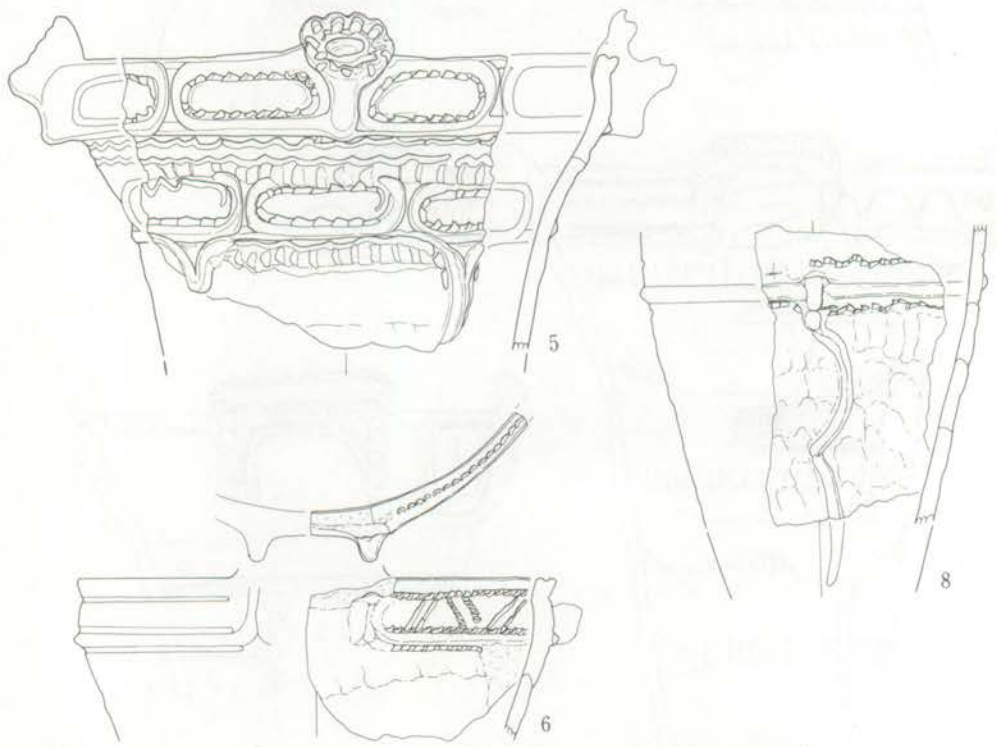
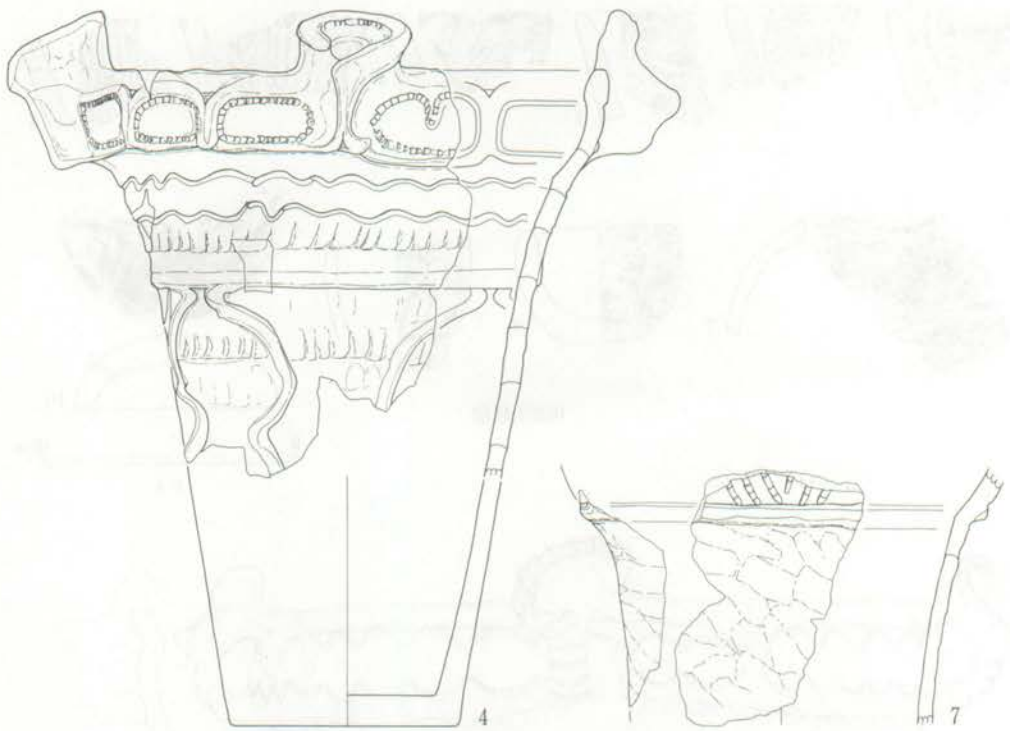
1/3

第263図 住居跡・豎穴状遺構出土土器 (6)



081住居跡(1)

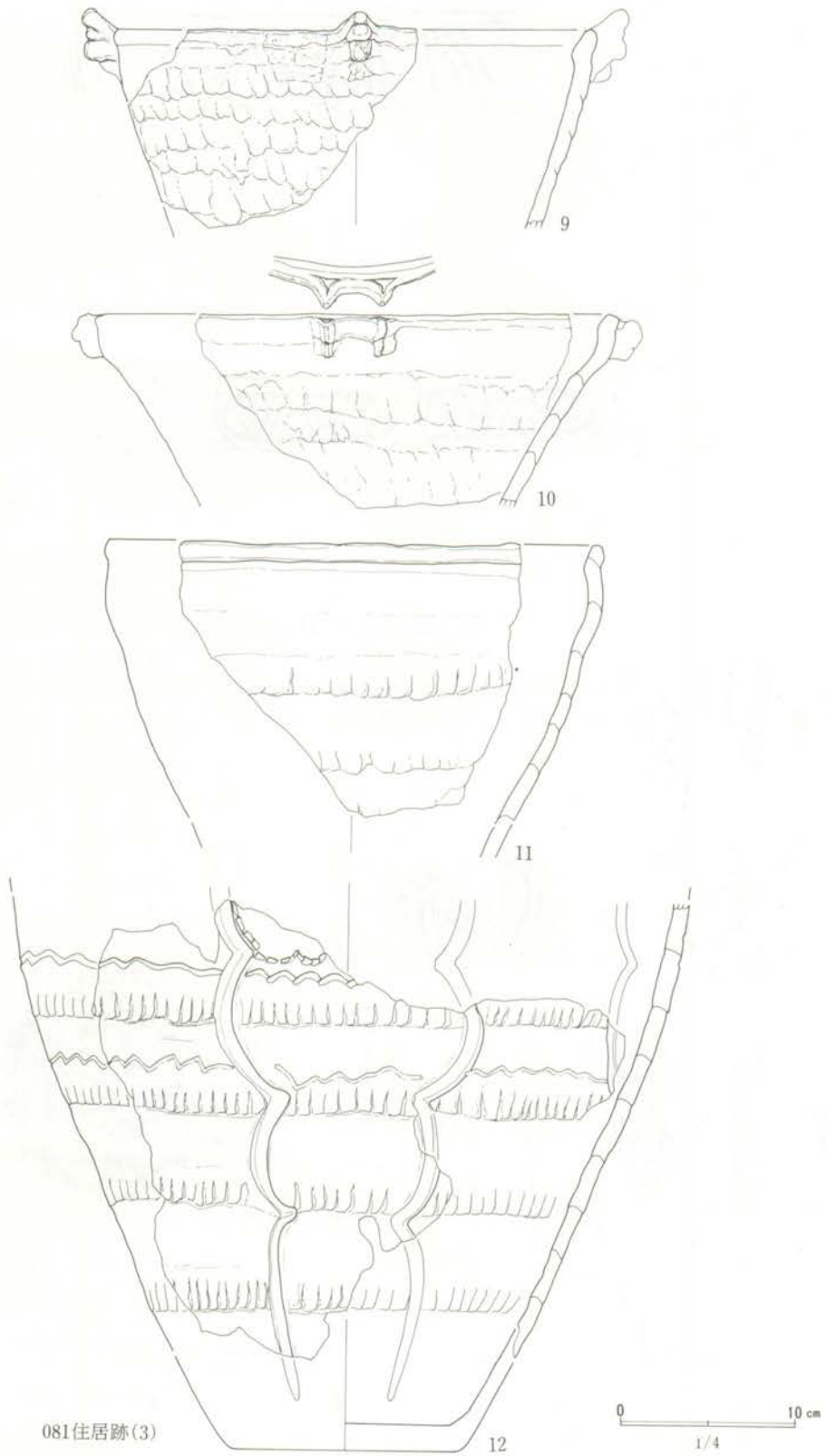
第264図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(7)



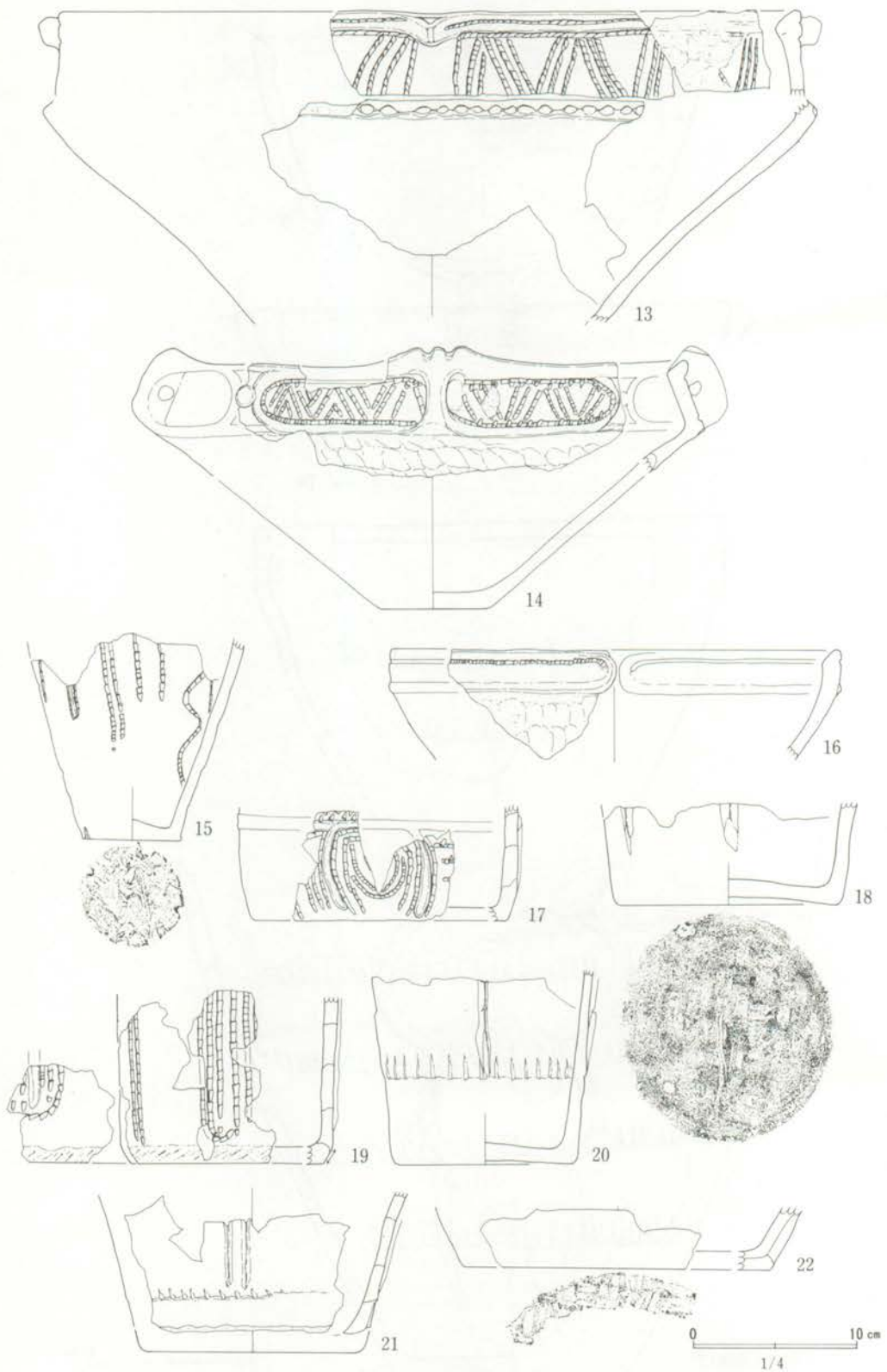
0 10cm
1/4

081住居跡(2)

第265図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (8)

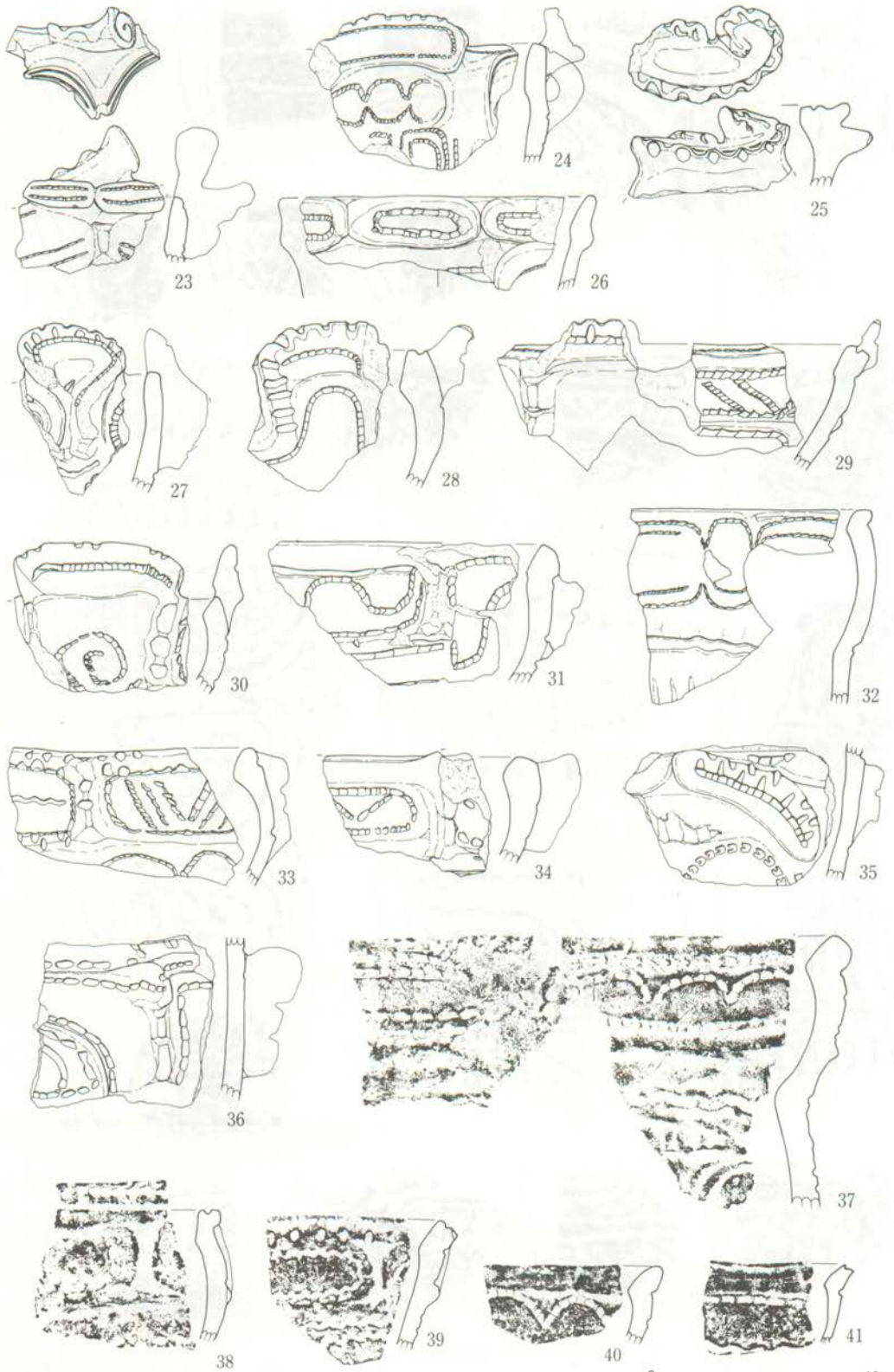


第266図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(9)



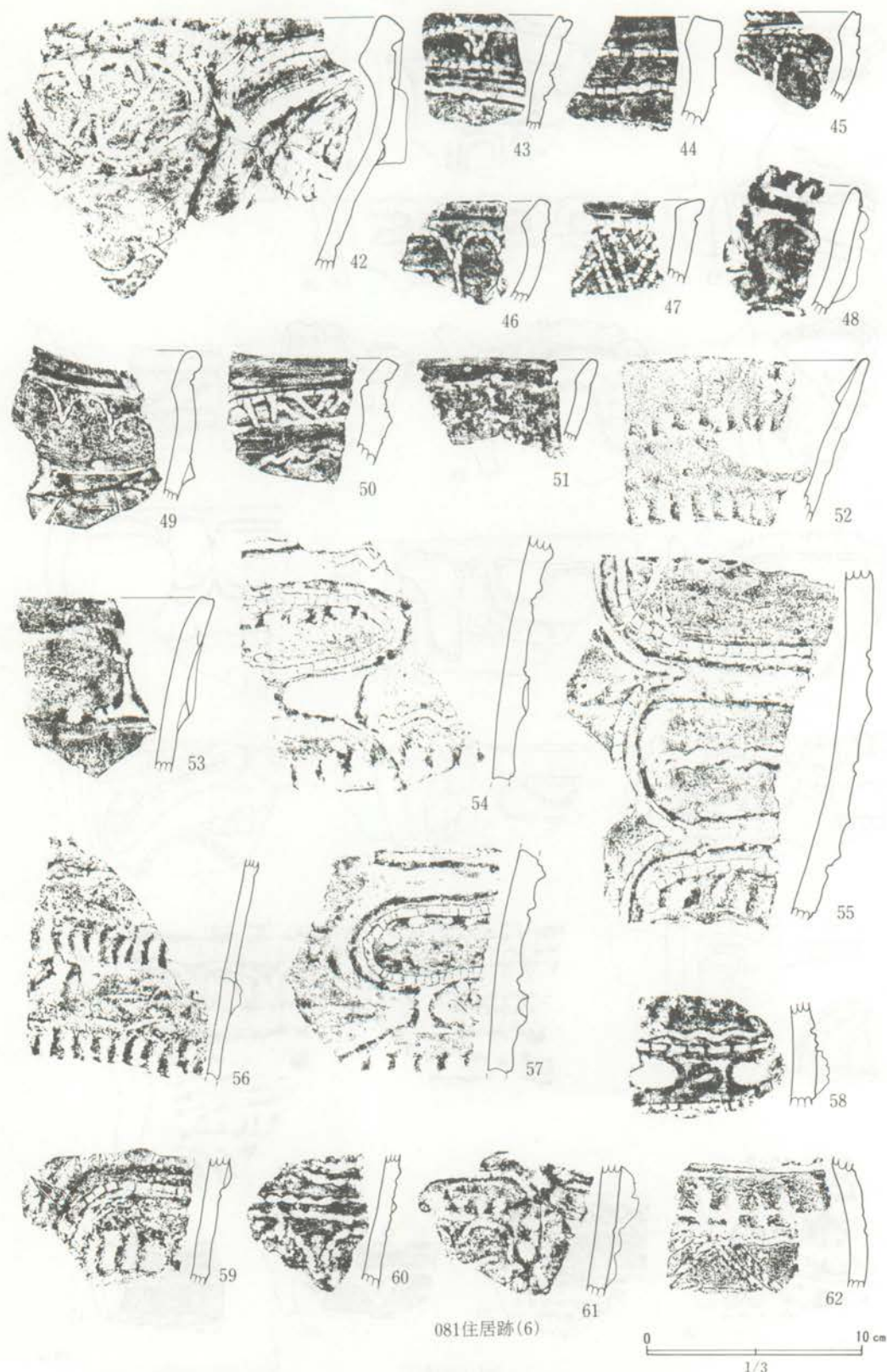
081住居跡(4)

第267図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (10)

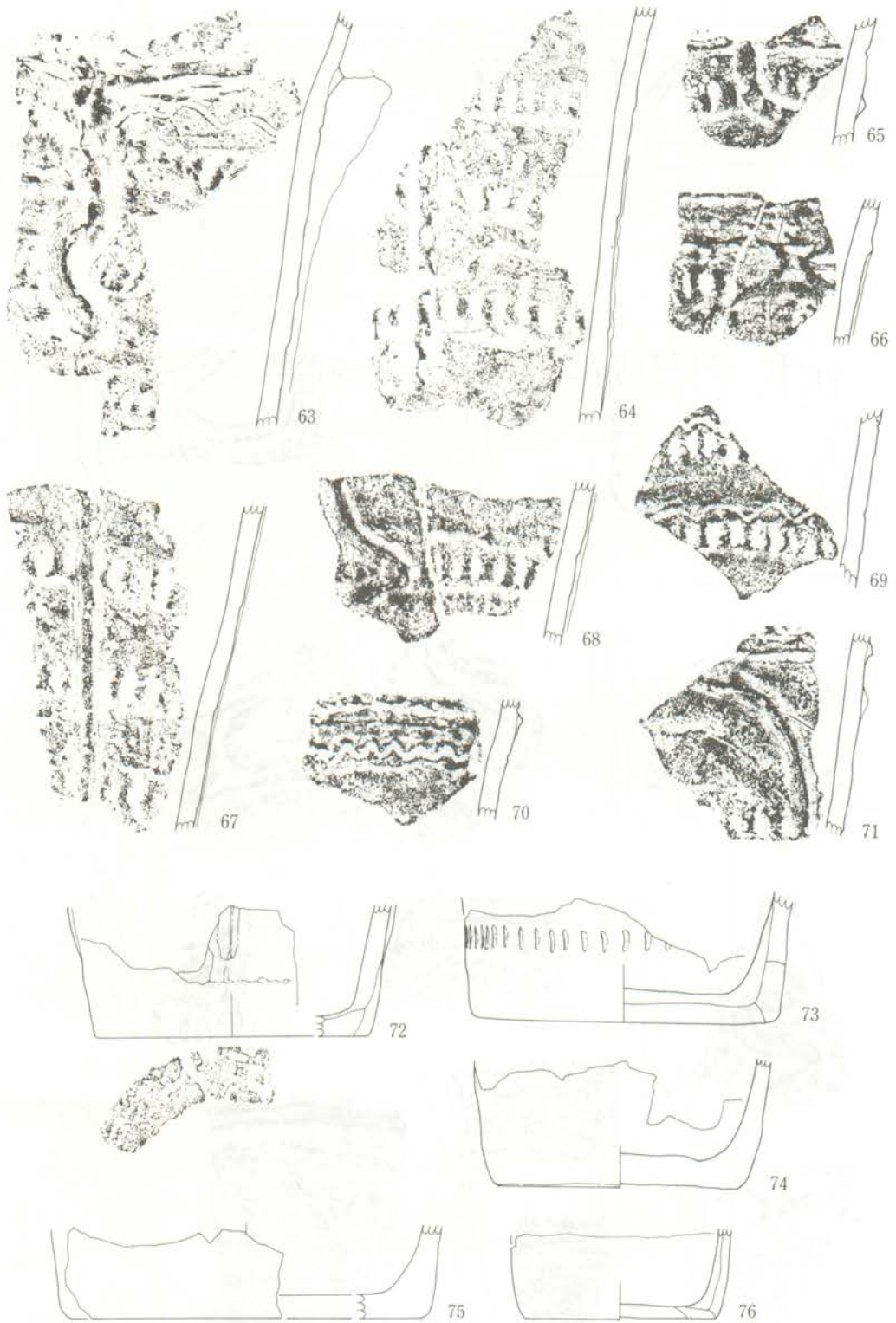


081住居跡(5)

第268図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (11)



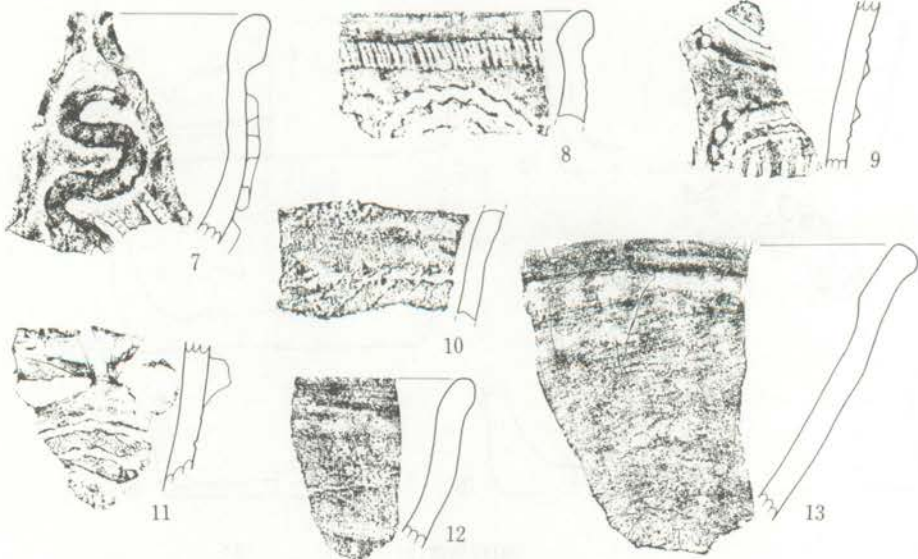
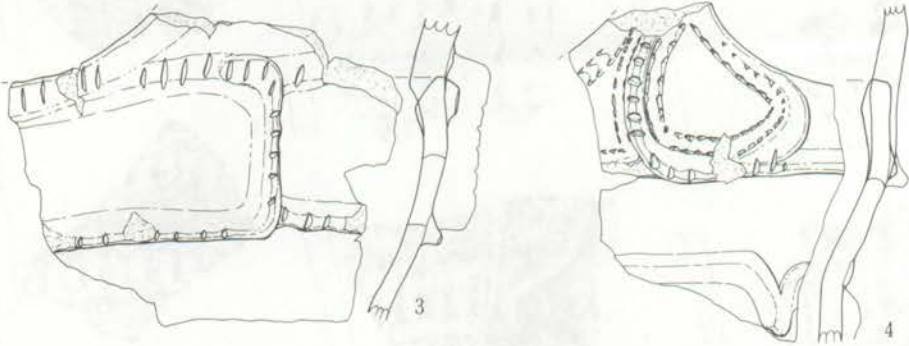
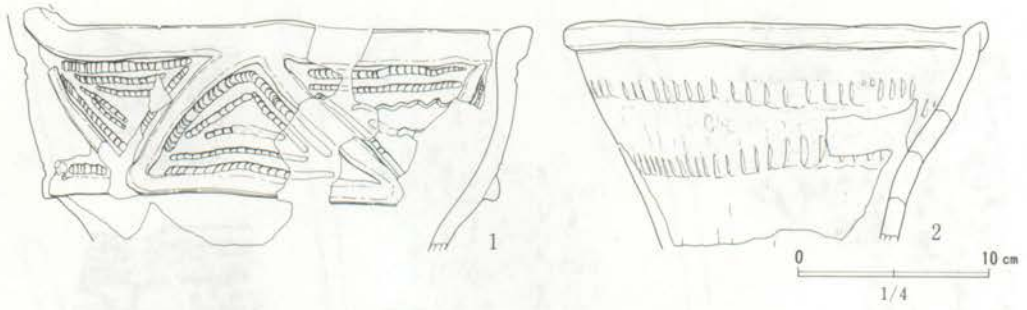
第269図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (12)



081住居跡(7)

0 10 cm
1/3

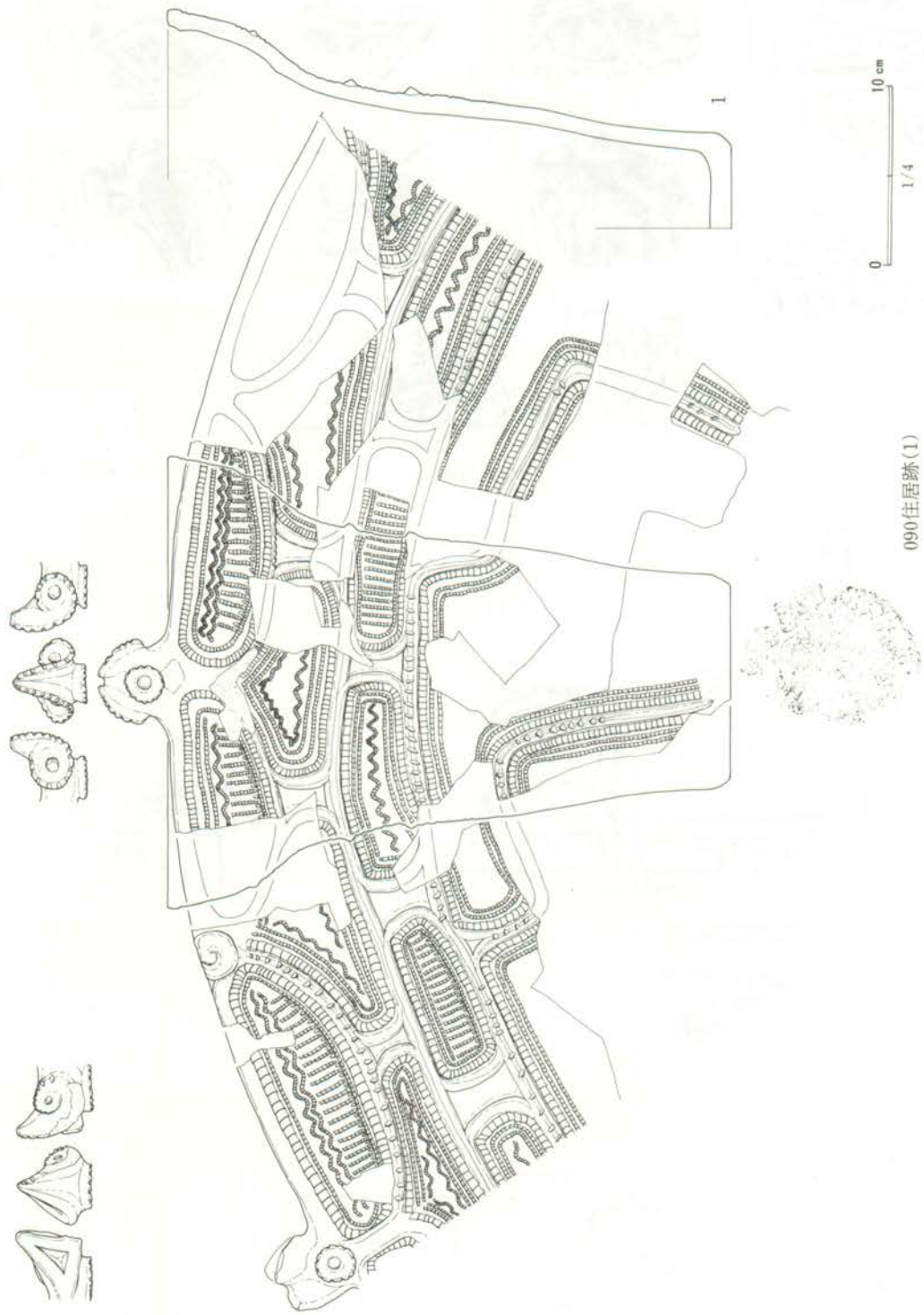
第270図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (13)



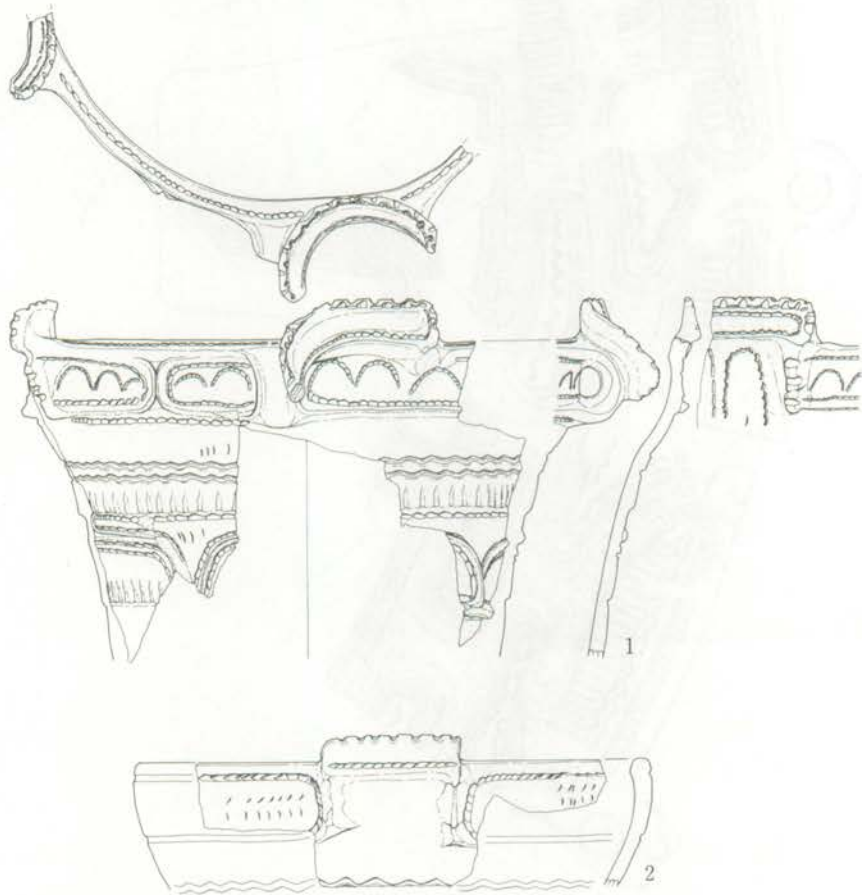
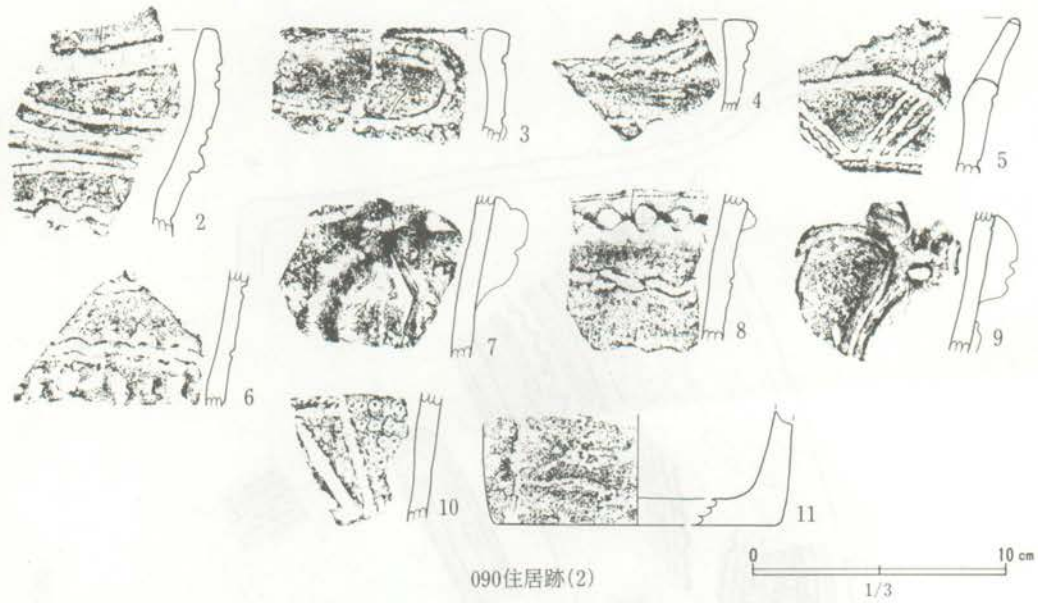
087 竖穴状遺構



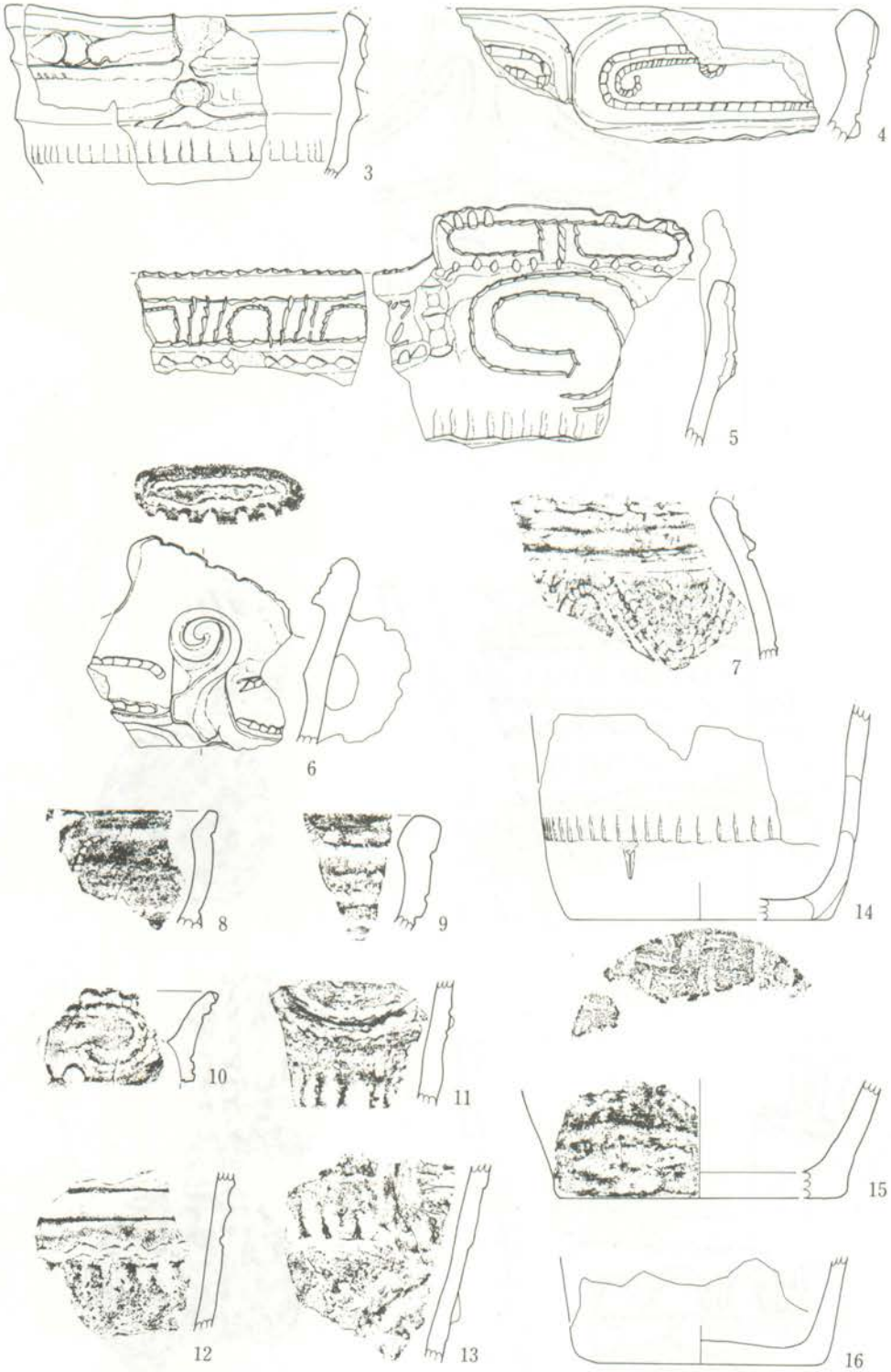
第271図 住居跡・竖穴状遺構出土土器 (14)



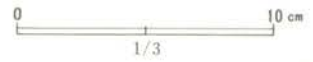
第272図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (15)



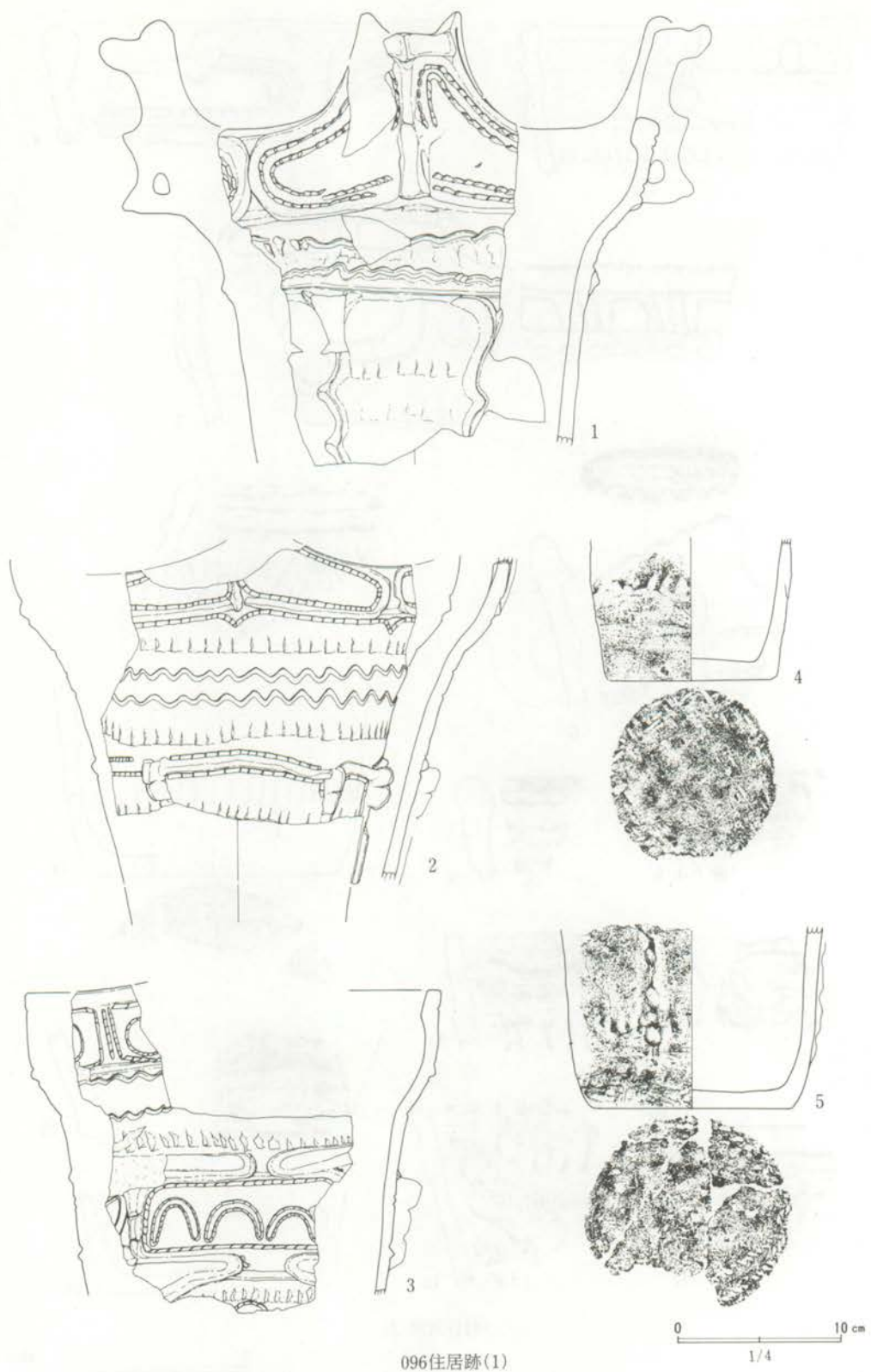
第273図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (16)



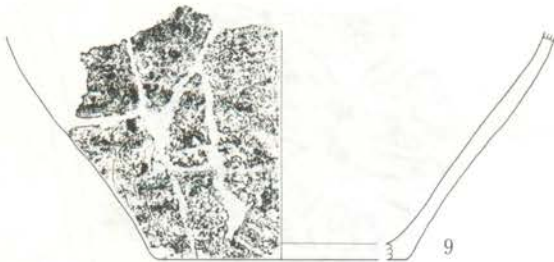
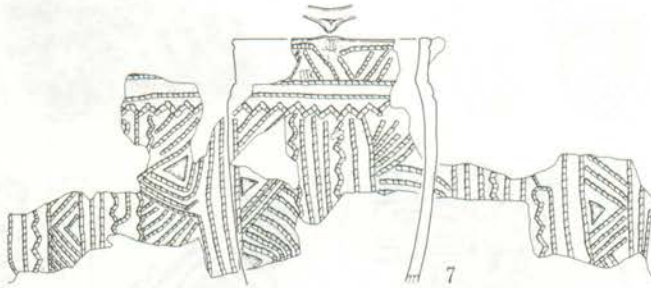
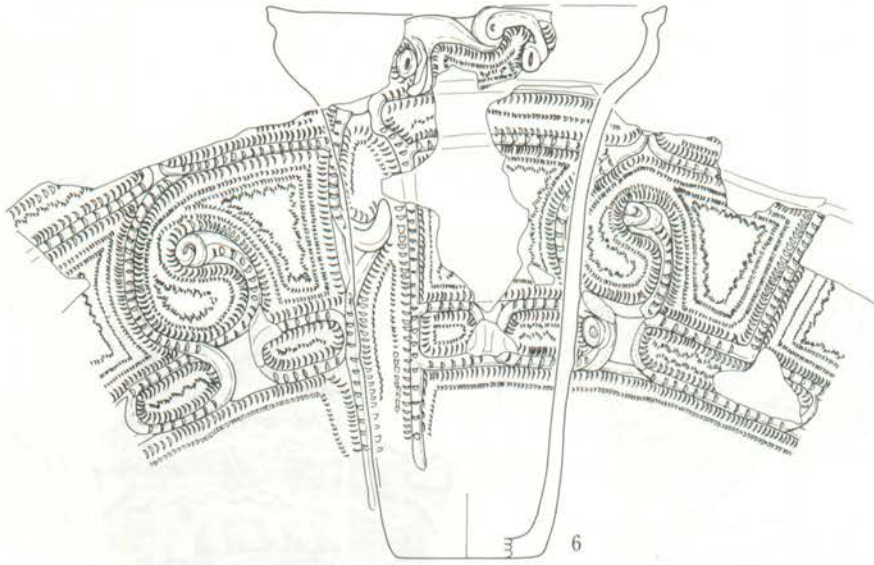
091住居跡(2)



第274図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (17)



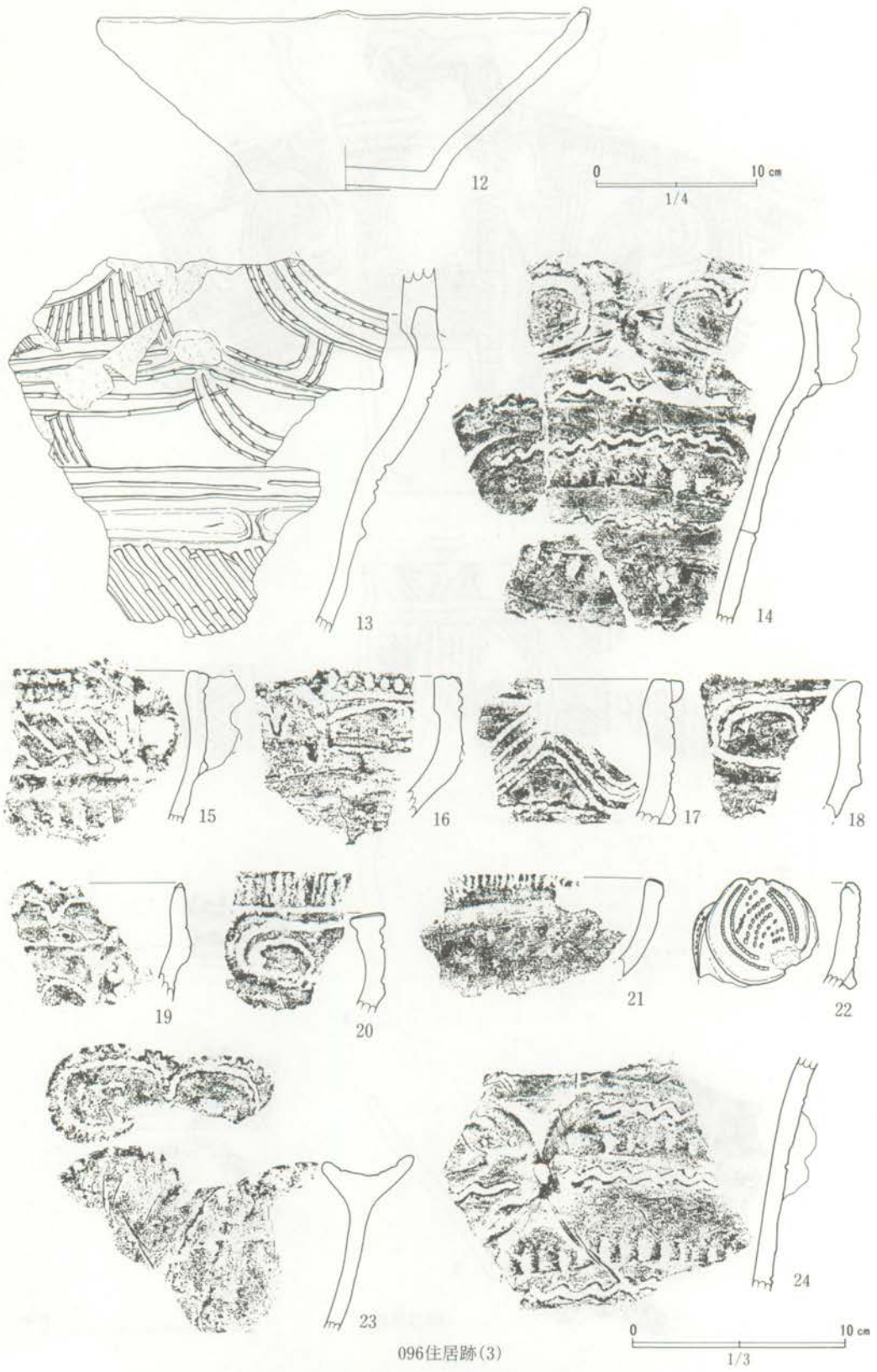
第275図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (18)

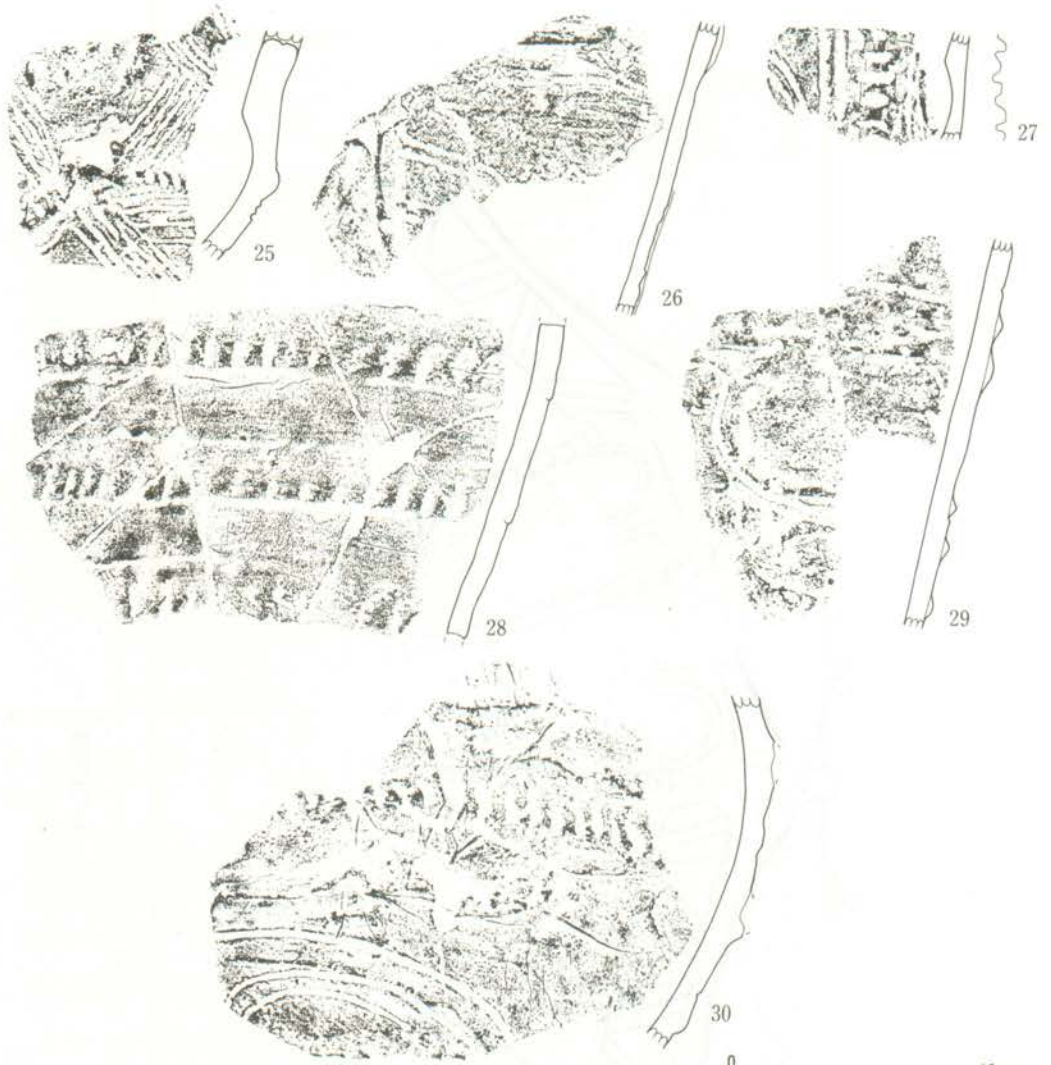


096住居跡(2)

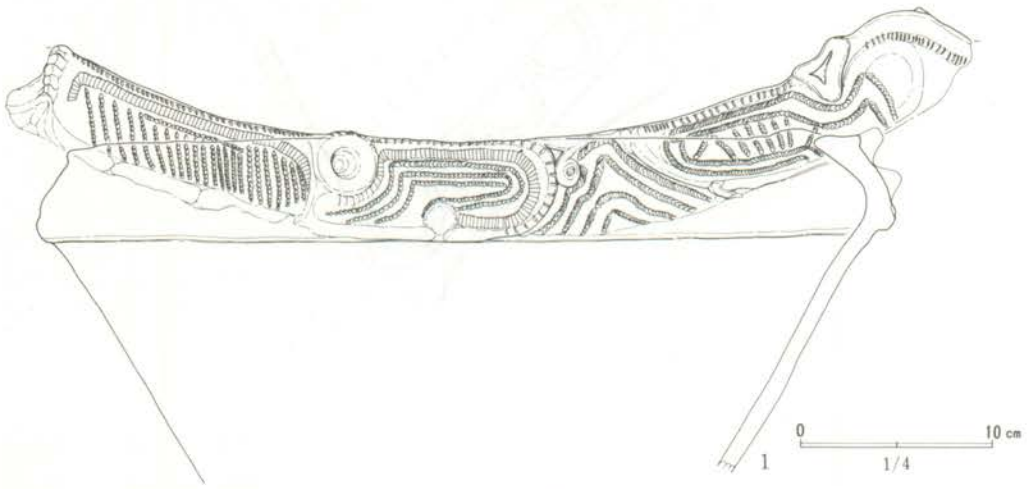
0 10 cm
1/4

第276図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (19)



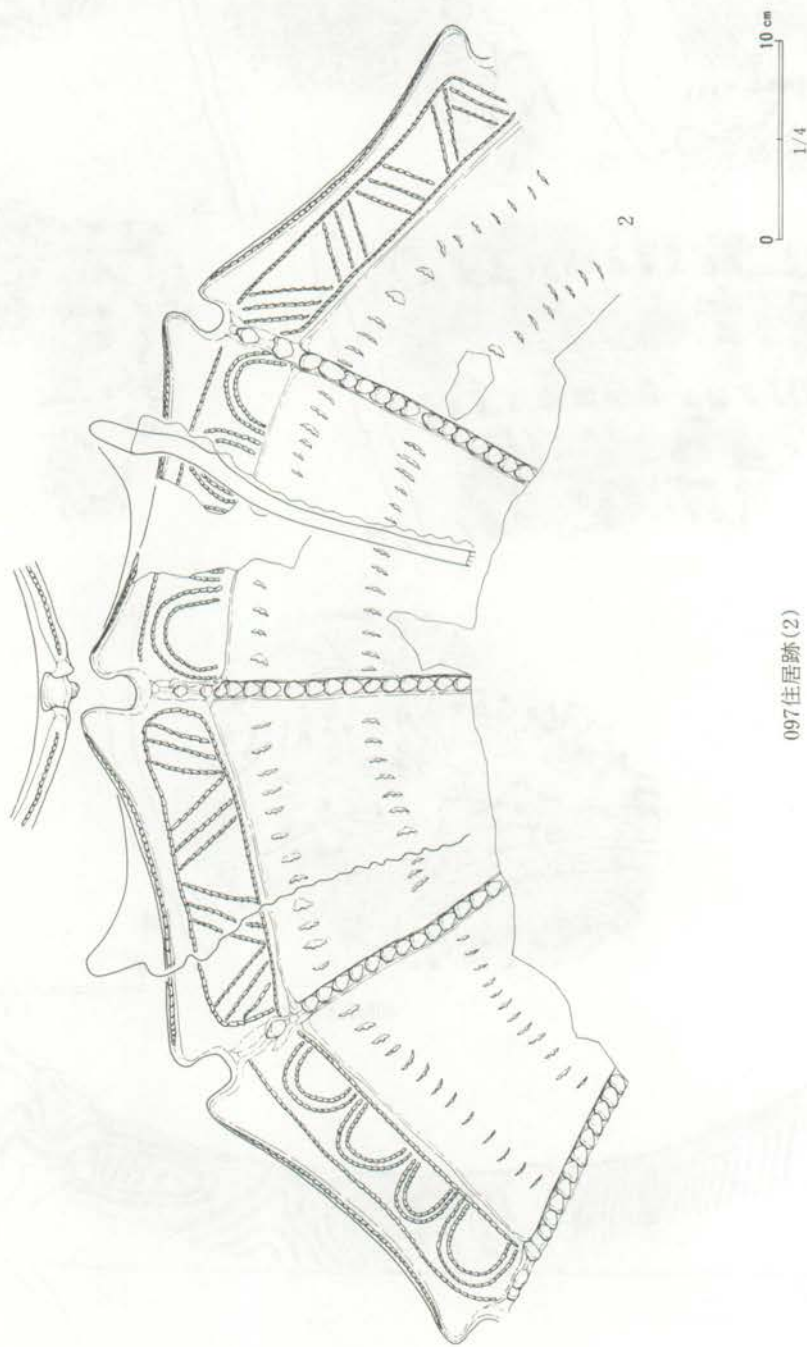


096住居跡(4)

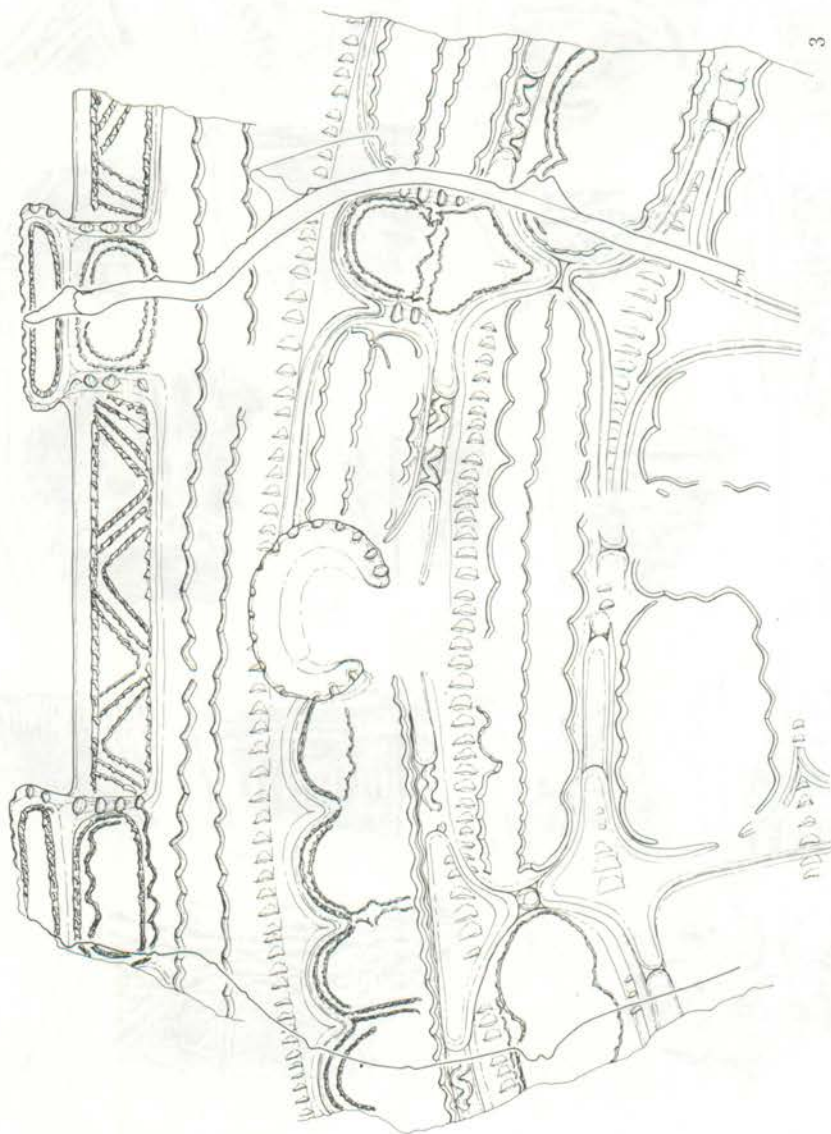


097住居跡(1)

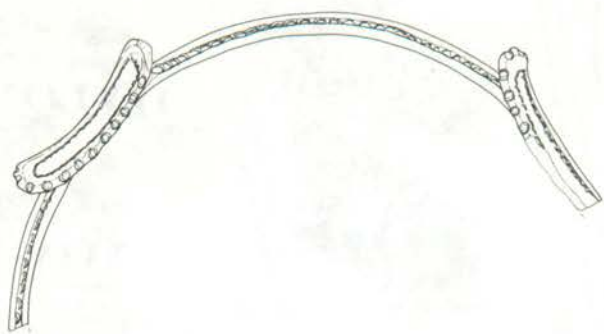
第278図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(21)



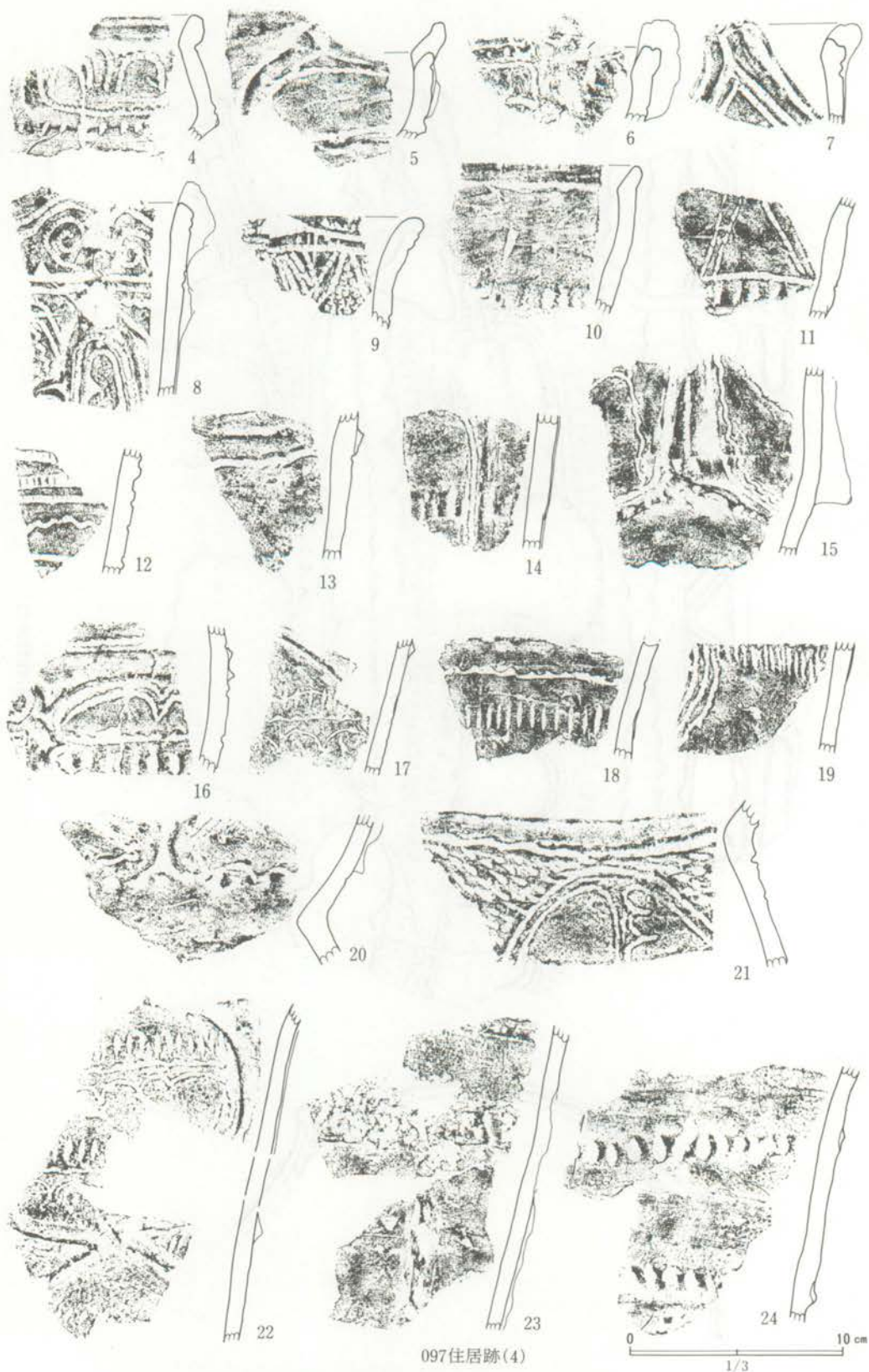
第279図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (22)



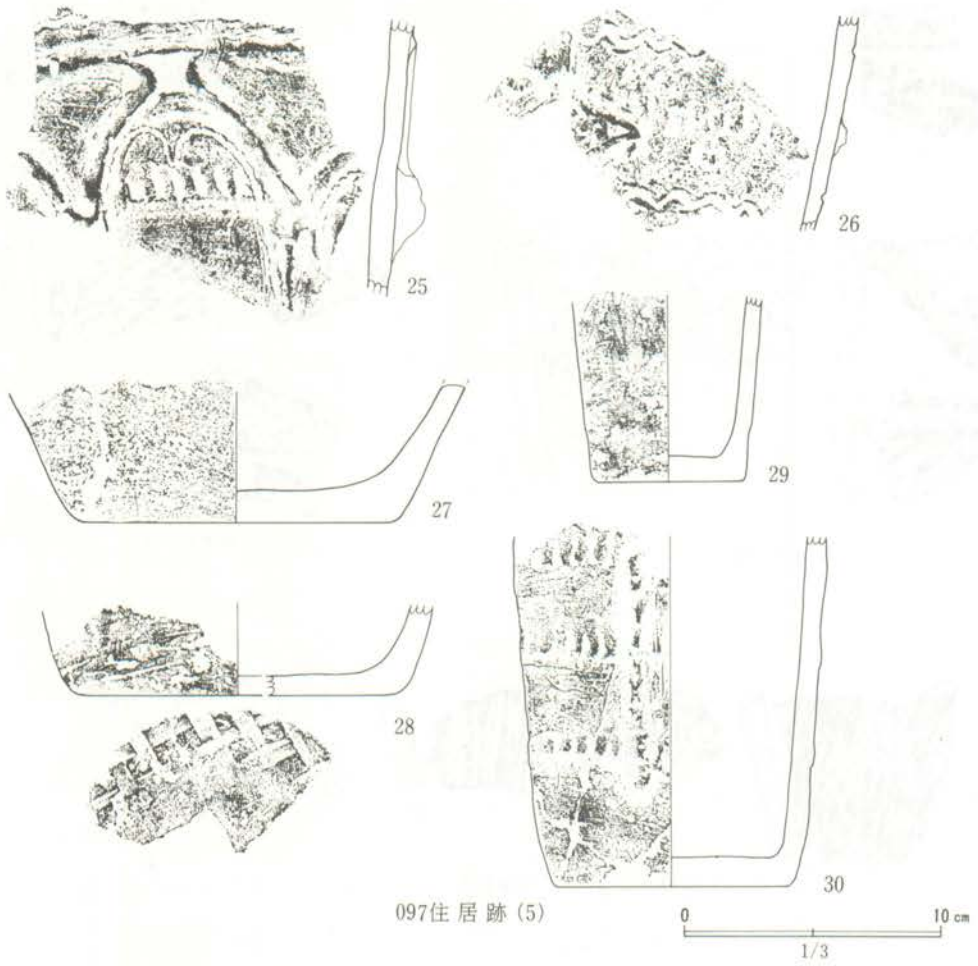
097住居跡(3)



第280図 住居跡・竪穴状遺構出土土器(23)



第281図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (24)



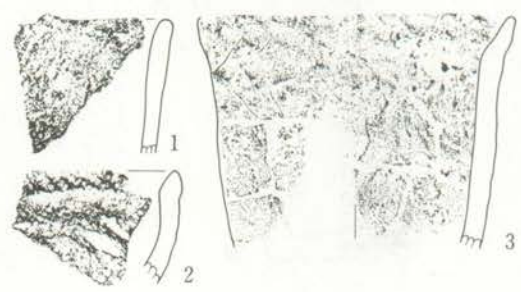
第282図 住居跡・竪穴状遺構出土土器 (25)



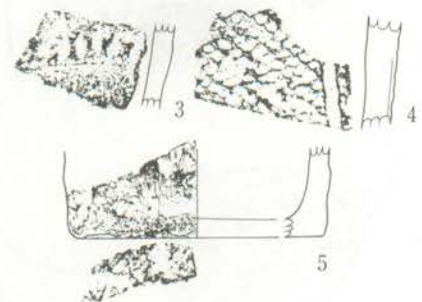
004土坑



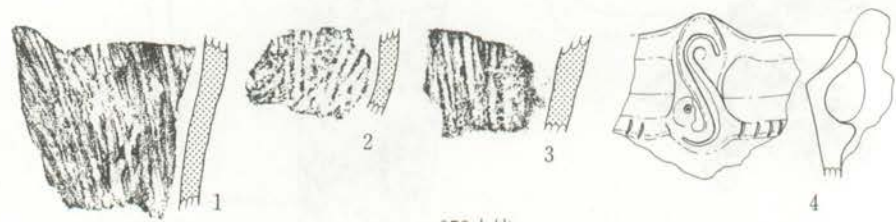
046土坑



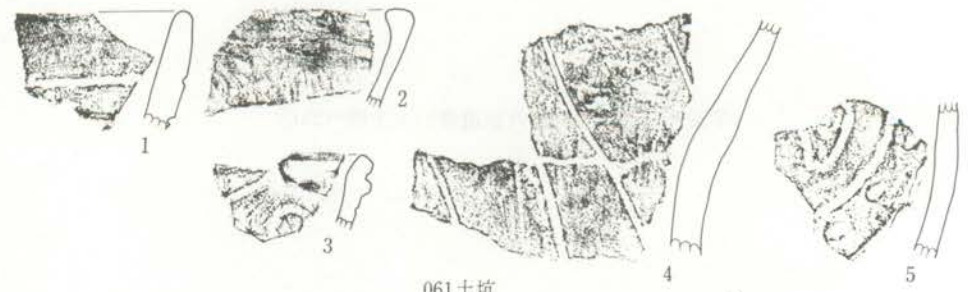
056土坑



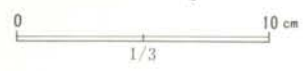
058土坑(1)



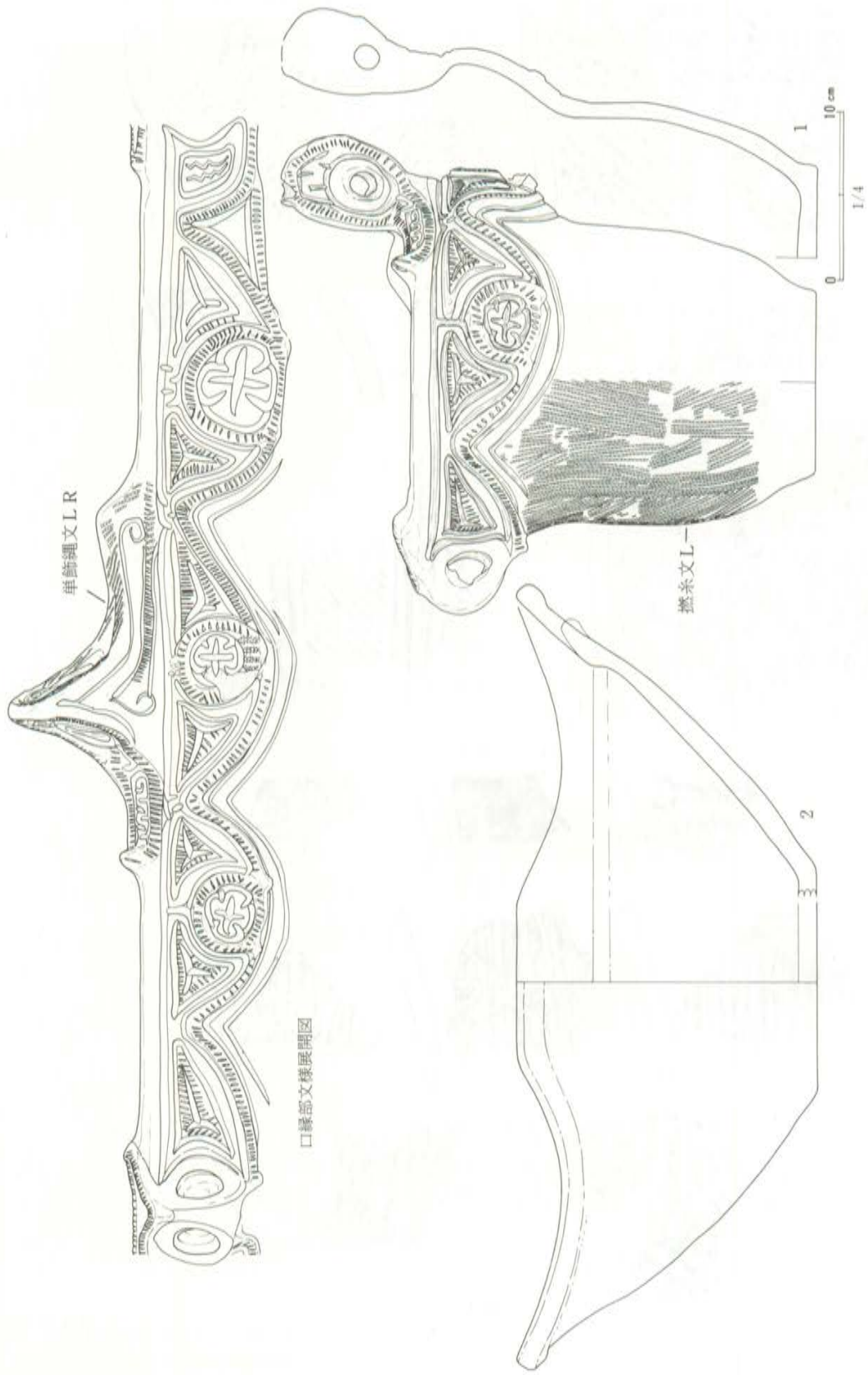
059土坑



061土坑

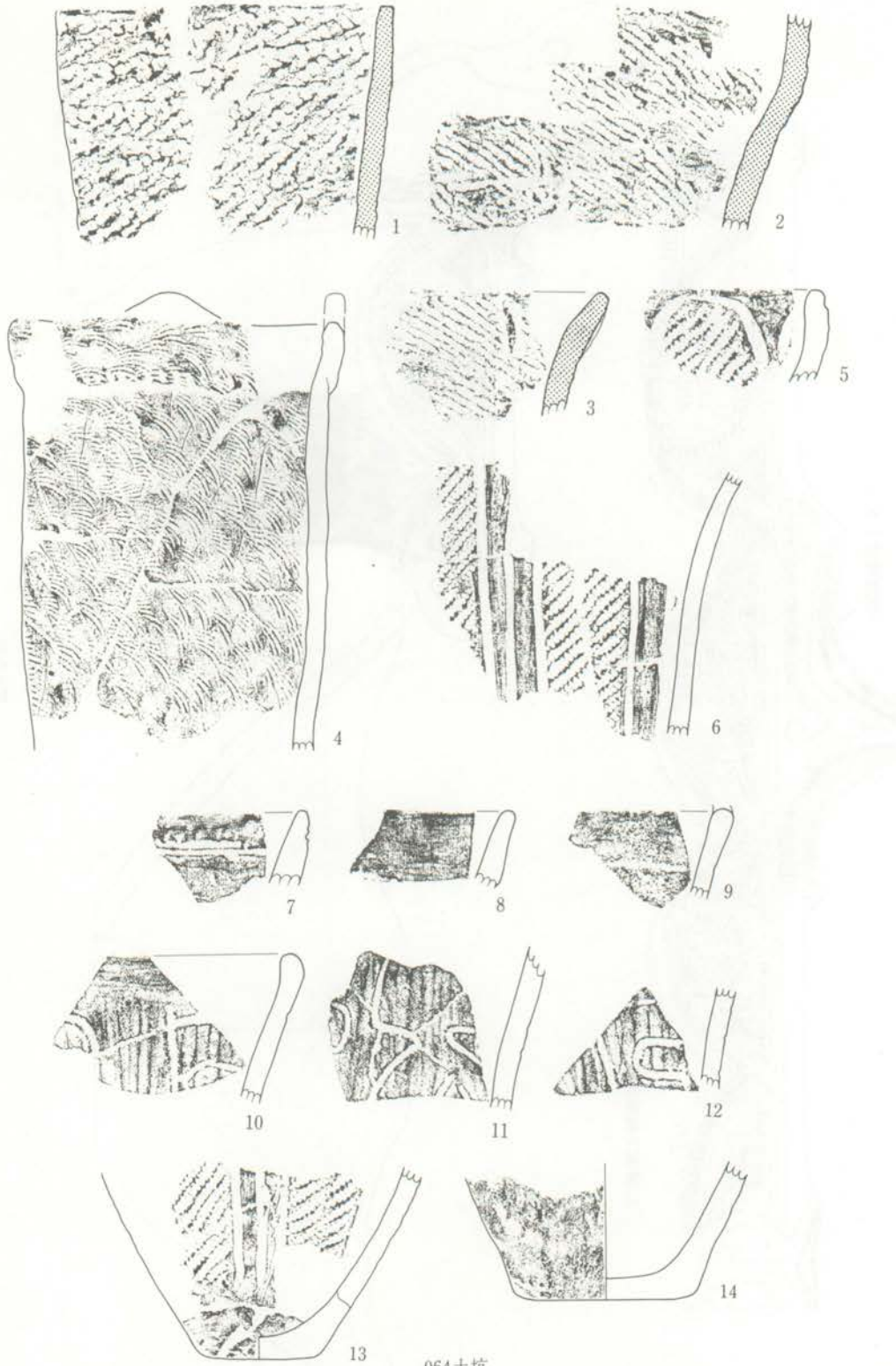


第283图 土坑出土土器 (1)



058土坑

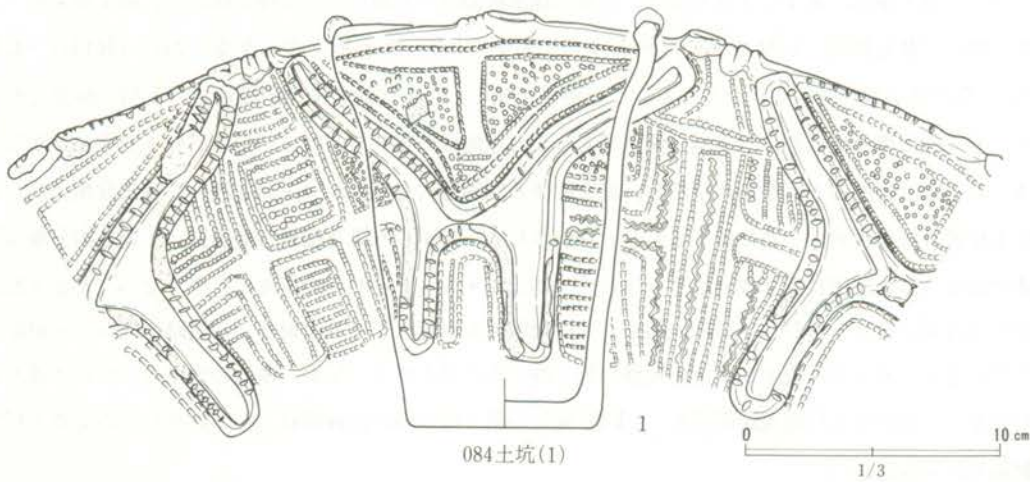
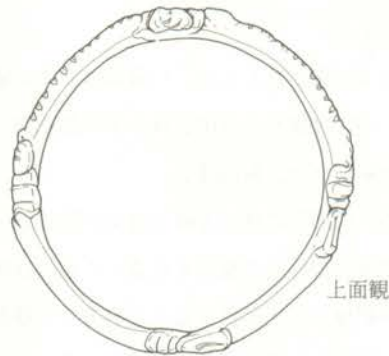
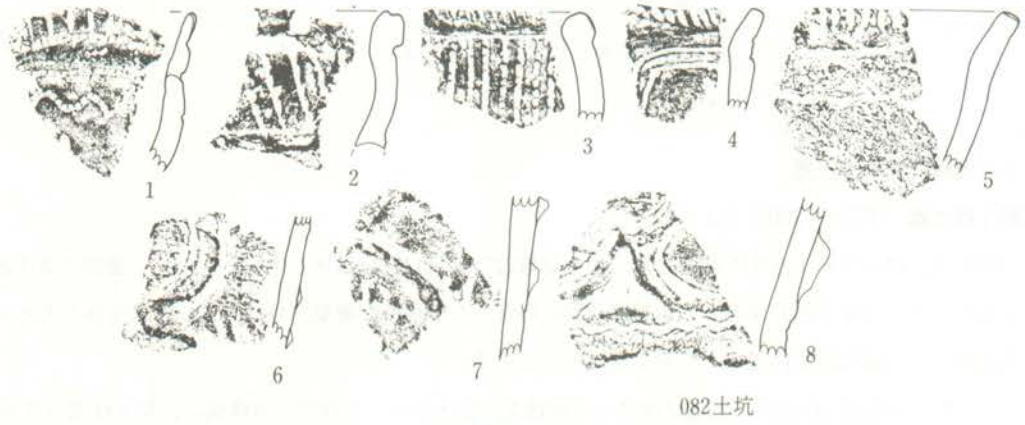
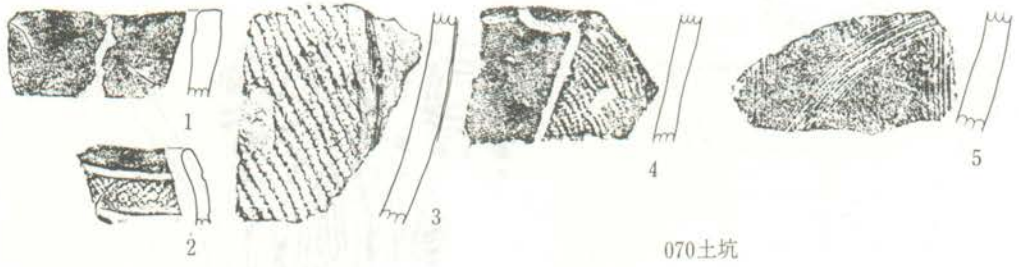
第284图 土坑出土土器 (2)



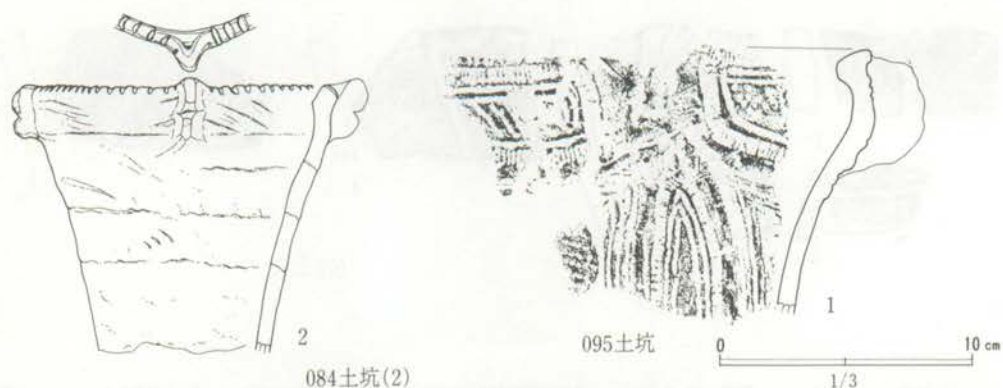
064土坑



第285图 土坑出土土器 (3)



第286圖 土坑出土土器 (4)



第287図 土坑出土土器 (5)

(4) 遺構外出土の土器

第1群土器 (第288～290図：1～61)

早期前半、捺糸文系土器を本群とした。出土総数227点、O13・O14区を中心とした狭い範囲に集中的な分布を示す。谷津を臨む東向きの台地縁辺部に所在した小規模な廃棄ブロックを、ほぼ完掘したものと思われる。口縁部破片は出土した全てを図示してある。

1～3：口唇部に斜位の、頸部に横位の単節縄文が施される。文様帯3帯構成の、第1様式(井草I式)土器。図示した3点が全てである。

4～34：外面全体に縦位の捺糸文が施されたもの。口縁部は多くの資料が若干外反・肥厚し、断面円頭状を呈するが、11・18・24等、中には僅かに外削ぎ状の平坦部を作り出す例もある。口唇部以下、胴部にかけてナデ整形が行われ、捺糸圧痕は比較的浅い。

35～50：外面に縄文を施すもの。口唇部に僅かな縄文施文が残る35～37以外は、若干肥厚する口縁部以下、縦位に縄文が施される。明確に口縁部文様帯を意識したものは無い。

51～61：無文のもの。口唇部が肥厚・若干外反するものが多く、器面調整は入念に行われる。

以上、第1様式に属する2点を除き、土器口縁部片53点を対象に見た文様組成比は、縄文施文型〈J型〉19点(R L10点、L R 2点、無節 L 4点、不明3点)、捺糸施文型〈Y型〉25点(R13点、L12点)、及び無文型〈M型〉9点となる。この結果を見ると、全体的な文様組成比は〈Y型〉が優位を占め、本来的に第3様式期に〈J型〉優位である筈の当地域の在り方とは、一見矛盾をきたす。しかし、多くの土器は器面のナデ整形が卓越し、施文原体の間隔も大きく、かつ圧痕も浅い、様式分類上からは、第4様式(稻荷台式)土器に属するものと理解される。必ずしも第3様式(夏島式)土器との分離は明確ではないが、確実に第3様式に比定される土器は4・5・9・35～39程度で、多くない。だとすれば、第4様式期に至り、再び〈Y型〉土器が、下総地域でも卓越してくる現象は、他遺跡の例からも追証されているところであり、中山新田I遺跡の第1群土器に見られる〈Y型〉優位の現象も、何ら矛盾をきたさない。流山市上貝塚遺跡例等が、〈J型〉優位の第3様式期の比較資料として好適なものである(『常磐道V』で報告)。

第2群土器 (第290・291図：62～75)

早期前半、沈線文系土器を本群とした。出土総数60点と少なく、遺跡内に於ける分布もO・P例19・20区周辺に、稀薄な集中を見せる程度である。細い沈線で重畳した斜格子目文を描く62・63を三戸式土器に比定できる他は、いずれも田戸下層式土器。外削ぎ状の口縁部を持ち、浅く細い沈線文・円形刺突文・貝殻腹縁文が多用され、また太い凹線文を施すものもある。75はその典型。また73のような、貝殻条痕文を格子目状に施す土器は、三戸式に多いが田戸下層式にも散見され、その型式的分離は難しい。

第3群土器 (第291～293図：76～120)

早期後半、条痕文系土器を本群とした。出土総数1623点。遺跡内の平面分布は、調査区北側の谷津に面した台地緑片部全域に広がり、散在する炉穴群の分布に一致する。文様要素の分析、組成比の検討から、さらに型式毎の分布動態を解明できるが、時間的制約から断念した。

76：ほとんど胎土に繊維混入が認められない土器片で、口唇上面及び外面に2条、絡条体圧痕文が連続する。外面の絡条体圧痕文は、各々細い平行沈線文に画される。1点のみ出土した。子母口式土器の範疇で捉えられようか。

77～79：口縁部に縦位の貝殻腹縁文が施され、外面に条痕文が残るもの。78はさらに微隆起線文が加飾される。子母口式の新しい段階から野島式期の初頭に位置づけられる。

80～89：沈線文・凹線文により、菱形の文様区画を基調とした幾何学的モチーフを描くもの。沈線文の交点には、多くの場合竹管状工具による刺突文が施される。口縁部は80・81のように刻目を有するものが一般的で、胴部に屈曲を持つ。鶴ヶ島台式土器であるが、刺突文を欠く83は、野島式土器の新しい段階にまで遡るかも知れない。

90～101・113・114：内外面に条痕文が施され、口唇部に刻目を有するもの。刻み手法により、上面が水平あるいは円頭状を呈するものと、断面が外削ぎ状に尖頭化したものに大別される。整形手法の特徴から見ると、前者は野島式から鶴ヶ島台式、後者はより古く、子母口式に通有なものと思われる。

102～112・115・116・120：無文、或いは条痕文のみが施されたもの。口唇断面は、円頭状を呈する資料が多い。所謂“飾られない土器”で、野島式以降の各型式に伴うものであろう。

117～119：胎土に多量の繊維を含み、強く外反する口縁部及び外面に、絡条体圧痕文が施されたもの。口縁直下に突瘤文状、円形の刺突文が連続し、118のように内面が瘤状に隆起するものを含む。東海地方、上の山式土器に併行し、早期末の所謂「下沼部式」に近似した土器である。

第4群土器 (第294・295図：121～159)

前期前半、関山式土器及び黒浜式土器を本群とした。出土総数1346点で、そのほとんどは黒浜式である。調査区最北端、M・N列3～5区に集中した分布を示し、該期の竪穴状遺構1基、土坑2基を伴う。

121～124は竹管状工具による内面施文で、曲線的な沈線文を施したもの。関山II式土器である。黒浜式土器は、連続爪形文の125～130、格子目状沈線文を施す131～133の他、縄文・捺糸文のみの施されたものが主体を占める。縄文施文の土器は、施文単位の接続部分に、ミミズ腫れ状微隆起が残る134・142や、ループ文が付加された136、さらに網目状の付加条縄文147～149等がある。また153～158は、貝殻腹縁文が縦位に施された土器片だが、同一個体の可能性が高く、個体数は少ない。159はナデ整形が卓越した無文土器である。

第5群土器 (第295・296図:160~201)

前期後半の諸磯式・浮島式及びそれに後続する前期末の土器を本群とした。調査区の北部と南東側に散漫な分布を示し、出土総数236点と少ない。

竹管状工具による連続爪形文が施された160~164、平行沈線による曲線状モチーフを有する165~168、沈線文が施された172・173等、諸磯b式古・中段階の土器と、横位の平行沈線文、波状文が描かれる169~171、波状貝殻腹縁文174~176を特徴とした、浮島II式から興津式に至る資料がある。また177は、網目状捺糸文が施された胴部片で、東北地方大木2式土器の文様要素と共通する。

その他178~198は、縄文が施された土器片で、有段口縁・綾線縄文を伴うものや、口縁部に縦位の短沈線を加飾した土器等、興津式以降、一部中期初頭までの土器が含まれる。199~201は、波状沈線文と刺突文により、口縁部文様帯が構成されるもので、同じく前期末葉の所産と思われる。

第6群土器 (第297・298図:202~203・206)

中期前半の五領ヶ台式・勝坂式をまとめた。近接した聖人塚遺跡出土の該期資料とは対照的で、勝坂式末から所謂中峠式期の土器は、206の他、ほとんど出土していない。大半が阿玉台I b、II式土器に併行する、勝坂式直前、或いは中部地方貉沢式・新道式に対比されるものである。出土総数2571点、遺跡内における分布は、第7群(阿玉台式)土器と共通し、住居跡・竪穴状遺構群に伴って、直径100m程度の円を描くように集中する。整理期間の制約から、大型破片3点を図示し得たにとどまる。

202:幅広のキャタピラ文及び、竹管状工具による結節沈線文が多用され、胴上半に5単位の波状文を持つ深鉢。各文様区画の中央に、円形・渦巻文を配し、三叉状の陰刻文が加飾される。口縁部には、獣面状の突起が施されている。

203:阿玉台式土器に通有な深鉢状の器形を呈しながら、竹管状工具による結節沈線文、円形竹管文が、無文部を残さぬように充填される土器。肉厚な垂下隆帯と、口縁部の貼付文が特徴的で、下総地方で散見される、所謂「鳴神山系」の文様モチーフを持つものである。編年的な位置づけ、型式変遷について、整理未了な資料とともに、再検討されるべき土器群と言えよう。

206:勝坂式末から、所謂中峠式に属する、縄文のみが施された土器である。

第7群土器 (第297図:204・205)

中期前半の阿玉台式土器を本群とした。編年的には前述の第6群土器の多くと併行関係を有す。出土総数19428点で、当遺跡出土土器の63.2%を占め、その分布も該期の住居跡、竪穴状遺構群の配置と強い相関性を持つ。特にI~L列20~25区付近が、比較的遺物分布の稀薄な地区として捉えられるのは、環状集落の中央広場的な性格が反映されている結果らしい。遺構外出土遺物は、時間的制約からその大半を割愛せざるを得なかった。

204:波状口縁の深鉢形土器片で、口縁部に楕円形区画文を持つ。阿玉台III式土器。

205:橋状把手を付加する筒状の深鉢で、比較的寸詰まりの楕円文を描出したもの。阿玉台III式土器。他の破片資料は、阿玉台I b式及びII式土器が多く、聖人塚遺跡で注目された阿玉台I a式土器は、1点も出土していない。

第8群土器 (第298図:207)

中期後半の加曽利E式土器を本群とした。分類の都合上、加曽利E I式に先行する、所謂中峠式、ブ

レ加曾利E式土器は、第6群土器で扱ったため除外する。出土総数2235点、調査区内のほぼ全域から広く出土するが、該期の住居跡があるQ20区周辺に、やや集中を見せる。資料の大部分が、加曾利EⅢ式に属するものである。実測・採拓の時間的余裕に乏しくほとんど図示できなかった。207は、4単位の波状口縁を持つ、キャリパー形の小型な深鉢で、外面に縦位の条線文が施される。

第9群土器（第298図：208・209）

後期前半、称名寺式及び堀之内式を本群とした。出土総数2622点、調査区内の分布は、北端と南東部に若干の集中を見せる。このうち、北端の遺物分布は、該期の住居跡1基及び土坑2基と関連を有するものであろう。図版用資料の抽出は行ったが、時間的限界から、大部分の資料報告を割愛した。

208は、V字状磨消文が施された深鉢片、209は底部片である。ともに称名寺式に比定される。

第10群土器（第298図：210～214）

後期後半、加曾利B式土器である。出土総数29点と僅少で、特記すべき平面分布の特色は認められない。

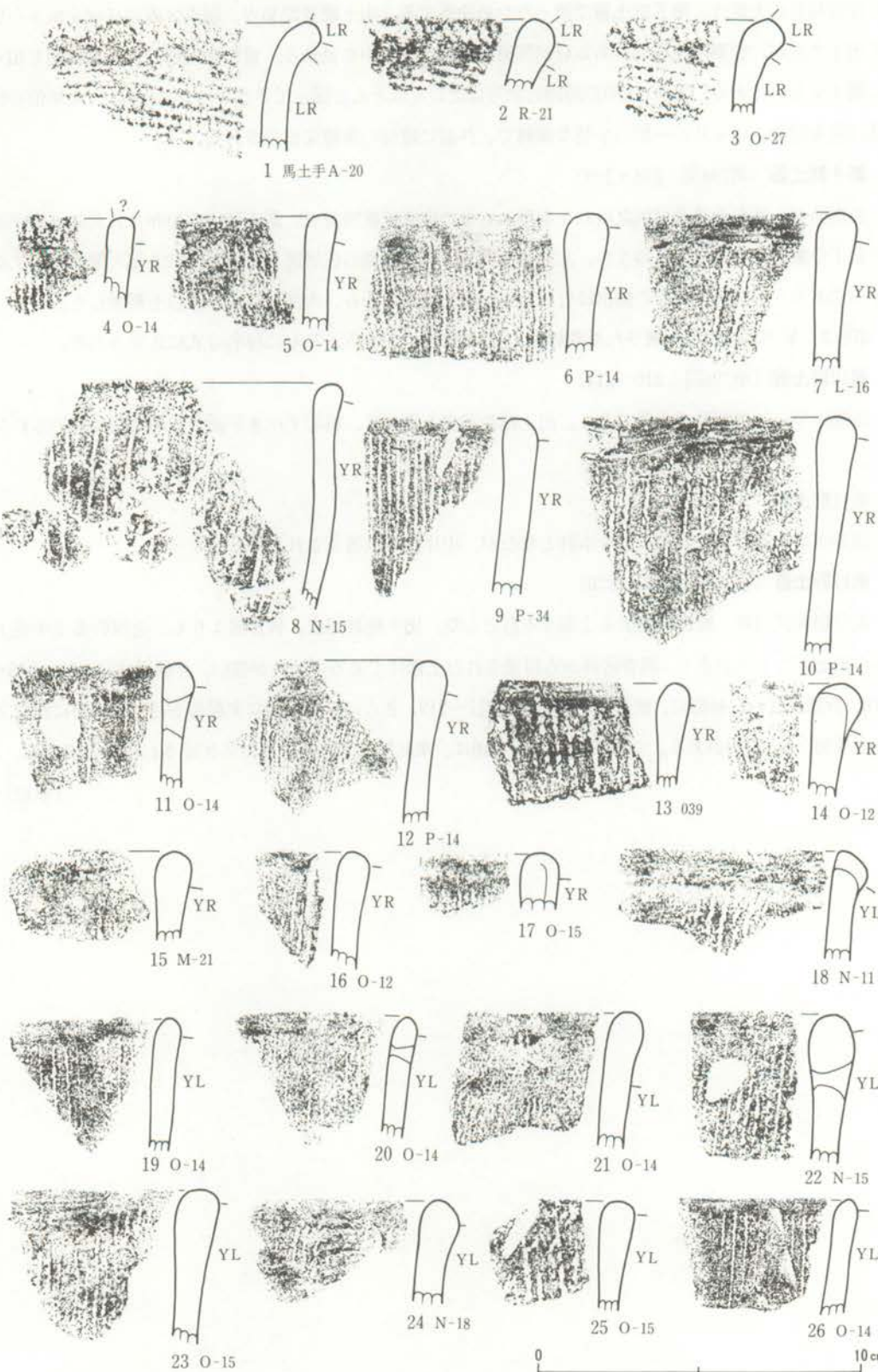
第11群土器

後期後半、安行Ⅰ・Ⅱ式土器を本群としたが、小片が1点確認されるにとどまった。

第12群土器（第298図：215～220）

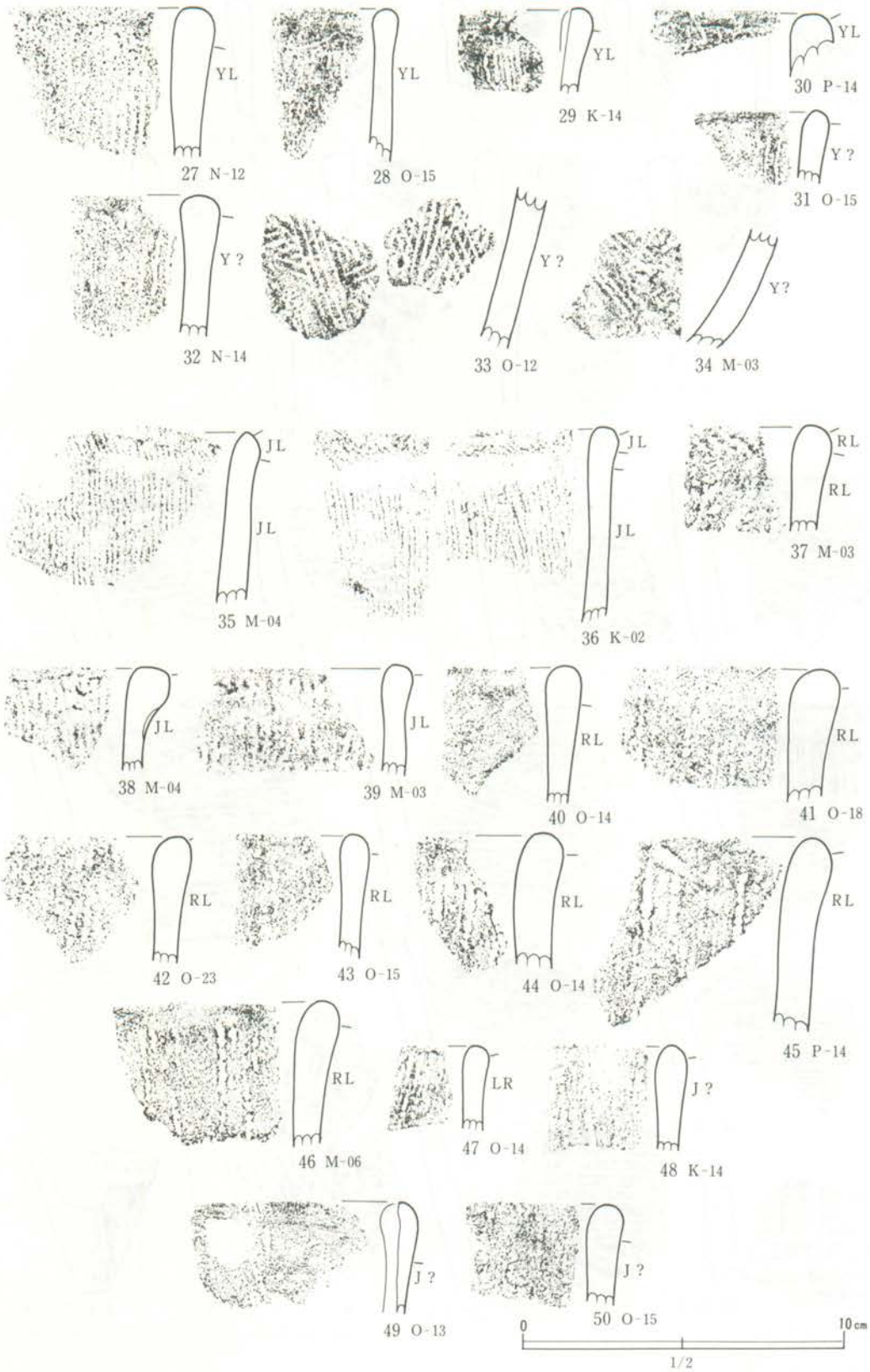
安行Ⅲa式以降、晩期に属する土器を本群とした。出土総数16点。包含層よりも、近世の馬土手盛土から出土したものが多く、調査区外から将来された土器片である可能性が強い。浮線網状文を持つ215・216、折返し状の口縁部に、撚糸文が横走る217～219、さらに口唇内側に突起部を持ち、外面に沈線文が4条施された220がある。このうち、215・216は、東北地方大洞A式土器に比定されるものである。

（原田）

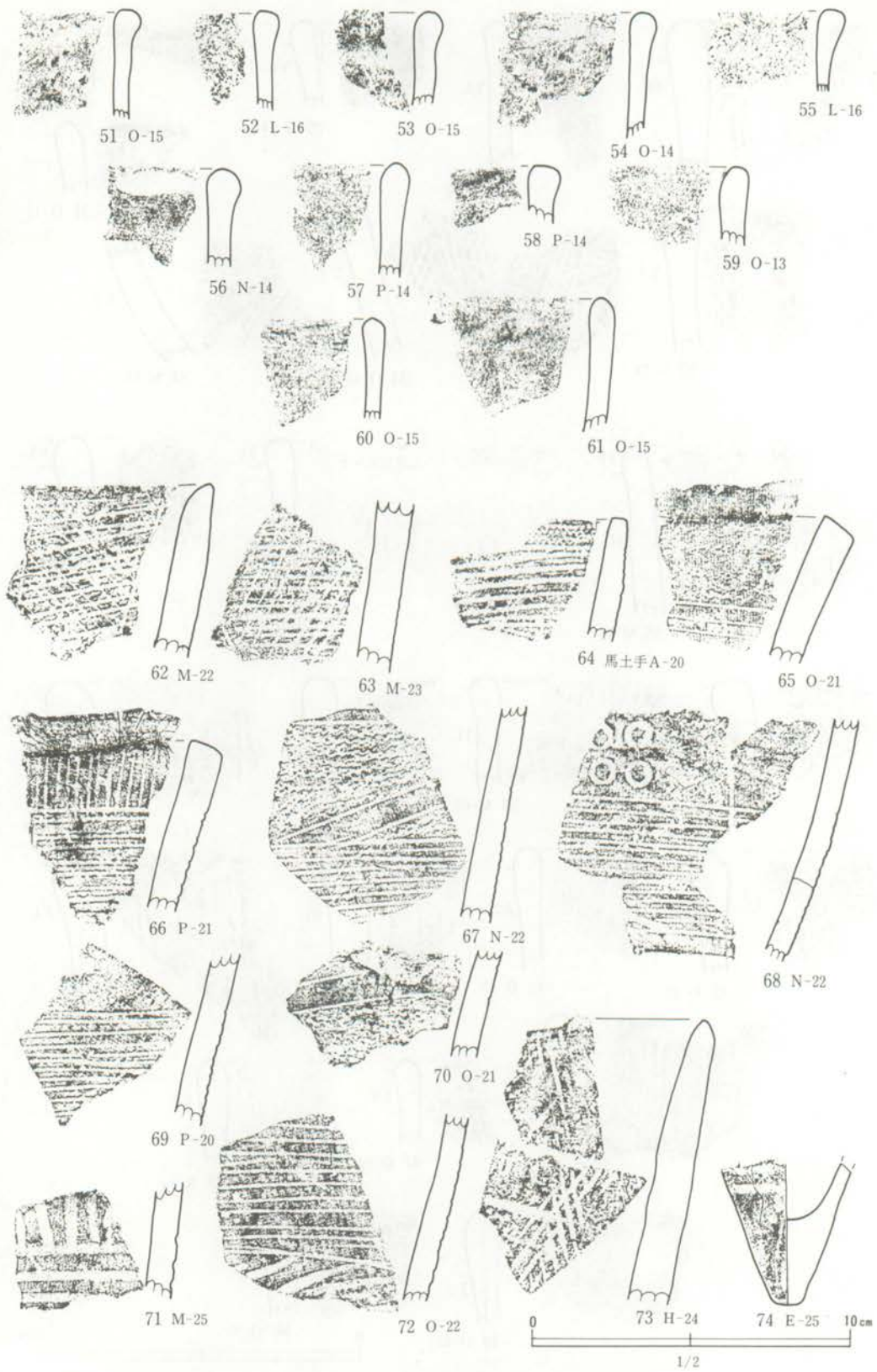


※土器番号の後の表示は出土グリッドを示す

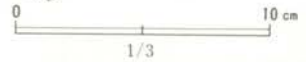
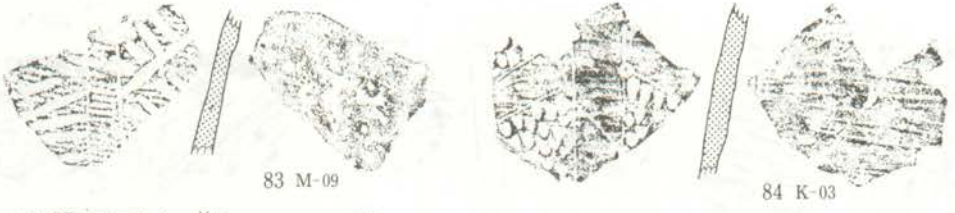
第288図 早期前半の土器 (1)



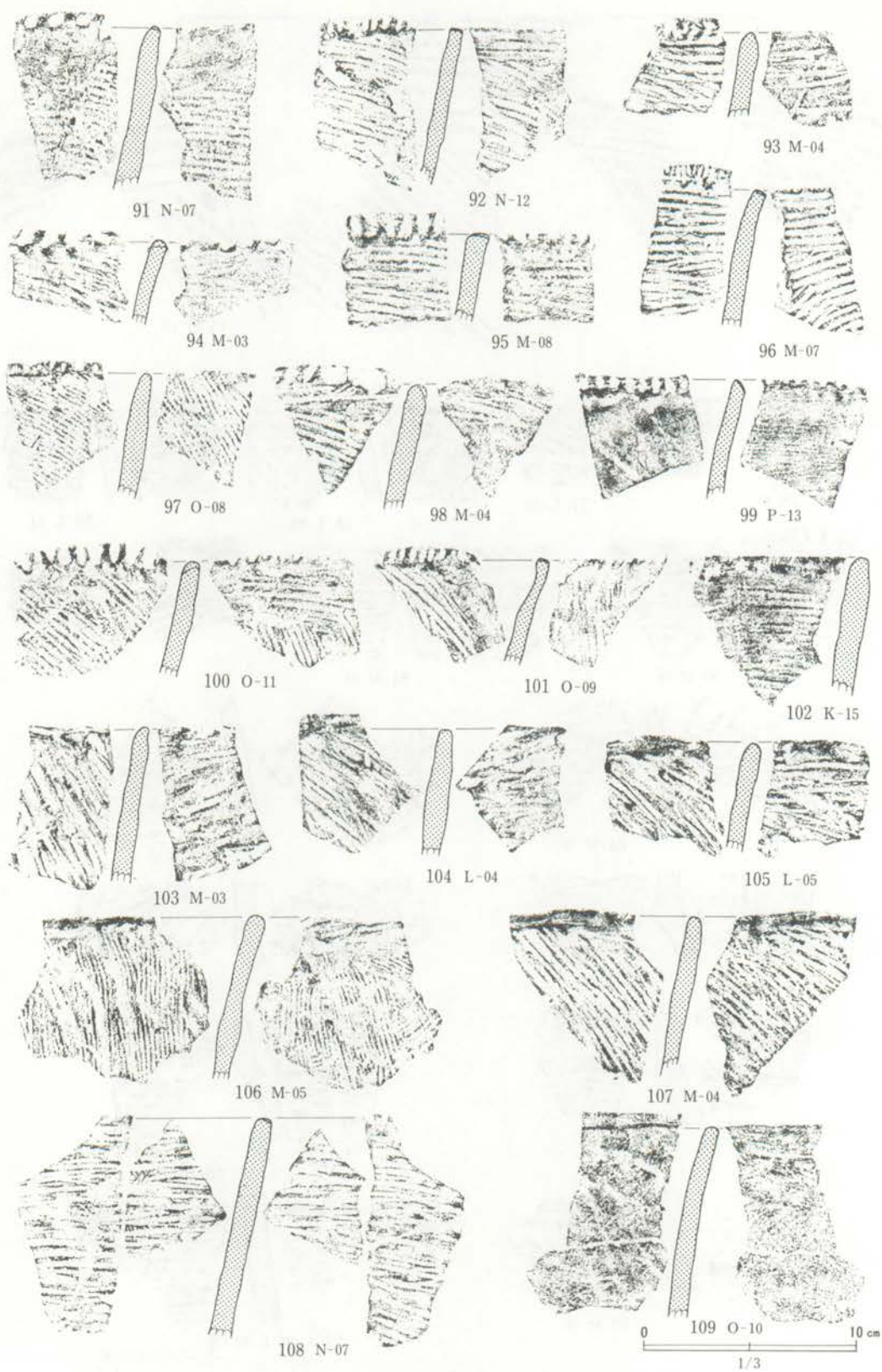
第289図 早期前半の土器 (2)



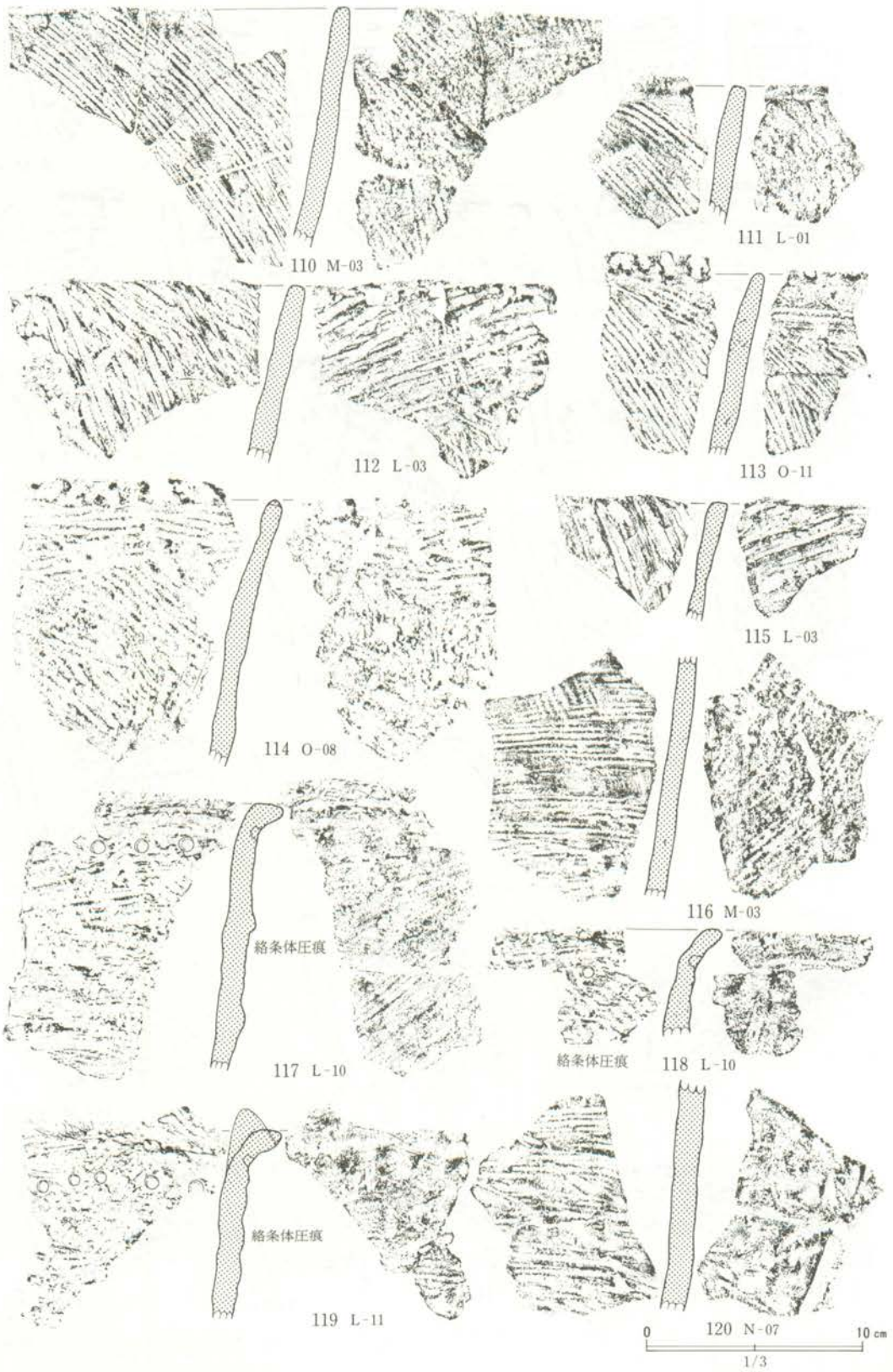
第290図 早期前半の土器 (3)



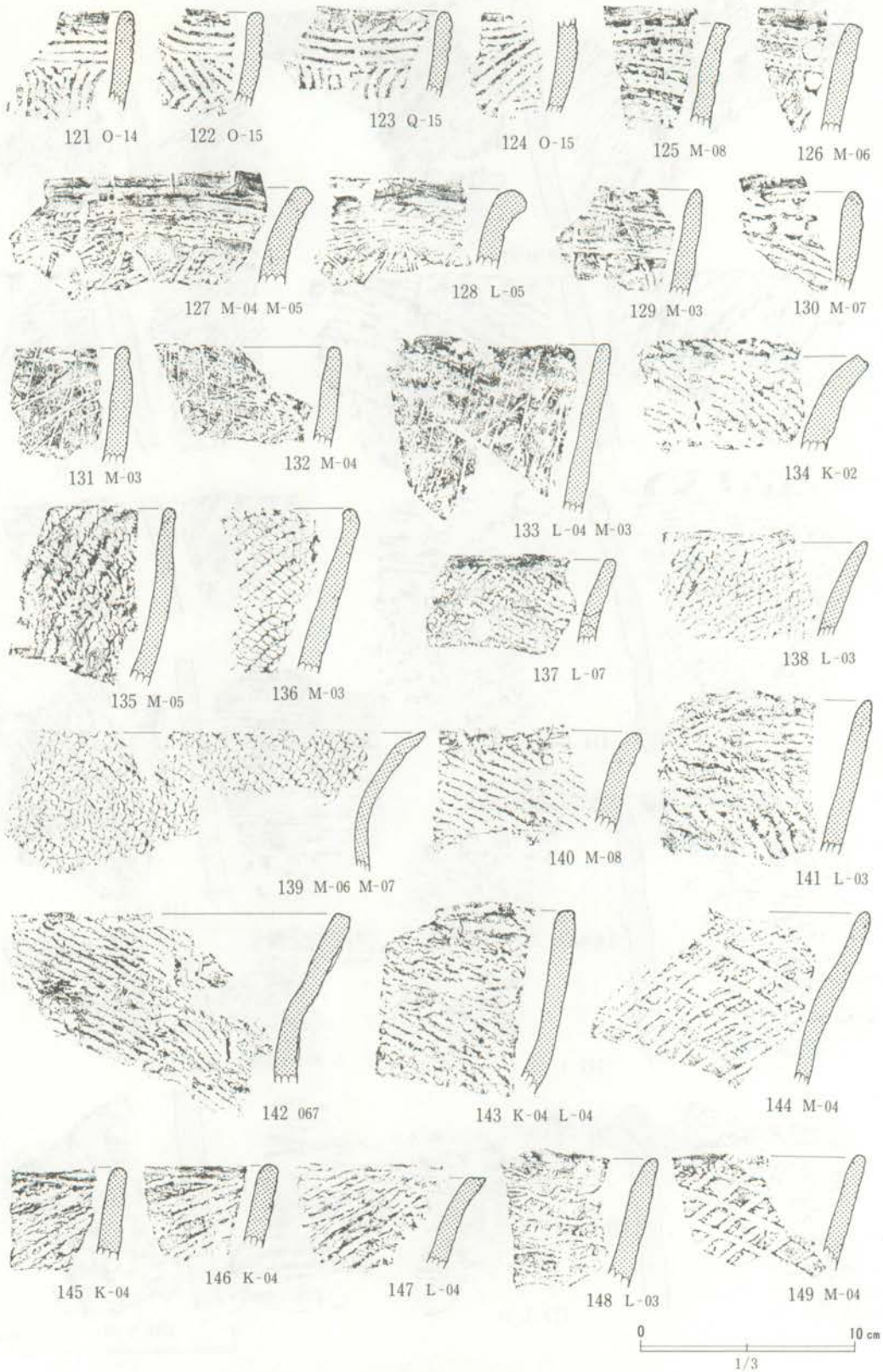
第291図 早期前半の土器(4)・早期後半の土器(1)



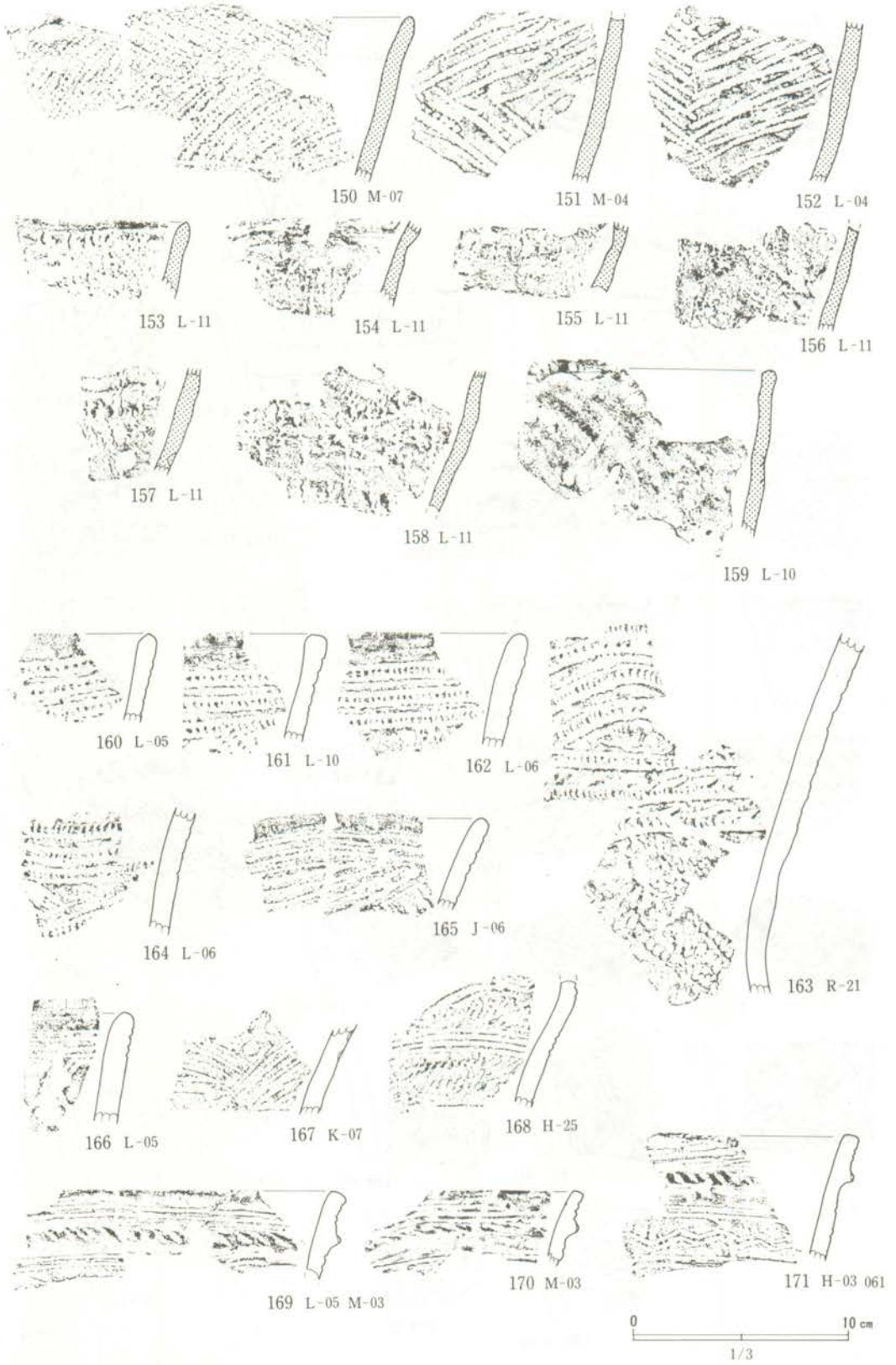
第292図 早期後半の土器 (2)



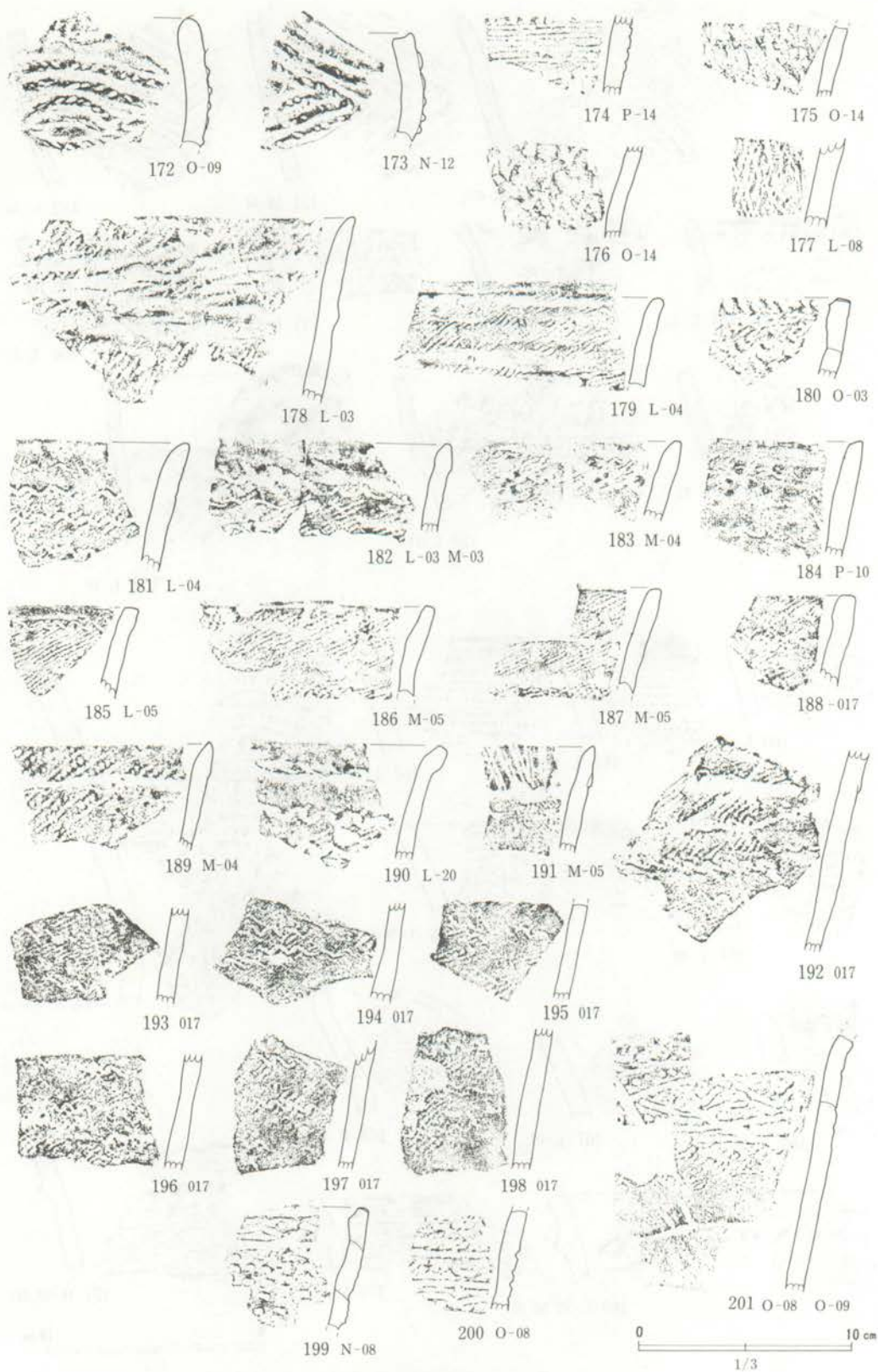
第293図 早期後半の土器 (3)



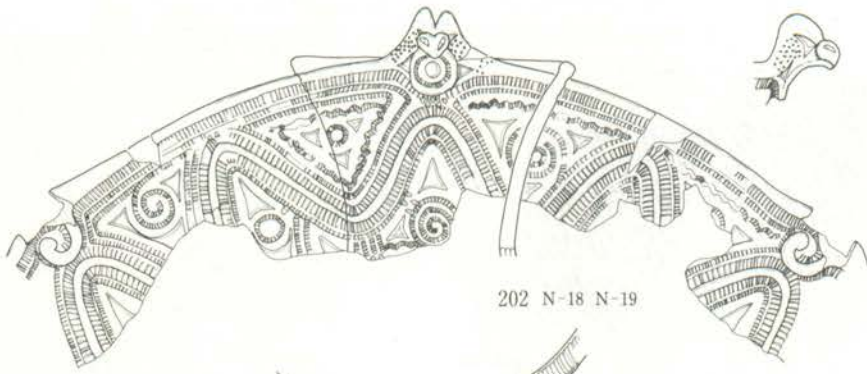
第294図 前期前半の土器 (1)



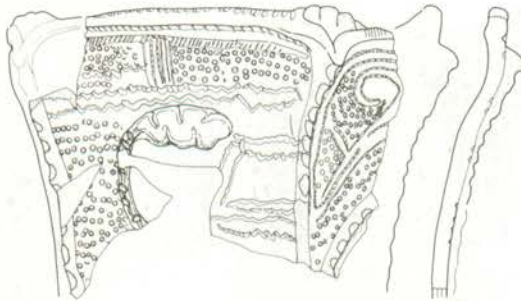
第295図 前期前半の土器(2), 前期後半の土器(1)



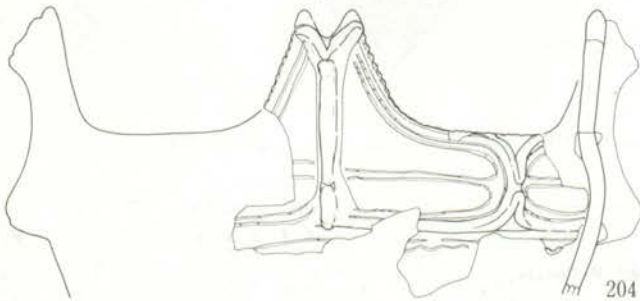
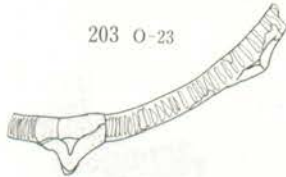
第296図 前期後半の土器 (2)



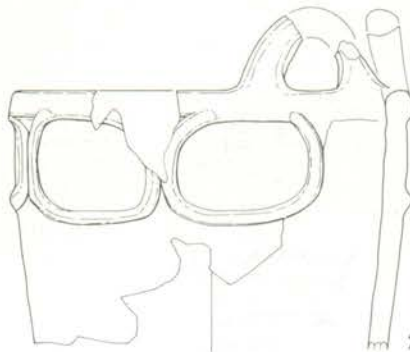
202 N-18 N-19



203 O-23



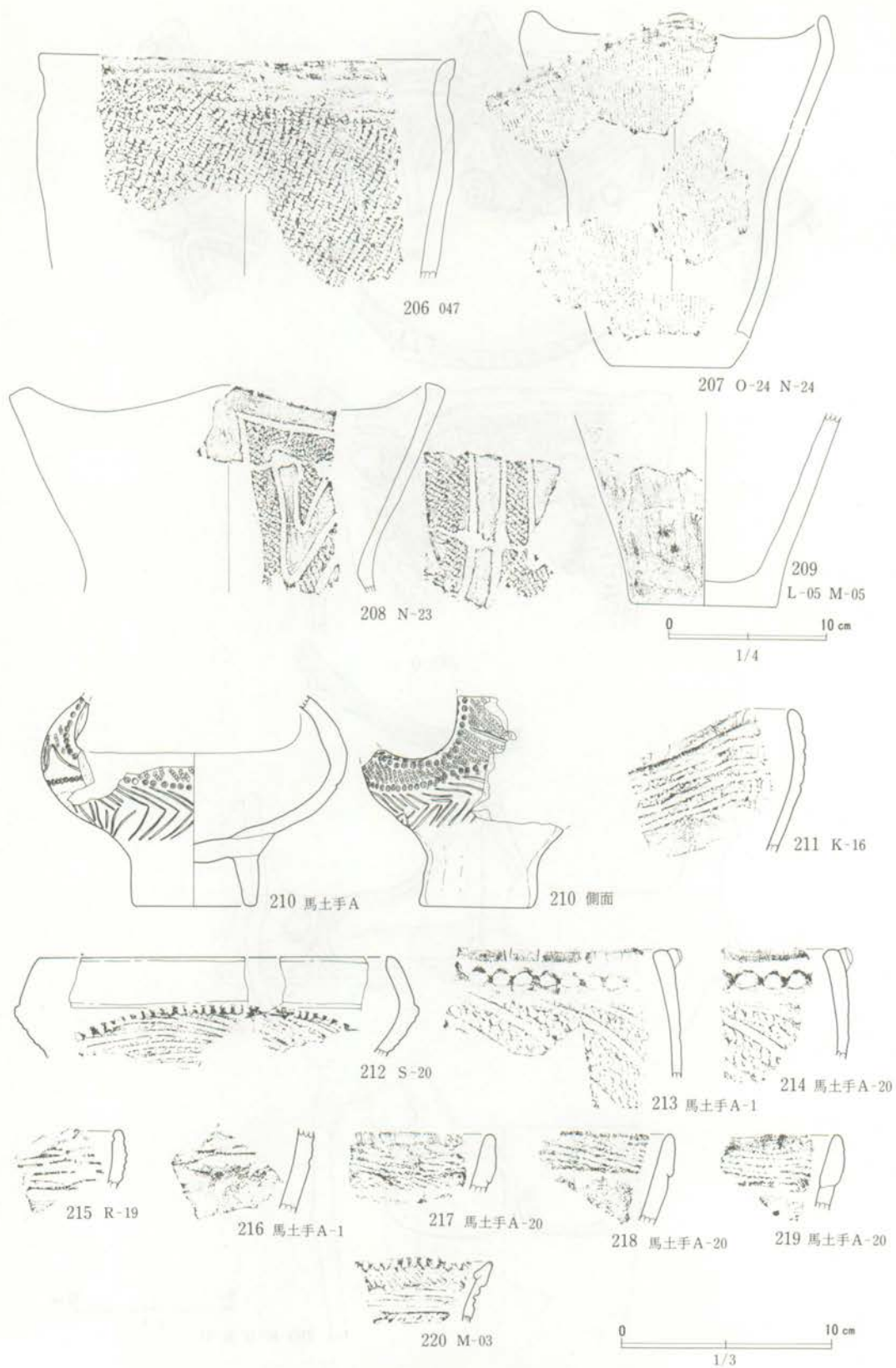
204 N-23



205 K-10 K-11



第297図 中期前半の土器



第298図 中期後半～晩期の土器

(5) 特殊な土器及び土製品 (第299図=図版116)

顔面・獣面把手 (第299図: 1~4)

深鉢形土器の口縁部に加飾された顔面把手、及び獣面把手が4点出土した。1・2は内・外面に顔の表現を有し、頭部上面が若干凹む。特に前者は、外面に竹管状工具による円形刺突文が充填され、中期前半勝坂式直前期に比定できる。後者は、獣面状の突起部片で、中期前半五領ケ台II式期に遡る可能性がある。いずれも勝坂式期に発達する顔面把手の祖形的な要素を含み、近年北陸・中部地方で注意されている中期初頭の土偶(神保・橋本他、昭和60年)とも形態上の類似が認められる資料である。

3は明瞭な顔面表現を欠き、眉状の表現と、後頭部に結髪状文を持つ顔面把手、4は猪状の獣面把手片で、前者は中期前半勝坂I式に、後者は五領ケ台II式に比定される。

土 偶 (第299図: 5)

大形の板状土偶片1点が出土した。右肩部の破片で、表裏の磨滅が著しい。正面及び側面に、結節沈線で曲線・渦巻文を描く。中期前半、勝坂式直前期に位置づけられよう。

不明土製品 (第299図: 6)

直径1.7cmの棒状を呈した半欠品で、菱形・三角形等の陰刻文が施される。中期前半勝坂式から阿玉台式期の骨角製品に散見される文様である。1点のみ出土した。腕輪形土製品と言われるものに近いが性格不明。

玦状耳飾 (第299図: 7)

最大径3.5cm、中央孔径推定0.8cmの土製玦状耳飾半欠品である。丹彩痕は無い。第5群、前期後半の土器に伴うものと考えられる。

有孔鏝付土器片 (第299図: 8)

薄手の作りで、孔の磨滅は認められない。薄く突出した鏝を有す。1点のみが出土した。第6群、中期前半勝坂式土器に伴うものと考えられる。

土製蓋 (第299図: 9)

無文・小型の土製蓋である。焼成前の穿孔が2か所あり、周縁を若干欠く。類例から考えて、第9群、後期前半の土器に伴う可能性が高い。

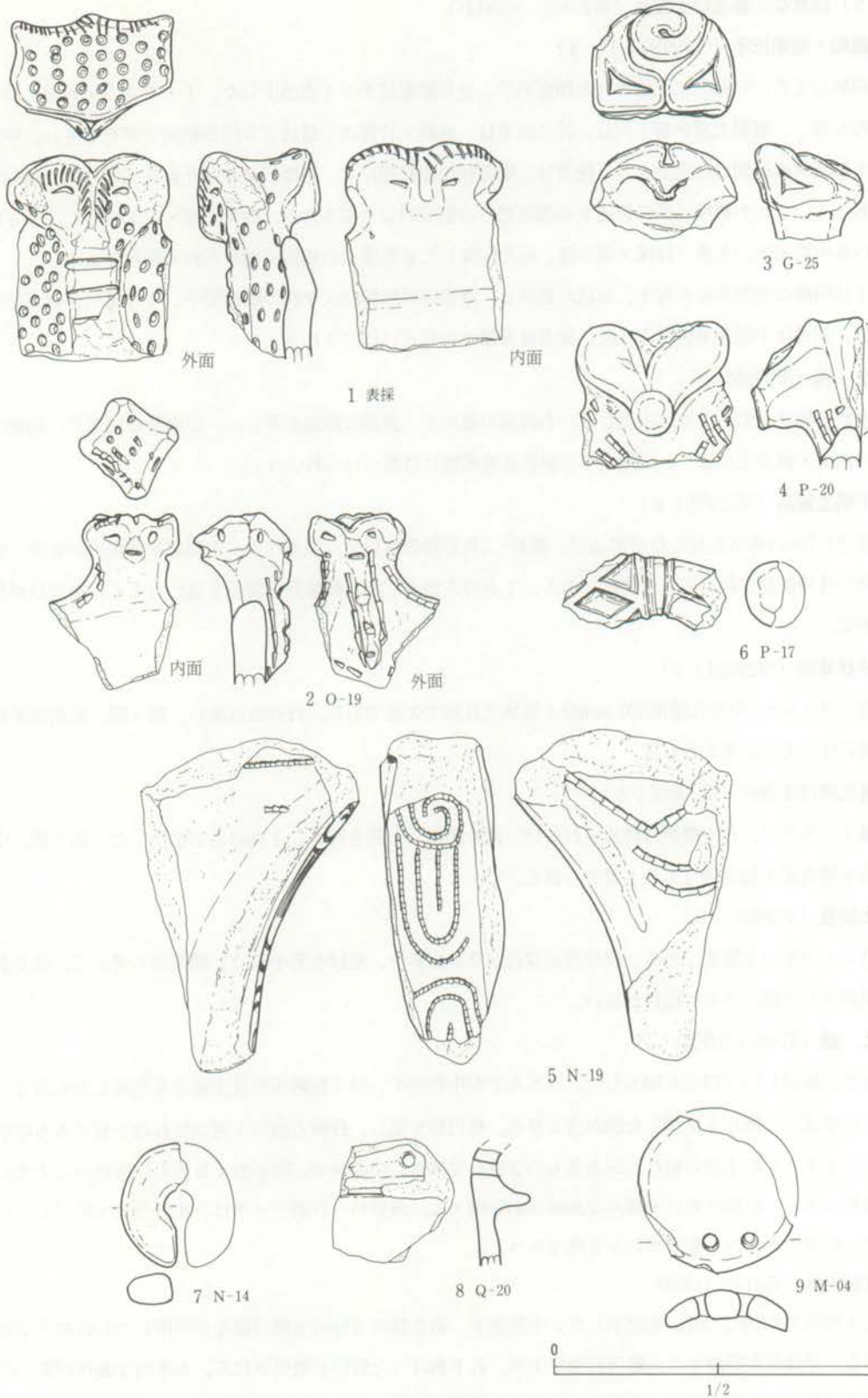
土 錘 (第300~309図)

出土総数521点中479点を図示した。ほとんどが中期前半、第7群阿玉台式土器片を利用したもので、若干他型式の土器片を使用した例が含まれる。楕円形を呈し、長軸方向に1対の切れ目を有するものが多く、上下・左右2対の切れ目があるものは僅かである。中期前半、阿玉台I b式の住居跡から出土した資料も多く、該期における盛んな漁撈活動が窺える。各資料の計測データは、集計作業を終了しているが、紙面の都合から割愛せざるを得なかった。

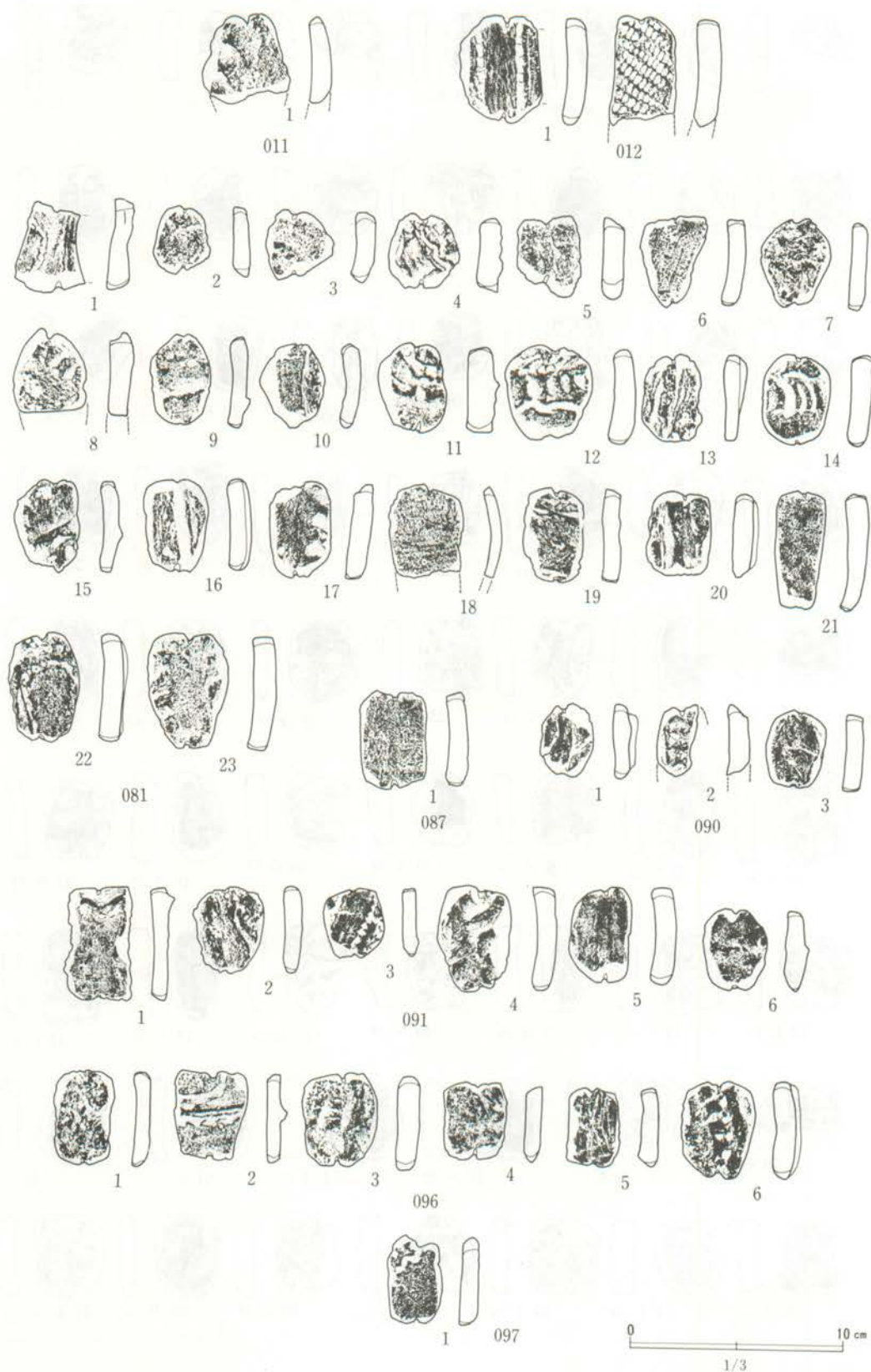
土製円板 (第310~313図)

出土総数238点中、207点を図示した。中期前半、第7群阿玉台式土器の破片を利用したものが大半を占める。周縁部が研磨され、略円形を呈すが、若干角ばった資料も散見される。本来的な製作時期、用途は不明だが、土錘に比べ、遺構から出土した資料は少い。なお、有孔円板が1点(186)出土している。

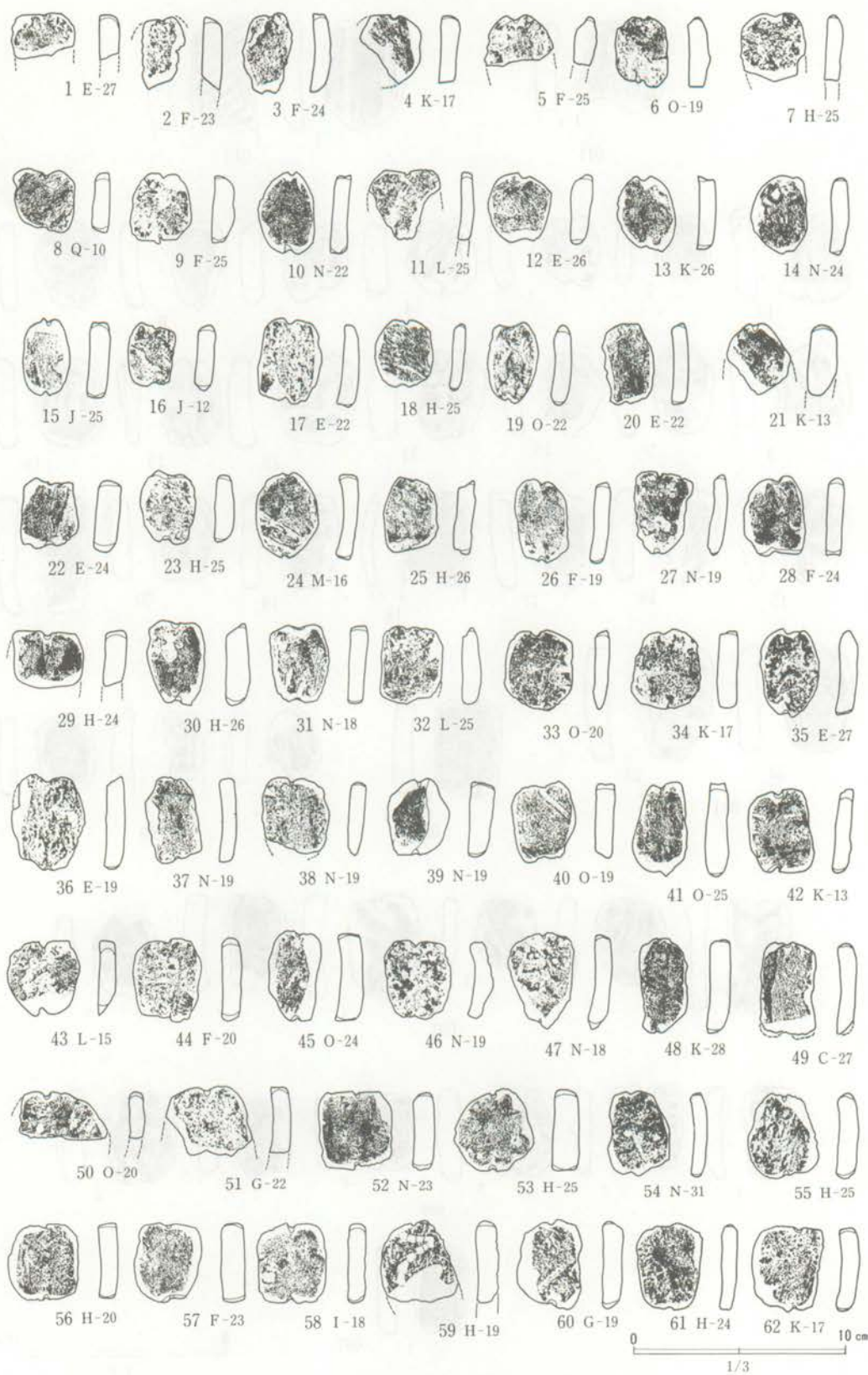
(原田)



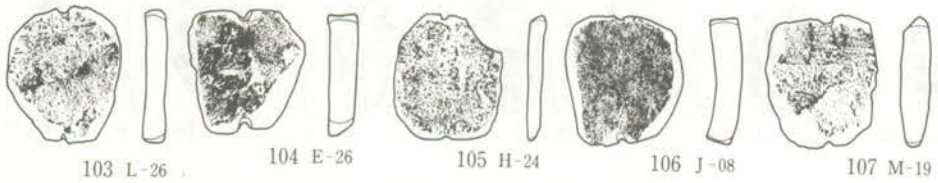
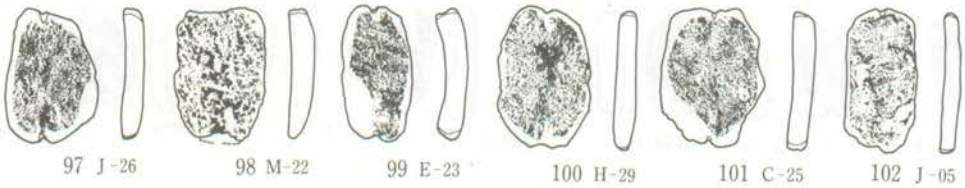
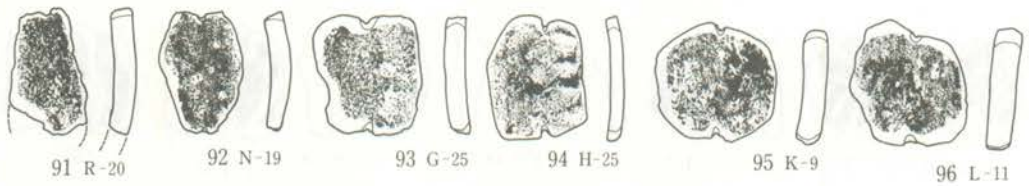
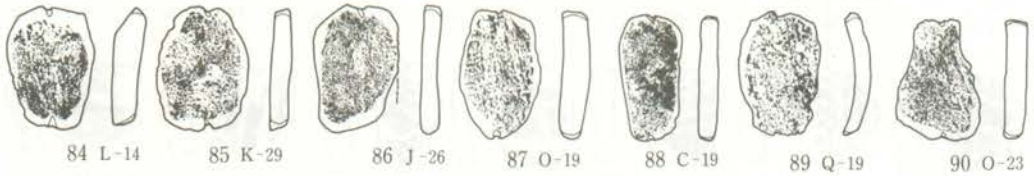
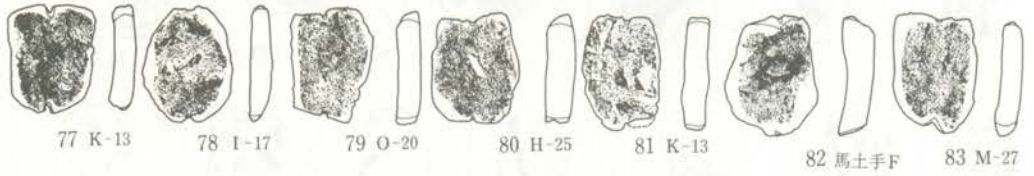
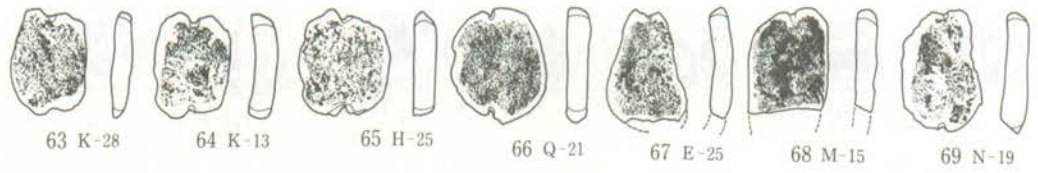
第299図 特殊な土器・土製品



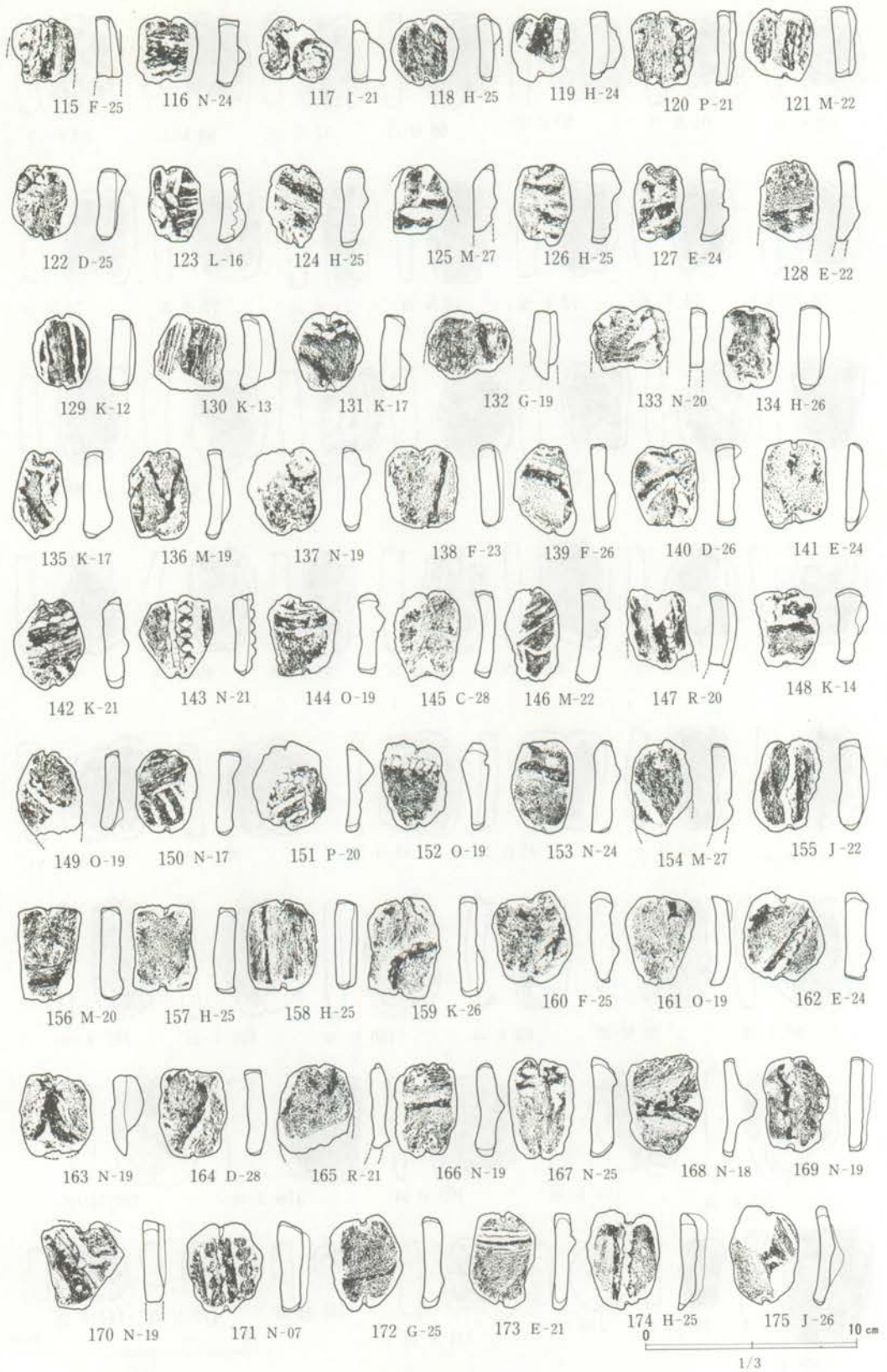
第300圖 土錘(1) 遺構出土



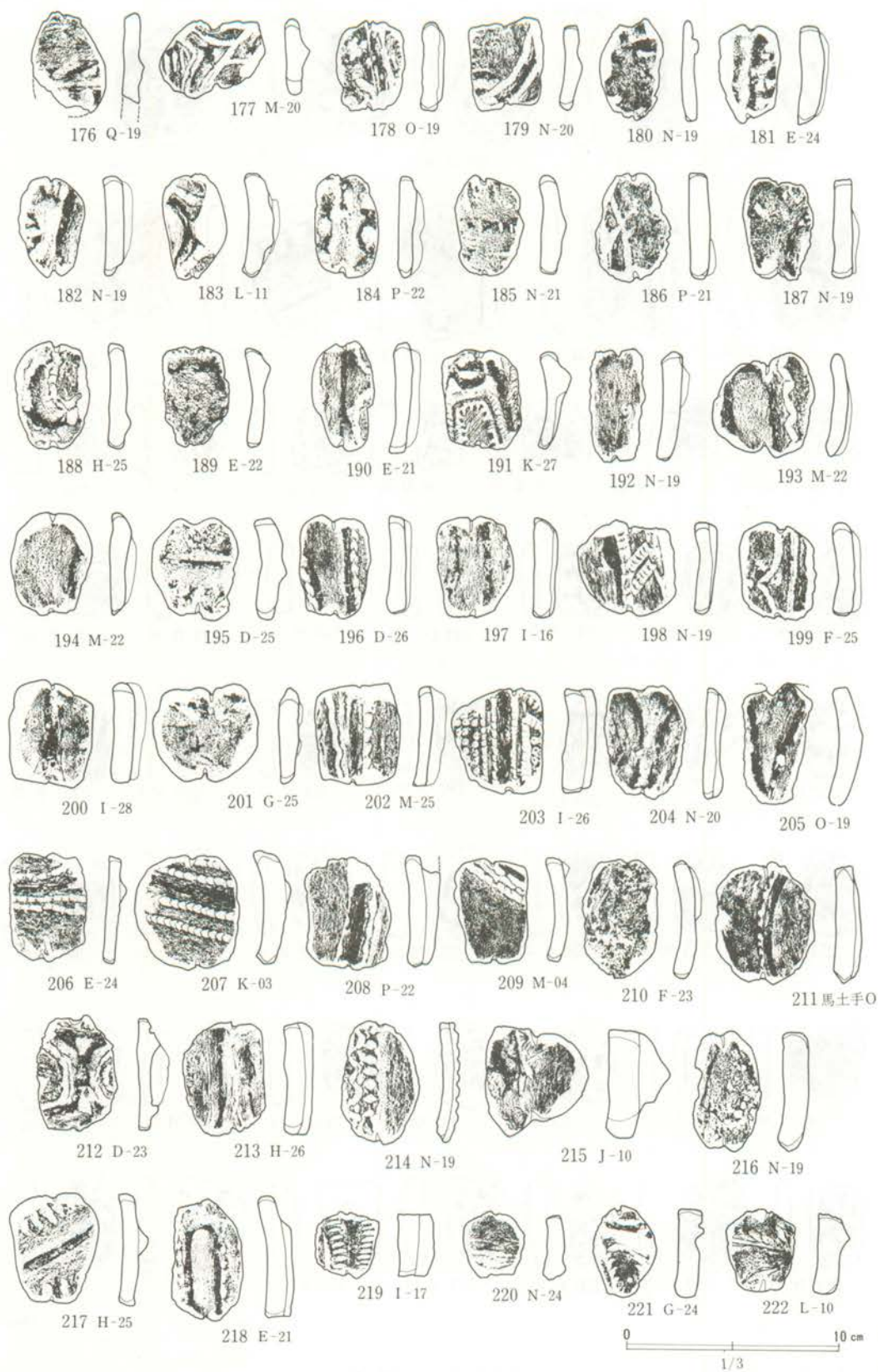
第301図 土 錘 (2)



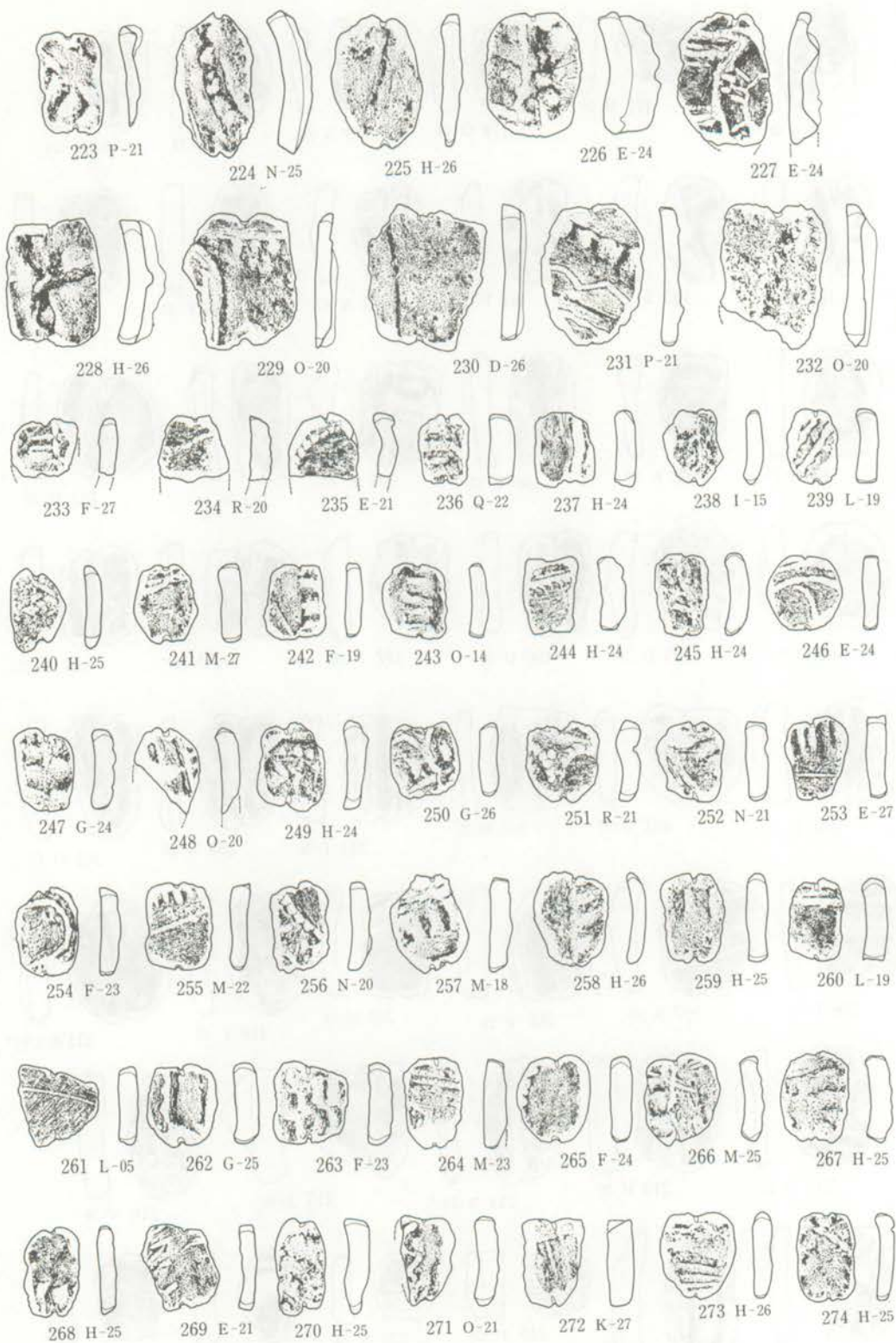
第302圖 土 錘 (3)



第303図 土錘 (4)

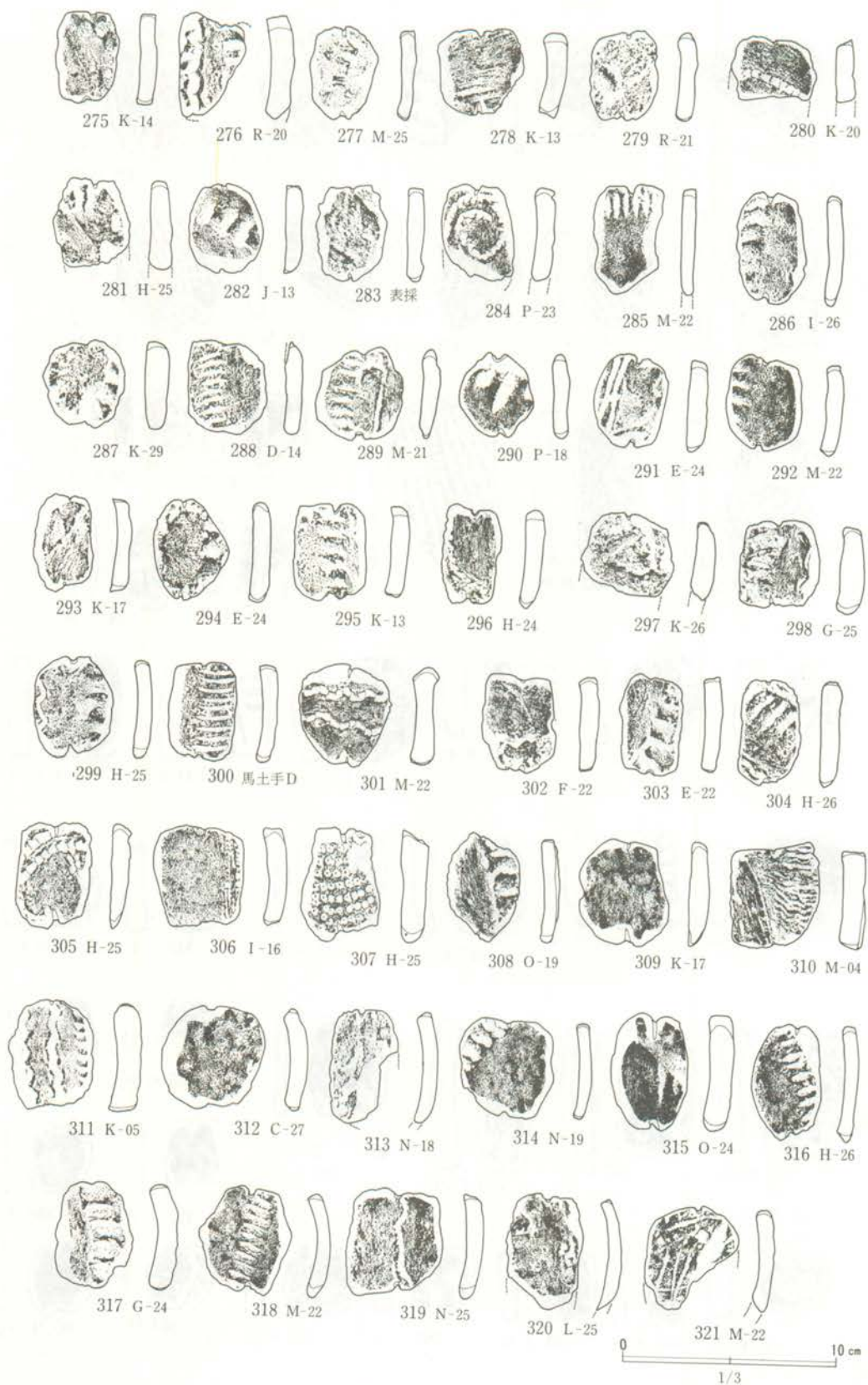


第304図 土錘 (5)

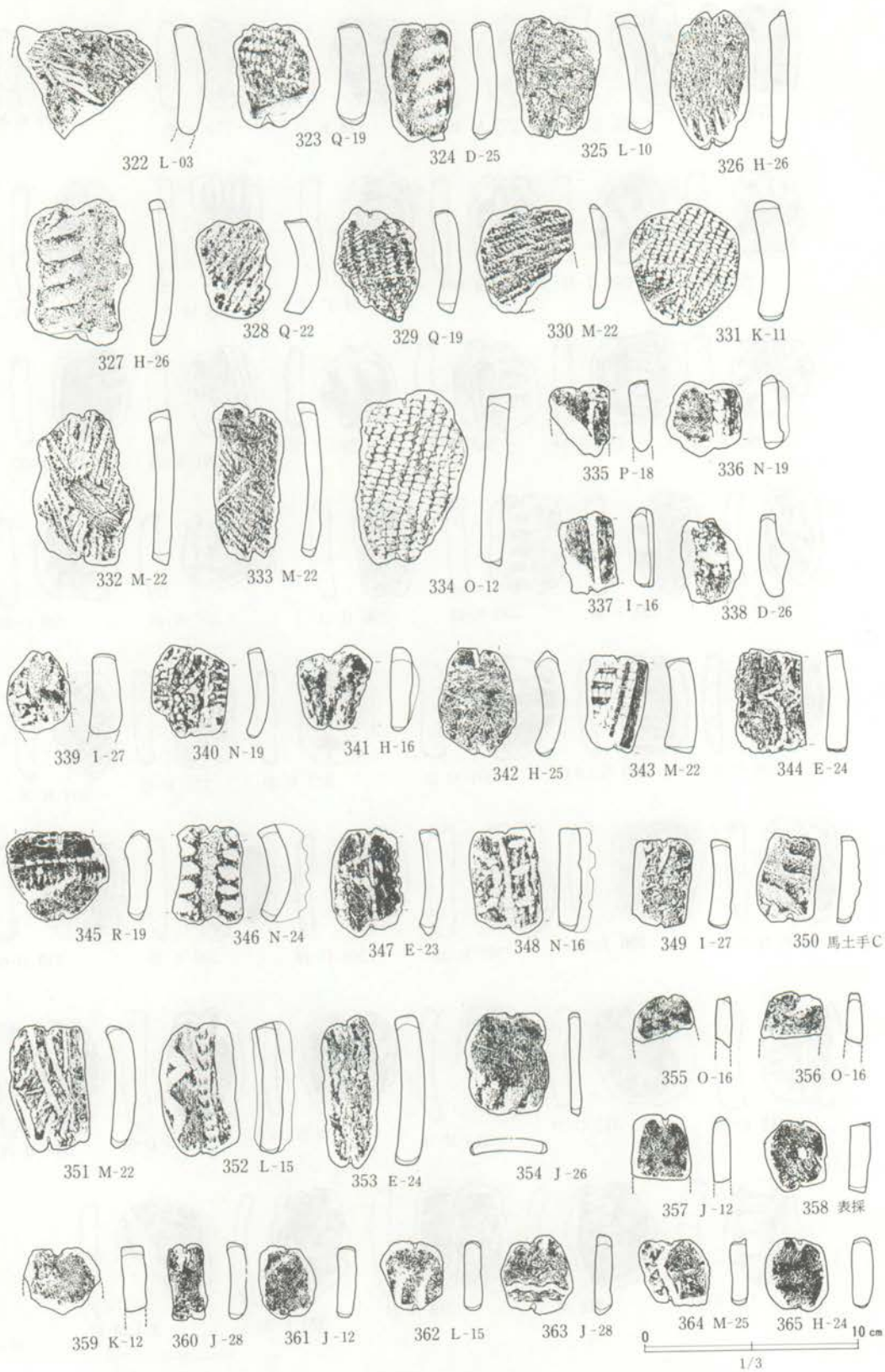


0 ————— 10 cm
1/3

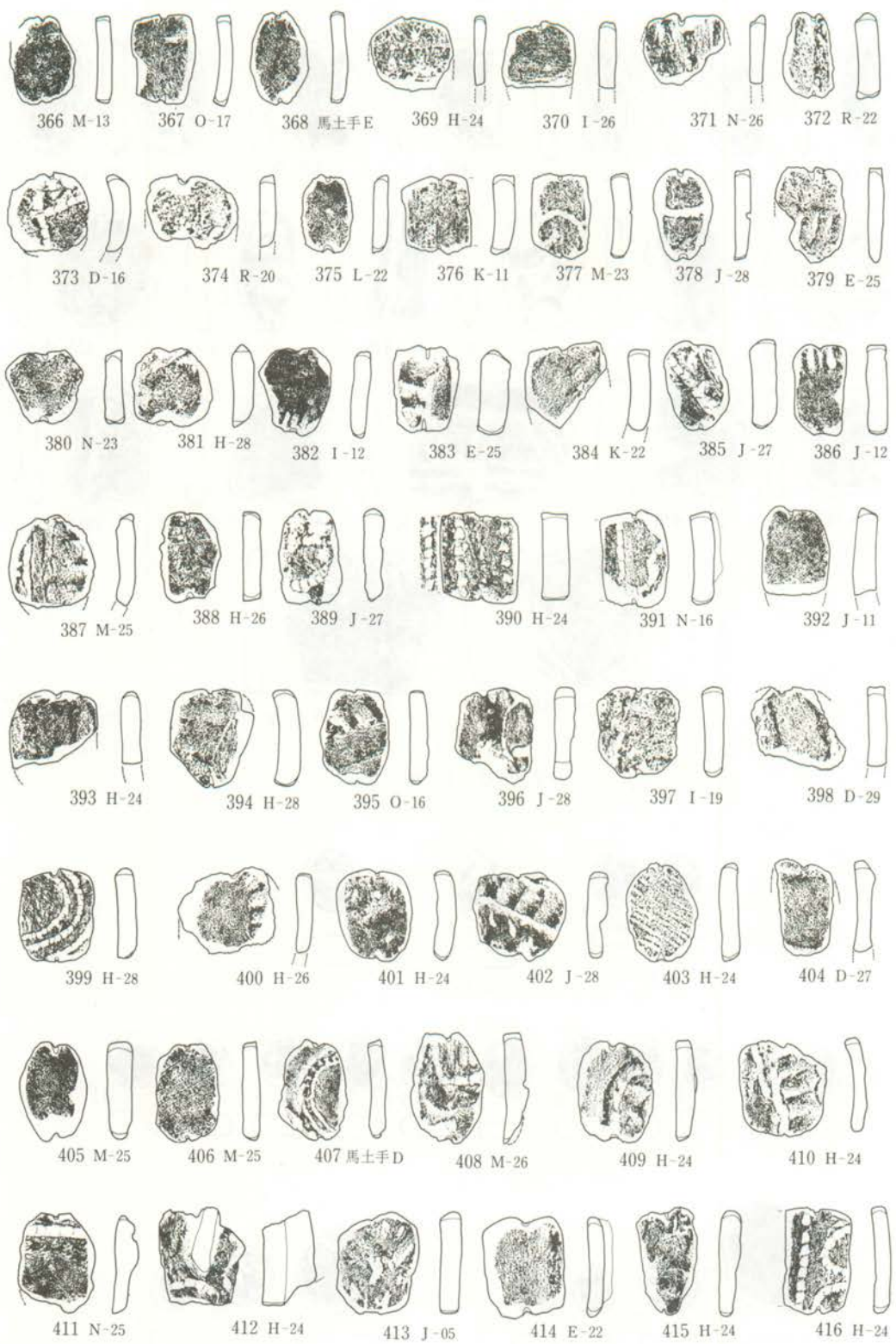
第305図 土錘 (6)



第306図 土錘 (7)

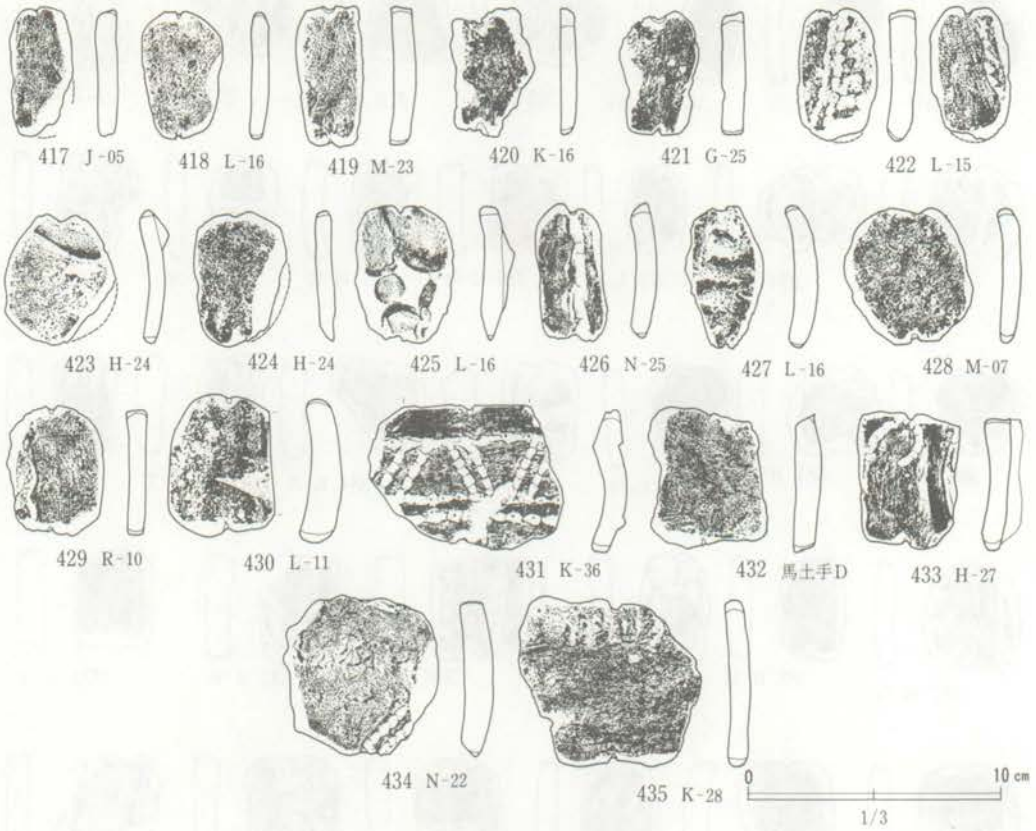


第307図 土錘 (8)

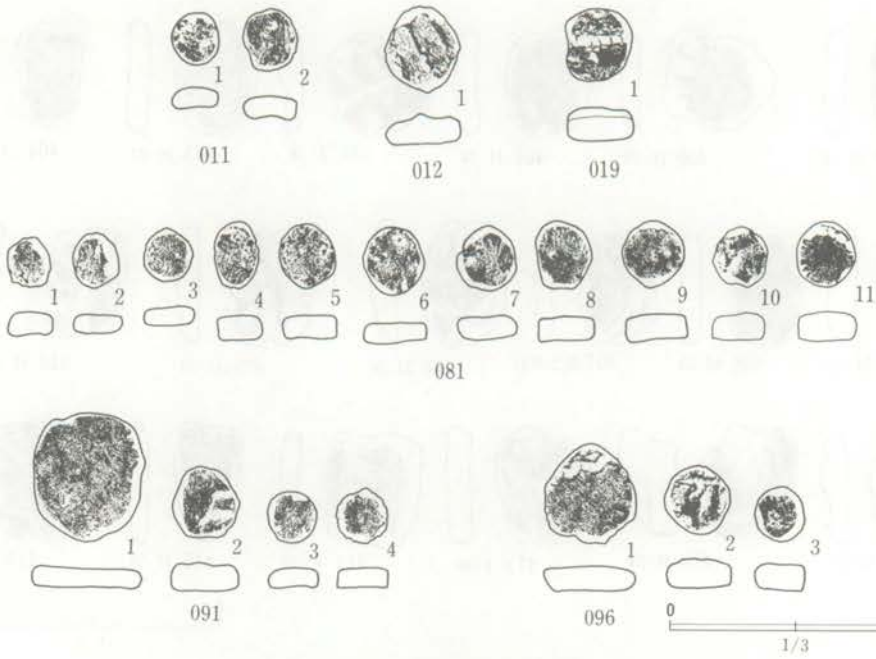


0 10 cm
1/3

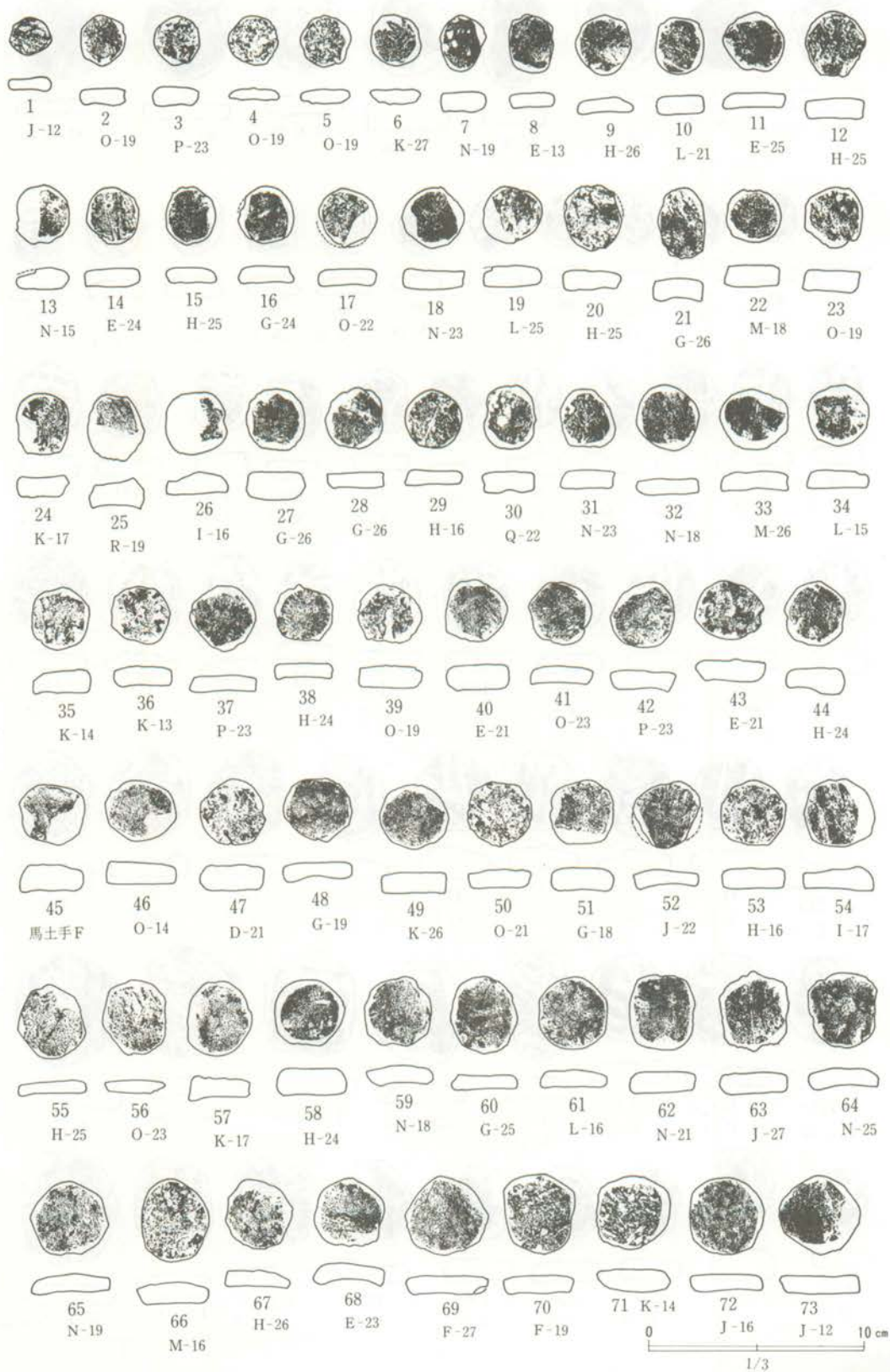
第308圖 土 錘 (9)



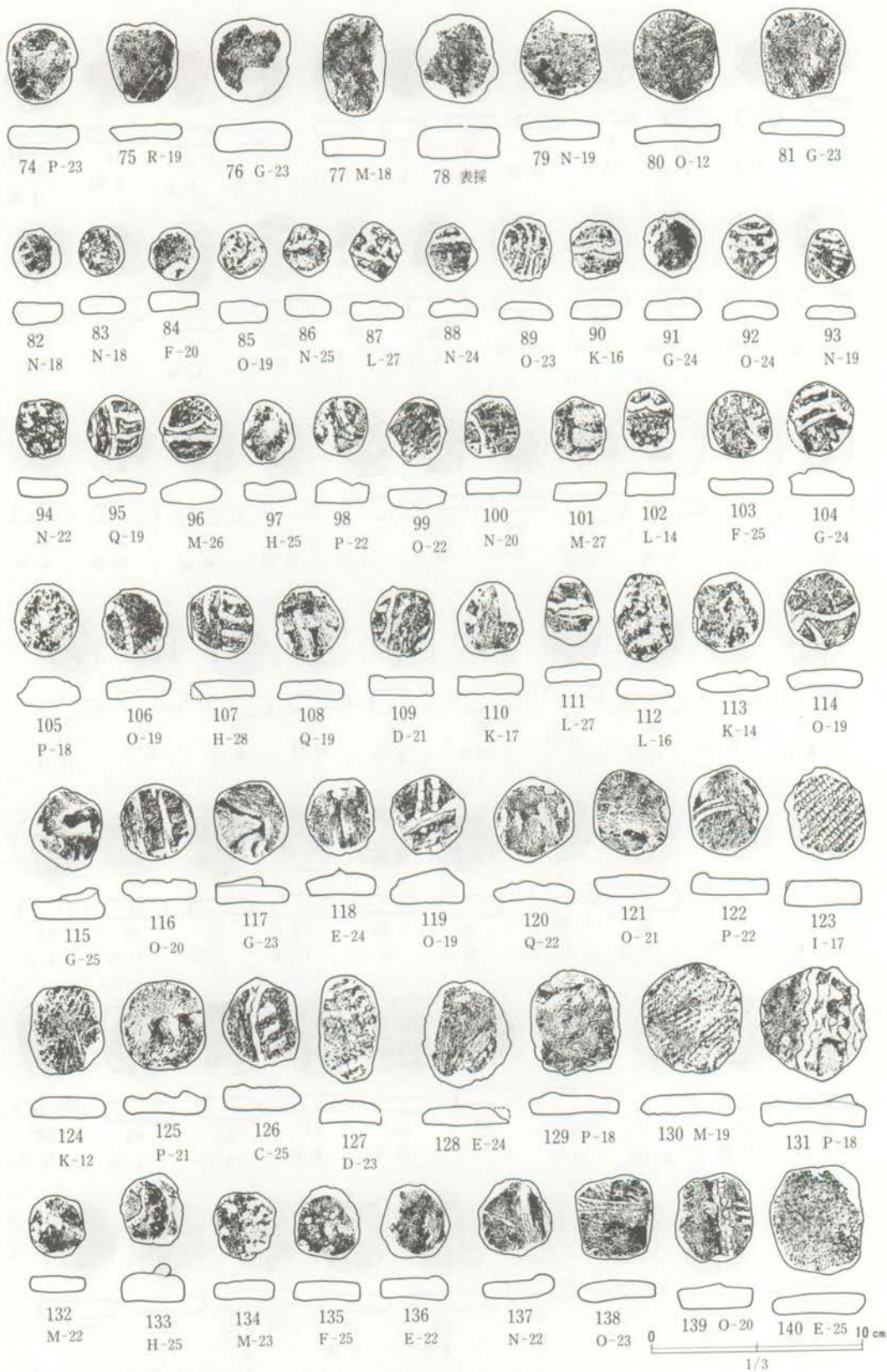
第309図 土 錘 (10)



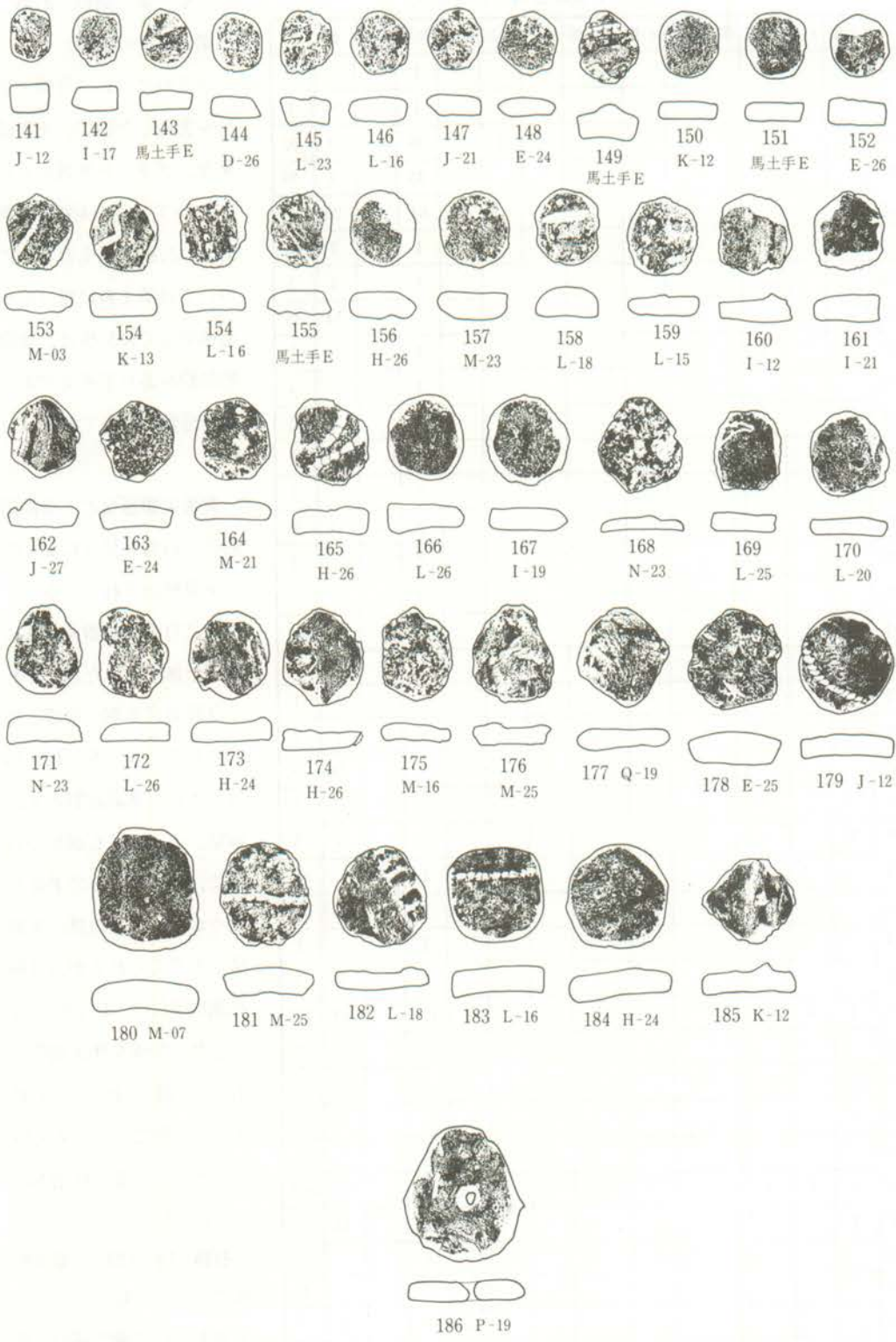
第310図 土製円板(1) 遺構出土



第311図 土製円板 (2)



第312図 土製円板 (3)



0 10 cm

第313図 土製円板(4)・有孔円板

第4表 中山新田Ⅰ遺跡遺構別石器組成

	石鏃	石斧	削器	楔形石器	石錐	礫石器	石皿	礫器	浮石	剥片	石核	礫	計
001										1			1
004										1			1
005								1		88		3	92
011						1				33		4	38
012	2					1	1			61		20	85
015										1		1	2
016								1		1		1	3
017												14	14
020			1							4			1
023										4			4
024										2			2
028										1			1
029										1			1
037										6	1	11	18
039										2			2
040										9		1	10
041		1								5		4	10
043												1	1
047												1	1
052										1		1	2
053												6	6
054												7	7
059	1									1		1	3
065										1			1
068												15	15
069										1			1
070										1		1	2
081	4	1				2			6	121		42	176
082										1		1	2
084										3			3
086												1	1
087										4		3	7
090	1	1	3		1	1				57		5	69
091	4									29		14	47
094										5			5
095										17			17
096										69		7	76
097	1									9		4	14
計	13	3	4	0	1	5	2	1	6	537	1	169	742

(注) 礫石器としたものは、スリ石、タタキ石など円礫を加工しないで用いるもの。

C. 出土遺物：石器

(第316図～337図)

全資料について分類・集計を実施したので、その成果を、グリッド発掘のものについては第314図及び第315図に、遺構出土のものについては第4表に掲げたが、遺構単位での分析は、時間的制約があり不可能であった。分類に従って概説したい。

有舌尖頭器など 草創期
前半の石器と見られるものが少量検出されている。1～4に有舌尖頭器を、5に菱形の鏃を示したが、これらは確実に本期の所産と考えられる。6～8、10～13はいずれも玄武岩製の尖頭器状、あるいは石鏃状の石器で、粗雑な作りであるところから、大型の鏃の未製品とも考えられるが、性格、帰属時期共によく分らなかった。明確な伴出遺物の出土が待たれる。9はチャート製で、これらと似ているが、あるいは削器かもしれない。

石鏃 (14～123) 基部形態に従って分類されるが、平基あるいは微凹基の一群(140～146)、凹基で側縁の緩く外彎する一群(47～109)の2群が目立つ。特に後者

のうち、基部の抉りが深く脚の長いものは特徴的で、阿玉台期前半期の鏃形態の好例となろう。109は鏃形鏃、114は有茎鏃で、それぞれ早期、後晩期に編年される。113はハタンキョウ形の特殊例で、55・57などと似るところがある。石質の大半は黒曜石で、少量のチャートが認められた。なお、聖人塚遺跡で特徴的であった、脚部が尖端で合する逆V字形の例はなく、阿玉台期の前半期、後半期で鏃形態に変化を生じたものとも見られる。

石槍 (124) 1例であるが小型粗製の石槍と考えられる資料がある。黒曜石製。

石錐 (125~134) 剝片の一端に錐部を作り出すもので、聖人塚遺跡例と大差ない。錐体は細長い場合 (128・131・132~134) と、短く三角錐状になる場合 (125~127・129・130) の両者があり、ほぼ同数の出土である。全例黒曜石製である。

楔形石器 (135~161) ほぼ全て黒曜石製で、多量に出土した。基本的に、薄手で横に長いものと、厚手で縦に長いものの2者から構成されているが、圧倒的に前者が多い。小型の石核の一部のものには、本種に含められるかと考えられる賽子状の例もある。

削器 (162~222) 2次加工の顕著なもの他に、刃こぼれのある剝片も含めた。やはり9割以上が黒曜石製で、多量に検出されている。石匙と呼ばれる定型的なもの (162・163) は2例のみで、大半は不整な剝片の一端に付刃するものであり、特徴を捉え難い。162~201が2次加工の著しいもの、202~215に刃こぼれの目立つものを示した。216は砂岩製で一応本種に含めたが、横刃形石器である可能性が高い。217~221は特殊例で、先土器時代の石器のようにも見えるが、器面の風化が弱く、新鮮な剝離面を保持しているものもあり、判定に悩む。222は玄武岩の大型剝片に加工した削器である。草創期前半に遡及するかもしれない。

石斧 (238~323) 打製のもの (238~316) と、少量の磨製のもの (317~323) とがある。短冊形を主とし、撥形を従とする傾向が窺われる。また聖人塚例と較べると、大型の短冊形石斧が目立ち、小型の撥形の類が少ないようである。聖人塚遺跡と同様に、遺跡内に石斧作出剝片の検出を見ず、また、近傍に原産地を有さぬことから、製品そのものが大量に搬入されたと想定したい。

礫器 (324~340) 円礫の一端に打ち欠きの認められるもので、大小様々なものがある。中山新田I遺跡には、縄文各期の遺物があるので、時期の特定は難しいが、土器の分布と照合することにより、ある程度の見通しが得られるであろう。

スタンプ状石器 (341~344) 細長い円礫を素材にし、側面に剝離を加え、スタンプ状に整形した石器である。底面には周辺から剝離を加える場合が多いが、342では割り放しの状態になっている。分布はO列12区、23区、P列14区などで、第1群土器の分布範囲に近接していることから、撚糸文系土器に伴うものと判定した。従って、所謂凡字形石器ではなくて、スタンプ状石器と分類した方が良い。なお、本種は下総台地では検出例の極めて乏しい器種であり、〈Y型〉優位の夏島式の存在と関係があるのかもしれない。

円礫素材の大型石器 (345~389) 円礫を素材とし、余り加工しないで使用に供する石器を一括した。使用痕に応じていくつかに分類される。①礫表に広く磨痕の認められるもの (345)。②礫表に磨痕と共に被敲打痕があるもの (346~354)。③礫表に被敲打痕のみあるもの (358~361)。④礫の一端に敲打痕の集中するもの (362~、372)。ハンマーストーンに相当する。⑤石皿 (373~389)。器表に凹みが多く

認められるものがある。

問題点について たくさん問題点のうちいくつかを取り上げたい。まず、6～13の尖頭器状の石器については、今のところ明確な位置づけはできないが、類例が宮城県内に多く検出されている。正式な調査例では、多賀城市志引遺跡3層上面の例（鎌田 昭和59年）があり、爪形文土器を伴っている。新潟県壬遺跡の概報にも図があるが、伴出する土器がよく分らない。これらを参考にして、一応、草創期の石器にしてみたが、福島県上ノ原遺跡では、良く似た石器が大木6式に伴っており（芳賀 昭和58年）、類例の増加が待たれる。鏃形尖頭器などと呼ばれることもある。

次に、本遺跡の主体を占める中期前葉の石器群についてだが、聖人塚遺跡と同様に、本遺跡からも大量の黒曜石が掘り出された。これに関しては、聖人塚遺跡の項で簡単なコメントを加えたが、阿玉台期のほぼ全期を通じて、生活拠点の移動を伴いながらも、多数の黒曜石が搬入し続けられていたことになる。はたして遺跡内でのみ消費されたのか問題であり、さらに、多くの西関東系土器の出土も示唆的と言えよう。（田村）

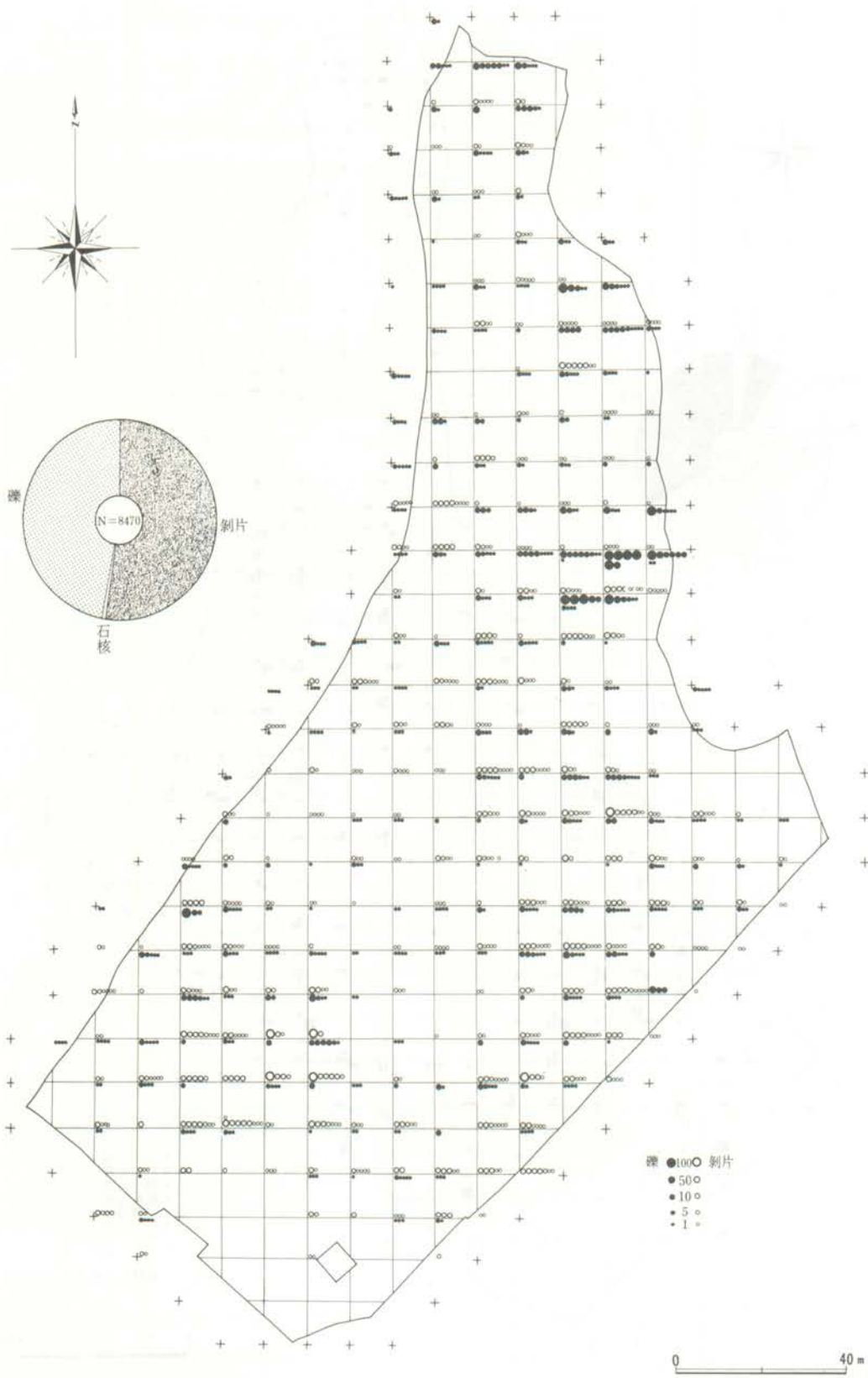
第2節 中山新田I遺跡の動態

中山新田I遺跡は、比高5～6mの浅い開析谷をその北西側に擁し、台地縁辺部から平坦面にかけての広い面積に占地する。浅い谷津の源頭部を挟んで、聖人塚遺跡とは指呼の間に位置するため、当初は両者を同一遺跡の一部として認識したこともあった。しかし資料の分析が進捗するに従い、両遺跡は常に相互補完的な変遷を示しつつ、中核となる縄文時代中期において、その前葉期には中山新田I遺跡に、中葉期には聖人塚遺跡に、各々継続期間の短い集落が、別個に営まれたことが判明した。

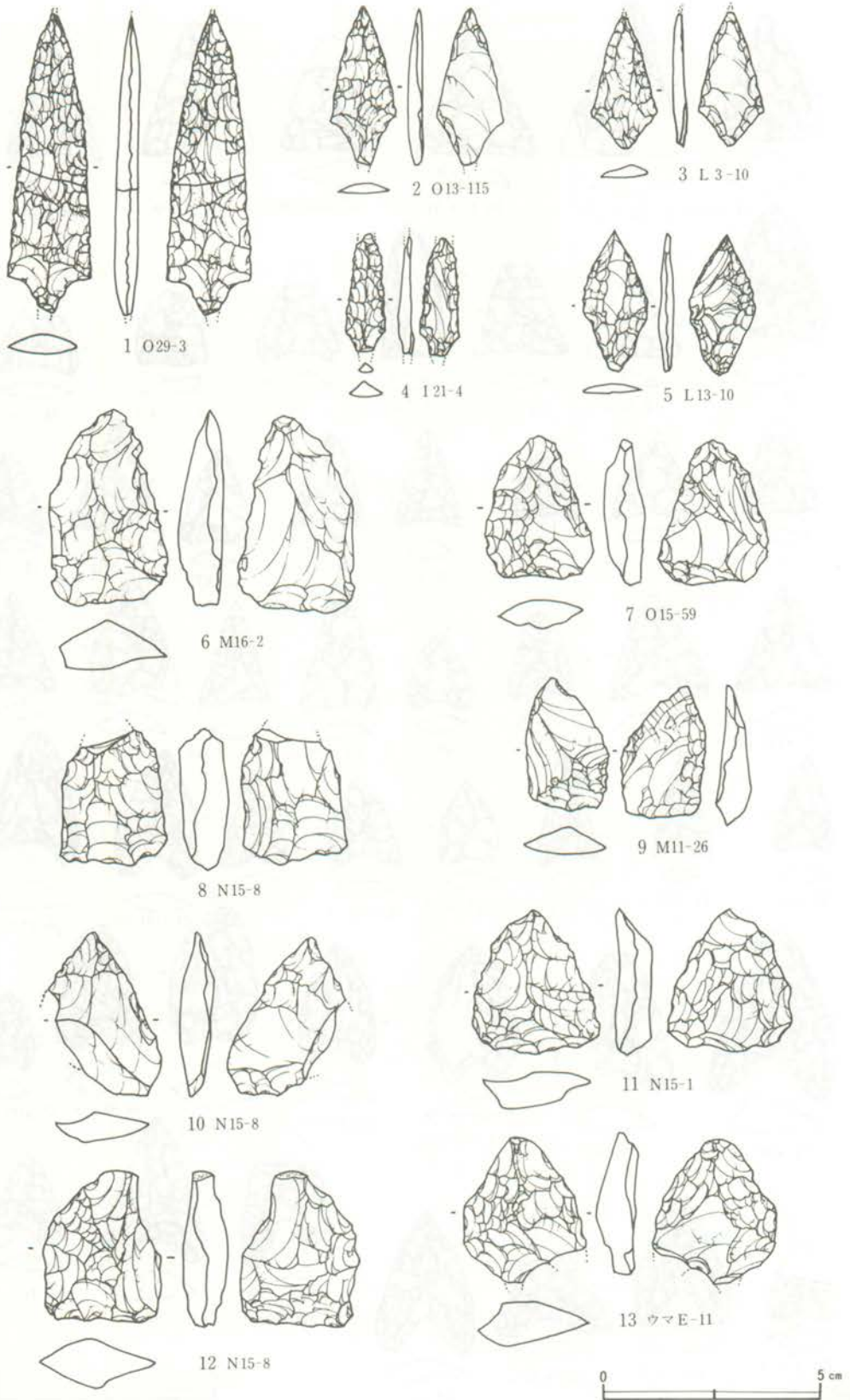
中山新田I遺跡では、縄文時代に入って早期前半、撚糸文期にまずまとまった生活痕跡が検出されている。引き続き早期中葉から後葉期にかけても、各土器型式の出土が見られ、特に条痕文期には多くの炉穴を伴う、生活遺構群が形成された。しかし次の前期前半・後半期まで、専ら人間活動の舞台は、谷津に面した調査区北部の台地縁辺に限られていたらしく、台地上の平坦面にはあまり遺物の分布が見られない。

こうした状況が大きく変わるのは、中期に入ってからである。各項でも述べたように、中期前半、阿玉台I b、II式期を中心とした9基の住居跡・竪穴状遺構が、台地上平坦部に、稀薄ながらも環状に配置され、遺物の分布もこれらの遺構群と相関的な様相を強くする。より詳しく見れば、005竪穴状遺構・081・090・091住居跡が阿玉台I b式期に構築され、次にI b・II式期の中間的な時期に097住居跡が、そして阿玉台II式期に087竪穴状遺構と096住居跡が構築されたものと順序だてて考えることもできる。いずれの時期を通して住居跡群中央部の、若干窪地状の部分が、遺物分布の稀薄な、所謂環状集落の中央広場として認識されることが、特筆できる所見であろう。該期の遺跡範囲は、若干が調査区外にも拡がるとしても、ほぼ集落の中心部は調査されたものと考えて良いようだ。

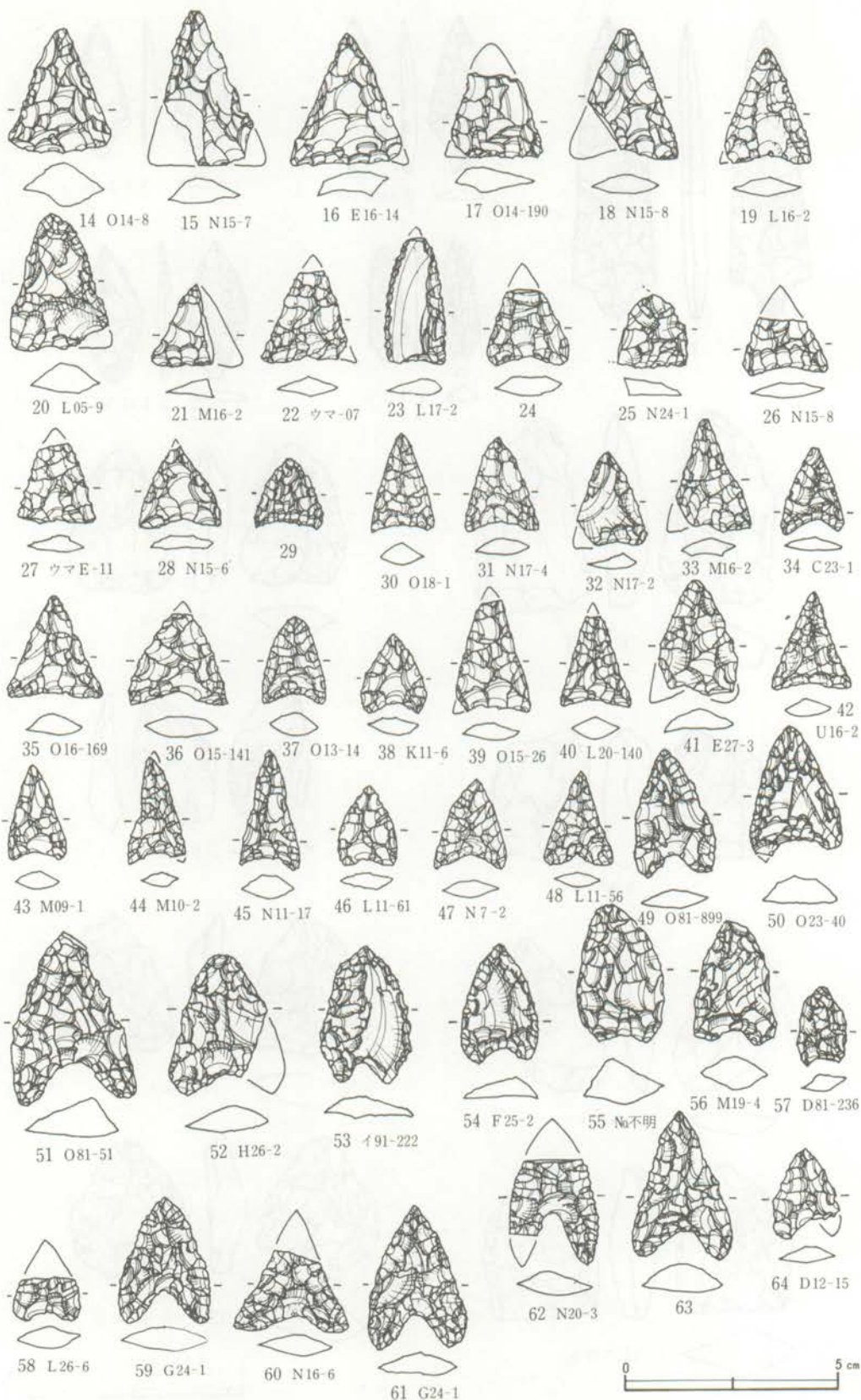
その後、中期中葉以降、数基の生活遺構こそ散見するが、遺物の分布は晩期に至るまで、散在化、稀薄化の一途をたどり、当遺が主体的な生活地として利用された痕跡は窺えなくなる。隣接する聖人塚遺跡で、多くの住居群が営まれた中期中葉期に、当遺跡ではその墓墳的な遺構（058土坑）が1基発見されている事実等は、これを良く反映したものと言えよう。（原田）



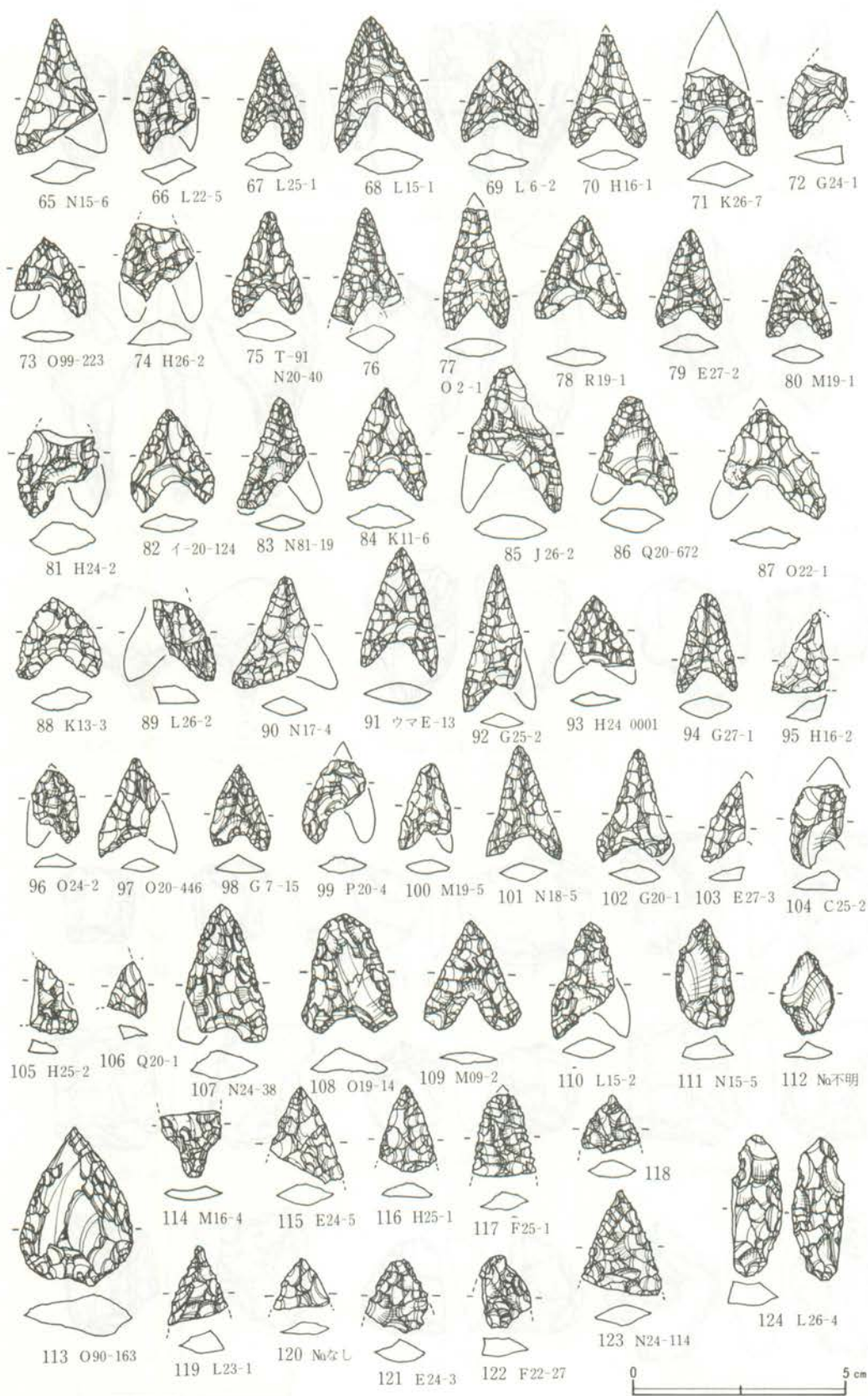
第314図 縄文時代石器分布 (1)



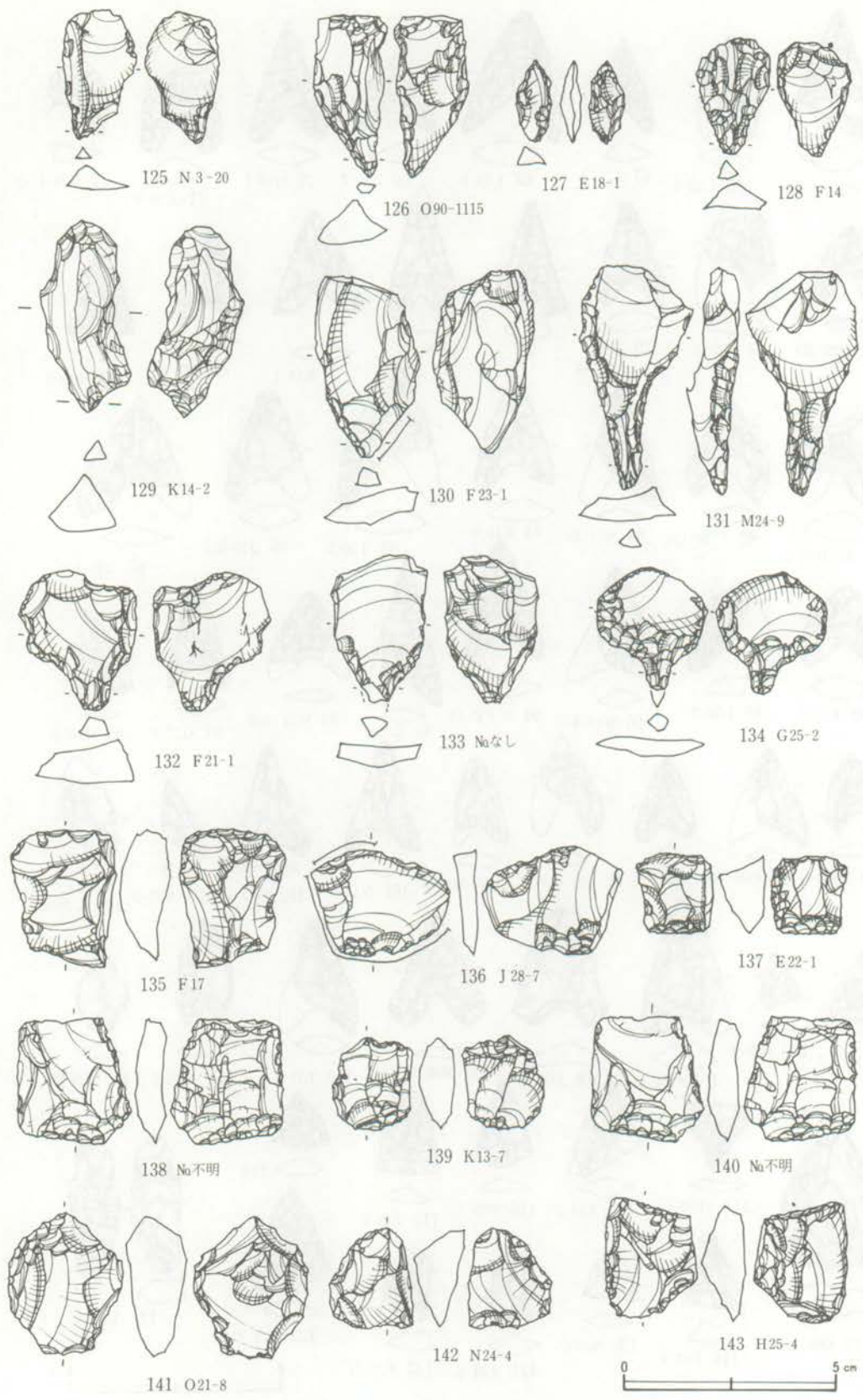
第316図 石器 (1)



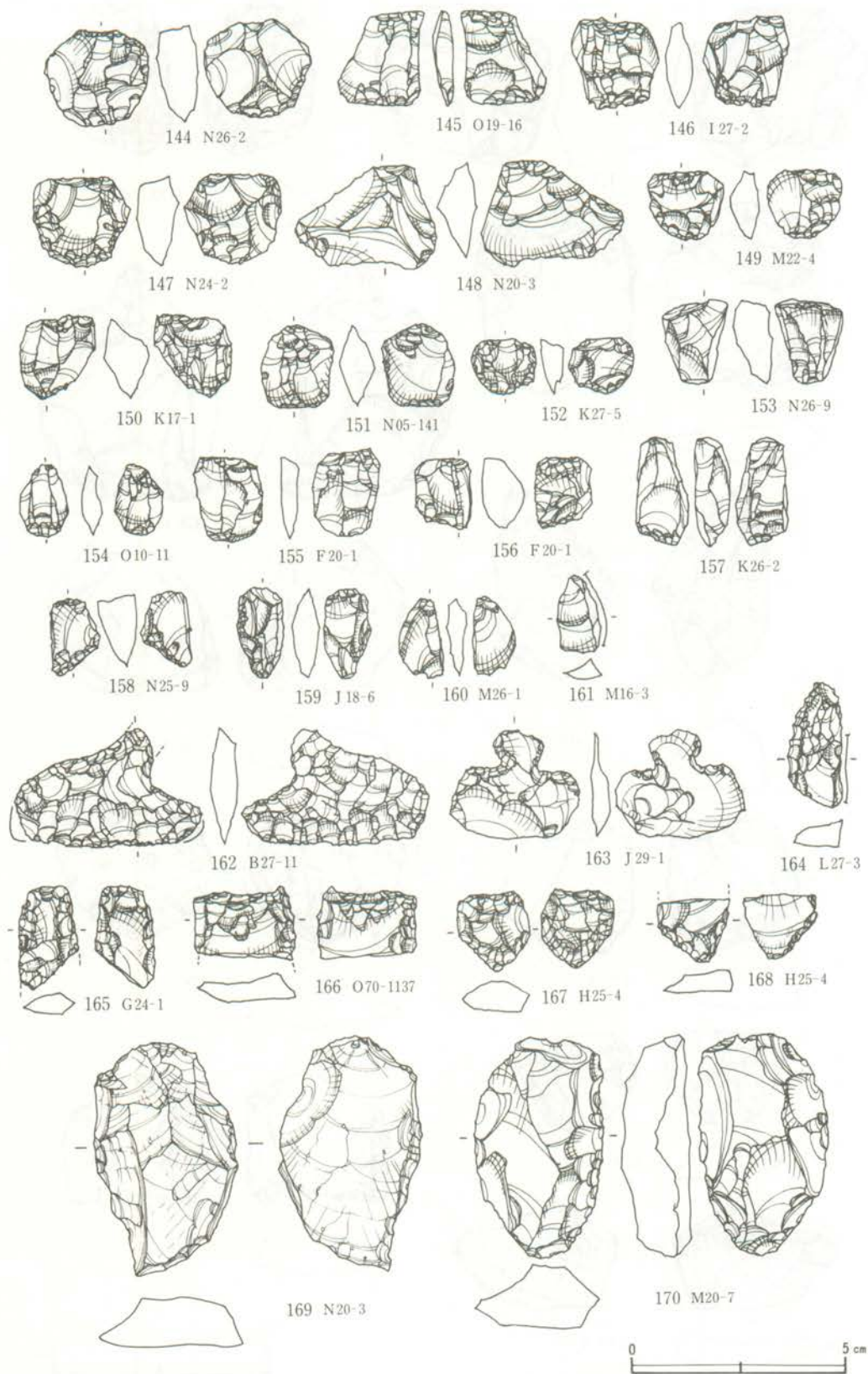
第317図 石器 (2)



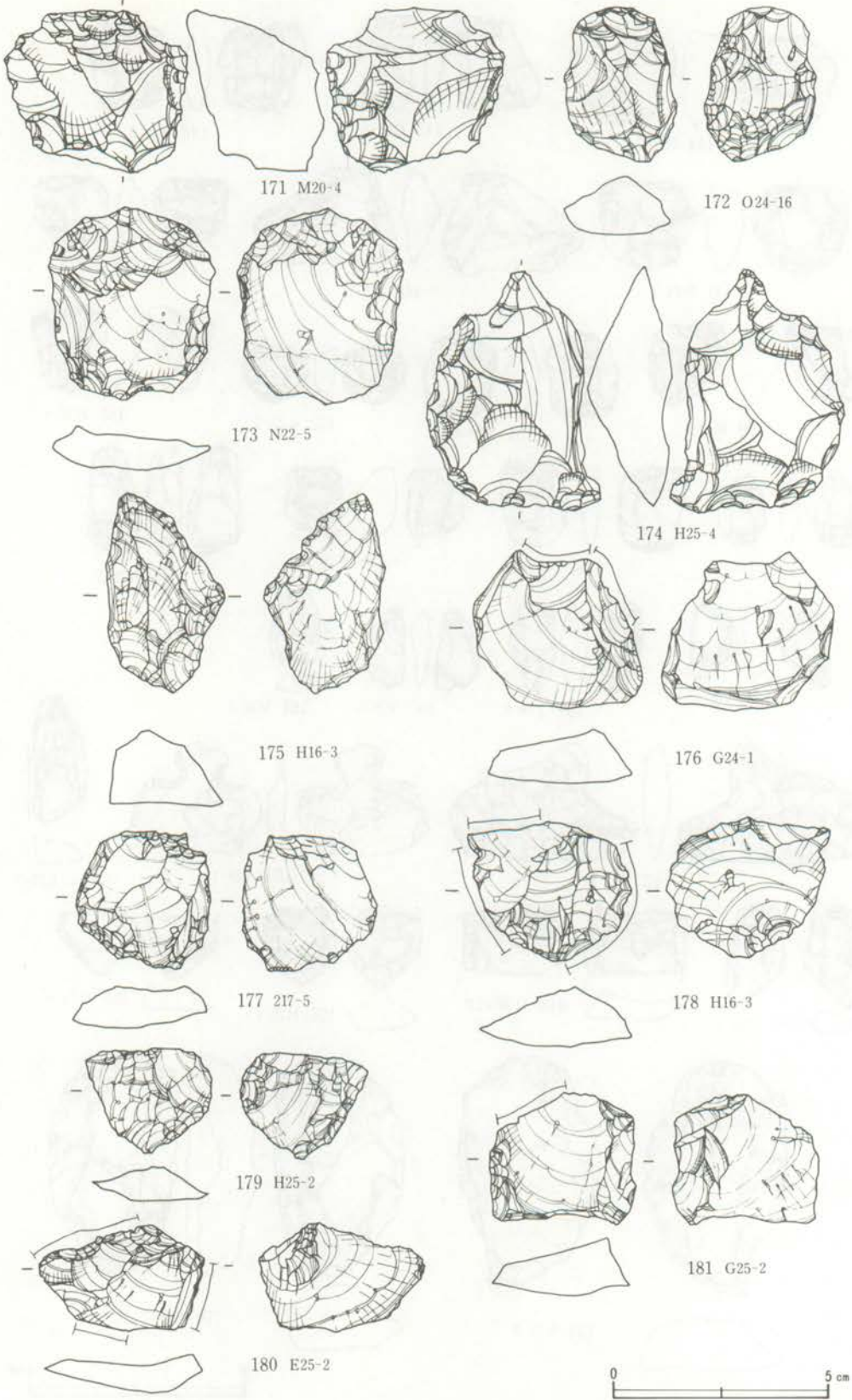
第318図 石器 (3)



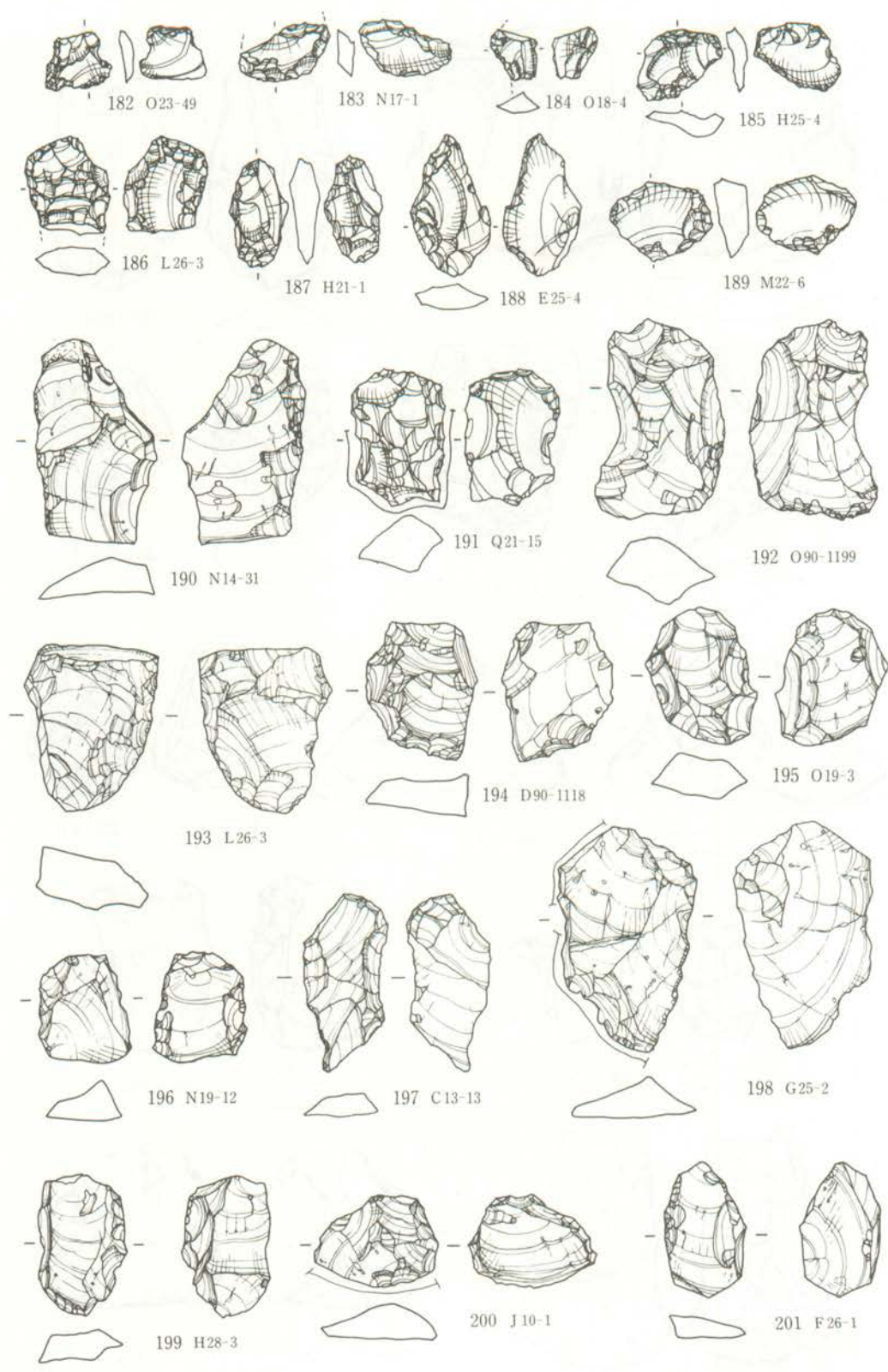
第319図 石器 (4)



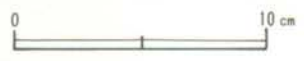
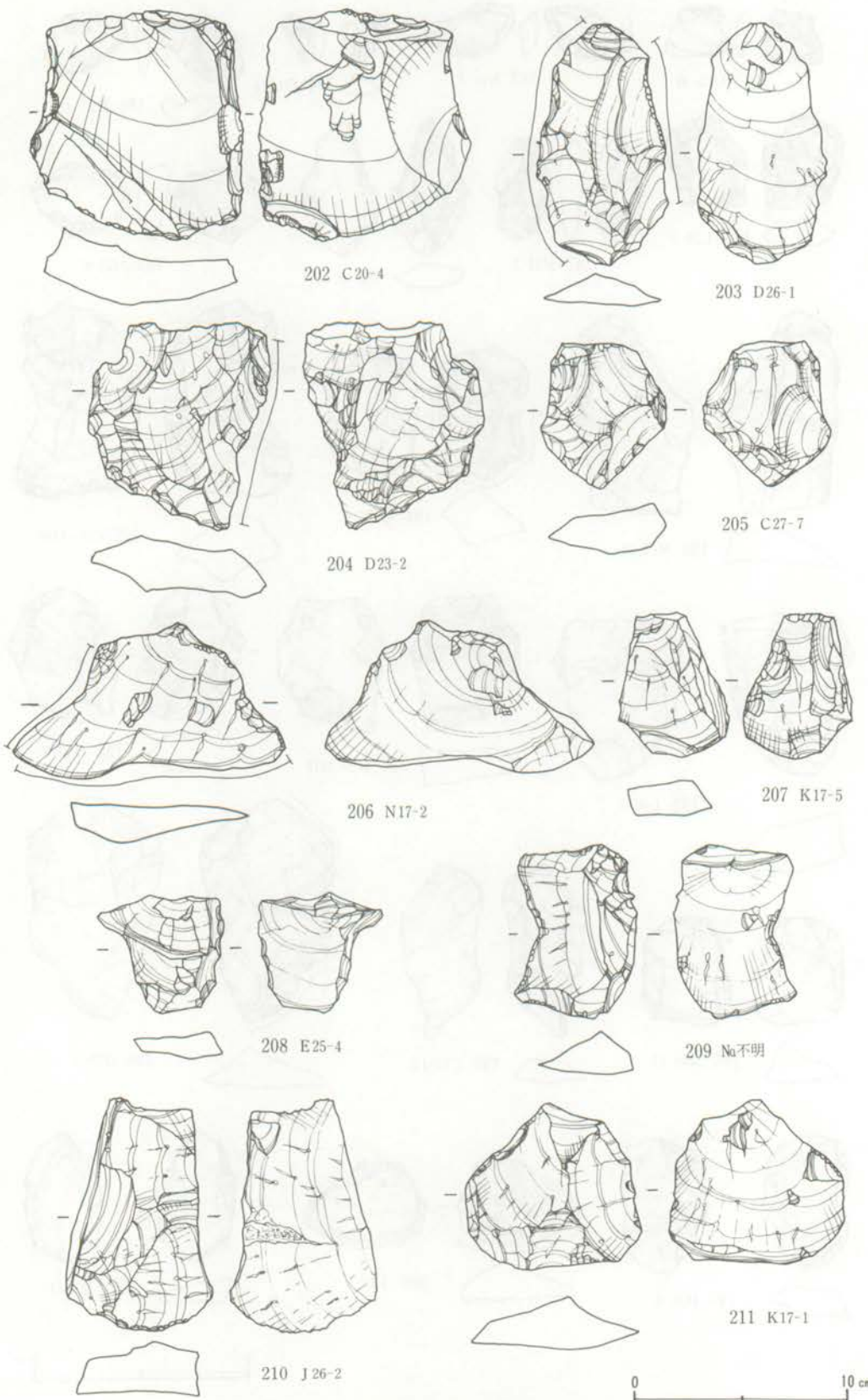
第320图 石器 (5)



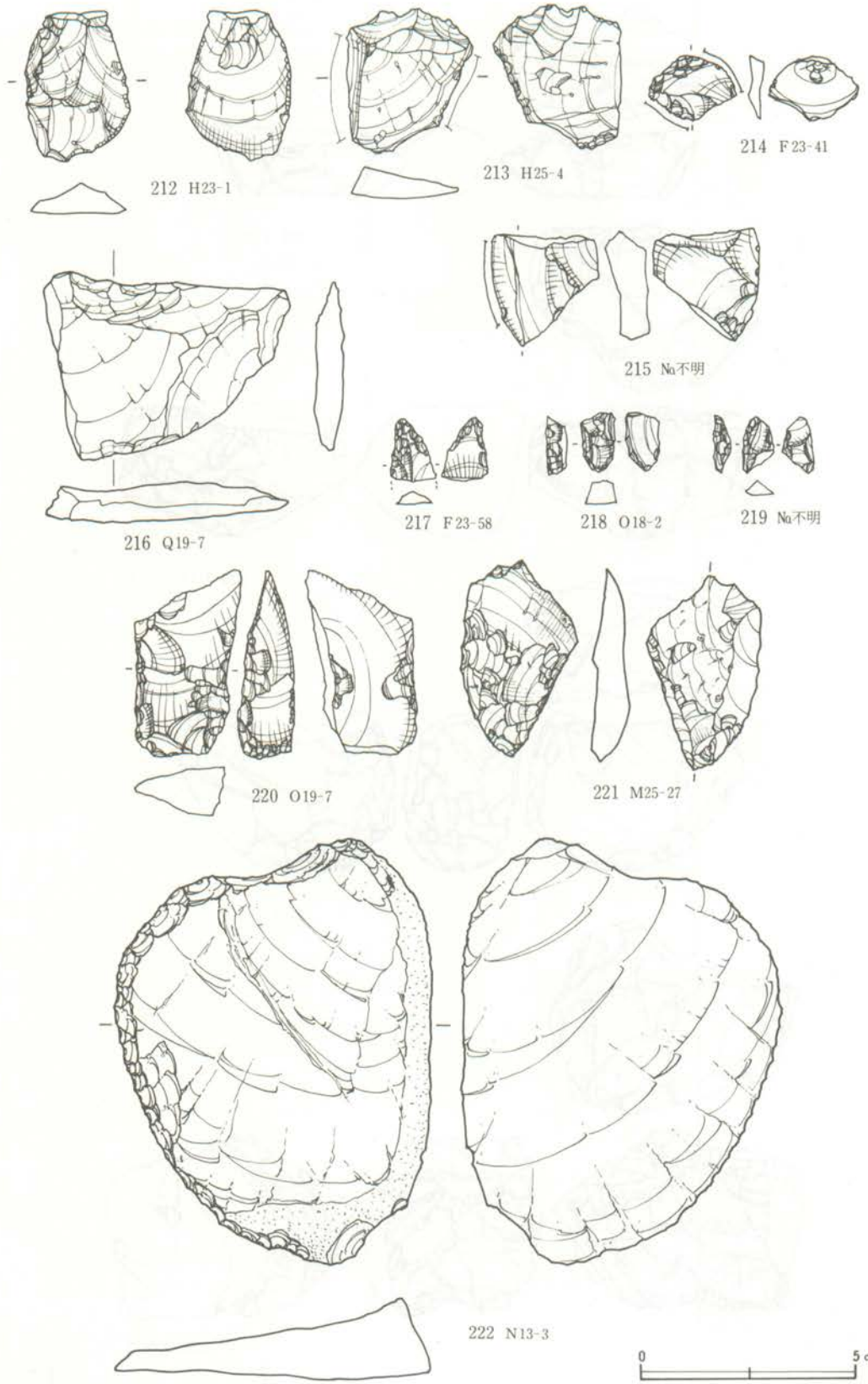
第321图 石器 (6)



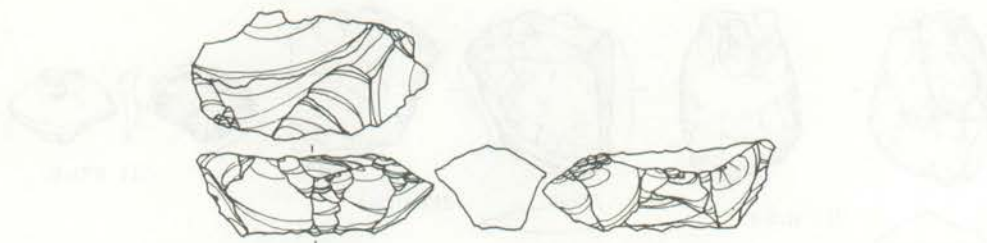
第322圖 石器 (7)



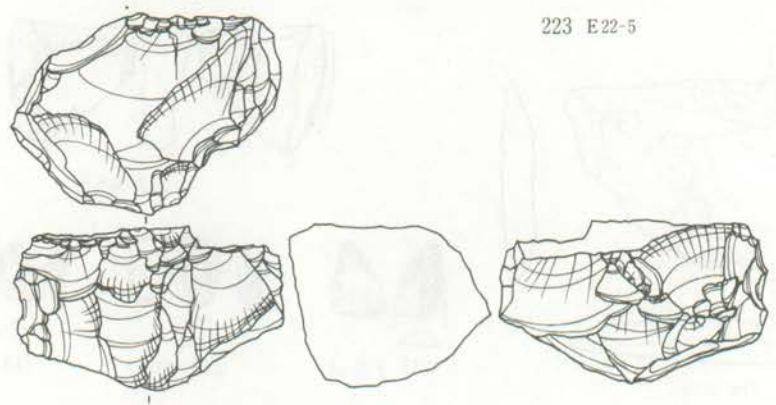
第323图 石器 (8)



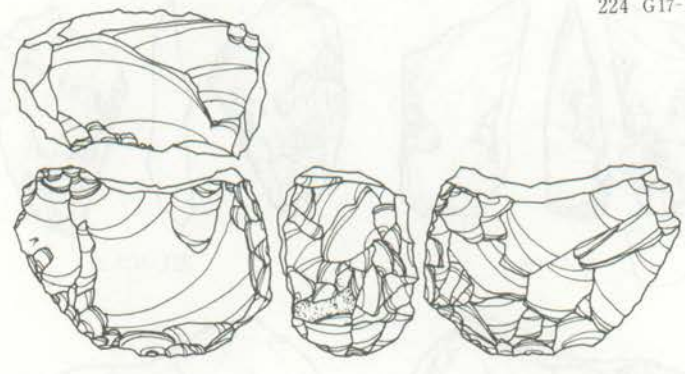
第324图 石器 (9)



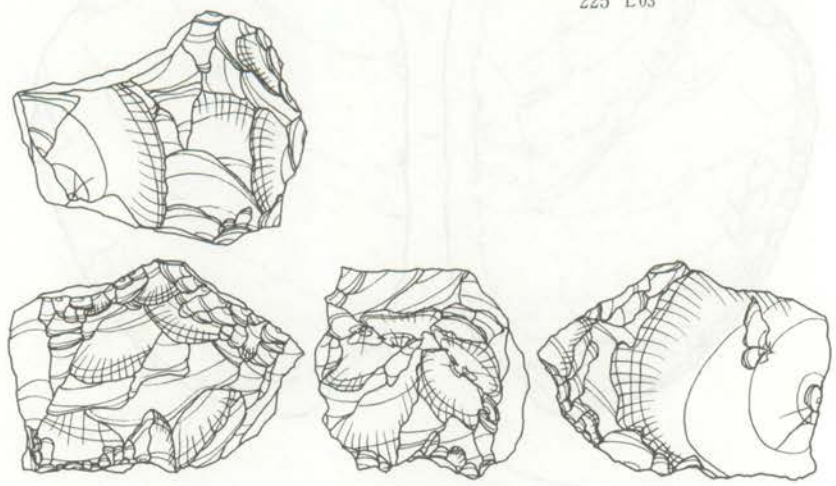
223 E22-5



224 G17-1



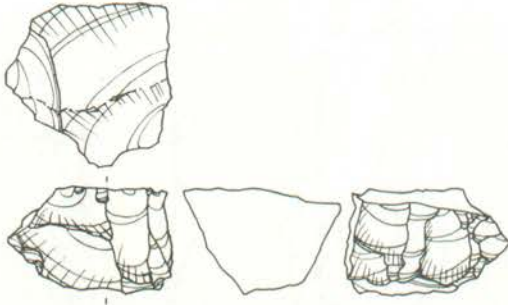
225 L03



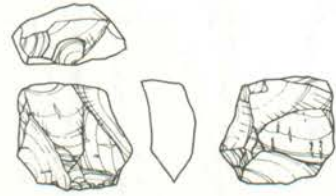
226 K06-3



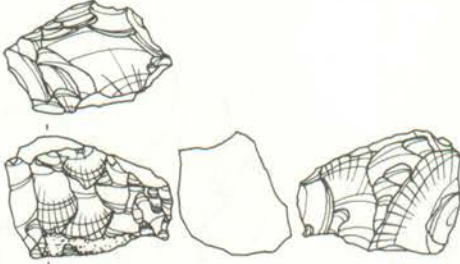
第325图 石器 (10)



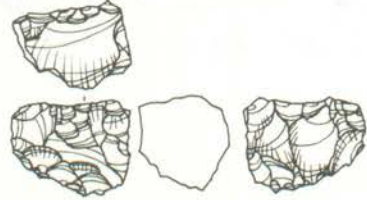
227 M19-4



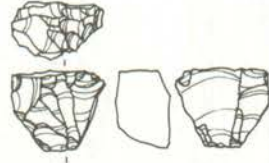
228 F50-72



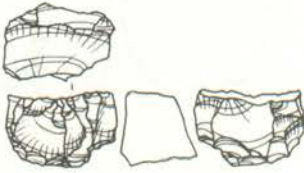
229 N24-116



230 O19-12



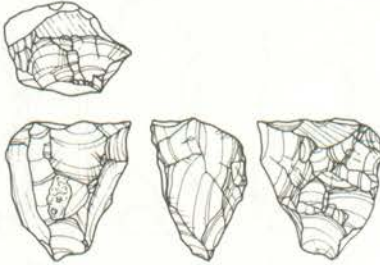
231 G25-4



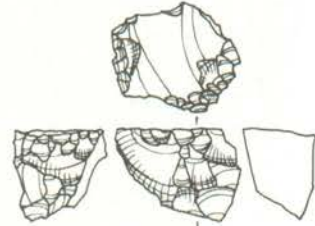
232 P20-4



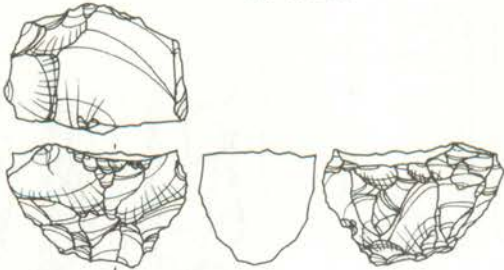
233 Q7-3



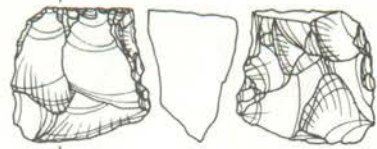
234 H10-56



235 N23-10



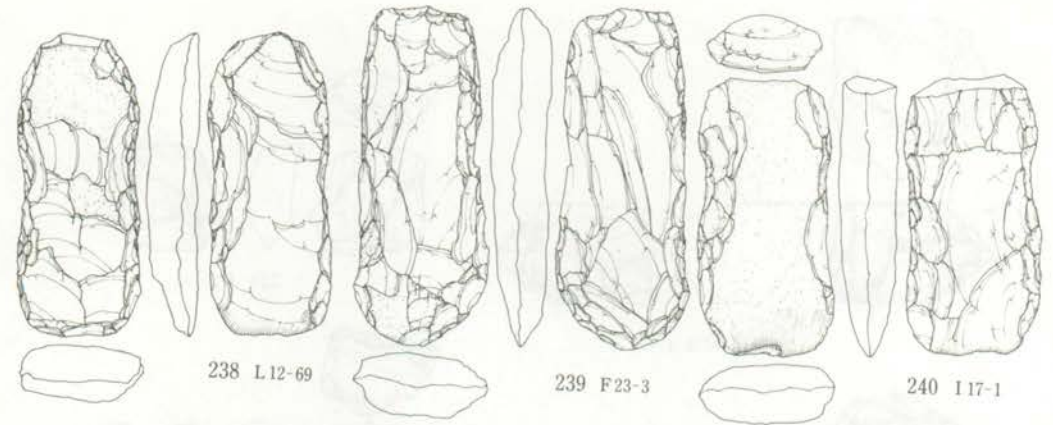
236 No. 4



237 L23-1



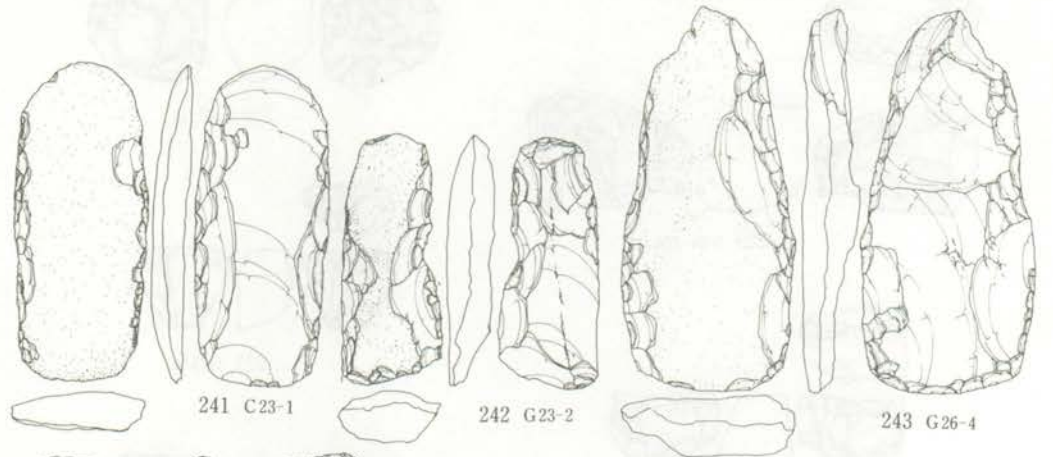
第326図 石器 (11)



238 L12-69

239 F23-3

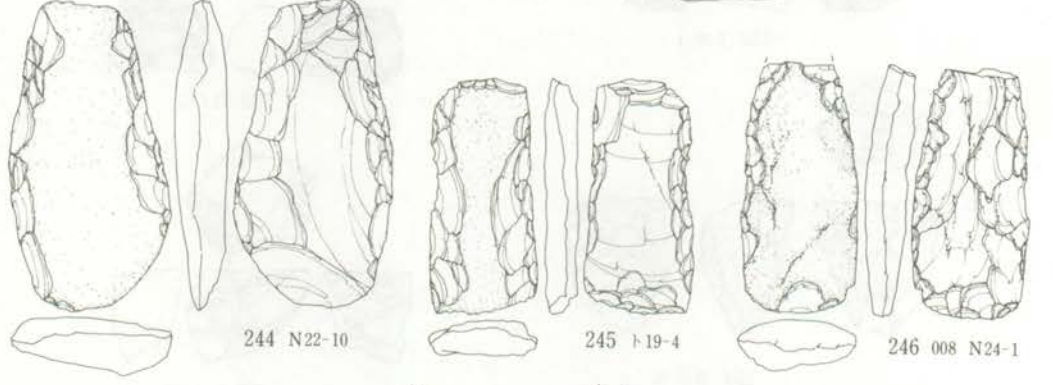
240 I17-1



241 C23-1

242 G23-2

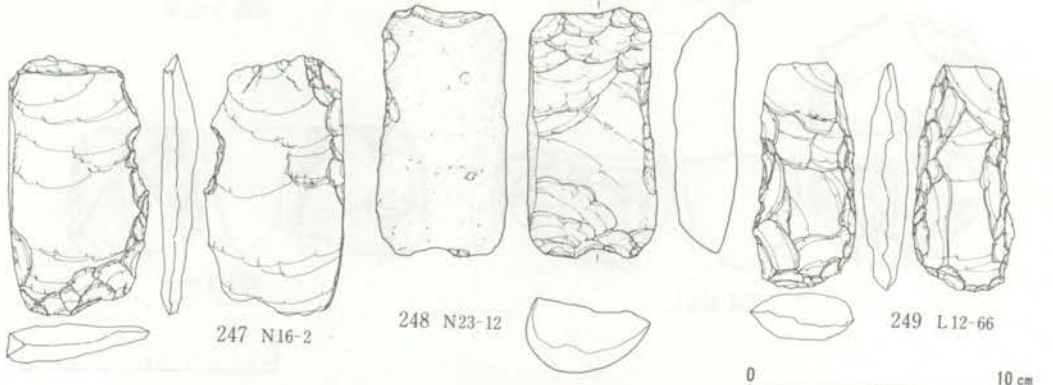
243 G26-4



244 N22-10

245 I19-4

246 008 N24-1



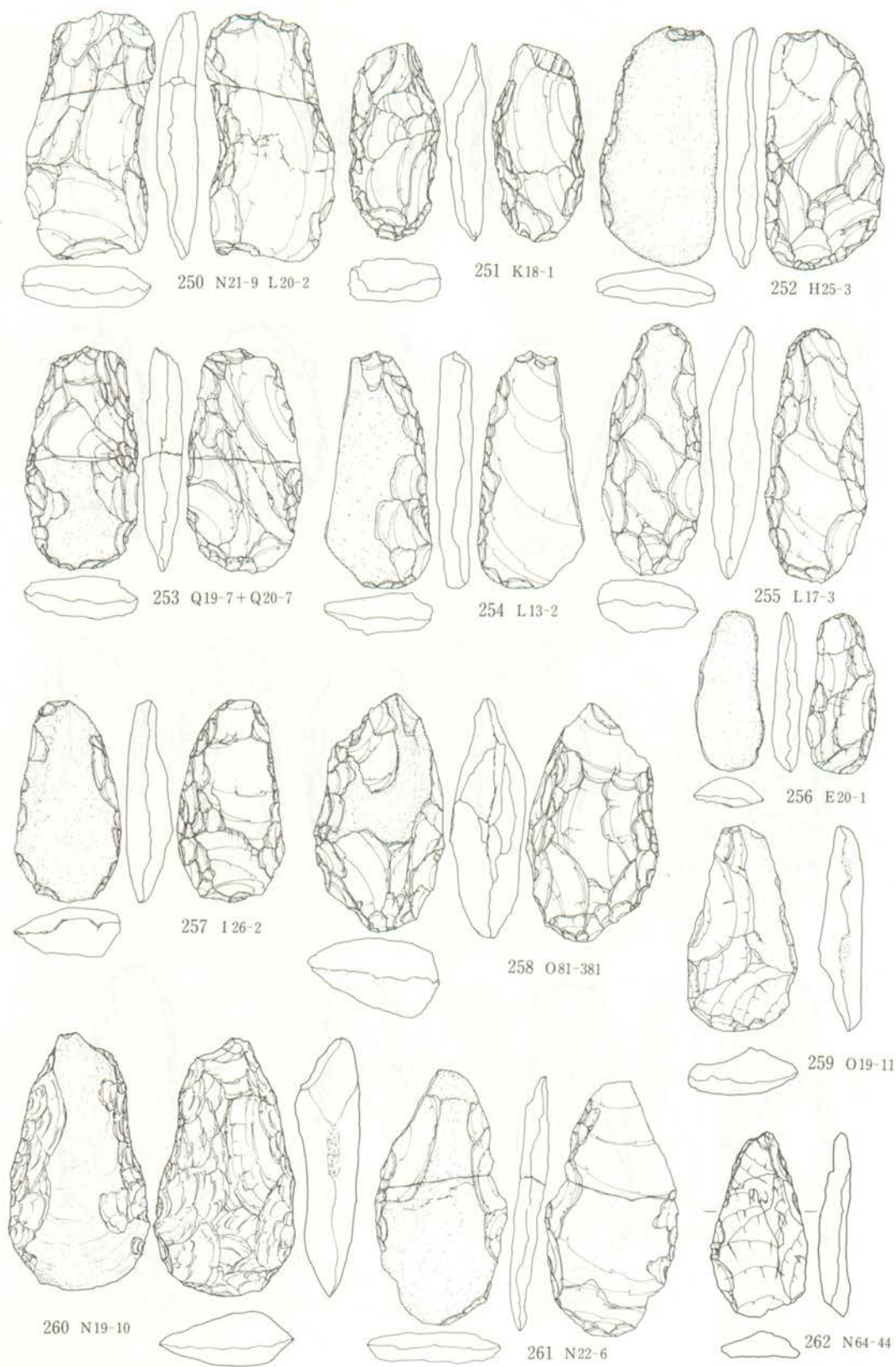
247 N16-2

248 N23-12

249 L12-66

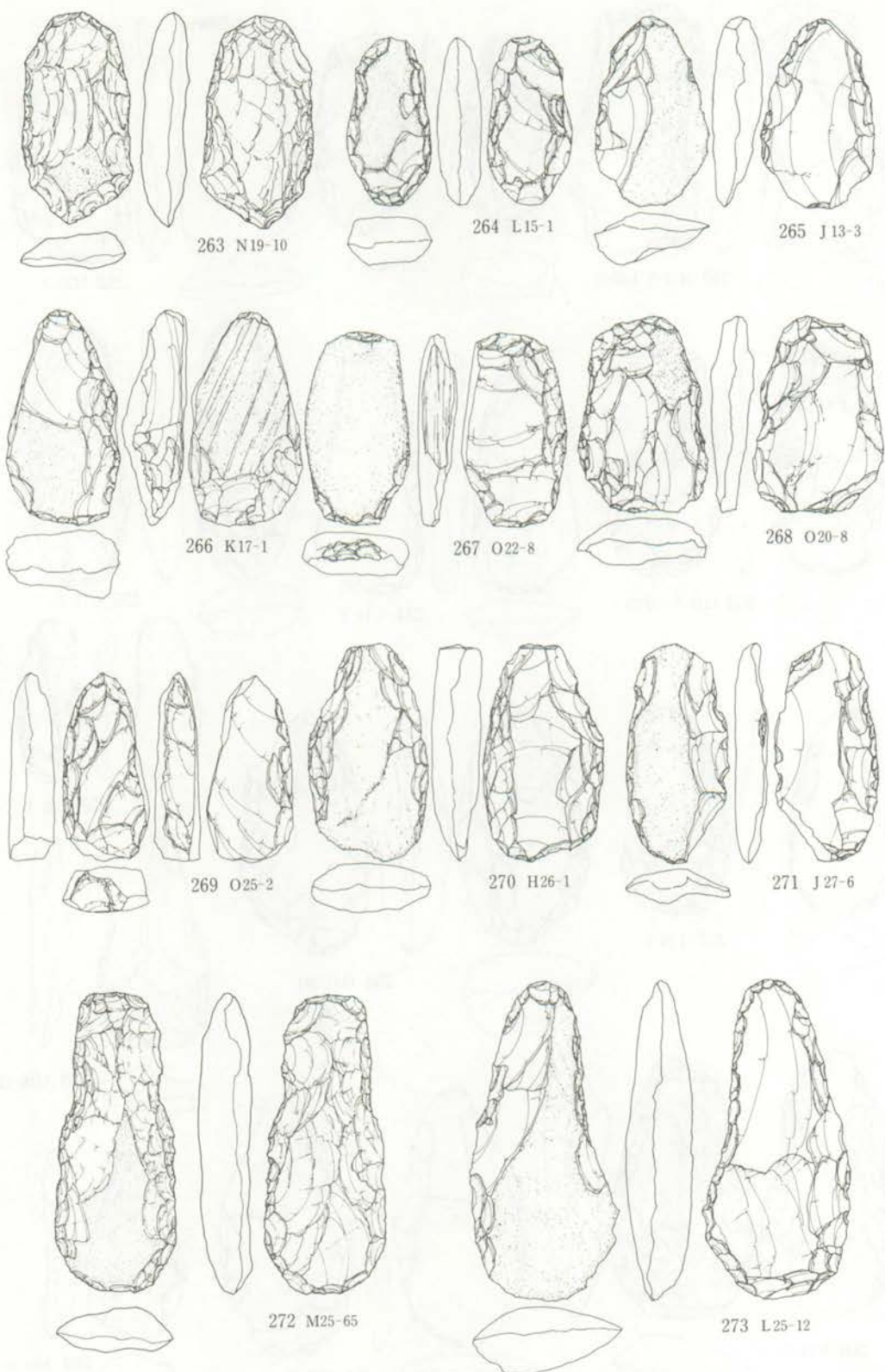
第327图 石器 (12)

0 10 cm

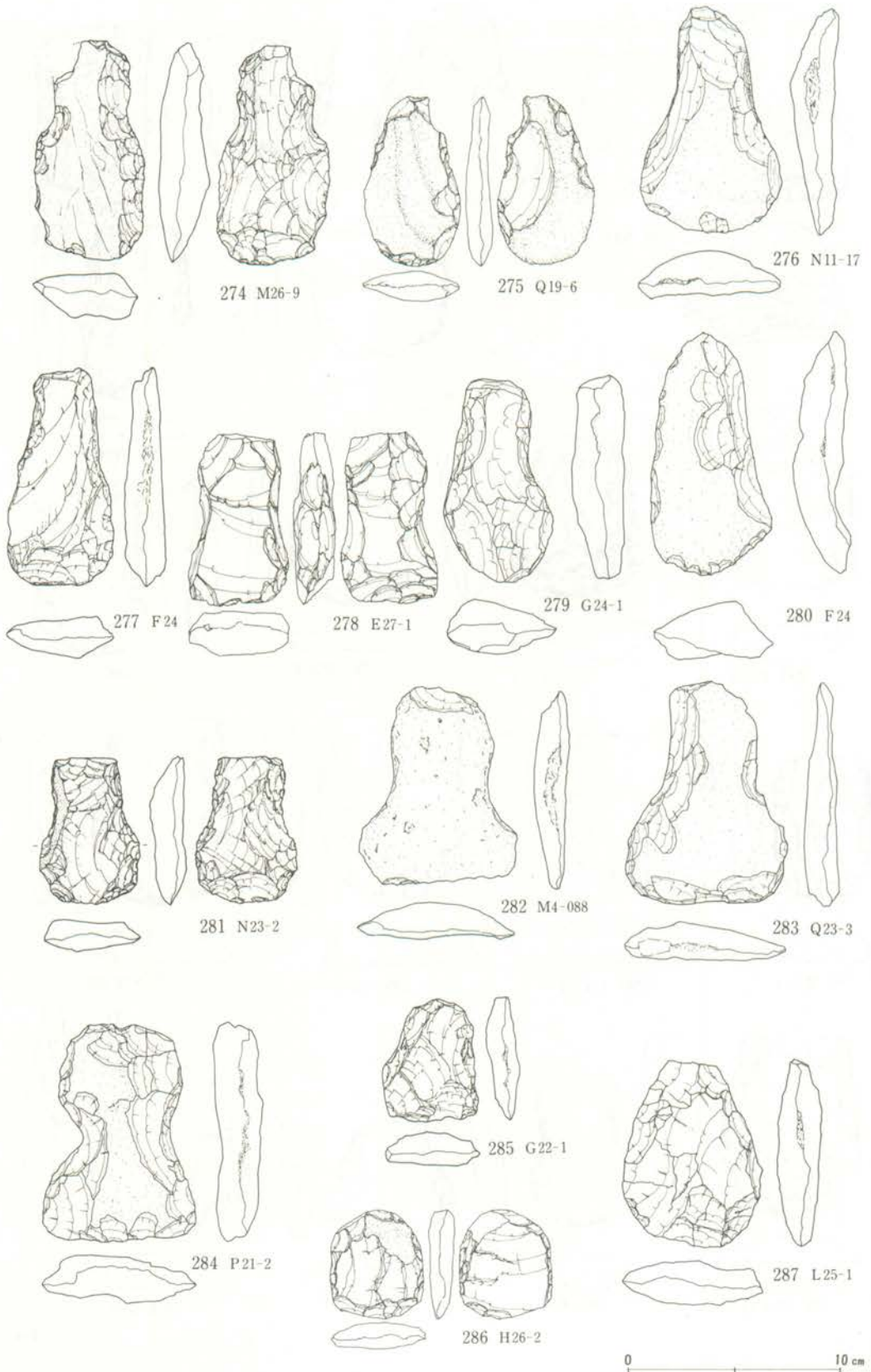


0 10cm

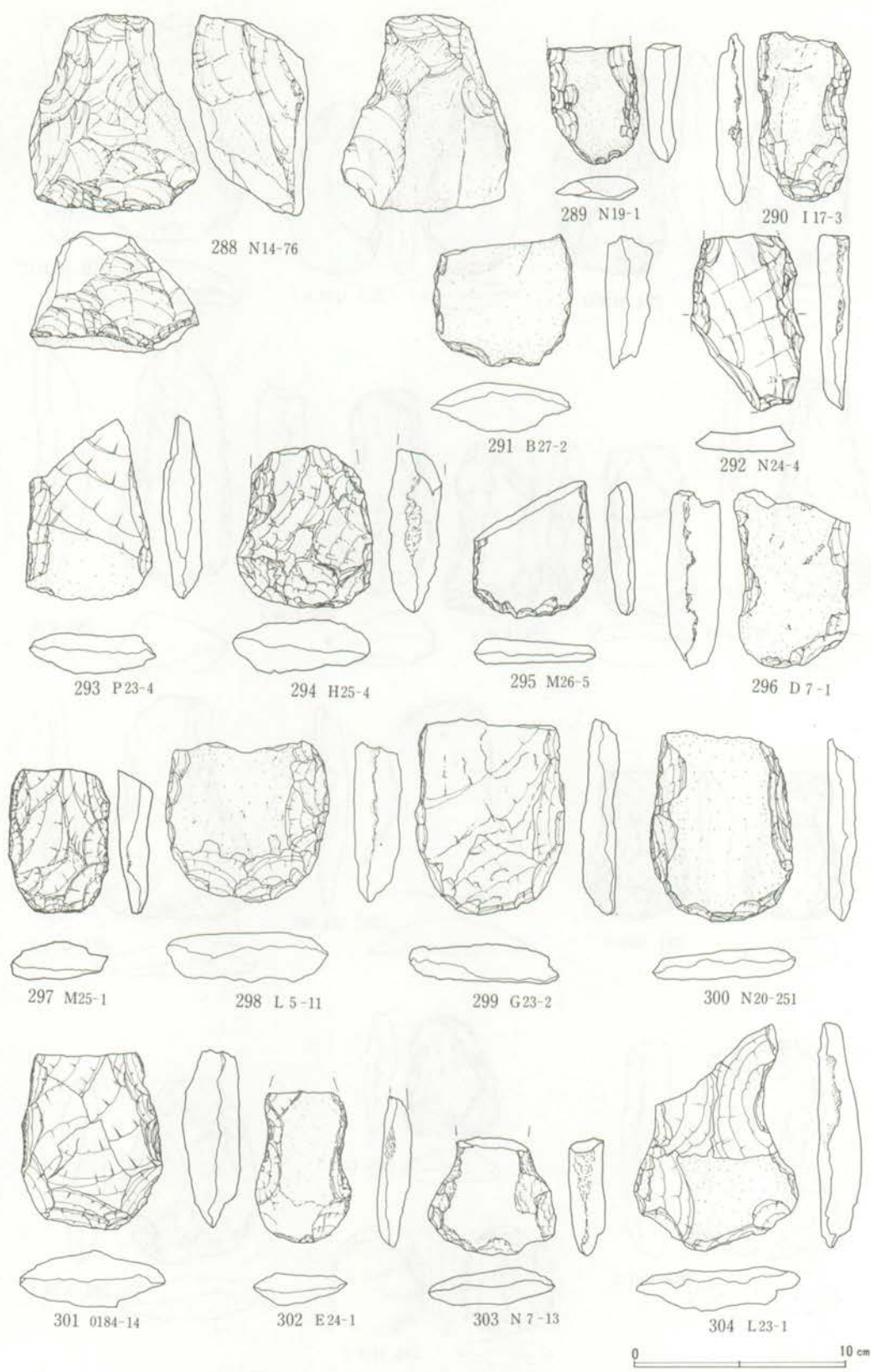
第328図 石器 (13)



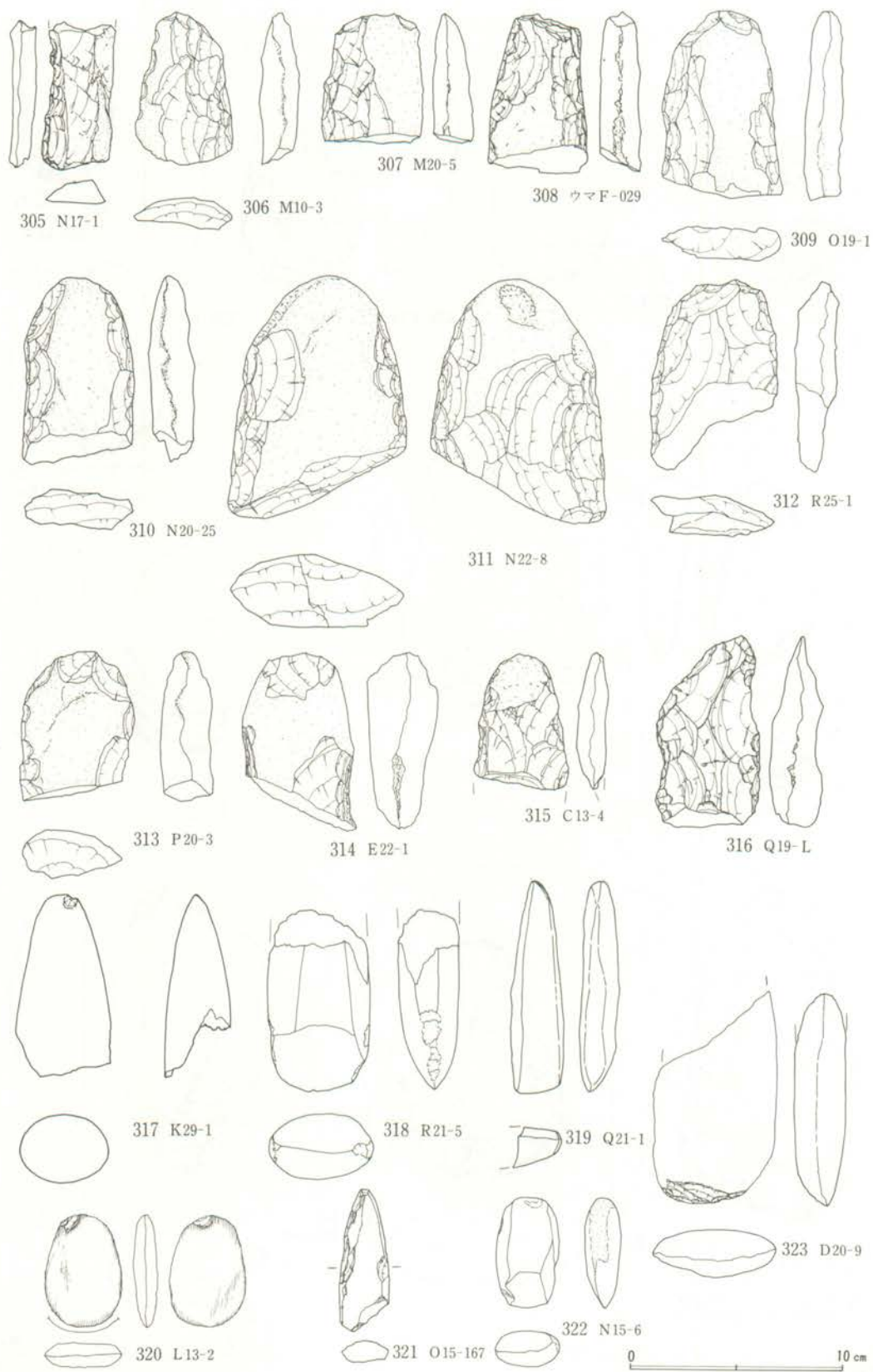
第329图 石器 (14)



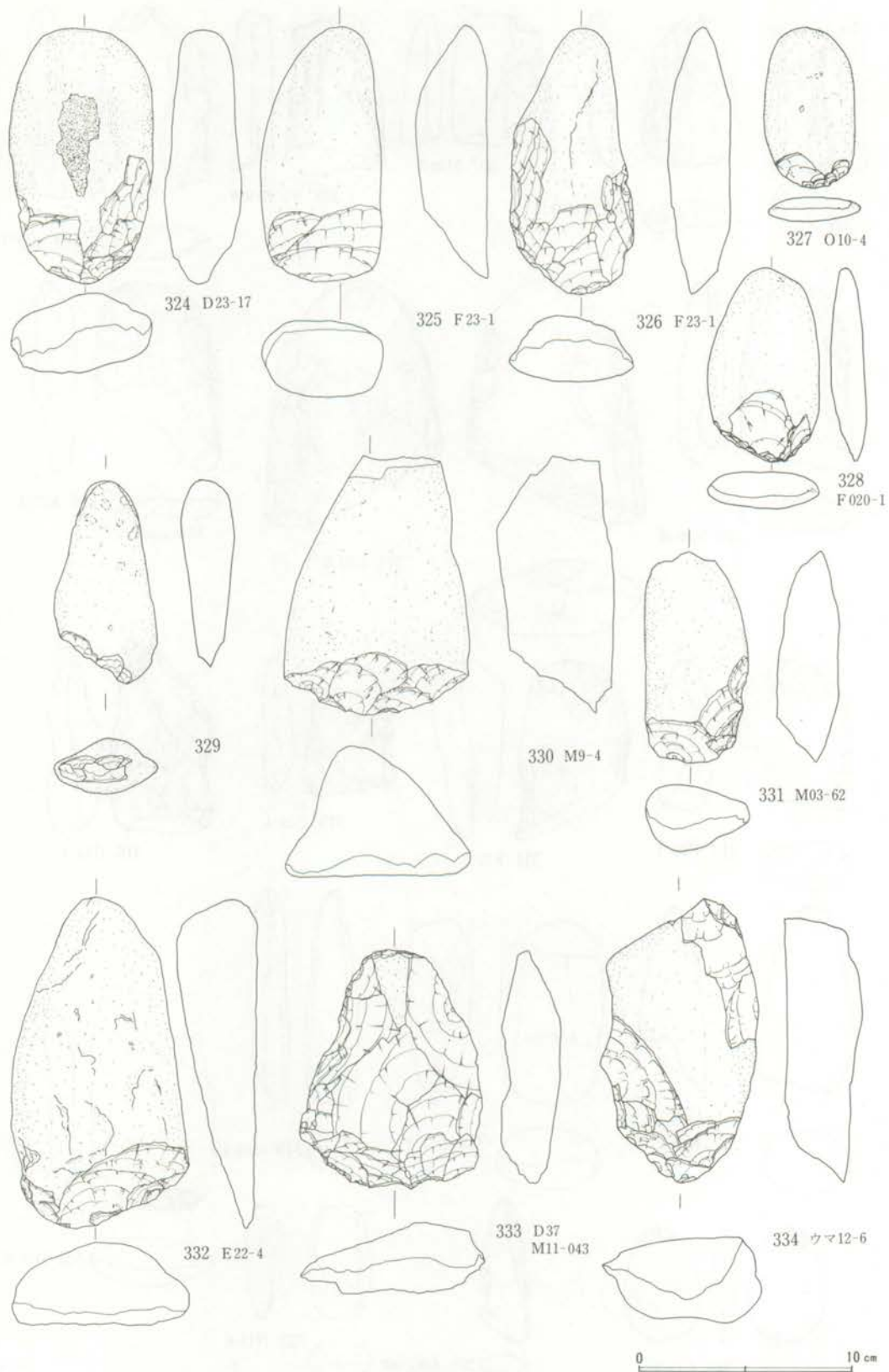
第330圖 石器 (15)



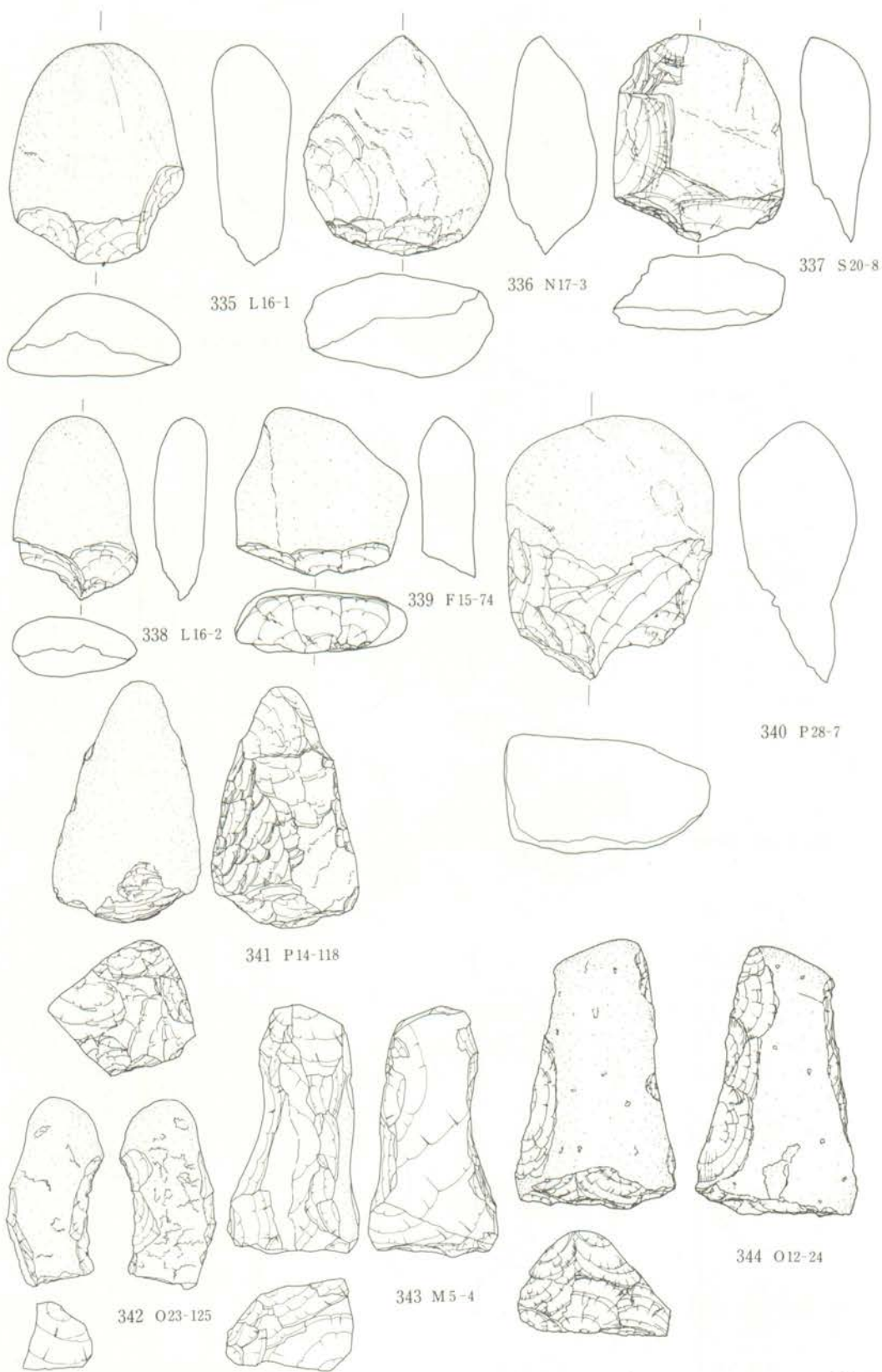
第331图 石器 (16)



第332図 石器 (17)

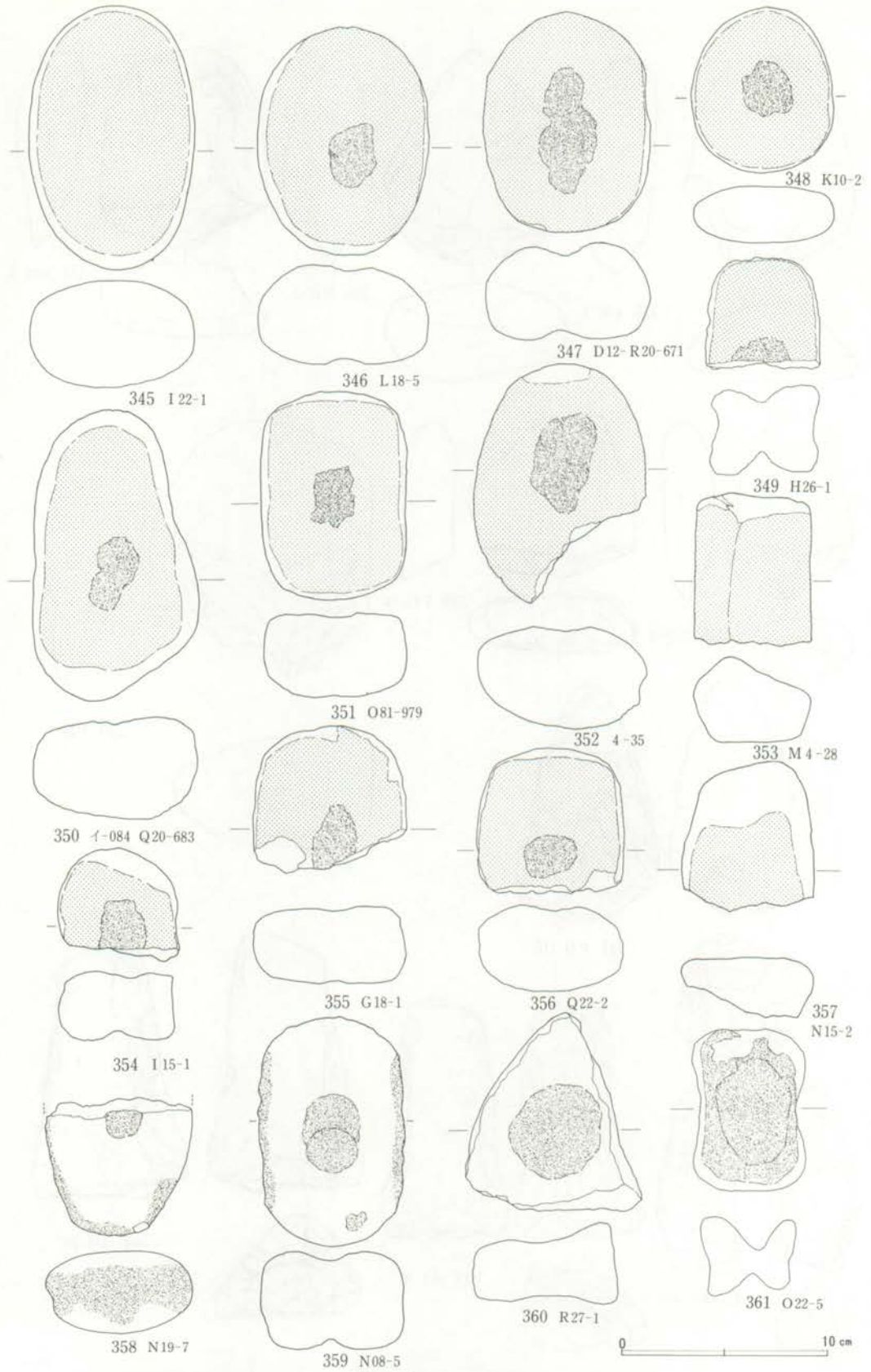


第333図 石器 (18)

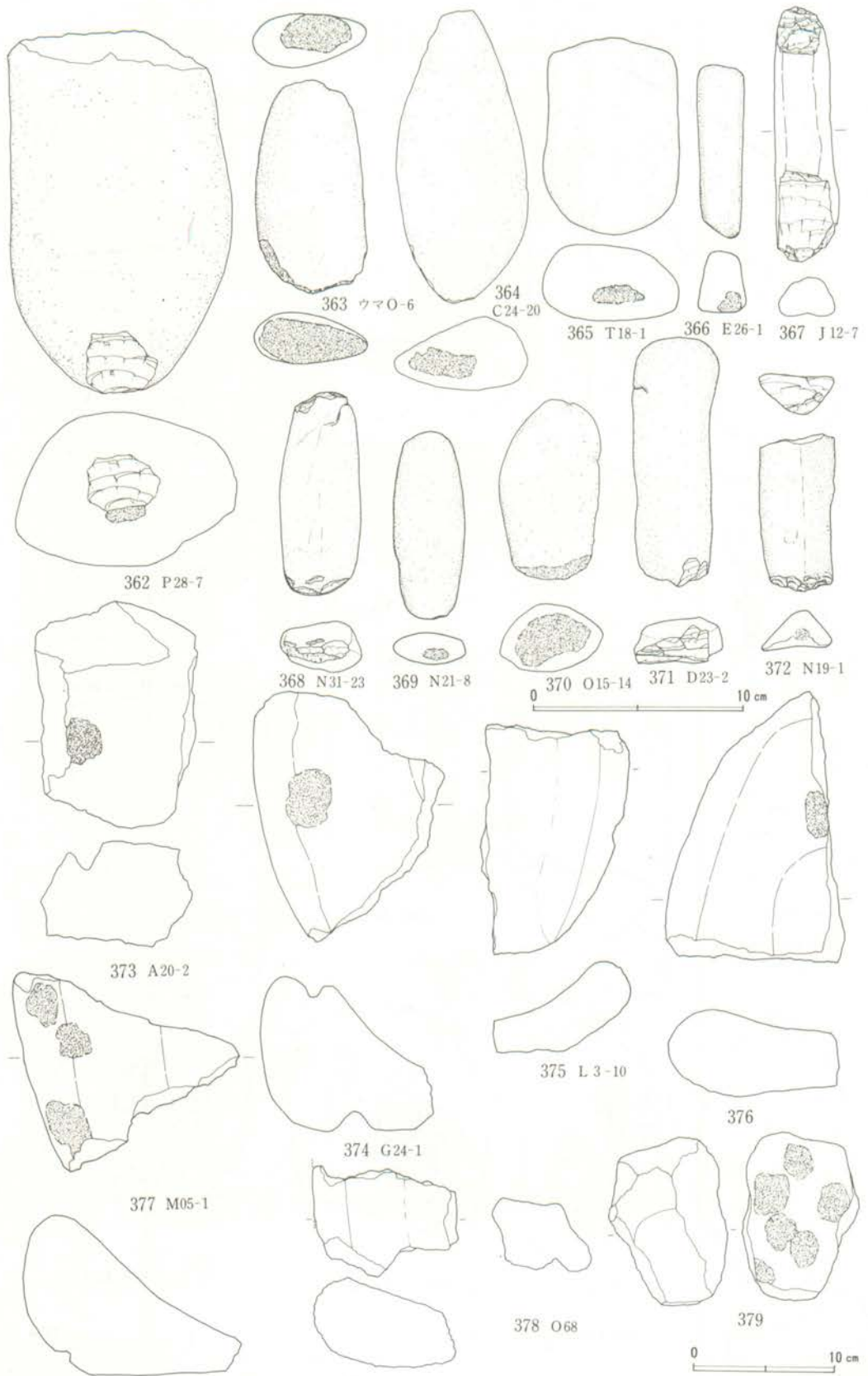


第334图 石器 (19)

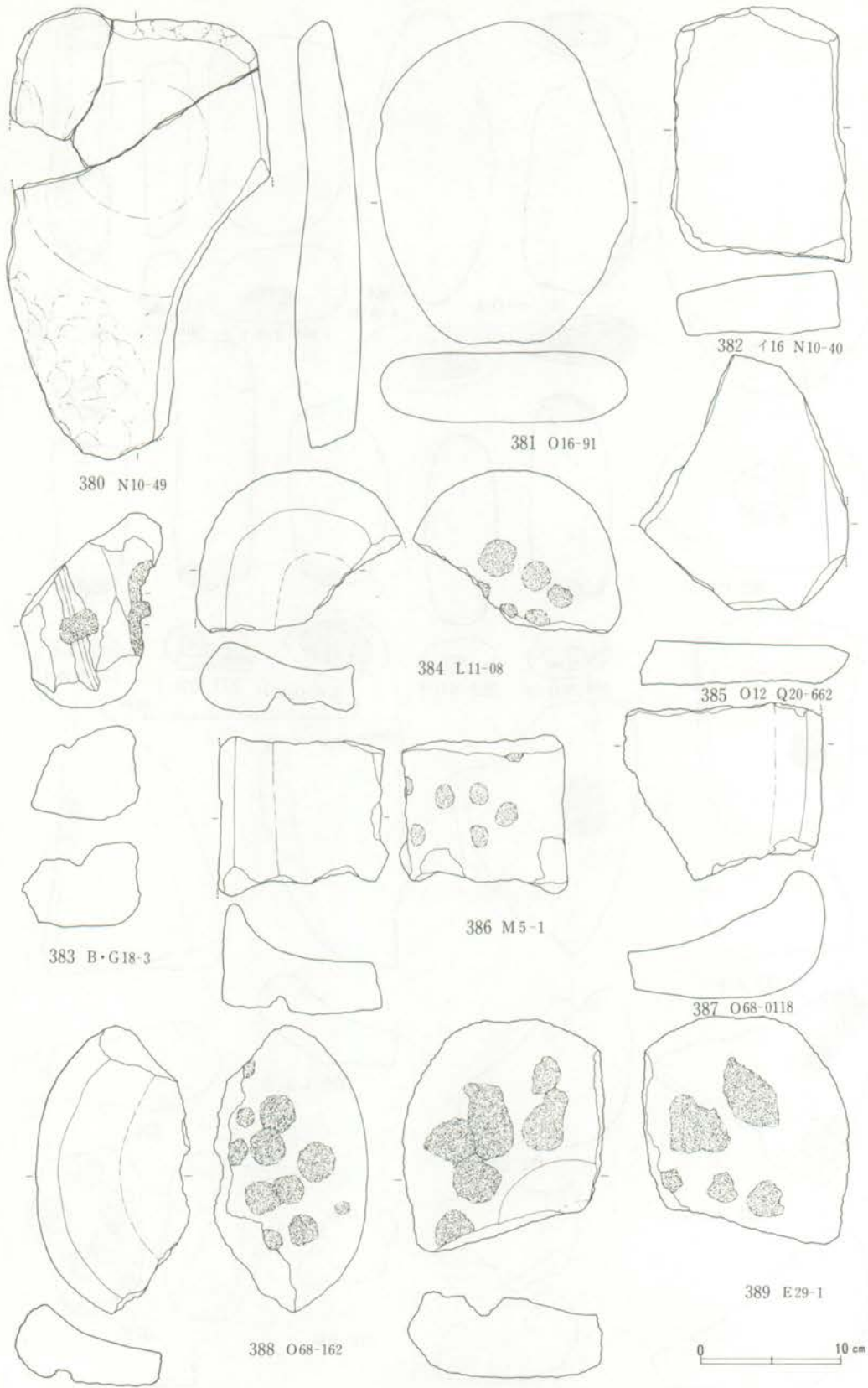
0 10 cm



第335图 石器 (20)



第336図 石器 (21)



第337图 石器 (22)

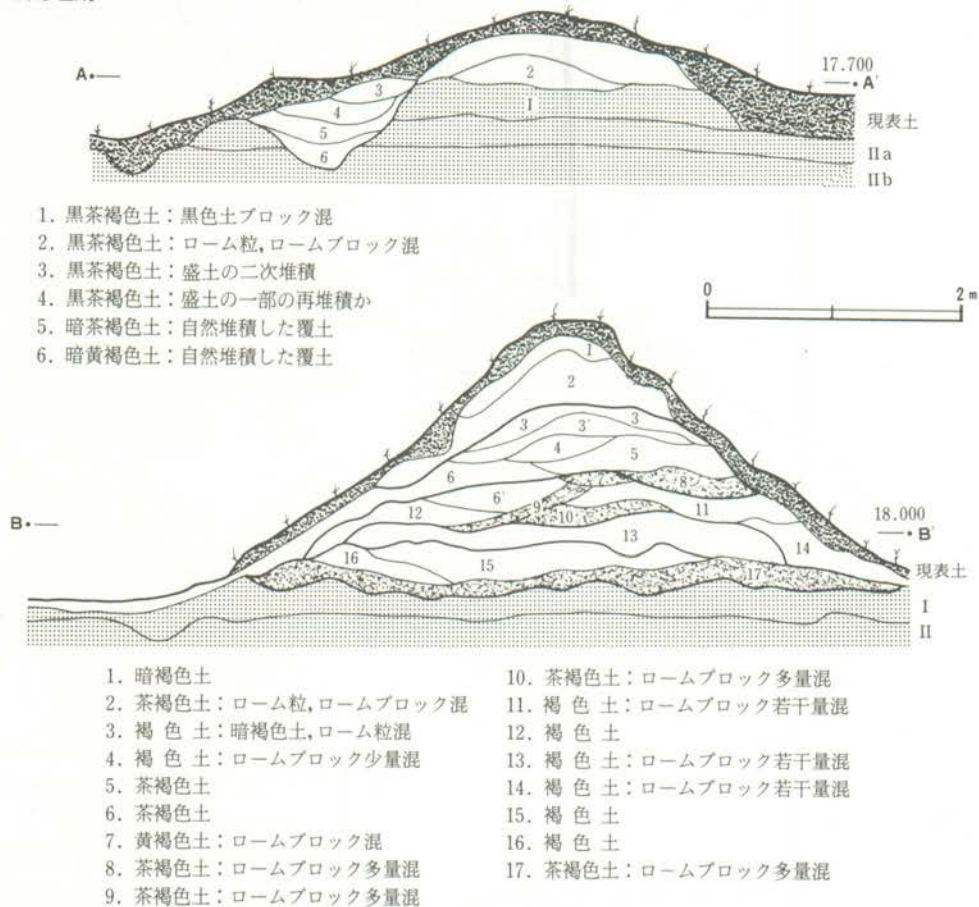
第3部 歷史時代

歴史時代の遺構は、古代の住居跡と近世の馬土手とが調査されたが、全般に古代の遺構は少ない。聖人塚遺跡001~004住居跡（第340~第343図）、中山新田I遺跡093住居跡（第344図）の5棟が古代の住居跡である。中山新田I遺跡の093住居跡に関しては、遺物の図化が間に合わなくなってしまったが、甕、坏各1個体が出土しており、8世紀後葉に帰属すると考えている。

近世の馬土手としては、元割遺跡及び聖人塚・中田新田Iの各遺跡に認められた。元割遺跡の簡単な図面（第338・339図）のみ呈示しておく。

（田村・原田）

元割遺跡



第338図 元割遺跡馬土手土層断面

元割遺跡所在馬土手

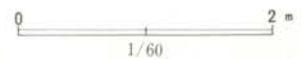
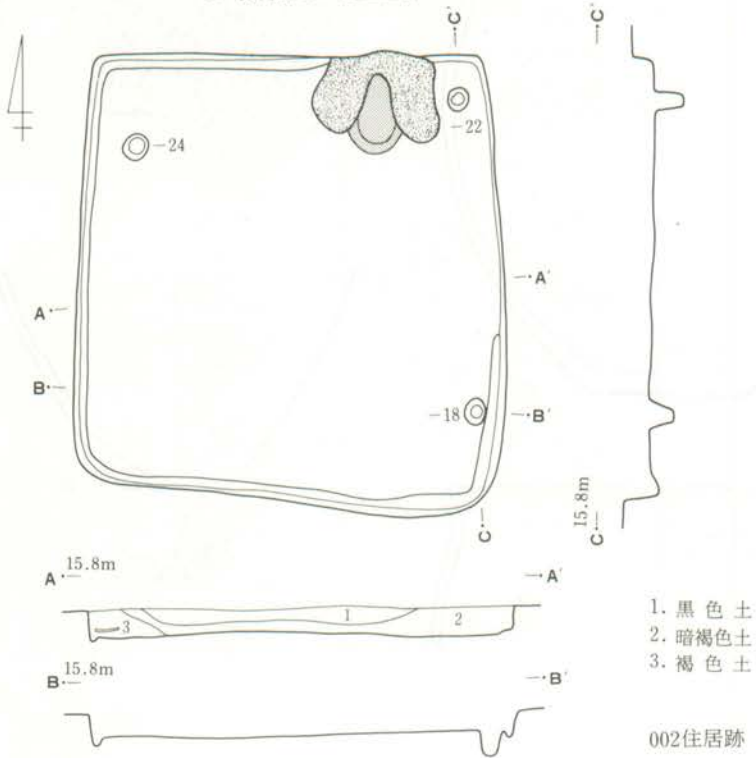
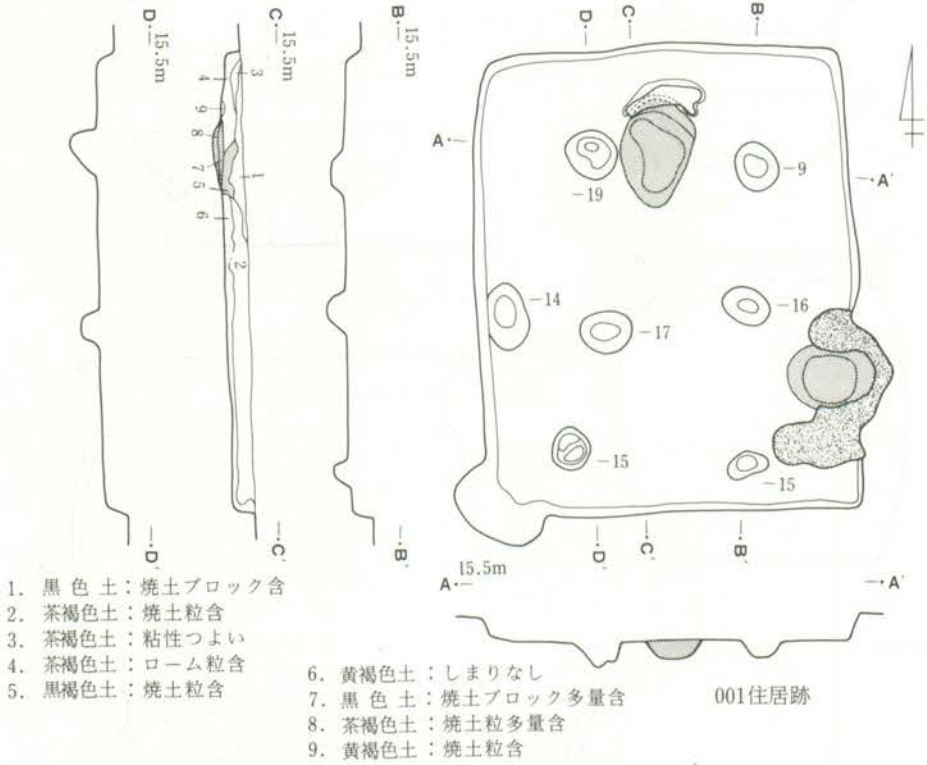
今回調査した馬土手は、国道16号線をはさんで東西に分けられる。西側の土手は低く扁平なもので、平行して浅い溝が伴う。土手の規模が貧弱なところから、享保八年（1723年）以降の「新土手」であろう。東側の土手はV字状に屈曲した展開を見せるが、「古土手」に比して規模は小さく、また二重土手の構造を示さないところから、やはり「新土手」と考えられる。なお、東西の土手が連続したものなら、やはりV字状屈曲を呈するので、「捕り込め」の一部である可能性がある。

（郷堀）

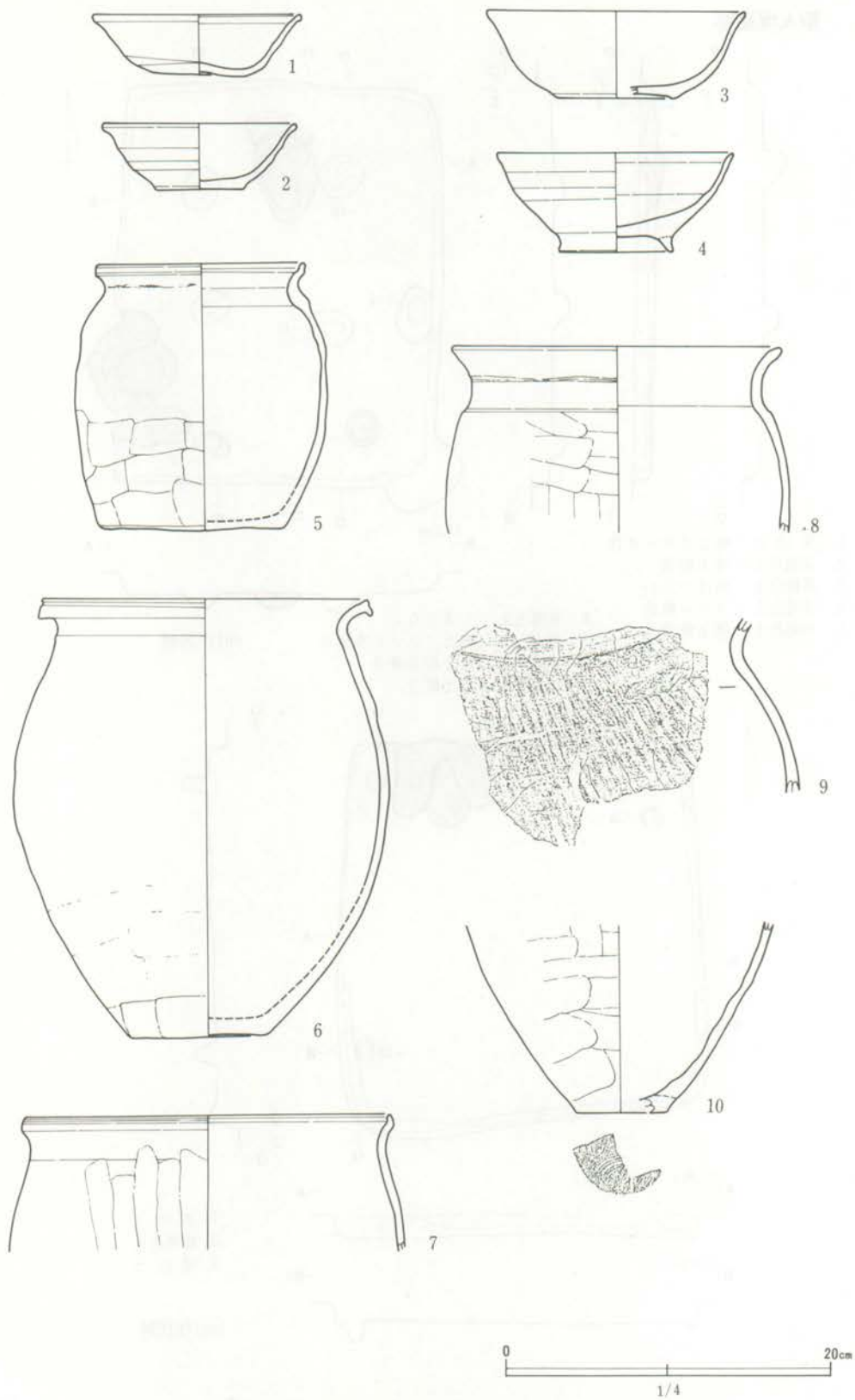


第339図 元割遺跡の馬土手(網をかけてある部分)

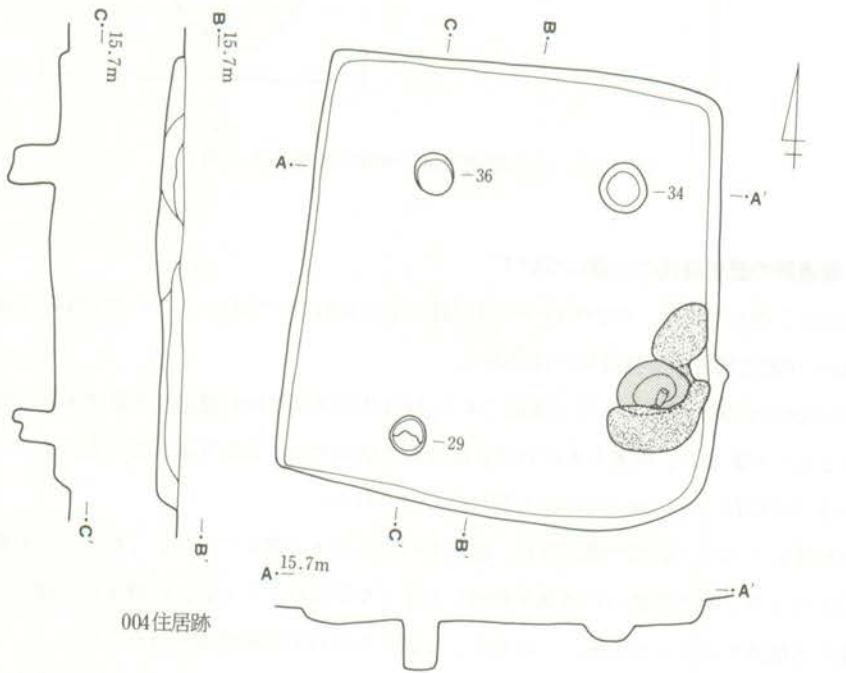
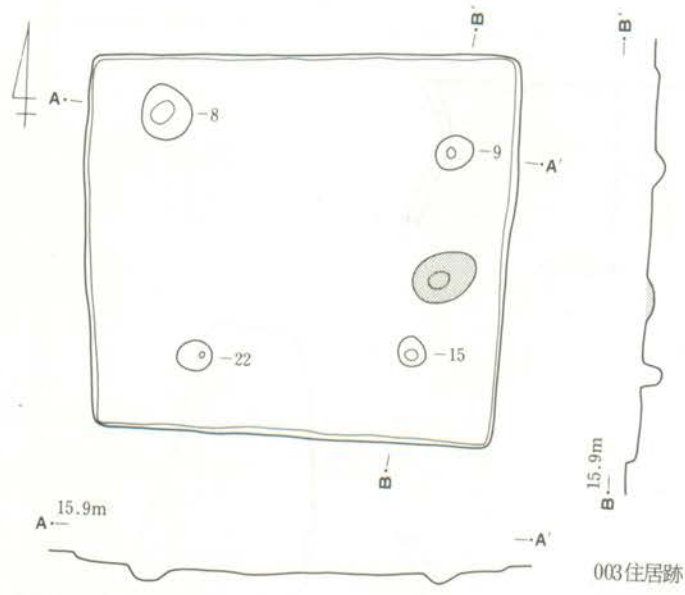
聖人塚遺跡



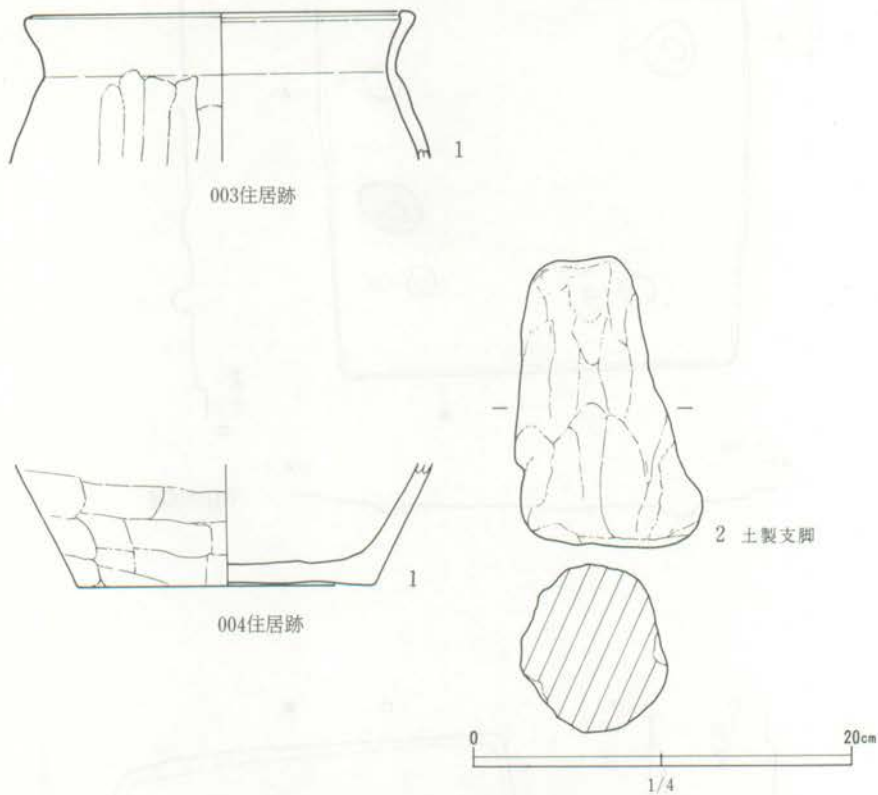
第340図 聖人塚遺跡001・002住居跡



第341図 聖人塚遺跡002住居跡出土土器



第342図 聖人塚遺跡003・004住居跡



第343図 聖人塚遺跡003・004住居跡出土土器

聖人塚遺跡の歴史時代の土器について

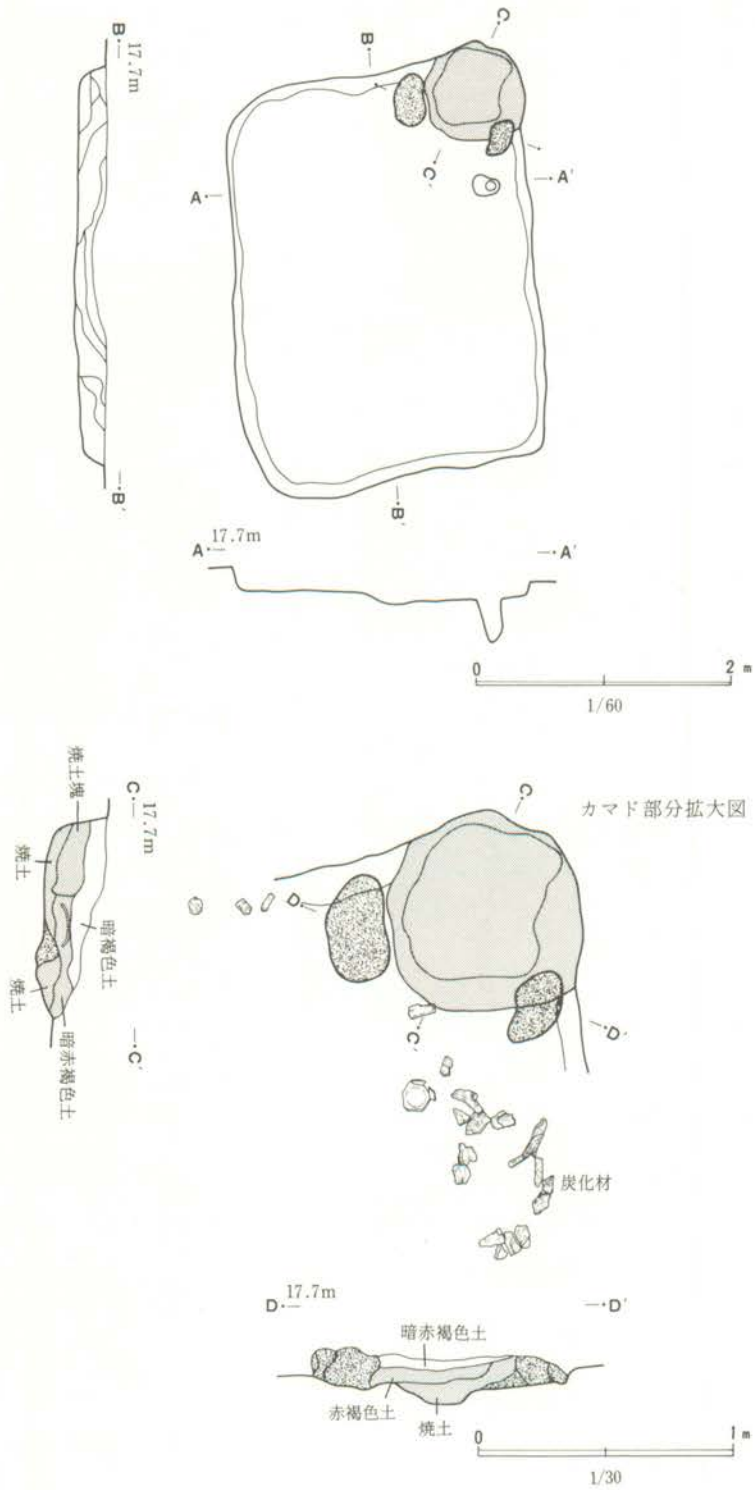
今回図示し得た遺物は、002・003・004住居跡出土の資料だけであり、この中で良好な資料となるものは、僅かに002住居跡の一括資料だけである。

002住居跡の供膳形態はすべて土師器である。坏は体部下端に回転篋削りを施すものと回転糸切り無調整となるものがあるが、両者ともに口径は底径の2倍以上の法量値を示している。また、無台の碗、有台の碗は口径が14.5～16cmの比較的大振りのものである。

煮沸形態もすべて土師器で構成され、器形もバラエティに富んでいる。これらは小形甕、「コ」字状口縁を呈するもの、須恵器甕の口唇部を模倣したような形状を示すもの、口唇部が内傾して立ち上がるもの（甕の可能性もある）がある。この他に、小破片ながら須恵器甕も相伴している。

以上の土器群の年代であるが、供膳形態に須恵器が認められず、また土師器の供膳形態では器形、調整技法ともに9世紀段階の様相を強く残したものと、さらに後出的なものの両者が存在している。また、煮沸形態では、9世紀段階まで常陸・下総両地域で普遍的に見られる、口唇部をつまみ出し、胴下半部に細い篋磨きを加える甕が欠失している。これらの事から002住居跡の土器群は10世紀前半代の年代が考えられよう。また、003住居出土の土師器甕（甕の可能性あり）は口唇部が内側に曲接して突出するもので、これまでの常磐道関係の調査では10世紀を前後する時期以降に認められるものである。（郷堀）

中山新田 I 遺跡



第344図 中山新田 I 遺跡093住居跡

第4部 自然科学

第1章 中山新田 I 遺跡の花粉分析

A. 試料

分析試料は全て柱状試料で、第III層～第IX層までの合計14点である。第5表はこれらの試料の試料表である。

B. 分析方法

花粉分析工程は第344図による。

C. 分析結果及び考察

分析結果は検出された花粉・孢子化石総個体数を基数とする百分率で各試料における花粉、孢子化石の割合を算出し、主要な花粉・孢子についてはダイアグラムで表し、第345図として後掲した。

更に写真図版作成したので参照されたい。

今回の分析により、以下に列挙した花粉・孢子が検出された。

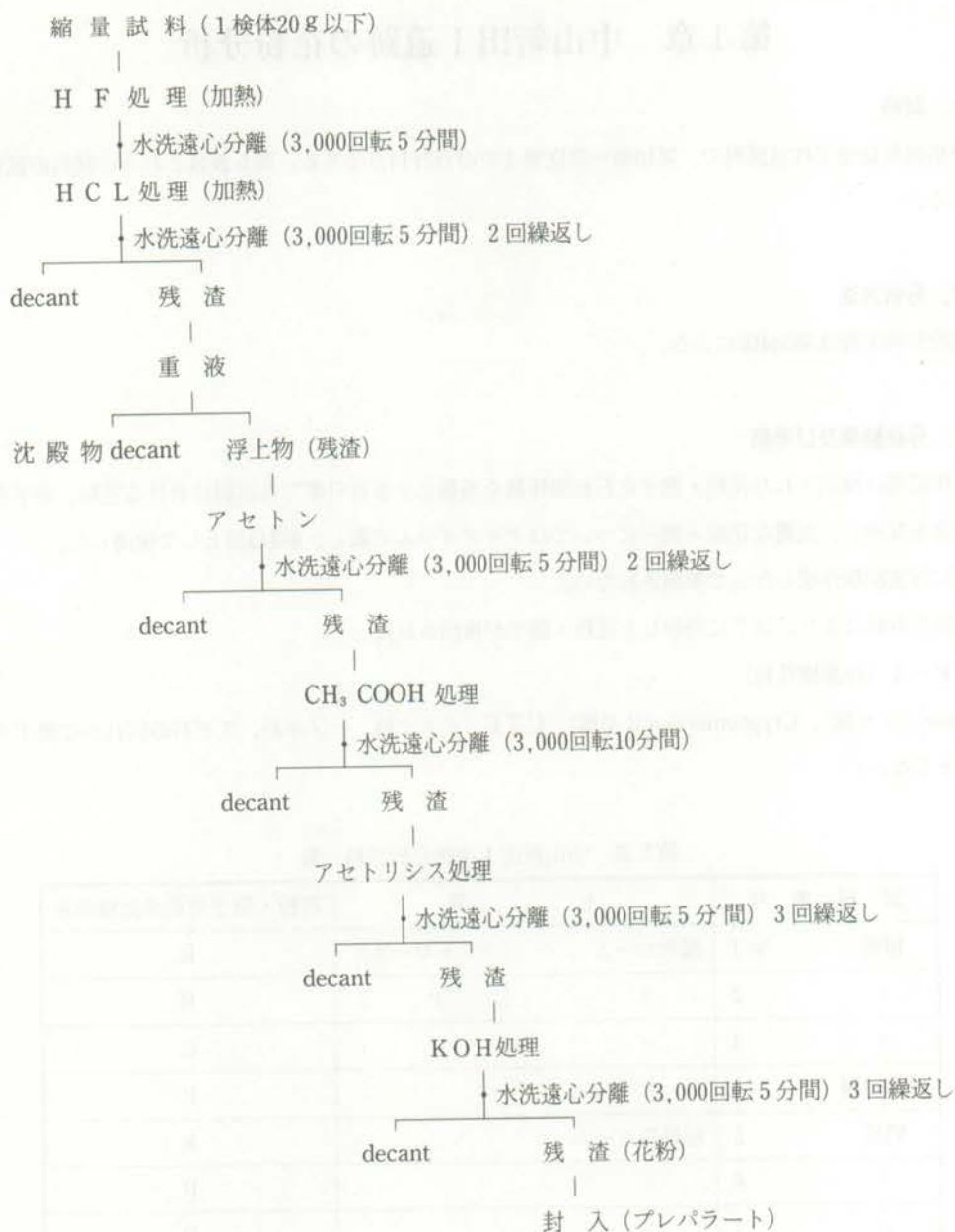
AP-1 (針葉樹花粉)

Pinus (マツ属)、Cryptomeria (スギ属)、C.T.C (イチイ科、ヒノキ科、スギ科の何れかに属するも判然としない)

第5表 中山新田 I 遺跡分析試料一覧

試料番号	土質	花粉・孢子化石産出傾向※
III層 No 1	褐色ローム (ソフトローム)	R
” 2	” (”)	R
” 3	” (”)	C
IV～VI層 4	”	R
VI層 5	暗褐色ローム	R
” 6	”	R
” 7	”	R
” 8	黒褐色ローム質土	R
VII層 9	”	R
” 10	”	R
” 11	”	R
VII～VIII層 12	褐色ローム質土	R
VIII層 13	”	R
IX層 14	”	R, R

※ C：普通，R：少ない，R，R：極くまれ。



第345図 花粉分析の工程

A P-2 (広葉樹花粉)

Myrica(ヤマモモ属)、Juglans(クルミ属)、Pterocarya(サワグルミ属)、Alnus(ハンノキ属)、Carylus(ハシバミ属)、Carpinus(クマシデ属)、Castanea(クリ属)、Castanopsis(クリカシ属)、Cyclobalanopsis(アカガシ亜属)、Lepidobalanus(コナラ亜属)、Celtis(エノキ属)、Moraceae(クワ科)、Magnoliaceae(モクレン科)、Acer(カエデ科)、Tilia(シナノキ属)、Platycarya(ノグルミ属)、Araliaceae(ウコギ属)

N A P (草本花粉)

Caryophyllaceae (ナデシコ科)、Chenopodiaceae (アカザ科)、Thalictrum (カラマツソウ属)、Geranium (フウソウ属)、Haloragis (アリノトウグサ属)、Carduoideae (キク亜科)、Artemisia (ヨモギ属)、Cichorioideae (タンポポ科)、Gramineae (イネ科)、Cyperaceae (スゲ科)、Leguminosae (マメ科=ソラマメtype)、Leguminosae (マメ科=フジtype)、Plantago (オオバコ属)

F P (形態分類花粉)

Triplicate pollen (三孔型花粉)、Tricolpate pollen (三溝型花粉)、Tricolporate pollen (三溝孔型花粉)、Inaperturate pollen (口型花粉)

F S (羊歯類孢子)

Pteris (イノモトソウ属)、Polypodiaceae (ウラボシ科)、Monolete spore (単条溝型孢子)、Trilete spore (三条溝型孢子)

その他

Pseudoschizaea (淡水生藻類)

次に検出された花粉・孢子化石の主な属についての産出の特長を下部から上部へ順に述べる。

針葉樹花粉

検出された種類は少なくマツ属、スギ属等が若干検出された。

○マツ属

全般的に散見された程度で少なかった。然し最上部のNo 1 試料では10.4%検出され比較的多かった。

○スギ属

最上部のNo 1 試料から2.4%検出された他は非常に少なかった。

広葉樹花粉

ハシバミ属、クリカシ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリ属、エノキ属、モクレン科等が主に検出された。

○ハシバミ属

No 11~No 1 にかけて検出された。産出の特長はNo 5 の20.0%をピークとする凸形の消長が見られた。

○クリカシ属

No 2、No 1 から検出され、産出の特長はNo 1 から26.4%と高率で検出されたことが特長と言えよう。

○コナラ亜属

No 4 ~No 1 にかけて検出され、No 3 の12.5%とする凸型の消長とする。

○アカガシ亜属

No 4、3、1 の上部から検出され、割合としては1.5~4.0%と低かった。

○クリ属

No 5 以浅から主に検出され、割合としては0.8~4.0%と低かった。

○エノキ属

No 6 ~No 2 にかけて散見された程度で少なかった。

○モクレン属

No 6、3、1 から1.0~3.0%検出された程度で低かった。

草本花粉

草本花粉は前述の樹木花粉に比べて非常に多く検出された。主なものとしては、ヨモギ属、キク亜科、イネ科、タンポポ亜科、スゲ科、マメ科等が挙げられる。

○ヨモギ属

下部のNo14～No12は低率であったが、No11～No6にかけては激増し58.0%～82.0%と非常に多かった。然しNo5以浅では急激して行きNo2では6.4%に減少する。

○キク亜科

No13～No1にかけて検出され、産出の特長としてはNo13～No6にかけてNo11の10.0%をピークとする緩やかな凸形の消長が見られる。又、No5以浅では増加しNo5、No4では10.0%前後、No3、No2では22.0%～24.0%と段階的な増加が見られた。然しNo1となると7.2%に減少する。

○イネ科

No12～No1にかけて検出され、産出の特長としてはNo12～No7では低率であったがNo6、No5ではそれぞれ8.0%、10.0%検出され増加が見られる。然しNo4以浅では再び減少し、No2の6.4%をピークとする凸型の消長を示す。

○タンポポ亜科

略々全試料中から検出され、No11～No8にかけてNo10の8.0%をピークとする凸型の消長が見られる。No7以浅では多少の増減をくり返しながら良好に検出された。

○スゲ科

上部のNo4以浅より検出され、No2の4.0%をピークとする小さな凸型の消長が見られた。

○マメ科

マメ科は形態の点からも、ソラマメ type、とフジ type の2 typeに分けられ、何れも草本に属するものである。ソラマメ type は上部のNo2、No1からそれぞれ5.6%、4.0%検出された。又、No4からは僅か乍ら検出された。

フジ type はNo5、No4からそれぞれ4.0%、34.4%検出された。

羊歯類孢子

単条溝型孢子が多かった他は少なかった。産出の特長はNo14は非常に少なかったが、No13、No12ではそれぞれ90.0%、86.0%検出され、その殆んどが単条溝型孢子であった。然しNo11～No6では激減しNo9の1.0%を最小値とする凹型の消長が見られた。

又、No6になると再び増加に転じ、No2の25.6%をピークとする凸型の消長が見られた。

以上、主要花粉・孢子化石の産出の特長から当遺跡試料を花粉帯に分けて、古植生、古気候について述べると次のようになる。

○E花粉帯 (No14～No12)

単条溝型孢子が優占して生育する草地が推定される。羊歯類の他には、ヨモギ属、キク亜科等が若干生育していたと推定される。

○F花粉帯 (No11～No6)

ヨモギ属が優占して生育する草地が推定される。ヨモギ属の他には、キク亜科、タンポポ亜科、イネ

科、更に羊歯類も良好に生育していたであろうと考えられる。

又、前述のE花粉帯とは羊歯類からヨモギ属へと植生上の変化があったと考えられる。

樹木花粉としては、ハシバミ属が検出されることから、ハシバミ属の侵入があったと考えられる。

古気候は温帯～冷温帯に相当すると考えられる。

○G花粉帯 (No 5、4)

マメ科草本のフジ type が多産することによって特長づけられる花粉帯である。従ってフジ type のマメ科草本の生育が考えられる。この他ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科等のキク科草本も共に良好に繁茂していたものと考えられる。

草本の他には、ハシバミ属、ハンノキ属、クマシデ属、クリ属、アカガシ亜属、コナラ亜属等の広葉樹類も草地の周囲に生育していたことが推定される。

古気候は古植生より冷温帯と考えられる。

○H花粉帯 (No 3、2)

キク亜科やヨモギ属等のキク科が多く生育していたと考えられる。また羊歯類も多く生育していたであろうと考えられる。この他イネ科、スゲ科、マメ科のうちソラマメ科 type オオバコ属等も良好に生育し、草地を形成していたと考えられる。草地の周囲には、コナラ亜属を主体とする植生があったと考えられる。

古気候は古植生から温帯に相当すると考えられる。

○I花粉帯 (No 1)

クリカシ属、クリ属、アカガシ亜属、コナラ亜属等の広葉樹に加えて、マツ属が主体となって林地を形成していたと考えられる。林地の内外にはキク亜科、ヨモギ属、タンポポ亜科等のキク科や、イネ科、スゲ科、マメ科 (ソラマメ type) の草本類が良好に生育していたと推定される。

この花粉帯 (I) は前述のE～H花粉帯と比較すると草地から林地への大きな植生上の変化があったと考えられる。

古気候は古植生から暖温帯に相当すると考えられる。

第2章 中山新田 I 遺跡の鉍物分析

A. 試料

花粉分析試料表の試料番号、土質を参照されたし。

B. 分析方法

採取したままの試料を超音波発生装置により粘土分を除いた。

$\frac{1}{4}$ mm (60 mesh) \sim $\frac{1}{8}$ mm (120 mesh) の篩を用いて $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$ mmの砂分を抽出し、テトラブromエタン (比重 \approx 2.96) によって重鉍物を分離した。

検鏡は300個体程度観察し、各鉍物の比重を考慮して鉍物組成を算出した。

分析結果は第346図に示した。図には重鉍物量の変化、各鉍物の産出変化、重鉍物組成をそれぞれ示した。

C. 分析結果

色調

全体に暗褐色の試料が多い。

No 8~11の黒褐色~暗褐色を呈する部分はVII層の黒色帯に相当する。

No 12~14は褐色を呈したロームである。

砂分量及び重鉍物量

全試料に占める $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$ mmの砂分量は1.8~4.4%の間で変化している。

黒色帯に相当するNo 12~8では1.8~2.0 ϕ と小さく、やや $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$ mmの砂分が少ないことを示す。

$\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$ mmの砂分中における重鉍物の割合は特徴のある曲線をえがいている。

No 14 (34.5%) から上位に向って、重鉍物量が漸増し、No 8で69.6%に達する。

No 7では57.7%に急減するが、再び上位に向って重鉍物量が増加し、No 3 (75.3%) で最大値をとった後、単調に減少しNo 1では53.6%となる。

重鉍物の産出変化

カンラン石

本地点で産出のカンラン石は、自形から他形まで種々の形態を示す粒子が見られる。又、風化により表面が褐色を呈するカンラン石も少なくない。下部のNo 14~13においては丸味を帯びたカンラン石が多い。

No 14 (59.2%) とNo 13 (57.7%) は重鉍物中に占めるカンラン石の割合が非常に高い。

No 12 (44.9%) で急減するが上位に向ってカンラン石が漸増し、No 9 (58.3%) で極大となった後、No 6 (17.8%) に向って漸減する。

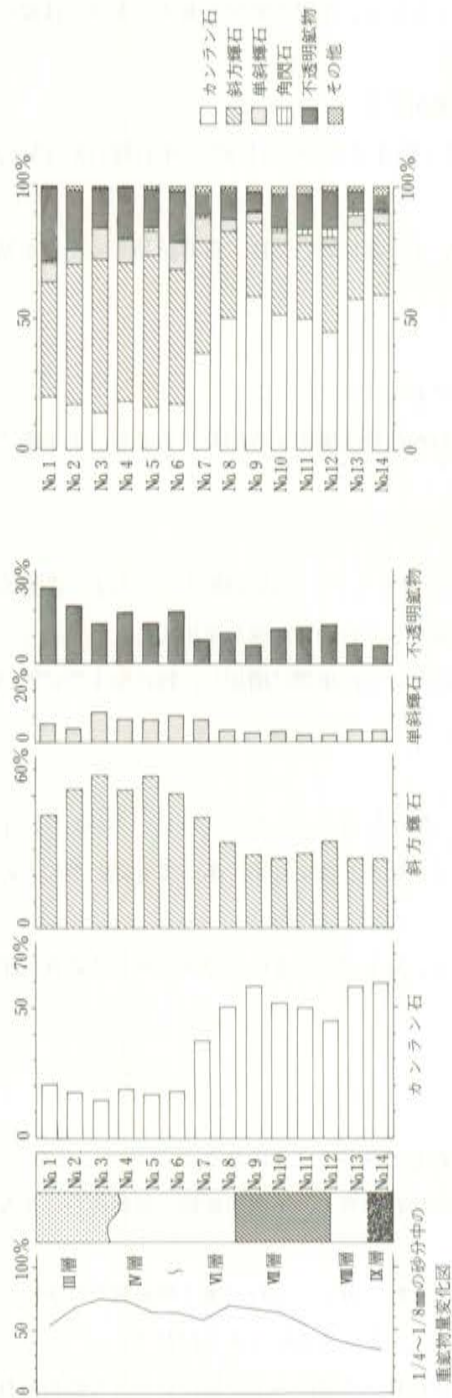
No 6~1はカンラン石が20.0%前後と少なく、凹凸のあまりない安定した産出を意味する。

斜方輝石

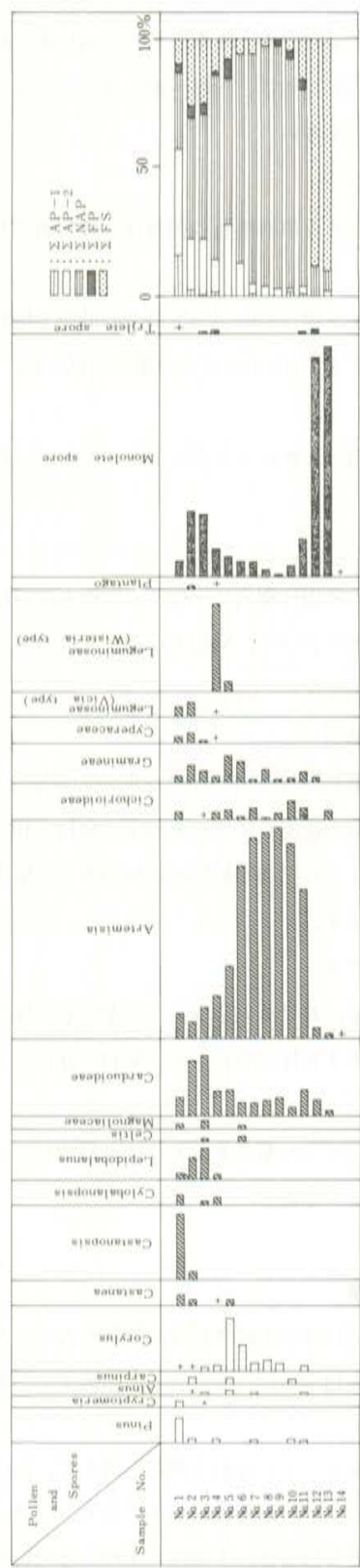
No 14~9における斜方輝石は、No 12 (32.8%) で小さな突出部が見られるものの、30.0%未満の安定した産出を示す。

No 9 (27.9%) から上位に向って斜方輝石は急増し、No 5で57.2%に達する。

重鉱物分析結果・組成図



主要花粉胞子化石ダイアグラム



+ : 1%未満の検出および質微化石試料における検出を示す

第346図 中山新田 I 遺跡重鉱物・花粉分析結果

No. 4 (52.2%) が小さな凹部となっているが、No. 3 (57.6%) から No. 1 (43.1%) において斜方輝石が減少しており、No. 4 を中心として増加部と減少部が対称的に位置している。

斜方輝石の形態は、自形～他形まで見られるが、No. 6～1 の斜方輝石の多産部においては、自形～半自形のものが多い。

単斜輝石

全体に占める単斜輝石の割合は、最大値でも 11.8% と少なく、産出の変化もあまり大きくは変化しない。

No. 12～8 までは 3.0～4.0% 前後の低率で単斜輝石が産出する。

No. 7～1 までは 5.0% 以上の産出が見られ、特に No. 7～No. 3 では 8.8～11.8% と単斜輝石が比較的多く見られる。

単斜輝石の形態は半自形～他形のものが一般的だが、上半部においては、自形結晶がいくらか見られる。

角閃石

角閃石の産出は極めて少なく、形態も半自形～他形である。

No. 13～10 において、No. 12 (3.0%) を最大とする角閃石が比較的集中する部分があるが、上半部では断続的な産出となっている。

不透明鉱物

不透明鉱物の産出は、小さな凹凸の繰返しが何回か見られるが、全体の傾向としては不透明鉱物が 10.0% 前後の産出を示すがその中で No. 12～10 は比較的安定して 14.0% 前後を産出する。

No. 6～1 では不透明鉱物が比較的多く、No. 3～No. 1 にかけては単調に増加し、特に No. 1 では 28.3% の最大値を示す。

火山ガラス

軽鉱物中における火山ガラスの割合を定性的に見ると No. 7 付近に火山ガラスのピークがあり、上位に向って減少する傾向がわかる。No. 14～9 には火山ガラスが殆んど含まれず、あっても軽石型のものである。

No. 8 からバブル型の火山ガラスが見られるようになり、No. 7 又は No. 6 付近で火山ガラスの含有率が最大となるようである。

D. 考察

本遺跡における重鉱物組成の特徴を大づかみにまとめると以下ようになる。

下部 (No. 14～8) はカンラン石が最大で、次いで斜方輝石が多く、不透明鉱物、単斜輝石は少なかった。

上部 (No. 6～1) は斜方輝石が最大で、次いで不透明鉱物、カンラン石が多く単斜輝石は少ない。

又下部と上部の漸移部が No. 7 であり、丁度この付近に火山ガラスのピークが存在する。

このような特徴は、本遺跡と平行して分析を行った前花 II-1 遺跡の上半部においても認められ、両者の上層断面の層序区分に大きな矛盾はない。

中山新田 I 遺跡においてNo12を中心とするVII層中・下部のカンラン石の極少部がやや顕著であること、No14に見られる斜方輝石の極大部における凹みが存在すること、及びNo.7で重鉍物量の減少が見られないこと等が、花前II-1遺跡と違う幾つかの細かい点である。

さて花前II-1遺跡も本遺跡も火山ガラスのピークが存在する。これはVII層（黒色帯）の上部に当り、カンラン石の減少部と斜方輝石の増加部とに相当する。

又、この火山ガラスは無色透明で、バブル型をした篩分けの良い火山ガラスである。

No.7付近は火山ガラスが多く、重鉍物量の減少は火山ガラスの影響によるものと考えられる。

以上、層位や岩質から考えて、No.7付近に存在する火山ガラスのピークは町田、新井（1976）の始良Tn火山灰（AT）に対比される可能性が強い。このATの年代は町田、新井（1976）によって2.1~2.2万年前とされている。

武蔵野台地における立川ローム層の重鉍物分析は関東ローム研究グループ（1965）ばかりでなく、小林他（1971）の共著者の1人羽鳥によっても報告されている。

羽鳥によると野川遺跡とその周辺地域の重鉍物組成は、「第1黒色帯直上に輝石の極大があること。第2黒色帯直上に火山ガラスの極大があること」が立川ローム層における特徴としている。

本遺跡における黒色帯（VII層）は、火山ガラスの密集帯より下位に位置することから武蔵野における第2黒色帯に対比することが出来る。

一般に武蔵野における第1黒色帯は重鉍物が増加する途中で、且、カンラン石の極小部と斜方輝石の極大部に位置する。

更に第1黒色帯の直上からソフトロームにかけてカンラン石の急増が見られる。

本遺跡においてはNo.6以上において、カンラン石の増加はなく、武蔵野との違いが見られる。

No.5に斜方輝石の小さな極大が見られることから、この付近が武蔵野台地における第1黒色帯の層準に対比される可能性があるかも知れない。

黒色帯の年代測定をしたものに、町田、鈴木、宮崎（1971）があるが、それによると武蔵野における第2黒色帯は約2.4~2.5万年前、第1黒色帯は1.6~1.7万年前以来の年代が出土されている。

参 考 文 献

小林 達雄・小田 静夫・羽鳥 謙三・鈴木 正男（1971）

：野川先土器時代遺跡の研究、

：第四紀研究、V. 10, n 4, P. 231~251

町田 洋・新井 房夫（1976）

：広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—科学V. 46, n 6, P. 339~347

山崎 晴雄（1978）立川断層とその第四紀後期の運動

：第四紀研究、V. 16, n 4, P. 231~246

町田 洋・鈴木 正男・宮崎 明子（1971）

：南関東の立川、武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年

：第四紀研究、V. 10, P. 290~305

ま と め

A. 先土器時代

(1) 編年

3遺跡の石器群に就いては、各遺跡ごとに大よその先後関係を設定したが、最後に、各文化層の類例を挙げ、また、問題点を簡単に指摘しておきたい。

II a 期 層位的に最古の位置を与えられるのは、聖人塚遺跡第5文化層である。VIII層上部から検出され、中山新田II遺跡第11ユニットと同一層準と見られるが、石器群の内容は全く異っている。聖人塚例は、基部を舌状に整形した石刃ナイフ、頭部調整の認められる石刃があり、聖人塚遺跡第18ブロック、中山新田I遺跡下層の、頭部調整と稜形成の作業面調整を有する石刃石器群と陸続しよう。この間の推移は、高井戸東遺跡X層とIX層との重なり方と一致している(小田他編 昭和52年)。中山新田II遺跡例は、中山谷遺跡X層(kidder,小田編 昭和50年)、西之台遺跡B地点(小田編 昭和55年)等と対比されるが、前者との層位的関連性は未確定のまま残されている。

後続する中山新田I遺跡下層は、第2黒色帯下部の資料としては屈指の内容をもつが、詳細は後日公表する予定である。全体に磯山遺跡(芹沢編 昭和52年)や高井戸東遺跡IX層(小田編 昭和52年)と類似することは明らかである。すなわち、高井戸東遺跡報文において、「日本の先土器時代における多様な調整加工技術を介在して成立するナイフ形石器の諸形態は、そのほとんど最古の部分から、横長剥片と縦長剥片を素材にしたものそれぞれが並存する」(同書19頁)とした指摘を更に補強するものとして、中山新田I遺跡の石器群を位置づけることができよう。

特に、中山新田I遺跡においては、高井戸東遺跡で知られていなかった形態のナイフ形石器をも含み、該期のナイフ形石器をほとんど網羅的に検出し得た点は重要な収穫であった。ナイフ形石器2類としたものには、高井戸東遺跡報文中で切出形石器と言われた類例を含むが、鏃型を呈し、扇形の刃部と扇頂部からの逆Y字形の背稜を有するものは、従来その報告例がほとんど無い。調整剥離にブランディングを用いず、平坦剥離などとも呼称される面的な剥離技術を用い、厳密にはナイフ形石器の範疇外におかれるが、今後の類例の増加は必至の情勢である。この種に関しては、〈中山新田型ナイフ形石器〉と仮称しておくことにする。

中山新田I遺跡には、聖人塚遺跡第17ブロックが相前後しよう。石刃技法基調の石器群であるが、ナイフ形石器の組成は単調で、石刃も小型のものが多い。中山新田I遺跡に、若干後出するのかもしれない。この段階には、聖人塚遺跡第21ブロックがあり、石刃と打製石斧が検出されている。石斧の形状から、中山新田I例と、VII層上部検出の草刈六之台例(田村、橋本 昭和59年)とをつなぐものと考えられる。本地域における第2黒色帯中の石斧の変遷がほぼ明らかになった。

第2黒色帯の上部からは、やはり石刃技法を基調とする石器群が検出されている。聖人塚遺跡第19ブロックがその古い部分、元割遺跡No.5地点が新しい部分に相当する。聖人塚の4例の石刃を観察すると、打面を大きく残し、頭部調整の認められないもので、下層の石刃と差異があるようである。稜形成の作業面調整の有無はその存在を示す資料を欠いている。資料数も少なく、ほとんど言及すべきことも無いが、元割遺跡No.5地点は聖人塚遺跡第16ブロックの直前に位置しよう。

聖人塚遺跡第16ブロックの産出層準はVI F層であり、該期のナイフ形石器を考察する上で逸すことのできない一括資料となろう。これに前後する時期の遺跡を産出層位によって配列すると次のようになる。

VII層上部 復山谷E区VII層（田村 昭和57年）、北海道VIIa層（橋本 昭和60年）、元割No.4・No.5 地点



VI層下部 権現後VI層（橋本 昭和59年）、聖人塚VI層



VI層上部 若葉台VI層（近刊）

この他に、木苧峠遺跡（鈴木 昭和50年）にVI層相当（報文IVaの層）のブロックがあり、A地点とH地点との間に時期差が指摘されている。おそらく、A地点（VI下層）→H地点（VI上層）となり、VI層の上下で石器群の様相が若干変動すると言われているが、隣接地域の状況も含めて、若葉台遺跡報告書（常盤道Vに収録）でもこの問題に触れていので、詳細は略する。

最後に問題を残すのは、聖人塚遺跡第15ブロックの舟底形尖頭器の帰属である。近接してIV層からナイフ形石器が出土しているので、IV層の遺物が何らかの要因によって深層に移動した可能性もあり、その産出層位をにわかに決することは危険だが、VII層上部あるいはそれと同レベルから検出されたことは事実である。このことは、この石器が完全に3面調整を受け、かつ鋭角的な尖頭部を有し、左右対称の形態を持つという、言わば、非東日本な属性を有するという点とも関連し、所謂角錐状石器の分類とその系統観にも一石を投ずることになる。

以上の内容を要約しておく。

元割遺跡	聖人塚遺跡	中山新田I遺跡
No.4・No.5 地点	第16ブロック	
	第19・第22ブロック	
	第21ブロック	
	第17ブロック	No.1～No.9 地点
	第18・第20ブロック	

II b期 元割遺跡No.2、No.3 地点、聖人塚遺跡第9～第14ブロックが本期に含まれると考えられる。元割遺跡No.2 地点以外には、あまり定型的な石器が出土していないが、該期の特徴的な器種が出揃っている。ただし、II b期の細分に寄与しうる資料には恵まれなかった。

権現後遺跡（橋本 昭和59年）IV期は、橋本によって新旧2期に細分されているが、元割、聖人塚両遺跡の該期のブロックの大半は権現後IV期古段階に並行すると考えられる。新段階の内容には、未だ不分明なところが多いが、全周加工の尖頭器が特徴的であると言う。聖人塚遺跡第11ブロックにおいて、角錐状石器に共伴した全周加工の尖頭器も、あるいはこれに関係するのかもしれない。類例は復山谷遺跡Bブロック（鈴木 昭和53年）にあり、かつて、鈴木定明の謬見を指摘したことがある（田村、橋本昭和59年）。

II c期 聖人塚遺跡と中山新田I遺跡から関連資料が検出されている。聖人塚遺跡第1～第8ブロッ

ク、中山新田 I 遺跡上層などが相当する。

聖人塚遺跡第 1 ブロックの玉髓製石器群は、今島田（杉原 昭和46年）、雨古瀬（西山他 昭和51年）に対応し、所謂砂川期の一員となろう。調査担当者の不十分な対応が惜しまれる。一方、第 2～第 8 ブロックはこれとやや様相を異にしている。既に指摘したように、これら 7 ブロックは同時、あるいは、相前後して形成されたものと考えられ、編年的にはほぼ一括して扱うことができる。

各種のナイフ形石器が含まれ、他遺跡と対比させる手がかりがなかなか見つからない。まず、第 43 図 9～11 の 3 点が問題である。3 例共に硬質頁岩製の縦長剥片を素材にし、基部周辺にブランディングが認められる。9、11 では打瘤を除去するように尖り気味の基部が作出され、10 では尾部をフラットにする目的の腹面剥離が看取される。この形状のナイフ形石器は南関東には余り見られないもので、東北地方のある種のナイフ形石器と関連づけられる可能性がある。例えば、金谷原（加藤 昭和44年他）などが思い浮ぶのだが、決め手を欠いている。この間には地域的な変化が伏在しているのかもしれない。

これらのやや特殊な一群を除外すると、基本的には、2 側縁加工の小型ナイフ形石器と、剥片を斜めに切る有背刃器との組み合わせとなり、武蔵野台地 IV 層石器群の一部と対比される。最も近いのは西之台遺跡 B 地点例（小田編 昭和55年）である。月見野遺跡群（明治大学考古学研究室 昭和44年）では B 1 に含まれよう。

仮に東北系統と考えた一群を A 群、武蔵野台地 IV 層に比較される一群を B 群とすると、聖人塚遺跡で両群が重複したことになる。ここで注意したいのは、A 群の素材が硬質頁岩に限定されることであり、目下のところ、その石材は茨城県以南には知られていないことである。おそらく、石材の搬入ルートと原産地周辺での石器群との関連性が、両群の重複の背景にあると考えられる。また、これら両群とは、もうひとつ別のグループが接触している。小型石槍を保有するグループであり、C 群としよう。

C 群については、起源、系統、変遷いずれも不詳な部分が多い。前項において、周辺加工の尖頭器が II b 期新段階に存在することを指摘したが、これには小型石槍の影響があるものと見られる。よく知られているように、本蓼川遺跡 L 2（宮塚他 昭和49年）、下九沢山谷遺跡 B 2（中村 昭和54年）、西之台遺跡 IV 中（小田編 昭和55年）、城山遺跡 IV 中（寺崎 昭和57年）などが小型石槍の層位的下限であり、聖人塚例に先行し、II b 期新段階に並行している。この段階の下総台地の様相には不明な点が多いが、II c 期段階には、小型石槍を主体的に保有する遺跡の密度は濃く、C 群の系統をこのあたりに求めることができる。

このように整理してみると、聖人塚遺跡においては、B 群が主体を占め、A 群、C 群が客体的に関与している状況が推察され、あるいは、複数の自出を異にする集団の動向を、そこに想定してもよいのかもしれない。

III b 期 元割遺跡 No. 1 地点から出土した。石槍、削器、植刃という組成を示し、縄文土器出現前夜の石器群と考えられる。この種の組成をもつ石器群としては、南大溜袋遺跡（戸田 昭和48年）があり、並行関係におかれる。

南大溜袋の編年の位置づけに関しては、本ノ木論争の延長線上にあるが、型式学的にも、また層位的にも戸田説の成立する余地は無い。

(2) 諸遺跡の動態

編年的研究の成果の上に立ち、各遺跡のブロックの状態をもう一度確認しておきたい。

IIa期では、元割遺跡第4地点が1ブロック=1ユニット、第5地点が2ブロック=1ユニット、聖人塚遺跡第15ブロックが1ブロック=1ユニット、第16ブロックも1ブロック=1ユニット、第17ブロックが4ブロック=1ユニット、第18～第22ブロックが同様に単一ブロックで1ユニットを構成しているのに対して、中山新田I遺跡のみが、ブロック-ブロック群-ユニットという構成を示している。聖人塚遺跡第17ブロックに就いては、4ブロック=2ブロック群=1ユニットという解釈もできる。遺物の分布状態を見ると、中央の空白部を取り囲むように石片が散布し、17i、17ivブロックが加工地点、17ii、17iiiブロックが廃棄地点であり、中央に居住区が想定され、2単位の集団がその主体に指定される。

以上より、大ユニット、中ユニット、小ユニットという3階級のユニット形態が抽出される。

次にIIb期の状況を見よう。元割遺跡では、No.2、No.3地点がこの段階に相当しているが、No.3地点はNo.2地点に吸収されるので、結局、6ブロック、3礫群がひとつのユニットを形成している。性格がよく分からないNo.3地点を除外して、No.2地点の状況を見ると、3基の礫群に重複して石器が分布し、2箇所の加工地点(1a、1bブロック)、1箇所の作業地点(2ブロック)、2箇所の廃棄地点(3、4ブロック)が分離される。なお、加工地点を2箇所と認定したが、これは見かけ上そうになっている可能性が高く、石核がこれら2ブロック内の5箇所に集中することからも、複数回の剥片剥離、2次加工の結果として、見かけ上2箇所のブロックが形成されたことが推察される。占地集団の規模に関しては、礫群の数から3単位としておく。

聖人塚遺跡では、第9～第14ブロックが本期に含まれるが、第9ブロックを除く5ブロックに、多少の差はあれ礫が含まれ、礫群と石器ブロックとが密接に関連している。これら6ブロックに就いては、個別資料の分析を通じて関係の有無が判明している。すなわち、

第9ブロック-第10ブロック→第11ブロック

第12ブロック-第13ブロック

第14ブロック

という関係で、単独、あるいは、せいぜい2ブロックで1ユニットが形成されている。

このように、本期においても、大ユニット、小ユニットという基本的なユニット構成が看取される。

IIc期では、聖人塚遺跡第2～第6ブロックのみが分析の対象になる。前項で触れた様に、この5ブロックの成立には3系統の石器文化が関与し、更に、母岩構成の上で、第2ブロックを中核とし、異種母岩を補完する形態で別なブロックが存在すること、第2ブロックに掘り込みを有する住居跡の存在した可能性が指摘されることなど、複雑な様相を呈している。

なお、第2ブロックの遺物の垂直分布の意味に関しては鶴丸俊明の分析に従った(鶴丸 昭和58年)。

最後にIIIb期に関して検討しよう。IIIb期では、元割遺跡第2地点があるだけで、比較が難しい。第2地点には南北2箇所のブロックがあり、器種組成の上から作業内容の差に帰因するものと考えた。

ところで、先土器時代末から縄文草創期にかけては、本遺跡に見られるように、未製品や不要な剥片などをほとんど含まないブロックがあり、従来から種々論議されている。例えば、著名な神子柴遺跡(藤沢、林 昭和36年)では、墳墓説やデポ説と住居址説の3説があるが、住居址説が最も説得力がある。

本遺跡の場合、石槍を中心とするブロックと、削器を中心とするブロックに分離され、石槍主体のブロックには少量のポイントフレイクもあり、そのうちには本体と接合するものもある。一方、削器主体のブロックには、1点の剥片、削片も含まれていない。このことから、石槍主体のブロックは、石槍の再加工の場であり、削器主体のブロックは、槍柄の製作址であると考えるのが自然である。槍の製作址は別な地点に存在し、それは南大溜袋のような遺跡であったと推定される。

なお、本書掲載を予定していた各種集計表に関しては、時間的制約に紙面の都合も重なり、その大半を割愛した。中山新田 I 遺跡の詳細と共に今後に残された課題となった。報文の不備をお詫びしたい。

B. 縄文時代

(1) 中期集落の構造と動態

中山新田 I 遺跡と聖人塚遺跡は、浅い谷津を挟んで指呼の間に位置する。このため当初は、谷津の源頭部を取り巻く同一遺跡としての可能性が考えられたが、資料分析の結果、縄文時代各時期に、常に相関性を持ちつつも別個に人々の生活が展開した遺跡であることが確認された。この中で、特に縄文時代中期の遺跡動態は興味深い。

まず五領ヶ台 II 式から阿玉台 I a 式期、屋外埋甕土坑 1 基のみを伴う遺物の散布が聖人塚遺跡に現われ、次の阿玉台 I b ~ II 式期に、今度は隣の中山新田 I 遺跡に、竪穴住居跡・竪穴状遺構 9 基をほぼ環状に配した集落が出現する。同じ頃、聖人塚遺跡では、若干離れた東方の台地平坦部に、小規模な竪穴住居跡 3 基が営まれるが、集落形態は示さない。そして、若干の時間的空白の後、今度は聖人塚遺跡に、勝坂式末葉から所謂中峠式期の住居跡・竪穴状遺構 17 基を伴う集落が出現する。つまり両遺跡は、中期前半から中葉にかけて、拠点的な集落地として交互に消長を繰り返すのである。一般に縄文時代中期の大遺跡が、比較的継続性を持ち、中期全般を通じて安定した集落動態を示すのに比べ、中山新田 I 遺跡と聖人塚遺跡は、短期、しかもほぼ単一の土器型式期をもって、その集落機能が完結してしまう。利根川、江戸川といった大河川に挟まれながら、その恩恵を蒙るに不便な台地内陸部という立地に起因する現象かも知れないが、該期の集落研究にとっては、比較的 At moment な中期集落の構造を復元できる可能性を評価すべきであろう。両遺跡の集落遺跡としての補完性は、既にその一部が調査・報告された中山新田 II 遺跡（田中他、昭和59年）、更にその北東に位置する館林、水砂遺跡（田中他、昭和57年）の在り方を含めた再検討によって、より説得性の高い縄文時代の地域史として止揚できる筈である。

(2) 阿玉台式前半期の「有段式竪穴」と、覆土に多量の焼土層を有する住居跡

また、集落研究上の微視的な着眼点として、中山新田 I 遺跡で検出した、阿玉台 I b 式期の所謂「有段式竪穴」と、覆土に多量の焼土堆積を持つ住居跡（むしろ通常の住居跡としての概念を逸脱するか）の存在があげられる。

まず、有段式竪穴は、中山新田 I 遺跡 096・097 竪穴住居跡が典型例で、いずれも多量の阿玉台 I b 式、及び地域的な様相の強い「鳴神山系」の土器を出土する。近年、有段式竪穴については、関東地方にその出自を追えない所謂異系統の竪穴住居型式として、中野修秀氏による類例の集成と、系譜の検討が行われた（中野、昭和60年）。特にそこで言及された当該遺構の出現期については、当地域において大旨阿

玉台Ⅲ式期とされ、阿玉台Ⅰb、Ⅱ式期に遡る例は報告されていないらしい。中野氏が指摘するように、有段式竪穴が、縄文時代前期末から中期初頭の東北地方の文化要素の中にその出自を求められ、関東地方のそれも、東北地方の有段式竪穴の系譜を引くものとする考えは示唆に富む。しかし東北地方の土器様式との接触・融合が次第に顕著となる阿玉台式後半期なら理解できるが、東北地方の土器様式がほとんど将来された形跡の無い阿玉台式前半期に、既に有段式竪穴が存在している事実は、氏の仮説を必ずしも支持しない。多様な文化要素の中で、土器様式がほとんど東北地方との接触・融合を示さず、住居型式のみが阿玉台式土器の様式圏内に取り入れられたとは考えにくいからである。中山新田Ⅰ遺跡における、阿玉台Ⅰb式期の有段式竪穴の在り方から見る限り、この種の遺構は東関東、中でも茨城県南部から千葉県北部を中心に生成したのものとして、阿玉台土器様式の内部にその出自を求める方が自然であろう。該期に通有な、所謂「小竪穴」の問題もあわせて、阿玉台式期の遺構には、まだ十分な検討が成されているとは言い難い。最近も、今橋浩一氏により、この種の遺構について論考がなされたが、新しい知見は得られていないようだ(今橋、昭和60年)。なお聖人塚遺跡012・130竪穴住居跡も、同じ有段式竪穴であるが、勝坂式末葉から所謂中峠式期の所産であり、この時期の類例は多い。

次に、覆土内に多量の焼土堆積を有する住居跡について。中山新田Ⅰ遺跡081竪穴住居跡がその典型例である。遺物出土状態の具体的検討が未了のため、多くの出土土器に見られる様相差と、焼土層各層の微視的な対応関係は分析できなかったが、覆土中に3層以上厚く堆積した焼土層は、竪穴廃絶後の火を焚く行為と、土器の廃棄行為が複数回に亘って継続された事実を反映する。阿玉台式前半期には、各地で類似遺構が散見されるようで、東京都町田市藤の台遺跡3号住居跡例(川口他、昭和55年)も、ほぼ同時期のものである。この種の遺構は、阿玉台式後半期、茨城県石岡市東大橋原遺跡A-J1号住居跡の検出所見(川崎他、昭和54年)とも共通点を持つが、東大橋原例は、その性格を土器焼成遺構(生産遺構)として位置づけており、火を焚く行為を伴った、生活残滓を“もどす”“送る”と言う儀礼的行為に結びつけて考えた藤の台例とは異なっている。その後、これらの諸説に具体的な検証を与える知見は得られていないが、少なくとも阿玉台期を中心とした特殊な遺構の在り方として注意する必要がある。

(3) 中期前半の土器群

中山新田Ⅰ遺跡と聖人塚遺跡からは、五領ヶ台Ⅱ式土器以降、所謂中峠式に至る複雑な土器群が出土した。特に聖人塚遺跡から出土した五領ヶ台Ⅱ式土器は、阿玉台Ⅰa式土器と、さらに両者の中間的な様相を持つ土器の存在と共に、阿玉台式土器成立期の、東関東地方における型式変遷を窺う良好な資料となる。この時期の土器に関しては、最近の今村啓爾氏の論考(今村、昭和60年)でも、資料の僅少さから、今ひとつ具体像の不明なものとして、その重要性が示唆されている。また、阿玉台Ⅰb式を主体とした中山新田Ⅰ遺跡の出土土器は、下総台地の地域的変遷型とされた「鳴神山系」土器(高橋、昭和34年)、更に中部地方貉沢式に併行する、勝坂式直前期或いは「角押文を多用する土器群」(寺内、昭和59年)を共伴し、その相互関係について示唆すべき多くの点が含まれる。筆者らに与えられた過酷な整理条件は、もとより不十分な力量を遙かに超えるものであり、資料図化すら不完全なままで本報告を呈示せざるを得なかったことは残念でならない。具体的な出土資料の検討を妨げる結果となった事をおわびするとともに、資料の検討にあたってご指導をいただいた、大塚達朗・新井和之・中野修秀の各氏に、深く御礼申し上げたい。

以上によって、元割、聖人塚、中山新田 I 3 遺跡の一応の報告を終える。

諸般の事情によって、この報告書は不十分なところが多いことを自覚している。従って、筆者らは、この報告書を最終的なものとは考えていない。報告書の刊行は、むしろ、これらの遺跡と、そこから掘り出されたたくさんの遺物から情報を導き出すための端緒であると理解している。とくに、縄文中期前葉の土器の編年的研究と、中山新田 I 遺跡の先土器時代ブロック群の構造的 연구를、筆者ら両名の責務において、公にすること無くして、本書は完結することを許されていない。 (田村・原田)

引用参考文献 (50音順)

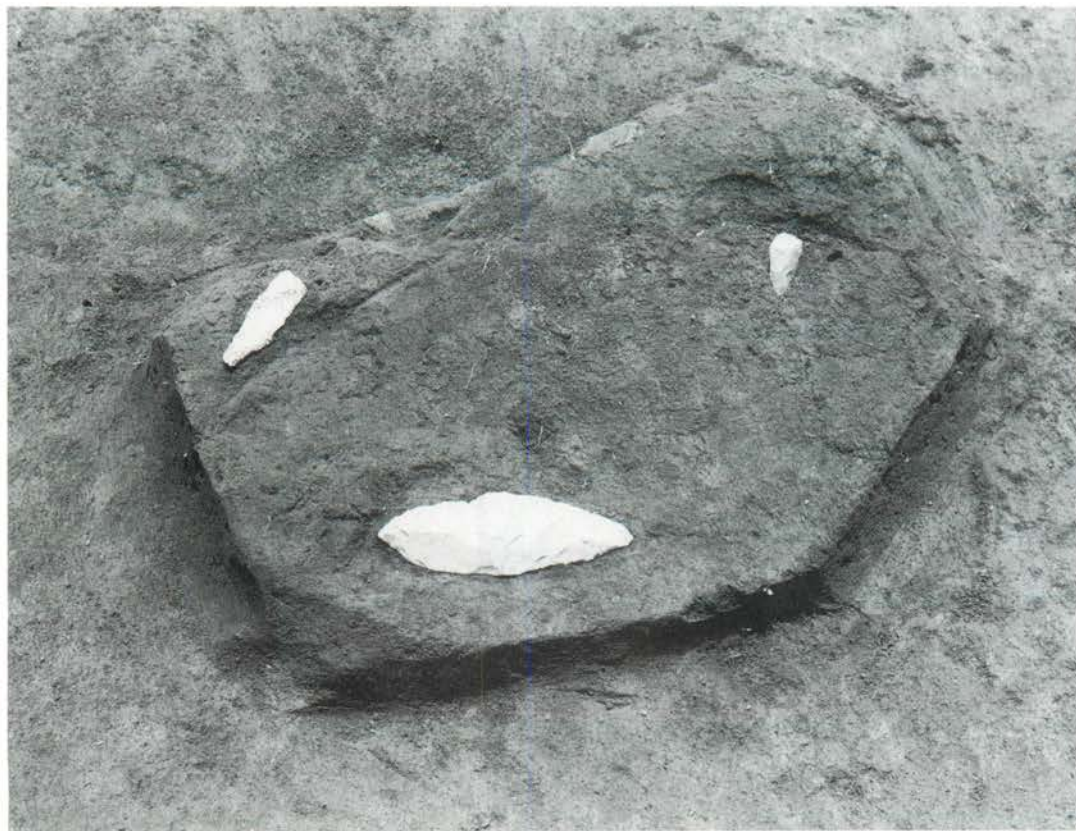
- 安孫子昭二 子母口式土器の再検討 (東京考古 1) 昭和57年
新井 和之 黒浜式土器 (縄文文化の研究 3 縄文土器 I) 昭和57年
今橋 浩一 阿玉台文化の一側面—二重床構造住居址の検討— (古代探叢 II) 昭和60年
今村 啓爾 五領ヶ台式土器の編年—その分布および東北地方との関係を中心に— (東京大学文学部考古学研究室紀要 4) 昭和60年
小田 静夫・伊藤富治夫・C. T. キーラー・重住 豊編 高井戸東遺跡 昭和52年
小田 静夫編 西之台遺跡 B 地点 昭和55年
加藤 稔ほか 山形県史考古資料 昭和44年
鎌田 俊昭 志引遺跡 昭和59年
川口 正幸ほか 藤の台遺跡 III 昭和55年
川崎 純徳ほか 石岡市東大橋原遺跡—第二次調査報告— 昭和54年
渋谷 孝雄 金谷原遺跡の石刃技法の分析 (山形考古 2—4) 昭和51年
神保 孝造・橋本 正春 富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告 昭和60年
杉原 荘介 先土器時代 (市川市史第 1 巻原始狩猟文化) 昭和46年
鈴木 定明ほか 復山谷遺跡 (千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 VI) 昭和53年
鈴木道之助 木苅峠遺跡 (千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 III) 昭和50年
芹沢 長介編 磯山 (東北大学考古学研究会考古学資料集第 1 冊) 昭和52年
田村 隆 復山谷遺跡 (千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 VII) 昭和57年
田村 隆・橋本 勝雄 先土器時代 (房総考古学ライブラリー I) 昭和59年
高橋 良治 千葉県鳴神山貝塚の土器 (考古学手帖 10) 昭和34年
田中 豪ほか 館林遺跡、水砂遺跡 (常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書 I) 昭和57年
田中 豪ほか 中山新田 II 遺跡 (常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書 II) 昭和59年
田中 耕作 北平 B 遺跡、岡塚遺跡範囲確認調査報告書 昭和60年
土屋 積 石器に関する考察 (大石遺跡、長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その 1、富士見町その 2—) 昭和51年
鶴丸 俊明 ブロッカーその厚さの意味の検討 (多聞寺前遺跡 II) 昭和58年
寺崎 康次 解説先土器時代の遺物について (しろやま—調布市入間町城山遺跡第 9 次発掘調査概報) 昭和57年
寺内 隆雄 角押文を多用する土器群について (下総考古学 7) 昭和59年

- 戸田 哲也 千葉県南大溜袋遺跡の調査 (考古学ジャーナル78) 昭和48年
- 中野 修秀 有段式竪穴遺構に関する覚書—関東地方縄文中期における異系統の竪穴住居址— (日本考古学研究
所集報VII) 昭和60年
- 中村喜代重 神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群 (神奈川考古7) 昭和54年
- 西山 太郎・鈴木道之助 雨古瀬遺跡 (千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IV) 昭和51年
- 芳賀 英一 上ノ原遺跡 (福島県山都町文化財調査報告書第4集) 昭和58年
- 橋本 勝雄 旧石器時代 (八千代市権現後遺跡) 昭和59年
- 橋本 勝雄 旧石器時代 (八千代市北海道遺跡) 昭和60年
- 原田 昌幸 縄文時代前期の小型円形竪穴 (奈和20) 昭和57年
- 藤沢 宗平・林 茂樹 神子柴遺跡 (古代学9-3) 昭和36年
- 藤原 妃敏 東北地方における後期石器時代石器群の技術基盤 (考古学論叢I) 昭和58年
- 宮塚 義人・矢島 国雄・鈴木 次郎 神奈川県本蓼川遺跡の石器群について (史館3) 昭和49年
- 明治大学文学部考古学研究室月見野遺跡群調査団 概報月見野遺跡群 昭和44年
- J. E. キダー・小田 静夫編 中山谷遺跡 (国際基督教大学考古学研究センター Occasional Papers No.1)
昭和50年

写 真 图 版



先土器No.1地点



先土器No.1地点



先土器No.2 地点



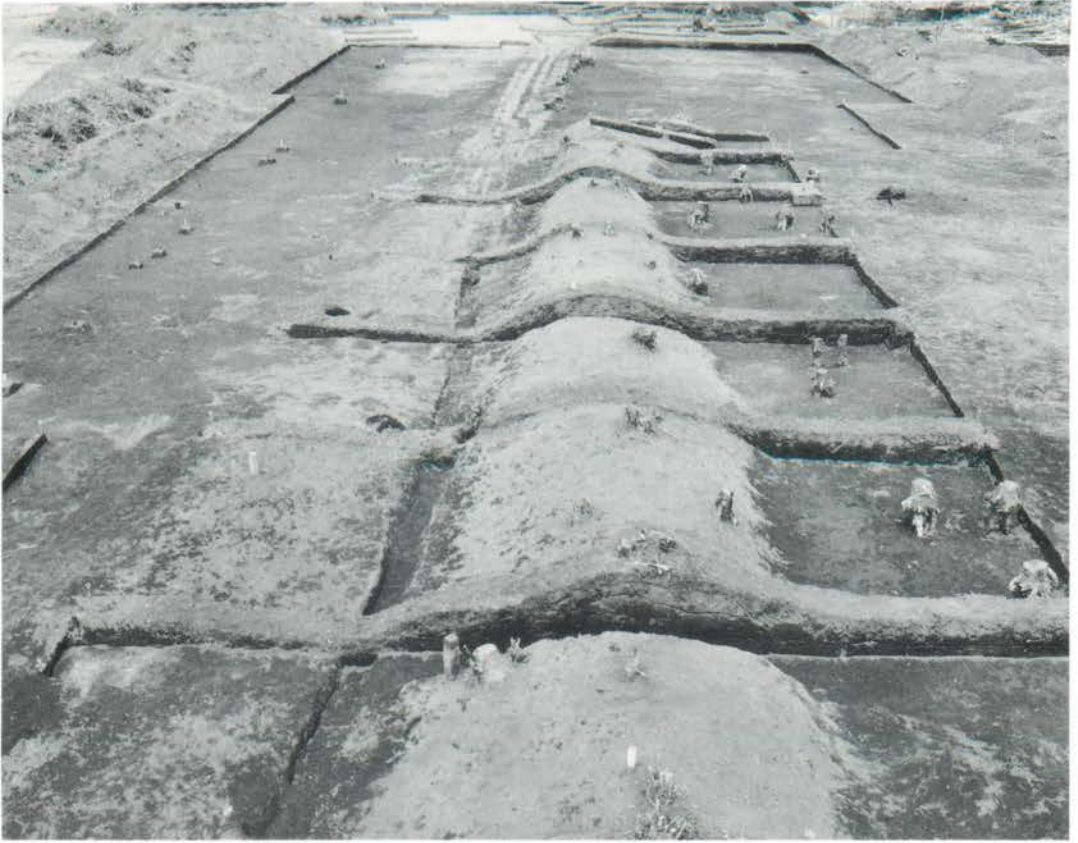
先土器No.5地点



馬土手



馬土手



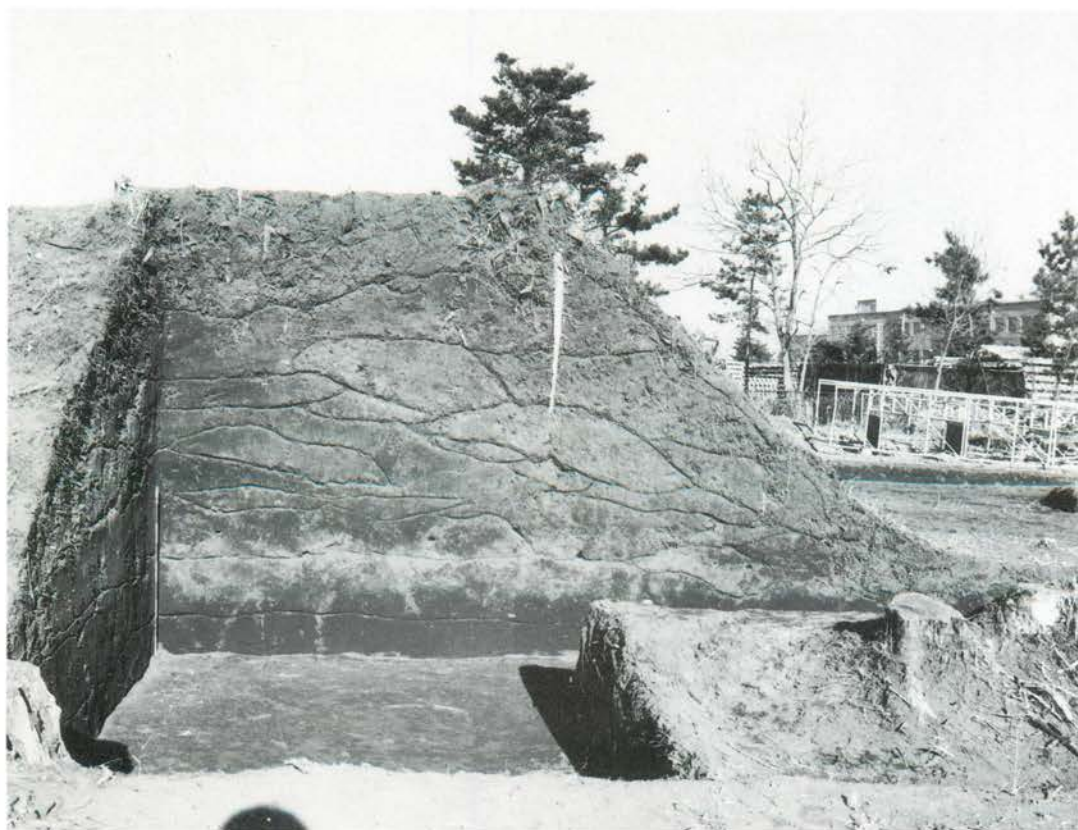
馬土手



馬土手



馬土手



馬土手

No. 1 地点



209



232+237



218+219



234



252



222



221



225



211



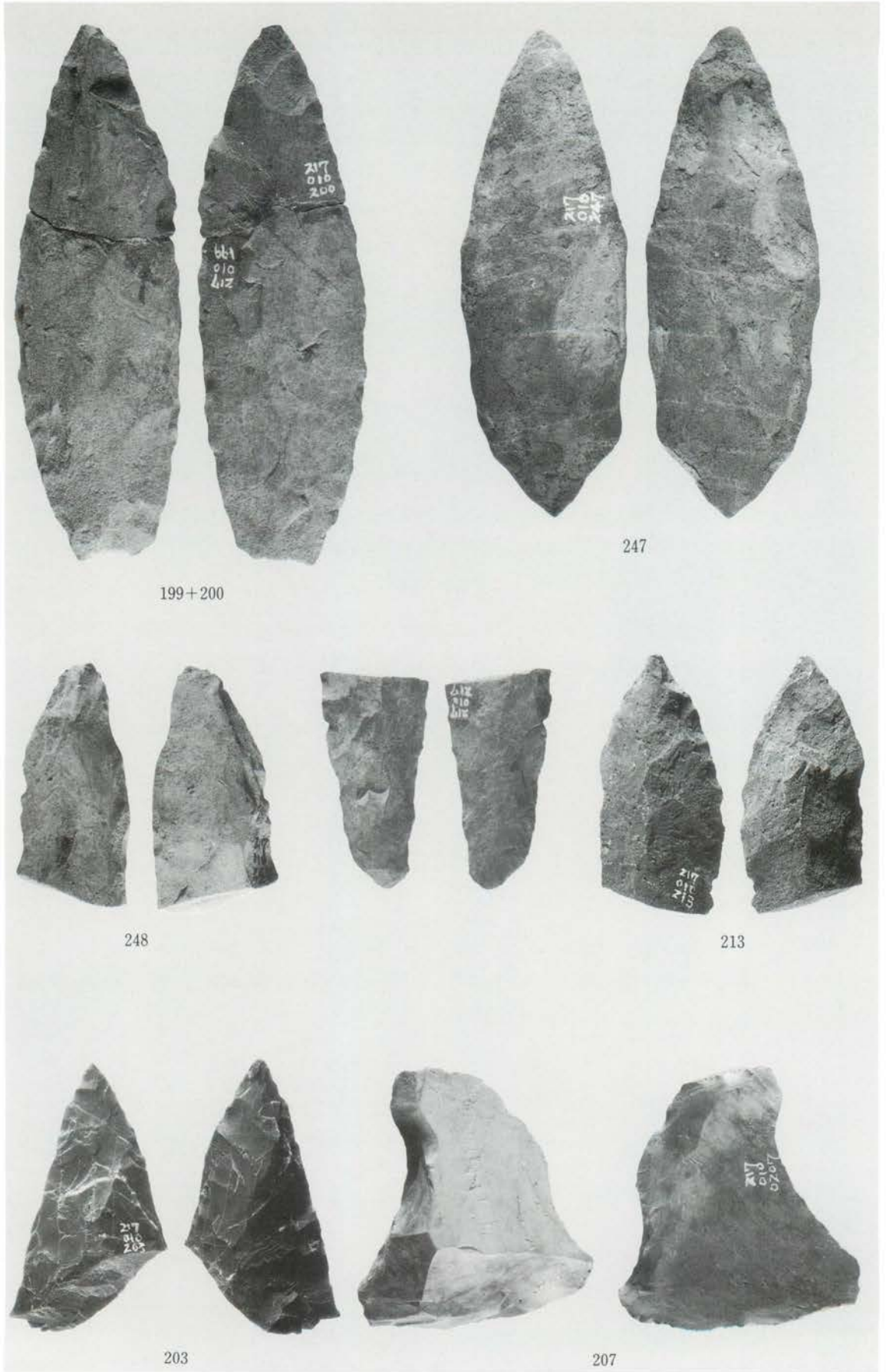
241

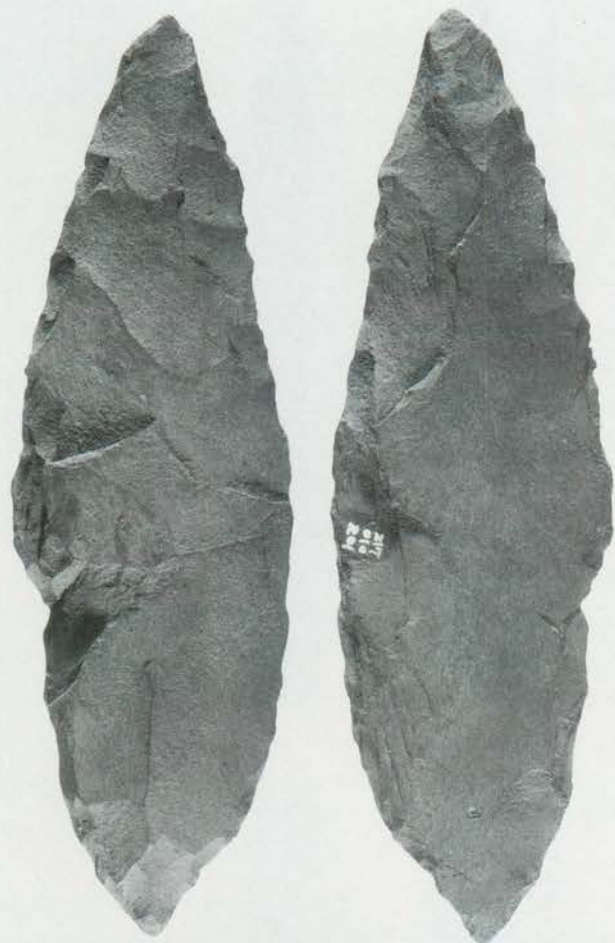


202+204



214

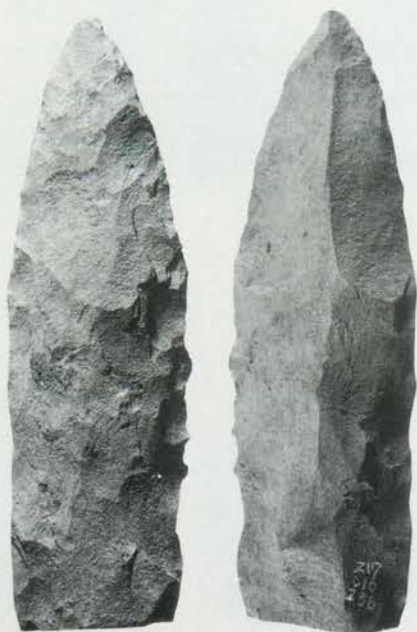




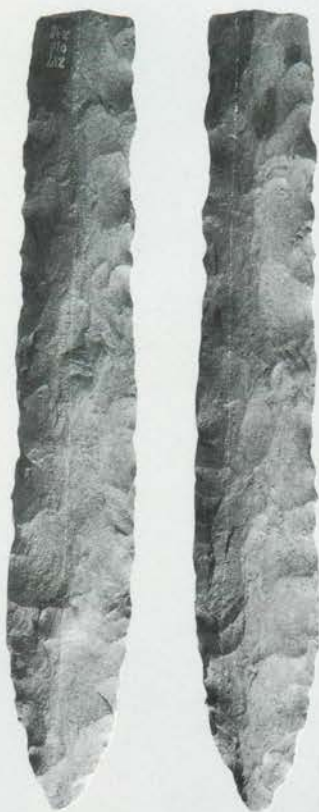
201



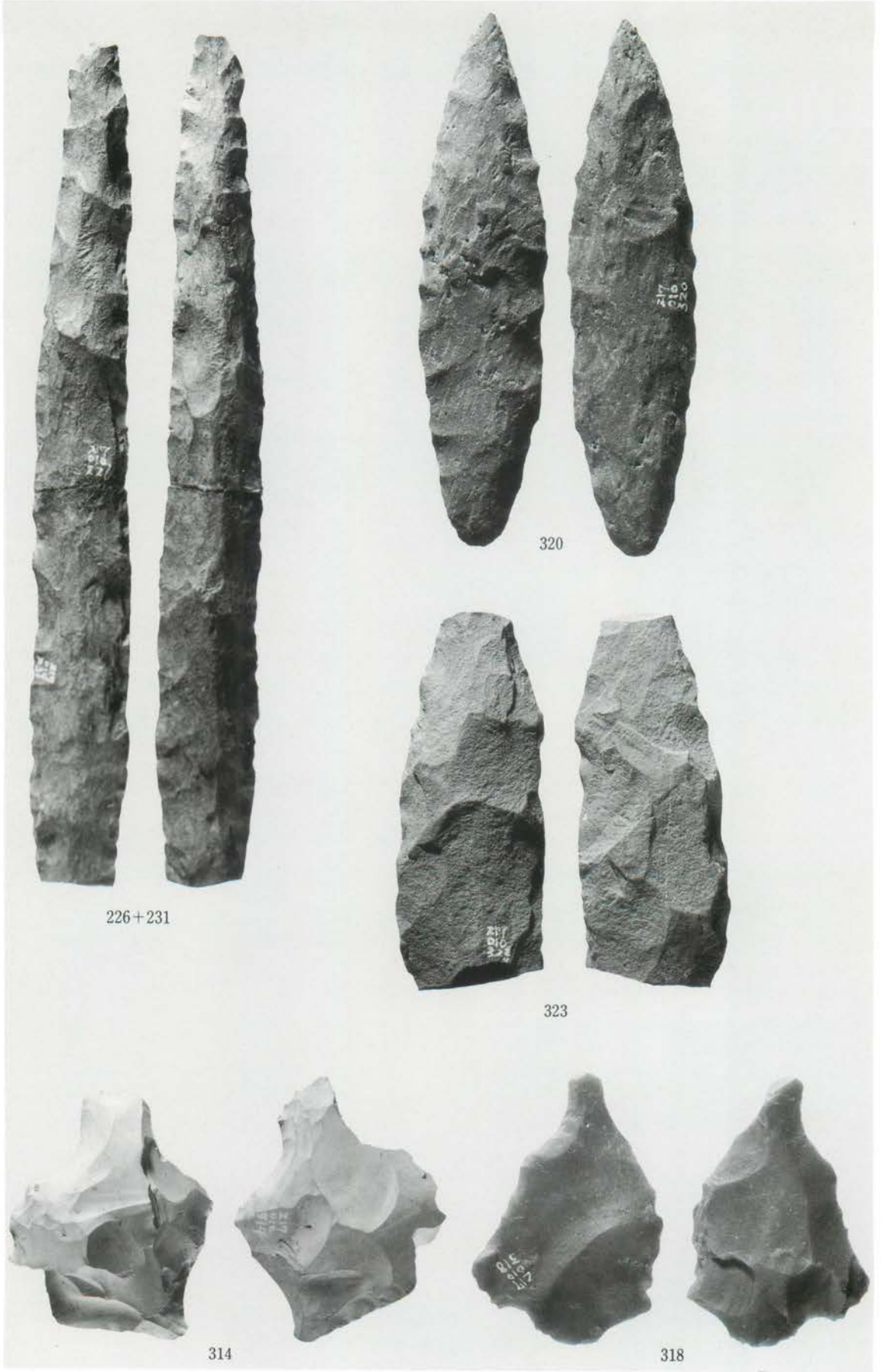
212



236



238





315



315



321



322

No. 2 地点



1090



1208



939



1210



760



1254



1270



1061



1047



1026



1368



1048



1117+1254



1368



520



524



280



340



553



1337



991



445

No. 5 地点



カク B31



カク B30

031-027

No. 2 地点



接合資料(51)



接合資料(54)



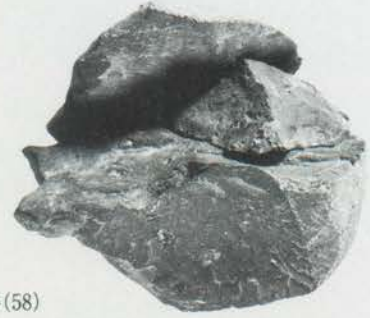
接合資料(55)



接合資料(56)



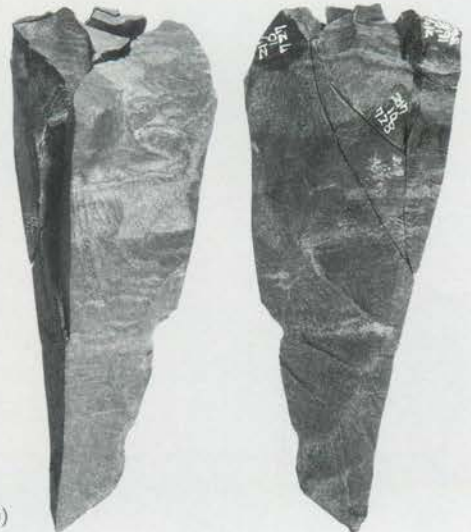
接合資料(57)



接合資料(58)



接合資料(59)



接合資料(60)



遺跡



遺跡



先土器試掘



先土器No.2 ブロック



先土器No.12, No.13ブロック



先土器No.17ブロック



先土器No.17ブロック調査状況



先土器No.18ブロック



018



023



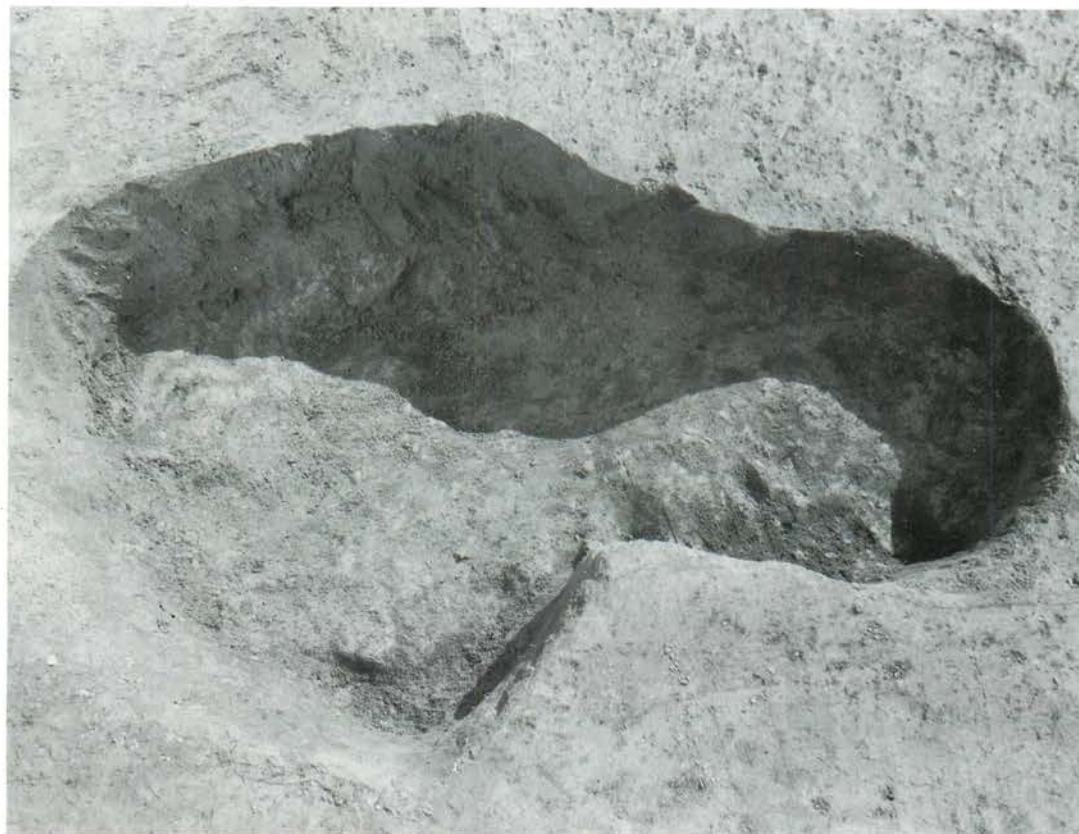
121



125



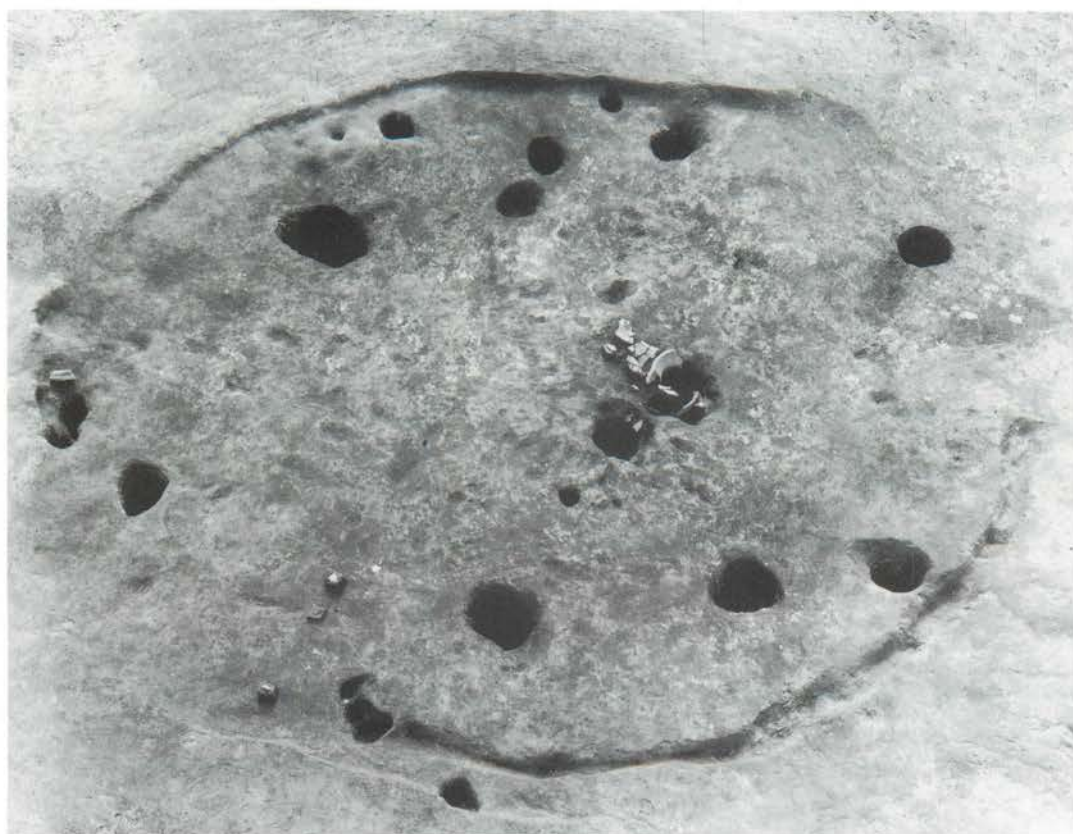
126



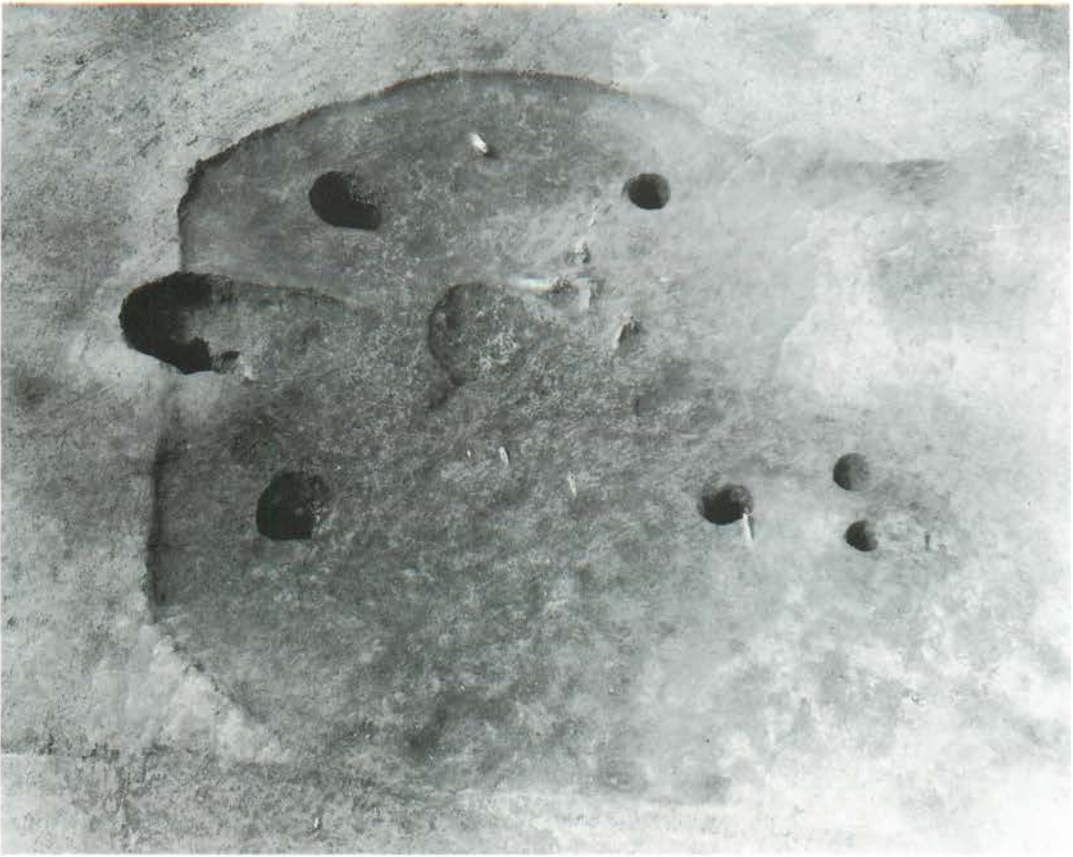
135



136



005



006



007



008



009



010



011



012



012



013



013



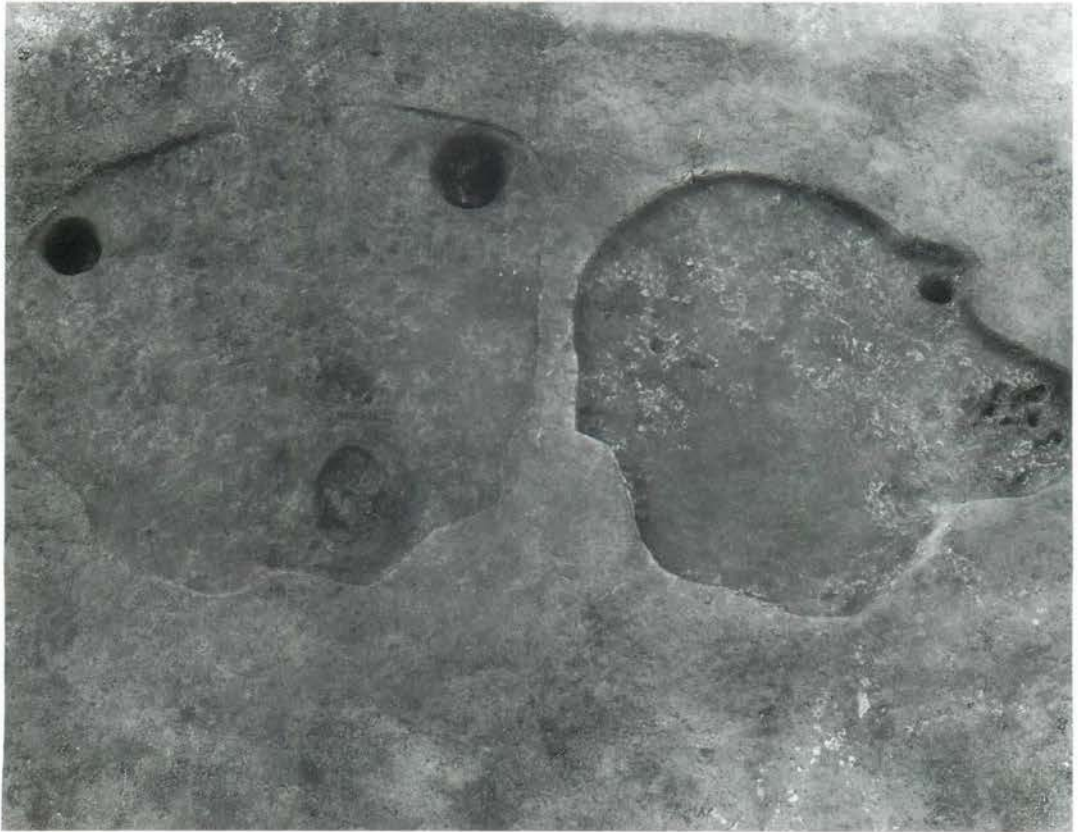
014



013



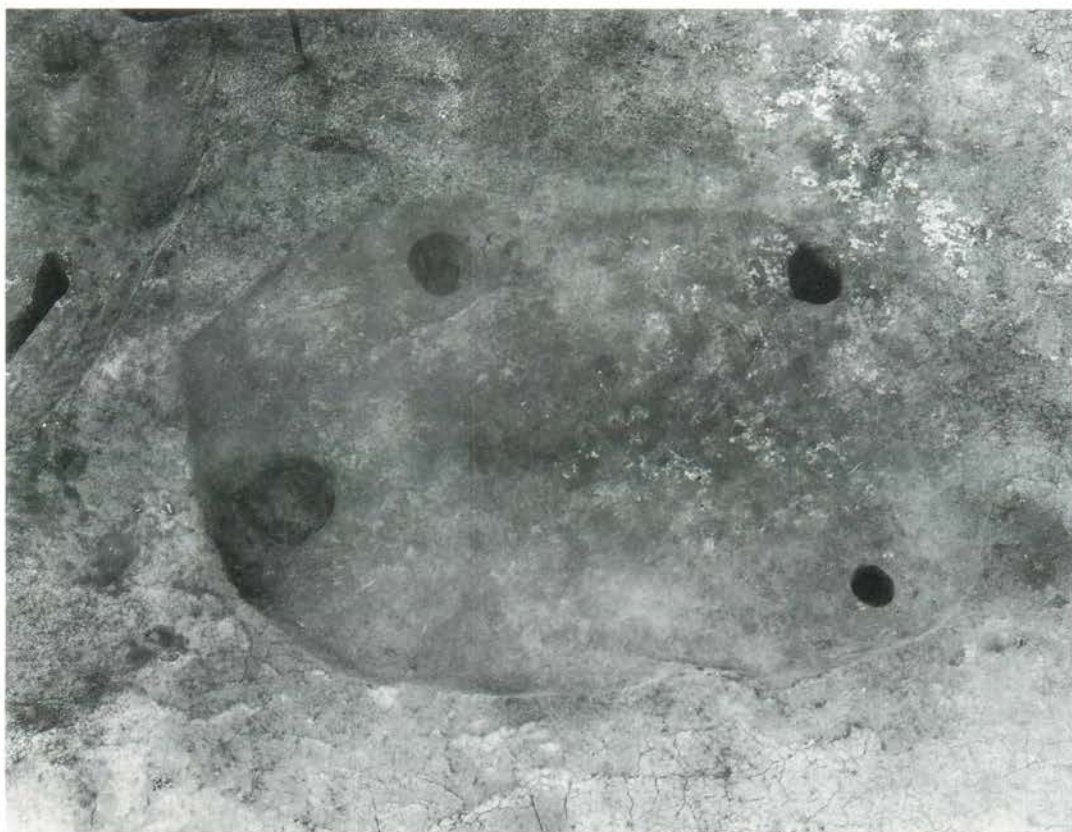
041



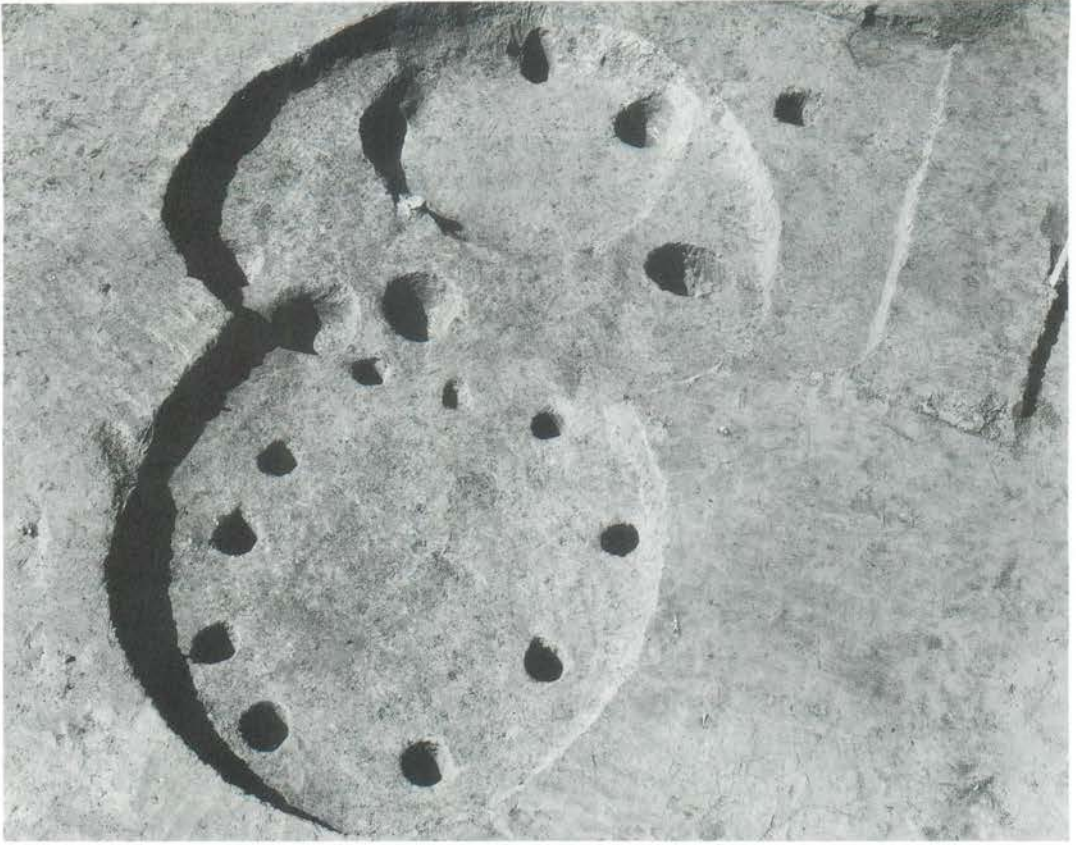
014



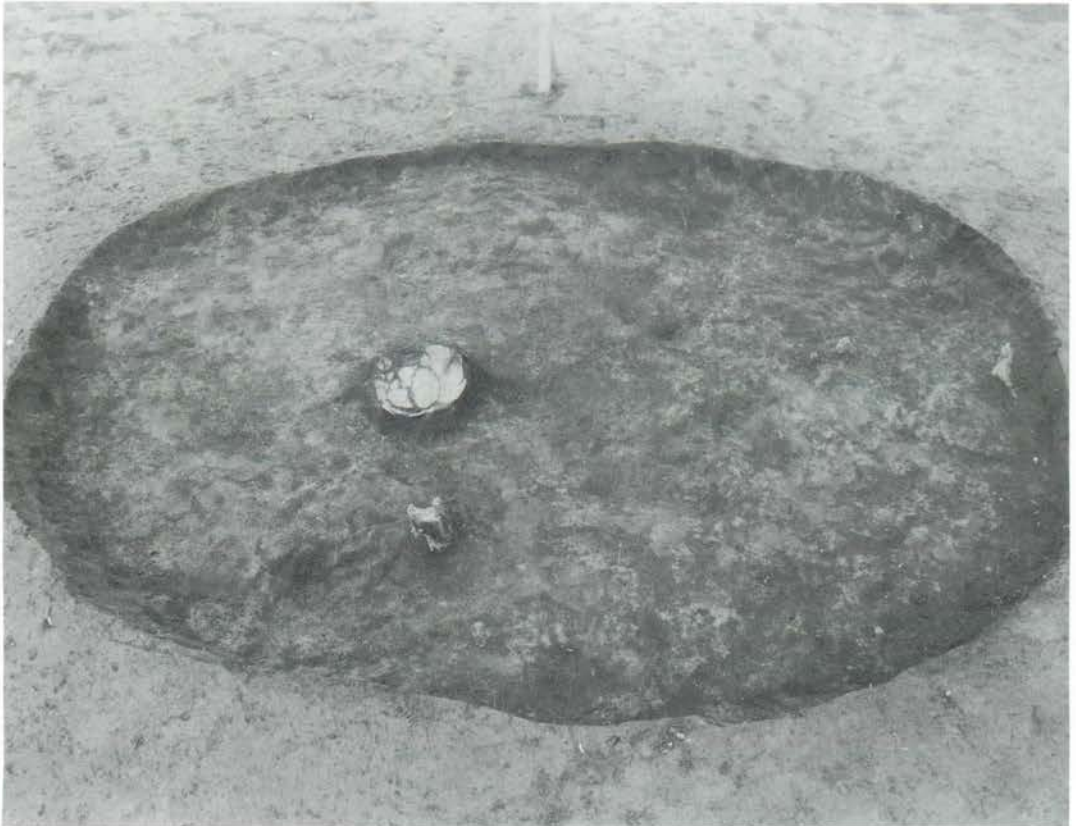
045



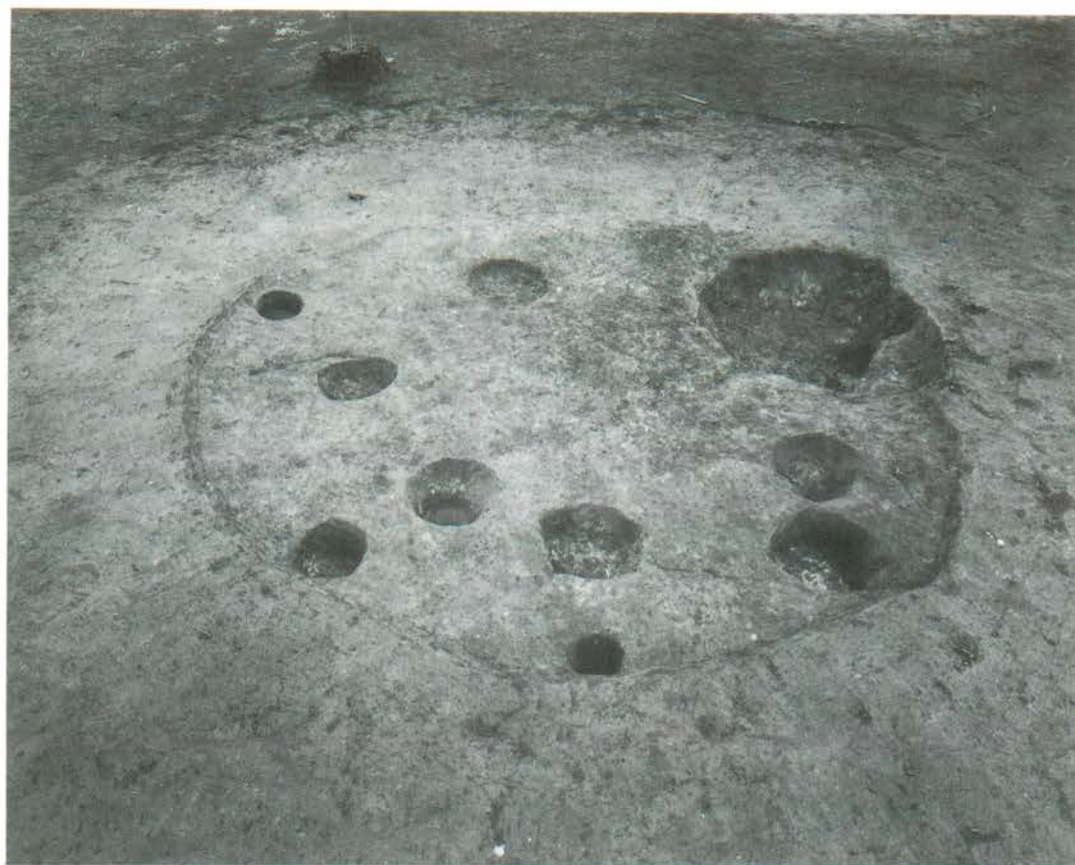
049



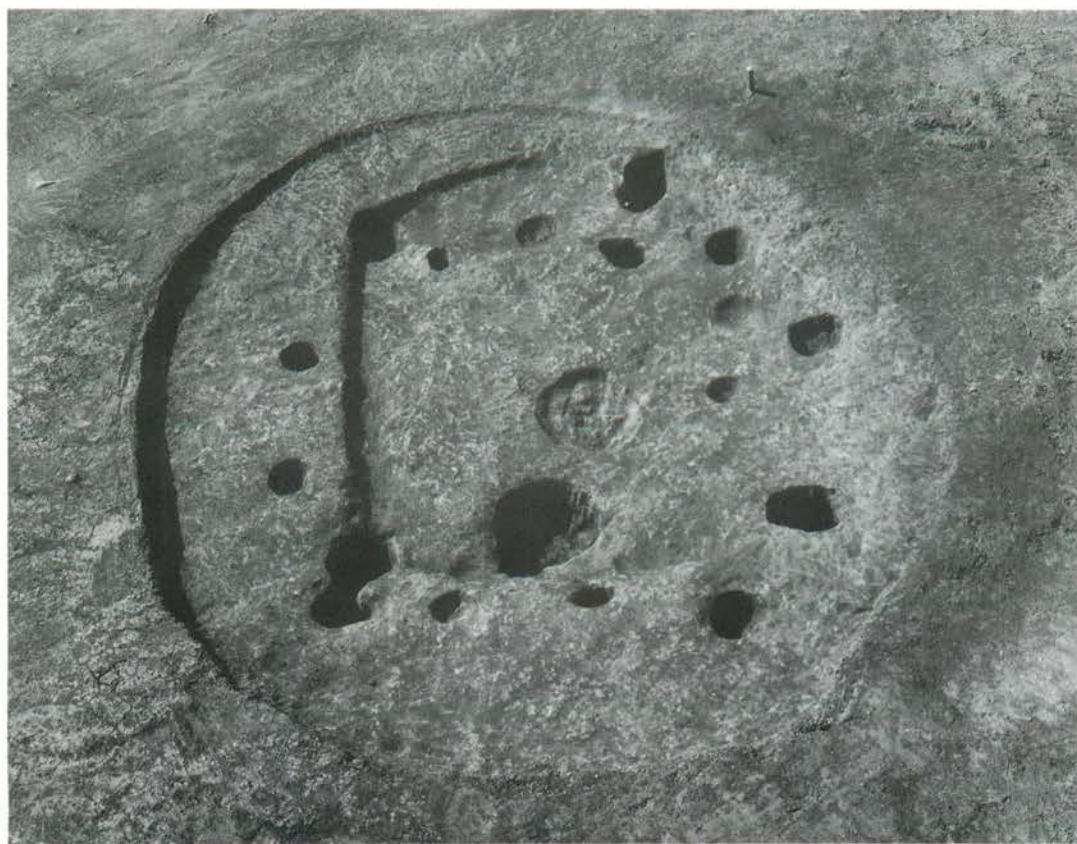
061



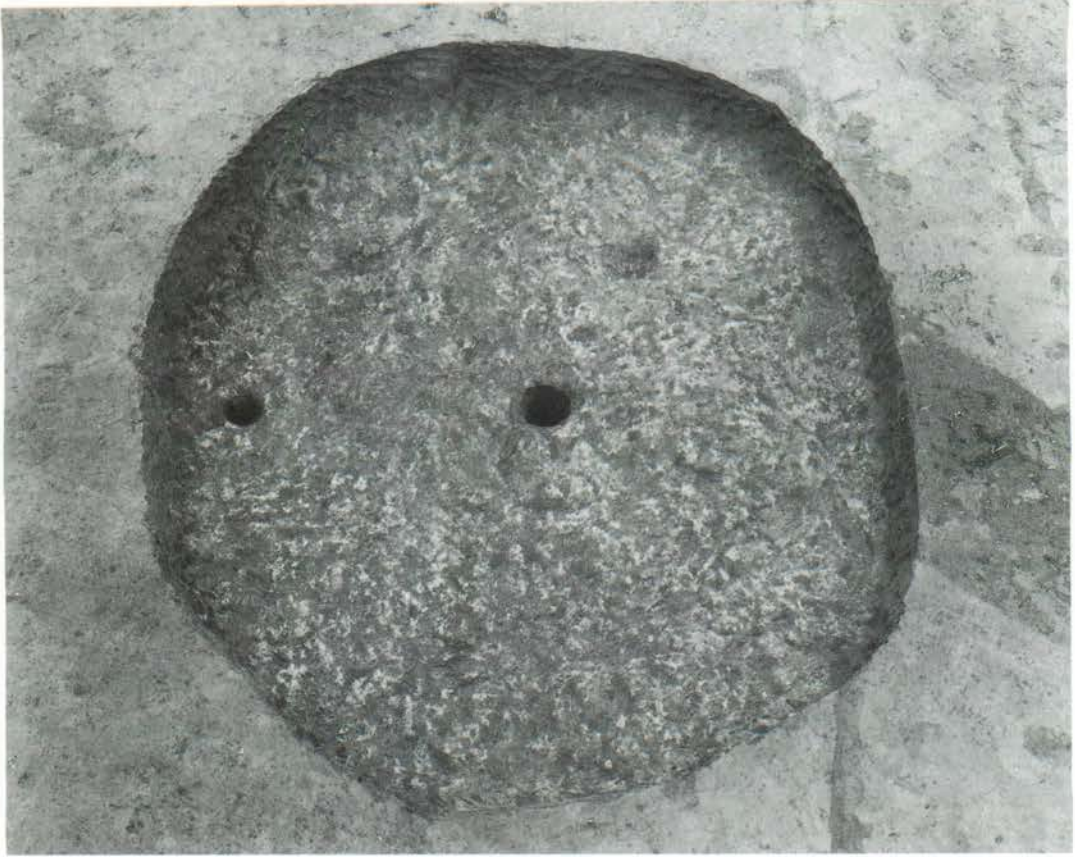
084



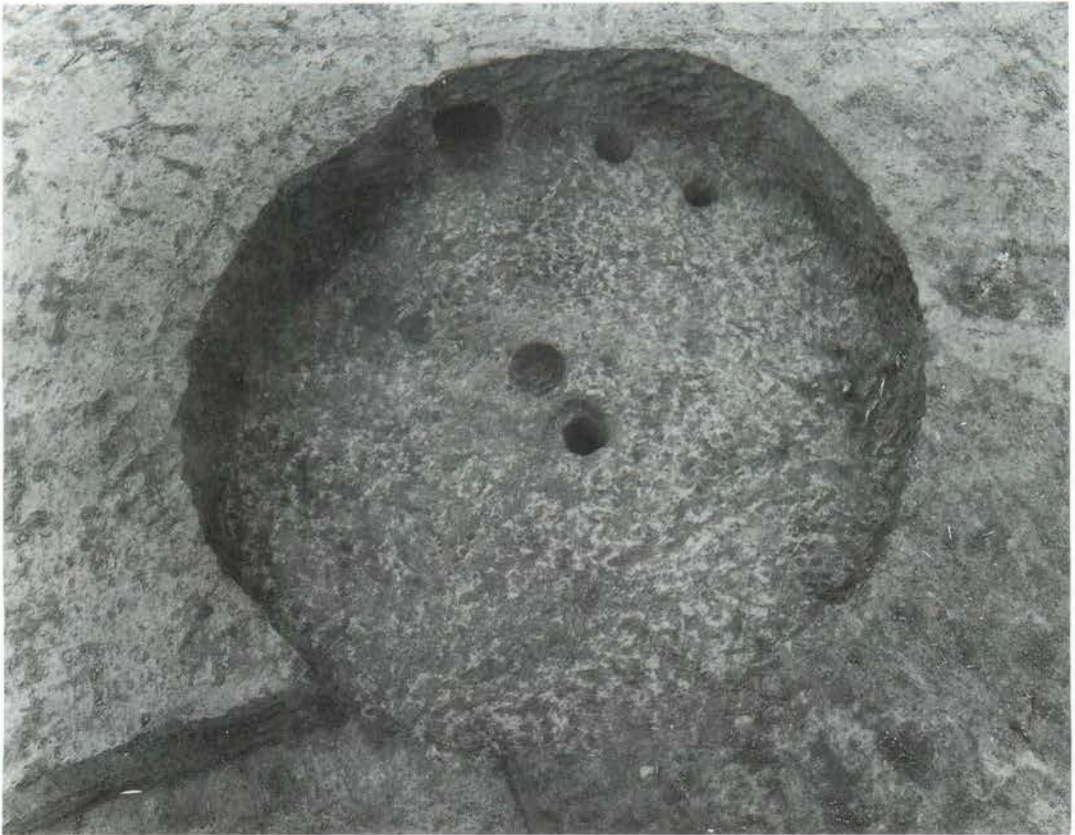
124



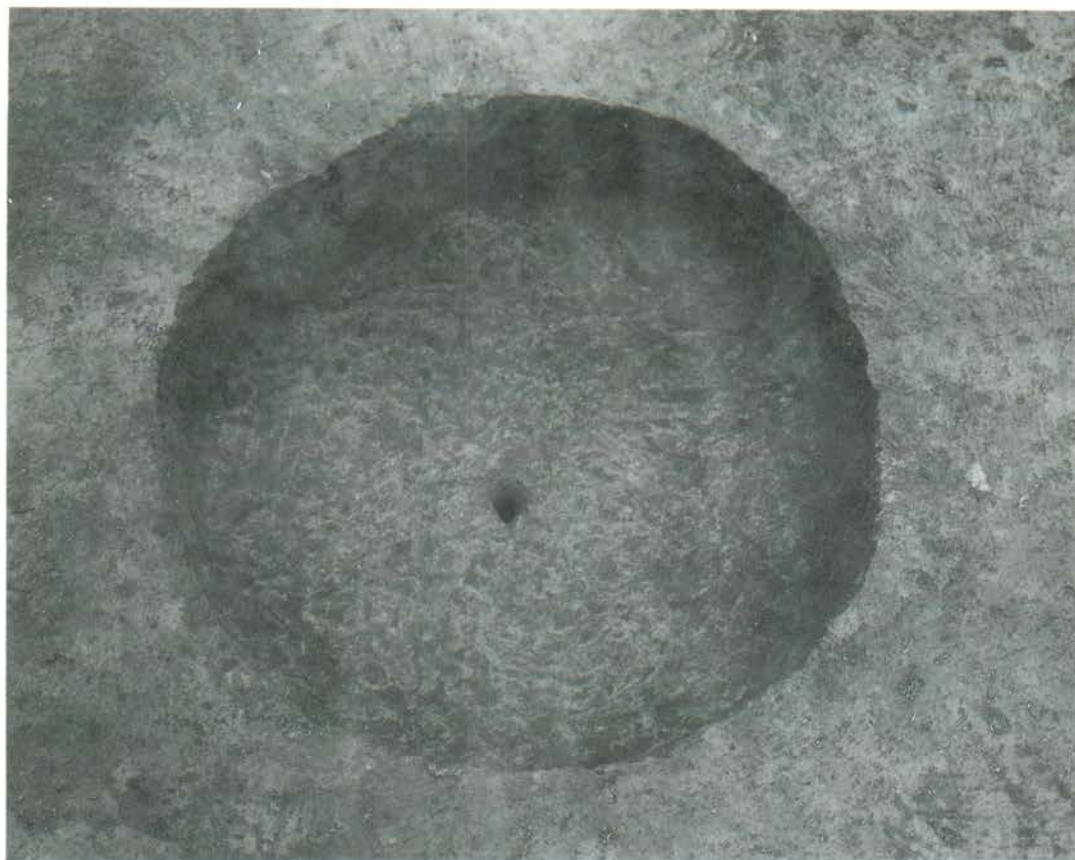
130



144



150



162



040



042



063・091・092



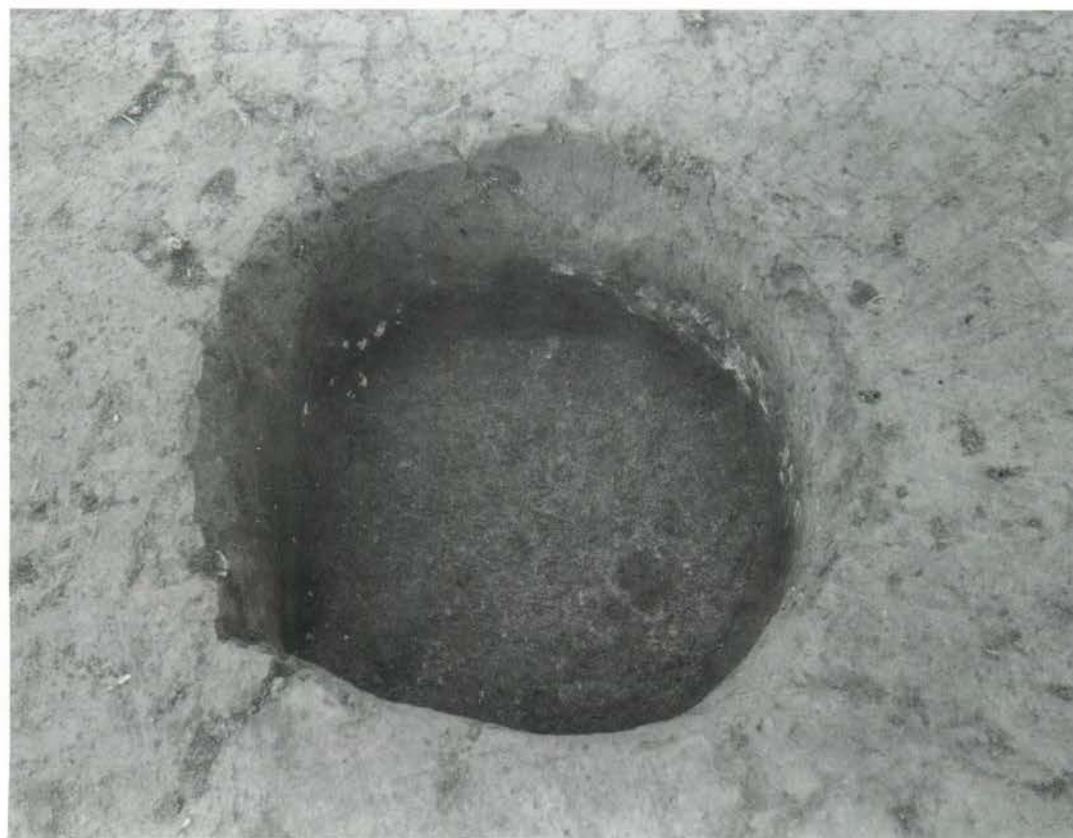
076



077



085



118



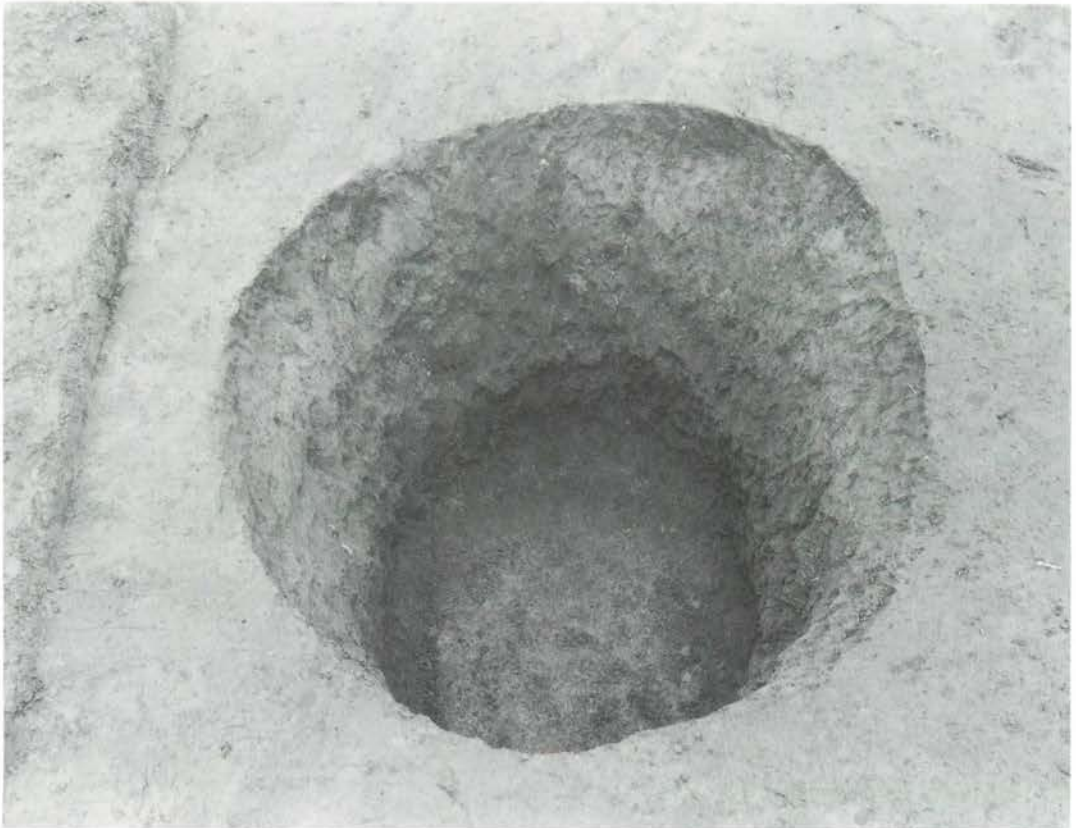
119



145



151



152



153



154



155



156



調査風景(1)



調査風景(2)

No.2ブロック



D09T01-1



D09-222



D09-112



D09-136



D09-193



D10-13



D09-227



D09-264



D09-15



D09-36

No.5ブロック



D08-36



D08-45



D08-75



E07-49

No.8ブロック



カクK-2

No.11ブロック



カクJ-260



カクJ-163



カクJ-52



カクJ-30



No.11ブロック

カクJ-5+カクJ-6



No.10ブロック

カクG-2



カクH-4



No.15ブロック

カクH-1

No.12ブロック



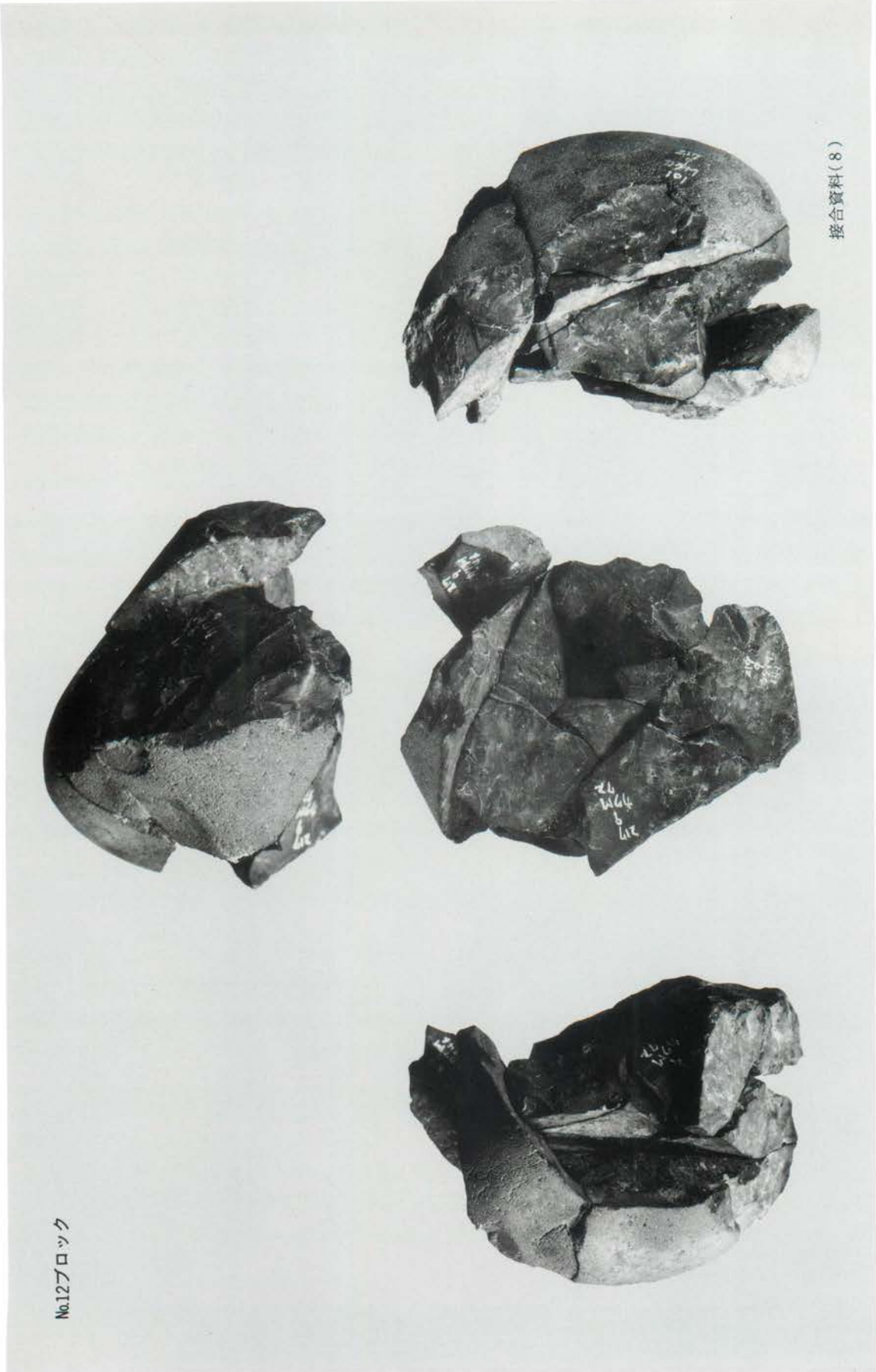
接合資料(9)

接合資料(10)

接合資料(8)



No12ブロック



No.16ブロック



カク G56



カク G60



カク G59



カク G53



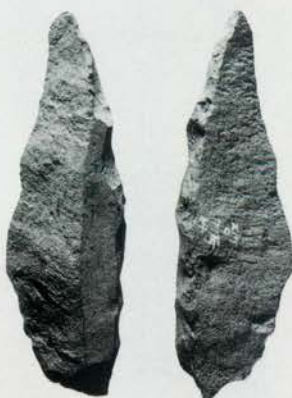
カク G82



カク G40



カク G58



カク G64



カク G63



カク G34



カク G54

No.17ブロック



カク B-1



カク B-211



接合資料



接合資料



接合資料



接合資料(44)





カクD-10



No.21ブロック



No.18ブロック
カクA-1



No.19ブロック



カク I 18

No.20ブロック



カク I 21



カク I 16



カク I 5

No.20ブロック



カクI 8



カクI 3



カクI 6

No.21ブロック



カクD11



カクI 7



カクD 7



002



004



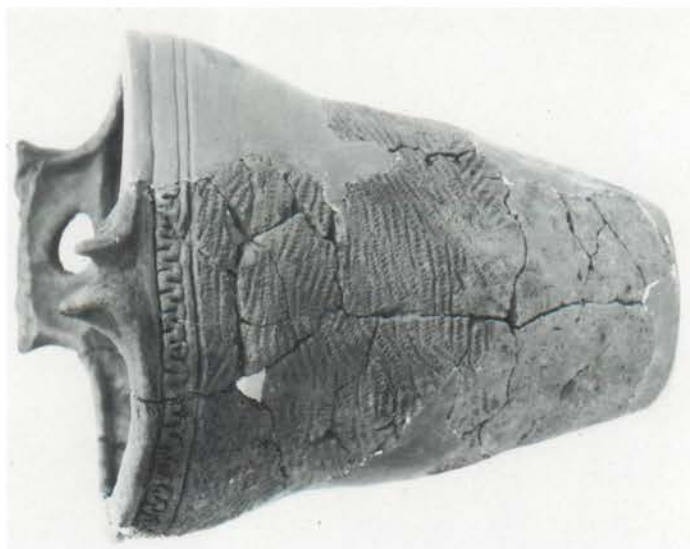
012



014



033



背面



側面



032 正面





037



044



045



046



052





055



056



057



058



060



071



075



066



069



076



084



087



129



129



134



074



128



135



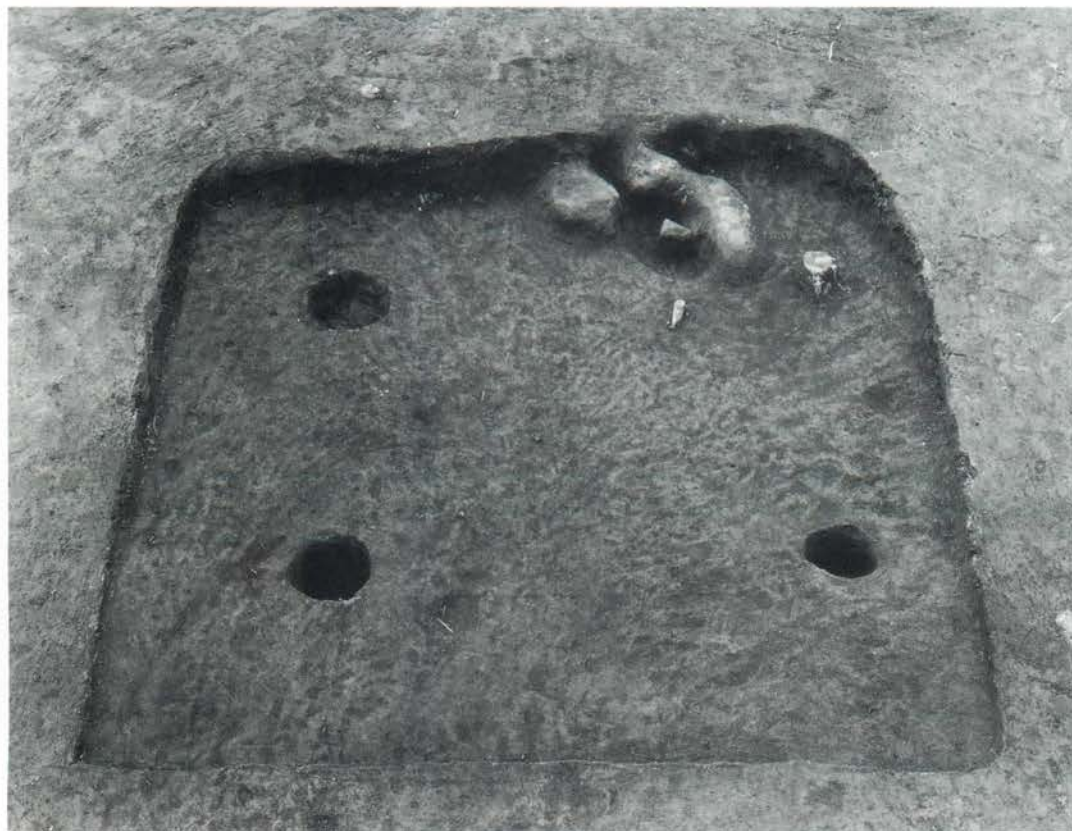
001



002



003



004



遺跡



土層（黒色帯上部にATブロック）



先土器No.1 地点



先土器No.2 地点



先土器No 3 地点



先土器No 8 地点



016



022



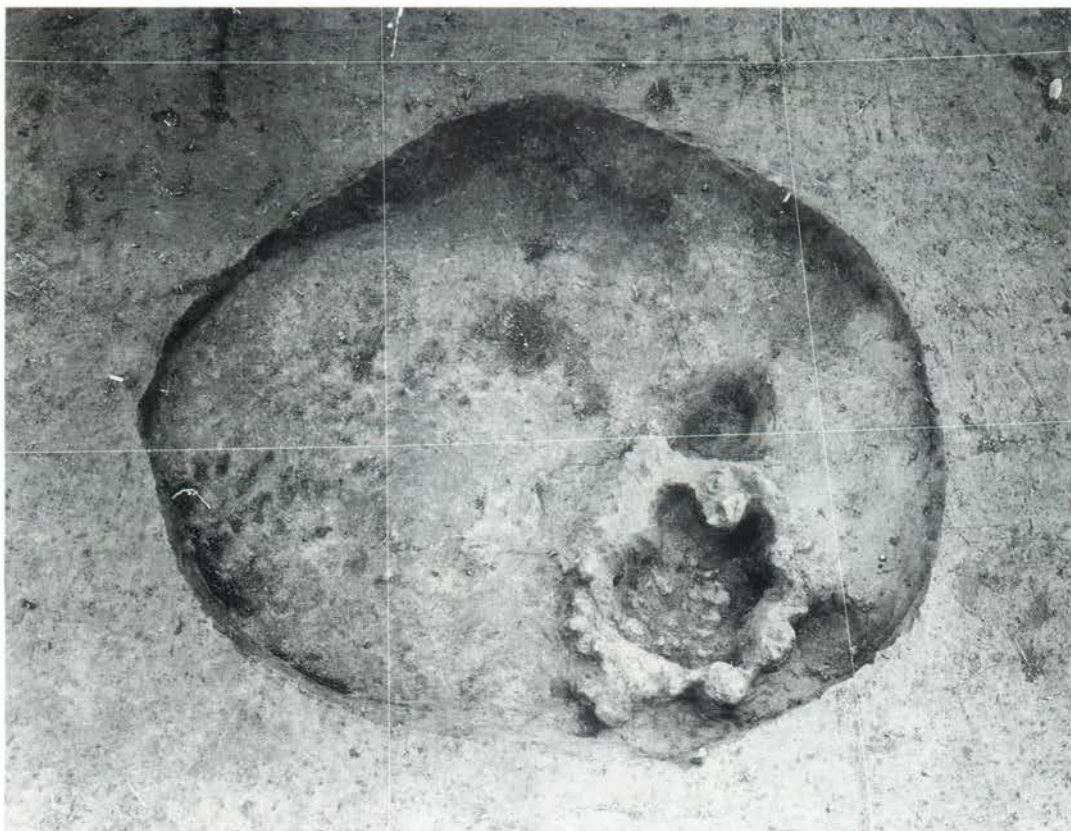
025



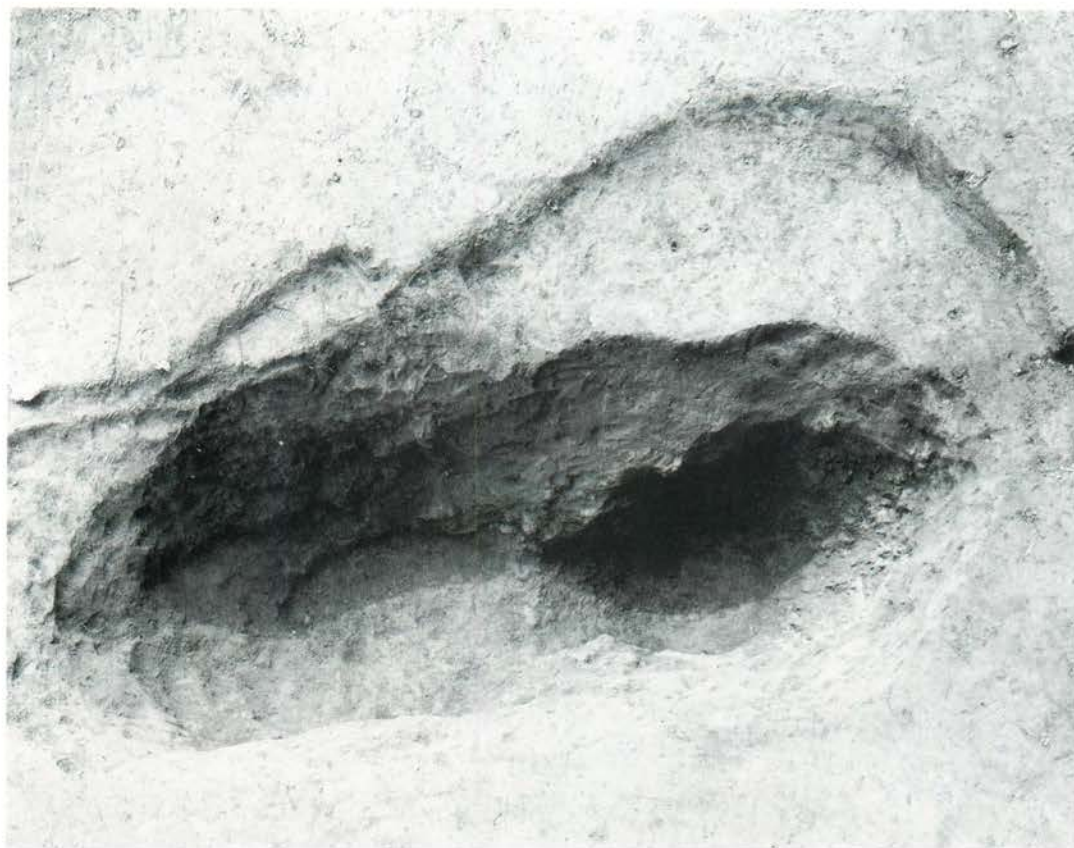
027



028



038



053



062



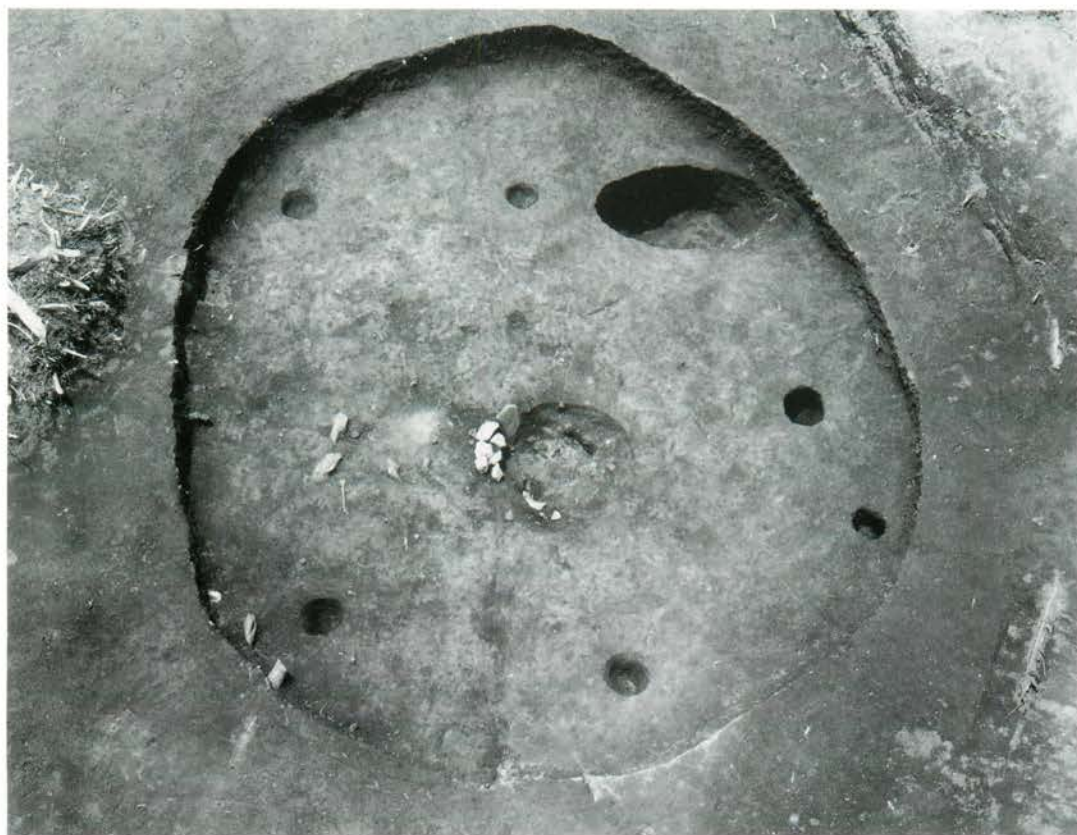
076



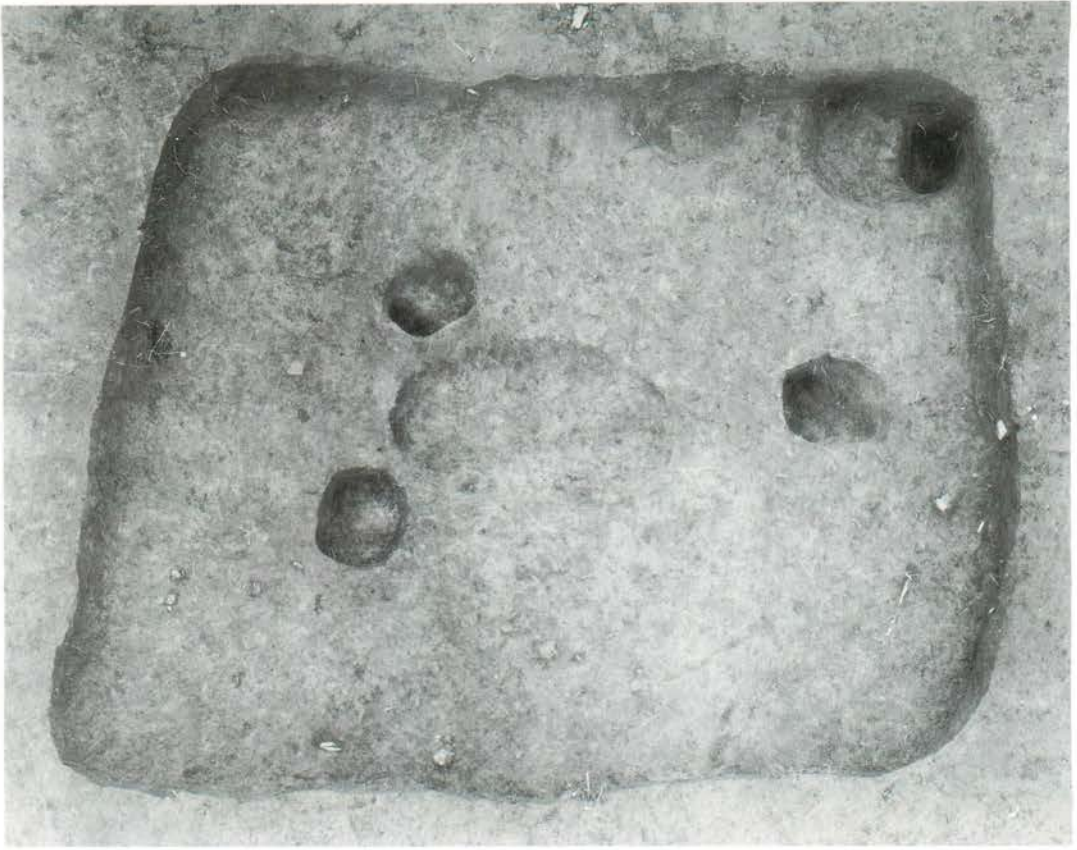
078



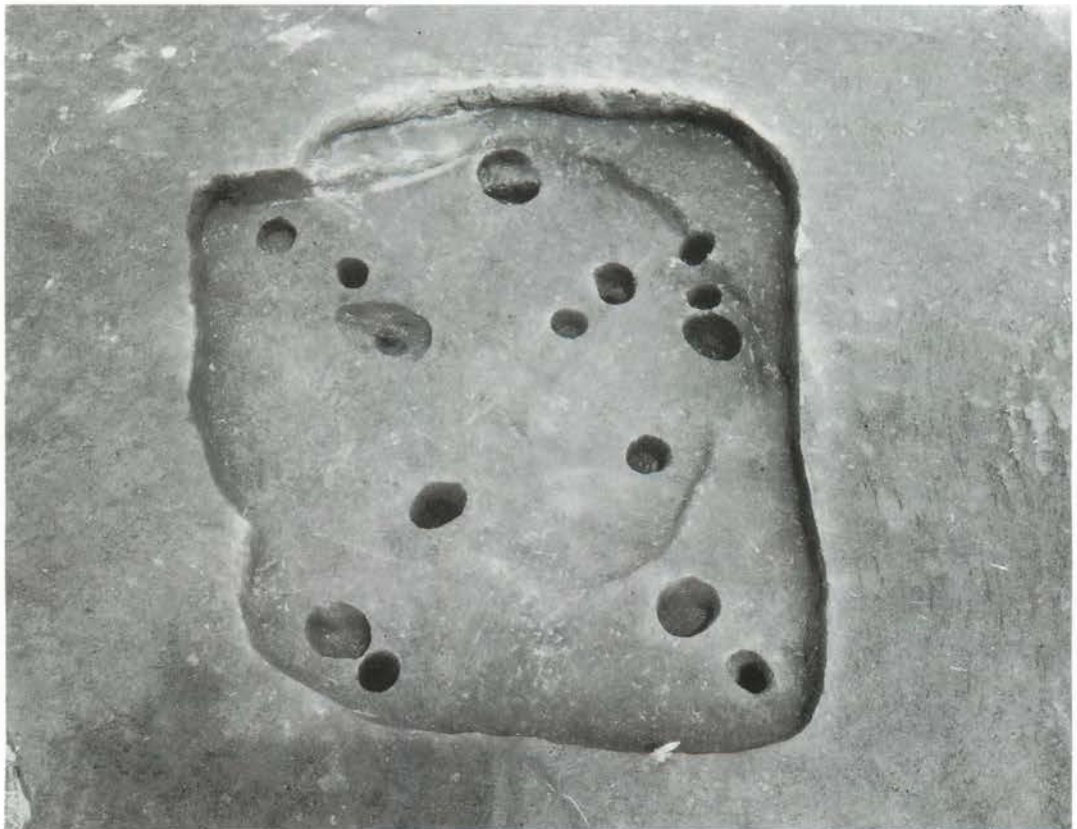
005



012



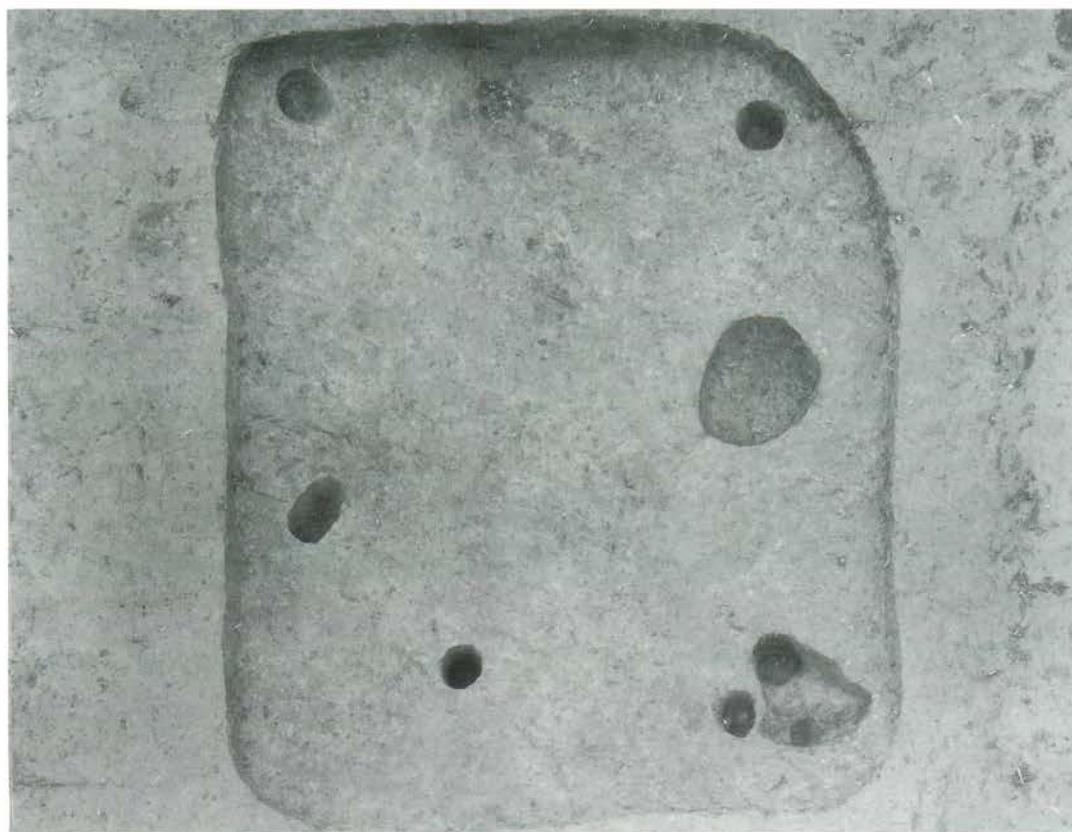
029



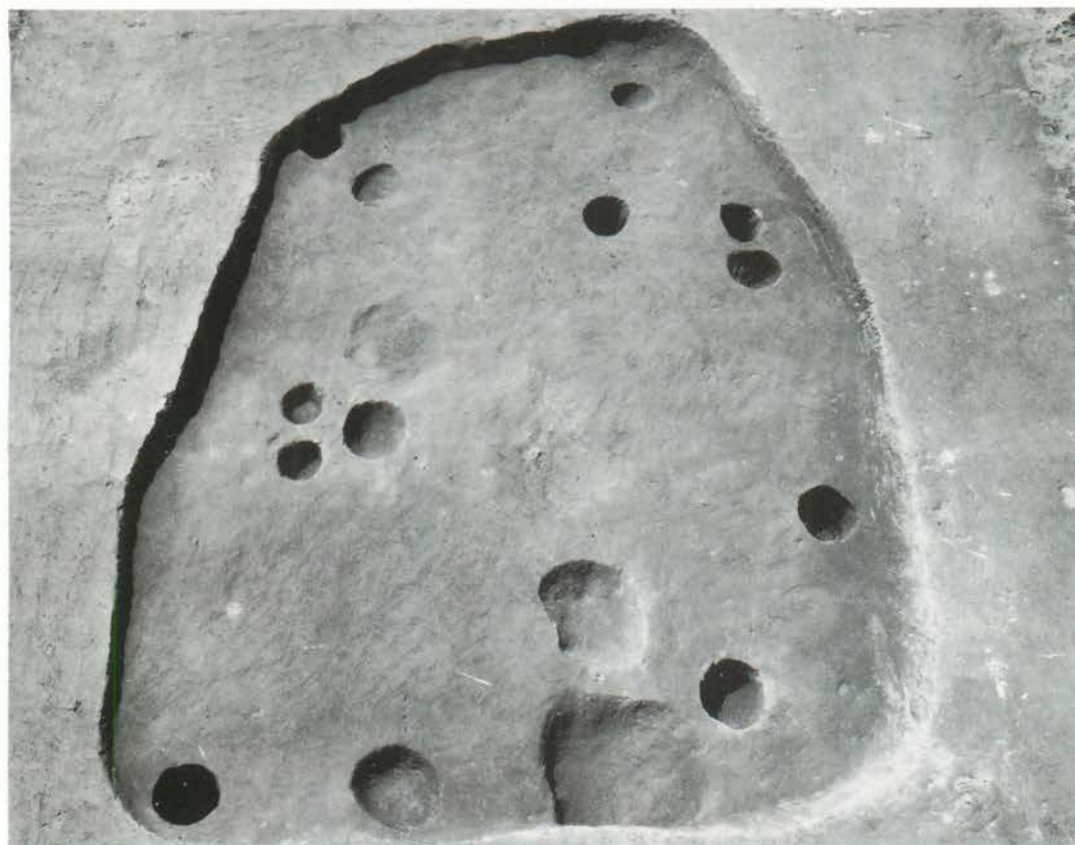
030



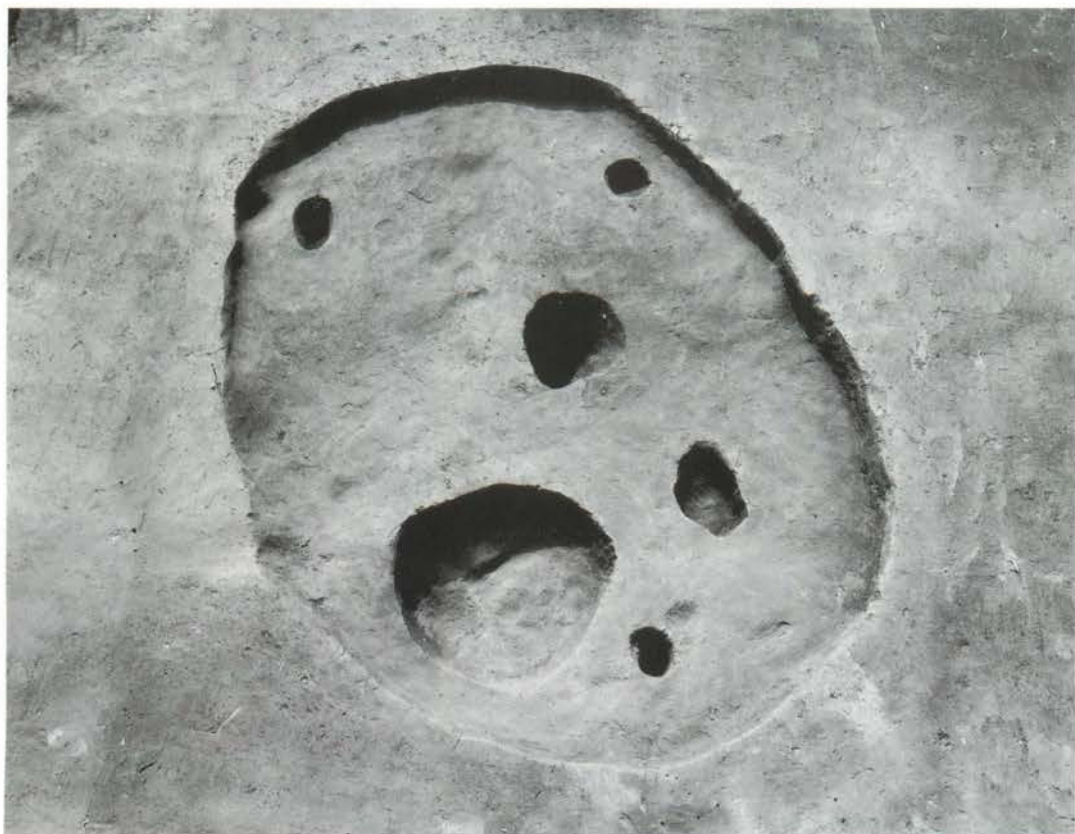
035



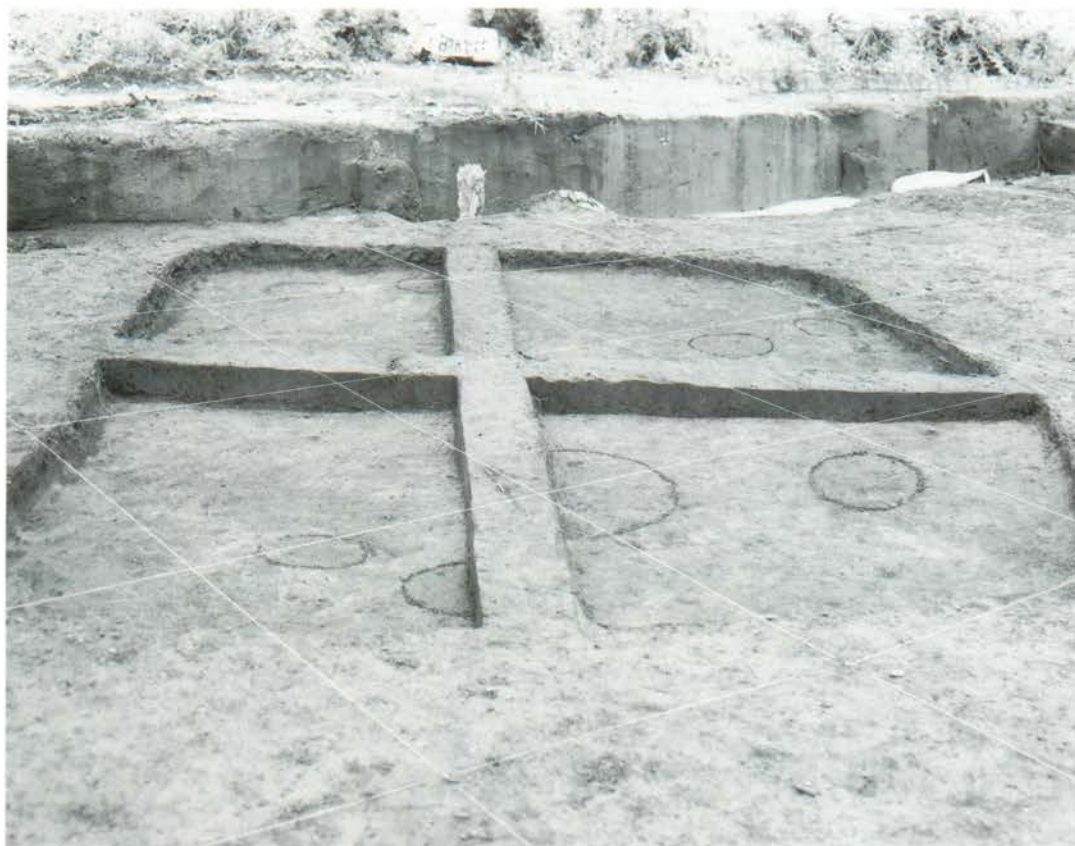
037



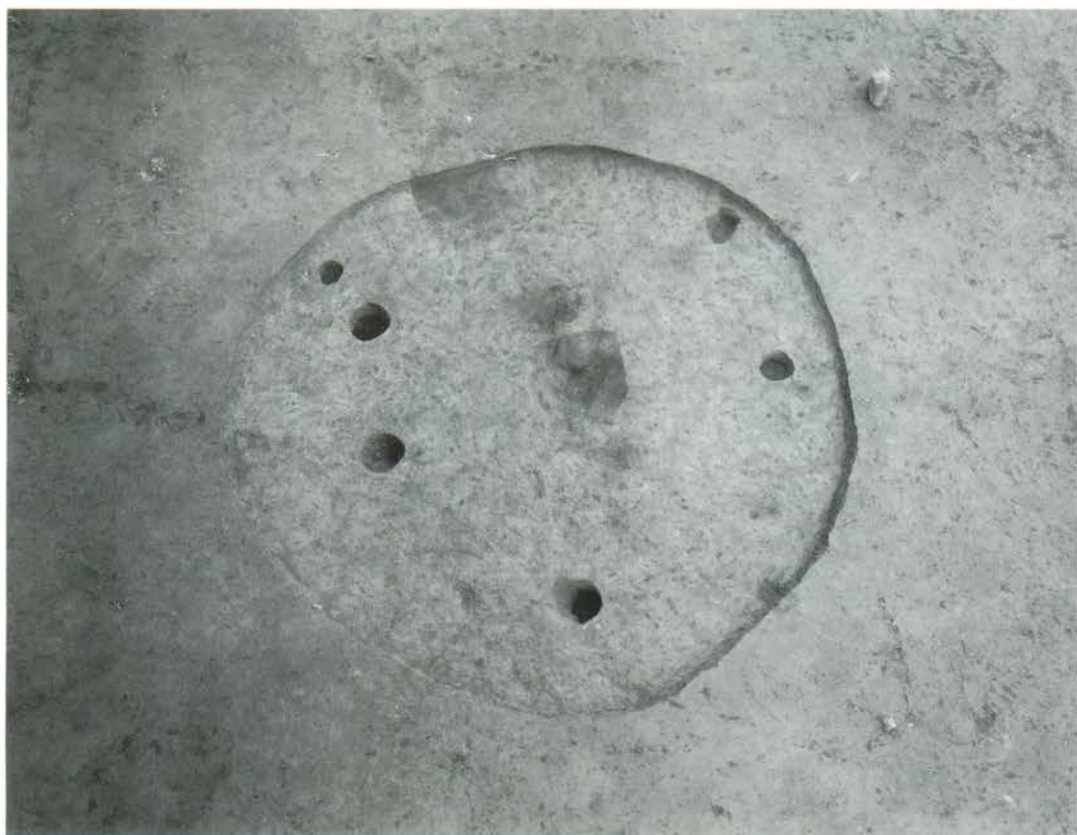
039



040



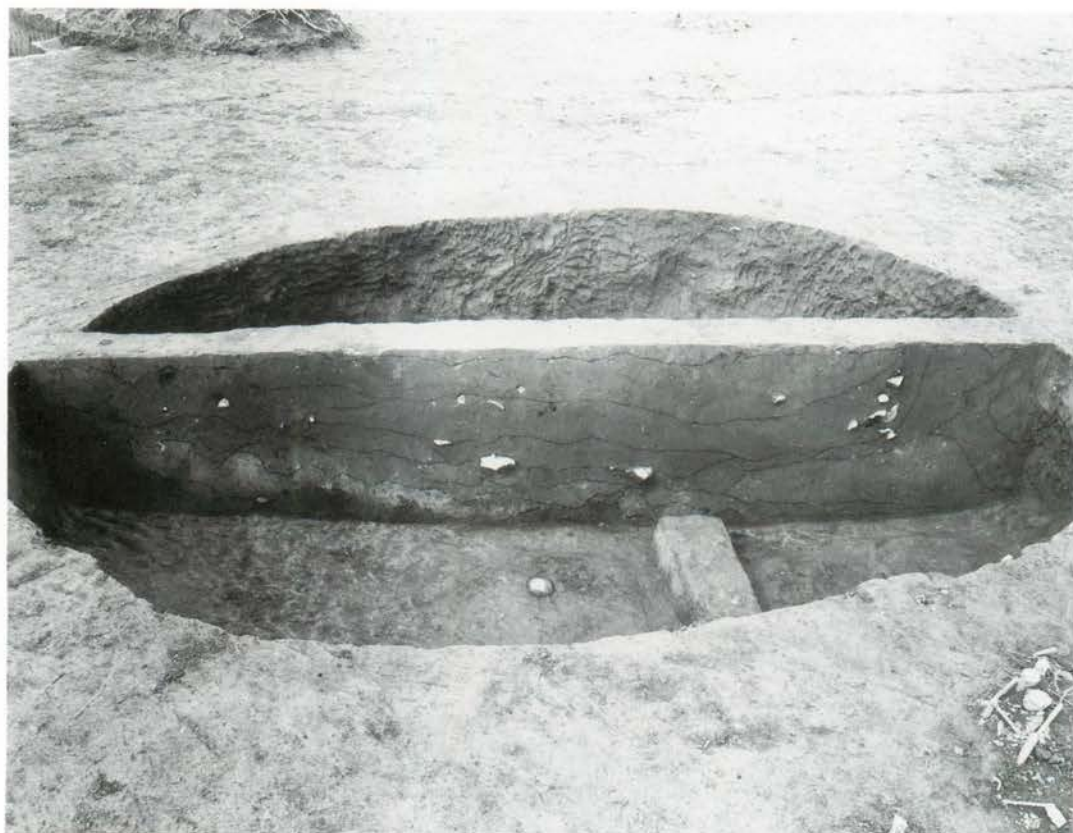
041



052



081



081



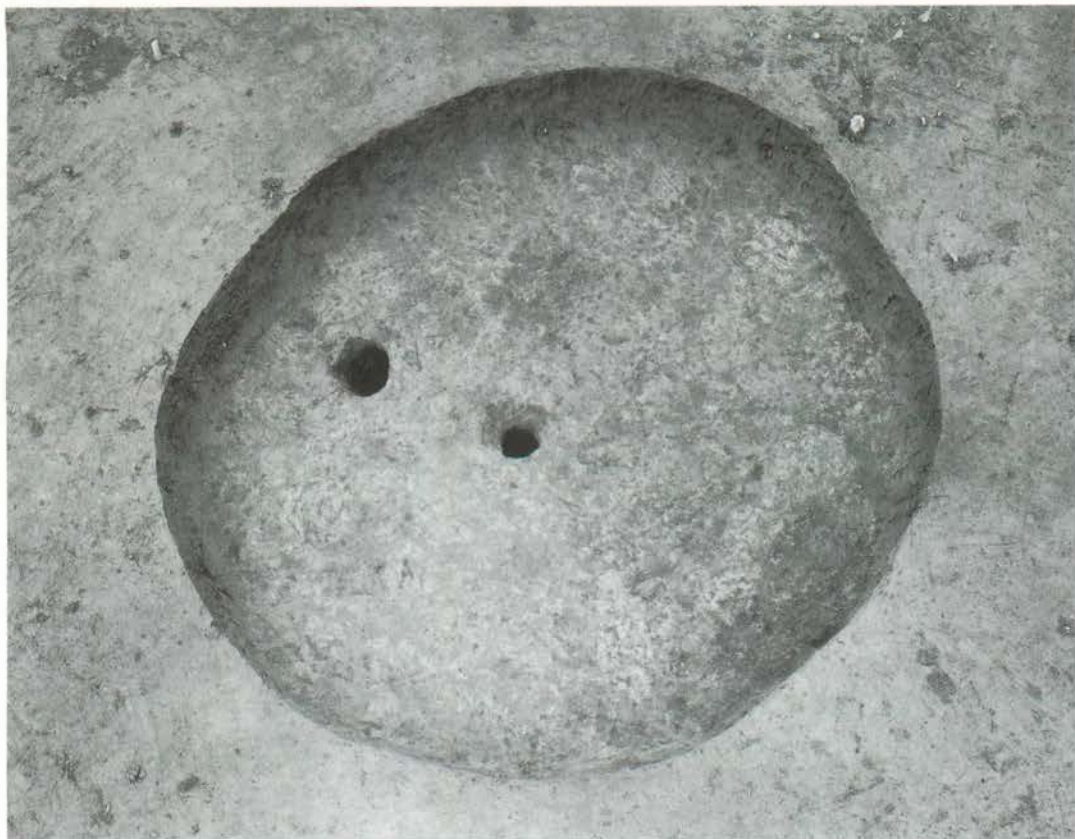
081



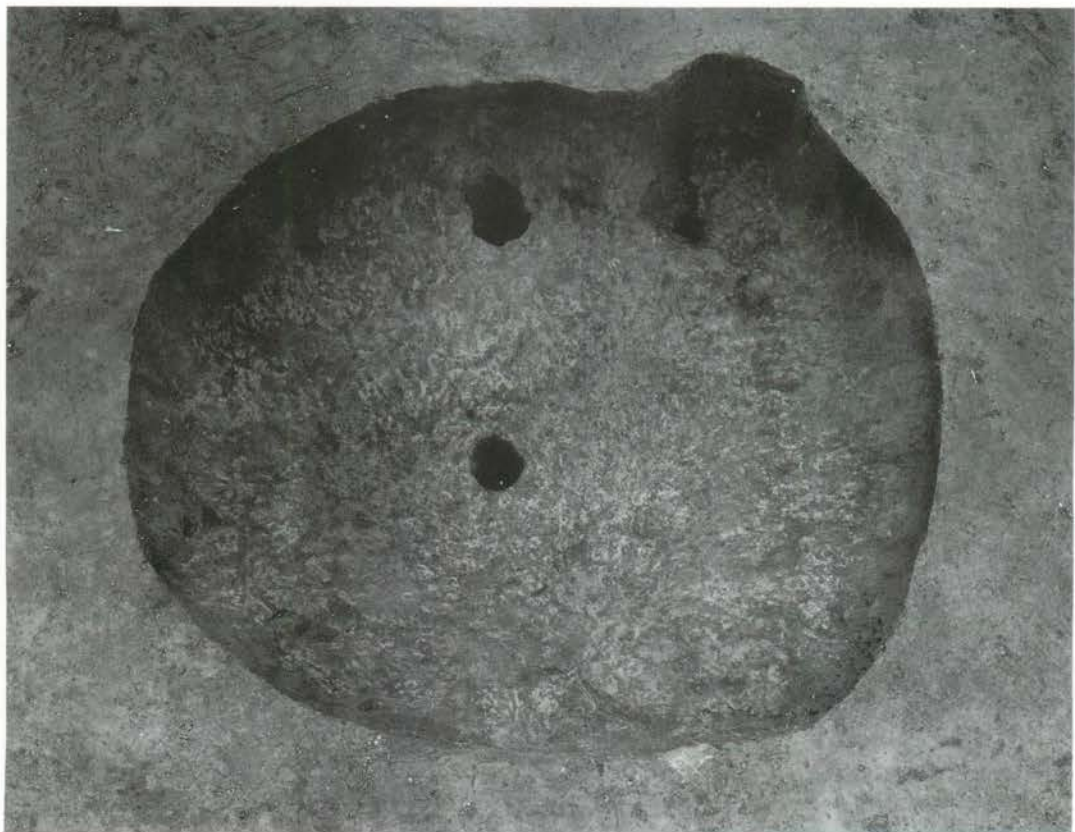
081



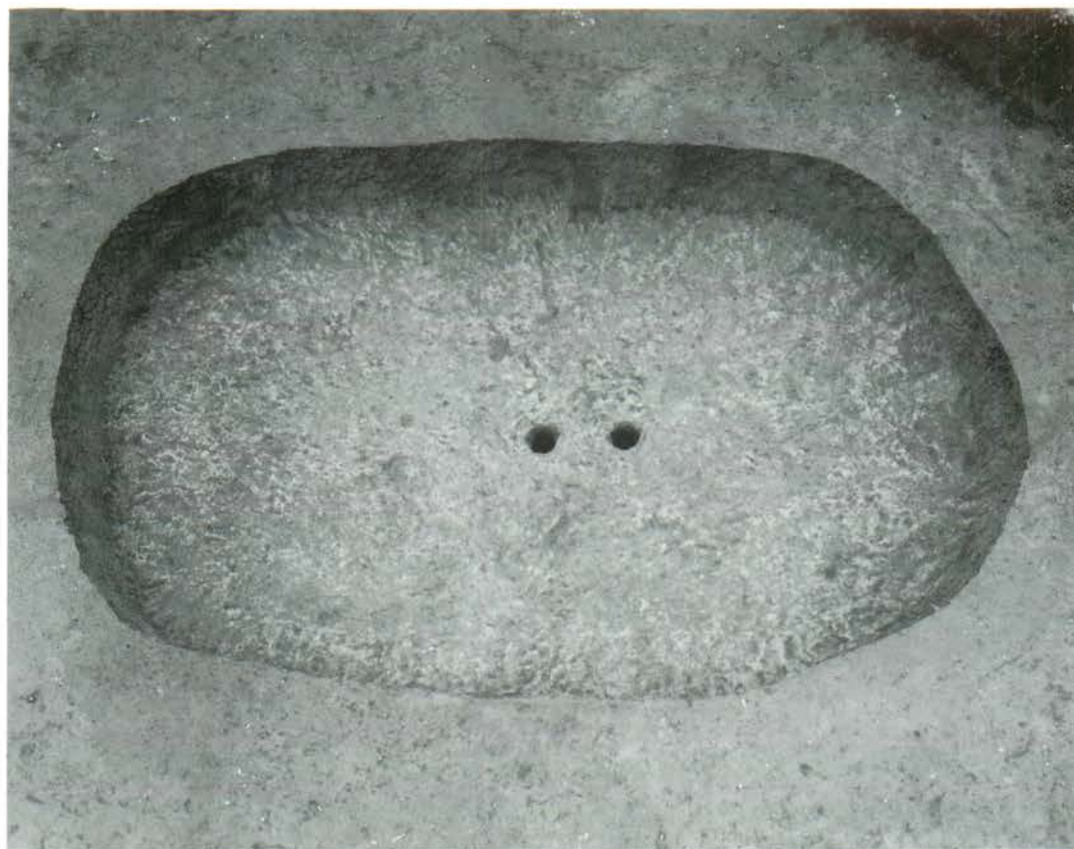
087



090



091



096



096



097



097



004



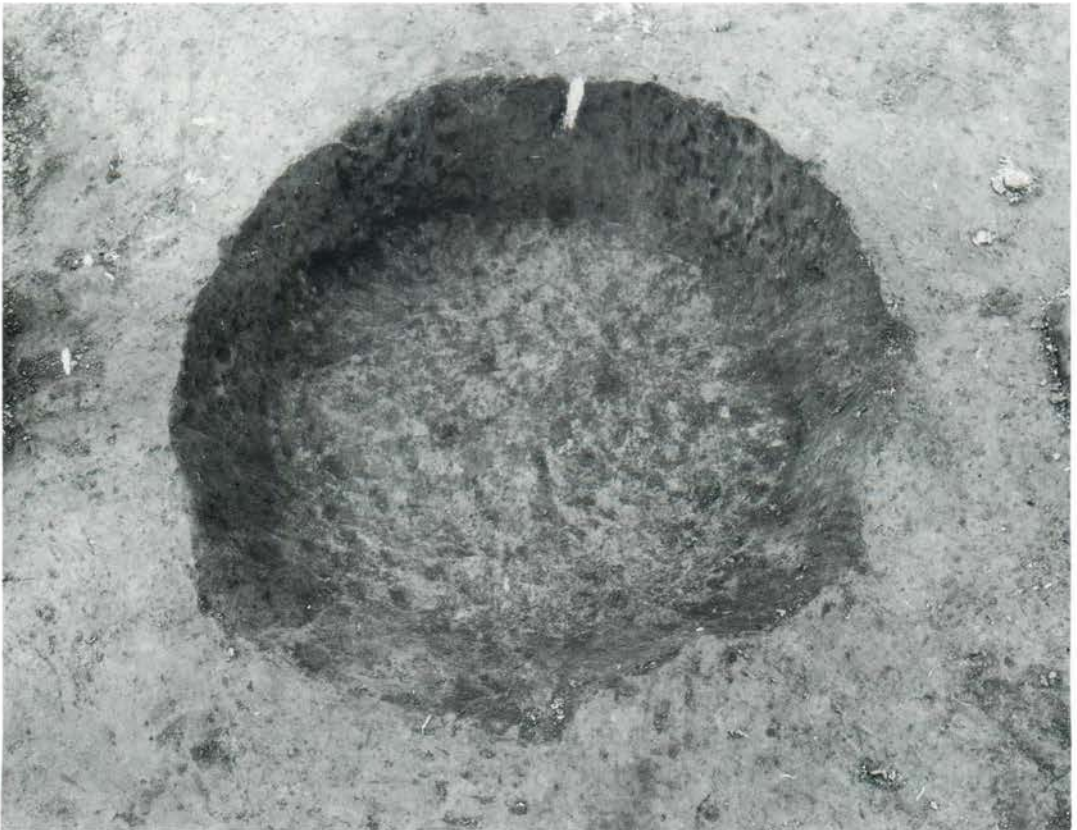
015



050



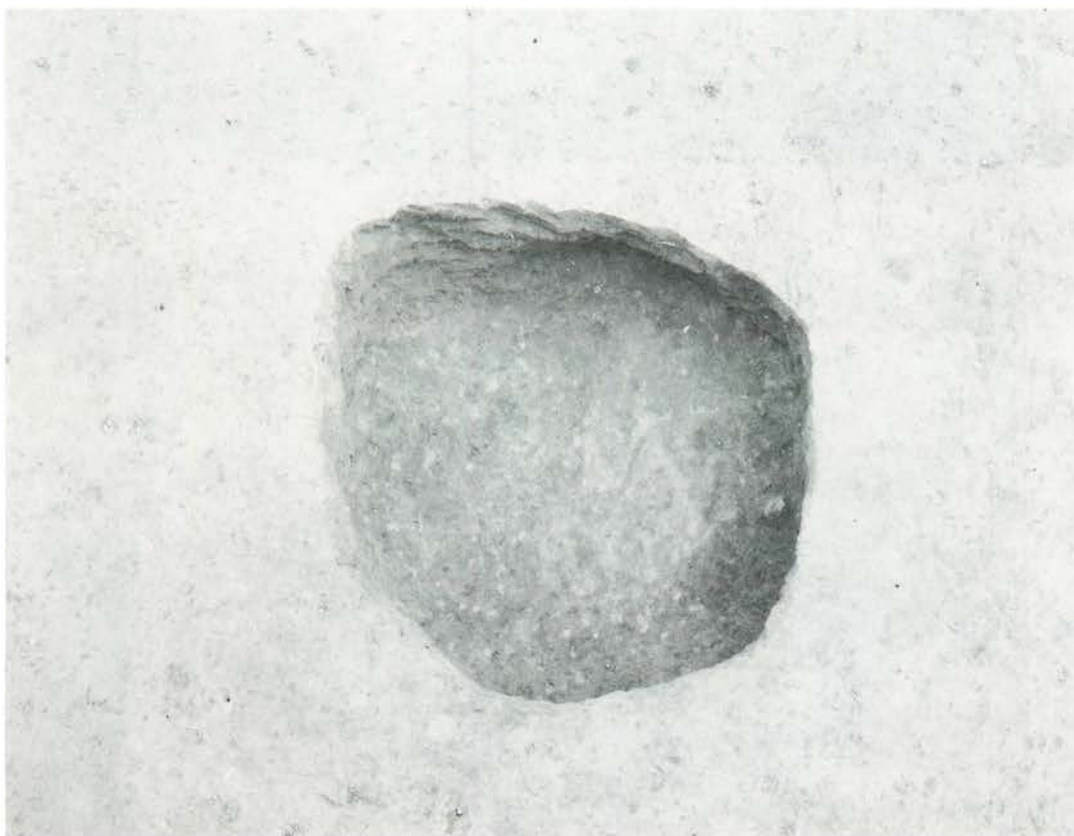
054



056



058



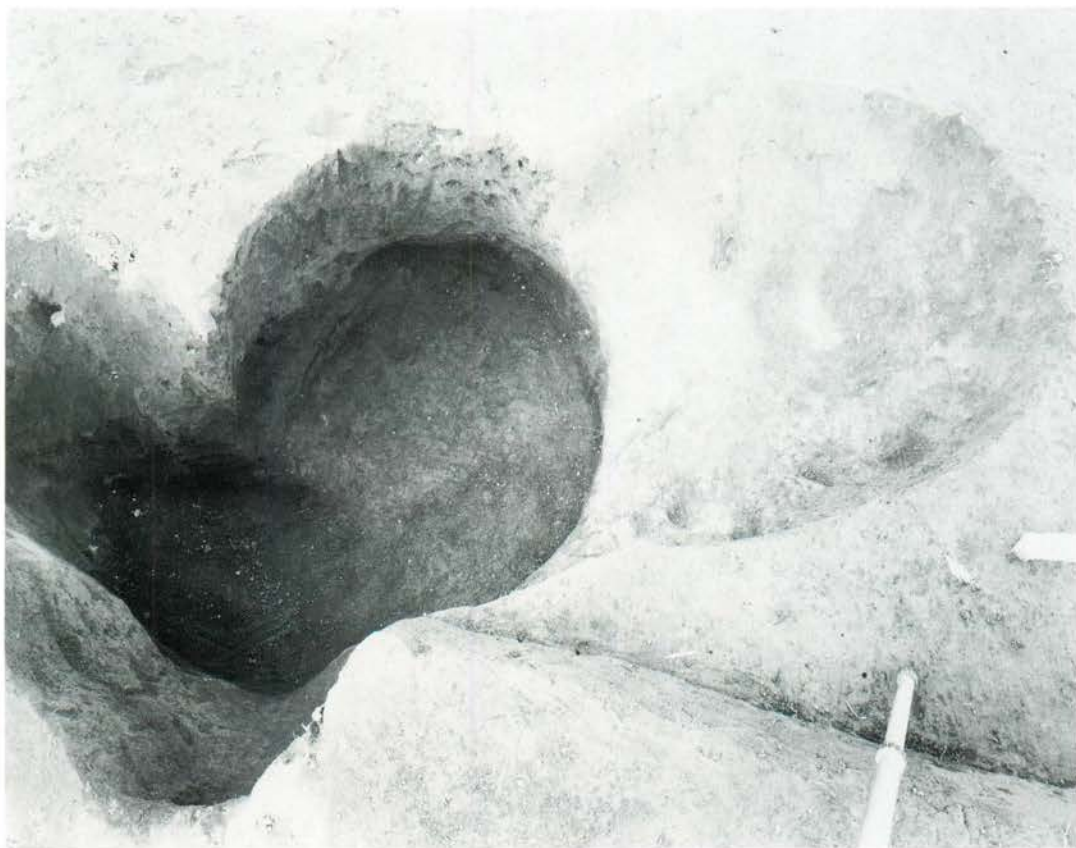
064



064



069



059・070



084



084



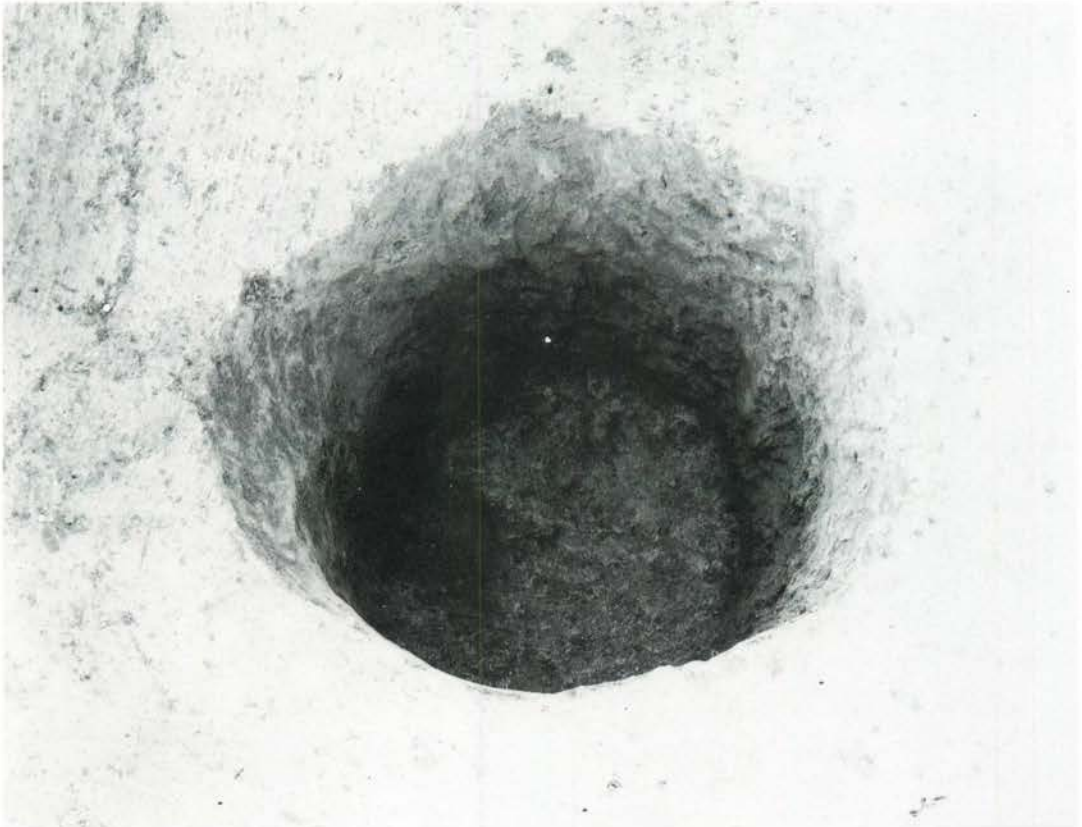
086



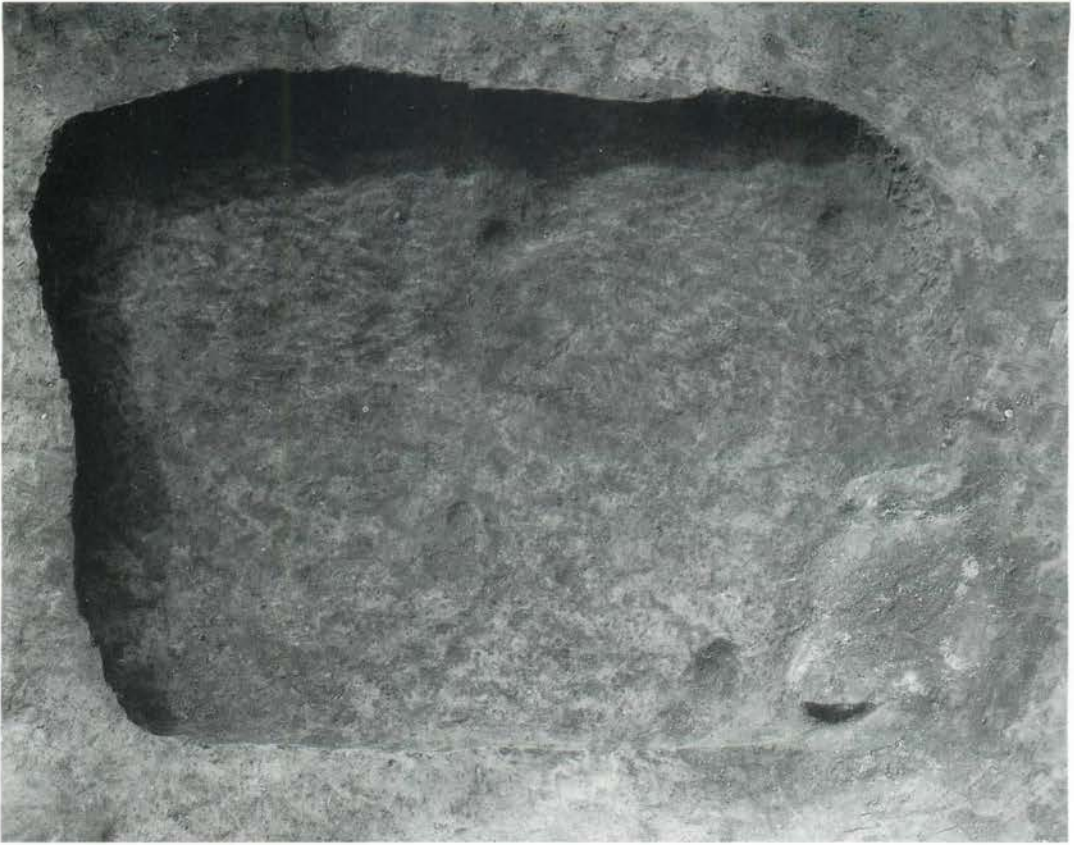
092



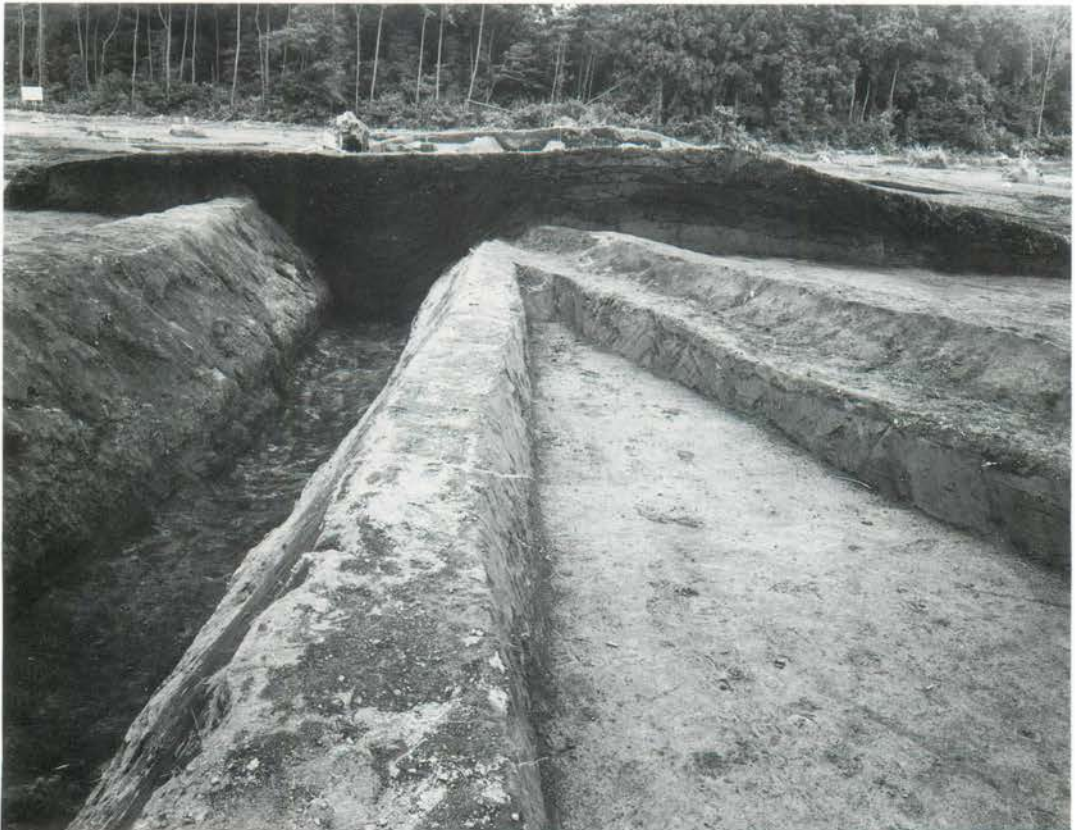
094



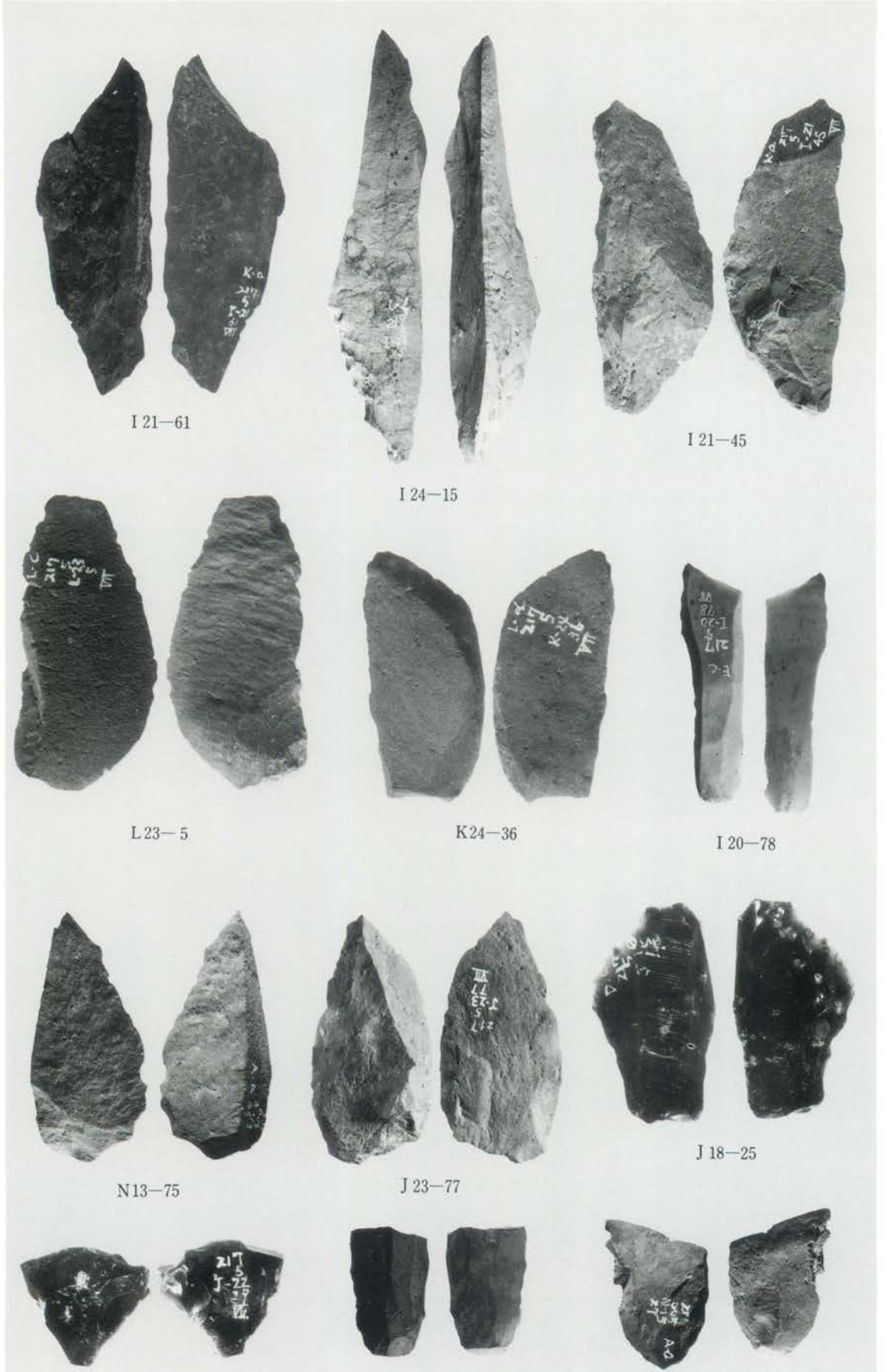
095



093



馬土手



I 21-61

I 21-45

I 24-15

L 23-5

K 24-36

I 20-78

N 13-75

J 23-77

J 18-25

J 22-29

I 20-3

N 13-27



J 22-33

J 23-88



J 17-77

K 22-6



K 18-4

I 23-25



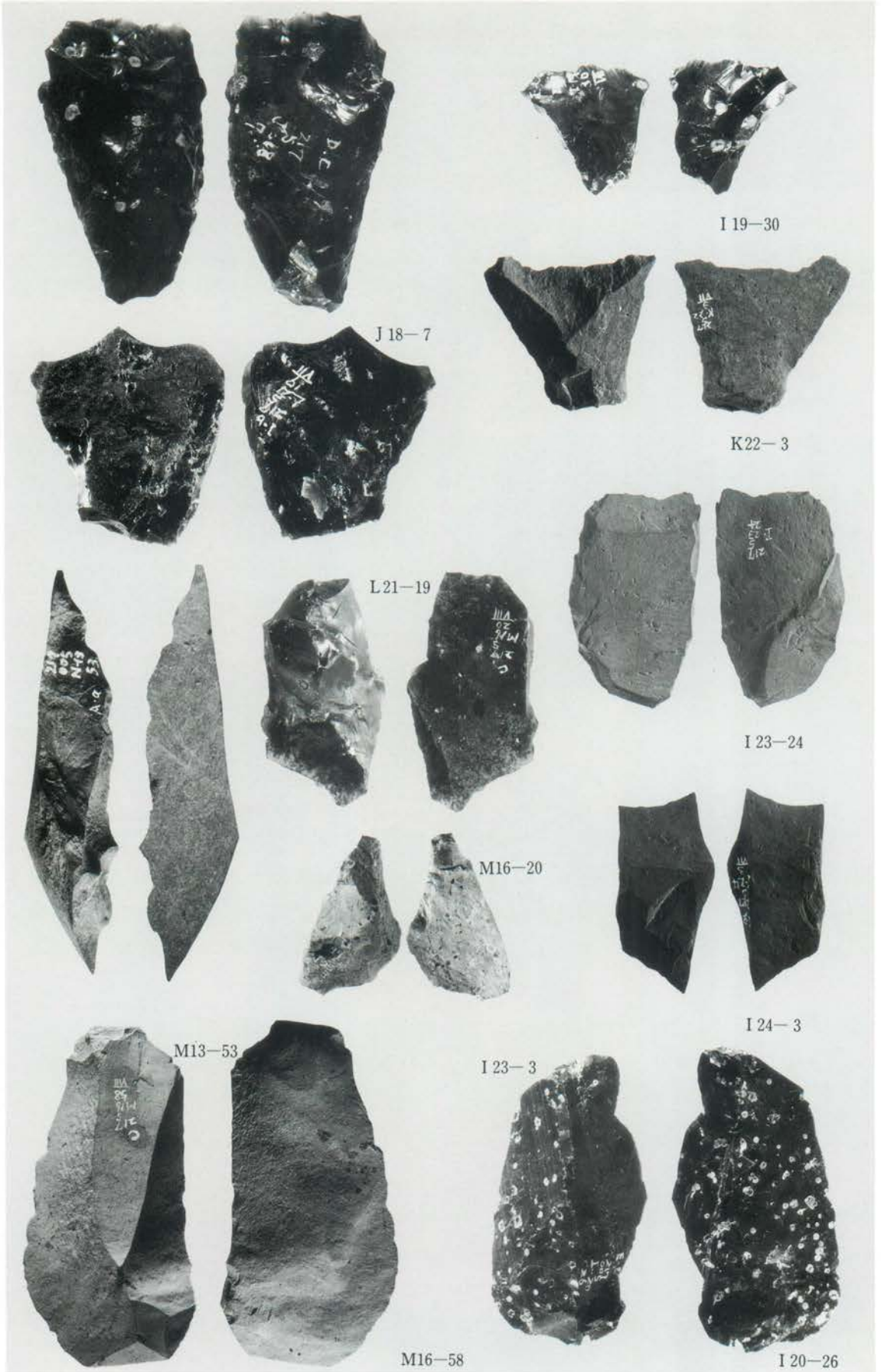
J 23-6



I 23-14



J 23-65

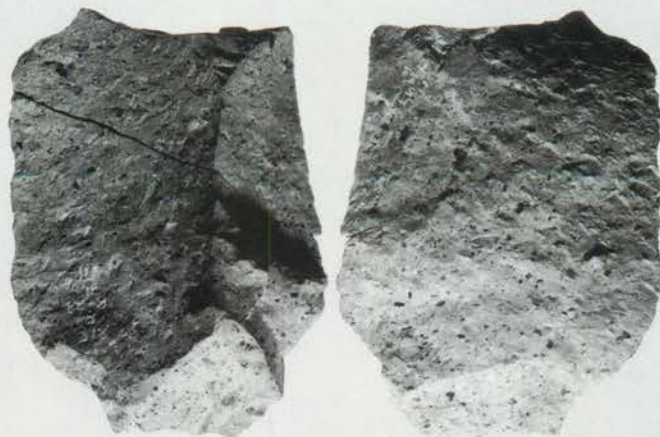




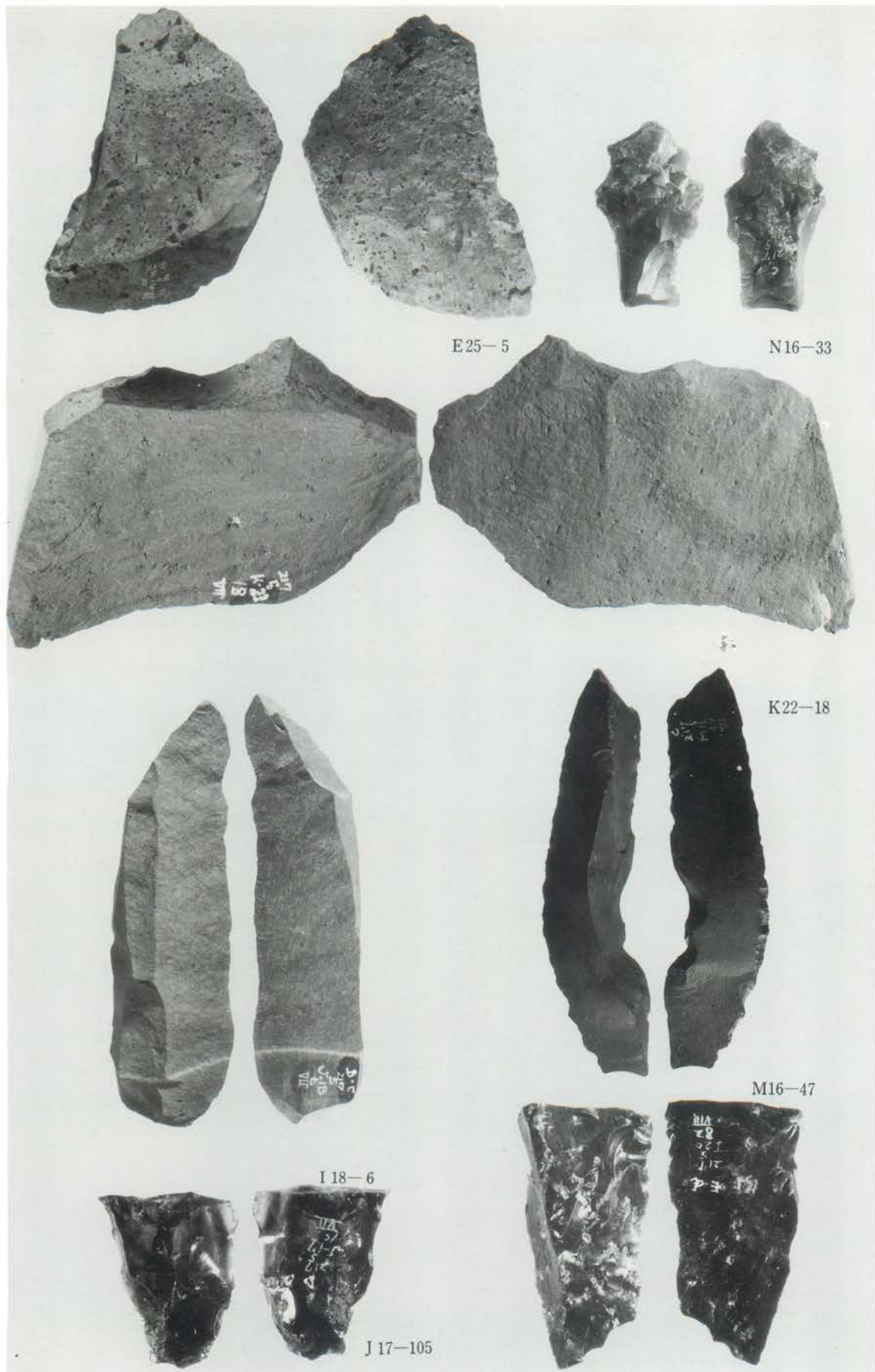
M16-32



K24-10 + K24-19



I 23-4 + K23-31



E25-5

N16-33

K22-18

M16-47

I 18-6

J 17-105



K23-17



J 18-20



N16-6



I 20-60 + I 20-125



K20-80



K20-162



J 18-38



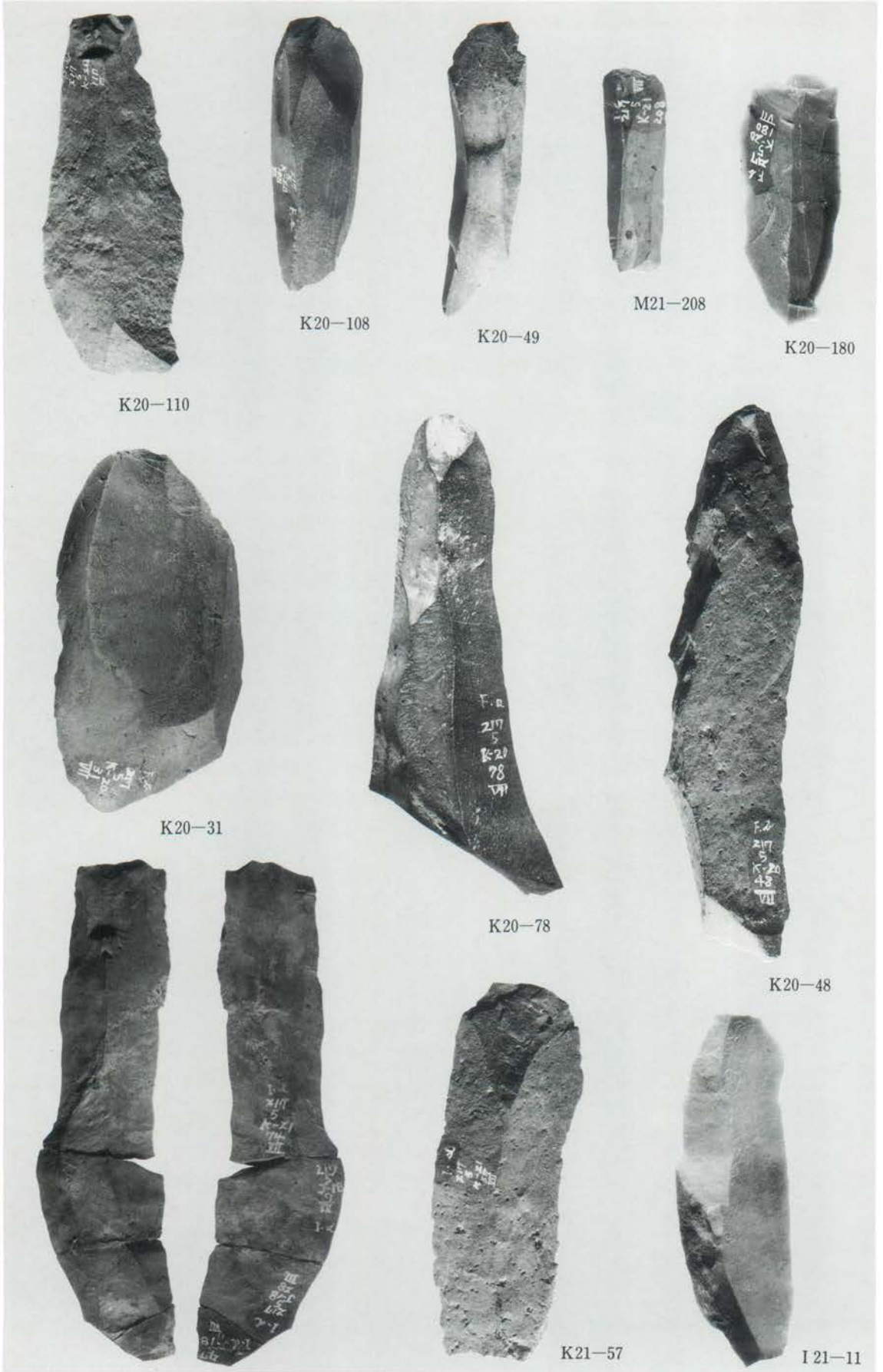
J 18-17



J 18-14



K20-153



K20-110

K20-108

K20-49

M21-208

K20-180

K20-31

K20-78

K20-48

K21-57

I 21-11



I 21-25



M19-8



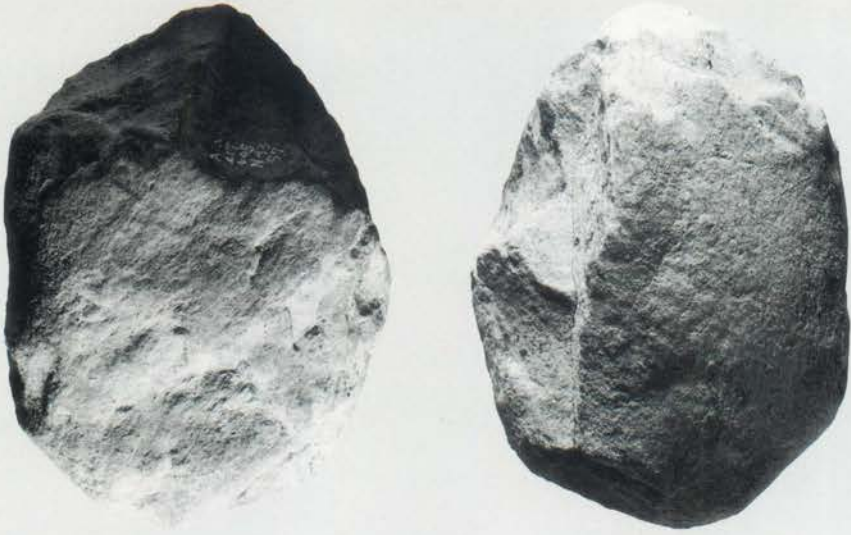
M16-26



N13-31



I20-103



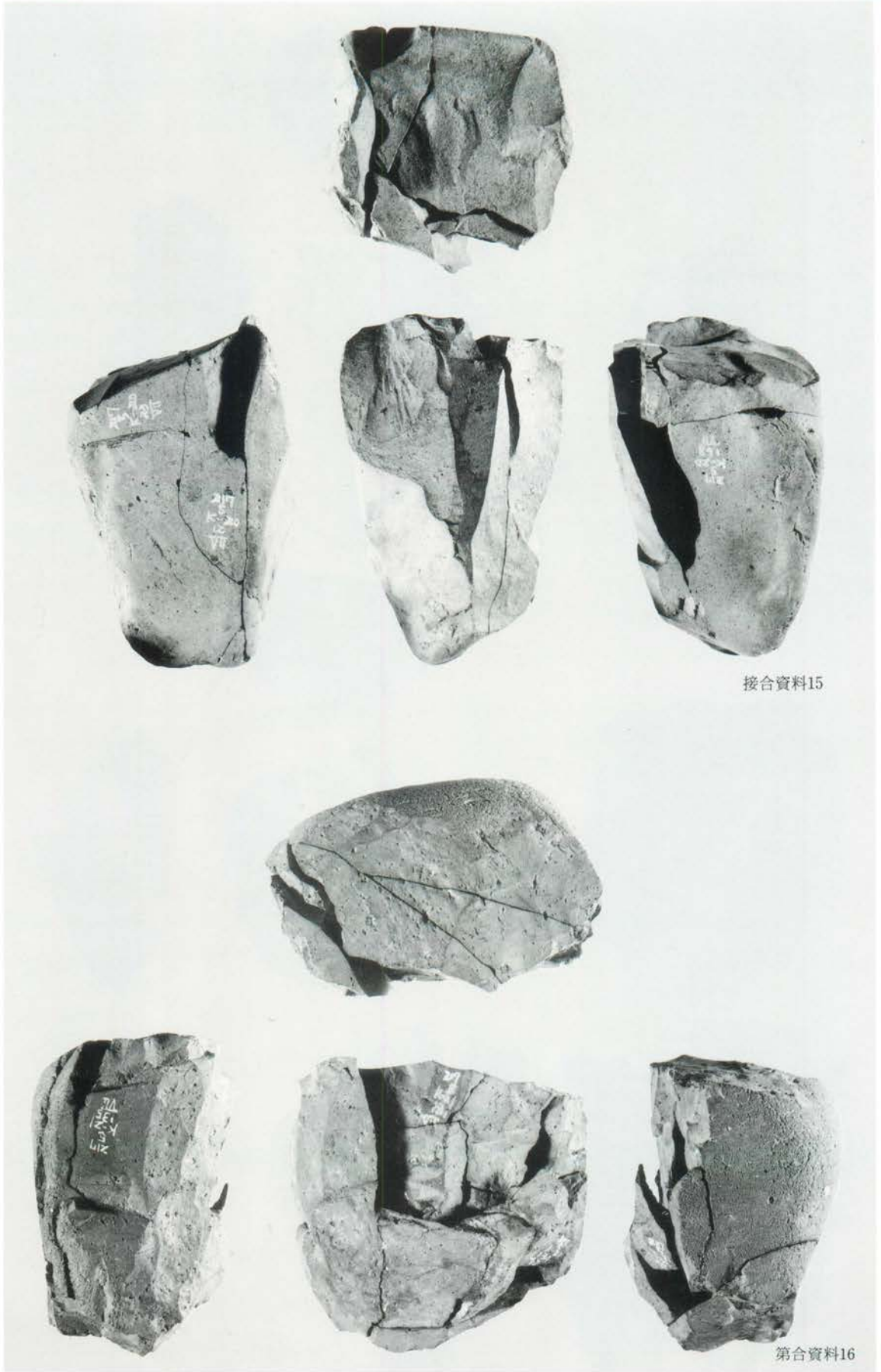
N13-57



N13-52

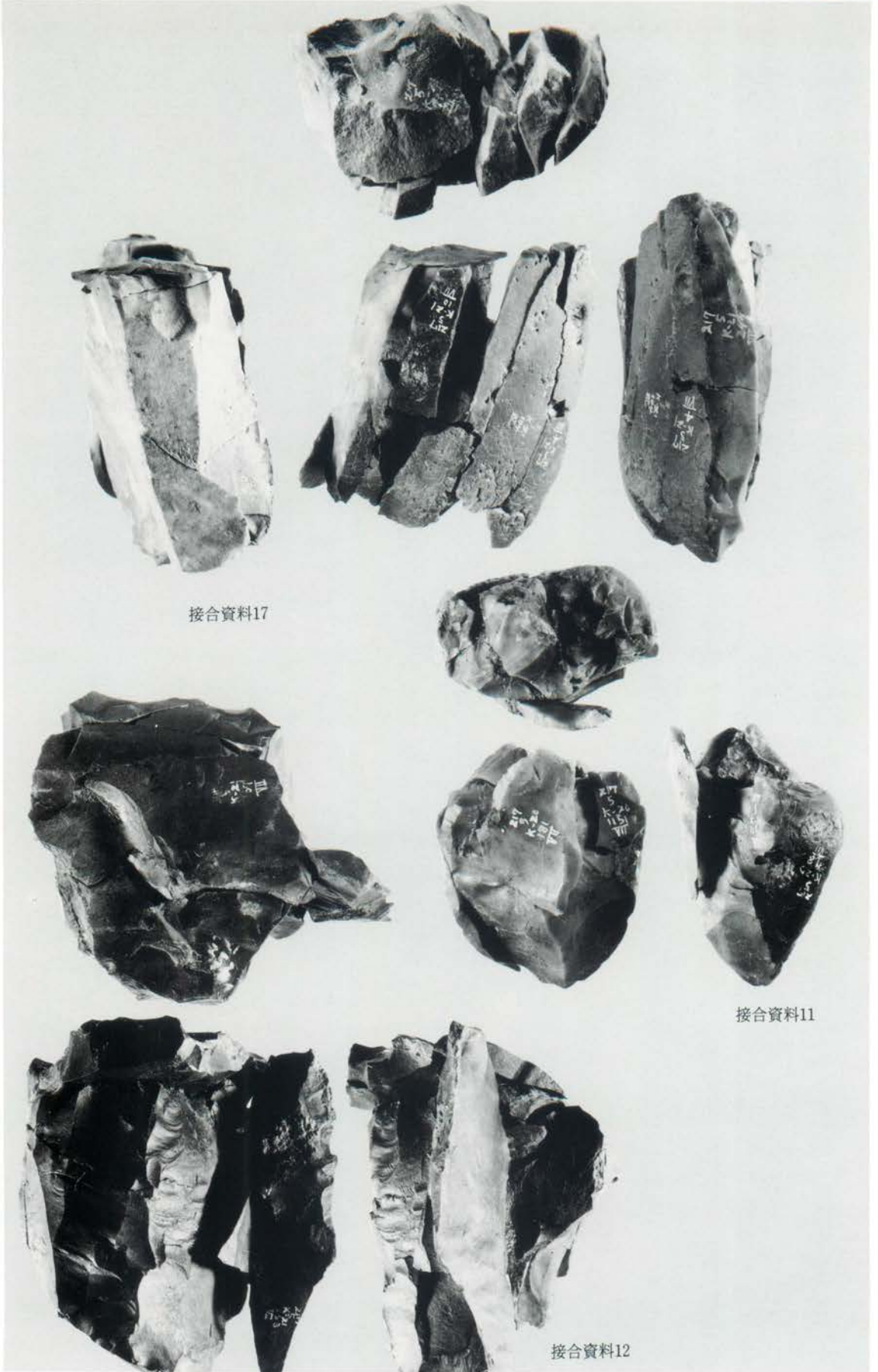


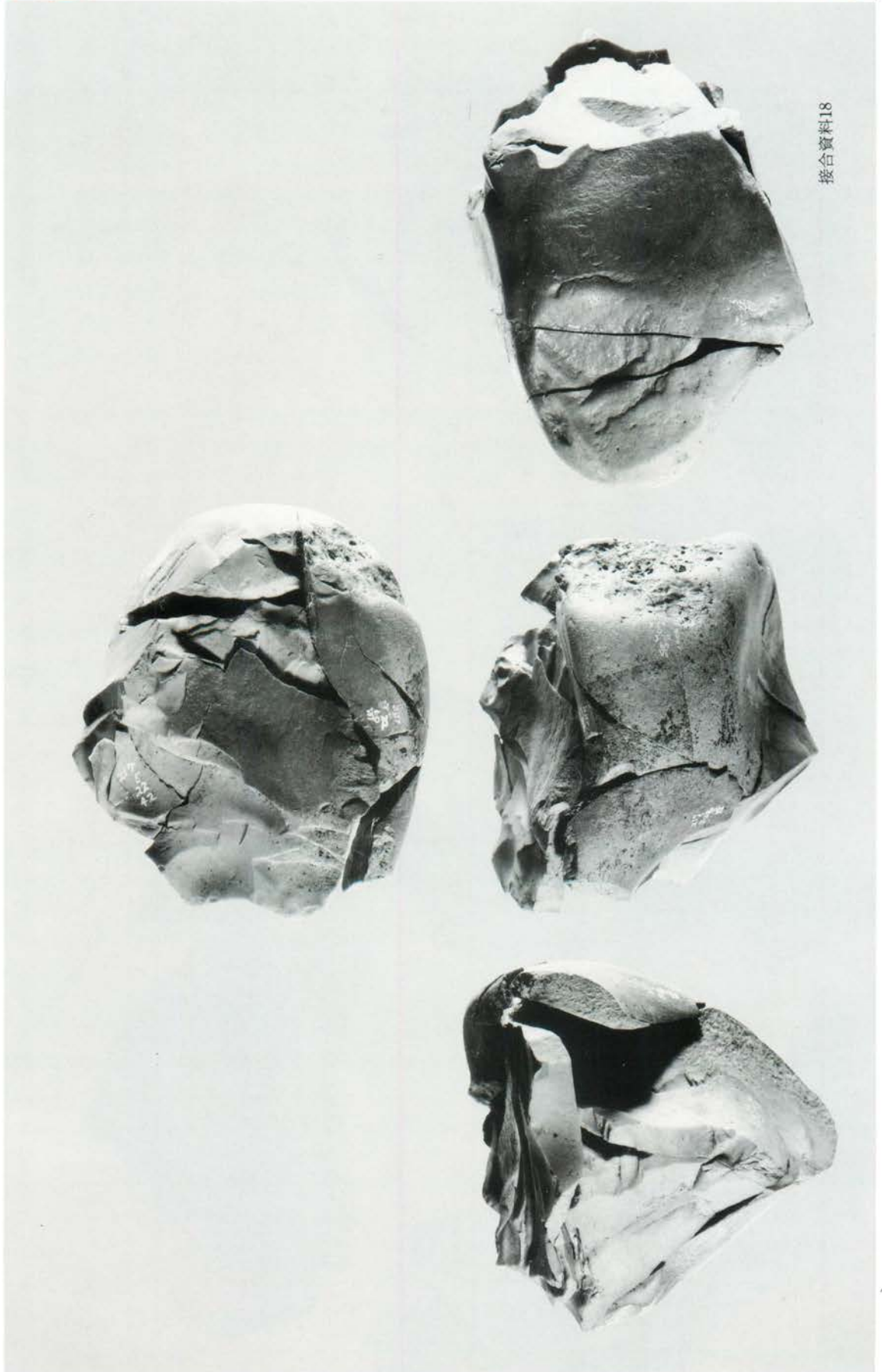
N16-24



接合資料15

第合資料16



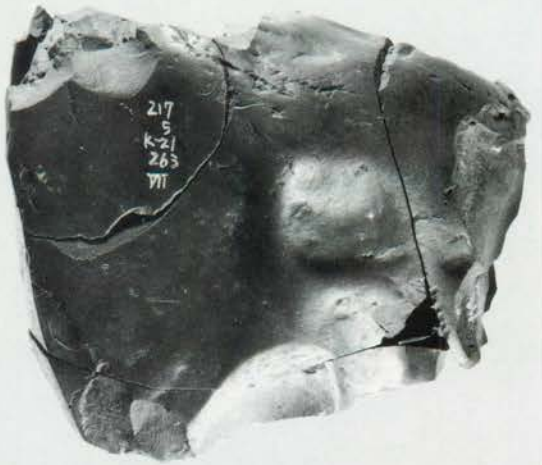


接合資料18



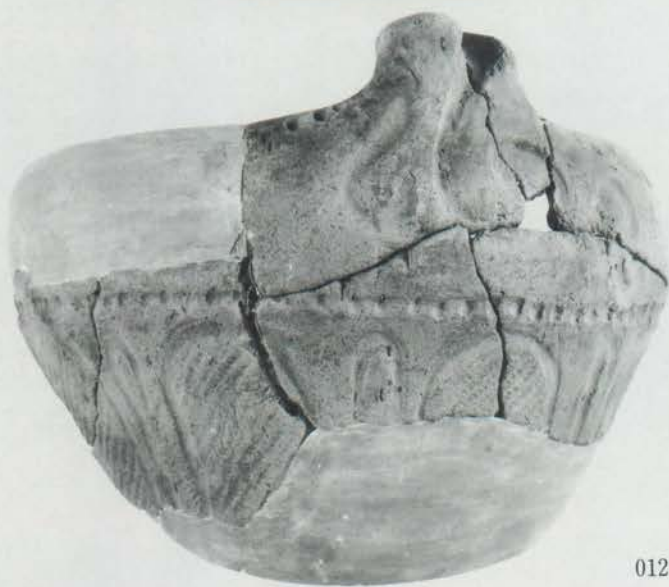
接合資料19

接合資料20

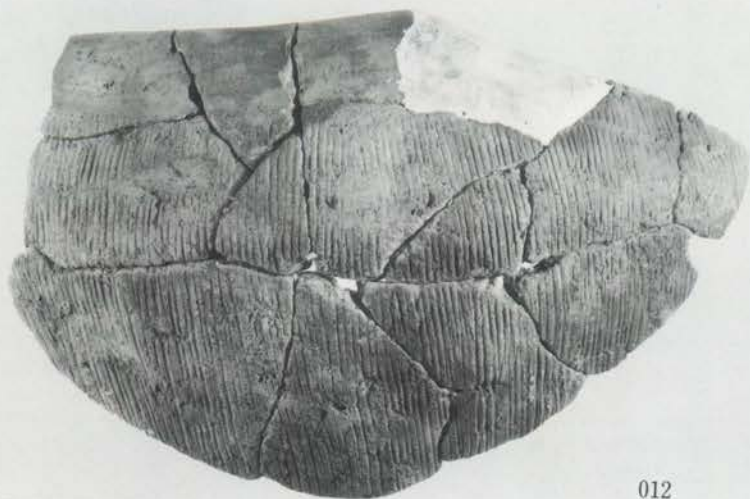




012



012



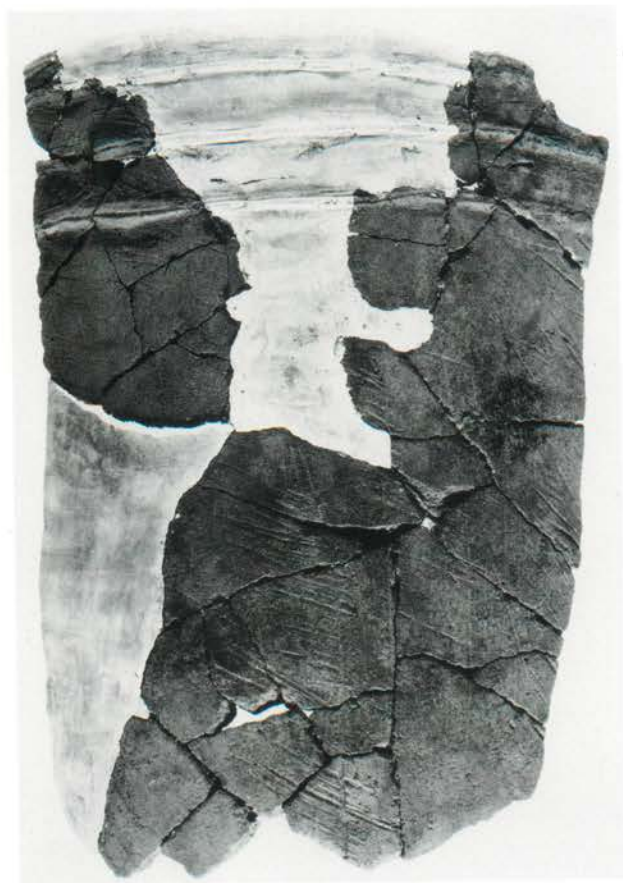
012



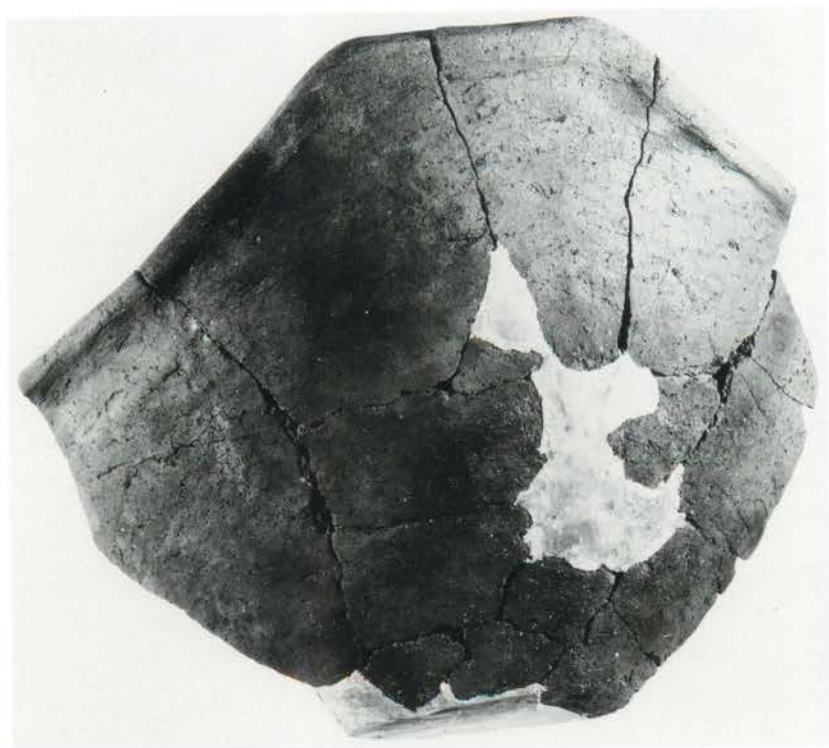
012



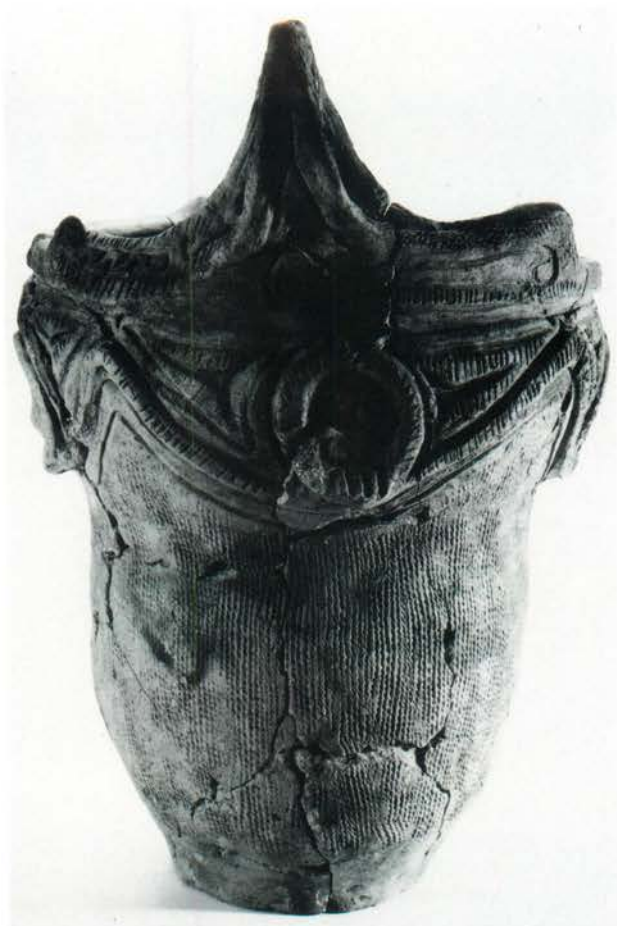
016



047



058



058



081



058



058



058



081



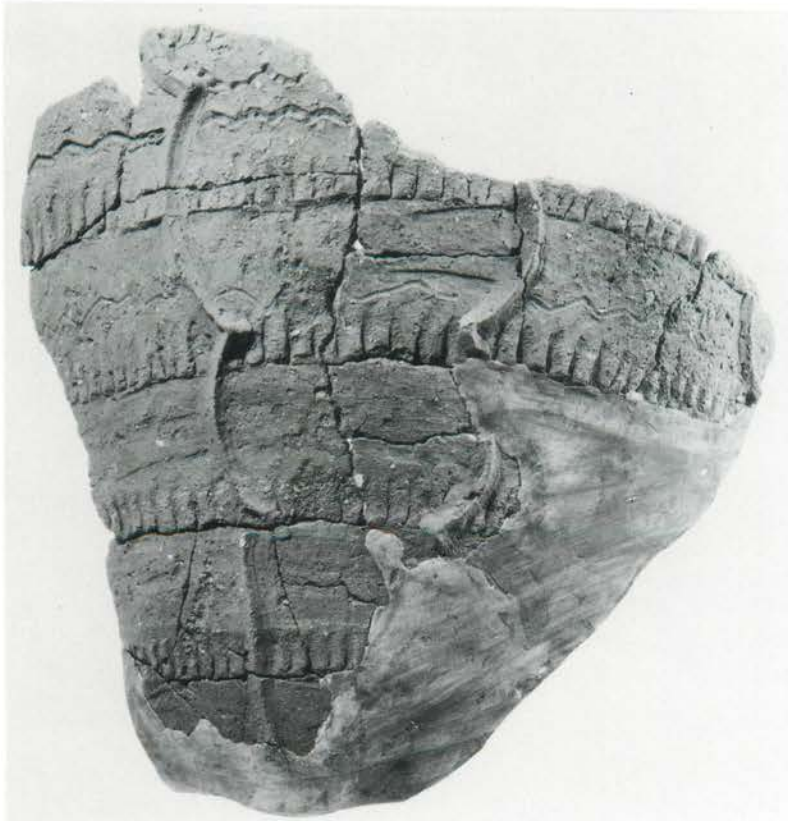
081



081



081



081



081



081



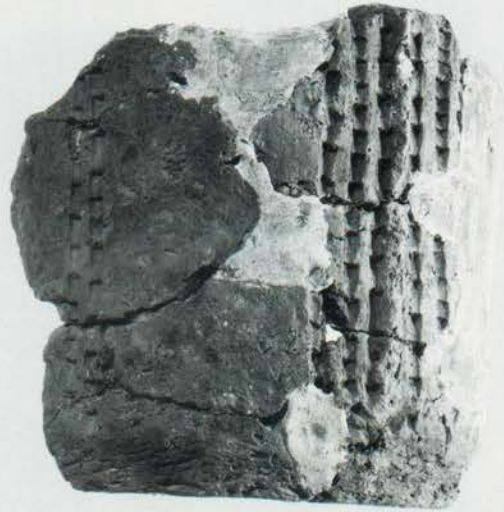
081



081



081



081



081



081



086



086



087



091



091



096



096



096



096



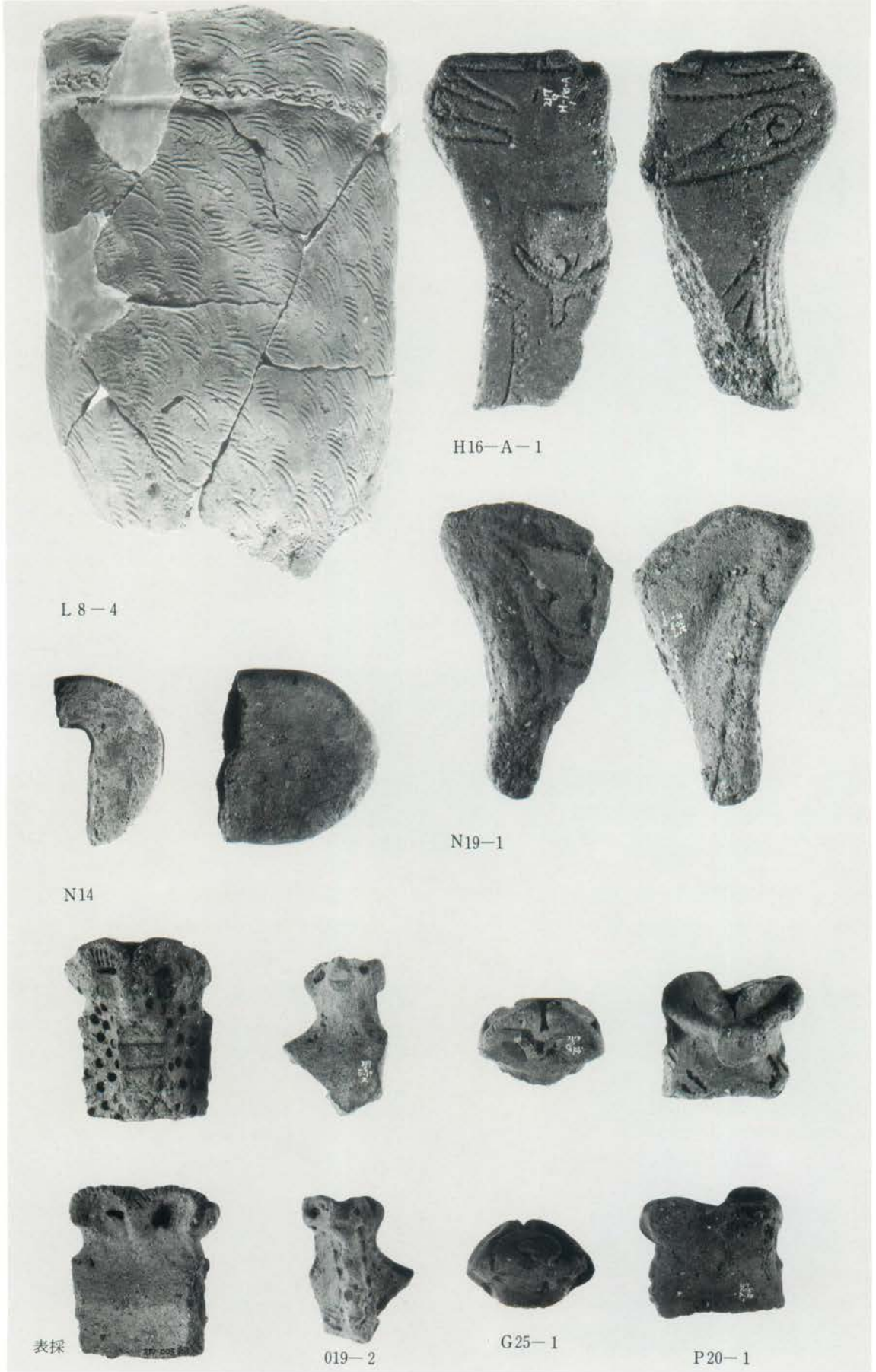
096

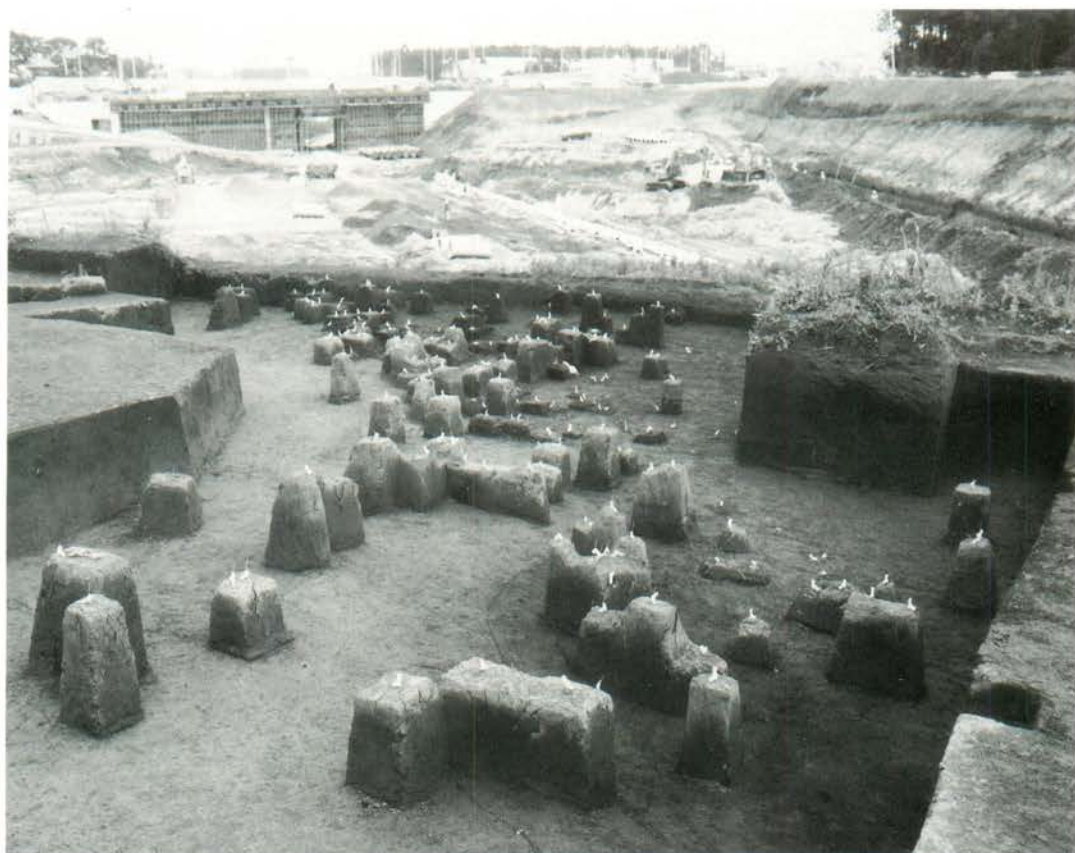


097



L-04





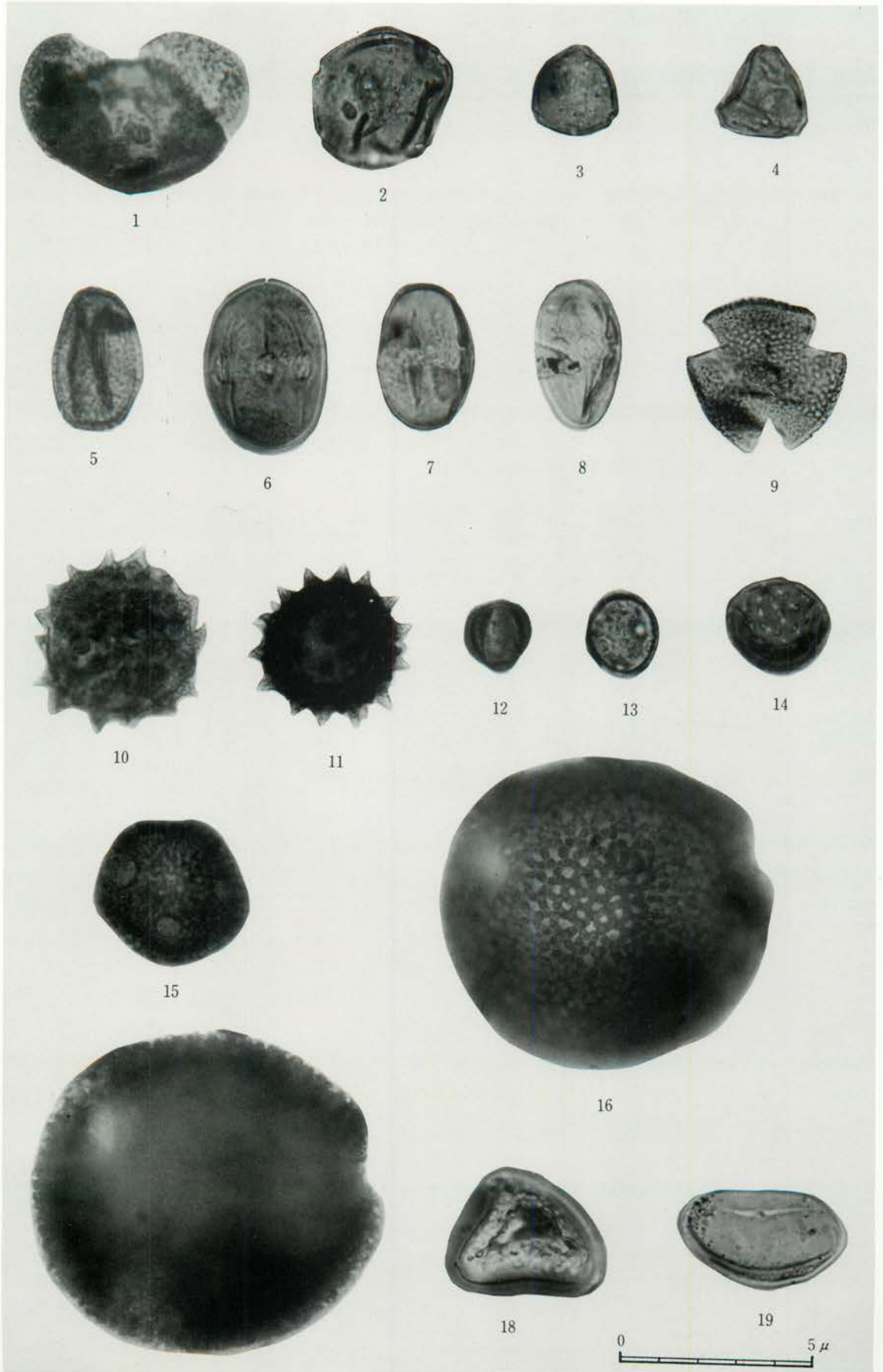
遺物包含層



調査風景

Explnation of Plates

Photo No.	Sample No.	Pollen and Spores
1	No.1	Pinus
2	No.4	Juglans
3	No.4	Corylus
4	No.2	C.
5	No.2	Lepidobalanus
6	No.2	Leguminosae (Vicia type)
7	No.1	L. (V. type)
8	No.1	L. (V. type)
9	No.4	L. (Wisteria type)
10	No.2	Carduoideae
11	No.4	C.
12	No.1	Artemisia
13	No.2	Plantago
14	No.1	Chenopodiaceae
15	No.4	Caryophyllaceae
16	No.4	Geranium
17	No.4	G.
18	No.2	Pteris
19	No.3	Monolete spore



常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

印刷 昭和61年3月20日

発行 昭和61年3月31日

発行 日本道路公団東京第一建設局
東京都港区虎ノ門1-18-1 (03)502-7431

編集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478(代)

印刷 株式会社 太陽堂印刷所
千葉市末広1-4-27 (0472)22-1121(代)

常磐自動車道正誤表

頁	行	誤	正
50	スケール	20 m	40 m
50	キャプション	教字	数字
90	キャプション	第6、第15ブロック	第10、第15ブロック
187	スケール	20 m	40 m
199	2	041	061
203	25	不整形	不整形
228	8	沈線分	沈線文
271	19	貉沢式	貉沢式
326	10	執擁	執拗
327	9	折衷	折衷
392	33	当遺	当遺跡
432	6	急激	急減
441	10	k i d d e r	K i d d e r
442	27	尖頭期	尖頭器
443	29	自出	出自